

天神遺跡Ⅱ

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

第60集

二〇〇一・三

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

天神遺跡Ⅱ

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ



2001.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

天神遺跡Ⅱ

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

2001.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



B区北部遺構完掘状態(西より)



B区南部遺構完掘状態(北上空より)



C区南東部中世遺構完掘状態(北上空より)



ST-401(南東より)



E区古代遺構完掘状態(東より)



E区古代遺構完掘状態(南上空より)



E区東部中世遺構完掘状態(東より)



E区東部近世遺構完掘状態(東より)



E区西部中世遺構完掘状態(西上空より)



E区西部中世遺構完掘状態(東上空より)



E区東部弥生時代遺構完掘状態(西より)



SF-501(南東より)



弥生土器壺 (3279)



青磁碗 (3466)



井筒，磁器爛・德利(2350・2351)



陶器徳利(2360~2362), 磁器仏花器(3027)



弥生土器甕(2122, 2123, 2146, 2148)・壺(2152・2153)



弥生土器壺(2154)・甕(2168・2169・2181・2223)・支脚(2249)



弥生土器甕(3123・3129・3301・3397・3398)・高杯(3278)



弥生土器甕(3402・3407・5071・5096・5097・5118)



2339



2340



2342



2344



2345



3540



石鏃(5046), 弥生土器鉢(2118・2230・2248・3294・3409)・手づくね土器(3223), 土師質土器小皿(5142)



陶器台付灯明皿(2356)・片口(2359), 磁器碗(3006・3008・3013・3520・3570)・蓋(3519)

序

土佐市域におきましては，土佐市バイパス，四国横断自動車道等の建設に伴い，遺跡の大規模発掘調査が頻繁に行われるようになりました。光永・岡ノ下遺跡，林口遺跡，居徳遺跡群，天崎遺跡等では，土佐の古代史を明らかにする貴重な発見が相次いでいます。

天神遺跡は土佐市バイパス工事に関連する平成7年度の試掘調査において発見されました。平成8年度に発掘調査が終了した第Ⅰ調査地区はすでに報告書も刊行しており，瓦器の在地生産を示唆する資料なども得られています。このたび，平成9・10年度に発掘調査を行った第Ⅱ調査地区の調査報告書を刊行する運びとなりました。今回の調査では，土佐市初の弥生時代の竪穴住居跡，県内では数少ない完形の龍泉窯系青磁碗，中世の集落跡や3時期にわたる畝状遺構など弥生時代から近現代までの貴重な遺物や遺構を確認し，仁淀川流域の歴史を解明する上での重要な資料を得ることができました。

最後になりましたが，調査に際しましては地元の皆さまをはじめ，建設省四国地方建設局高知工事事務所，土佐市バイパス監督官事務所，土佐市都市計画課の方々には絶大なる御理解と御協力を賜り，心より深く謝意を表しますと共に今後ともより一層のご支援を頂きますようお願い申し上げます。

平成13年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田伍朗

例言

1. 本書は土佐市バイパス建設に伴い平成9・10年度に発掘調査を実施した天神遺跡第Ⅱ調査地区の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、高知県教育委員会が建設省四国地方建設局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 天神遺跡は高知県土佐市高岡町に所在する弥生時代から近代にかけての複合遺跡である。今回報告する調査区からは、弥生時代の竪穴住居跡と祭祀関連遺構、古代の溝跡、中世の屋敷跡、古代、中世、近世の3時期にわたる畝状遺構、近世と近代の廃棄土坑など弥生時代から近代にかけての遺構・遺物が確認されている。発掘調査はA区からF区の6区に分けて行い発掘調査延べ面積は、A区が937㎡、B区が1,601㎡、C区が5,115㎡、D区が72㎡、E区が4,585㎡、F区が102㎡であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

平成9年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総務：同次長兼総務課長 津野洲夫，同主幹 吉岡利一・石川 馨

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 宮地早苗・泉 幸代，同主任調査員 伊藤 強，同調査員 田中涼子，技術補助員 有田千帆・大原直美

臨時職員：滝本幸子，中村美樹

平成10年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 古谷碩志

総務：同総務課長 津野洲夫，同主幹 大原裕幸・石川 馨

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 名木 郁，同主任調査員 伊藤 強，同調査員 田中涼子，技術補助員 大原直美

臨時職員：中村美樹，福留美穂

平成11年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 河崎正幸

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦，同主任調査員 伊藤 強・畠中宏一，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：福留美穂，市村敏江

平成12年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦・岩本繁樹，同主任調査員 伊藤 強・江戸秀輝，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：原真由美，福留美穂

5. 本書の執筆は調査を担当した廣田，伊藤，田中がそれぞれ執筆し，編集等は廣田が行った。現場写真は5名(発掘調査を担当した廣田，伊藤，泉，名木，田中)が行い，遺物写真は廣田が撮影した。

6. 遺構については、SB(掘立柱建物跡)、SA(塀・柵列跡)、SK(土坑)、SD(溝跡・暗渠)、P(ピット)、SU(畝状遺構)、SX(性格不明遺構)、SE(井戸跡)、SC(土器集中遺構)等の略号も併用している。遺構番号は調査区ごと(A区：遺構101～、B区：遺構201～、C区：遺構301～、D区：遺構401～、E区：遺構501～、F区：遺構601～)に通し番号とした。また、掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位Nは公共座標におけるGNであり、遺跡付近(国土基本図Ⅳ-ID18)の真北はGNに対し東に0°1'6"、磁北はGNに対し西に5°48'35"振っている。なお、E11(X=55,100, Y=-6,900)は北緯33°29'49"、東経133°25'33"である。
7. 遺物については、弥生土器を縮尺1/4、それ以外は原則として縮尺1/3で掲載し、一部の遺物については縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は地区ごとに通し番号(A区：遺物1001～、B区：遺物2001～、C区：遺物3001～、D区：遺物4001～、E区：遺物5001～、F区：遺物6001～)とし挿図と図版の遺物番号は一致している。なお、報告書中で土師質土器としているものはロクロないし回転台を使用しない土師器に対しロクロないし回転台を使用した素焼き土器の総称として使用している。所謂「回転台土師器」、「ロクロ土師器」などと云われるものに当たる。
8. 現地調査及び本報告書を作成するにあたって、下記の方々のご指導並びに貴重なご教示、ご助言を賜りご協力頂いた。特に鈴田氏には二度にわたって遺物指導に来ていただいた。記して感謝の意を表したい。

鈴田由紀夫(九州陶磁文化館)、森島康雄(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、橋本久和(当時高槻市教育委員会)
9. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また、同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

整理作業員
島村加奈、森田史子、岸本洋子、元木恵利子、坂本エリ、岸田美智、竹村小百合、森田直美、松田美香、岩井涼子、井上紹子、安岡明子、吉野絵里、森川 歩、森沢美紀、石元清香、片山紀子、岡宗裕美、横山めぐみ、原真由美
10. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局高知工事事務所、土佐市バイパス監督官詰所、土佐市都市計画課のご協力を頂いた。また地元住民の方々に、遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。
11. 出土遺物は、平成9年度の天神遺跡が「97-5TT」、平成10年度の天神遺跡が「98-5TT」と註記し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 序 章(廣田)	
1. はじめに.....	1
2. 遺跡の概要.....	1
第Ⅱ章 調査の経過	
1. 調査の経過.....	5
2. 調査日誌抄.....	5
第Ⅲ章 調査区の概要	
1. A区(伊藤).....	17
(1)層序.....	17
(2)堆積層出土遺物.....	19
(3)遺構と遺物.....	20
① 中世.....	20
2. B区(伊藤).....	21
(1)層序.....	21
(2)堆積層出土遺物.....	23
(3)遺構と遺物.....	33
① 弥生時代.....	34
② 中世.....	48
③ 近世以降.....	68
3. C区(伊藤).....	78
(1)層序.....	78
(2)堆積層出土遺物.....	81
(3)遺構と遺物.....	102
① 弥生時代.....	102
② 中世.....	119
③ 近世以降.....	134
4. D区(田中).....	150
(1)層序.....	150
(2)遺構と遺物.....	150
① 近代.....	150
5. E区(田中).....	157
(1)層序.....	157
(2)堆積層出土遺物.....	160
(3)遺構と遺物.....	169

① 弥生時代1	169
② 弥生時代2	171
③ 古代	178
④ 中世	181
⑤ 近世以降	191
6. F区(田中)	198
(1) 層序	198
(2) 堆積層出土遺物	200
(3) 遺構と遺物	201
① 中世	201
② 近世	201
第IV章 考察	
1. 弥生時代(伊藤)	203
2. 古代(田中)	205
3. 中世(田中)	205
4. 近世以降(伊藤)	206
5. 畝状遺構について(田中)	207
6. まとめ(廣田)	208
第V章 自然科学分析	
はじめに	211
1. 試料	211
2. 分析方法	211
(1) 珪藻分析	211
(2) 花粉分析	212
(3) 植物珪酸体分析	212
(4) 土壤理化学分析	214
3. 結果	217
(1) 珪藻分析	217
(2) 花粉分析	221
(3) 植物珪酸体分析	244
(4) 土壤理化学分析	251
4. 考察	255
(1) 遺跡周辺の堆積環境	255
(2) 周辺植生	258
(3) 遺構の検討	259
(4) 弥生時代住居跡(ST-301)出土甕の内容物	260

挿図目次

Fig. 1	高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡群位置図.....	1
Fig. 2	土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S=1/100,000).....	2
Fig. 3	土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図(S=1/10,000).....	3
Fig. 4	B区発掘調査風景.....	6
Fig. 5	C区ST-301発掘調査風景.....	9
Fig. 6	C区空中撮影風景.....	12
Fig. 7	E区現場見学会風景.....	13
Fig. 8	E区発掘調査風景.....	15
Fig. 9	天神遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/2,500).....	17
Fig. 10	天神遺跡調査区設定図(S=1/2,000)(公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)	18
Fig. 11	A区セクション図.....	19
Fig. 12	SD-101~103.....	20
Fig. 13	A区出土遺物実測図.....	21
Fig. 14	B区セクション図.....	22
Fig. 15	B区第I層出土遺物実測図(瓦器・青磁・磁器ほか).....	23
Fig. 16	B区第IV層出土遺物実測図(弥生土器).....	25
Fig. 17	B区第IV層出土遺物実測図(土師器・瓦器・東播系須恵器ほか).....	26
Fig. 18	B区第IV層出土遺物実測図(石製品).....	28
Fig. 19	B区第X層出土遺物実測図(東播系須恵器・土師質土器・青磁).....	28
Fig. 20	B区第XII層出土遺物実測図(瓦器).....	29
Fig. 21	B区第XII層出土遺物実測図(東播系須恵器).....	29
Fig. 22	B区第XII層出土遺物実測図(土師質土器).....	31
Fig. 23	B区第XII層出土遺物実測図(瓦質土器・白磁・青磁ほか).....	32
Fig. 24	B区第XIII層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器).....	33
Fig. 25	ST-201.....	34
Fig. 26	ST-201出土遺物実測図.....	34
Fig. 27	ST-202.....	35
Fig. 28	ST-202出土遺物実測図1.....	36
Fig. 29	ST-202出土遺物実測図2.....	37
Fig. 30	SK-201, P-201出土遺物実測図.....	38
Fig. 31	SC-201出土遺物実測図1.....	39
Fig. 32	SC-201出土遺物実測図2.....	41
Fig. 33	SC-201出土遺物実測図3.....	42
Fig. 34	SC-201出土遺物実測図4.....	43

Fig. 35	SC -201 出土遺物実測図5	44
Fig. 36	SC -201 出土遺物実測図6	45
Fig. 37	SC -201 出土遺物実測図7	46
Fig. 38	SC -201 出土遺物実測図8	47
Fig. 39	SB -201.....	48
Fig. 40	SB -202.....	48
Fig. 41	SB -203.....	49
Fig. 42	SB -204.....	49
Fig. 43	SB -205.....	50
Fig. 44	SB -206.....	50
Fig. 45	SB -207.....	51
Fig. 46	SB -204 ~207 出土遺物実測図	52
Fig. 47	SB -208.....	52
Fig. 48	SA -201.....	53
Fig. 49	SA -202.....	53
Fig. 50	SA -203.....	53
Fig. 51	SA -203 出土遺物実測図1	54
Fig. 52	SA -203 出土遺物実測図2	54
Fig. 53	SA -204.....	55
Fig. 54	SA -204 出土遺物実測図	55
Fig. 55	SA -205.....	56
Fig. 56	SA -206.....	56
Fig. 57	SA -206 出土遺物実測図	56
Fig. 58	SA -207.....	56
Fig. 59	SK -202.....	57
Fig. 60	SK -203.....	57
Fig. 61	SK -204.....	58
Fig. 62	SK -202 ~205 出土遺物実測図	58
Fig. 63	SD -201 ~204	59
Fig. 64	SD -205 ~207	60
Fig. 65	SD -201 ~207 出土遺物実測図	61
Fig. 66	SE -201.....	62
Fig. 67	SX -201.....	68
Fig. 68	SE -201, P -202 ~224, SX -201 出土遺物実測図.....	69
Fig. 69	SX -202.....	70
Fig. 70	SK -206.....	70

Fig. 71	SK-209.....	71
Fig. 72	SK-206~209出土遺物実測図.....	71
Fig. 73	SK-210.....	72
Fig. 74	SK-210出土遺物実測図1.....	73
Fig. 75	SK-210出土遺物実測図2.....	74
Fig. 76	SK-210出土遺物実測図3.....	74
Fig. 77	SK-210出土遺物実測図4.....	75
Fig. 78	SK-210出土遺物実測図5.....	75
Fig. 79	SK-210出土遺物実測図6.....	76
Fig. 80	SD-208・209, P-225出土遺物実測図.....	77
Fig. 81	C区南壁セクション図.....	79
Fig. 82	C区北壁セクション図・TR-1南壁セクション図.....	80
Fig. 83	C区第I層出土遺物実測図(磁器).....	83
Fig. 84	C区第I層出土遺物実測図(磁器・陶器・土製品).....	84
Fig. 85	C区第II層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・瓦器ほか).....	86
Fig. 86	C区第V層出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器ほか).....	88
Fig. 87	C区第V層出土遺物実測図(土師質土器).....	90
Fig. 88	C区第V層出土遺物実測図(備前焼・瓦質土器・白磁ほか).....	91
Fig. 89	C区第XIII層出土遺物実測図(弥生土器1).....	92
Fig. 90	C区第XIII層出土遺物実測図(弥生土器2).....	93
Fig. 91	C区第XIII層出土遺物実測図(弥生土器3).....	94
Fig. 92	C区第XV層出土遺物実測図(弥生土器1).....	95
Fig. 93	C区第XV層出土遺物実測図(弥生土器2).....	96
Fig. 94	C区第XV層出土遺物実測図(弥生土器3).....	97
Fig. 95	C区第XV層出土遺物実測図(石製品).....	98
Fig. 96	C区第x層出土遺物実測図(弥生土器1).....	100
Fig. 97	C区第x層出土遺物実測図(弥生土器2).....	101
Fig. 98	C区第y層出土遺物実測図(弥生土器).....	102
Fig. 99	C区第y層出土遺物実測図(石製品).....	102
Fig.100	ST-301.....	103
Fig.101	ST-301出土遺物実測図1.....	104
Fig.102	ST-301出土遺物実測図2.....	106
Fig.103	ST-301出土遺物実測図3.....	107
Fig.104	SK-301.....	108
Fig.105	SK-302.....	109
Fig.106	SD-301.....	109

Fig.107	SK-301・302, SD-302, P-301出土遺物実測図	110
Fig.108	SC-301出土遺物実測図	111
Fig.109	SC-302出土遺物実測図1	112
Fig.110	SC-302出土遺物実測図2	113
Fig.111	SC-303・304出土遺物実測図	114
Fig.112	SC-305出土遺物実測図	116
Fig.113	SC-306遺物出土状態	117
Fig.114	SC-306出土遺物実測図1	117
Fig.115	SC-306出土遺物実測図2	119
Fig.116	SC-307出土遺物実測図	120
Fig.117	SB-301	120
Fig.118	SA-301	121
Fig.119	SA-302	121
Fig.120	SA-303	121
Fig.121	SA-304	121
Fig.122	SK-303	122
Fig.123	SK-304	122
Fig.124	SK-305	123
Fig.125	SK-306	123
Fig.126	SK-307	123
Fig.127	SK-308	124
Fig.128	SK-309	124
Fig.129	SK-310	125
Fig.130	SK-311	125
Fig.131	SK-312	125
Fig.132	SK-304~312出土遺物実測図	126
Fig.133	SD-303~305	127
Fig.134	SD-306~308	127
Fig.135	SD-303・306~308出土遺物実測図	129
Fig.136	SD-309出土遺物実測図	131
Fig.137	SD-309・311	132
Fig.138	SD-310~313, P-302~305出土遺物実測図	134
Fig.139	SK-313	135
Fig.140	SK-314	135
Fig.141	SK-316	135
Fig.142	SK-313・314・316出土遺物実測図	136

Fig.143	SK-317	136
Fig.144	SK-317出土遺物実測図1	137
Fig.145	SK-317出土遺物実測図2	139
Fig.146	SK-317出土遺物実測図3	141
Fig.147	SK-317出土遺物実測図4	142
Fig.148	SK-318	143
Fig.149	SK-319	144
Fig.150	SK-318出土遺物実測図	144
Fig.151	SK-318・319出土遺物実測図	144
Fig.152	SD-315・316・320・321	147
Fig.153	C区近世以降溝跡,ピット,水溜り状遺構出土遺物実測図	149
Fig.154	D区遺構平面図(S=1/200)	150
Fig.155	D区セクション図	151
Fig.156	SK-401	151
Fig.157	SK-401出土遺物実測図1	153
Fig.158	SK-401出土遺物実測図2	154
Fig.159	SK-401出土遺物実測図3	155
Fig.160	SK-401出土遺物実測図4	156
Fig.161	SK-401出土遺物実測図5	156
Fig.162	SK-401出土遺物実測図6	156
Fig.163	SK-401出土遺物実測図7	157
Fig.164	E区セクション図	159
Fig.165	E区第Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ層出土遺物実測図(土師質土器・備前焼・青磁ほか)	161
Fig.166	E区第Ⅵ層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・東播系須恵器ほか)	163
Fig.167	E区第Ⅵ層出土遺物実測図(白磁・青磁・土製品ほか)石鏃は原寸	164
Fig.168	E区第Ⅶ層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・鉄製品)	166
Fig.169	E区第Ⅸ層出土遺物実測図(弥生土器)	167
Fig.170	E区第Ⅹ層出土遺物実測図(弥生土器・石製品)	168
Fig.171	E区第Ⅺ層出土遺物実測図(弥生土器)	169
Fig.172	E区弥生時代1遺構平面図(S=1/200)	169
Fig.173	SF-501遺物出土状態	170
Fig.174	SF-501出土遺物実測図	171
Fig.175	SC-501出土遺物実測図	172
Fig.176	SK-502	172
Fig.177	SK-507～509	173
Fig.178	SK-501・506・509出土遺物実測図	174

Fig.179	SD-502	175
Fig.180	SC-502	175
Fig.181	SC-502 出土遺物実測図	176
Fig.182	SD-503	178
Fig.183	SC-503 出土遺物実測図	178
Fig.184	SD-507	179
Fig.185	SU-501~503	181
Fig.186	E区古代遺構出土遺物実測図	181
Fig.187	SB-501	182
Fig.188	SB-502	182
Fig.189	SB-503	183
Fig.190	SA-501	183
Fig.191	SA-502	183
Fig.192	SA-503	183
Fig.193	SD-508・509	184
Fig.194	SD-512~515	186
Fig.195	SD-518・519	187
Fig.196	SD-520~522	188
Fig.197	E区中世遺構出土遺物実測図	190
Fig.198	SU-505	191
Fig.199	SA-504	191
Fig.200	SA-505	191
Fig.201	SK-512	192
Fig.202	SK-511・512・514・515 出土遺物実測図	194
Fig.203	SK-516	194
Fig.204	SK-516 出土遺物実測図	195
Fig.205	SD-524	195
Fig.206	SD-524 出土遺物実測図	196
Fig.207	P-509 出土遺物実測図	196
Fig.208	SU-506・507	197
Fig.209	F区遺構平面図 (S=1/200)	199
Fig.210	F区セクション図	199
Fig.211	F区柱状図	200
Fig.212	F区第Ⅱ・Ⅳ・Ⅷ層出土遺物実測図 (弥生土器・土師質土器・青磁ほか)	201
Fig.213	SD-601・603	201
Fig.214	F区遺構出土遺物実測図	202

Fig.215	天神遺跡における主要珪藻化石群集の層位分布.....	242
Fig.216	天神遺跡における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状(1).....	255
Fig.217	天神遺跡における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状(2).....	256
Fig.218	天神遺跡における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状(3).....	257
Fig.219	リン酸と全炭素の相関.....	260

表目次

Tab. 1	B区塀・柵列跡計測表.....	57
Tab. 2	B区土坑計測表.....	76
Tab. 3	C区塀・柵列跡計測表.....	122
Tab. 4	C区土坑計測表.....	145
Tab. 5	D区土坑計測表.....	157
Tab. 6	E区塀・柵列跡計測表.....	192
Tab. 7	E区土坑計測表.....	196
Tab. 8	E区畝状遺構計測表.....	198
Tab. 9	掘立柱建物跡計測表.....	202
Tab.10	平成9年度調査分析試料の一覧.....	212
Tab.11	平成10年度調査分析試料の一覧1.....	213
Tab.12	平成10年度調査分析試料の一覧2.....	214
Tab.13	平成10年度調査分析試料の一覧3.....	215
Tab.14	平成9年度調査珪藻分析結果(1).....	218
Tab.15	平成9年度調査珪藻分析結果(2).....	219
Tab.16	平成9年度調査珪藻分析結果(3).....	220
Tab.17	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(1).....	222
Tab.18	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(2).....	223
Tab.19	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(3).....	224
Tab.20	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(4).....	225
Tab.21	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(5).....	226
Tab.22	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(6).....	227
Tab.23	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(7).....	228
Tab.24	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(8).....	229
Tab.25	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(9).....	230
Tab.26	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(10).....	231
Tab.27	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(11).....	232

Tab.28	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(12).....	233
Tab.29	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(13).....	234
Tab.30	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(14).....	235
Tab.31	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(15).....	236
Tab.32	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(16).....	237
Tab.33	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(17).....	238
Tab.34	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(18).....	239
Tab.35	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(19).....	240
Tab.36	平成10年度調査地点の珪藻分析結果(20).....	241
Tab.37	平成9年度調査花粉分析結果.....	243
Tab.38	平成10年度調査地点の花粉分析結果(1).....	245
Tab.39	平成10年度調査地点の花粉分析結果(2).....	246
Tab.40	平成10年度調査地点の花粉分析結果(3).....	247
Tab.41	平成10年度調査地点の花粉分析結果(4).....	248
Tab.42	平成10年度調査地点の花粉分析結果(5).....	249
Tab.43	平成10年度調査地点の花粉分析結果(6).....	250
Tab.44	平成9年度調査植物珪酸体分析結果.....	251
Tab.45	平成10年度調査植物珪酸体分析結果(1).....	252
Tab.46	平成10年度調査植物珪酸体分析結果(2).....	253
Tab.47	平成10年度調査植物珪酸体分析結果(3).....	254
Tab.48	土壤理化学分析結果.....	258

図版目次

巻頭図版1	B区北部遺構完掘状態(西より)	E区東部近世遺構完掘状態(東より)
	B区南部遺構完掘状態(北上空より)	巻頭図版5 E区西部中世遺構完掘状態(西上空より)
巻頭図版2	C区南東部中世遺構完掘状態(北上空より)	E区西部中世遺構完掘状態(東上空より)
	ST-401(南東より)	巻頭図版6 E区東部弥生時代遺構完掘状態(西より)
巻頭図版3	E区古代遺構完掘状態(東より)	SF-501(南東より)
	E区古代遺構完掘状態(南上空より)	巻頭図版7 弥生土器壺(3279)
巻頭図版4	E区東部中世遺構完掘状態(東より)	青磁碗(3466)

- 卷頭図版8 井筒, 磁器燗德利 (2350・2351)
- 卷頭図版9 陶器德利 (2360~2362), 磁器仏花器 (3027)
- 卷頭図版10 弥生土器甕 (2122・2123・2146・2148)・壺 (2152・2153)
- 卷頭図版11 弥生土器壺 (2154)・甕 (2168・2169・2181・2223)・支脚 (2249)
- 卷頭図版12 弥生土器甕 (3123・3129・3301・3397・3398)・高杯 (3278)
- 卷頭図版13 弥生土器甕 (3402・3407・5071・5096・5097・5118)
- 卷頭図版14 磁器皿 (2339・2340・2342・2344・2345・2540)
- 卷頭図版15 石鏃 (5046), 弥生土器鉢 (2118・2230・2248・3294・3409)・手づくね土器 (3223), 土師質土器小皿 (5142)
- 卷頭図版16 陶器台付灯明皿 (2356)・片口 (2359), 磁器碗 (3006・3008・3013・3520・3570)・蓋 (3519)
- PL. 1 A区調査前全景1 (東より)
A区調査前全景2 (東より)
- PL. 2 A区北部遺構検出状態1 (南より)
A区北部遺構完掘状態 (西より)
- PL. 3 A区北部遺構検出状態2 (南より)
A区北部遺構完掘状態 (南より)
- PL. 4 A区南部遺構検出状態 (東より)
A区南部遺構完掘状態 (東より)
- PL. 5 A区南部遺構検出状態 (西より)
A区南部遺構完掘状態 (西より)
- PL. 6 A区北壁セクション (南より)
A区南壁セクション (北より)
- PL. 7 B区調査前全景1 (西より)
B区調査前全景2 (西より)
- PL. 8 B区北部遺構検出状態 (東より)
B区北部遺構検出状態 (西より)
- PL. 9 B区北部遺構完掘状態 (東より)
B区北部遺構完掘状態 (西より)
- PL. 10 B区南部遺構検出状態 (西より)
B区南部遺構検出状態 (東より)
- PL. 11 B区南部遺構完掘状態 (北上空より)
B区南部遺構完掘状態 (西上空より)
- PL. 12 B区東壁セクション1 (西より)
B区東壁セクション2 (西より)
- PL. 13 B区南壁セクション1 (北より)
B区南壁セクション2 (北より)
- PL. 14 B区北壁セクション (南より)
B区東部落ち込み (北より)
- PL. 15 ST-201遺物出土状態 (西より)
ST-202遺物出土状態 (南より)
- PL. 16 SB-201・202, SA-202 (北より)
SB-203・204, SA-203 (北より)
- PL. 17 SB-205・206 (北より)
SB-208, SA-205~207 (南上空より)
- PL. 18 SE-201検出状態 (北より)
SE-201 (西上空より)
- PL. 19 SE-201 (南西より)
SE-201 (東より)
- PL. 20 SC-201遺物出土状態 (南より)
SC-201遺物出土状態 (北より)
- PL. 21 SC-201遺物出土状態 (東より)
SC-201遺物出土状態 (西より)
- PL. 22 ST-201 (南より), ST-201完掘状態 (南より), ST-202検出状態 (南より), ST-202 (南より), ST-202遺物出土状態 (南より), SK-201遺物出土状態 (北より), P-201 (西より), SB-207柱穴 (東より)
- PL. 23 SA-204柱穴礎盤出土状態 (北より), SK-202 (南より), SK-203 (北より), SK-205・208 (南より), SD-201 (北より), SD-201遺物出土状態 (東より),

- SD-203(北より), P-210遺物出土状態(西より)
- PL.24 P-220遺物出土状態(西より), P-222(南より), P-223遺物出土状態(西より), SK-204(北より), SK-206(南より), SK-208(南より), SK-210(南より), SD-210(東より)
- PL.25 C区調査前全景(東より)
C区調査前全景(西より)
- PL.26 C区北東部遺構検出状態(南より)
C区北東部遺構検出状態(南西より)
- PL.27 C区北東部遺構完掘状態1(北より)
C区北東部遺構完掘状態2(北より)
- PL.28 C区北東部遺構完掘状態(東より)
C区北東部遺構完掘状態(南より)
- PL.29 C区北西部中世遺構完掘状態(西より)
C区北西部弥生時代遺構完掘状態(東より)
- PL.30 C区南東部近世遺構検出状態(東より)
C区南東部近世遺構完掘状態(東より)
- PL.31 C区南東部中世遺構検出状態(東より)
C区南東部中世遺構検出状態(西より)
- PL.32 C区南東部中世遺構完掘状態(南上空より)
C区南東部中世遺構完掘状態(東上空より)
- PL.33 C区南西部中世遺構検出状態(西より)
C区南西部中世遺構完掘状態(西上空より)
- PL.34 C区北東部北壁セクション1(南より)
C区北東部北壁セクション2(南より)
- PL.35 C区北西部北壁セクション(東より)
C区北西部北壁セクション(南より)
- PL.36 C区南東部南壁セクション1(北より)
C区南東部南壁セクション2(北より)
- PL.37 C区南西部南壁セクション1(北より)
- C区南西部南壁セクション2(北より)
- PL.38 ST-301検出状態(東より)
ST-301(東より)
- PL.39 ST-301(南より)
ST-301床面遺物出土状態(東より)
- PL.40 SA-302(西より)
SA-303・304(南より)
- PL.41 C区第Ⅲ層遺物出土状態1(北より)
C区第Ⅲ層遺物出土状態2(北より)
- PL.42 SC-302遺物出土状態1(東より)
SC-302遺物出土状態2(東より)
- PL.43 SC-302遺物出土状態(北より)
SC-304遺物出土状態(北東より)
- PL.44 SC-306(南より)
SC-307検出状態(西より)
- PL.45 SK-304遺物出土状態(西より)
TR-1完掘状態(東より)
- PL.46 ST-301焼土検出状態(西より), ST-301焼土検出状態(東より), ST-301(東より), ST-301(北より), ST-301内P-9(東より), ST-301内SK-1(北より), ST-301床面叩石出土状態(北より), ST-301遺物出土状態(南より)
- PL.47 SK-301(南より), SK-302検出状態(西より), SC-307南部(南より), SC-307北部(南より), SK-303, SD-306(西より), SK-303, SD-306完掘状態(西より), SK-304(西より), SK-304遺物出土状態(西より)
- PL.48 SK-305・306(南より), SK-307半裁状態(北より), SK-307, SD-311(南より), SK-308(東より), SK-309遺物出土状態(南より), SK-309遺物出土状態(南東より), SD-305(南より), SD-306(東より)
- PL.49 SD-307(東より), SD-307遺物出土状態

- 態(西より), SD-309(南より), SD-309遺物出土状態(北より), SD-313(西より), SD-318(南より), SD-320(東より), C区北東部暗渠(南より)
- PL.50 D区調査前全景(南より)
D区遺構完掘状態(北より)
- PL.51 E区調査前全景(西より)
E区調査前全景(南西より)
- PL.52 E区北東部古代・中世遺構検出状態(西より)
E区北部古代・中世遺構検出状態(西より)
- PL.53 E区北部古代・中世遺構完掘状態(西より)
E区北部古代・中世遺構完掘状態(東より)
- PL.54 E区東部近世遺構検出状態(東より)
E区東部近世遺構検出状態(西より)
- PL.55 E区東部近世遺構完掘状態(東より)
E区東部近世遺構完掘状態(北より)
- PL.56 E区東部中世遺構検出状態(西より)
E区東部中世遺構検出状態(東より)
- PL.57 E区東部中世遺構完掘状態(西より)
E区東部中世遺構完掘状態(東より)
- PL.58 E区西部遺構完掘状態(東より)
E区西部遺構完掘状態(東上空より)
- PL.59 E区東部古代遺構検出状態(西より)
E区東部古代遺構検出状態(東より)
- PL.60 E区東部古代遺構完掘状態(西より)
E区東部古代遺構完掘状態(南上空より)
- PL.61 E区北部弥生時代遺構検出状態(西より)
E区北部弥生時代遺構完掘状態(東より)
- PL.62 E区東部弥生時代遺構検出状態(西より)
E区東部弥生時代遺構完掘状態(西より)
- PL.63 E区南壁セクション東部(北より)
E区南壁セクション中央(北より)
- PL.64 E区下層確認トレンチ(東より)
E区下層確認トレンチセクション(北より)
- PL.65 SD-508・509, SB-501(北より)
SA-504・505(北より)
- PL.66 SD-518・519(南東より)
SF-501(北東より)
- PL.67 F区中世遺構検出状態(北より)
F区中世遺構完掘状態(北より)
- PL.68 F区弥生時代遺構完掘状態(北より)
F区南壁セクション(北より)
- PL.69 E区第Ⅵ層青磁(5040)出土状態, E区第Ⅶ層須恵器(5557)出土状態, SC-501遺物出土状態(西より), ST-501(西より), SK-501(西より), SK-502(西より), SK-507(南より), SK-508(南より)
- PL.70 SD-502(西より), SD-503(北より), SD-505須恵器(5126)出土状態, SD-507(西より), SU-501(西より), SU-502(西より), SU-503(東より), SD-508・509(南より)
- PL.71 SD-514(南より), SD-515(南より), SD-518・519(西より), SD-520(東より), SD-521(東より), SD-522(東より), P-503土師質土器(5142)出土状態, SK-512(東より)
- PL.72 SK-513(北より), SK-513(東より), SK-515(北より), SK-516(南東より), SD-601土師質土器(6007)出土状態, SD-601土師質土器(6008)出土状態, SD-601・603(南より), SD-602(南より)
- PL.73 瓦器(椀)
白磁(碗)
- PL.74 青磁(碗・皿)

- 東播系須恵器(片口鉢)
- PL.75 土師質土器(杯)
土師質土器(杯)
- PL.76 白磁(碗・皿)
青磁(碗)
- PL.77 青磁(碗)
瓦器(椀), 土師質土器(杯), 土製品(土
錘)
- PL.78 瓦器(椀), 瓦質土器(羽釜), 青磁(碗),
陶器(碗)
磁器(碗)
- PL.79 磁器(碗)
磁器(皿)
- PL.80 磁器(皿)
弥生土器(壺)
- PL.81 青磁(碗)
瓦器(椀)
- PL.82 東播系須恵器(片口鉢)
ガラス製品(瓶)
- PL.83 磁器(爛徳利・小瓶), 陶器(徳利)
- PL.84 備前焼(播鉢), 磁器(仏花器), 陶器(徳
利)
- PL.85 陶器(徳利), 石製品(石斧)
- PL.86 弥生土器(甕・鉢)
- PL.87 弥生土器(壺・甕)
- PL.88 弥生土器(甕)
- PL.89 弥生土器(甕・支脚)
- PL.90 弥生土器(支脚), 磁器(小碗・皿)
- PL.91 磁器(皿・酒杯), 陶器(鉢形容器)
- PL.92 弥生土器(甕), 磁器(蓋・碗・皿), 陶器
(小壺)
- PL.93 弥生土器(甕・鉢)
- PL.94 弥生土器(壺・甕・高杯)
- PL.95 弥生土器(甕)
- PL.96 弥生土器(甕・高杯), 磁器(蓋・小碗・皿)
- PL.97 磁器(皿・隅切角皿)
- PL.98 陶器(蓋・台付灯明皿・徳利)
- PL.99 弥生土器(壺), 陶器(蓋・小壺), 石製品
(石鏃・空風輪)
- PL.100 弥生土器(甕)
- PL.101 弥生土器(甕・甑), 須恵器(壺), 備前焼
(播鉢)
- PL.102 弥生土器(壺・甕・鉢), 土製品(土錘)
- PL.103 弥生土器(鉢)
- PL.104 土師質土器(杯), 青白磁(蓋), 磁器
(碗・水滴), 陶器(碗), 石製品(石鍋)
- PL.105 磁器(蓋・碗), 陶器(碗・台付灯明皿・片
口・湯たんぼ)
- PL.106 弥生土器(壺), 磁器(蓋・碗・小碗・鉢),
陶器(碗), 土製品(土錘)
- PL.107 弥生土器(壺・甕・鉢・手づくね土器)
- PL.108 弥生土器(壺・甕・鉢・ミニチュア土器)
- PL.109 弥生土器(甕・鉢)
- PL.110 須恵器(高杯), 瓦器(椀), 東播系須恵器
(椀), 土師質土器(羽釜), 瓦質土器(羽
釜), 青磁(皿), 磁器(碗・鉢)
- PL.111 磁器(碗・小碗・鉢・歯磨容器), 陶器
(鉢・涼炉)
- PL.112 磁器(碗), 陶器(碗・播鉢・火入れ), 石
製品(砥石)
- PL.113 弥生土器(鉢), 青磁(碗), 石製品(火輪),
金属製品(煙管), ガラス製品(瓶)
- PL.114 弥生土器(壺・甕・鉢・ミニチュア土器)
- PL.115 弥生土器(壺・鉢), 備前焼(播鉢), 磁器
(碗・皿), ガラス製品(瓶)
- PL.116 弥生土器(鉢), 土師器(杯), 土師質土器
(杯), 磁器(皿・酒杯), 陶器(蓋)
- PL.117 弥生土器(鉢・ミニチュア土器), 土師質
土器(杯), 陶器(皿), 金属製品(煙管)
- PL.118 弥生土器(壺・鉢), 土師器(皿), 土師質
土器(小皿)
- PL.119 磁器(蓋・隅切角皿・輪花鉢・鉢・段重・

酒杯), 陶器(蓋)
 PL.120 弥生土器(鉢), 須恵器(壺・杯), 土師質
 土器(杯・小皿), 磁器(皿・猪口), 鉄製
 品(短刀)

自然科学分析.....

PL.121 平成9年度珪藻化石

PL.122 花粉化石・花粉分析プレパラート内状
 況写真・植物珪酸体

PL.123 平成10年度珪藻化石1

PL.124 平成10年度珪藻化石2

PL.125 花粉化石

PL.126 植物珪酸体1

PL.127 植物珪酸体2

付図目次

- 付図1 A区遺構平面図(S=1/200)
- 付図2 B区遺構平面図(S=1/200)
- 付図3 C区弥生時代遺構平面図(S=1/200)
- 付図4 C区中世遺構平面図(S=1/200)
- 付図5 C区近世以降遺構平面図(S=1/200)
- 付図6 E区弥生時代2遺構平面図(S=1/200)
- 付図7 E区古代遺構平面図(S=1/200)
- 付図8 E区中世遺構平面図(S=1/200)
- 付図9 E区近世以降遺構平面図(S=1/200)

平成8年度発掘調査概要一覧表

調査地区	調査区	調査面積	調査延べ面積	主な検出遺構
光永・岡ノ下 遺跡地区	A区	2,486㎡	3,444㎡ (一部2面)	古墳(祭祀跡), 古代・中世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, ピットなど)
	B区	524㎡	524㎡ (1面)	中世(掘立柱建物跡, 土坑, 溝跡, ピットなど)
	C区	2,524㎡	2,524㎡ (一部2面)	中世(掘立柱建物跡, 土坑, 溝跡, ピットなど)
天神遺跡 第I調査地区	—	2,372㎡	2,584㎡ (トレンチを含む)	中世(掘立柱建物跡, 土坑, 溝跡, ピットなど), 近世(畝状遺構), 近代(暗渠)
林口遺跡 第I調査地区	A区	2,645㎡	2,717㎡ (断ち割りを含む)	中世・近世(掘立柱建物跡, 柵列, 土坑, 溝跡, ピットなど)
合計		10,551㎡	11,793㎡	

平成9年度発掘調査概要一覧表

調査地区	調査区	調査面積	調査延べ面積	主な検出遺構
光永・岡ノ下 遺跡地区	B区	220㎡	220㎡ (1面)	中世（掘立柱建物跡，土坑，溝跡，ピットなど）
	C区	524㎡	524㎡ (1面)	中世（掘立柱建物跡，土坑，溝跡，ピットなど）
天神遺跡 第Ⅱ調査地区	A区	495㎡	495㎡ (1面)	中世（溝跡，ピット）
	B区	463㎡	926㎡ (2面)	弥生（竪穴状遺構，土器集中遺構），中世（掘立柱建物跡，土坑，溝跡，ピットなど）
	C区東	549㎡	1,098㎡ (2面)	弥生（土器集中遺構），中世（土坑，溝跡，ピットなど）
	C区西	214㎡	642㎡ (3面)	弥生（竪穴住居跡），中世・近世（土坑，ピットなど）
	D区	72㎡	72㎡ (1面)	近世以降（土坑）
	E区	535㎡	1,070㎡ (2面)	弥生（土器集中遺構，ピット），中世（掘立柱建物跡，土坑，溝跡，ピットなど）
合計		3,075㎡	5,050㎡	

平成10年度発掘調査概要一覧表

調査地区	調査区	調査面積	調査延べ面積	主な検出遺構
天神遺跡 第Ⅱ調査地区	A区	442㎡	442㎡ (1面)	中世（溝跡，ピット）
	B区	635㎡	675㎡ (2面)	弥生（土器集中遺構：40㎡），中世・近世以降（建物跡，土坑，溝跡，ピット：635㎡）
	C区東	452㎡	1,016㎡ (3面)	弥生（土器集中遺構：後期112㎡），中世（建物跡，ピット：452㎡），近世以降（土坑，溝跡，ピット：452㎡）
	C区西	859㎡	2,359㎡ (4面)	弥生（祭祀跡：中期：51㎡・後期：112㎡），中世2時期（溝跡，ピット：859㎡）
	E区東	671㎡	2,760㎡ (5面)	弥生（祭祀跡：後期Ⅰ：76㎡・後期Ⅱ：671㎡），古代（溝跡，畝状遺構：671㎡），中世（溝跡，畝状遺構，ピット：671㎡），近世以降（溝跡，畝状遺構：671㎡）
	E区西	667㎡	755㎡ (2面)	弥生前期（88㎡），弥生後期・古代・中世（建物跡，溝跡，ピット：667㎡）
	F区	102㎡	102㎡ (1面)	中世（溝跡，ピット）
林口遺跡 第Ⅰ調査地区	B区	519㎡	519㎡ (1面)	中世（溝跡，ピット）
	C区	132㎡	385㎡ (2面)	縄文（土坑，ピット：43㎡），弥生（ピット：前期：70㎡，後期Ⅰ：70㎡，後期Ⅱ：70㎡），中世（溝跡，ピット：132㎡）
合計		4,479㎡	9,103㎡	

第 I 章 序 章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が建設省 四国地方建設局（現国土交通省）から業務委託を受けた土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成8年度並びに平成10年度に実施した天神遺跡と林口遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。この一連の調査は建設省 四国地方建設局高知工事事務所が実施している土佐市バイパス建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡（埋蔵文化財）の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

天神遺跡は平成7年度に実施した事前の試掘調査によって確認された遺跡で、本書で報告するのは平成9・10年度に本調査を実施した部分であり、平成8年度に実施した天神遺跡とは隣接しており、それらについては『天神遺跡 I』で報告している。また、平成4・5年度に実施された高知県遺跡詳細分布調査で発見された三島遺跡とは近接しており、今後の発掘調査によっては同一の遺跡として捉え得る可能性がある。土佐市、中でもその中心部である高岡町は、現在比較的平坦な地形をなすが、発掘調査の結果から推察すると低湿地部分が比較的多く、遺跡の立地に適した平坦部分から急激に低湿地となる箇所も見受けられ、平坦部は限られ起伏に富んだ地形であり、遺跡の範囲を明確にするには発掘調査の結果を待たなければならないであろう。

2. 遺跡の概要

本書で報告する天神遺跡は平成7年度から平成10年度にかけて実施した一連の発掘調査によってその性格が徐々に明らかになってきている。これらの調査は、土佐市バイパスが建設される道路幅 34 m について行われたものであり、遺跡の範囲が比較的広く、調査箇所で遺跡の全体像を明らかに



Fig.1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡群位置図

2. 遺跡の概要

できた調査区はないが、その性格や遺跡の立地する土佐市高岡町の古環境について多くの資料を得ることができ、仁淀川右岸に展開する土佐市の歴史の空白部分を少なからず埋めることができたものとする。以下、天神遺跡の概要を記す。

天神遺跡は三島神社が鎮座する低位段丘の残丘(以下「残丘」という)の裾部に展開する遺跡で、平成7年度に実施した試掘調査でその存在が明らかになった。この残丘は現在2ヵ所で掘り切られているが、かつては一連のものであったことが裾部の等高線などで推測される。調査はこの残丘の北側(平成9・10年度調査)と西側(平成8～10年度調査)で行い、弥生時代、古代、中世、近世そして近代の遺構が検出された。また、遺構は確認できなかったものの縄文時代後期から晩期の土器片も出土しており、周辺に遺構が存在する可能性もあろう。これらの中で注目されるものとして、弥生時代の祭祀関連遺構(土器集中)、官衙との関連を想定さす方形の掘方を有する掘立柱建物跡、古代、中世、近世と3時期の畝状遺構(畝の可能性が考えられる)及び瓦器を中心とした12世紀後半から13世紀にかけての多量の搬入品の出土などを挙げることができる。なお、12世紀後半から13世紀にかけての瓦器を中心とした多量の搬入品が出土した調査区(天神遺跡第I調査地区)はすでに報告している¹⁾。遺構自体は決して多くはないが、屋敷跡と低湿地の境で多量の遺物が出土し、搬入品のみに関わらず土師質土器の様相の方向性を示唆する資料をも得ることができたことは南四国における古代から中世にかけての素焼土器の様相解明に大きな手がかりとなるものと期待される。

遺跡全体の様相をみると、まず、弥生時代では遺構は確認されなかったものの前期前半の土器が出土したことは注目される。遺構、遺物の多くは残丘の裾部を中心に分布し、その中心となるのは後期後半の時期で、竪穴住居跡1軒と住居跡とは断定できなかったが竪穴状遺構を確認した。特に、確認された竪穴住居跡は一般の住居とはやや様相を異にし、周囲で検出された祭祀関連遺構²⁾との関連も考えられることから残丘の北側(天神遺跡第II調査地区)は、明確に集落を構成している部分とは言い難く、祭祀的要素の強い部分であったのではないかとみられる。当然、集落が構成されていたことが考えられ、立地に適した残丘の南側にその可能性があるのではなかろうか。古代では、残丘の西側の裾部を中心に溝跡、畝状遺構などが検出されている。古代とは断定できなかったが方形の掘方を有する柱穴が確認されたことから周辺に官衙関連の施設の存在する可能性も考えられる。光永・岡ノ下遺跡から出土している9世紀代の洛北産とみられる緑釉陶器を始めとした官衙関連遺物との関連や古代の須恵器窯跡である犬ノ場窯跡との関連も注目されよう。また、畝状遺構が検出され



Fig.2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S=1/100,000)

た残丘西側裾斜面からは重複して中世、近世の畝状遺構も検出されており畝状遺構の立地を考察するうえで貴重な資料となっている。特に、県内には類例に乏しく、畝の様相解明に役立つものと考えられる。中世はほぼ遺跡全域で遺構が確認され、天神遺跡第I調査地区では低湿地と隣接した屋敷跡の一角を検出している。屋敷跡と低湿地の境からは丁度投棄した状態で土器がまとまって出土している。これ以外にも屋敷跡を区画する溝跡や前述の畝状遺構など数多くの遺構を検出している。全般に排水用とみられる溝跡が多い。また、本書で報告する天神遺跡第II調査地区からは現在の土地区画と重複する溝跡も確認されており、土地区画が今日まで踏襲されていたことが窺える。近世では、残丘の北側と西側の山麓部を中心に遺構が分布し、集落の一部分と判断される。また、前述の畝状遺構も検出されている。近代では、残丘北側で検出された廃棄土坑や第二次世界大戦後から昭和30年代に埋設されたとみられる水田の排水施設である暗渠が各調査区で検出された。この暗渠はこの地区が水捌けが悪い土地であったことを物語っている。

このように天神遺跡からは弥生時代以降、主だった時期の遺構が確認されており、綿々とした人間の生活の痕跡を辿ることができる。 (廣田)

註

(1)『天神遺跡I・林口遺跡I』-土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書II- 高知県教育委員会・(財)高知

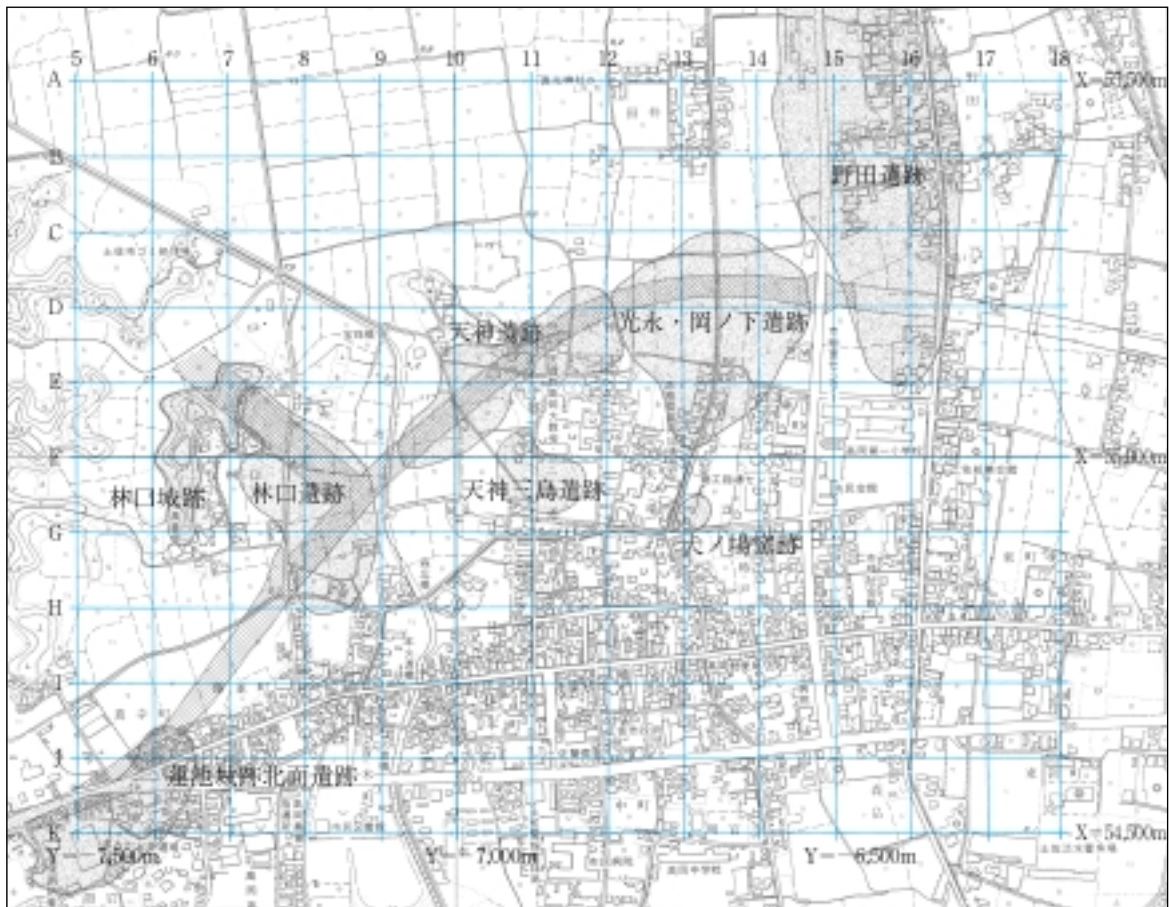


Fig.3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図 (S=1/10,000)

2. 遺跡の概要

県文化財団埋蔵文化財センター 2001.2

- (2) 土器が集中して出土し、手づくね土器も含まれることから祭祀関連遺構として位置付けた。類例として、中村市具同中山遺跡群からもタタキ目を有する土器で構成された当該期の土器集中が検出されており、古墳時代中期の祭祀に先駆けて弥生時代後期後半にも祭祀が行われていたものとみられている。なお、同遺跡群は高知のみならず四国を代表する古墳時代中期，中でも5世紀後半から6世紀初頭にかけての祭祀遺跡で，初期須恵器を始めとして石製模造品や土製模造鏡など膨大な量の祭祀遺物が出土している。また，平成12年度の調査では，竪穴住居跡1軒と掘立柱建物(倉庫)跡2棟が確認されており，遺跡群の意味付けに一石を投じている。

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の経過

天神遺跡は、平成7年度に実施した土佐市バイパス建設工事に伴う事前の試掘調査によって確認された遺跡である。試掘調査は7ヵ所にトレンチを設定し、弥生時代後期、古代、中世の遺物包含層と遺構を検出した。その結果、天神遺跡は約69,000㎡に広がるものとみられ、その内工事によって影響を受ける約10,500㎡が調査対象となった。

本調査は平成8年度に西半分の第Ⅰ調査地区を行っており、中世の遺構・遺物が確認されている。それについては『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰ－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』として報告している。今回の調査区である第Ⅱ調査地区はその東側にあたり、平成9年度に北側の幅約10mの仮設道路部分を調査し、平成10年度に残りの南側の調査を行った。調査期間は、平成9年度が平成9年9月3日から11月27日、平成10年度が平成10年5月11日から11月13日までであった。

2. 調査日誌抄

A区北部：1997年9月3日～9月24日

9.3 本日より発掘調査を開始する。周囲に安全柵を配し、東側から重機により表土掘削を行う。

9.4 機械掘削の後を追って、遺物包含層を掘削し遺構の検出を行う。表土から検出面までは1.70mほどの深さであった。溝跡を3条確認する。

9.5 遺構の検出は、調査区の半分が終了する。検出面はほぼ平坦で、溝跡を5条確認した。遺物量は少ない。東壁の断面図を作成し、写真撮影を行う。

9.8 雨天のため現場作業を中止する。

9.9 調査区水没のため現場作業を中止する。

9.10 遺構の検出を続けて行う。昨日までの雨で壁面が一部崩落しており、杭を打ち土嚢袋等で補修して現場作業を続行する。

A区南部：1998年5月12日～6月1日

5.12 周囲に安全柵を配し、機械掘削を開始する。排水作業を併行して行う。

5.13 機械掘削を続ける。北壁の一部が崩壊しかけており、杭を打ちコンパネで土留めを行う。土師質土器、白磁、瓦器が遺物包含層より出土する。

5.14 機械掘削と併行して遺物包含層を掘削する。調査区外東側にローリングタワーを設置し、機

9.11 遺構の検出を続けて行う。壁面を精査する。北壁の断面図を作成し、写真撮影を行う。

9.12 遺構の検出を続けて行う。東側より遺構の調査を開始する。

9.16 雨天のため現場作業を中止する。

9.17 雨天のため現場作業を中止する。

9.18 排水作業を行う。

9.19 排水作業を続ける。

9.22 遺構の調査を終了する。SD-101～103の遺構断面図を作成し、写真撮影を行う。完掘写真撮影の予定であったが、午後2時ごろ降雨のため現場作業を中止する。

9.24 調査区全面を精査し、完掘状態を撮影する。以上でA区北部の調査を終了する。

機械掘削の様子を写真撮影する。

5.15 機械掘削と併行して、遺物包含層の掘削を続ける。北壁の写真撮影を行う。

5.18 前日の雨により現場作業は中止する。調査員のみで調査区に溜まったヘドロを除去し、機械掘削を行う。

5.19 機械掘削を終了する。遺物包含層の掘削

2. 調査日誌抄

と遺構の検出を行う。溝跡3条、ピット5個を検出する。

5.20 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。南北の溝跡，東西の溝跡，ピット数個を検出する。

5.21 遺物包含層の掘削と遺構の検出をほぼ終了する。

5.22 遺構の検出を完了し，検出写真を撮影する。遺構の調査を開始する。

5.25 前日の雨のため発掘現場作業は中止し，

B区北部：1997年9月11日～10月23日

9.11 西側から重機により土層掘削を開始する。検出面は浅く，地表下10～15cmほどであった。

9.12 機械掘削の後を追い，遺構の検出を行う。

9.16 雨天のため現場作業を中止する。

9.17 雨天のため現場作業を中止する。

9.18 遺構の検出を行う。東側は検出面がかなり下がるとみられるが，西側と同じ高さで掘削を行い，落ち込みのプランを確認する。検出状態の写真撮影を行う。

9.19 西側から遺構の調査を開始する。SD-209は暗渠のようである。近世以降の遺物が出土する。遺物は中近世のものが中心で，少量の弥生土器が混入する。

9.22 遺構の調査を続ける。

9.24 遺構の調査を続ける。

9.25 遺構の調査を続ける。暗渠とみられるSD-209・210の掘削を行う。SD-209は西側でピットと複雑な切り合いをみせる。ST-202を切っている土坑やピットを調査し，ST-202の調査前の写真撮影を行う。

9.26 遺構の調査を続ける。遺構はピット，溝，土坑などである。P-210から完形の土師器小皿が出土する。写真撮影の後取り上げる。

9.29 遺構の調査を続ける。ピットより石臼が出土する。

9.30 遺構の調査を続ける。ST-202から弥生後期の壺，甕などが出土する。遺物出土状態を1/10で実測し写真撮影を行う。

排水作業を行う。

5.26 遺構の調査を行う。

5.27 遺構の調査を終了し，精査の後，写真撮影を行う。平面実測を始める。

5.28 平面実測を続ける。東壁，南壁の断面図を作成する。

5.29 雨天のため現場作業を中止する。

6.1 東壁，南壁の断面図作成を終了する。土壤サンプルを取り，本調査区の調査を終了する。

10.1 遺構の調査を続ける。SD-208・209・210は暗渠であることが判明する。

10.2 雨天のため現場作業を中止する。

10.3 遺構の調査を続ける。調査区中央部に住居跡(ST-201)ではないかとみられる遺構を検出する。

10.6 遺構の調査を続ける。ST-202の調査を終了し完掘状態の写真撮影を行う。ST-201の調査を開始する。

10.7 東側の落ち込みの調査に移る。

10.8 落ち込みの掘削を続ける。SK-201遺物出土状態の写真撮影を行う。

10.9 落ち込みの掘削を続ける。

10.13 落ち込みの掘削を続ける。出土する遺物は青磁，白磁，瓦器などである。調査区周辺の排水用サブトレンチも併行して拡張する。

10.14 落ち込みの掘削を終了する。

10.15 落ち込みの完掘写真を撮影する。調査区全体を精査し，遺構完掘状態の写真撮影を行う。平



Fig.4 B区発掘調査風景

板測量を行う。

10.16 平面実測を行う。落ち込みの断面を写真撮影する。東壁・北壁断面図を作成する。

10.17 平面実測を続ける。

B区南部：1998年6月10日～6月18日，8月20日～9月28日

6.10 機械掘削を開始する。叩石，土師器細片が出土する。

6.11 機械掘削を続ける。

6.12 機械掘削を続ける。

6.18 排水溝を拡張する。西側の浅い部分は機械掘削を終了し，現場作業員が入れる状態にして，ブルーシートをかけて保護する。現場作業員はC区，E区に移る。

8.20 西側は遺構の検出を行う。東側の落ち込み部分の機械掘削を行う。

8.21 西側は遺構の検出を行う。東側の落ち込み部分の機械掘削を続ける。土器集中(SC-201)を検出し，写真撮影をする。SC-201の遺物の取り上げを行う。

8.24 排水作業の後，SC-201の遺物の取り上げの続きを行う。遺構の検出と落ち込み部分の機械掘削を続ける。雷雨により午後3時頃より現場作業を中止する。

8.25 排水作業の後，遺構の検出を行う。落ち込み部分の機械掘削も続ける。SC-201の遺物を取り上げる。

8.26 遺構の検出と機械掘削を併行して続ける。南壁・北壁の土層を分層する。

8.27 落ち込み部分の機械掘削が終了する。北東部で溝跡2条を検出する。

8.28 遺構の検出を続ける。

8.31 遺構の検出を続ける。南壁断面の写真撮影を行う。

9.1 調査区の平板測量を行い，その後，遺構の検出を行う。南壁の断面図を作成する。

9.2 遺構の検出を続ける。SE-201の調査を行う。

9.3 遺構の検出が終了する。遺物包含層より

10.20 平面実測を続ける。

10.21 平面実測を続ける。

10.22 平面実測を終了する。レベル実測を行う。

10.23 レベル実測を行い，調査を終了する。

土師質土器(杯)がほぼ完形で出土する。

9.4 昨日の雨のため，排水作業から始める。調査区全面を精査し，検出状態の写真撮影を行い，遺構の調査を開始する。

9.7 西側から遺構の調査を開始する。SE-201は井戸枠を検出した状態で写真撮影を行う。2つのピットから石の礎板が出土する。

9.8 遺構の調査を続ける。SK-210の調査を行う。

9.9 遺構の調査及びSK-210の調査を続ける。SE-201の掘削途中に桶と思われる木製品を確認した。

9.10 遺構の調査をほぼ終了する。掘立柱建物跡1棟を確認する。

9.11 調査区の全面精査の後，完掘写真を撮影する。航空写真を撮影し，航空測量を行う。

9.14 平面実測を行う。東壁断面の写真撮影を行い，図面を作成する。SC-201を拡げる。

9.16 平面実測を続ける。また，SC-201の拡がりを確認する。SC-201の遺物出土状態を再度写真撮影する。

9.17 平面実測を続ける。SC-201はさらに南に拡がる。東壁の断面図を実測する。SE-201の遺構平面図を作成する。

9.18 土器集中遺構(SC-201)の調査を終了し，完掘写真を撮影する。また，SE-201を調査し，写真撮影をする。降雨のため午後の現場作業は中止する。

9.21 雨天のため現場作業を中止する。

9.22 雨天のため現場作業を中止する。

9.24 雨天のため現場作業を中止する。

9.25 雨天のため現場作業を中止する。

9.28 レベル実測を行い，調査を終了する。

2. 調査日誌抄

C区北東部：1997年9月24日～11月6日

9.24 東側より機械掘削を開始する。排水用サブトレンチを調査区周囲に巡らす。サブトレンチ内から弥生土器が出土する。

9.25 機械掘削を続ける。機械掘削と併行して遺構の検出を行う。遺物包含層から出土した弥生土器の出土状態を実測する。午前中からの降雨のため、午後からの現場作業は中止にする。

9.26 調査区東側は排水作業を行う。調査区西側は重機による客土及び遺物包含層までの掘削を行う。近世磁器や瓦などが出土する。

9.29 東側は機械掘削の後を追い、遺構の検出を行う。数条の溝跡を検出する。地形が西に向かって緩やかに傾斜することが判明する。西側は機械掘削を行う。

9.30 遺構の検出が終了する。西側に幅2mほどの南北溝を確認する。

10.1 調査区全体を精査し、測量用杭を設置する。午後から遺構の検出状態の写真撮影を行う。

10.2 雨天のため現場作業を中止する。

10.3 北東隅より遺構の調査を開始する。

10.15 遺構の調査を続ける。主に溝跡とピットを調査する。SD-314は暗渠の可能性が高い。

10.16 遺構の調査を続ける。

10.17 遺構の調査を続ける。

10.20 遺構の調査を続ける。SD-301・303を調査する。調査区中央の北側は浅い落ち込みになっており、東西に溝が走る。土器集中箇所の写真撮影の後出土遺物を取り上げる。南壁から出土した弥生土

器の写真撮影を行う。

10.21 遺構の調査を続ける。調査区全体の平板測量を行う。SD-315を新しく調査する。SD-301等の断面図を作成し写真撮影を行う。南端の弥生土器は完形で出土し、写真撮影後実測して取り上げる。

10.22 遺構の調査を続ける。主にSD-309を調査する。SD-314とSD-301の写真撮影を行う。SD-309の西側にSD-310を検出し、調査する。

10.23 遺構の調査を行う。弥生土器集中地点を3ヵ所確認する。東南端のSD-315内にピットを確認する。SD-310の写真撮影を行う。

10.24 遺構の調査を続ける。弥生土器集中地点及びSD-309のセクションの写真撮影を行う。

10.27 遺構の調査の終了した部分から平面測量を開始する。新たに弥生土器集中地点を確認する。

10.28 遺構の調査を続ける。併行して平面測量を行う。弥生土器集中地点の写真撮影を行う。東側のレベル実測を行う。北壁断面の写真撮影を行う。

10.29 遺構の調査を続ける。併行して平面測量を行う。北壁の断面図を作成する。SD-302を新たに検出する。

10.30 遺構の調査、平面測量を終了する。調査区全体を精査し、完掘写真を撮影する。

10.31 レベル実測を行う。

11.6 下層の確認を行うが遺構は検出されず、本調査区の調査を終了する。

C区北西部：1997年9月26日～11月25日

9.26 機械掘削を開始する。

9.29 機械掘削を続ける。

9.30 機械掘削に併行して遺構の検出を行う。遺物量は少量である。

10.2 雨天のため現場作業を中止する。

10.3 遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。調査区南北に排水溝を設置する。

10.6 遺構の検出を続ける。B区の現場作業を優

先して進めるためC区北西部は一時調査を中断する。

10.24 C区北西部の調査を再開する。近世の遺構の調査を開始する。まず近世の廃棄土坑から始める。

10.27 中世面の遺構の検出を始める。

10.28 中世面の遺構の検出を終了し、検出状態の写真撮影を行う。中世の遺物包含層からも多量の

弥生土器が出土する。

10.29 遺構の調査を開始する。調査区全体の平板測量を行う。

10.30 遺構の調査を行う。SK-305は十字バンクを設定し調査する。

10.31 遺構の調査を行う。SK-305は深く、瓦器、土師質土器などが出土する。

11.4 中世面の遺構の調査を終了し、全体精査の後完掘写真を撮影する。

11.5 中世面の平面実測、レベル実測を行う。弥生面の掘削を開始する。

11.6 弥生の遺物包含層を掘削し、遺構を検出するが西側は数個のピットを検出したのみであった。

11.7 第XV層の掘削を終了する。検出した数個のピットを調査し、第X層の掘削に移る。

11.10 第X層の掘削を続ける。数個のピットを確認する。

11.11 第X層の掘削を続ける。ピットの調査を行う。

11.12 第X層の掘削を西側へ広げる。東側は下層の状況を調査する。南壁断面の写真撮影を行い、図面を作成する。

C区南東部：1998年5月18日～8月21日

- 5.18 調査区に重機を入れる。
- 5.19 家屋の基礎部分を重機で取り除く。
- 5.20 機械掘削を開始する。
- 5.21 機械掘削を続ける。調査区周囲に排水用の溝を掘削する。
- 5.22 機械掘削を続ける。併行して遺物包含層の掘削と遺構の検出を始める。
- 5.25 前日の雨のため、現場作業を中止する。
- 5.26 近世面の遺物包含層を掘削し、遺構の検出を続ける。
- 5.27 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。
- 5.28 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。
- 5.29 雨天のため現場作業を中止する。
- 6.1 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。

11.13 北壁断面の写真撮影を行い、図面を作成する。

11.14 調査区西部でST-301を検出する。調査区東側の完掘写真を撮影し、東側の調査は終了する。

11.17 雨天のため現場作業を中止する。

11.18 ST-301検出写真を撮影し、調査を開始する。

11.19 ST-301の調査を続ける。

11.20 ST-301の調査を続ける。

11.21 ST-301の床面からピット、土坑を確認し、調査する。

11.25 ST-301を完掘する。平面実測、レベル実測を行い、完掘写真を撮影する。調査区西部の完掘写真を撮影し、本調査区の調査を終了する。



Fig.5 ST-301発掘調査風景

近世の遺物が数点出土する。

6.2 雨天のため現場作業を中止する。

6.3 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。近世とみられる多数の土坑と溝跡1条を検出する。

6.4 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。東西方向の溝跡3条を検出する。土坑、ピットを多数検出する。

6.5 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。午後は降雨のため現場作業を中止する。

6.8 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。中央部に水溜まり状の遺構を検出する。西南部にも大きな水溜まり状の遺構を検出する。

6.9 近世面の遺構の検出を完了する。全面精査の後検出写真を撮影する。午後は降雨のため現場

2. 調査日誌抄

作業を中止する。

6.10 排水作業の後平板測量を行う。

6.11 調査区中央にベルトコンベヤを設置し、遺構の調査を開始する。SD-316を40cmほど掘り下げた段階で壁面から弥生土器を確認する。多数の弥生土器が遺存しているものとみられる。SK-314から青磁の鉢が出土し、写真撮影の後取り上げる。

6.12 遺構の調査を続ける。2個の柱穴に礎板を確認する。SD-316からは7点の弥生土器(ほぼ完形の2点を含む)が出土し、写真撮影、平面実測を行った。

6.15 遺構の調査を続ける。

6.16 遺構の調査を続ける。

6.17 遺構の調査を続ける。SP-301は十字バンクを設定して調査する。SP-302を完掘する。SX-301の写真撮影と遺構平面図を作成する。

6.18 遺構の調査を続ける。SP-301を中心に調査する。SX-301の遺構平面図を作成する。

6.19 雨天のため、現場作業を中止する。

6.22 雨天のため、現場作業を中止する。

6.23 昨日の雨のため、排水作業のみを行う。

6.24 雨天のため、現場作業を中止する。

6.25 雨天のため、現場作業を中止する。

6.26 雨天のため、現場作業を中止する。

6.29 10日ぶりに天気回復し、遺構の調査を行う。SP-301バンクの写真撮影し、断面図を作成する。

6.30 近世面を完掘する。全面精査の後完掘写真を撮影する。

7.1 遺構平面図を作成する。調査区南東部の排水用の溝から弥生土器が出土する。北東部のSD-317の下からも弥生土器が確認されており、調査区東側には弥生時代の遺物包含層が残っているものとみられる。

7.2 平面実測を終了し、レベル実測を行う。中世の遺物包含層の掘削を開始する。

7.3 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。SX-301の底面から重複した数条の溝跡が検出され

た。

7.6 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。

7.7 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。溝跡数条を検出する。土坑、ピットは少ない。南西部SP-302は再調査を行う。

7.8 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。

7.9 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。

7.10 遺物包含層の掘削と遺構の検出を続ける。遺物包含層よりほぼ完形の土師質土器(杯)が出土する。12~13世紀の遺物と考えられ、写真を撮影し取り上げる。

7.13 本日は調査区内に湧水があり、排水作業から始める。遺物包含層の掘削と遺構の検出をほぼ終了し、調査区全体を精査する。

7.14 検出状態の写真撮影を行い、遺構埋土を調査する。

7.15 C区は現場作業を中止し、現場作業員はE区の現場作業を行う。

7.16 降水確率が高く、現場作業は中止する。

7.17 C区は現場作業を中止し、現場作業員はE区の現場作業を行う。

7.21 午後から遺構の調査を開始するが、途中降雨のため現場作業は中止する。

7.22 東側から順次遺構を掘削する。中世の遺構の下に所々弥生土器を確認できる。

7.23 遺構の調査を続ける。南壁西側断面の写真撮影を行う。

7.24 遺構の調査を続ける。SD-305などを調査する。

7.27 昨日の雨のため、現場作業は中止する。排水作業を行う。

7.28 遺構の調査を続ける。南壁西側の断面図を作成する。SD-305などを調査する。

7.29 遺構の調査を続ける。SD-305・306などを調査する。南壁中央断面の写真撮影を行う。

7.30 遺構の調査を続ける。南壁中央の断面図を作成する。

7.31 遺構の調査を続ける。

8.3 遺構の調査を続ける。SD-307から土師質土器(皿)が出土したので写真撮影の後取り上げた。

8.4 本日は昨日の降雨のため排水作業から始める。遺構の調査を続ける。

8.5 遺構の調査を続ける。

8.6 遺構の調査を終了する。調査区全体を精査する。

8.7 完掘写真を撮影する。航空撮影・測量を行う。

8.10 現場作業員は盆休みに入る。排水作業を行い、平面実測を行う。

8.11 現場作業員は盆休み。排水作業を行い、平面実測とレベル実測を行う。

8.12 現場作業員は盆休み。弥生の遺物包含層

C区南西部：1998年9月7日～11月13日

9.7 機械掘削を開始する。

9.8 機械掘削を続ける。

9.9 機械掘削を続ける。

9.10 機械掘削を終了する。

9.11 調査区の周囲に排水用の溝を設置する。

9.14 遺物包含層を掘削し遺構の検出を行う。

9.16 遺構の検出を続ける。

9.17 調査区西側の遺構の検出を終了する。

9.21 雨天のため現場作業を中止する。

9.22 雨天のため現場作業を中止する。

9.24 雨天のため現場作業を中止する。

9.25 雨天のため現場作業を中止する。

9.28 排水作業の後東側の遺構の検出を始める。

C区南東部から続くとみられる溝跡を検出する。

9.29 遺構の検出を続ける。午後は降雨のため現場作業を中止する。

9.30 雨天のため現場作業を中止する。

10.1 排水作業の後遺構の検出の続きを行う。

10.2 遺構の検出を続ける。

10.5 遺構の検出が完了し、検出状態の写真撮影を行った後遺構の調査を開始する。

10.6 北東から遺構の調査を続ける。SK-304から土師質土器(小皿)が完形で出土する。SK-309か

を掘削する。遺物の出土する場所が限られているので、土器集中地点とその周囲のみ掘削する。

8.13 現場作業員は盆休み。

8.14 現場作業員は盆休み。

8.17 弥生の遺物包含層を掘削する。

8.18 弥生の遺物包含層を掘削する。遺物の出土状態を写真撮影する。

8.19 弥生の遺物包含層を掘削するが、遺物の出土量が減少する。

8.20 弥生の遺物包含層の掘削を終了する。明確な遺構は検出されなかったが、数箇所から土器集中地点が確認できた。

8.21 弥生面の完掘写真を撮影する。

8.24 レベル実測を行い、調査を終了する。

ら龍泉窯系の青磁(碗)が完形で出土する。共に出土状態の写真撮影を行い、取り上げる。

10.7 雨天のため現場作業を中止する。

10.8 遺構の調査を続ける。

10.9 遺構の調査を続ける。

10.12 中世の遺構の調査を完了する。全面精査の後完掘写真を撮影する。平面実測を開始する。

10.13 昨日の雨のため現場作業は中止し、平面実測、レベル実測を行う。

10.14 航空撮影・測量の予定で、午前中より調査区内を精査する。中世の完掘写真撮影の後天気が崩れ、航空撮影は19日に延期となる。航空撮影終了までC区南西部の調査は中止する。

10.19 午前中、調査区を精査する。中世の完掘写真を再度撮影する。航空撮影・測量を行う。

10.20 古代の遺物包含層の掘削に移る。併行して遺構の検出を行う。

10.21 遺構の検出を行い数個のピットを検出するが、埋土から見て中世の遺構の残りだと判断された。

10.22 遺構の検出を終了する。

10.23 雨天のため現場作業を中止する。

10.26 排水作業の後精査して検出写真を撮影す

2. 調査日誌抄

る。

10.27 雨天のため現場作業を中止する

10.28 遺構の調査を始める。併行してバイパス工事の都合上、西側の一部の調査を行う。

10.29 遺構の調査を続ける。西側の一部を先に完掘し、写真撮影の後平面実測、レベル実測を行う。

10.30 遺構の調査を続ける。西側の一部は弥生の遺物包含層の掘削に移る。

10.31 西側の一部のみ掘削を行い、完掘する。完掘写真撮影の後平面実測、レベル実測を行う。

11.2 遺構の調査を続ける。

11.4 遺構の調査を終了する。完掘写真を撮影する。

11.5 平面実測、レベル実測を行う。

11.6 弥生の遺物包含層の掘削を開始する。弥生遺物包含層の広がる範囲をほぼ確認する。集石遺構とそれを囲むように帯状の土器溜りを確認する。

11.9 弥生遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。

D区：1997年10月3日～10月13日.....

10.3 調査区の関係上L字状のトレンチを設定し、重機で土層掘削を行う。客土の下は岩盤となっており、岩盤を掘削した遺構がみられた。

10.6 遺構の検出を行い、遺構の検出状態の写真撮影を行う。

10.7 土坑(SK-401)の上層の調査を行う。

E区北部：1997年10月7日～11月27日.....

10.7 調査区の東部より機械掘削を始める。

10.8 調査区東部の機械掘削を行う。

10.9 引き続き調査区東部の機械掘削を行う。

10.12 調査区中央部の機械掘削を行う。

10.14 引き続き調査区中央部の機械掘削を行う。

10.20 調査区西部の機械掘削を行う。

10.21 引き続き調査区西部の機械掘削を行う。

10.22 機械掘削を終了する。

10.28 調査区東部より中世の遺物包含層の掘削を始める。

11.10 弥生遺物包含層の遺構の検出を終了し、検出写真を撮影する。

11.11 遺構の調査を開始する。土器溜りの東端に土坑を検出する。遺構を完掘し、写真を撮影する。

11.12 平面実測、レベル実測を行い。調査区西部中央に下層確認のためのトレンチ(TR-1)を設定する。

11.13 TR-1の調査を終了し、土壌サンプルを採取し、C区の調査を終了する。



Fig.6 C区空中撮影風景

10.8 土坑(SK-401)の下層の調査を行う。多量の遺物が出土する。

10.9 土坑(SK-401)を完掘する。

10.13 遺構完掘状態の写真撮影を行い、調査を終了する。

10.29 引き続き中世の遺物包含層の掘削を行う。

10.30 古代・中世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。

10.31 古代・中世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。幅4mの溝を検出する。

11.3 古代・中世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。グリッド杭を打つ。北原小学校の生徒が見学に来る。

11.4 東半の遺構の検出を終了し、遺構の検出写真の撮影を行う。遺構配置図の作成を始める。

11.5 西半の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。遺構配置図の作成を行う。

11.6 古代・中世の遺構の検出を終了し、遺構の検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図の作成を終了する。

11.7 遺構の埋土を確認する。古代・中世の遺構の調査を始める。溝より須恵器(壺)が出土する。

11.10 調査区中央部の遺構の調査を行う。

11.11 調査区西部の遺構の調査を行う。

11.12 調査区西部のピットの調査を行う。遺構平面の実測を始める。

11.13 古代・中世の遺構の調査を終了する。

11.14 古代・中世の遺構完掘状態の写真撮影を行う。遺構平面の実測、レベル実測を終了する。弥生時代の遺物包含層の掘削を始める。

11.16 土佐市第一小学校の生徒が見学に来る。

11.17 降雨のため現場作業を中止する。

11.18 弥生時代の遺物包含層の掘削と遺構の検

E区南部：1998年5月25日～11月13日.....

5.25 E区東半の調査区を東から機械掘削を始める。

5.26 引き続き東部の機械掘削を行う。

5.27 中央部の機械掘削を行う。

5.28 西部の機械掘削を行う。

5.29 降雨の中排水をしながら西部の機械掘削を行う。

6.1 機械掘削を終了する。

6.4 東部から近世の遺構の検出を始める。

6.5 引き続き東部の近世の遺構の検出を行う。

6.8 引き続き東部近世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。遺物は非常に少ない。

6.10 引き続き東部の近世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。

6.11 中央部の近世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。畝状遺構を確認する。

6.12 引き続き中央部の近世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。

6.15 引き続き近世の遺物包含層の掘削と遺構

出を終了し、検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図を作成し、遺構の調査を始める。

11.19 引き続き遺構の調査を行う。

11.20 弥生時代遺構完掘状態の写真撮影を行う。

11.21 遺構平面の実測を始める。

11.25 引き続き遺構平面の実測を行う。

11.27 遺構平面の実測を終了し、レベル実測、土層断面の実測を行い、調査を終了する。



Fig.7 E区現場見学会風景

の検出を行う。畝状遺構は2～3時期にわたっているとみられる。

6.16 西部の近世の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。西部は攪乱を受けており遺構の残りが悪い。グリッド杭を打つ。

6.17 近世の遺構の検出を終了し、遺構の検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図の作成を始める。

6.18 遺構配置図の作成を終了し、遺構の埋土の確認をする。東から遺構の調査を始める。

6.19 雨のため現場作業を中止する。

6.22 雨のため現場作業を中止する。

6.23 前日の雨のため水汲みを行う。

6.24 雨のため現場作業を中止する。

6.25 雨のため現場作業を中止する。

6.26 雨のため現場作業を中止する。

6.29 東部の土坑の調査を行う。

6.30 東部の土坑の調査と畝状遺構の調査を行う。

2. 調査日誌抄

- 7.1 中央部の遺構の調査を行う。
- 7.2 遺構の調査を終了し、近世の遺構完掘状態の写真撮影を行う。遺構平面の実測を始める。
- 7.3 遺構平面の実測を行う。
- 7.6 遺構平面の実測、レベル実測を終了する。ベルトコンベヤを設置する。
- 7.7 東より中世の遺物包含層の掘削を始める。
- 7.8 東部の遺物包含層の掘削を行う。土師質土器、瓦質土器などが出土する。
- 7.9 中央部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。
- 7.10 引き続き中央部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。
- 7.13 西部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。南北方向に走る畝状遺構を確認する。
- 7.14 引き続き西部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。青磁などが出土する。
- 7.15 引き続き西部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。
- 7.16 引き続き西部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。畝状遺構とみられる多数の溝跡を確認する。
- 7.17 遺物包含層の掘削を終了し、西部の遺構の検出を行う。
- 7.21 グリッド杭を打つ。全面精査し、中世の遺構の検出状態の写真撮影を行う。
- 7.22 前日の雨のため水汲みを行う。遺構配置図の作成、遺構埋土を確認する。
- 7.23 中世の遺構の調査を始める。遺構は非常に浅く、遺物も少ない。
- 7.24 引き続き遺構の調査を行う。
- 7.27 前日の雨のため水汲みを行う。
- 7.28 引き続き遺構の調査を行う。
- 7.29 引き続き遺構の調査を行う。土壌サンプルを採取する。
- 7.30 南西部の畝状遺構を調査する。
- 7.31 引き続き南西部の畝状遺構を調査する。
- 8.3 一部残っていた東部斜面部の遺物包含層を掘削する。
- 8.4 東部斜面部の遺物包含層の掘削と遺構の検出、遺構の調査を行う。
- 8.5 遺構の調査を終了し、中世の遺構の完掘状態の写真撮影を行う。
- 8.6 遺構平面の実測を始める。
- 8.7 遺構平面の実測、レベル実測を終了する。
- 8.17 ベルトコンベヤを設置し、東より古代の遺物包含層の掘削を始める。
- 8.18 遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。東西方向の溝跡を検出する。
- 8.19 中央部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。畝状遺構を確認する。
- 8.20 西部の遺物包含層の掘削と遺構の検出を終了する。
- 8.21 グリッド杭を打つ。古代の遺構の検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図の作成を始める。
- 8.24 遺構配置図の作成、遺構埋土を確認し、遺構の調査を始める。雨のため3時に現場作業を中止する。
- 8.25 東半の遺構の調査を終了する。
- 8.26 西半の遺構の調査とSD-503の調査を行う。
- 8.27 SD-503の調査を行う。須恵器(杯)が出土し、写真撮影を行う。
- 8.28 SD-503の調査を行う。
- 8.31 SD-503の調査を行う。
- 9.1 古代の遺構完掘状態の写真撮影、航空測量を行う。遺構平面の実測を始める。
- 9.2 遺構平面の実測、レベル実測を終了する。
- 9.3 ベルトコンベヤを設置し、東より弥生時代の遺物包含層の掘削を始める。
- 9.4 遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。土坑を多数検出した。
- 9.7 引き続き遺物包含層の掘削と遺構の検出を行う。
- 9.8 東部の斜面部の遺物包含層の掘削を行う。
- 9.9 遺物包含層の掘削と遺構の検出を終了し、

弥生時代の遺構の検出状態の写真撮影を行う。

9.10 遺構配置図を作成し、遺構埋土を確認する。

9.11 東より遺構の調査を始める。

9.14 遺構の調査を終了し、弥生時代の遺構完掘状態の写真撮影を行う。

9.30 雨のため現場作業を中止する。

10.1 東部の斜面部にトレンチを設定し、下層確認を行ったところ集石遺構を確認する。

10.2 斜面部のトレンチを調査する。

10.5 集石遺構の遺構平面の実測、写真撮影を行う。

10.6 平板測量、土層断面図の作成を行う。E区東半の調査を完了する。

10.7 雨のため現場作業を中止する。

10.8 E区西半の機械掘削を始める。

10.9 引き続き機械掘削を行う。

10.12 機械掘削を終了する。遺構の検出を行う。

10.13 グリッド杭を打つ。

10.14 土層断面図を作成する。午後より雨のため現場作業を中止する。

10.15 雨のため現場作業を中止する。

10.16 雨のため現場作業を中止する。

10.19 水汲み並びに遺構検出を行う。

10.20 引き続き遺構の検出を行う。

10.21 遺構検出を終了し、遺構検出状態の写真撮影を行う。

10.22 遺構配置図を作成し、遺構埋土の確認を行う。西より遺構の調査を始める。

10.23 雨のため現場作業を中止する。

F区：1998年5月11日～6月1日.....

5.11 機械掘削を行う。

5.12 雨のため現場作業を中止する。

5.13 遺構の検出作業に併行してグリッド杭を打つ。

5.14 遺構の検出を終了し、遺構の検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図を作成し、遺構の調査を始める。

10.26 南西部の遺構の調査を行う。

10.27 雨のため現場作業を中止する。

10.28 南西部のピットの調査を行う。

10.29 北西部の溝跡の調査を行う。

10.30 北部の遺構の調査を行う。

11.2 北部の溝跡を調査する。

11.3 南部を中心に遺構の調査を行う。

11.4 中央部の遺構の調査を行う。

11.5 東部の溝跡の調査を行う。

11.6 南東部の遺構の調査を行う。

11.9 遺構の調査を終了し、東から遺構完掘状態の写真撮影を行う。

11.10 西から遺構完掘状態の写真撮影、航空測量を行う。遺構平面の実測を始める。

11.11 遺構平面の実測を行う。

11.12 遺構平面の実測、レベル実測、土層断面の実測を終了する。

11.13 南西部に下層確認のためトレンチを設定し調査するが遺構等は確認されず、E区の調査をすべて終了する。



Fig.8 E区発掘調査風景

5.15 遺構の調査を行う。溝跡より土師質土器(杯)が出土する。

5.18 昨夜来の雨のため現場作業を中止し、水汲みを行う。

5.19 溝跡の調査を行う。

5.20 遺構の調査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面実測を始める。

2. 調査日誌抄

5.21 平面実測，レベル実測を終了する。南壁に下層確認のためのトレンチを設定する。弥生時代後期の遺物包含層を確認する。

5.22 機械で弥生時代後期の遺物包含層の上面まで掘削する。

5.25 遺物包含層の掘削を行い，精査するが遺構は確認できなかった。

5.26 弥生時代前期の遺物包含層を確認し，掘

削する。

5.27 遺物包含層の掘削を行い，精査するが遺構は確認できなかった。

5.28 完掘状態の写真撮影を行い，土層断面図を作成する。

5.29 水汲みを行う。

6.1 土層断面の写真撮影を行い，柱状図を作成し，調査を終了する。

第Ⅲ章 調査区の概要

1. A区

本調査区は天神遺跡Ⅱ区の東端部に当たり、調査面積は937㎡であった。東に所在する光永・岡ノ下遺跡の自然堤防の後背湿地に当たると考えられ、遺物包含層は地表下1.50～1.70mと深く、確認できた時期は中世のみであり、出土遺物、検出遺構ともに僅かであったが、検出された溝跡を直交するように配していることから水田の可能性も考えられる。しかし、土壌分析の結果からはそれを立証するに足る結果は出ていない。

(1) 層序

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト層

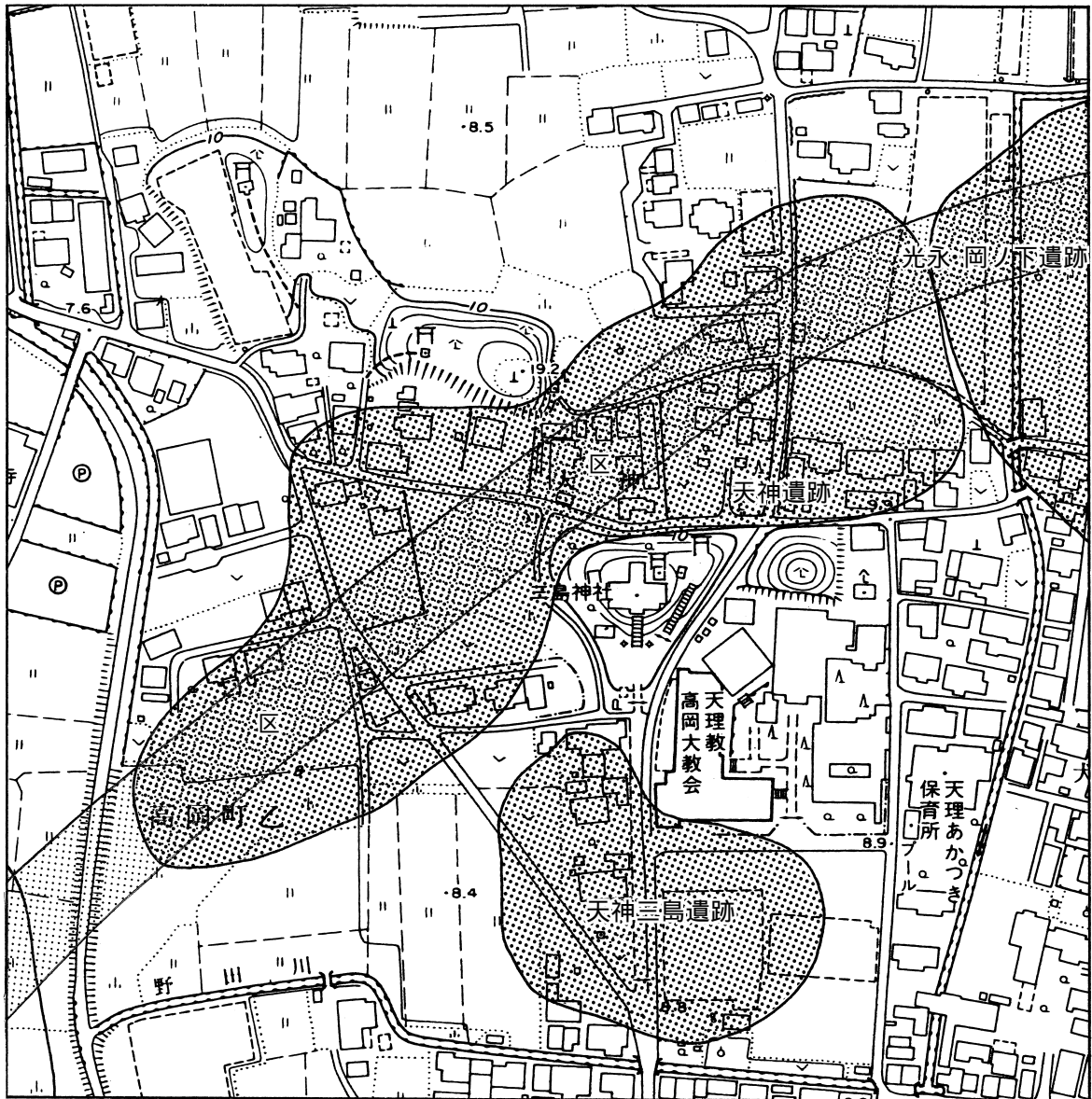


Fig.9 天神遺跡の範囲と調査対象区域図(S=1/2,500)

1. A区

- 第Ⅲ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト層
- 第Ⅳ層 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト層
- 第Ⅴ層 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト層
- 第Ⅵ層 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト層
- 第Ⅶ層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト層
- 第Ⅷ層 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土質シルト層
- 第Ⅸ層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト層
- 第Ⅹ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト層
- 第Ⅺ層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト層
- 第Ⅻ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト層
- 第Ⅼ層 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト質粘土層
- 第Ⅽ層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土層

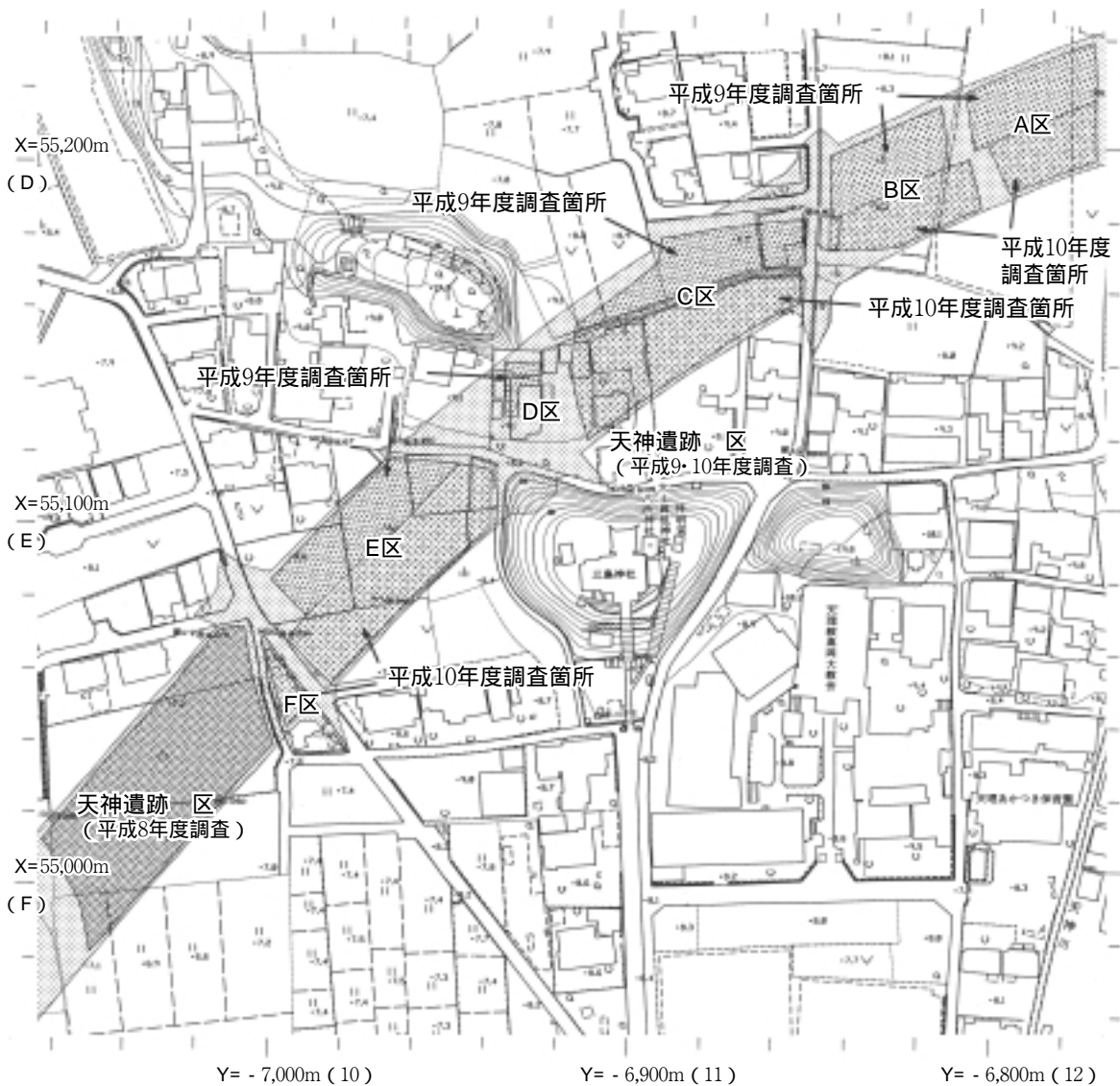


Fig.10 天神遺跡調査区設定図 (S=1/2,000) (公共座標値の後のカッコはグリッド番号を示す。)

第Ⅰ層は表土層で現在の耕作土である。下層部には部分的に鉄分の沈殿がみられた。表土の標高は7.860～8.110mであった。

第Ⅱ層は自然堆積層でマンガン粒が多く混入し、厚さは12～32cmを測る。

第Ⅲ層は自然堆積層で多量のマンガン粒及び若干の炭化物を混入する。調査区中央部から東部にかけて堆積する。厚さは9～22cmを測り、東側にやや傾斜する。

第Ⅳ層は自然堆積層であり、褐色土をブロック状に混入する。厚さは14～32cmを測り、西側が厚く堆積する。

第Ⅴ層は自然堆積層である。マンガン粒と灰黄色土のブロックが混入する。厚さは10～20cmを測る。

第Ⅵ層は自然堆積層で黄褐色粘土質シルトがブロック状に混入する。厚さは5～15cmを測る。

第Ⅶ層は自然堆積層で、少量のマンガン粒と褐色粘土質シルト及びにぶい黄褐色粘土質シルトのブロックが混入する。厚さは12～16cmを測る。

第Ⅷ層は自然堆積層で、灰黄色土の小ブロックが混入する。厚さは14～20cmを測る。

第Ⅸ層は自然堆積層でマンガン粒が混入し、かなり粘質が強い。厚さは14～20cmを測る。

第Ⅹ層は灰黄色粘土質シルト層で中世の遺物包含層である。厚さは7～16cmを測る。

第Ⅺ層は暗灰黄色粘土質シルト層でマンガン粒が混入する。厚さは6～12cmを測り、調査区東部分にのみ、ほぼ水平に堆積し、第Ⅹ層に伴う遺構をこの上面で検出した。

第Ⅻ層も自然堆積層で第Ⅺ層に比較してマンガン粒が比較的多く混入する。厚さは4～6cmと薄く、調査区中央部にのみほぼ水平に堆積する。

第Ⅼ層は自然堆積層で暗灰色シルト質粘土のブロックが混入する。厚さは4～9cmを測る。

第Ⅽ層は自然堆積層で、南壁の一部で確認したのみである。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅹ層出土遺物

白磁 (Fig.13-1001)

1001は碗の底部破片である。畳付は欠損するが、底径は6.0cmを測るものと考えられる。透明釉を

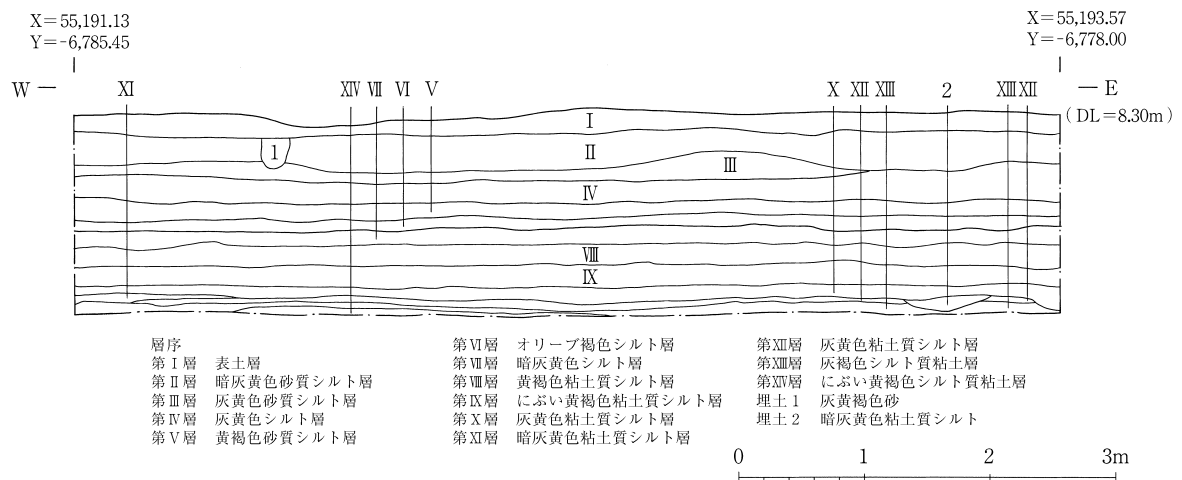


Fig.11 A区セクション図

1. A区

薄く施すが、外面はほとんど露胎であり高台は削り出し高台である。

(3) 遺構と遺物

中世の溝跡を3条検出した。確認できた遺構は中世一時期のみであった。

i 溝跡

SD-101 (Fig.12)

調査区北東隅で検出した東西溝である。約3.00 mに渡って検出したが、東側、西側ともに調査区外に延びる。幅約1.10 m、深さ43 cmを測る。断面形はU字形を呈し、溝北側に段を有する。基底面はほぼ平坦であり、埋土は褐色粘土で灰オリーブ色粘土質シルトのブロックが混入する。出土遺物は土師質土器1点と弥生土器片数点であり、土師質土器(1002)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.13-1002)

1002は杯であり、口縁部の約1/4が残存する。口径12.8 cmを測る。外上方に真直ぐ上がる口縁部であり、回転ナデ調整を施す。内面は摩耗により調整は不明である。

SD-102 (Fig.12)

調査区北東部で約13.80 mに渡って検出した東西溝である。中世の溝に切られており、東側、西側ともに調査区外に延びる。幅は29~42 cm、深さ16 cmを測る。断面形はU字形を呈し、基底面はほぼ平坦である。埋土は黄褐色シルトでマンガン粒が混入する。出土遺物は図示した瓦器1点(1003)のみであった。

出土遺物

瓦器 (Fig.13-1003)

1003は碗の底部破片であり、高台部分の約1/6が残存する。底径7.2 cmを測り、外面にはナデ調整を施す。内面は摩耗しており、調整は不明である。

SD-103 (Fig.12)

調査区北東部で約19.10 mに渡って検出した東西溝である。中世の溝に切られており、東側、西側ともに調査区外に延びる。幅は約0.90~1.90 m、深さ5 cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面はほぼ平坦である。埋土はオリーブ褐色粘土で暗灰黄色砂がブロック状に混入する。出土遺物は土師質土器1点、弥生土器細片、土師器細片であり、土師質土器(1004)が図示できた。

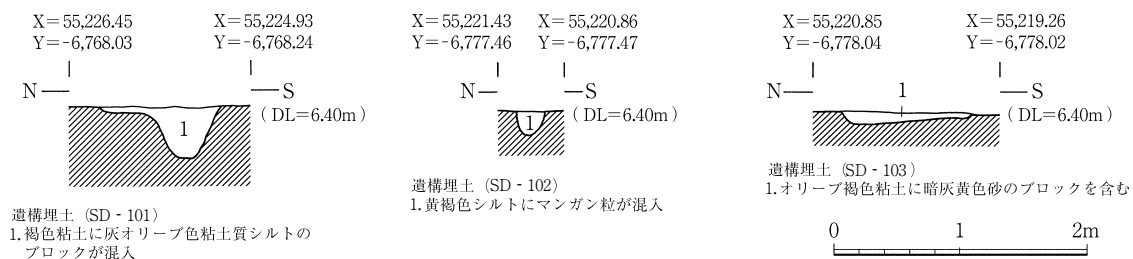


Fig.12 SD-101~103

出土遺物

土師質土器 (Fig.13-1004)

1004は杯の口縁部の破片であり、口径13.1cmを測る。内湾する体部から口縁部はやや外反し、器面には回転ナデ調整を施す。

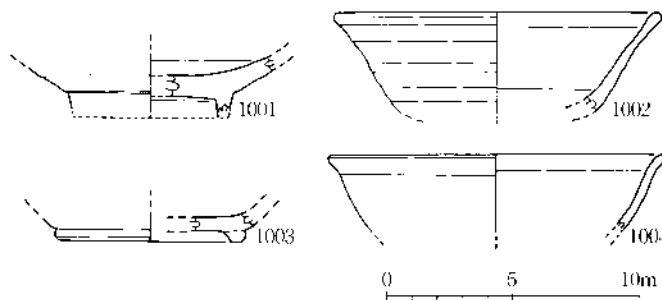


Fig.13 A区出土遺物実測図

2. B区

B区は光永・岡ノ下遺跡で集落を確認した微高地から、後背湿地を挟んだ西側の微高地部分に当たり、南西側の残丘の裾部に当たる。調査延べ面積は1,601㎡で、現況は水田であった。調査区東側はI区から繋がる低湿地であるが、遺物は比較的多量に出土した。中央部の急斜面を経て西側の微高地部分では、中世の遺物包含層と弥生時代、中世、近世以降の3時期の遺構を検出した。

(1) 層序

- 第I層 表土層
- 第II層 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト層
- 第III層 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質シルト層
- 第IV層 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト層
- 第V層 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土質シルト層
- 第VI層 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土質シルト層
- 第VII層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト層
- 第VIII層 黄褐色 (10YR5/4) シルト質粘土層
- 第IX層 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト層
- 第X層 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト層
- 第XI層 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土質シルト層
- 第XII層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト層
- 第XIII層 灰色 (10Y4/1) シルト質粘土層
- 第XIV層 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土層
- 第XV層 褐色 (10YR4/4) シルト質粘土層

第I層は表土層である。近代以降と考えられる遺物が出土している。

第II層は自然堆積層でほぼ水平に堆積する。厚さは12~23cmを測り、調査区西側を中心に堆積している。

第III層は自然堆積層で粗いマンガン粒を含む。ほぼ水平に堆積しており、厚さは14~30cmを測る。調査区中央部から東部にのみ堆積がみられた。

第IV層は中世の遺物包含層で調査区全体に拡がりを見せ、若干東側へ傾斜する。厚さは5~20cmを測る。東側では遺物量が減少する。

第V層は自然堆積層でマンガン粒を多く含む。第IV層に伴う遺構をこの上面で検出した。

2. B区

第VI層は中世の遺物包含層で調査区東側のみに堆積する。厚さは14~42cmを測り、ほぼ水平に堆積する。なお第VI層中で性格不明遺構(SX-201)1基を検出した。

第VII層は自然堆積層で調査区東側にのみ堆積する。厚さは20cm前後を測り、ほぼ水平に堆積する。

第VIII層は自然堆積層で斜面部にのみ堆積する。厚さは15cm前後である。

第IX層は自然堆積層で調査区東側にのみ堆積する。厚さは15~25cmを測り、ほぼ水平に堆積する。

第X層は中世の遺物包含層で、第IX層に比べ黄色が若干強く、混入するマンガン粒が粗い。調査区東1/3にはほぼ水平に堆積する。

第XI層は黄褐色粘土質シルト層で、調査区中央部に約7mに渡って堆積する間層である。

第XII層は中世の遺物包含層である。調査区東側の斜面下に、ほぼ水平に堆積する。

第XIII層は中世の遺物包含層で調査区中央部の斜面下に堆積する。第XII層に伴う遺構をこの上面

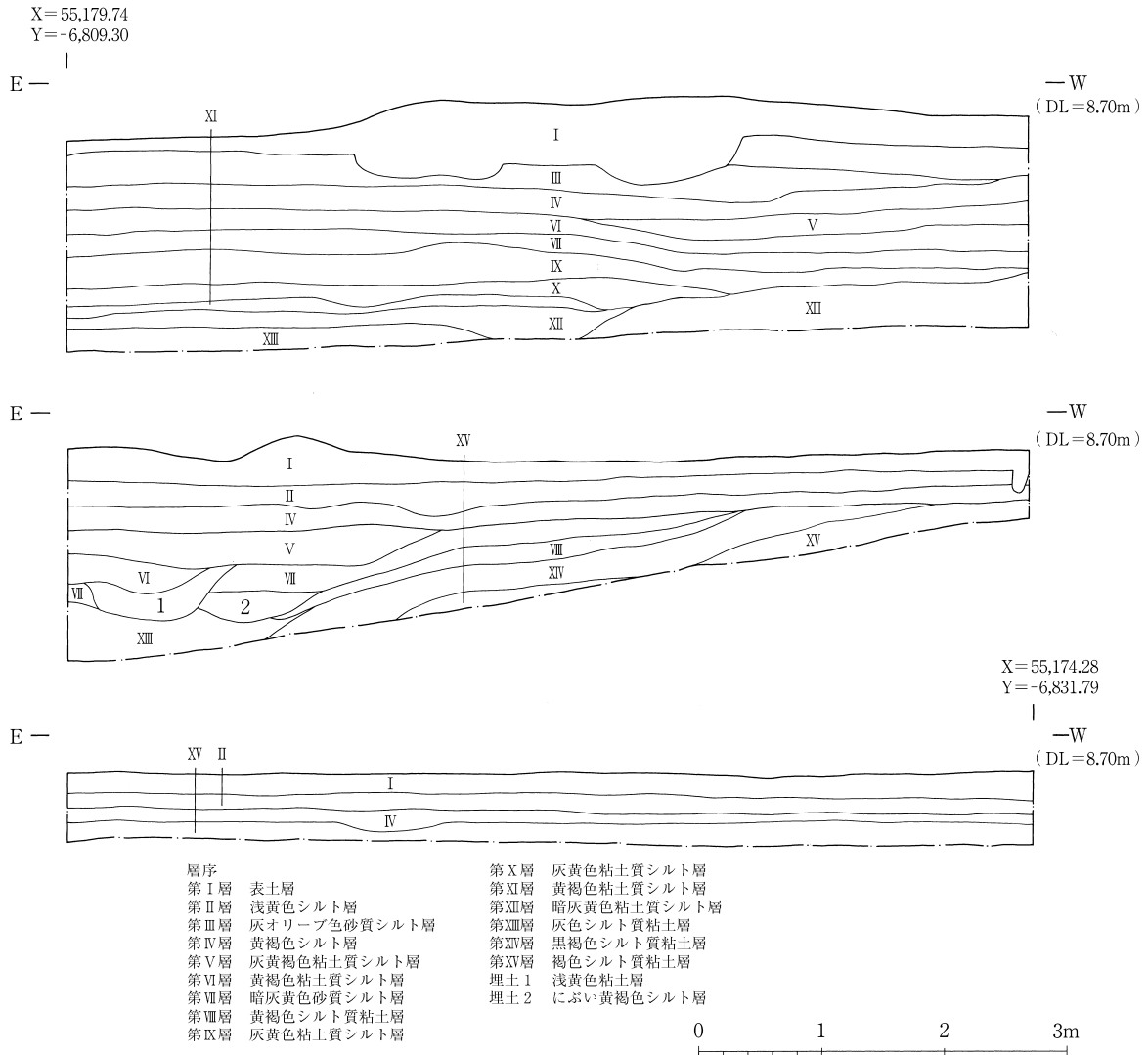


Fig.14 B区セクション図

で検出した。中世の遺物を若干含む。

第IV層は斜面部にのみで認められた弥生時代の遺物細片をごく僅かに含む堆積層である。

第V層は自然堆積層で調査区全体に堆積する。調査区西側の斜面上では第IV層(斜面上の遺物包含層)の下に堆積しており、第IV層に伴う遺構をこの上面で検出した。

(2) 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

瓦器 (Fig.15-2001)

2001は碗の底部破片で、底径3.2cmを測る。内湾する体部の外面には指頭圧痕が残り、内底面には不明瞭ながら暗文が残る。

青磁 (Fig.15-2002)

2002は碗であり、底部がほぼ完存する。底径は6.0cmを測る。内面及び外面の体部から畳付の一部まで灰オーリーブ釉を薄く施す。高台内は露胎である。

磁器 (Fig.15-2003・2004)

2003は染付の端反碗の口縁部破片で口径11.8cmを測る。呉須は淡い発色を示し、断面は光沢のある灰白色を呈す。幕末期の瀬戸・美濃産の製品とみられる。

2004は青磁の輪花鉢で約1/4が残存し、口径16.0cm、器高5.7cm、底径8.6cmを測る。口縁部を極端に厚く、全体に酸化クロムを使用した明緑色釉を1.5mmほどの厚さに施す。明治以降のもので、関西系の窯で製作されたものと考えられる。

陶器 (Fig.15-2005~2008)

2005は全体に鉄釉を施す天目茶碗で、口縁部の約1/4が残存し、口径9.6cmを測る。胎土は粗く、断面は黄灰色を呈す。近世末の瀬戸・美濃系の製品と考えられる。

2006は片口の口縁部の破片である。口径15.3cmを測る。内面は全面に、外面は体部中位まで化粧

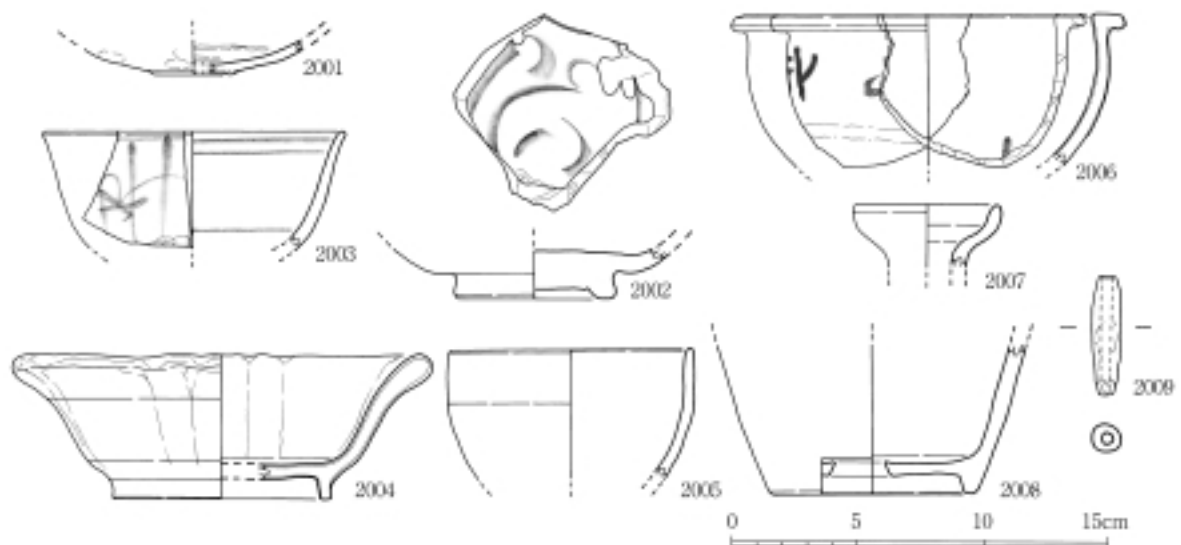


Fig.15 B区第I層出土遺物実測図(瓦器・青磁・磁器ほか)

2. B区

土を施したのちに施釉する。口縁部には釉ハギを施し、外面の中位以下は露胎である。体部外面には呉須による文字を記しており、「商店」の一部と考えられる。

2007は広口瓶である。口縁部の約1/4が残存し、口径は5.8cmを測る。薄く施した暗オリーブ釉が内面には残るが、口縁端部から外面にかけてはほとんど剥落している。

2008は素焼きの植木鉢である。底部の1/4が残存し、底径は7.9cmを測る。

土製品 (Fig.15-2009)

2009は円筒形の管状土錘であり、一部を欠損する。全長4.7cm、全幅1.2cm、孔径0.4cmを測る。

第IV層出土遺物

弥生土器 (Fig.16-2010~2016)

B区、C区における出土遺物の中で、弥生土器の占める割合が78.9%と高く、図示説明のため、まず、器形ごとに次のように形態分類を行う。

壺 口縁部の形態によって4類に分類する。

A類 大きくラップ状に外反する口縁部である。

B類 口縁部が強く外反ないしは外傾するもので、A類ほどではないが、やや長めの口縁部を有するものを1類、短い口縁部を有するものを2類と細分する。

C類 口縁部がほぼ上方に真直ぐ延びるものである。

D類 二重口縁を有するものである。

甕 口径と胴径の形態で3類に分類する。

A類 最大径を胴部に有するもので、口縁部が「くの字状」に外反ないしは外傾するものである。胴部はやや長く、倒卵形または砲弾形を呈するものがほとんどである。平底を1類、それ以外を2類とする。

B類 口径と胴径がほぼ同じ値を示すもので、口縁部が「くの字状」に外反ないしは外傾するものである。胴部はやや長く、倒卵形または砲弾形を呈するものがほとんどである。平底を1類、それ以外を2類とする。

C類 いわゆる深鉢型の甕である。

鉢 口径と器高指数で分類する。

A類 口径16cm以上を測るもの。

B類 口径16cm未満、12cm以上を測るもの。

C類 口径12cm未満のもの。

I類 器高指数33未満のもの。

II類 器高指数45未満33以上のもの。

III類 器高指数55未満45以上のもの。

IV類 器高指数55以上のもの。

さらに底部が平底をなすものを1類、それ以外を2類と細分する。

これらを踏まえ以下B・C区の弥生土器の説明を行う。

2010は壺の口縁部の破片である。口径20.0cmを測る大きく開く口縁部で、端部を上へ拡張する。焼成不良で、摩耗が著しく調整は不明である。

2011～2013は甕である。2011は口縁部から胴部にかけて約1/3が残存し、口径16.8cm、胴径21.3cmを測る(A類)。内湾する胴部から口縁部はくの字状に屈曲し、外上方に真直ぐ延びる。外面には頸部から胴部中位までタタキ目が残る。内面には不明瞭ながらハケ目が残る。口縁部付近は摩滅しており、調整は不明である。胴部外面には煤の付着がみられる。2012は口縁部の約1/3が残存し、口径15.3cmを測る。くの字状に屈曲する口縁部であり、端部は面をなす。外面は胴部にタタキ目残り、頸部付近に緻密なハケ調整を施し、内面はやや粗いハケ調整を施す。2013は庄内式の甕の口縁部破片で口径15.4cmを測る。くの字状に強く外反する口縁部であり、内面にはハケ調整を施す。外面は摩耗により不明瞭であるが、ナデ調整を施すものとみられる。

2014～2016は鉢である。2014は約1/3が残存し、口径13.0cm、器高6.8cm、底径1.5cmを測る(B-Ⅲ-1類)。小さな平底の底部から、内湾しつつ上がり口縁部に至る。外面はタタキ目が明瞭に残り、口縁部付近はタタキの後にナデ調整を施す。内面にはハケ目と指頭圧痕が残る。2015は口縁部の約1/6が残存する(A類)。内湾する体部から口縁部は外反する。内面には部分的にハケ目が残る。2016は底部の破片であり、底径5.2cmを測る。外面にはタタキ目残り、内面には指ナデ調整を施す。

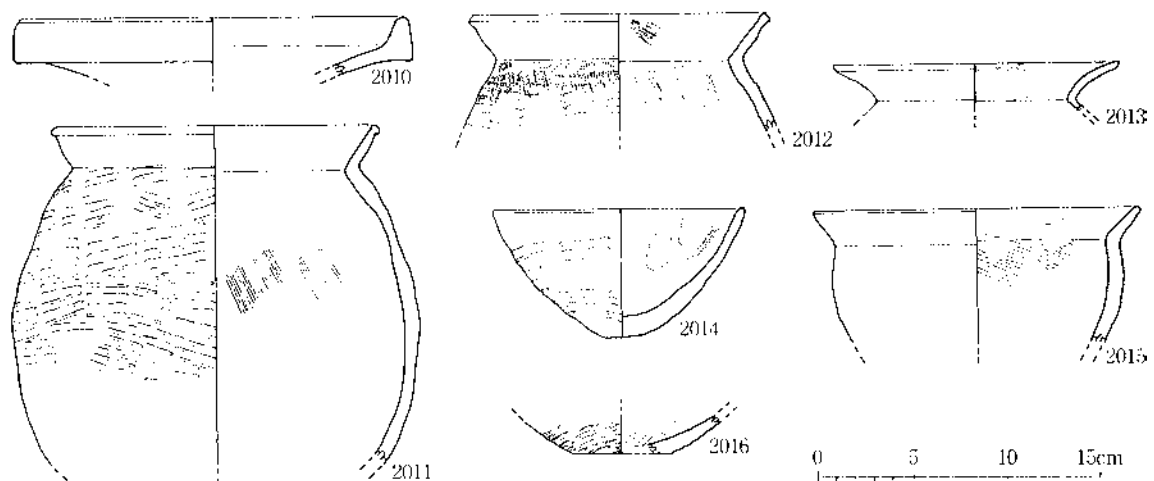


Fig.16 B区第IV層出土遺物実測図(弥生土器)

土師器 (Fig.17-2017)

2017は高杯の脚部の破片である。中空な内面にはナデ調整を施す。

瓦器 (Fig.17-2018～2021)

2018～2020は椀の口縁部であり、2018は約1/6が残存する。口径14.8cmを測り、器高は他の瓦器に比べ高いものとみられる。口縁部のヨコナデ調整は弱く、体部は内湾し外面に指頭圧痕が残る。内面には2条のヘラ磨きが残るが、摩耗しており不明瞭である。2019は約1/4が残存する。口径12.0cmを測り、器高は3.0cm未満と考えられる。2020も口縁部の破片で口径13.2cmを測る。共に口縁部にはヨコナデ調整を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。内底面には圏線状のヘラ磨きを施す。2021は底部の破片であり、高台部分の約1/4が残存する。底径4.3cmを測り、断面三角形の小さな高台が付

2. B区

く。体部外面に指頭圧痕が残り、内底面には圈線状の暗文を施す。

東播系須恵器 (Fig.17-2022)

2022は片口鉢の口縁部破片で、口径26cmを測る。外上方に真直ぐ上がる口縁部で、端部をやや厚く仕上げる。体部には内外面ともナデ調整、口縁部には回転ナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.17-2023・2024)

2023は底部の約1/2が残存し、底径6.2cmを測る。底部はやや歪んでおり、体部は内湾気味に上が

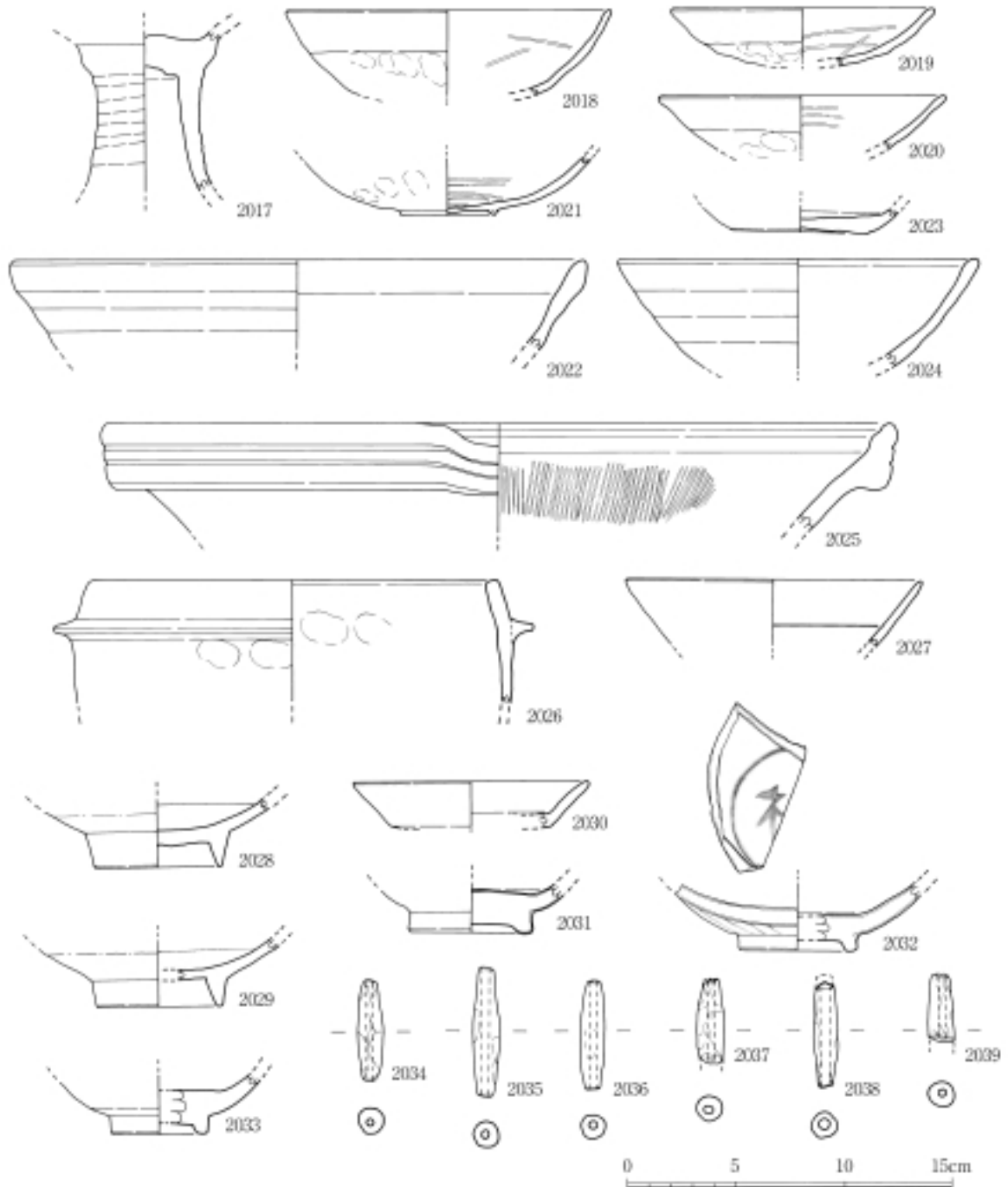


Fig.17 B区第IV層出土遺物実測図(土師器・瓦器・東播系須恵器ほか)

る。成形はロクロ水挽で、体部外面には回転ナデ調整を施し、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。2024は碗の体部から口縁部にかけての破片で、口径16.3cmを測る。体部は内湾して上がり、口縁端部を丸く仕上げる。摩耗が著しく調整は不明である。

備前焼 (Fig.17-2025)

2025は播鉢の口縁部で約1/6が残存する。外上方に真直ぐ延びる口縁部で、端部を上下に拡張し、2条の沈線が巡る。器面は回転ナデ調整で、内面には15本単位の条線を施す。

瓦質土器 (Fig.17-2026)

2026は羽釜の口縁部の破片で、口径18.4cm、胴径20.0cmを測る。やや内湾する口縁部は、ナデ調整によって仕上げられており、内外面に指頭圧痕が残る。口縁端部から1.8cm下に約1.1cmの水平な罫が付く。

白磁 (Fig.17-2027~2029)

2027は碗の口縁部の破片で口径13.0cmを測り、外上方に真直ぐ上がる。全体に薄い透明釉を施す。内面には一条の沈線が巡る。2028・2029は碗の底部である。2028は底径5.6cmを測り、底部の約2/3が残存する。2029は底径5.7cmを測り、底部の1/3が残存する。ともに見込に1条の沈線が巡る。全体に透明釉を薄く施すが、底部外面は露胎である。高台は削り出し高台で高さ1.2~1.3cmを測る。

青磁 (Fig.17-2030~2033)

2030は同安窯系の皿で、口縁部の約1/8が残存する。口径10.4cmを測り、口縁部は平らな底部から外上方に上がる。釉調は灰オリーブ色を呈す。

2031~2033は碗の底部である。2031は底部のみ完存し、底径5.6cmを測る。オリーブ灰色釉を厚く施すが、畳付の一部と高台内は露胎である。高台高は1.1cmを測る。2032は底部の約1/2が残存し、底径5.4cmを測る。緑灰色釉を畳付の一部と高台内を除いて、厚く施す。高台高は0.7cmを測る。2033は底部の破片で底径4.3cmを測る。灰オリーブ色釉を畳付も含め薄く施す。高台内のみ露胎である。

土製品 (Fig.17-2034~2039)

2034~2037は紡錘形の管状土錘である。2034~2036の3点はほぼ完形であり、2034が全長4.6cm、全幅1.2cm、孔径0.3cm、2035が全長5.9cm、全幅1.2cm、孔径0.3cm、2036が全長4.9cm、全幅1.2cm、孔径0.4cmを測る。2037は約2/3が残存し、残存長3.8cm、全幅1.2cm、孔径0.4cmを測る。2038と2039は円筒形の管状土錘であり、2038は一部欠損し、残存長4.6cm、全幅1.1cm、孔径0.4cmを測る。2039は約1/2が残存し、残存長3.1cm、全幅1.2cm、孔径0.3cmを測る。

石製品 (Fig.18-2040・2041)

2040は石臼の上臼の一部であり、径は約28.0cm、その内約22.0cmを窪ませている。厚さは約6.9cmを測り、斜行する4~5本単位の条線が2カ所認めらる。

2041は砂岩と考えられる砥石であり、全長13.1cm、全幅7.9cm、全厚4.5cmを測り、2面を使用している。

2. B区

第X層出土遺物

東播系須恵器 (Fig.19-2042)

2042は片口鉢の口縁部の破片で、口径22.3cmを測る。口縁部は外上方へ真直ぐ上がり、端部を摘み上げヨコナデ調整により仕上げる。体部には回転ナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.19-2043)

2043は小皿で約1/2が残存する。口径7.8cm、器高2.0cm、底径5.8cmを測り、内底面にはロクロ目が残る。摩耗が著しく調整は不明である。

青磁 (Fig.19-2044)

2044は龍泉窯系の碗の口縁部破片で、口径15.9cmを測る。内湾する体部から口縁部は外上方へ真直ぐ延び、端部を若干外反させる。灰オリーブ釉を厚さ0.2mmほどに施し、内面には劃花文が確認できる。

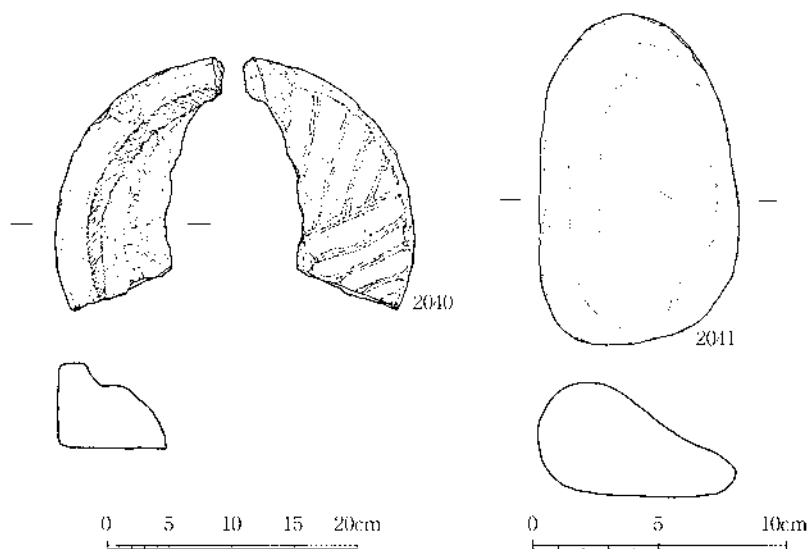


Fig.18 B区第IV層出土遺物実測図(石製品)

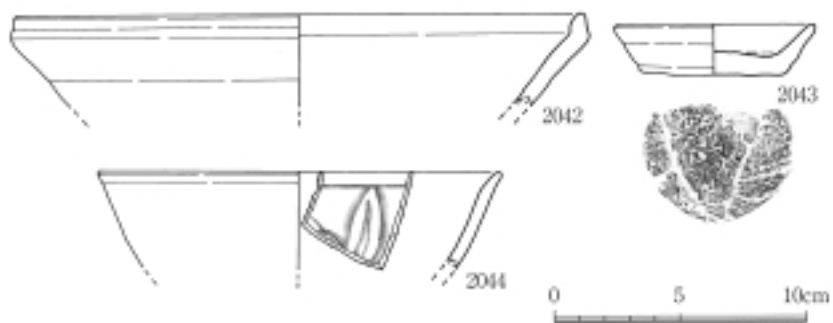


Fig.19 B区第X層出土遺物実測図(東播系須恵器・土師質土器・青磁)

第XII層出土遺物

瓦器 (Fig.20-2045~2057)

2045~2055は椀である。2045は口縁部の約1/8が残存し、口径14.3cmを測る。体部は内湾し、外面には指頭圧痕が残り、口縁部にはヨコナデ調整を施す。内面には圏線状のヘラ磨きを施す。比較的器高が高く5.0cmを越えるものとみられる。2046~2048は口縁部の破片であり、2046は口径15.0cm、2047は口径15.2cm、2048は口径14.8cmを測る。いずれも底部は欠損するものの器高は4.0~4.5cmの間と考えられる。口縁部は比較的直ぐ外上方に上がり、弱いヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には圏線状の暗文が施される。2049・2050も口縁部の破片であり、それぞれ口径13.0cm、13.8cmを測る。器高は3.5cm前後と考えられ、口縁部は直ぐ外上方に上がり、ヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には圏線状の暗文が施される。2051~2053も口縁

部の破片である。口縁部にはヨコナデ調整が施され、内面には暗文が施される。2051は口径13.4cmを測る。2054は底部の約2/3が残存し、底径4.0cmを測り、外底面には逆三角形の高台が付く。2055も底部の約2/3が残存する。底径4.0cmを測り、内底面に暗文が確認できる。高台は逆台形をなす。内外面ともに炭素の吸着はほとんどみられない。

2056・2057は小皿である。2056は約1/5が残存し、口径8.0cmを測る。2057は口縁部の破片で、口径9.6cmを測る。ともに口縁部にはヨコナデ調整を施し、底部外面には指頭圧痕が残る。内面には暗文を施す。内外面とも炭素はほとんど吸着せず、2056はにぶい橙色を、2057は灰白色を呈す。

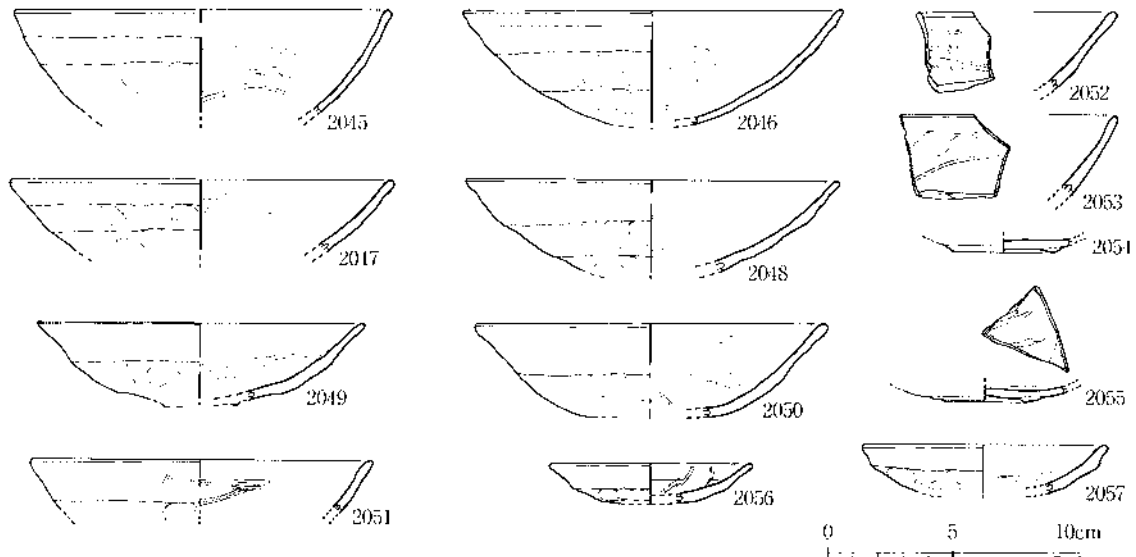


Fig.20 B区第Ⅶ層出土遺物実測図(瓦器)

東播系須恵器 (Fig.21-2058~2060)

2058~2060は片口鉢である。2058は約1/8が残存し、口径28.2cm、器高10.2cm、底径8.9cmを測る。体部はほぼ平らな底部から外上方に真直ぐ上がる。口縁部はヨコナデを施し、端部を下方に若干拡張する。体部外面には回転ナデ調整を施す。2059は口縁部の破片で口径24.8cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ上がり、端部は面をなす。外面には回転ナデ調整、内面にはナデ調整を施す。2060は底部の約2/3が残存し、底径9.2cmを測る。摩耗が著しく調整は不明瞭である。

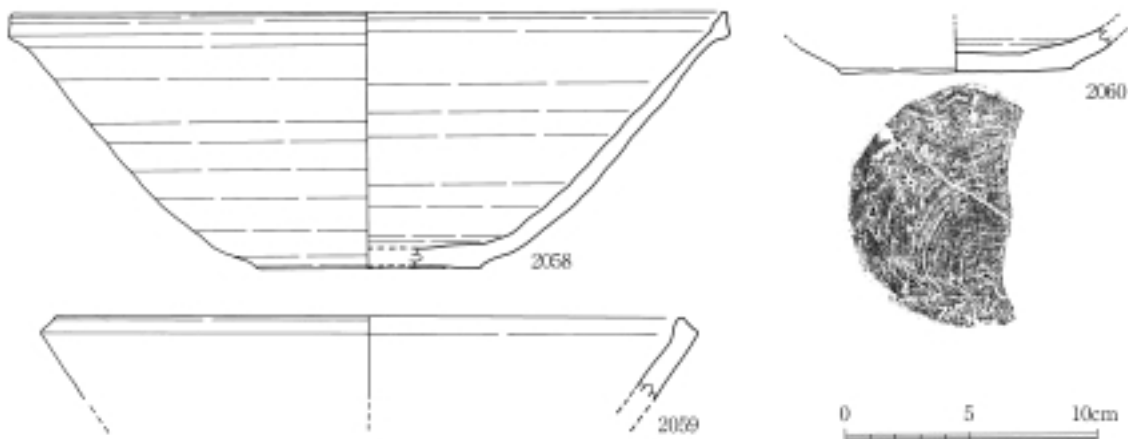


Fig.21 B区第Ⅶ層出土遺物実測図(東播系須恵器)

2. B区

土師質土器 (Fig.22-2061~2095)

2061~2090は杯である。2061は約1/2が残存するが、口縁部は欠損し、底径6.5cmを測る。体部は平らな底部から内湾し、口縁部はやや外反するものとみられる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形であり、内外面とも回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。2062は約1/3が残存し、口径14.0cm、器高4.1cm、底径8.3cmを測る。口縁部は平らな底部から外上方に真直ぐ上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形であり、内外面ともほとんど未調整である。底部の切り離しは回転糸切りである。2063~2065は、口縁部がほぼ平らな底部から外上方に真直ぐ上がるもので、成形はロクロ水挽と考えられる。内外面はやや摩耗するが、ロクロ目が顕著に残る。2063は約1/4が残存し、口径15.8cmを測る。2064は約1/5が残存し、口径13.4cm、器高3.8cm、底径6.6cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。2065は約1/6が残存し、口径13.7cm、器高3.6cm、底径7.8cmを測る。2066は底部から口縁部にかけての破片で、口径11.6cm、器高3.7cm、底径6.1cmを測る。口縁部は平らな底部からやや内湾して上がる。外面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。2067・2068は外上方に真直ぐ上がる口縁部の破片で、2067は口径13.0cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。2068は口径14.0cmを測り、内外面とも回転ナデ調整を施す。2069はやや外反する口縁部の破片で、口径13.6cmを測る。内外面とも回転ナデ調整を施す。2070は内湾しつつ上がる口縁部の破片で、口径12.4cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。2071~2090は杯底部である。2071は底部のみ完存し、底径6.0cmを測る。成形はロクロ水挽と考えられ、内外面に回転ナデ調整を施す。2072も底部のみ完存し、底径4.5cmを測る。厚みのある高台風の底部で、摩耗が著しく調整は不明である。2073も底部のみほぼ完存する。底径7.1cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形であるが、調整は摩耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。2074は底部の約2/3が残存し、底径6.5cmを測る。内底面にはロクロ目が残るが、調整は不明である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。2075は底部の約1/2が残存し、底径7.0cmを測る。成形はロクロ水挽と考えられ、内底面にはロクロ目が顕著に残るが、調整は摩耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。2076は底部の約1/4が残存し、底径5.4cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形であり、調整は摩耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。2077も底部の約1/4が残存し、底径5.9cmを測る。体部には回転ナデ調整を施し、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。2078~2081はほぼ平らな底部とやや内湾する体部を有し、内底面にはロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転糸切りで、底径は6.0~7.8cmを測る。2084~2086も底部回転糸切りであり、底径は7.0~8.1cmを測る。2087・2088は内底面にロクロ目を残す。底径は2087が5.8cm、2088が6.1cmである。2089は底径7.6cmを測り、成形は粘土紐巻き上げロクロ成形と考えられる。底部は回転糸切りである。2090は底径7.0cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。

2091~2095は小皿で、底部の切り離しはすべて回転糸切りである。2091はほぼ完形であり、口径8.4cm、器高1.6cm、底径5.2cmを測る。調整は、器面の摩耗が著しく不明である。2092・2093はともに約1/2が残存し、内底面にはロクロ目が残る。2092は口径7.2cm、器高1.7cm、底径4.3cmを測り、2093は口径8.2cm、器高1.2cm、底径6.6cmを測る。2094は底部が完存するが、口縁部は一部欠損する。口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.3cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ上がる。2095は口縁部の破片で

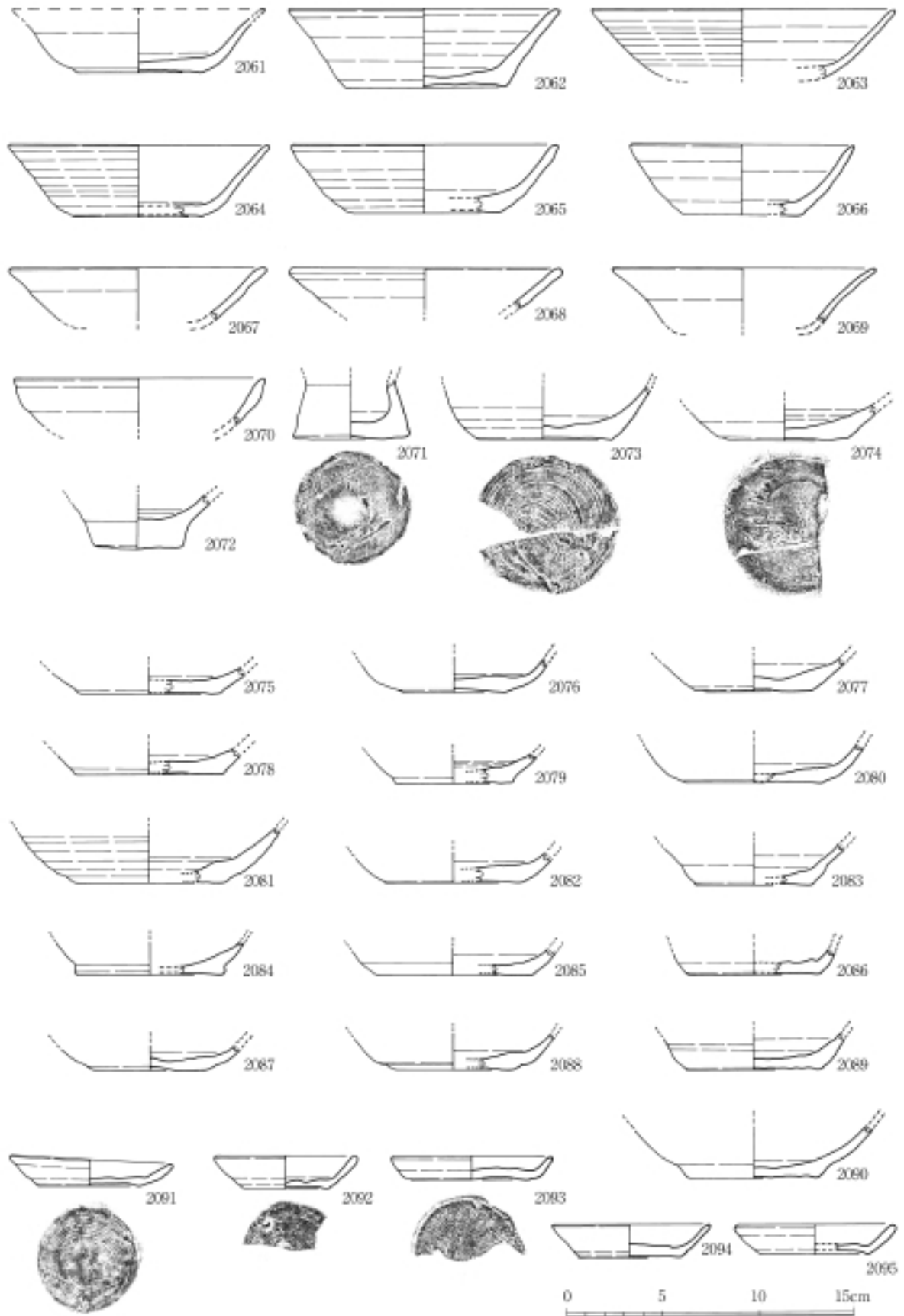


Fig.22 B区第Ⅻ層出土遺物実測図(土師質土器)

2. B区

ある。口径8.0cm, 器高1.6cm, 底径5.6cmを測る。

瓦質土器 (Fig.23-2096・2097)

ともに羽釜である。2096は口縁部の破片で, 口径は21.9cmを測る。口縁部はやや内湾し, ヨコナデ調整を施す。端部は面をなし, 約0.9cmの水平な鏝が付く。2097は脚基部の破片で残存長2.6cmを測る。

白磁 (Fig.23-2098~2104)

2098~2101は碗の口縁部の破片で, 口縁端部を少し外に摘み出す。2098は口径17.3cmを測り, 全体に灰オリーブ釉を約0.2mmの厚さに施す。2099は口径15.6cmを測り, 透明釉を薄く施す。2100も透明釉を薄く施す。2101は底部の約1/3が残存し, 底径7.0cmを測る。高台は平高台に近く, 見込には薄く灰オリーブ釉を施す。外面は露胎である。

2102は皿の口縁部破片で, 所謂口禿の皿である。口縁端部はやや外反する。2103・2104は皿の底

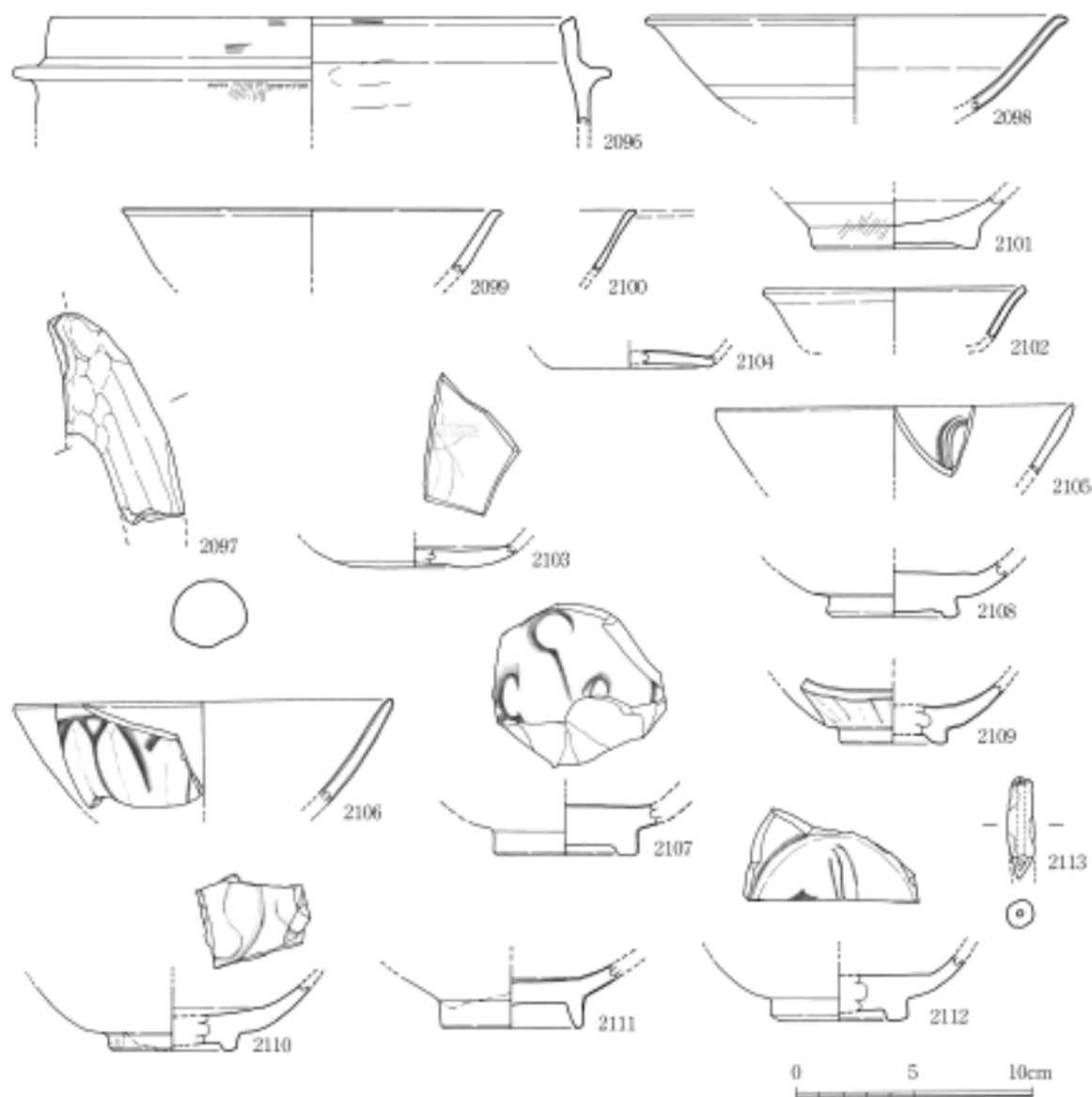


Fig.23 B区第XII層出土遺物実測図(瓦質土器・白磁・青磁ほか)

部破片で、ともに約1/2が残存し、灰オリーブ色の釉を施す。2103は底径4.0cmを測り、底部外面は露胎である。2104は底径6.6cmを測る。

青磁 (Fig.23-2105~2112)

すべて碗であり、2105は同安窯系と考えられる口縁部破片で、口径15.0cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ延び、器面にはオリーブ黄色釉を薄く施す。2106~2110は龍泉窯系のものと考えられる。2106は、口縁部が緩やかに内湾し、口径16.0cmを測る。外面には鎬蓮弁文を施し、全体にオリーブ灰色釉を厚く施す。2107~2112は底部で、2107・2108は底部のみ完存するものであり、畳付から高台内にかけては露胎である。2107は底径5.6cmを測り、見込にはキノコ状の文様を施す。内外面には緑灰色釉を薄く施す。2108は底径5.6cmを測り、灰オリーブ釉を施す。2109・2110は底部破片であり、これら2点も高台内から畳付にかけては露胎である。2109は外面に鎬蓮弁文が残り、底径4.3cmを測る。オリーブ灰色釉をやや厚めに施し、全体に貫入がみられる。2110は底径5.3cmを測る。2111は底部のみ完存し、底径5.6cmを測る。1.0cmを越える高い高台を有す。内外面には灰オリーブ色釉を施すが高台のみ露胎である。2112は底部の約1/2が残存し、底径5.9cmを測る。畳付の一部を除き、全面に灰オリーブ釉を施す。全体的に貫入がみられる。

土製品 (Fig.23-2113)

2113は円筒形の管状土錘である。約2/3が残存し、残存長4.3cm、全幅1.1cm、孔径0.3cmを測る。

第XIII層出土遺物

瓦器 (Fig.24-2114・2115)

2114は碗の口縁部の破片でやや内湾する。口径13.8cmを測り、体部外面には指頭圧痕が残る。2115も碗の口縁部破片で、器壁が厚い。外面には指頭圧痕が残り、内面には幾重にもヘラ磨きを施す。

土師質土器 (Fig.24-2116・2117)

杯底部の破片である。2116は底径6.7cmを測る。平らな底部から体部は緩やかに屈曲し、口縁部は外上方に真直ぐ上がるものと考えられる。2117は底径8.0cmを測り、体部は内湾して上がる。ともに摩耗が著しく調整は不明であり、底部の切り離しは回転糸切りである。

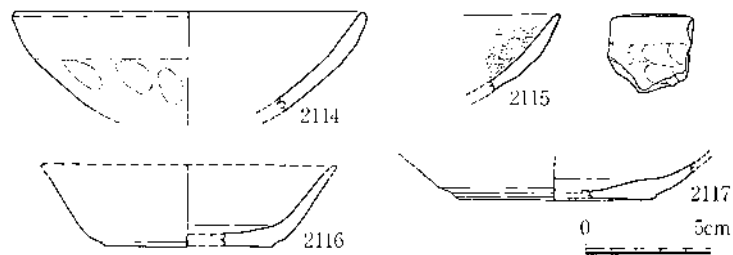


Fig.24 B区第XIII層出土遺物実測図(瓦器・土師質土器)

(3) 遺構と遺物

中世の掘立柱建物跡を中心に、堀・柵列跡や溝跡など集落を構成すると考えられる遺構群を検出した。また若干の近世以降の土坑、弥生時代後期の竪穴状遺構なども検出した。

① 弥生時代

竪穴状遺構2基、土坑1基、ピット1個、土器集中遺構1基を検出した。

2. B区

i 竪穴状遺構

ST-201 (Fig.25)

調査区中央部で検出した竪穴状遺構である。平面形は隅丸方形であり、長辺4.38m以上、短辺2.76mを測る。長軸方向はN-22°-Eであり、残存する壁高は10cmであった。床面の標高は8.080~8.110mとほぼ平坦であり、SK-201を始め、中世、近世の土坑及びピットに切られていた。本遺構に付属する遺構は皆無である。埋土は灰褐色砂質シルトであり、出土遺物は弥生土器片約80点で、そのうち2点(2118・2119)が図示できた。

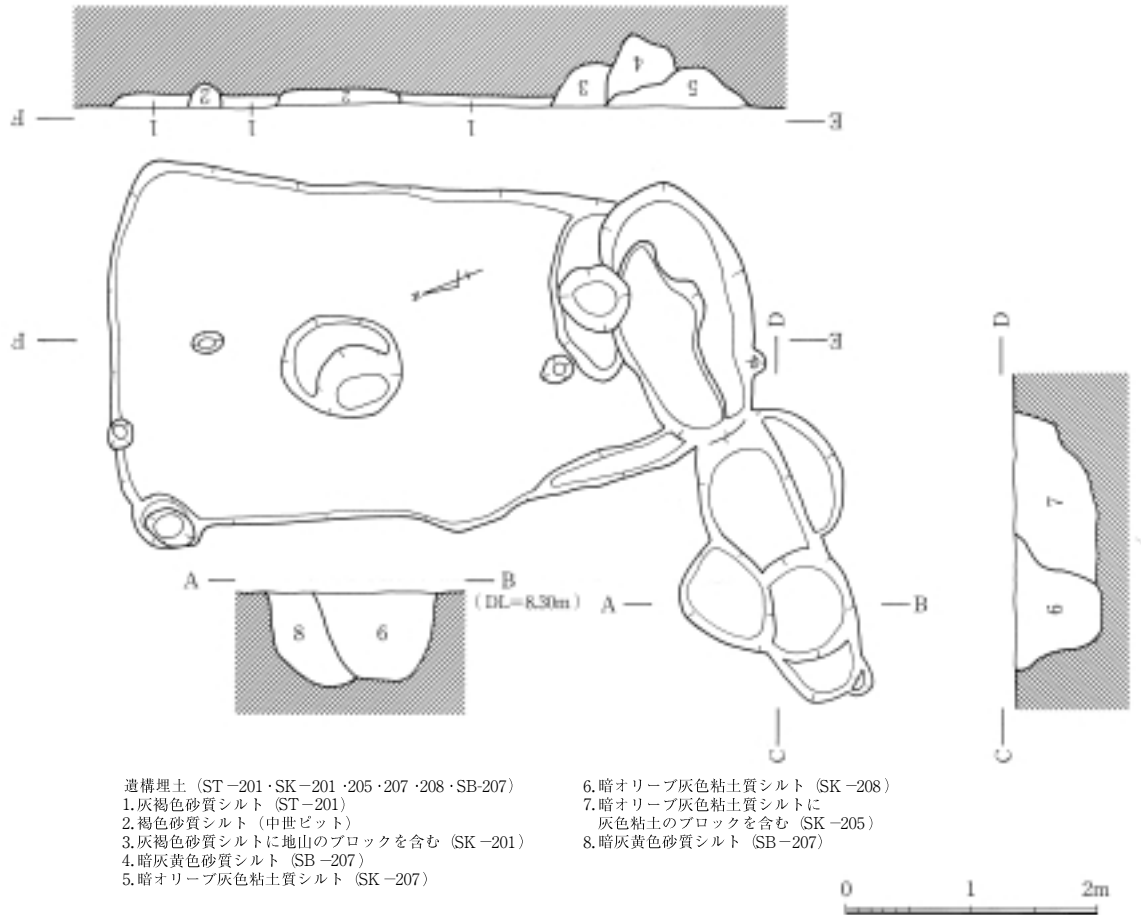


Fig.25 ST-201

出土遺物

弥生土器 (Fig.26-2118・2119)

ともに鉢で、2118はほぼ完存し、口径18.6cm、器高10.1cmを測る (A-III-2類)。体部は丸底の底部から内湾して上がり、口縁部は強く外傾する。外面には右下がり螺旋状のタタキ目が残る。内面には板状工具によってナデ調整を施す。2119は約2/3が残存し、口径11.3cm、器高6.2cm、底径3.3cmを測る (C-III-1類)。体部は平

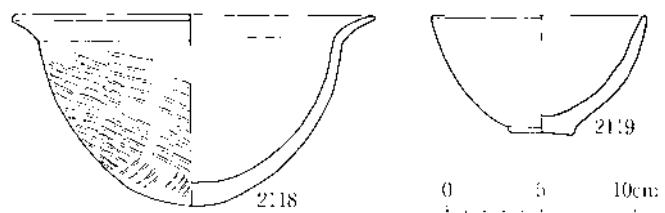


Fig.26 ST-201出土遺物実測図

底の底部から内湾して上がり、口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がる。内外面とも底部から体部にかけてはナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施す。

ST-202 (Fig.27)

調査区南西部で検出した竪穴状遺構である。平面形は隅丸方形であり、長辺4.18 m、短辺2.29 m以上を測る。長軸方向はN-86°-Wであり、残存する壁高は33 cmであった。床面の標高は7.870~7.900 mとほぼ平坦であった。遺構の南側半分は後世の攪乱を受けており、また中央部は中世のピットに切られてた。本遺構に付属する遺構は皆無で

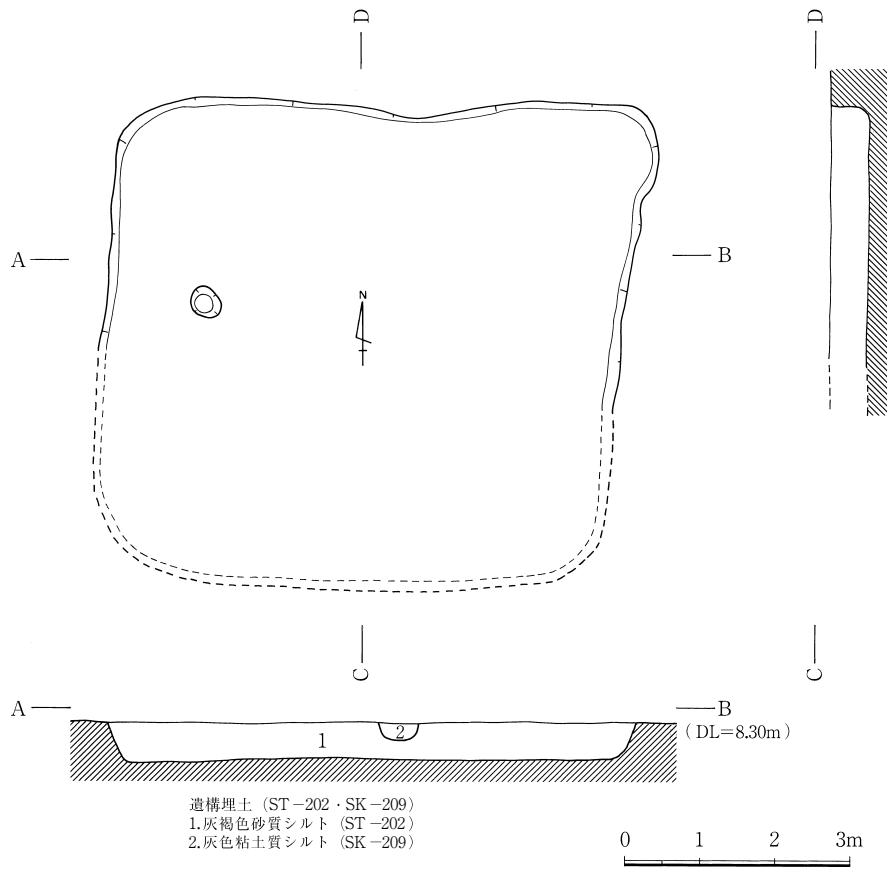


Fig.27 ST-202

あり、埋土は灰褐色砂質シルトである。出土遺物は弥生土器片約1,000点で、そのうち26点 (2120~2144) が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.28-2120~2144)

2120は壺D類の口縁部で約1/4が残存する。口径は14.4 cmを測る。摩耗が著しく、外面の一部にハケ調整を施す以外調整は不明である。2121は壺の底部の破片で底径6.4 cmを測る。体部は平底の底部から外上方に大きく開く。体部外面にはタテ方向のハケ目、底部にはタタキ目が残る、内面にはナデ調整を施す。器壁は比較的厚く1.1~1.5 cmを測る。

2122~2136は甕である。2122は口縁部の約1/2が欠損する (A-1類)。口径15.9 cm、器高25.4 cm、胴径17.8 cm、底径3.9 cmを測り、くの字状に外傾する口縁部の端部は面をなす。外面は口縁部から胴部中位まで右上がり螺旋状のタタキ目残り、胴部中位以下は細かいハケ目が残る。内面にはナデ調整とハケ調整を施す。2123はA類に属し、底部のみ欠損する。口径14.4 cm、胴径18.0 cmを測る。外面は全面にタタキを施した後、口縁部にはナデ調整、上胴部以下にはタテ方向の細かいハケ調整を施す。内面にもハケ調整を施す。胴部外面の一部に煤の付着がみられる。2124は口縁部から胴

2. B区

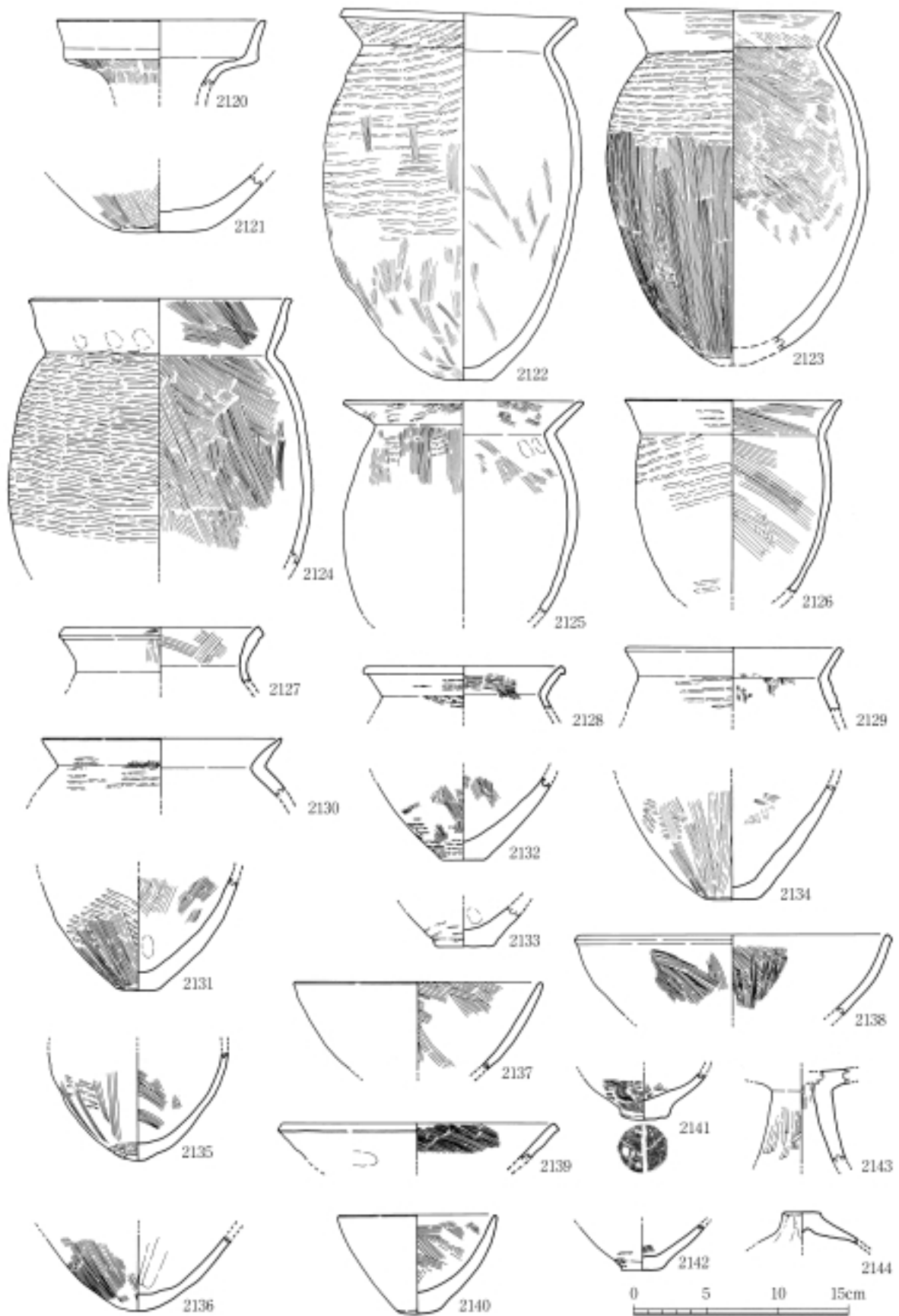


Fig.28 ST-202出土遺物実測図1

部にかけての破片であり、口径17.4cm、胴径21.0cmを測る（A類）。内湾する胴部から口縁部は外上方に真直ぐ上がり、端部は面をなす。口縁部外面にはナデ調整、胴部外面にはタタキ、内面にはハケ調整を施す。2125は口縁部から胴部にかけての約1/2が残存する。口径16.1cm、胴径16.1cmを測る（B類）。外面はタタキを施した後胴部上位にはハケ調整を施す。内面にはハケ目と指頭圧痕が残る。全体的に摩耗しており、調整は不明瞭である。2126も口縁部から胴部にかけての破片であり、口径15.0cm、胴径13.5cmと最大径を口縁部に有する。口縁部はやや内湾する胴部から外上方にほぼ真直ぐ上がる。外面にはタタキ目が残るが、一部剥離しており不明瞭である。内面には粗いハケ目が残る。外面の一部に煤の付着がみられる。2127～2130は外反または、外傾する口縁部の破片である。外面にタタキ目残り、内面にハケ調整を施すものが多い。口径は順に16.6cm、14.6cm、13.6cm、13.3cmを測る。2131～2134は平底の底部である。いずれも小さな平底で、胴部は緩やかに内湾し、外面はタタキの後、ハケ調整を施す。内面はハケ調整を施すものとナデ調整を施すものがある。底径は順に3.0cm、3.0cm、3.8cm、4.0cmを測る。2135・2136は尖底気味の底部である。2135は内湾する胴部を有し、外面にはタタキの後にハケ調整、内面にはハケ調整を施す。2136は外上方に開く胴部であり、外面にはタタキの後にハケ調整を、内面にはナデ調整を施す。

2137～2139はA類の鉢の口縁部である。どれも底部は欠損する。2137は約1/6が残存し口径17.0cmを測る。内面にはハケ調整を施す。外面はナデ調整を施すものと考えられるが不明瞭である。2138は口縁部の破片で、口径21.2cmを測る。外面にはハケ調整、内面はハケ調整の後にヘラ磨きを施す。2139は口縁部の破片で、口径18.7cmを測る。内面には丁寧なハケ調整を施す。外面は摩耗しており調整は不明である。2140はC-IV-1類の鉢である。ほぼ完形で、口径10.8cm、器高6.9cm、底径3.0cmを測る。内面にはハケ調整を施す。2141・2142は鉢の底部破片で、底径3.4cm、2.9cmを測る。やや突起する底部であり、内面の一部にハケ目、外面の一部にタタキ目が残る。

2143は高杯の杯底部から脚台部の破片である。脚台部の内面にはヘラ削り、外面には丁寧なヘラ磨きを施す。杯底部は摩耗しており、調整は不明である。

2144は蓋である。天井部にはナデ調整を施す。

石製品 (Fig.29-2145)

2145は砥石であり約1/2が残存する。全長14.1cm、全厚2.6cmを測る。石材は砂岩と考えられる。

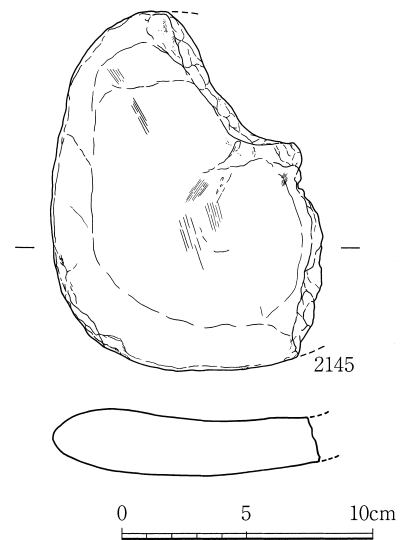


Fig.29 ST-202出土遺物実測図2

ii 土坑

SK-201

調査区中央部で検出した楕円形を呈す土坑である。長径1.39m、短径42cm以上、深さは35cmを測る。長軸方向はN-72°-Wで、断面形はU字形を呈す。ST-201の南側を切っており、SK-207

2. B区

及び中世のピットに切られている。埋土は灰褐色砂質シルトに灰黄褐色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物は弥生土器片約50点があり、4点(2146~2150)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.30-2146~2150)

すべて甕である。2146はほぼ完形であり、口径15.0cm、器高26.2cm、胴径19.0cm、底径2.6cmを測る(A-1類)。底部は小さな平底で、口縁端部は面をなす。外面は口縁部から頸部にかけてハケ目が残りに、胴部から底部にはタタキ目とその上に施したハケ目が残る。内面にもハケ目が残るが、胴部下半は不明瞭である。外面は部分的に器面が剥離し、煤の付着もみられる。2147は約1/4が残存し、口径14.4cm、胴径16.0cmを測る(A類)。形態的には2146と同様であり、調整は外面にタタキ、内面に指ナデ調整を施すものの、摩耗が著しく不明瞭である。2148は胴部の約2/3が残存し、胴径13.3cmを測る。胴部はほぼ球形を呈す。口縁部は外上方に真直ぐ上がるものと考えられる。外面にはタテ方向のハケ目が明瞭に残りに、内面には部分的にハケ目が残る。2149・2150は胴部から底部にかけての破片で約1/2が残存する。胴部は小さな平底の底部からやや内湾して上がり、外面にはタタキの上にタテ方向のハケ調整を施す。2149は底径2.3cmを測り、内面にはタテ方向のハケ調整を施す。2150は底径2.7cmを測る。摩耗が著しいが、内面に指頭圧痕が残る。

iii ピット

P-201

調査区西部の斜面上で検出した円形のピットで、径約80cm、深さ10cmを測る。埋土は暗茶褐色粘土質シルトに灰色粘土のブロックと炭化物を含むものであった。出土遺物は図示した弥生土器1点(2151)であった。

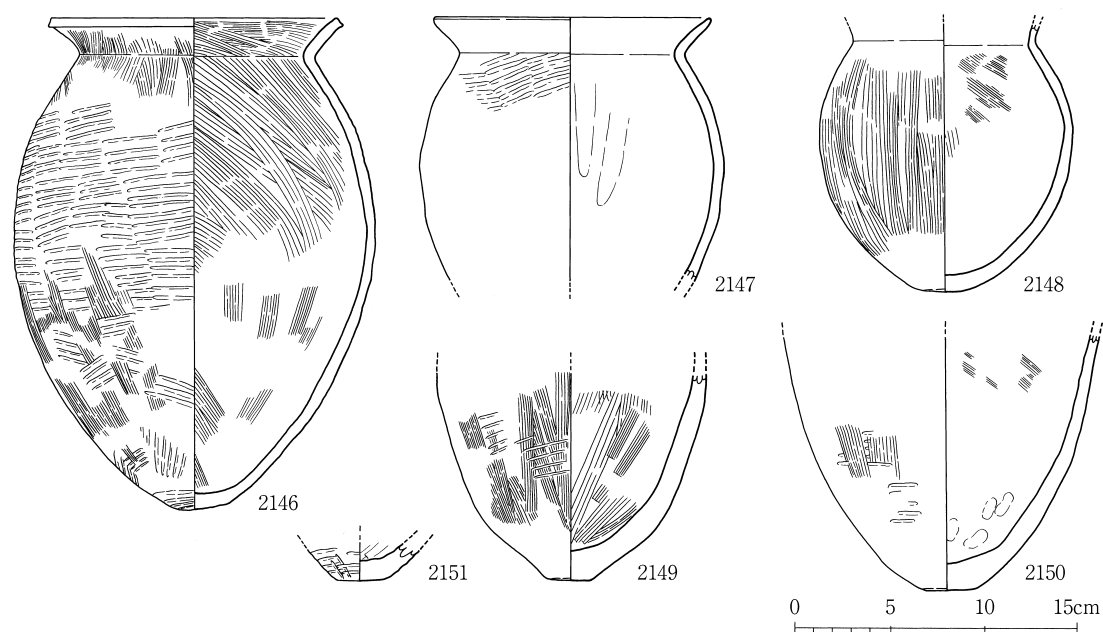


Fig.30 SK-201, P-201出土遺物実測図

出土遺物

弥生土器 (Fig.30-2151)

2151は甕の底部の破片で、底径2.5cmを測る。外面には明瞭なタタキ目が残る。

iv 土器集中遺構

SC-201

調査区南部で検出した弥生土器の集中箇所、東西約2.5m、南北約0.8mの範囲で集中していた。特に掘方は認められず、微高地から後背湿地へ下る斜面上に土器を投棄したものと考えられる。出土遺物は弥生土器片約2,600点、そのうち99点(2152~2250)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.31~38-2152~2250)

2152はA類の壺で、ほぼ完形である。口径19.6cm、器高34.2cm、胴径27.6cm、底径5.1cmを測る。胴部は平底の底部から大きく膨らみ口縁部に至る。外面はタタキの後にタテ方向のハケ調整を施し、煤の付着も確認できる。器面の一部は剥落しており、摩耗も著しい。内面は下半に板ナデ調整、中位から上には指ナデ調整を施す。SC-201の遺物で壺A類はこの1点だけである。2153はB-1類の壺で、外反する口縁部の破片であり、口径16.0cmを測る。内面にはハケ目が残る。2154・2155はB-2類の壺である。2154は約1/2が残存し、口径13.0cm、器高30.8cm、胴径27.0cm、底径7.0

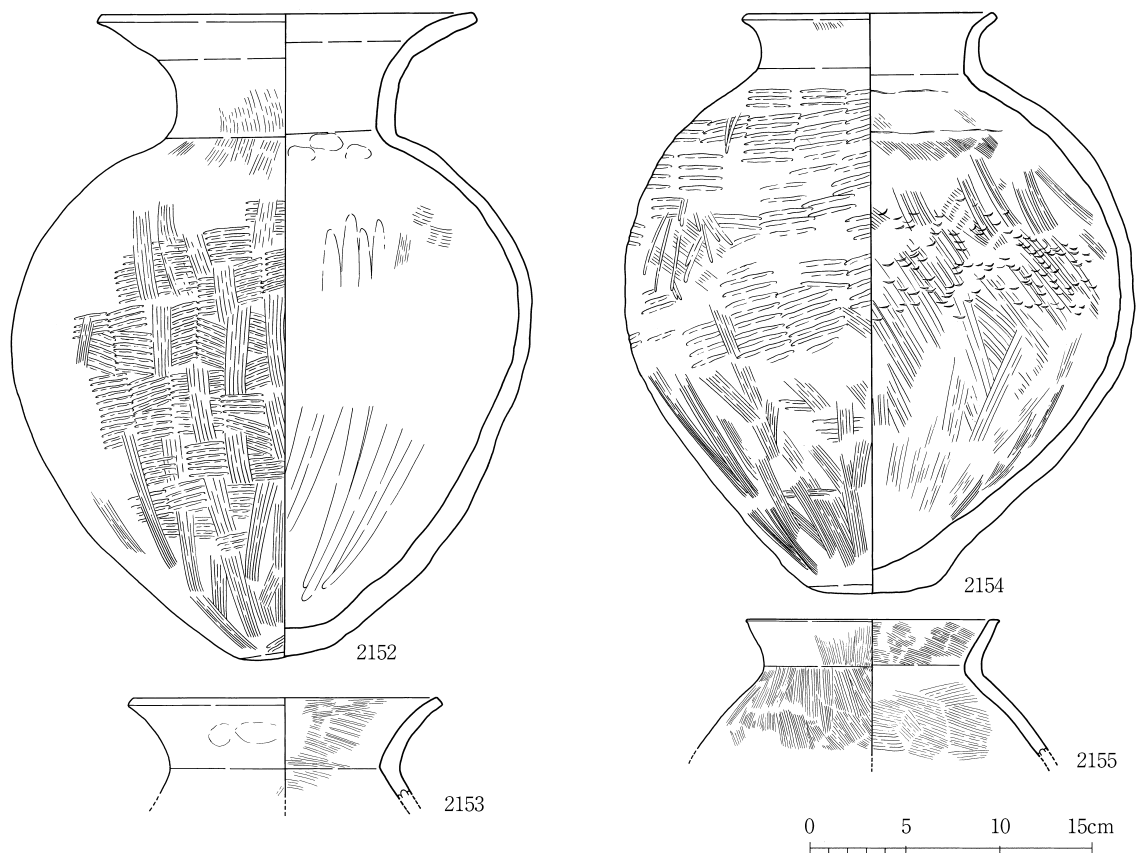


Fig.31 SC-201出土遺物実測図1

2. B区

cmを測る。平底の底部から胴部は大きく膨らみ、口縁部に至る。外面はタタキの後に胴部下半を中心にタテ方向のハケ調整と部分的にヘラ磨きを施す。内面は中位に無数の爪痕が残り、その上にハケ調整を施す。下半には板ナデ調整を施す。2155は口縁部の約1/8が残存し、口径13.2cmを測る。口縁部から胴部外面には丁寧なハケ調整、胴部内面には粗いハケ調整を施す。2156～2160は壺C類に属するもので、2156は約2/3が残存し、口径12.6cm、器高30.0cm、胴径20.0cmを測る。胴部は丸底の底部から内湾気味に上がり、比較的高く長胴となり、口縁部に至る。外面は胴部にタタキ、その上に一部ハケ調整を施す。煤の付着も確認できる。頸部から上にはハケ目のみ残る。内面はほぼ全面にハケ調整を施す。2157は口縁部から上胴部の破片で、口径12.7cmを測り、端部は面をなす。胴部にタタキを施したのち、口縁部から上胴部にかけて、緻密なハケ調整を施す。内面は口縁部に粗いハケ調整を施し、胴部には指頭圧痕が残る。2158は口縁部の約1/3が残存し、口径11.8cmを測る。口縁端部にヨコナデ調整を施し面をなす。内面にはハケ目と指頭圧痕が残る。2159は口縁部の1/2が残存し、口径12.3cmを測る。摩耗が著しく調整は不明であるが、内面にはハケ目と指頭圧痕が残る。2160は比較的小型のC類の壺で、4/5ほど残存するが、口縁端部はほとんど欠損する。胴径25.5cmを測る。ほぼ丸底の底部から、胴部は球形を呈し、口縁部に至る。口縁端部はやや外傾するものと考えられる。内外面ともハケ目が残るが、外面は摩耗が著しく調整は不明瞭である。2161はD類の壺の口縁部で、一旦外側に大きく開いたのち、稜をもって内傾する。口縁部の約1/3が残存し、口径18.1cmを測る。外面には櫛描波状文を施す。頸部外面にはハケ調整の上に一部ヘラ磨きを施すが、摩耗が著しく不明瞭である。2162はラッパ状に開いた後に下方に下がる口縁部の破片で、口径13.2cmを測る。ハケ状工具による押圧痕が残る。2163は外上方へ拡張する口縁部の破片である。外面にはヘラ状工具で山形に刻みを入れる。2164は胴部から底部へかけて約1/2が残存し、胴径25.5cmを測る。底部はボタン状に突起し、胴部は球形をなす。外面はタタキの後にハケ調整を施す。内面はハケ調整のみである。

2165～2226は甕である。くの字状をなす口縁部と倒卵形の胴部を有するものが圧倒的に多く、外面はほぼ例外なくタタキの後にハケ調整を施す。内面はハケ調整と指ナデ調整が主である。2165～2167はA-1類の甕である。2165はほぼ完形であり、口径16.7cm、器高28.5cm、胴径21.4cm、底径4.5cmを測る。外面の一部に煤の付着がみられる。2166も完形であり、口径15.6cm、器高23.7cm、胴径17.9cm、底径4.5cmを測る。外面の一部に煤の付着がみられる。内面はハケ調整のみである。2167は約1/2が残存し、口径16.4cm、器高26.7cm、胴径20.8cm、底径4.7cmを測る。口縁部は大きく外傾し、外面には煤の付着がみられる。内面はほぼ全面にハケ調整、頸部には指ナデ調整を施す。底部には指頭圧痕が残る。2168・2169はA-2類の甕である。2168は完形であり、口径11.4cm、器高18.0cm、胴径13.9cm、底径3.2cmを測る。口縁部はやや外傾し、底部は平底である。外面は摩耗が著しく調整は不明瞭である。2169は3/4ほど残存し、口径11.4cm、器高17.8cm、胴径13.9cm、底径4.2cmを測る。内面のハケの単位が上胴部と下胴部で異なる。2170～2180もA類の甕で、底部の欠損するものである。2170は約2/3が残存し、口径16.1cm、胴径20.9cmを測る。外面はハケ調整のみが確認できた。内面にはハケ調整、下胴部には指ナデ調整を施す。2171は約1/2が残存し、口径15.9cm、胴径21.0cmを測る。2172も約1/2が残存し、口径16.8cm、胴径19.8cmを測る。2点とも

内面にはハケ調整の後でヘラナデ調整と指ナデ調整を併用する。2173も約1/2が残存し、口径14.4cm、胴径17.5cmを測る。内面はハケ調整のみ確認できた。2174は約1/3が残存し、口径13.9cm、胴径17.5cmを測る。2175は約1/3が残存し、口径13.5cm、胴径15.6cmを測る。調整はやや不明瞭である。2176は約1/4が残存し、口径16.4cm、胴径19.5cmを測る。2177は口縁部の1/4ほど残存し、口径13.8cm、胴径17.5cmを測る。2点とも大きく膨らむ胴部を有する。2178は口縁部の約1/2が残存し、口径15.9cm、胴径19.9cmを測る。外面に煤の付着がみられる。2179も口縁部の約1/3が残存し、口径15.0cm、胴径17.4cmを測る。2180も口縁部から胴部にかけての破片であり、口径17.3cm、胴径22.9cmを測る。2181~2185は口縁部の破片であり、胴径は計測不能であるが、口径を大きく上回ると考えられるものでありA類に含む。口径は順に18.0cm、15.4cm、15.1cm、15.7cm、13.9cmを測る。2186~2189はB類の甕である。口縁部の形態や内外面の調整に関してはA類と変りはない。2186はB-2類の甕で、約3/4が残存し、口径16.9cm、器高22.4cm、胴径17.4cmを測る。尖底気味の底部を有し、外面はタタキの後にハケ調整、内面はハケ調整を施し、底部付近に指頭圧痕が残る。2187は約1/2が残存し、口径は16.8cm、胴径18.0cmを測る。上胴部と下胴部で内外面のハケ目の単位に違いがみられる。外面には煤が付着する。2188は、口縁部から胴部にかけての破片で約1/4が残存

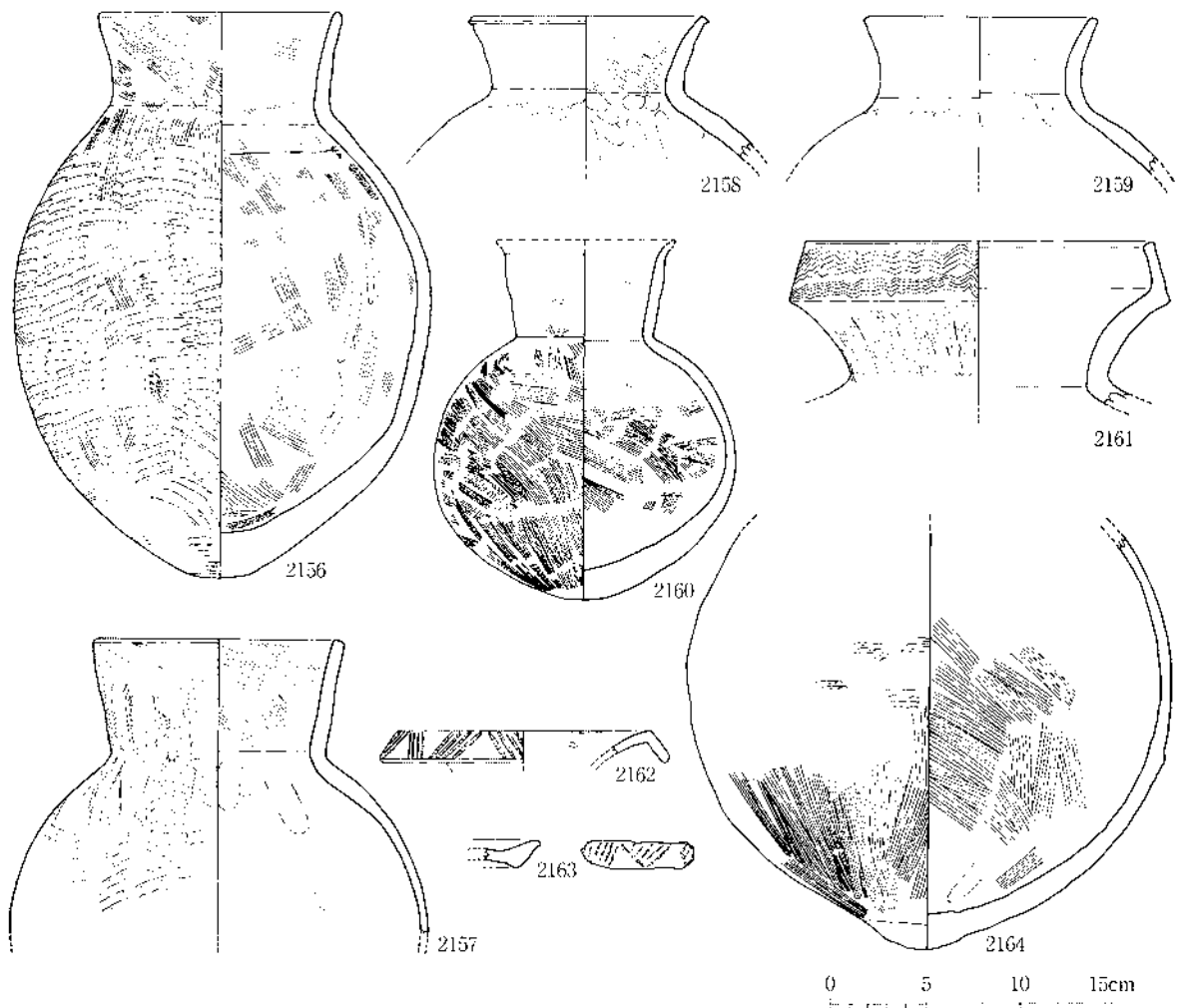


Fig.32 SC-201 出土遺物実測図

2. B区

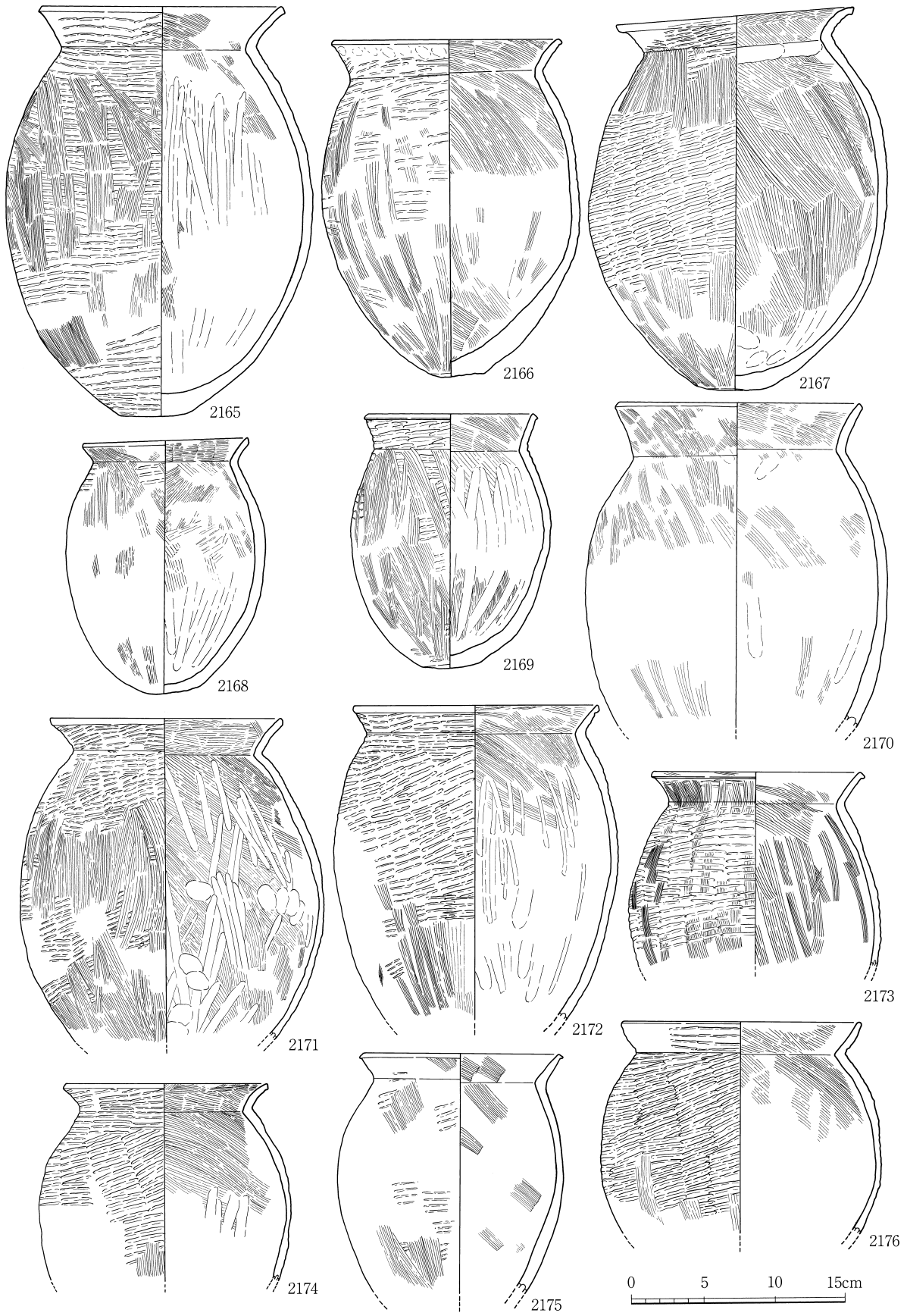


Fig.33 SC-201出土遺物実測図3

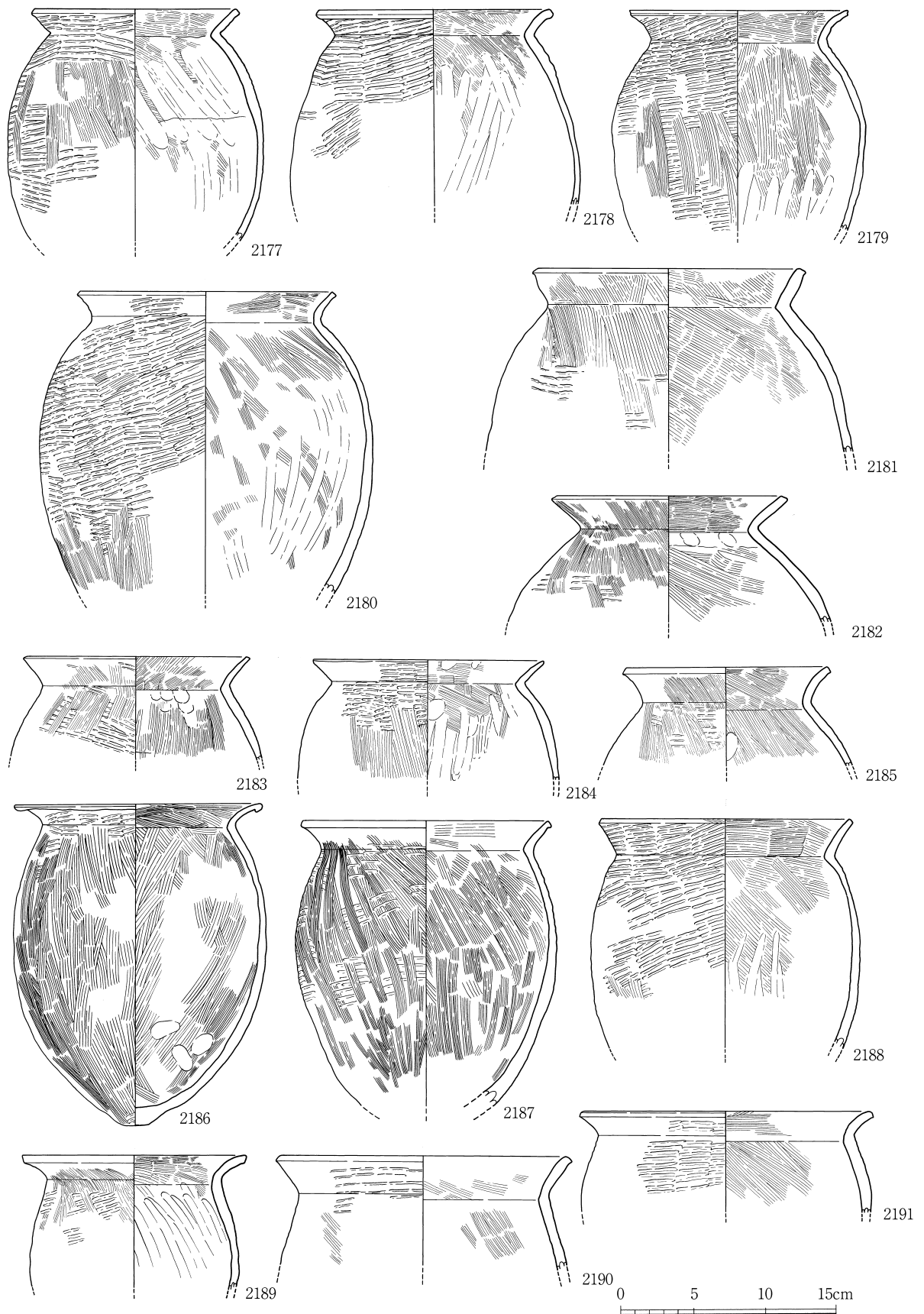


Fig.34 SC-201 出土遺物実測図4

2. B区

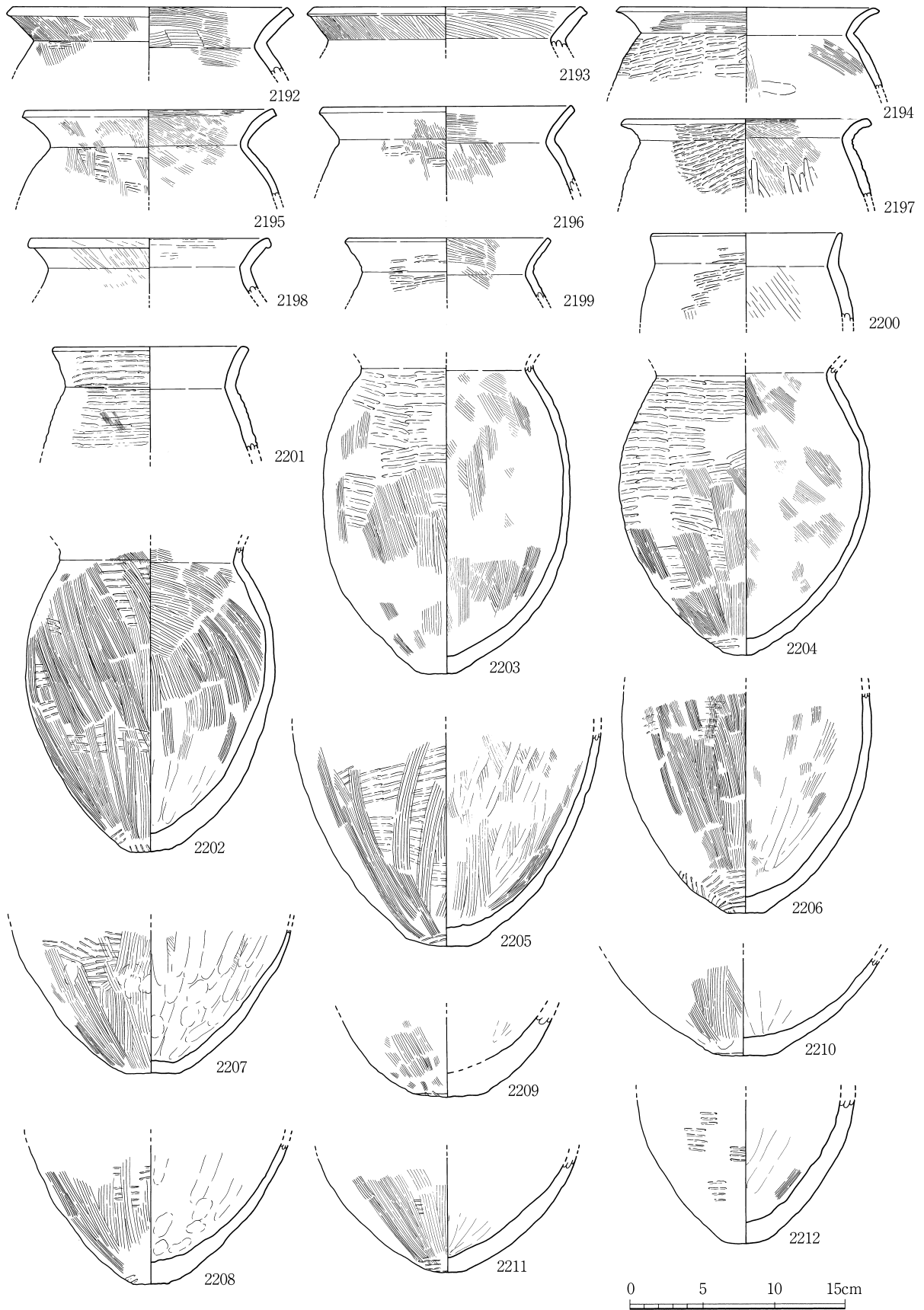


Fig.35 SC-201出土遺物実測図5

し、口径17.0cm、器高18.4cmを測る。外面のハケ目は下胴部以下に施される。2189は口縁部から胴部にかけての破片であり口径15.3cm、器高14.4cmを測る。口径が胴径を若干上回る。内面には指ナデ調整の跡が顕著に残る。2190～2201は口縁部の破片で、口径は順に19.6cm、19.5cm、19.0cm、18.3cm、17.5cm、17.2cm、17.2cm、16.8cm、16.4cm、13.7cm、13.0cm、12.9cmを測る。2202～2204は口縁部が欠損するものである。2202は約2/3が残存し、胴径17.2cm、底径3.7cmを測る。内外面には丁寧なハケ調整、底部には指ナデ調整を施す。2203・2204ともに約1/2が残存し、内面にはハケ目が残存する。2203は胴径17.2cm、底径2.8cmを測り、2204は胴径17.2cm、底径2.0cmを測る。2205～2214は平底の底部を有するものである。2207・2208は内面に明瞭な指ナデを施す。底径は順に3.2cm、2.7cm、3.8cm、2.4cm、5.0cm、4.0cm、2.0cm、1.9cm、3.0cm、5.1cmを測る。2215～2218は丸底の底部を有するものであり、2219～2221は尖底の底部を有する。2222～2226は庄内式のもので、口縁部は球形に近い胴部からくの字状に強く外反する。外面は上胴部には細かなタタキ目、中位以下にはハケ目があり、内面には丁寧なヘラ削りを施す。器壁は薄く、断面は緻密である。2222は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部の約2/3が残存し、口径17.1cm、胴径23.3cmを測る。外面には煤の付着がみられる。2223も口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部の約2/3が残存し、口径17.7cm、胴径23.6cmを測る。2224は口縁部の約2/3が残存し、口径14.4cmを測る。2225も口縁部の約1/5が残存し、口径15.0cmを測る。2226は底部から胴部にかけての破片で、底径2.4cmを測る。内面の調整は摩耗が著しく不明瞭である。

2227・2228は鉢である。2227・2228の2点は鉢A-I-1類に属する。2227は約2/3が残存し、口径17.6cm、器高5.4cm、底径5.4cmを測る。体部は丸底の底部から内湾する。外面にはタタキ目とハケ目を確認できる。2228は約1/4が残存し、口径19.4cmを測る。底部は欠損するものの器高指数は30未満と考えられる。形態的には2227と同じで、調整は内面にハケ調整が確認できる。2229・2230は鉢A-II-2類である。2229はほぼ完形で、口径23.8cm、器高8.8cmを測る大型のものである。

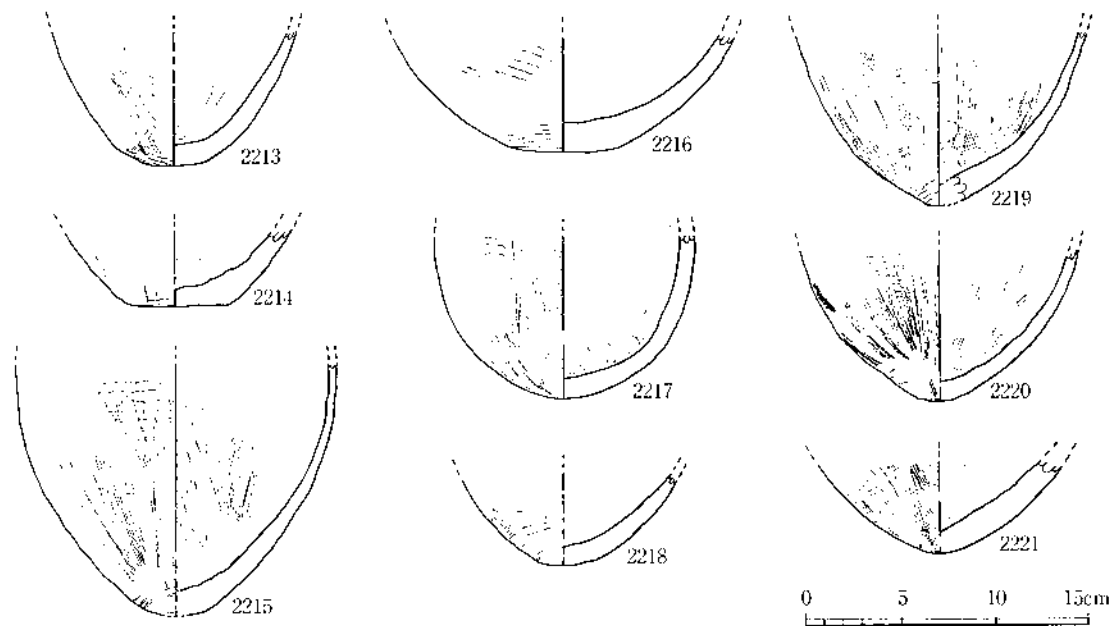


Fig.36 SC-201出土遺物実測図6

2. B区

口縁部は丸底の底部からやや内湾して上がる。外面にはタタキの後にハケ調整を施し、内面にはハケ調整とヘラ磨きを施す。2230もほぼ完形であり、口径18.4cm、器高7.8cmを測る。形態的には2229と似るが、器壁は比較的厚く、外面にタタキ目、内面にハケ目が残る。2231はA-Ⅲ-1類である。約1/2が残存し、口径16.5cm、器高8.7cm、底径3.5cmを測る。丸底に近い平底の底部を有する。外面にはヘラ磨きを施す。2232はA-Ⅲ-2類で、約1/3が残存し、口径20.5cm、器高10.3cmを測る。丸底の鉢で、内外面にハケ目残り、口縁部外面には若干のタタキ目も残る。2233・2234もA類に属する鉢である。2233は底部を欠損するが器高指数は45~50と考えられる。口径は18.6cmを測る。口縁部外面にはタタキ目、体部と内面にはハケ目が残る。2234は口径18.5cmを測る。約1/6が残存し、外面にはタタキ目、内面には細かいハケ目が残る。2235はB-Ⅱ-1類で、約2/3が残存し、口径15.7cm、器高6.3cm、底径4.0cmを測る。口縁部は平底の底部から外上方に上がり、口縁部がやや外傾する。外面にはタタキ目と指頭圧痕、内面にはハケ目が残る。2236・2237はB-Ⅱ-2類で、2236は約1/3が残存し、口径13.9cm、器高4.7cmを測る。尖底の底部を有し、外面には不明瞭ながらタタキ目、内面にはハケ目が残る。2237は約1/6が残存し、底部を欠損するが、器高指数は35前後と考えられる。口径15.7cmを測り、体部外面にはヘラ磨きがみられ、内面にはハケ目が残る。2238~2243の6点はB-Ⅲ-1類の鉢である。2238はほぼ完形であり、口径15.8cm、器高7.3cm、底径3.0cmを測る。口縁部は平底の底部から外上方にほぼ真直ぐ上がる。器壁は厚く、内外面にハケ目が残る。2239は約2/3が残存し、口径15.3cm、器高7.6cm、底径2.0cmを測る。口縁部は小さな平底の底部から内湾して上がる。内外面ともハケ調整を施す。2240は約1/2が残存し、口径14.6cm、器高7.4cm、底径1.5cmを測る。形態的には2239とほぼ同じである。2241は約3/4が残存し、口径12.0cm、器高6.0cm、底径3.0cmを測る。口縁部は小さな平底の底部からやや内湾する。焼成不良で摩耗が著しく、調整は不明である。2242はほぼ完形であり、口径12.0cm、器高6.5cm、底径3.0cmを測る。口縁部は小さな平底の底部からやや内湾する。外面にはタタキ、内面には指ナデ調整を施

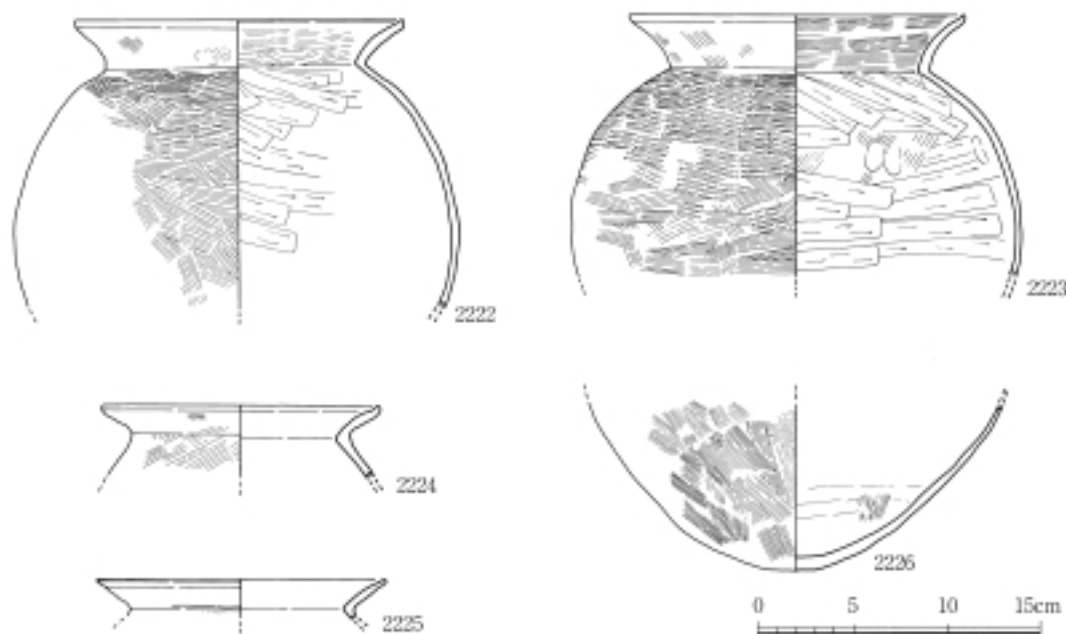


Fig.37 SC-201出土遺物実測図7

す。2243は約1/2が残存し、口径13.2cm、器高7.2cm、底径2.6cmを測る。形態は2242とほぼ同じで、外面は全面にタタキを施した後に底部付近にはハケ調整を加える。内面にはハケ調整を施す。内外面には指頭圧痕が残る。2244・2245はB-Ⅲ-2類であり、2244は完形で、口径14.0cm、器高6.3cmを測る。口縁部は丸底の底部から外上方に上がる。器面は摩耗するが、外面にタタキ目とハケ目、内面にハケ目が残る。2245は約1/2が残存し、口径12.0cm、器高5.5cmを測る。外面にはタタキ

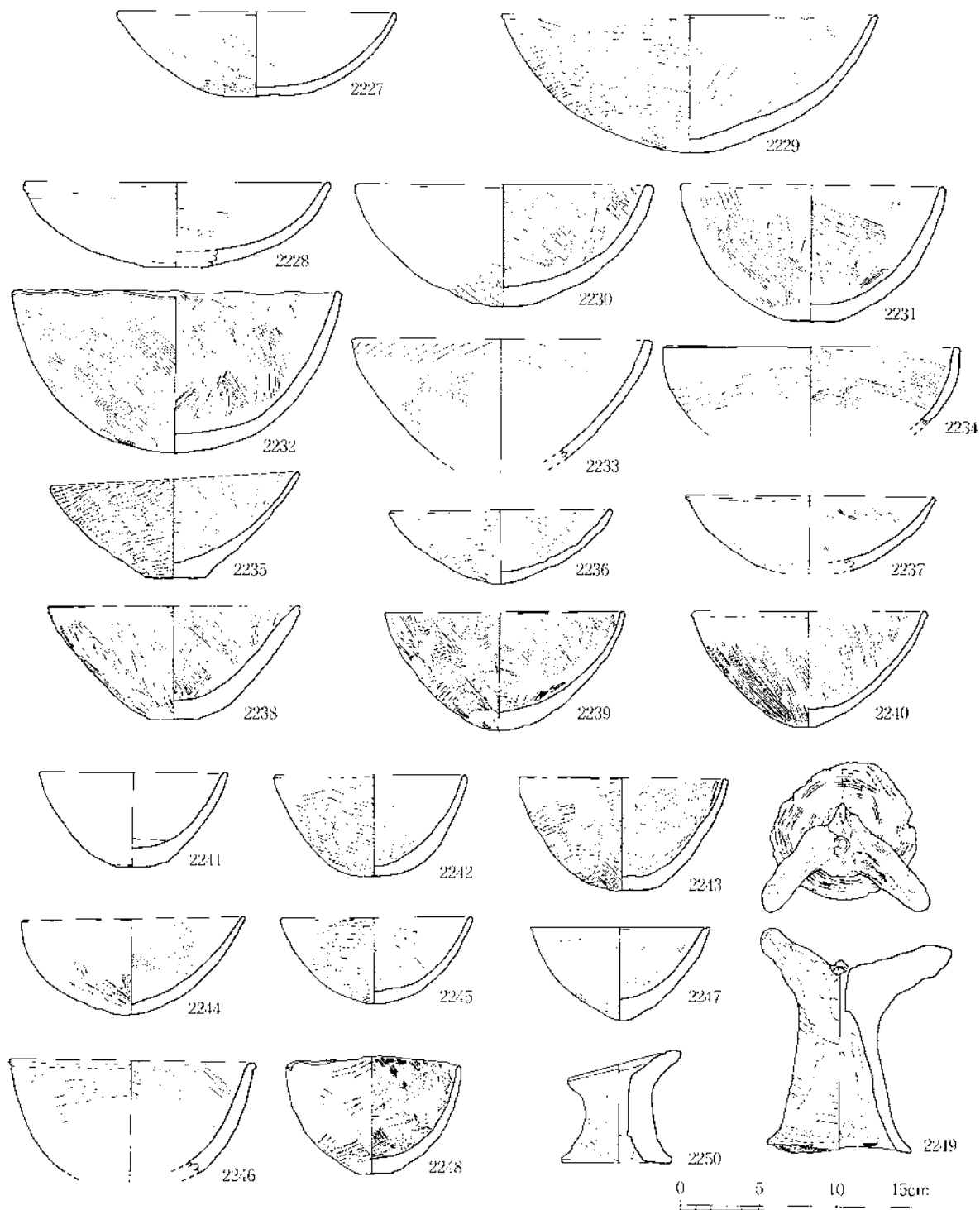


Fig.38 SC-201出土遺物実測図8

2. B区

目、内面にはハケ目が残る。2246は約2/3が残存し、底部を欠損する。器高指数は不明であるが、口径は15.6cmを測りB類に属する。外面にはタタキ目、内面には細かなハケ目が残る。2247はC-Ⅲ-2類で、約1/2が残存し、口径11.4cm、器高5.9cmを測る。口縁部は尖底の底部から外上方に上がる。外面にはタタキ目とハケ目、内面にはハケ目が残る。2248はC-Ⅳ-1類で、ほぼ完形である。口径11.0cm、器高7.5cm、底径2.1cmを測り、口縁部は小さな平底の底部から内湾して上がる。外面にはタタキ目残り、内面にはヘラ磨きを施す。

2249・2250は支脚でほぼ完存する。2249は器高14.2cm、底径7.4cmを測り、外面にはタタキ目が残る。2250は器高7.2cm、底径6.9cmを測る。外面にはナデ調整を施す。

② 中世

掘立柱建物跡8棟、堀・柵列跡7列、溝跡7条、井戸跡1基などの集落を形成すると考えられる遺構を確認した。その他にも土坑4基、ピット23個、性格不明遺構1基などを確認した。

i 掘立柱建物跡

SB-201 (Fig.39)

調査区北部で検出した梁間1間 (1.80m)、桁行2間 (2.70m) の南北棟建物で、SB-202と重なる。棟方向はN-7°-Eで、柱間寸法は梁間 (東西) が1.80m、桁行 (南北) が1.30~1.40mである。柱穴は径20~30cmを測る円形で、柱穴の埋土は暗茶褐色粘土質シルトに灰色粘土と炭化物が混入するものであった。出土遺物には土師質土器片11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

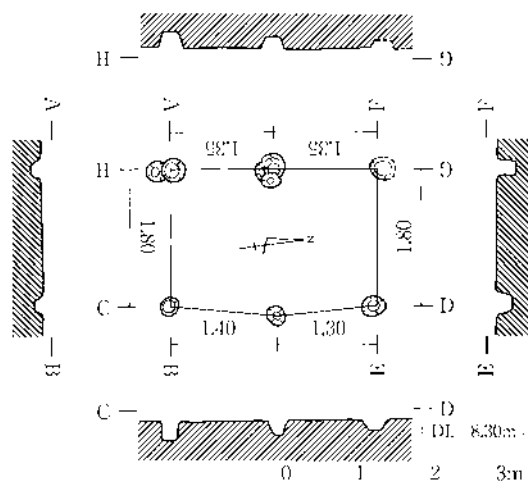


Fig.39 SB-201

SB-202 (Fig.40)

調査区北部で検出した梁間2間以上 (2.95m以上)、桁行2間以上 (3.85m以上) の東西棟建物で、SB-203の北東側に位置し、SB-201と重なっている。また、南側柱東から1間目の柱穴がSB-204の柱穴を切っている。北西部が調査区外に拡がり、棟方向はN-80°-Wで、柱間寸法は梁 (南北) が1.40~1.55m、桁行 (東西) が1.90~1.95mである。柱穴は径30~35cmを測る円形で、柱穴の埋土は灰褐色砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片2点、土師質土器片9点、瓦器片2点、瓦質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

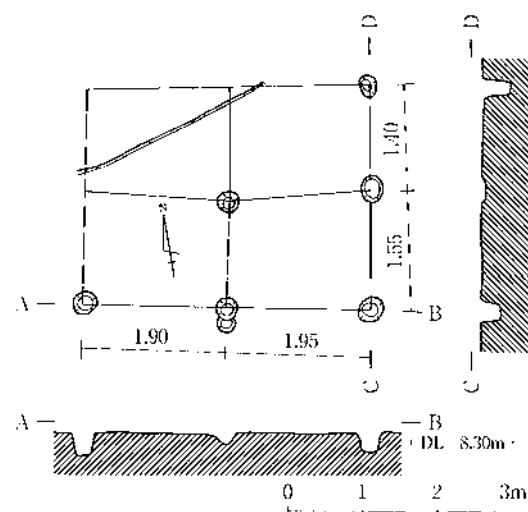


Fig.40 SB-202

SB-203 (Fig.41)

調査区北西部で検出した梁間1間以上 (1.60m以

上), 桁行1間以上 (2.40m以上) の東西棟建物で, SB-205・206, SA-203の北側に位置し, SB-204と重なる。北西部が調査区外に拡がり, 棟方向はN-84°-Wで, 柱間寸法は梁間(南北)が1.60m, 桁行(東西)が2.40mである。柱穴は径30cm前後を測る円形で, 柱穴の埋土は灰白色粘土であった。出土遺物には土師質土器片10点, 瓦器片1点, 鉄滓1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SB-204 (Fig.42)

調査区西部で検出した梁間3間 (5.60~5.70m), 桁行3間 (5.65~6.10m) の東西棟建物で, SB-203・205, SA-203と重なり, 北東隅の柱穴がSB-202の柱穴に切られていた。棟方向はN-85°-Eで, 東妻柱南から1間目と北側柱東から1間目の柱穴が確認できなかった。柱間寸法は梁間(南北)が1.60~2.20m, 桁行(東西)が1.85~2.10mであった。柱穴は径30~55cmを測る円形で, 柱穴の埋土は灰白色粘土であった。出土遺物には土師質土器片25点, 瓦器片2点, 青磁2点, 土製品1点がみられ, 西妻柱北から1間目の柱穴より出土した土師質土器1点 (2253), 南西隅の柱穴から出土した瓦器2点 (2251・2252) 及び土製品1点 (2254) が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.46-2251・2252)

2251は椀で底部の約3/4が残存し, 底径3.8cmを測る。内底面に十字状の暗文を施し, 外底面には逆台形の高台が付く。2252も椀の底部で約1/2が残存し, 底径4.0cmを測る。外底面には逆台形のしっかりした高台が付く。

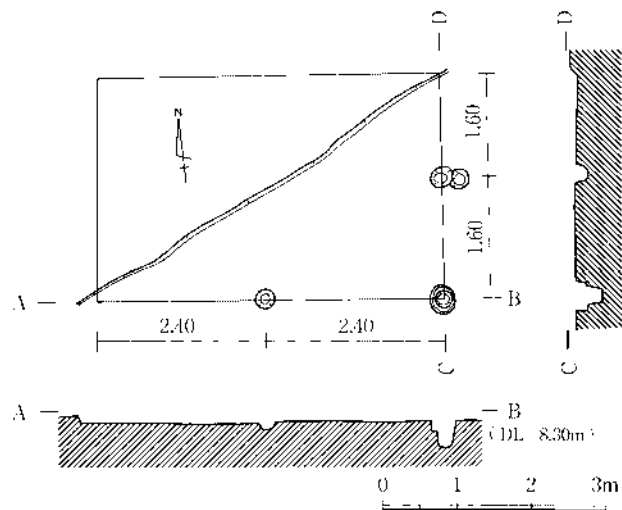


Fig.41 SB-203

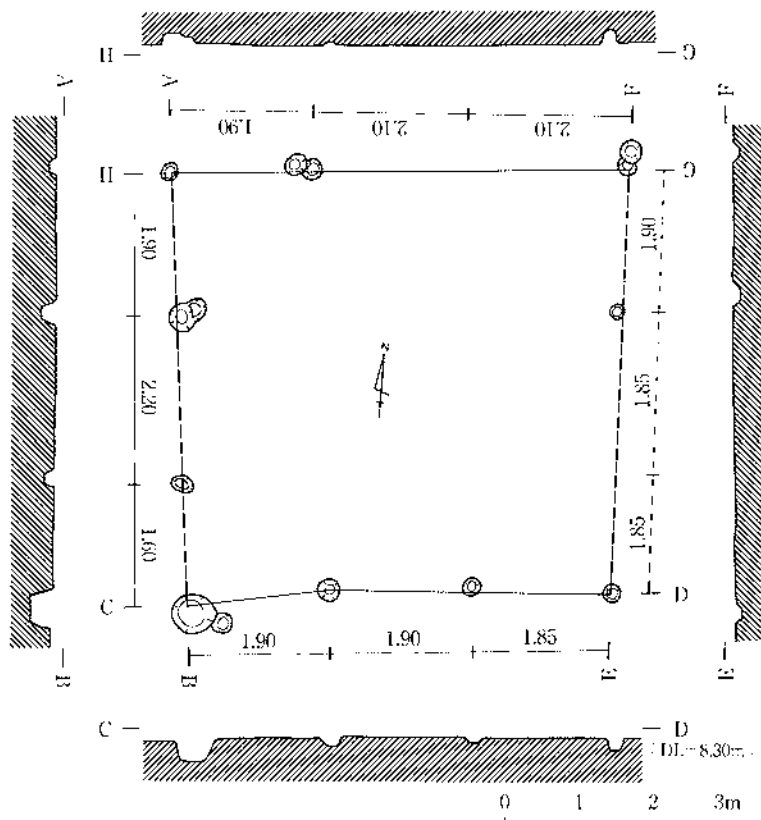


Fig.42 SB-204

2. B区

土師質土器 (Fig.46-2253)

2253は杯で、底部の約1/3が残存し、底径6.4cmを測る。体部は平らな底部から内湾する。体部には回転ナデ調整を施しているとみられるが、摩耗しており不明瞭である。内底面にはナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

土製品 (Fig.46-2254)

2254は紡錘形の管状土錘で、約1/2が残存する。全長5.2cmを測り、全幅約1.2cm、孔径約0.4cmと考えられる。

SB-205 (Fig.43)

調査区西部で検出した梁間2間 (4.50m)、桁行3間 (6.00~6.05m) の南北棟建物で、南から1間目の柱通りに間仕切り柱が建つ。SB-203, SA-203の南側に位置し、SB-204・206・207と重なる。棟方向はN-4°-Eで、柱間寸法は梁間 (東西) が2.00~2.50m、桁行 (南北) が1.70~2.25mと様々である。柱穴は径30~40cmを測る円形で、柱穴の埋土は暗茶褐色粘土質シルトであり、灰色粘土と炭化物が混入していた。出土遺物には弥生土器片6点、土師質土器片約100点、瓦器片13点、鉄滓1点がみられ、そのうち南西隅の柱穴から出土した土師質土器1点 (2255) と北東隅の柱穴から出土した土師質土器1点 (2256) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.46-2255・2256)

2255は杯の口縁部で約1/8が残存し、口径13.4cmを測る。口縁部は外上方にはほぼ真直ぐ上がる。体部には回転ナデ調整を施す。2256も杯で底部の約1/4が残存し、底径6.0cmを測る。内底面にはナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

SB-206 (Fig.44)

調査区西部で検出した梁間2間 (3.90~4.10m)、桁行2間 (4.45~4.50m) の東西棟

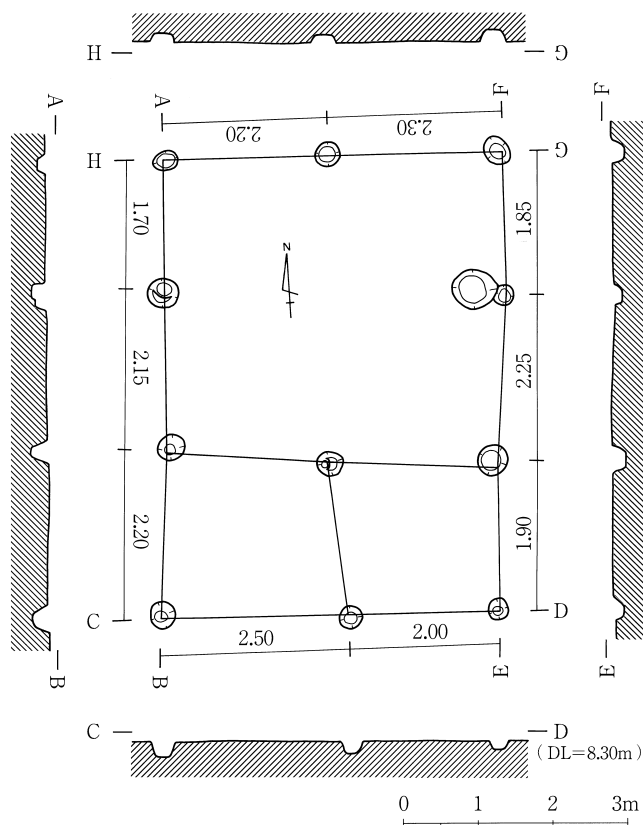


Fig.43 SB-205

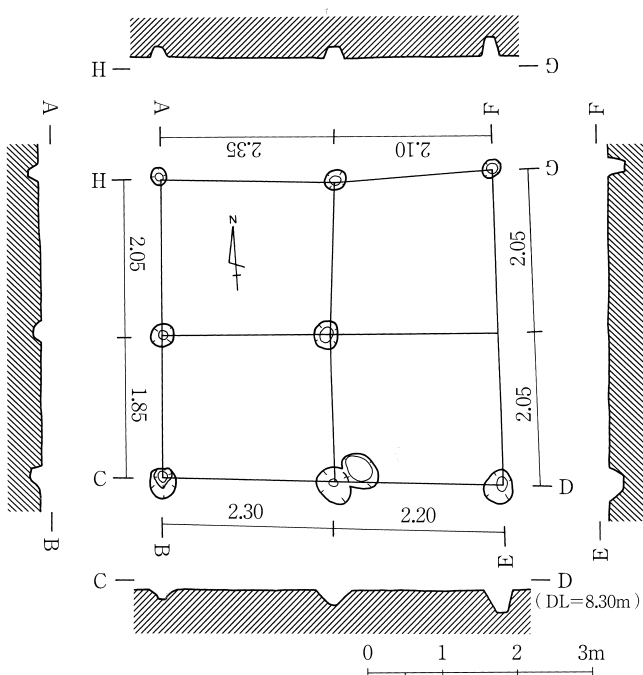


Fig.44 SB-206

総柱建物である。SB-203, SA-203の南側に位置し, SB-205・207と重なる。棟方向はN-84°-Wで, 東妻柱北から1間目の柱穴が暗渠に切られ確認できなかった。また, 北東隅の柱穴と南東隅の柱穴がSD-207に切られていた。柱間寸法は梁間(南北)が1.85 m, 2.05 m, 桁行(東西)が2.10~2.35 mである。柱穴は径25~50 cmを測る円形で, 柱穴の埋土は暗茶褐色粘土質シルトで, 灰色粘土と炭化物が混入していた。出土遺物には弥生土器片5点, 土師質土器片30点, 瓦器片10点, 青磁片1点がみられ, 東から1間目の柱通りの北から1間目の柱穴から出土した瓦器(2257)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.46.-2257)

2257は小皿で, 約1/5が残存し, 口径8.4 cm, 器高1.4 cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整, 内底面にはナデ調整を施し, 外面には指頭圧痕が残る。

SB-207 (Fig.45)

調査区西部で検出した梁間2間(5.00~5.20 m), 桁行6間(12.50~12.75 m)の東西棟建物である。SB-208, SA-204の北側に位置しSB-205・206と重なる。棟方向はN-88°-Wで, 東妻柱北から1間目の柱穴, 西妻柱北から1間目の柱穴, 南側柱東から2間目の柱穴が確認できなかった。また, 北東隅の柱穴は近世以降の土坑に切られていた。柱間寸法は梁間(南北)が2.50 m, 2.60 m, 桁行(東西)が1.50~2.60 mと様々であ

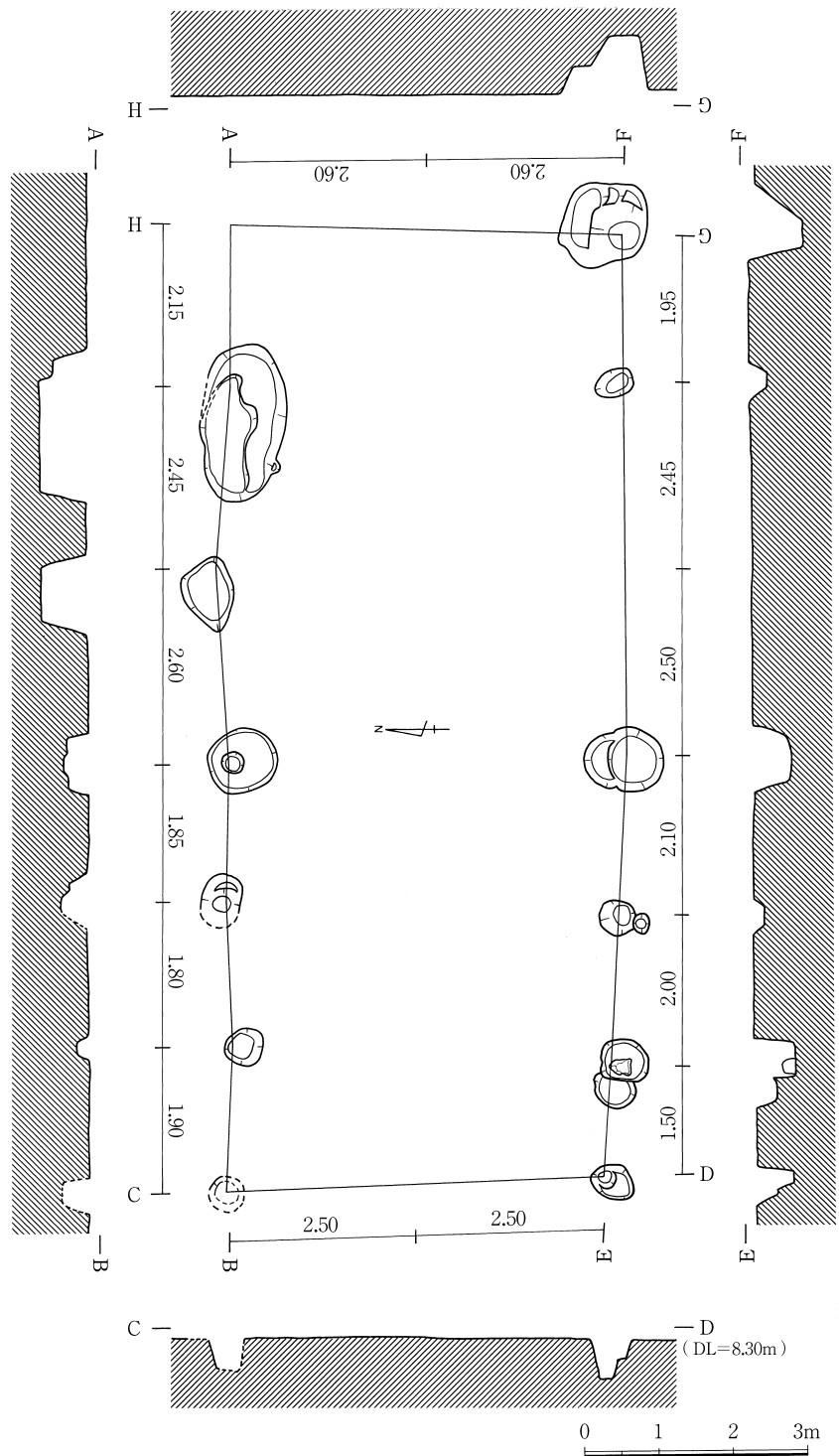


Fig.45 SB-207

2. B区

った。柱穴は径30~70cmを測る円形で、柱穴の埋土は暗灰黄色砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片14点、須恵器片2点、土師質土器片80点、瓦器片10点、青磁片5点、白磁片2点がみられ、南側柱西から2間目の柱穴より出土した土師質土器(2259)、石製品(2261)、南東隅の柱穴より出土した土師質土器(2258)、北側柱東から2間目の柱穴より出土した土製品(2260)の4点が図示できた。

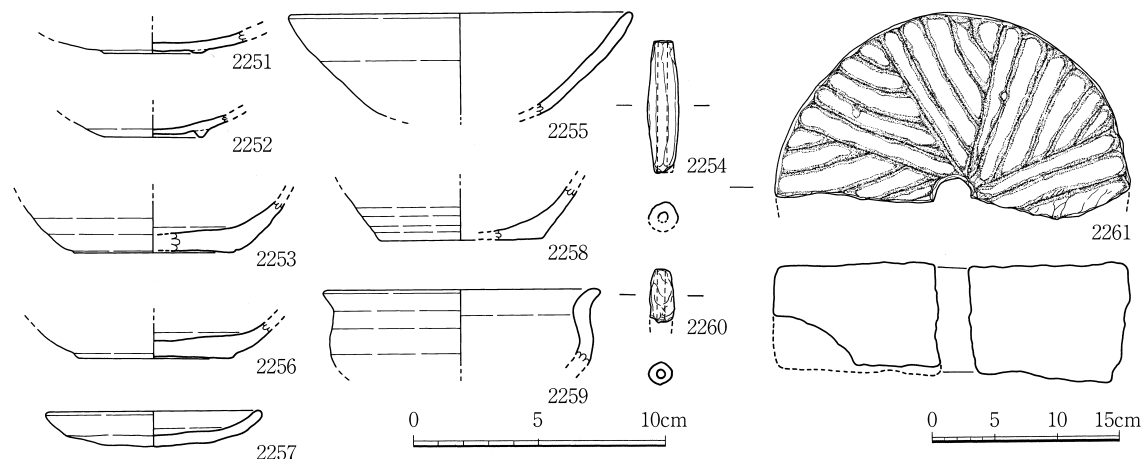


Fig.46 SB-204~207出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器 (Fig.46-2258・2259)

2258は杯底部の破片で、底径6.4cmを測る。外面は摩耗が著しく調整も底部の切り離しも不明である。内面には回転ナデ調整を施す。2259は碗の口縁部の破片であり、口径10.8cmを測る。口縁部は内湾する体部から外反する。

土製品 (Fig.46-2260)

2260は円筒形の管状土錘である。残存長2.1cm、全幅1.0cm、孔径0.3cmを測る。

石製品 (Fig.46-2261)

2261は石臼の下臼で約1/2が残存し、径約28.0cmを測る。4~6本単位で斜行する条線が5箇所認められる。

SB-208 (Fig.47)

調査区南部で検出した梁間2間(3.50~3.80m)、桁行4間(8.00m)の南北棟建物である。SB-207、SA-204の南側、SA-207の東側に位置する。棟方向はN-6°-Eで攪乱によって北西隅の柱穴が確認できなかった。柱間

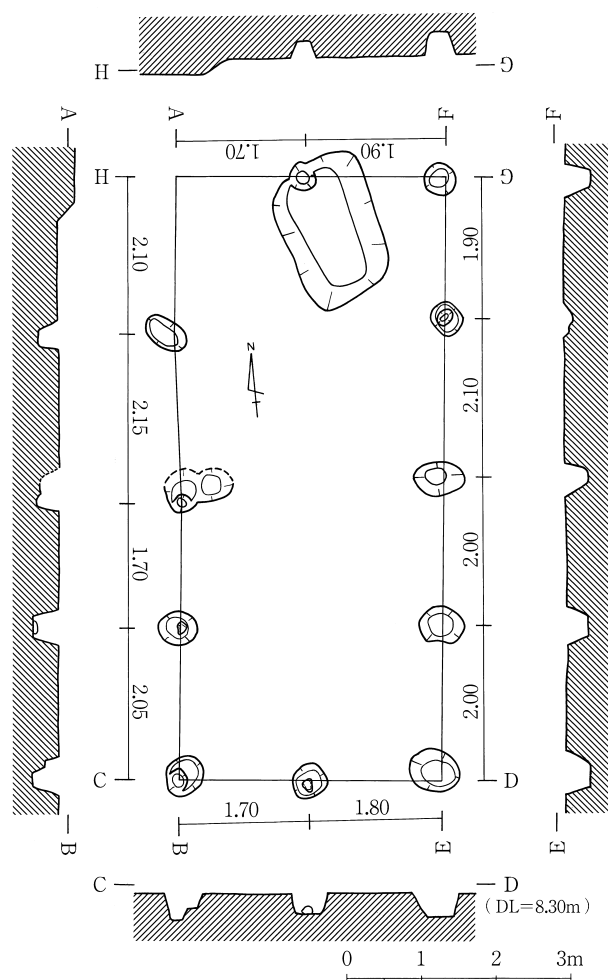


Fig.47 SB-208

寸法は梁間（東西）が1.70～1.90 m，桁行（南北）が1.70～2.15 mと様々であった。柱穴は径30～70 cmを測る円形で，柱穴の埋土は暗灰黄色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片13点，瓦器片10点，青磁片2点，白磁片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

ii 塀・柵列跡

SA-201 (Fig.48)

調査区北部で検出した東西の柵列（N-82°-E）である。SB-201，SA-202の北東側に位置する。3間分（5.10 m）を検出し，柱間は1.50 m，1.65 m，1.95 mである。柱穴は径25～30 cmの円形で，柱穴の埋土は暗灰黄色粘土質シルトでにぶい黄褐色シルト質粘土のブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

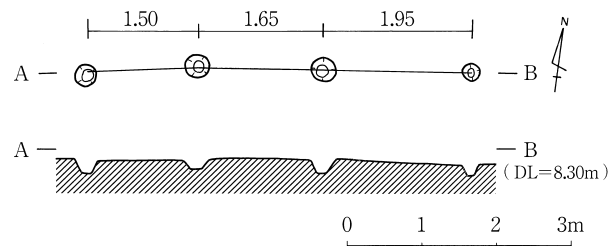


Fig.48 SA-201

SA-202 (Fig.49)

調査区北部で検出した南北の柵列（N-16°-E）である。SA-201の南西側，SB-201の東側に位置する。3間分（4.55 m）を検出し，柱間は1.20 m，1.50 m，1.85 mである。柱穴は径25～50 cmの円形で，柱穴の埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片11点，瓦器片5点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

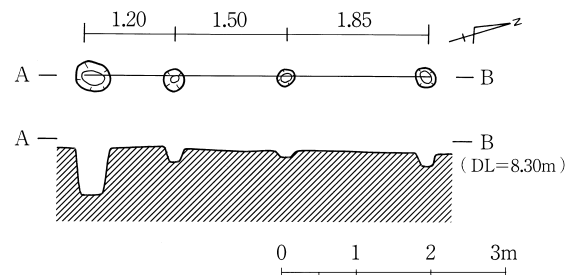


Fig.49 SA-202

SA-203 (Fig.50)

調査区西部で検出した東西の柵列（N-83°-W）である。SB-203の南側，SB-205・206の北側に位置し，SB-204と重なる。SB-203ないしは205との関係が考慮される。3間分（6.45 m）を検出し，柱間は2.05 m，2.10 m，2.30 mである。柱穴は径20～40 cmの円形で，西から1間目の柱

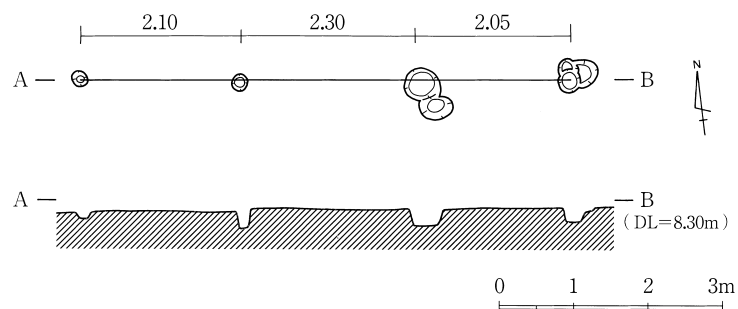


Fig.50 SA-203

穴に柱根が確認できた。柱穴の埋土は暗灰黄色粘土質シルトににぶい黄褐色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には土師質土器片13点，瓦器片2点，土製品1点，石製品1点がみられ，柱根1点（2262）と東端の柱穴から出土した土製品1点（2263），石製品1点（2264）が図示できた。

2. B区

出土遺物

土製品 (Fig.51-2262)

2262は紡錘形の管状土錘で、約1/2が残存する。残存長2.9cm, 全幅1.2cm, 孔径0.3cmを測る。外面にナデ調整を施す。

木製品 (Fig.51-2263)

2263は柱根で、長さ27.0cm, 幅8.4cmにわたって残存する。

石製品 (Fig.52-2264)

2264は砥石であり約1/2が残存する。全幅10.6cm, 全厚6.6cmを測る。全体が磨滅しており、面のみでなく全体的に使用したものとみられる。石材は細粒砂岩と考えられる。

SA-204 (Fig.53)

調査区中央部で検出した東西の柵列 (N-89°-W) である。SB-207の南側, SB-208の北側に位置し, これら2棟の建物跡との関係が考慮される。5間分 (9.70 m) を検出し, 柱間は1.70~2.10 mである。柱穴は径35~80cmの円形で, 柱穴の埋土は暗灰黄色砂質シルトににぶい黄褐色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片7点, 須恵器片1点, 土師質土器片15点, 青磁片2点, 白磁片1点, 石製品2点であり, 東端の柱穴より出土した石製品 (2266), 西から2間目の柱穴より出土した石製品 (2265) が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.54-2265・2266)

ともに石臼の上臼の部分である。約1/3が残存し, 4~5本単位の条線が3箇所認められる。2265は直径約28cmで, その中の約21cmを窪ませている。2266は直径約30cmで, その中の約23cmを窪ませている。

SA-205 (Fig.55)

調査区南部で検出したL字状の柵列である。

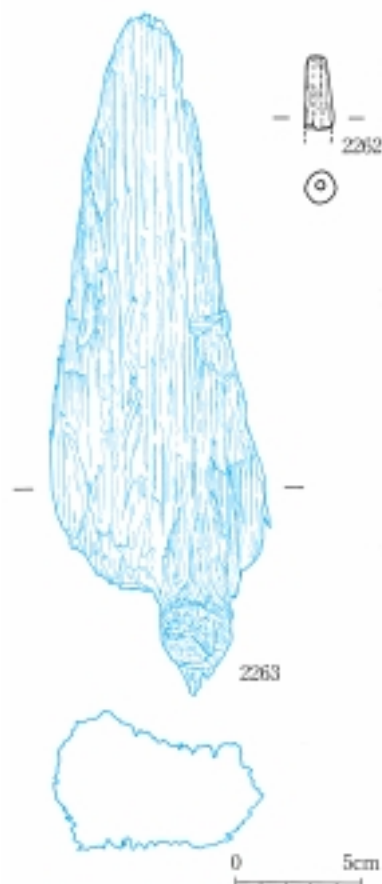


Fig.51 SA-203出土遺物実測図1

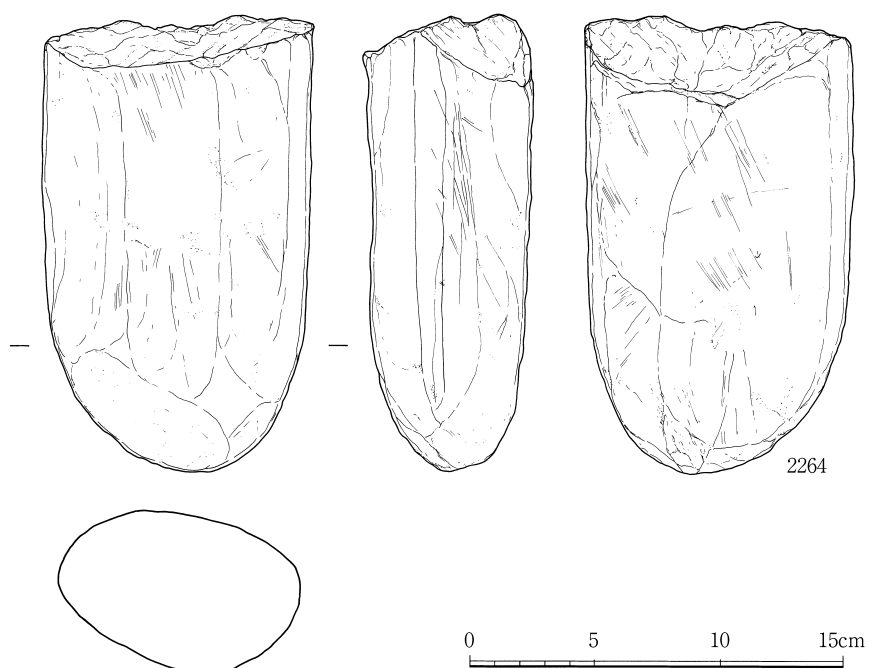


Fig.52 SA-203出土遺物実測図2

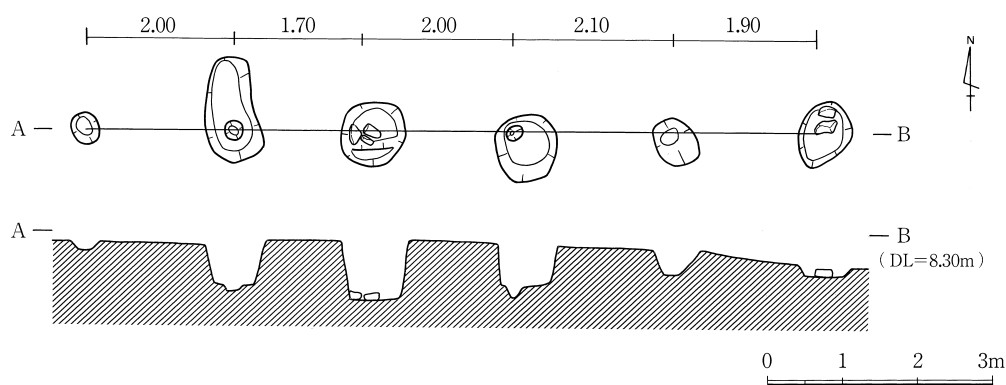


Fig.53 SA-204

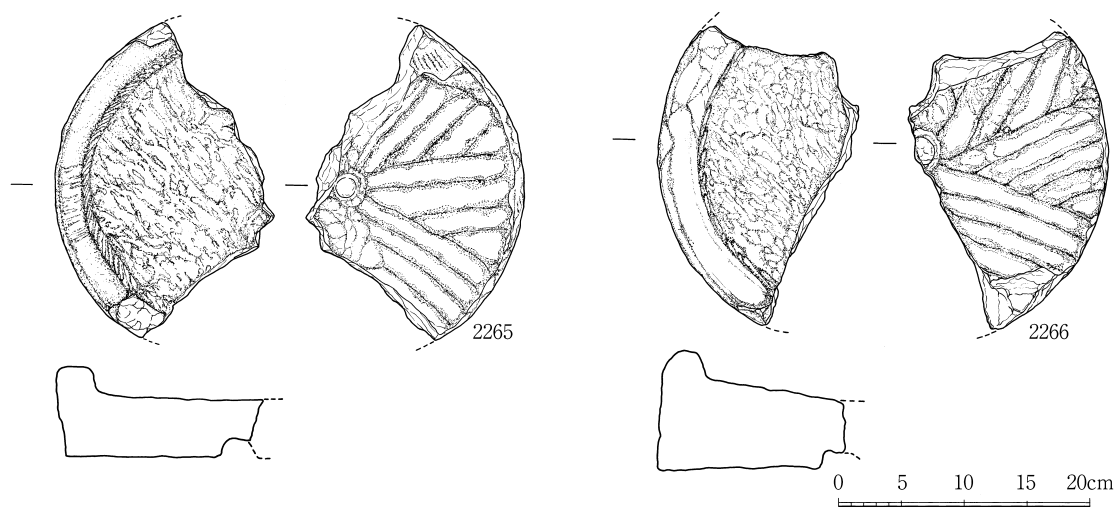


Fig.54 SA-204出土遺物実測図

SA-206の北側に位置する。5間分 (7.75 m) を検出し、柱間は1.20~1.85 mと様々であった。柱穴は径20~25cmの円形で、柱穴の埋土は暗灰黄色粘土質シルトににぶい黄褐色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片2点、土師質土器片8点、瓦器片1点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SA-206 (Fig.56)

調査区南部で検出したL字状の柵列である。SA-205の南側に位置する。3間分 (6.55 m) を検出し、柱間は2.00 m, 2.20 m, 2.35 mである。柱穴は径25~35cmの円形で、柱穴の埋土は暗褐色砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片20点、土師質土器片15点、瓦器片2点がみられ、東端の柱穴から出土した弥生土器2点 (2267・2268)、東から1間目の柱穴から出土した青磁2点 (2270・2271)、東から2間目の柱穴から出土した瓦器1点 (2269) が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.57-2267・2268)

2267は甕の口縁部の破片であり、口径17.4cmを測る。くの字状に強く屈曲し、外面にはタタキの後にハケ調整、内面にはハケ調整を施す。内外面とも指頭圧痕が残る。2268は底部の破片であ

2. B区

り、底径2.5cmを測る。小さな平底の底部であり、外面にはタタキ目が残る。

瓦器 (Fig.57-2269)

2269は碗の口縁部破片で、ヨコナデ調整を施す。内面には暗文が残る。炭素の吸着は悪い。

青磁 (Fig.57-2270・2271)

2270は碗の口縁部の破片であり、外上方に真直ぐ延びる。灰オリーブ色の釉を薄く施す。2271は碗の底部で約1/2が残存し、底径7.8cmを測る。全体に灰オリーブ色の釉を薄く施す。高台内は基本的に露胎であるが、一部釉がかかる。

SA-207 (Fig.58)

調査区南部で検出した南北の堀跡 (N-7°-E) である。SB-208の西側に位置する。3間分 (6.40m) を検出したが南側は調査区外に延びる。SB-208に付随する堀であった可能性が考えられる。柱間は2.00m, 2.20mである。柱穴は径35~40cmの円形で、柱穴の埋土は暗灰黄色粘土質シルトににぶい黄褐色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、図示できなかった。

iii 土坑

SK-202 (Fig.59)

調査区北部で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.18m, 短辺1.14m, 深さ17cmを測る。長軸方向はN-10°-Eで、断面形は逆台形を呈す。中世の舟形土坑を切っており、埋土は暗灰黄色粘土質シルトに灰黄褐色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片2点, 土師質土器

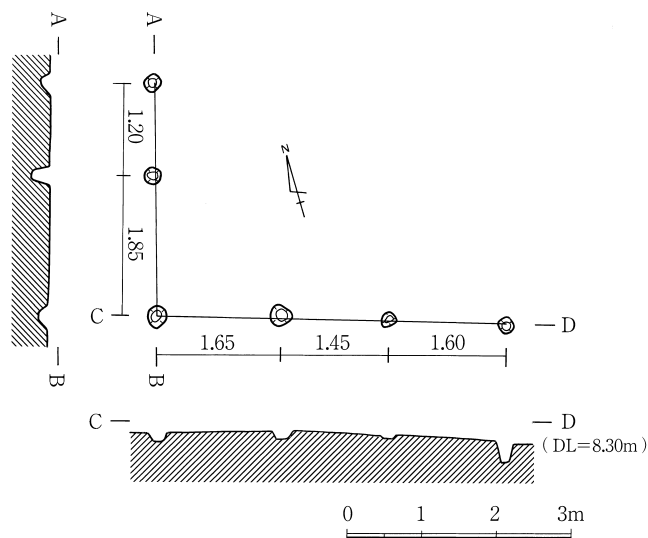


Fig.55 SA-205

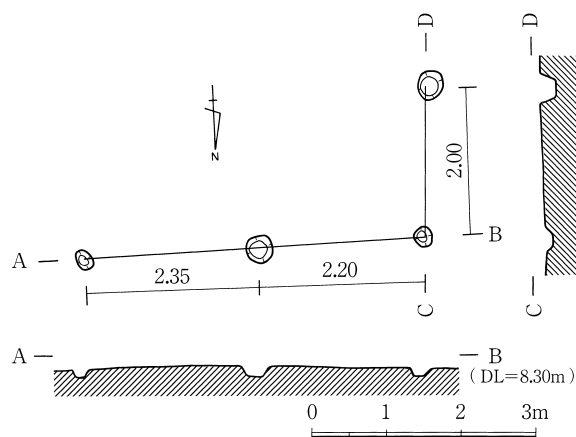


Fig.56 SA-206

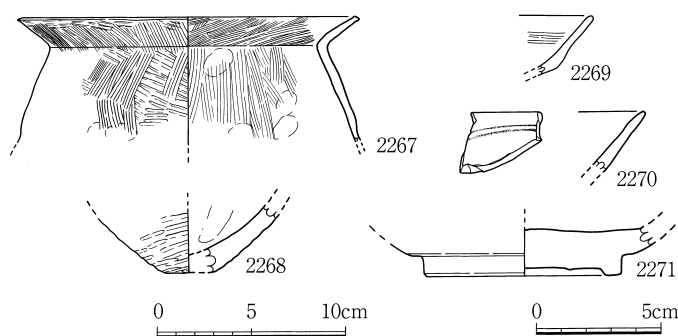


Fig.57 SA-206出土遺物実測図

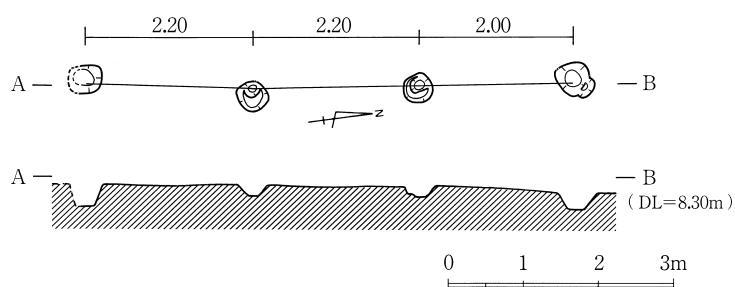


Fig.58 SA-207

Tab.1 B区堀・柵跡計測表

遺構番号	規 模			方 向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長()	柱間距離()		
SA - 201	4	5.10	1.50, 1.65, 1.95	N - 82° - E	
SA - 202	4	4.55	1.20, 1.50, 1.85	N - 16° - E	
SA - 203	4	6.45	2.05, 2.10, 2.30	N - 83° - W	
SA - 204	6	9.70	1.70~2.10	N - 89° - W	
SA - 205	6	7.75	1.20~1.85		L字状
SA - 206	4	6.55	2.00, 2.20, 2.35	-	L字状
SA - 207	4	6.40	2.00, 2.20	N - 7° - E	

片31点, 瓦器片13点がみられ, そのうち土師質土器1点 (2274), 瓦器2点 (2272・2273) が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.62 -2272・2273)

2272は碗の口縁部で約1/8が残存し, 口径13.0cmを測る。体部にはナデ調整を施し, 指頭圧痕が残る。口縁部にはヨコナデ調整, 内面には暗文が残る。底部は欠損するが, 器高は4.5~5.0cmを測るものとみられる。2273も口縁部の破片で, ヨコナデ調整を施しており, 外面には指頭圧痕が残る。口径は13.6cmを測る。

土師質土器 (Fig.62 -2274)

2274は小皿の破片であり, 口径8.2cm, 器高1.6cm, 底径5.0cmを測る。全体にナデ調整を施す。

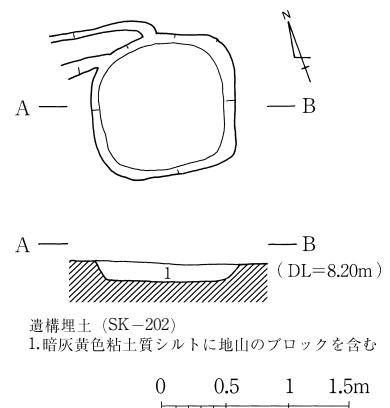


Fig.59 SK-202

SK-203 (Fig.60)

調査区南部で検出した円形を呈する土坑である。径1.35m, 深さ14cmを測り, 断面形は船底状を呈す。埋土は暗灰黄色砂質シルトである。出土遺物には弥生土器片21点, 須恵器片1点, 瓦器片2点がみられ, 弥生土器1点 (2275) が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.62 -2275)

2275は甕の底部破片で底径3.6cmを測る。外面にタタキ目が残るが, 摩耗が著しく他の調整は不明瞭である。

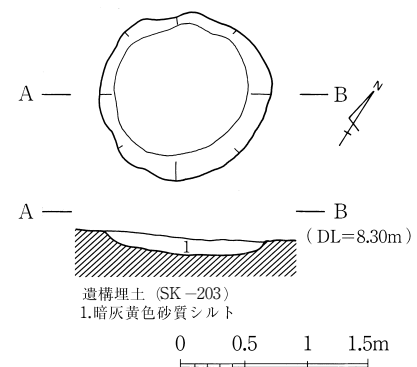


Fig.60 SK-203

SK-204 (Fig.61)

調査区中央部で検出した不整形を呈する土坑である。長径2.16m, 短径1.77m, 深さ8cmを測る。長軸方向はN-5°-Wで, 断面形は逆台形を呈す。SB-207とSA-204の柱穴に切られていた。埋土は暗褐色砂質シルトに黄褐色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物は復元図示した青磁1点 (2276) のみであった。

2. B区

出土遺物

青磁 (Fig.62-2276)

2276は外上方に延びる口縁部の破片で、端部を僅かに外反させる。灰オリーブ色の釉を薄く施す。

SK-205

調査区中央部で検出した円形を呈する土坑である。径1.18m、深さ67cmを測る。断面形はU字形をなし、南には段部を有する。SB-207の柱穴及びSK-208に切られている。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片2点、土師質土器片32点、瓦器片5点、青磁片3点、土製品1点がみられ、そのうち瓦器1点(2277)と土製品1点(2278)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.62-2277)

2277は口縁部の破片で、口径15.2cmを測り、外面にヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には一部に暗文が残る。

土製品 (Fig.62-

2278)

2278は紡錘形の管状土錘で、約1/2が残存する。残存長3.3cm、全幅1.2cm、孔径0.5cmを測る。

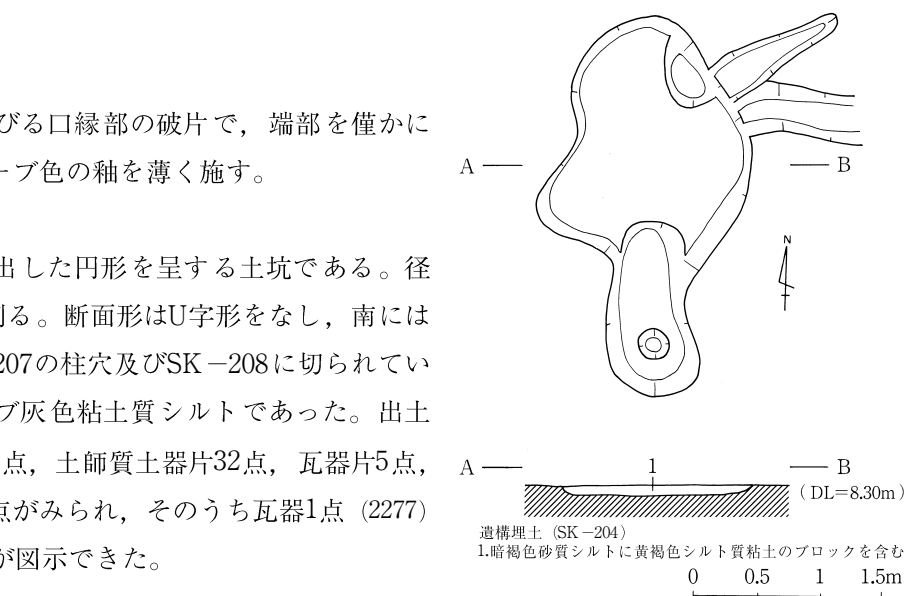


Fig.61 SK-204

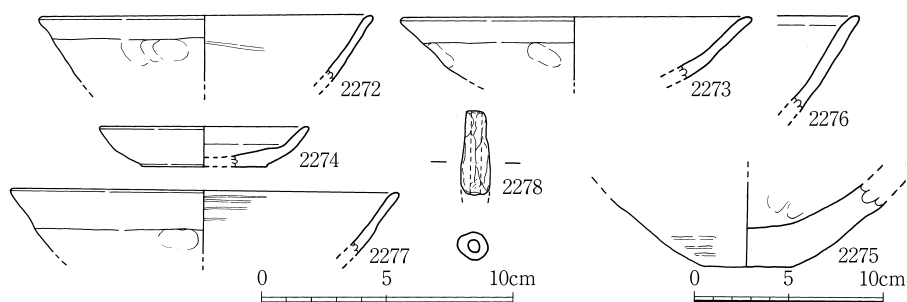


Fig.62 SK-202~205出土遺物実測図

iv 溝跡

SD-201 (Fig.63)

調査区南東部の斜面下で15.60mに渡って検出した南北溝である。中央部で一旦切れているが、堆積の状況から一連の溝と考えられる。他の中世溝に切られており、北側は調査区外に延びる。幅は30~62cm、深さ5~11cmを測る。断面形は舟底状を呈し、基底面はやや南へ傾斜する。埋土は暗灰黄色粘土質シルトに灰黄褐色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片12点、瓦器片5点、瓦質土器片1点、青磁片1点、陶器片1点がみられ、瓦器(2279)、瓦質土器(2280)、青磁(2281)、陶器(2282)が各々1点ずつ図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.65-2279)

2279は椀の口縁部の破片であり、ヨコナデ調整を施す。内面には暗文が残る。

瓦質土器 (Fig.65-2280)

2280は羽釜の口縁部の破片であり、外面にヨコナデ調整を施す。口縁端部から2cm下に長さ約1.2

cmの水平に延びる鏝が付く。鏝より下には煤が付着しており、調整は不明である。

青磁 (Fig.65-2281)

2281は碗の口縁部の破片で、龍泉窯系のものと考えられる。外面には鎬蓮弁文を施し、全体にオリーブ灰色の釉をやや厚く施す。

陶器 (Fig.65-2282)

2282は碗であり、底部は完存する。底径5.6cmを測り、見込の4箇所に砂目が残る。10～12世紀の中国産のものである可能性が考えられる。

SD-202 (Fig.63)

調査区北部で2.60mに渡って検出した南北溝である。中央部を中世溝に、南端を暗渠に切られている。幅は23cm、深さ8～17cmを測る。断面形はU字形を呈し、基底面はやや南へ傾斜する。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片9点、土師器片1点、土師質土器片2点、瓦器片1点がみられ、弥生土器1点(2283)、土師器1点(2284)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.65-2283)

2283は甕で約1/4が残存し、口径16.4cm、胴径22.5cmを測る。口縁部は球形に近い胴部から強く外反する。全体的に摩耗するが、外面には口縁部にハケ目、胴部にタタキ目が残る。

土師器 (Fig.65-2284)

2284は高杯の杯底部の破片で、内外面にナデ調整を施す。

SD-203 (Fig.63)

調査区北部で7.40mに渡って検出した南北溝である。南端を中世の土坑、中央部を中世の溝、北部を暗渠にそれぞれ切られている。幅は34～42cm、深さ10～14cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片25点、須恵器片1点、土師質土器片5点、瓦器片1点がみられ、土師質土器1点(2285)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.65-2285)

2285は杯であり、底部のみ残存する。底径5.1cmを測り、切り離しは回転糸切りである。内底面にはロクロ目が残る。

SD-204 (Fig.63)

調査区中央部で9.00mに渡って検出した東西溝である。西端を近世のSK-207に切られている。

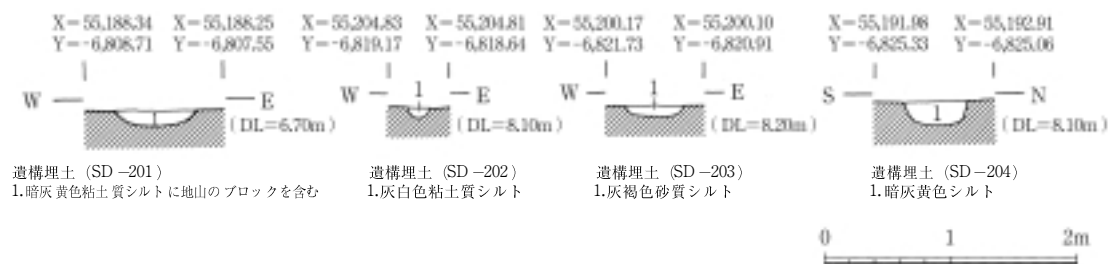


Fig.63 SD-201～204

2. B区

幅は24～54cm, 深さ8～21cmを測る。断面形は逆台形を呈し, 基底面は東へ傾斜する。埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片8点, 瓦器片2点がみられ, 瓦器1点(2286)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.65-2286)

2286は碗の口縁部の破片で, ヨコナデ調整を施す。内面には暗文が残る。口径は13.8cmを測る。

SD-205 (Fig.64)

調査区中央部で15.30mに渡って検出した東西溝である。西端をSD-206と中世のピット群に切られる。幅は36～122cm, 深さ4～34cmを測る。断面形はU字形を呈し, 基底面は東へ傾斜する。埋土は暗灰黄色シルトであった。出土遺物には弥生土器片8点, 土師質土器片40点, 瓦器片11点, 土製品1点がみられ, 土師質土器1点(2287)と土製品1点(2288)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.65-2287)

2287は小皿の破片であり, 口径7.2cm, 器高1.7cm, 底径5.0cmを測る。口縁部の内外面には回転ナデ調整を施し, 底部の切り離しは回転糸切りである。

土製品 (Fig.65-2288)

2288は紡錘形の管状土錘で, 完存する。全長4.9cm, 全幅1.1cm, 孔径0.3cmを測り, 外面の両端に指頭圧痕が残る。

SD-206 (Fig.64)

調査区東部で8.35mに渡って検出した東西溝である。SD-207とは直行しており, 同一時期の溝跡である可能性も高い。中世ピット群及び暗渠に切られている。幅は36～50cm, 深さ15～17cmを測る。断面形はU字形を

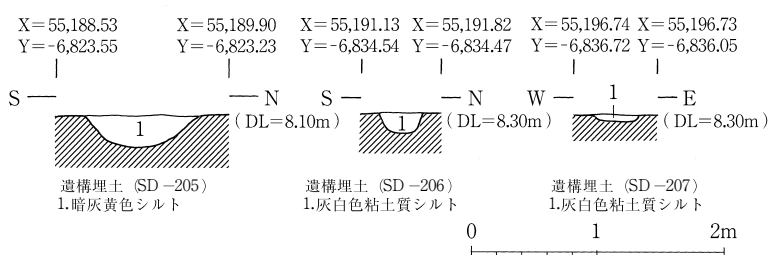


Fig.64 SD-205～207

呈し, 基底面はやや西へ傾斜する。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片3点, 土師質土器片約70点, 瓦器片14点がみられ, 土師質土器1点(2291), 瓦器2点(2289・2290)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.65-2289・2290)

ともに碗の口縁部の破片であり, ヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残る。2289は口径14.6cmを測り, 内面の暗文は不明瞭である。炭素は全く吸着せず, 外面は橙色を呈す。2290は口径12.0cmを測り, 内面には圏線状の暗文を施す。

土師質土器 (Fig.65-2291)

2291は杯で約2/3が残存し, 口径11.4cm, 器高3.4cm, 底径6.3cmを測る。口縁部はやや内湾して上

がり、体部にかけて回転ナデ調整を施す。内底面にはナデ調整を加える。底部は回転糸切りで板状圧痕が残る。

SD-207 (Fig.64)

調査区北東部で6.20 mに渡って検出した南北溝である。SD-206に直行し、中世ピット、中世溝及び暗渠に切られている。幅は25~36cm、深さ6~10cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面はやや南へ傾斜する。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片8点、瓦器片3点、青磁片1点、白磁片1点がみられ、白磁1点(2292)が図示できた。

白磁 (Fig.65-2292)

2292は碗の口縁部の破片である。やや内湾して上がり、全体に明オリーブ灰色の釉を施す。

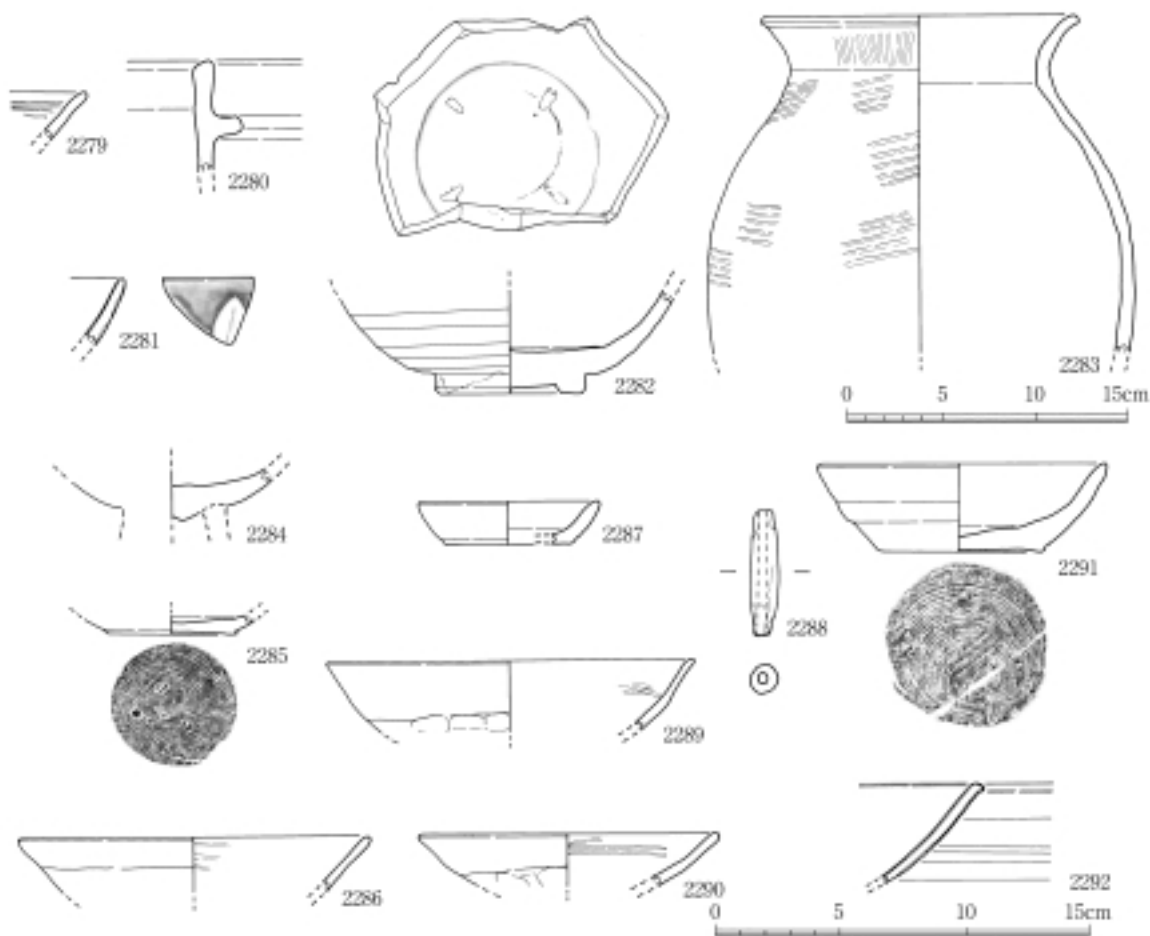


Fig.65 SD-201~207出土遺物実測図

v 井戸跡

SE-201 (Fig.66)

調査区南西部の斜面下で検出した木組方形縦板組井戸である。井戸掘方は平面的には不明瞭であったが、断面をみると比較的広範囲に広がるもようである。井桁の一部が残存して枠を構成しており、長辺1.60 m、短辺1.45 mを測る。長軸方向はN-12°-Eで、深さは1.48 mであった。中央部に一辺約90 cmの方形井側を据えている。井側の縦板は残存していたが、棧は確認できなかった。木製

2. B区

井筒は高さ60cm, 径70cm, 厚さ約2cmを測る円筒形で, 木を刳り貫いたものであった。埋土は4層に分層でき, 埋土1はオリーブ褐色シルト質粘土, 埋土2は暗オリーブ灰色シルト質粘土, 埋土3はオリーブ灰色シルト質粘土, 埋土4が暗緑灰色シルト質粘土であった。出土遺物には弥生土器細片, 土師質土器細片, 青白磁1点がみられ, すべて埋土2からの出土で, 弥生土器1点(2293), 土師質土器1点(2294), 青白磁1点(2295)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.68-2293)

2293は甕の胴部から底部にかけての約1/4が残存し, 底径2.7cm, 胴径13.9cmを測る。胴部は平底の底部から大きく膨らみ, 外面にはハケ調整を施し, 煤の付着がみられる。内面にはハケ調整と指ナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.68-2294)

2294は杯の口縁部の破片であり, 口径14.0cmを測る。内湾する体部から口縁部はやや外反する。内外面には回転ナデ調整を施す。

青白磁 (Fig.68-2295)

2295は蓋であり, 約1/4が残存する。器高1.2cm, かえり径5.2cm, 笠部径7.8cmを測り, 全体に明緑灰色の釉を薄く施すが, 受け部は露胎である。12世紀代の景德鎮窯の製品と考えられる。

viピット

P-202

円形のピットであり, 調査区中央部の土坑の下に検出した。径28cm, 深さ30cmを測り, 埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物は図示できた土師器1点(2296)のみであった。

出土遺物

土師器 (Fig.68-2296)

2296は杯で約1/5が残存する。口縁部は平らな底部から外上方に上がり, 端部を上ややつまみ上げる。体部外面と内底面にはナデ調整, 口縁部にはヨコナデ調整を施す。外底面はヘラ切りでナ

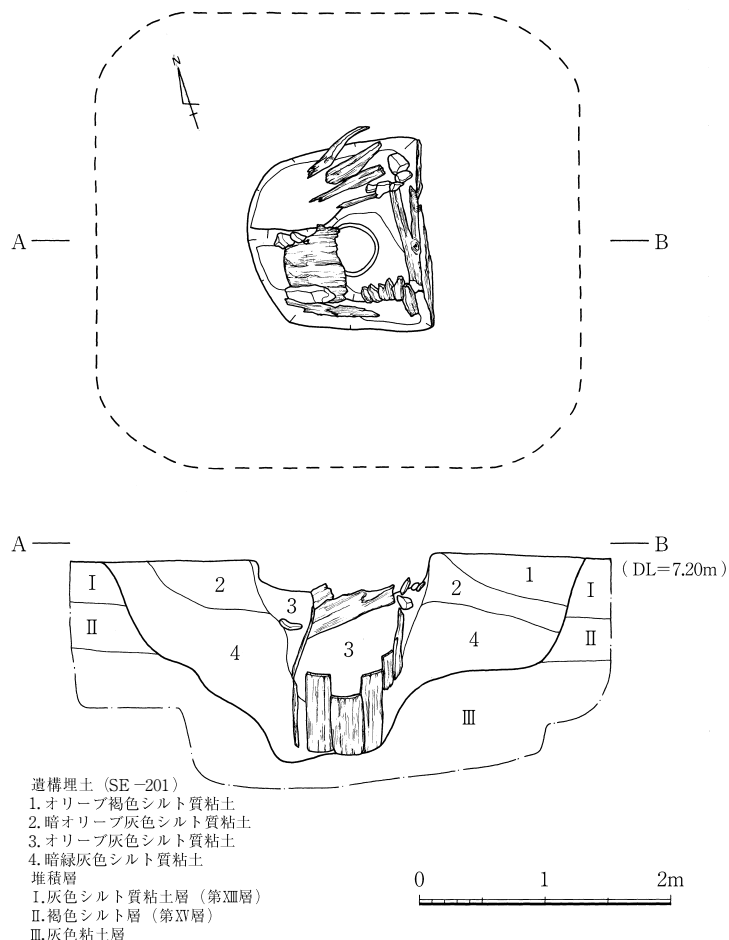


Fig.66 SE-201

デ調整を加える。

P-203

調査区中央部で検出した円形のピットである。径29cm、深さ25cmを測り、埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物は図示できた土師質土器1点(2297)のみであった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2297)

2297は小皿で約1/6が残存しており、口径9.4cm、器高1.3cm、底径6.6cmを測る。内外面にはナデ調整を施す。

P-204

調査区中央部で検出した円形のピットである。中世のピットとSD-205を切り、径40cm、深さ24cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片18点、瓦器片3点がみられ、土師質土器1点(2298)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2298)

2298は杯底部で約1/4が残存し、底径6.0cmを測る。体部は内外面に回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を施す。

P-205

調査区西部で検出した円形のピットである。P-206に切られ、径33cm、深さ17cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点、瓦器片2点、土製品1点がみられ、土製品1点(2299)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.68-2299)

2299は円筒形の管状土錘で、ほぼ完形である。全長4.5cm、全幅1.0cm、孔径0.4cmを測る。外面の中ほどに指頭圧痕が残る。

P-206

調査区西部で検出した円形のピットである。P-205を切り、径32cm、深さ22cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片10点、瓦器片7点、東播系須恵器片1点、青磁片1点、土製品1点がみられ、土製品1点(2300)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.68-2300)

2300は紡錘形の管状土錘であり、約1/2が残存し、残存長2.7cm、全幅1.1cm、孔径0.4cmを測る。

P-207

調査区西部で検出した円形のピットである。径23cm、深さ17cmを測り、埋土は灰褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片18点、青磁片1点がみられ、土師質土器2点(2301・2302)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2301・2302)

2. B区

2301は杯の口縁部で、約1/6が残存する。口径10.6cmを測り、内外面には回転ナデ調整を施す。2302は底部の破片で、底径8.0cmを測る。内外面には回転ナデ調整を施す。

P-208

調査区西部で検出した円形と考えられるピットである。暗渠によって切られており、径25cm、深さ7cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点、瓦器片1点がみられ、土師質土器1点(2303)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2303)

2303は杯の口縁部の破片で、口径12.8cmを測り、回転ナデ調整を施す。

P-209

調査区西部で検出した円形のピットである。中世ピットを切っており、径30cm、深さ22cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、瓦器片1点がみられ、瓦器1点(2304)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.68-2304)

2304は椀の口縁部で約1/10が残存する。口径16.0cmを測り、ヨコナデ調整を施す。体部外面には指頭圧痕が残り、内面には不明瞭ながら暗文が残る。

P-210

調査区西部で検出した円形のピットである。径30cm、深さ8cmを測り、埋土は暗茶褐色粘土質シルトで灰色粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には土師質土器片5点、瓦器片3点がみられ、土師質土器(2306)、瓦器(2305)各々1点ずつ図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.68-2305)

2305は小皿で約1/8が残存し、口径7.6cm、器高1.2cm、底径4.4cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施し、内面にはナデ調整を施す。外面には指頭圧痕が残る。

土師質土器 (Fig.68-2306)

2306はほぼ完形の小皿である。口径8.2cm、器高1.3cm、底径4.6cmを測り、口縁部には回転ナデ調整、内面にはナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

P-211

調査区西部で検出した円形のピットである。径36cm、深さ14cmを測り、埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片18点がみられ、そのうち1点(2307)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2307)

2307は杯の口縁部の破片であり、口径11.2cmを測る。内湾する口縁部であり、外面には回転ナデ調整、内面にはナデ調整を施す。

P-212

調査区西部で検出した円形のピットである。暗渠によって切られており、径28cm、深さ16cmを測

る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片9点、瓦器片4点がみられ、土師質土器(2309)、瓦器(2308)各々1点ずつ図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.68-2308)

2308は椀の口縁部で約1/8が残存し、口径14.5cmを測る。体部外面には指頭圧痕が残り、口縁部にはヨコナデ調整を施す。内面には圏線状の暗文を施す。

土師質土器 (Fig.68-2309)

2309は杯の口縁部の破片で、口径14.6cmを測る。外上方に真直ぐ上がり、端部がやや外反する口縁部である。内外面に回転ナデ調整を施すものの体部外面にはロクロ目が少し残る。

P-213

調査区西部で検出した楕円形のピットである。暗渠によって切られており、長径56cm、短径31cm、深さ28cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片18点、瓦器片3点、白磁片1点がみられ、土師質土器1点(2310)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2310)

2310は杯底部で約2/3が残存し、底径7.1cmを測る。平らな底部で、内底面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

P-214

調査区北部で検出した円形のピットである。中世ピットに切られており、径30cm、深さ25cmを測る。埋土は灰褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点、白磁片1点、石製品1点がみられ、白磁1点(2311)が図示できた。

白磁 (Fig.68-2311)

2311は碗であり、底部のみ残存する。底径4.4cmを測り、見込の一部を釉ハギする。外面は露胎である。

P-215

調査区北部で検出した円形のピットである。中世ピットを切っており、径45cm、深さ23cmを測る。埋土は暗茶褐色粘土質シルトに灰色粘土のブロックが混入する。出土遺物には土師質土器片6点がみられ、そのうち1点(2312)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2312)

2312は小皿で底部の約1/2が残存し、底径4.9cmを測る。体部には回転ナデ調整、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。

P-216

調査区北西部で検出した楕円形のピットである。SD-207を切っており、長径47cm、短径26cm、深さ23cmを測る。埋土は暗茶褐色粘土質シルトで灰色粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片3点、土師質土器片25点、瓦器片2点がみられ、土師質土器2点(2313・2314)が図示

2. B区

できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2313・2314)

2313は小皿の破片で、口径8.0cm、器高1.0cm、底径4.9cmを測る。2314も小皿で約1/8が残存し、底径7.2cmを測る。2点とも内外面に回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。

P-217

調査区西部で検出した円形のピットである。中世のピットに切られており、径31cm、深さ15cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片30点、瓦器片2点がみられ、瓦器1点(2315)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.68-2315)

2315は小皿で約1/8が残存し、口径10.2cmを測る。口縁部にはヨコナデ調整を施し、内面はナデ調整ののち暗文を施す。炭素は吸着せず、灰白色を呈す。

P-218

調査区西部で検出した円形のピットである。SB-206の柱穴に切られており、長径55cm、短径42cm、深さ33cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片8点、石製品2点がみられ、石製品2点(2316・2317)が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.68-2316・2317)

ともに叩石と考えられるが、使用痕が不明瞭で、礎板として転用された可能性も高い。2316は完形、全長13.2cm、全幅10.8cm、全厚4.9cmを測る。石材は砂岩であり、表面には焼けた痕跡が残る。2317は約1/6が欠損し、全長15.2cm、全幅12.0cm、全厚4.3cmを測り、石材は砂岩である。

P-219

調査区西部で検出した円形のピットである。径35cm、深さ30cmを測り、埋土は暗茶褐色粘土質シルトで灰色粘土のブロックを含むものであった。出土遺物は土師質土器片5点、瓦器片2点であり、瓦器1点(2318)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.68-2318)

2318は碗の口縁部の破片で、口径14.6cmを測る。外面にはナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。内面には圏線状の暗文を施す。

P-220

調査区西部で検出した円形のピットである。径35cm、深さ10cmを測り、埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられ、そのうち1点(2319)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2319)

2319は杯であり、約1/2が残存する。口径14.2cm、器高4.4cm、底径7.0cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形であるが、調整は摩耗が著しく不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。

P-221

調査区西部で検出した円形のピットである。径41cm、深さ25cmを測り、埋土は暗茶褐色粘土質シルトで灰色粘土のブロックを含むものであった。出土遺物は図示した土師質土器1点(2320)であった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.68-2320)

2320は杯の口縁部から底部にかけての破片で、口径13.7cm、器高4.7cm、底径7.2cmを測る。底部から口縁部にかけて外上方へ真直ぐ延びる。摩耗が著しく調整は不明である。

P-222

調査区西部で検出した楕円形のピットであり、礎板が確認できた。長径79cm、短径73cm、深さ33cmを測り、埋土は暗茶褐色粘土質シルトに灰黄褐色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片21点、土師質土器片16点、瓦器片2点がみられ、弥生土器1点(2321)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.68-2321)

2321は鉢の口縁部の破片で、約1/8が残存する(B類)。内湾する口縁部であり、内面にはハケ調整を施す。外面は摩耗が著しく調整は不明である。

P-223

調査区西部で検出した円形のピットで、ST-202を切っている。径22cm、深さ37cmを測り、埋土は暗茶褐色粘土質シルトに灰色粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片6点、土師質土器片16点、瓦器片3点がみられ、弥生土器1点(2322)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.68-2322)

2322は二重口縁壺の口縁部の破片であり、口径16.6cmを測る(D類)。摩耗が著しく調整は不明である。

P-224

調査区南部で検出した円形のピットである。径19cm、深さ21cmを測り、埋土は暗褐色砂質シルトで炭化物が混入していた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦器片2点がみられ、瓦器1点(2323)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.68-2323)

2323は椀の口縁部の破片である。内面には不明瞭ながら暗文が残る。炭素の吸着が悪く、外面は灰黄褐色、内面は黄灰色を呈す。

2. B区

vii 性格不明遺構

SX-201 (Fig.67)

調査区北西部第VI層上面で検出した方形を呈す性格不明遺構である。長辺4.44 m, 短辺4.32 m, 深さ46.5 cmを測り, 長軸方向はN-3°-Eで断面形は逆台形を呈す。埋土は2層に分層でき, 埋土1は灰褐色シルト質粘土, 埋土2は暗灰褐色シルト質粘土であった。出土遺物は皆無であった。

SX-202 (Fig.69)

調査区中央部で検出した不整形を呈す性格不明遺構であり, 暗渠と中世ピットに切られる。長径3.75 m, 短径0.73 m, 深さ6~13 cmを測り, 長軸方向はN-63°-Wで, 断面形は逆台形を呈す。埋土は暗灰黄色シルトでマンガン粒を多量に含んでいた。出土遺物は図示した白磁1点(2324)のみであった。

出土遺物

白磁 (Fig.68-2324)

2324は碗の底部の破片であり, 底径は約5.2 cmとみられる。見込には透明釉を薄く施し, 外底面は露胎である。

③ 近世以降

土坑5基, 溝跡3条, ピット1個を検出した。

i 土坑

SK-206 (Fig.70)

調査区中央部で検出した円形を呈す土坑である。径1.29 m, 深さ1.01 mを測る。断面形は逆台形を呈す。SB-207の北東隅の柱穴を切っている。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片25点, 瓦器片1点, 近世磁器片5点, 土製品1点が見られ, 磁器2点(2325・2326)と土製品1点(2327)が図示できた。

出土遺物

白磁 (Fig.72-2325)

2325は白磁の皿の底部破片で, 底径2.8 cmを測る。透明釉を薄く施す。外底面は露胎である。

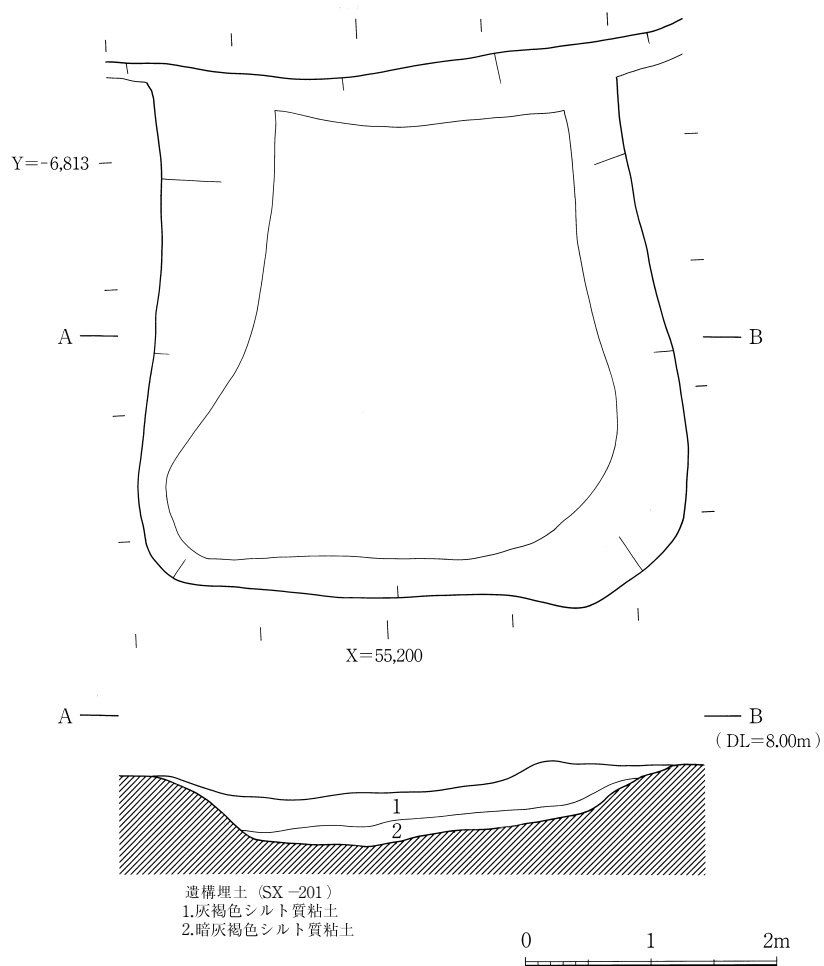


Fig.67 SX-201

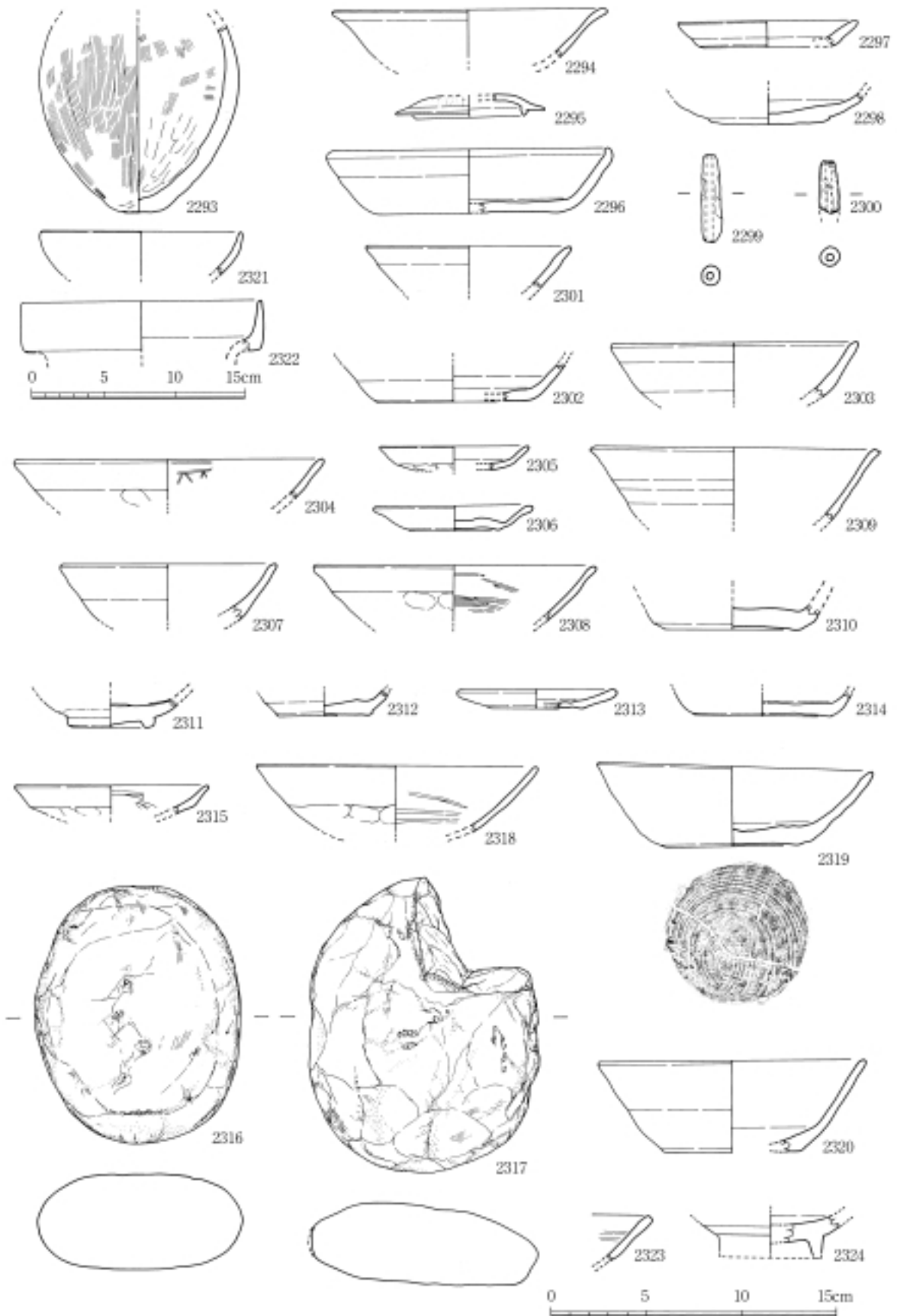


Fig.68 SE-201, P-202~224, SX-201出土遺物実測図

2. B区

磁器 (Fig.72-2326)

2326は碗の口縁部の破片である。口径は11.6 cmで、若干オリーブ色を呈す灰白色の釉を薄く施す。器面には細かな貫入がみられる。

土製品 (Fig.72-2327)

2327は円筒形の管状土錘であり、ほぼ完存する。全長3.9 cm、全幅1.2 cm、孔径0.4 cmを測る。

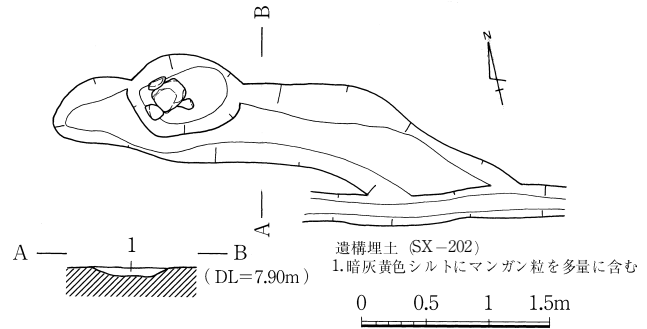


Fig.69 SX-202

SK-207

調査区中央部で検出した楕円形を呈す土坑である。長径2.03 m、短径1.13 m、深さ31 cmを測る。長軸方向はN-88°-Eで、断面形は逆三角形を呈す。SK-201及びSB-207の柱穴を切っている。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片5点、土師質土器片約100点、瓦器片5点、瓦質土器片1点、近世磁器5点、近世陶器3点、銅製品1点、石製品1点がみられ、弥生土器1点(2328)、土師質土器2点(2329・2330)、石製品1点(2331)が図示できた。

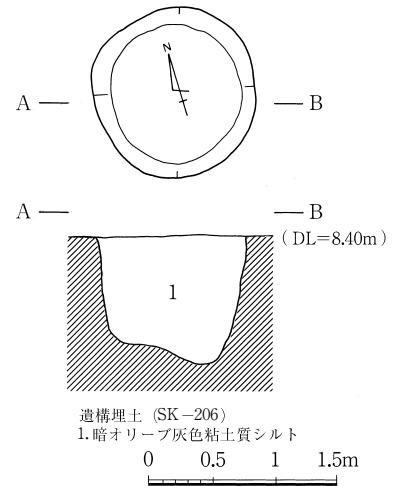


Fig.70 SK-206

出土遺物

弥生土器 (Fig.72-2328)

甕の口縁部の破片である。くの字状に強く屈曲する口縁部で、摩耗が著しく調整は不明である。

土師質土器 (Fig.72-2329・2330)

2329は杯の底部で約1/4が残存し、底径6.8 cmを測る。内面には回転ナデ調整を施すが、外面は摩耗が著しく調整は不明である。2330は小皿の破片で、口径7.6 cmを測る。内外面に回転ナデ調整を施す。

石製品 (Fig.72-2331)

2331は石鍋の底部破片で、底径21.3 cmを測る。内外面ともかなり丁寧に磨いている。

SK-208

調査区中央部で検出した楕円形を呈す土坑である。長径1.14 m、短径0.79 m、深さ69 cmを測り、長軸方向はN-73°-Wで断面形は逆台形を呈す。SB-207の柱穴及びSK-205を切っている。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片4点、土師質土器片80点、瓦器片7点、陶器1点がみられ、陶器1点(2332)が図示できた。

出土遺物

陶器 (Fig.72-2332)

2332は碗で約1/4が残存する。口径11.4 cm、器高7.6 cm、底径5.2 cmを測り、口縁部は丸い腰部から真直ぐ上がる。器面には淡黄色の釉を薄く施し、豊付のみを釉ハギする。器面には細かな貫入がみられる。18世紀代の製品と考えられる。

SK-209 (Fig.71)

調査区西部で検出した舟形を呈す土坑である。南側を攪乱によって壊されており、長径1.68m以上、短径29cm、深さ14cmを測る。長軸方向はN-13°-Eで、断面形はU字形を呈す。埋土は暗灰黄色砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片約50点がみられ、そのうちの1点(2333)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.72-2333)

2333は甕で、口縁部の約1/6が残存し、口径15.4cmを測る。くの字状に強く外傾する口縁部で、ヨコナデ調整を施す。内外面にはハケ目も残るが、摩耗が著しく調整は不明瞭である。

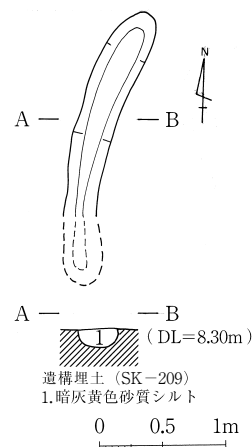


Fig.71 SK-209

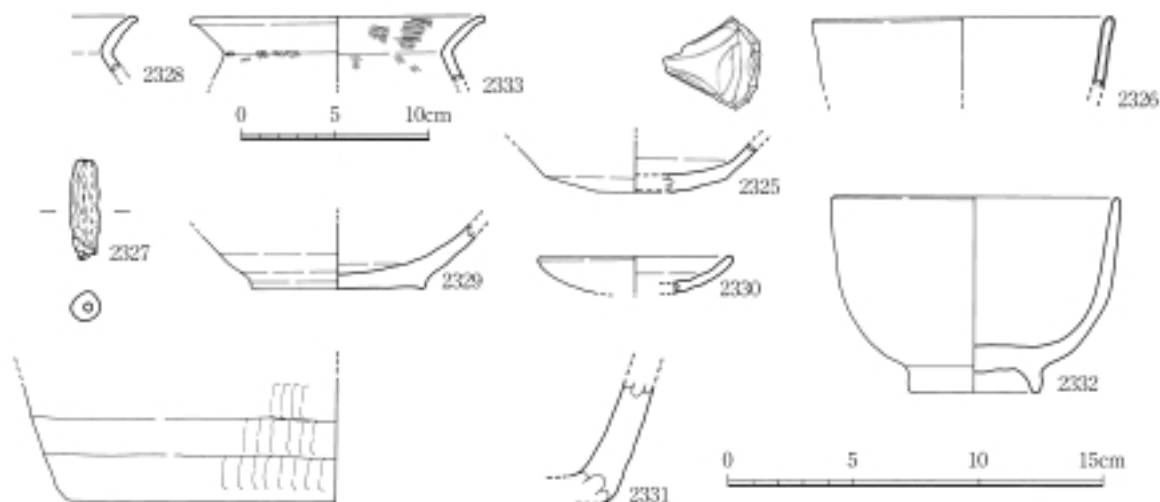


Fig.72 SK-206~209 出土遺物実測図

SK-210 (Fig.73)

調査区南西部で検出した隅丸方形を呈す土坑である。西側が調査区外に続き、長辺4.23m以上、短辺4.11m、深さ73cmを測る。長軸方向はN-84°-Wで、断面形は逆台形を呈す。近代以降の廃棄土坑と考えられ、埋土は4層に分層できる。埋土1は暗オリーブ灰色粘土質シルト、埋土2は暗緑灰色礫層、埋土3は暗緑灰色粘土層で褐色シルト質粘土のブロックを含むもの、埋土4は黒褐色粘土質シルトで木炭片、土器片を多く含んでいた。出土遺物は埋土4から近世・近代の陶磁器類を中心に太平洋戦争段階のものと考えられる機銃の薬筒(全長7.5cm、径2.1cmを測る円筒形)など約500点が出土しており、そのうち陶磁器類30点(2334~2363)が復元図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.74・75-2334~2353)

2334は色絵の碗でほぼ完形であり、口径9.7cm、器高4.4cm、底径2.9cmを測る。釉には光沢がある。2335は釉下彩の碗で、ほぼ完形であり、口径11.1cm、器高4.5cm、底径3.8cmを測る。外面の文様は酸化クロムによる濃緑色と正円子による薄紅色で施す。2336は色絵の碗で、完形であり、口径9.3cm、器高4.3cm、底径2.9cmを測る。釉は強い光沢を示す透明釉で、外面には梅の文様を施す。以上3点は

2. B区

近代の瀬戸・美濃産のものと考えられる。2337は色絵の小碗である。完形で、口径7.7cm、器高3.2cm、底径3.2cmを測る。外面の文様は濃緑色、紫色、黄色、金色など鮮やかな色使いによって施されており、朱で「辰」、「ト」の文字が入る。口縁端部に釉ハギを施す。大正期以降のものである。2338は半筒形の白磁の小碗であり、口径6.3cm、器高7.2cm、底径4.1cmを測る。完形であり、光沢の強い透明釉を施す。暈付は釉ハギを行う。瀬戸・美濃産のものと考えられる。

2339～2341は染付の輪花皿である。3点とも型紙摺りによるもので、明治以降の瀬戸・美濃産のものと考えられる。どれもほぼ完形であり、底部は蛇の目凹形高台である。2339は口径13.0cm、器高3.4cm、底径7.8cmを測り、内面に松竹梅と花紋を施す。釉薬が白濁しており、呉須の発色が悪い。2340は口径12.7cm、器高3.4cm、底径7.0cmを測り、内面には「福寿」の文字と松竹梅の文様を施す。見込に足付きハマ痕が5カ所残る。呉須は明るくコバルト色に発色する。2341は口径12.6cm、器高3.7cm、底径8.6cmを測り、内面に花紋を施す。見込に足付きハマ痕が5カ所残り、呉須は所々発色の悪い箇所がある。2342～2344の染付の皿は銅版転写によるもので、大正期以降の瀬戸・美濃産のものと考えられる。どれもほぼ完形であり、暈付に釉ハギを施す。2342は口径10.5cm、器高1.8cm、底径6.9cmを測り、内面に桜の文様を施す。口縁端部にのみ褐釉を巡らせる。2343は口径11.0cm、器高2.4

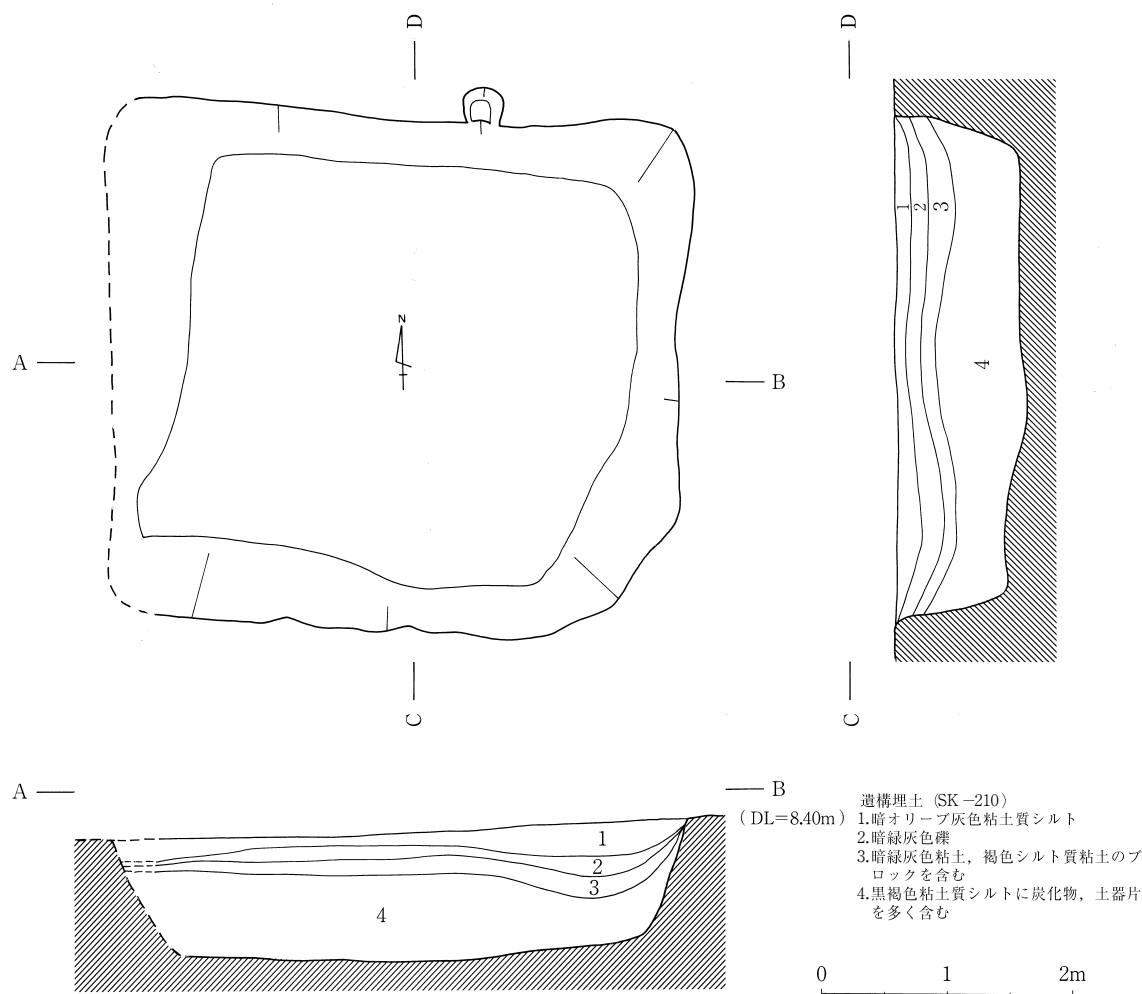


Fig.73 SK-210

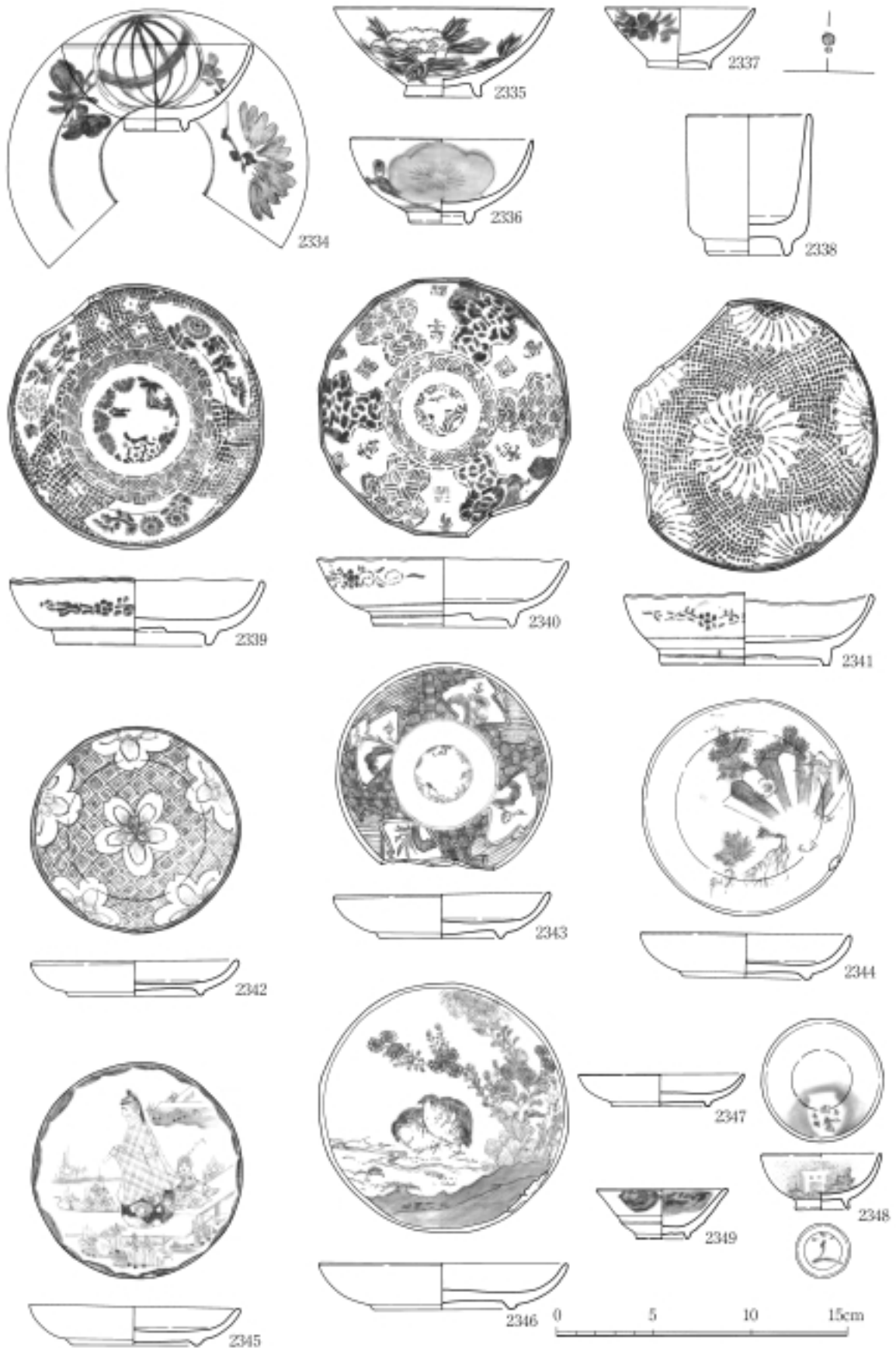


Fig.74 SK-210出土遺物実測図1

2. B区

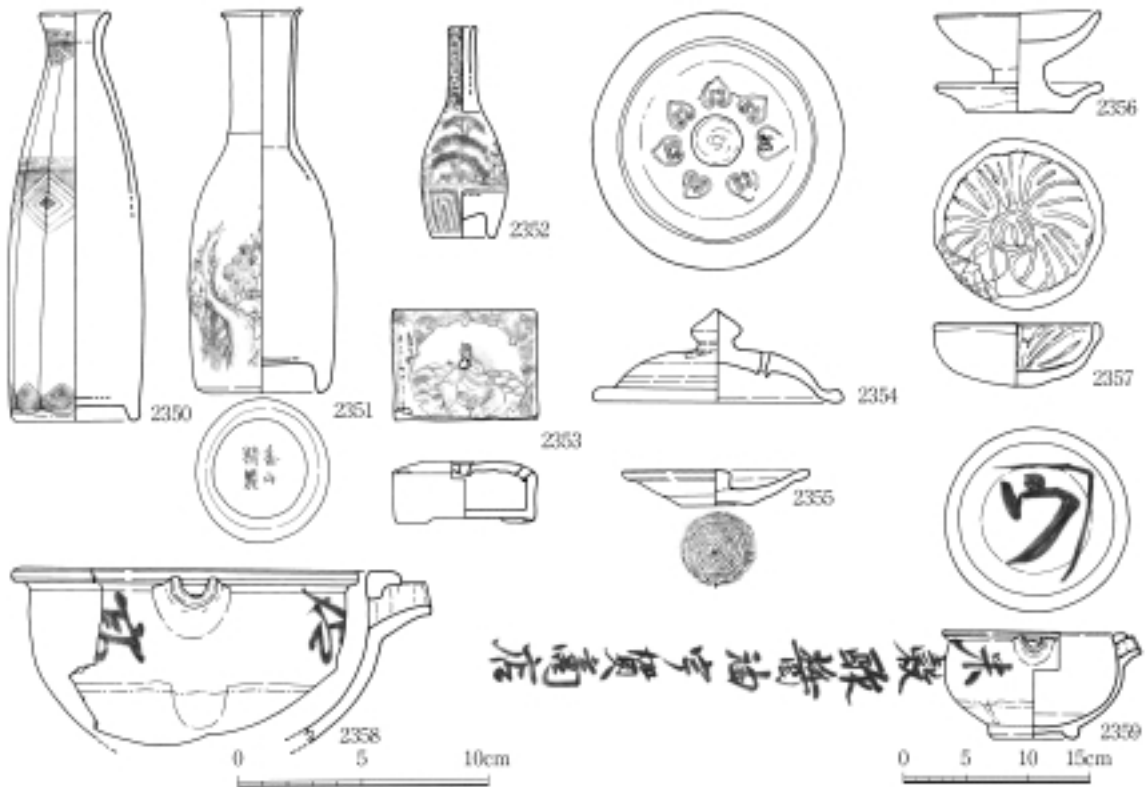


Fig.75 SK-210出土遺物実測図2

cm, 底径6.3cmを測り, 内面には松竹梅と花紋を施す。呉須は鮮やかなコバルト色を呈す。2344は口径10.8cm, 器高2.3cm, 底径6.6cmを測り, 内面に松竹梅と扇の文様を施す。2345は色絵の皿で, これも銅版転写によるものである。完形であり, 大正期以降の瀬戸・美濃産のものと考えられる。口径10.9cm, 器高2.0cm, 底径6.5cmを測る。

2346は釉下彩の皿で, 銅版転写によるものである。完形であり, 口径12.7cm, 器高2.4cm, 底径7.1cmを測る。明治末から大正期のものと考えられる。2347は白磁の皿で, 完形である。口径8.5cm, 器高1.7cm, 底径5.0cmを測り, 畳付は釉ハギを行う。大正期以降の瀬戸・美濃産のものと考えられる。

2348・2349は完形の釉下彩の酒杯である。2348は口径6.0cm, 器高3.9cm, 底径2.7cmを測る。内面に「本三 陶器高今村」と記す。大正期以降のものである。高台内にも文字を記す。2349は口径6.6cm, 器高2.6cm, 底径2.6cmを測り, 口縁部は黄橙色ないし褐色を呈す。外



Fig.76 SK-210出土遺物実測図3

底面は露胎である。近代のもので瀬戸・美濃産と考えられる。2350は染付の爛徳利で、完形である。口径2.6cm, 器高16.0cm, 胴径5.4cm, 底径4.8cmを測り, 畳付は釉ハギを行う。銅版転写によるものであり, 呉須は鮮やかな発色を呈す。大正期以降のものである。2351は色絵の爛徳利で, 完形である。口径3.1cm, 器高15.0cm, 胴径5.8cm, 底径4.5cmを測り, 畳付は釉ハギを行う。銅版転写によるもので, 梅の花は正円子により薄紅色を呈す。大正期以降のものである。2352は染付の小瓶で, 銅版転写によるものである。完形で, 口径1.0cm, 器高8.3cm, 胴径3.4cm, 底径2.4cmを測る。高台内は露胎である。2353は染付の水滴である。完形で, 全長5.8cm, 器高2.4cmを測る。近代の瀬戸・美濃産のものと考えられる。



Fig.77 SK-210出土遺物実測図4

陶器 (Fig.75~79-2354~2363)

2354は土瓶か急須の蓋で, 素焼きである。完形で, 口径9.7cm, 器高3.6cmを測り, 天井部の1カ所に孔を穿つ。幕末から明治初頭のものと考えられる。2355は急須の落とし蓋である。完形で, 口径7.4cm, 器高1.5cmを測り, 外面は透明釉を薄く施し, 内面は露胎である。2356は完形の台付灯明皿で, 口径6.6cm, 器高4.1cm, 受け部径6.7cm, 底径4.4cmを測る。底部を除き, 全体に鉄釉を施す。底部は露胎である。2357は小形の鉢形容器で素焼きである。ほぼ完形で, 口径6.7cm, 器高2.5cmを測る。菓子の型として使用されていたと考えられる。

2358・2359は片口で, 内面全面と外面の体部中位まで化粧土を施し, 外面には呉須で文字を記す。全体に透明釉を施すが, 外面中位以下は露胎であり, 口縁部には釉ハギを施す。2358は約1/4が残存し, 口径14.6cmを測る。高岡の「高」と商店の「店」が確認できる。部分的に貫入がみられる。2359はほぼ完存し, 口径14.4cm, 器高8.7cm, 底径6.4cmを測る。内面は化粧土の一部が変色して明赤灰色を呈し, 呉須で「ウ」の文字を記す。外面には呉須で「米穀酢 醬油 宇高 商店」と記す。ともに在地の窯で作成されたものと考えられる。



Fig.78 SK-210出土遺物実測図5

2360は陶胎染付の徳利で, 口縁部の一部を欠損する。口径3.4

2. B区

cm, 器高26.3cm, 胴径14.8cm, 底径9.4cmを測る。底部以外に化粧土を施し, 外面に呉須で文字を記す。全体に透明釉を薄く施す。畳付は露胎であり, 高台内には鉄釉を施す。全体に細かな貫入がみられる。2361も徳利で, 完形である。口径3.4cm, 器高21.0cm, 胴径12.8cm, 底径8.0cmを測る。畳付を除いて鉄釉を施し, 外面に白色の文字を記す。2362も徳利であり, 口縁部のみ欠損する。

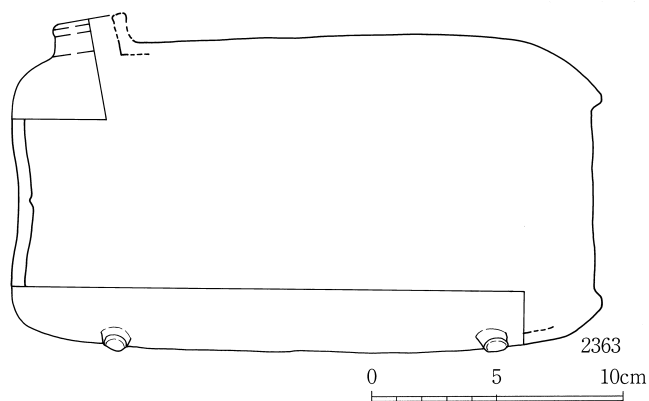


Fig.79 SK-210出土遺物実測図6

胴径8.9cm, 底径7.2cmを測る。頸部には鉄釉, 肩部以下には畳付を除いて化粧土を施す。高台内にも薄く化粧土を施し, 墨書を残す。2363は陶器の湯たんぽである。ほぼ完形であり, 全長23.3cm, 器高13.3cmを測る。底部の4ヵ所に約0.5cmの足がつく。全体に化粧土を施したのち透明釉を施す。

Tab.2 B区土坑計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸方向 (NはGN)	時 代	備考
		長辺()	短辺()	深さ()			
SK - 201	楕円形	1.39	(0.42)	0.35	N - 72° - W	弥生時代	
SK - 202	隅丸方形	1.18	1.14	0.17	N - 10° - E	中 世	
SK - 203	円 形	1.35	-	0.14	-	中 世	
SK - 204	不 整 形	2.16	1.77	0.08	N - 5° - W	中 世	
SK - 205	円 形	1.18	-	0.67	-	中 世	
SK - 206	円 形	1.29	-	1.01	-	近世以降	
SK - 207	楕円形	2.03	1.13	0.31	N - 88° - E	近世以降	
SK - 208	楕円形	1.14	0.79	0.69	N - 73° - W	近世以降	
SK - 209	舟 形	1.68	0.29	0.14	N - 13° - E	近世以降	
SK - 210	隅丸方形	(4.23)	4.11	0.73	N - 84° - W	近世以降	

ii 溝跡

SD-208

調査区北部で14.40mに渡って検出した東西溝で暗渠と考えられる。SD-202, SD-203を切り, 西は調査区外に延びる。幅は38~42cm, 深さ40~56cmを測る。断面形は箱形を呈し, 基底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色粘土質シルトでマンガン粒を多量に含んでいた。出土遺物には弥生土器片2点, 須恵器細片, 土師質土器片9点, 瓦器片2点, 瓦質土器片2点, 近世磁器1点, 鉄滓1点がみられ, 瓦質土器1点(2364), 磁器1点(2365)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.80-2364)

2364は羽釜の口縁部の破片である。やや内湾する口縁部で, 端部から1.5cmほど下に上方に傾く小さな鏝が付く。

白磁 (Fig.80-2365)

2365は碗の底部破片で、底径6.0cmを測る。内面には透明釉を薄く施し、見込に一条の沈線が巡る。外面は露胎である。

SD-209

調査区東部で11.50 mに渡って検出した南北溝で暗渠と考えられる。中世ピット及びSD-210を切る。幅は31~42 cm、深さ56~62 cmを測る。断面形は箱形を呈し、基底面はやや北へ傾斜する。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片10点、土師質土器片33点、瓦器片4点、青磁片1点、陶器9点がみられ、瓦器2点(2366・2367)、磁器1点(2368)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.80-2366・2367)

ともに碗の口縁部で、ヨコナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。2366は約1/10が残存し、口径15.4 cmを測る。2367も約1/10が残存し、口径12.0 cmを測る。

磁器 (Fig.80-2368)

2368は紅皿の破片で、口径4.3 cm、器高1.4 cm、底径0.8 cmを測る。透明釉を薄く施すが、体部下半は露胎である。

SD-210

調査区中央部で20.40 mに渡って検出した東西溝で暗渠と考えられる。SD-207, SX-201を切り、SD-209に切られている。幅は40 cm前後、深さ40~70 cmを測る。断面形は箱形を呈し、基底面はやや東へ傾斜する。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器、須恵器、土師質土器、瓦器、東播系須恵器、磁器の細片がみられたが、復元図示できるものはなかった。

iii ピット

P-225

調査区南西部で検出した円形のピットである。径51 cm、深さ23 cmを測り、埋土は暗灰黄色砂質シルトであった。出土遺物は図示した陶器片1点(2369)のみであった。

陶器 (Fig.80-2369)

2369は唐津焼の碗の底部破片である。底径4.0 cmを測る。見込には胎土目が残り、外底面は露胎である。16世紀末~17世紀初頭のものと考えられる。

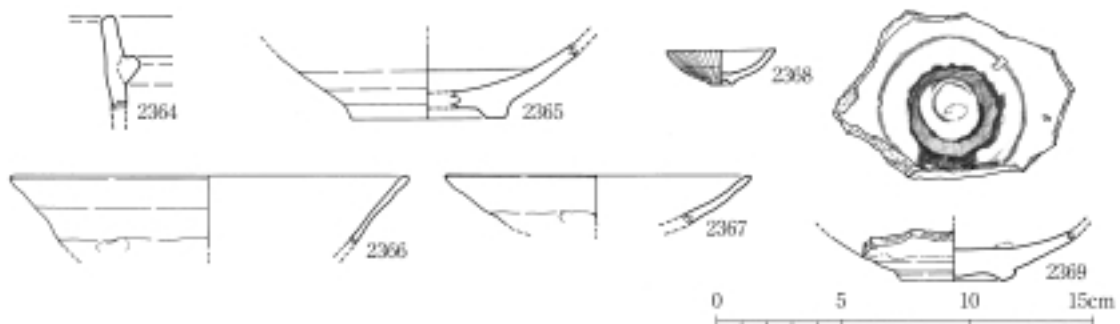


Fig.80 SD-208・209, P-225出土遺物実測図

3. C区

3. C区

C区は延べ面積5,115㎡と広く、現況は宅地であり家屋の基礎工事のため所々攪乱を受けていた。客土も厚く、堆積層は調査区全体に堆積するものよりも部分的な堆積をみせる層が多い。近世以降の遺物包含層は全体的な拡がりをみせるが、主に遺物が包含されるのは南東部と北西部であった。中世の遺物包含層も調査区全体で認められた。古代については、調査区西部で細片が若干量出土したのみであった。弥生時代の遺物包含層は主に北西部に堆積し、南東部にも一部残っていたが、北東部では中世以降に削平されたとみられ確認されなかった。本調査区中央部には明治から昭和前半の間に池があったとのことで水の影響によって堆積層が部分的に変色していた。本調査区の地形は、東がB区から続く微高地状の地形であり、中央部で若干下がった後北西へ上がる。遺物・遺構は近世以降、中世、弥生時代の3時期のものを中心に確認された。なお、調査区西部に下層確認のためのトレンチ(TR-1)を設定した。

(1) 層序

- 第Ⅰ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)～褐色(10YR4/4)砂質シルト層
- 第Ⅱ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト層
- 第Ⅲ層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト層
- 第Ⅳ層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層
- 第Ⅴ層 灰黄褐色(10YR4/2)～暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層
- 第Ⅵ層 暗褐色(10YR3/3)砂質シルト層
- 第Ⅶ層 黒色(10YR2/1)シルト質粘土層
- 第Ⅷ層 暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト層
- 第Ⅸ層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト層
- 第Ⅹ層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質粘土層
- 第Ⅺ層 にぶい黄橙色(10YR6/4)粘土層
- 第Ⅻ層 黒褐色(10YR3/2)粘土層
- 第Ⅼ層 黄褐色(2.5Y5/4)～にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土層
- 第Ⅽ層 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト層
- 第Ⅾ層 にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粘土層
- 第ⅰ層 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粘土層
- 第ⅱ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層
- 第ⅲ層 褐色(10YR4/4)砂質シルト層
- 第ⅳ層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト層
- 第ⅴ層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質粘土層
- 第ⅵ層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土層
- 第ⅶ層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質粘土層
- 第ⅷ層 黄褐色(2.5Y5/3)粘土層

第Ⅰ層は旧表土層で、客土の影響で小礫が多く混入していた。調査区全体に拡がりをみせるが、削平

を受けている箇所や上に客土の堆積がみられる箇所が所々にみられる。近世以降の遺物を包含する。

第Ⅱ層は近世以降の遺物包含層で、マンガング粒、炭化物が多く混入し、調査区の南西部を除いて広く堆積していた。

第Ⅲ層は近世～近代の遺物包含層とみられるもので、黄褐色礫を多く含んでいた。調査区東部にのみ薄く堆積する。

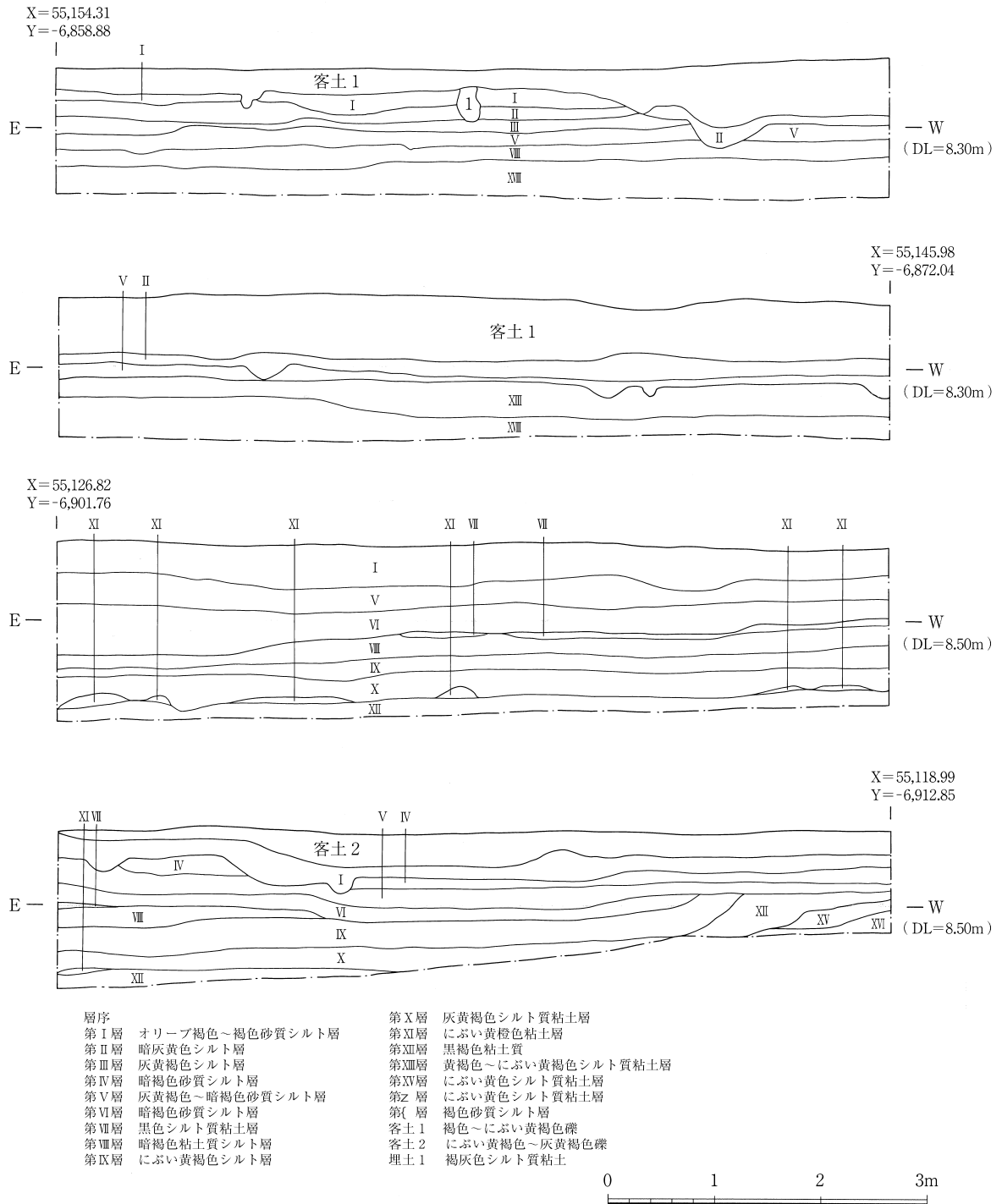


Fig.81 C区南壁セクション図

3. C区

第IV層は自然堆積層で、調査区南西隅の狭い範囲に堆積していた。

第V層は調査区全体に広く堆積する中世の遺物包含層で、12~13世紀を中心とする。第II層に伴う遺構をこの上面で検出した。黄褐色の小礫や若干の炭化物の混入が認められた。

第VI層は中世~古代の遺物包含層とみられ、調査区南西部でのみ確認した。この層の上面で第V層に伴う遺構を検出した。一部の中世遺構は第VI層中でも検出できたが、第VI層上面で検出した遺構と時期的な差はみられなかった。

第VII層は自然堆積層で第VI層と第VIII層の間で部分的に認められた。

第VIII層から第X層は、調査区南西部のみで認められた堆積層であり、第VIII層は古代の遺物包含層とみられるが、遺物量は少ない。黄褐色小礫を非常に多く含んでいた。

第IX層は自然堆積層である。

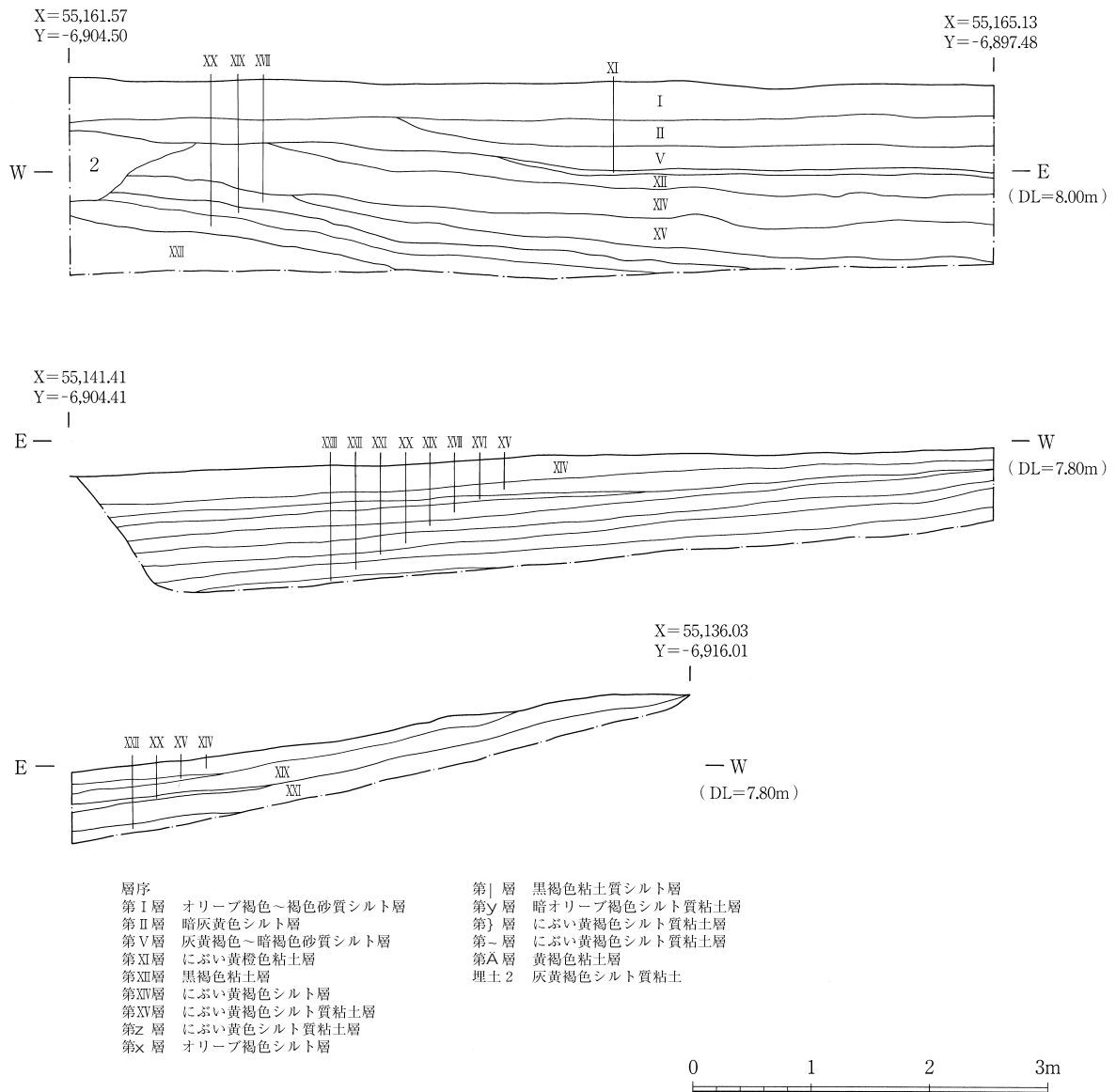


Fig.82 C区北壁セクション図・TR-1南壁セクション図

第Ⅹ層は自然堆積層である。

第Ⅺ層は自然堆積層で、調査区西部で確認された。

第Ⅻ層は自然堆積層で調査区西に広がる。調査区北西部ではこの層の上面に第Ⅴ層に伴う遺構を検出した。

第Ⅼ層は弥生時代後期の遺物包含層で炭化物、マンガン粒を少量含む。調査区東部で認められ、上面で第Ⅴ層に伴う遺構を検出した。また、弥生時代の土器集中遺構などを本層中に確認した。

第Ⅽ層は調査区北西部で確認した弥生時代の遺物包含層で、調査区東部の第Ⅼ層とつながる可能性も考えられる。

第Ⅾ層は弥生時代後期の遺物包含層である。

第ⅰ層は自然堆積層で、TR-1と調査区南西隅で確認したが全体的な拡がりはないものと考えられる。

第ⅱ層は弥生時代後期の遺物包含層である。

第ⅲ層は弥生時代後期の遺物包含層で、調査区東南部では第Ⅼ層の下で認められ、調査区東北部では第Ⅴ層の下で確認された。

第ⅳ層は自然堆積層で、黄褐色礫を含む。調査区北西部でのみ確認した。上面で第Ⅾ層、第ⅱ層に伴う弥生時代後期の遺構を検出した。

第ⅴ層は弥生時代前期～中期の遺物包含層で、黄褐色礫を多く含んでいた。調査区北西部の一部でのみ確認できた。

第ⅵ層は自然堆積層で、礫を少し含んでいた。調査区北西隅近辺では第ⅳ層、第ⅴ層の堆積がみられず、本層の上面で第Ⅾ層、第ⅱ層に伴う弥生時代後期の遺構を検出した。

第ⅵ層はTR-1でのみ認められた自然堆積層で、礫を多く含んでいた。

第ⅶ層はTR-1でのみ認められた自然堆積層である。

(2) 堆積層出土遺物

第ⅰ層出土遺物

磁器 (Fig.83・84-3001~3027)

3001は広東碗の蓋で、つまみ部のみ完存し、つまみ径5.5cmを測る。呉須は鮮やかに発色し、天井部に虫の文様を施す。断面には光沢がみられないが、胎土は堅緻である。19世紀前半の肥前のものと考えられる。3002は端反碗の蓋であり、約1/4が残存する。口径9.3cm、器高2.7cm、つまみ径4.0cmを測る。能茶山産の製品で、天井部内面に角内「茶」銘が認められる。内面には雷紋帯が巡る。3003・3004は染付の端反碗で、型紙摺りとなっている。3003は約1/2が残存し、口径10.4cm、器高5.8cm、底径3.8cmを測る。畳付は釉ハギを行う。3004は約2/3が残存し、口径10.6cm、器高5.4cm、底径4.0cmを測る。見込に蛇の目釉ハギを施し、畳付には微砂が付着する。呉須は鮮やかな発色をみせる。2点とも明治期の瀬戸・美濃産のものと考えられる。3005も染付の端反碗で、約1/4が残存し、口径11.1cm、器高6.0cm、底径4.0cmを測る。畳付は釉ハギを行う。呉須の発色は悪い。幕末頃の瀬戸・美濃産と考えられる。3006・3007は染付の丸碗であり、3006は型紙摺りで、ほぼ完存し、口径11.0cm、器高5.5cm、底径4.0cmを測る。外面には蝶と菊の文様を施す。断面は光沢のある堅緻な胎土であり、

3. C区

明治期の瀬戸・美濃産のものと考えられる。3007は約1/2が残存し、口径11.4cm、器高4.6cm、底径3.9cmを測る。畳付には微砂が付着する。断面は光沢のある堅緻な胎土であり、近代の瀬戸・美濃産のものと考えられる。3008は約1/2が残存する広東碗で、口径12.2cm、器高6.3cm、底径6.3cmを測る。全体に貫入がみられ、畳付は釉ハギを行う。胎土は粗く、断面は淡黄色を呈す。19世紀前半の瀬戸・美濃産と考えられる。3009・3010は染付の碗の底部である。3009は底部のみ完存し、底径4.0cmを測る。呉須は淡い発色を示し、全体に貫入がみられる。18世紀後半のものと考えられる。3010は底部の約1/2が残存し、底径5.0cmを測る。呉須は淡い発色を示し、全体に貫入がみられる。見込には松竹梅の文様、高台内には角内「茶」銘が施される。能茶山産と考えられる。3011は青磁碗の底部で、約1/2が残存し、底径5.1cmを測る。全体に灰オリーブ色釉を施し、器面には貫入がみられる。畳付は釉ハギを行う。3012は半筒形の小碗で、約1/2が残存し、口径7.1cm、器高5.8cm、底径4.3cmを測る。釉は光沢の強い透明釉で、呉須は濃厚な発色をみせる。畳付は釉ハギを行う。19世紀代の肥前産のものと考えられる。3013は筒丸形の小碗で、約1/2が残存し、口径6.7cm、器高5.5cm、底径3.7cmを測る。釉はやや光沢があり、呉須は発色が鈍く青灰色を呈す。畳付は釉ハギを行う。19世紀代の肥前産のものと考えられる。

3014・3015・3016は染付の輪花皿で、型紙摺りによるもので、底部はすべて蛇の目凹形高台である。3014は約2/3が残存し、口径12.9cm、器高2.7cm、底径8.0cmを測り、内面に花紋を施す。3015も同様の型によるもので、法量も3014と同じである。約1/2が残存する。3016は約1/2が残存し、口径13.0cm、器高3.1cm、底径8.1cmを測る。呉須の発色は鮮やかである。3点とも明治期の瀬戸・美濃産のものと考えられる。3017・3018は染付の皿で、ともに約1/3が残存する。3017は口径10.8cm、器高2.2cm、底径6.2cmを測る。型紙摺りによるものであり、釉薬は白濁して、呉須の発色が悪い。畳付は釉ハギを行う。明治期の瀬戸・美濃産と考えられる。3018は口径7.6cm、器高2.3cm、底径4.5cmを測り、呉須の発色は良くない。畳付は釉ハギを行う。19世紀の肥前産のものと考えられる。3019は色絵の皿で、約1/2が残存し、口径11.4cm、器高2.3cm、底径6.0cmを測る。全面に光沢のある釉を施す。畳付は釉ハギを行う。近代の瀬戸・美濃産のものである。3020は青磁の皿で、約1/2が残存し、口径10.6cm、器高1.9cm、底径6.8cmを測る。外面は酸化クロムによる明緑灰色を呈し、畳付には微砂が付着する。明治以降のものと考えられる。3021・3022は白磁の皿で、3021は約1/2が残存し、口径9.2cm、器高1.8cm、底径5.2cmを測る。断面には光沢があり、畳付には微砂が付着する。瀬戸・美濃産のものと考えられる。3022は約1/2が残存し、口径11.2cm、器高2.2cm、底径6.0cmを測る。光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。高台内に「岐331」と記されており、第二次大戦中に国家統制下のものと岐阜工場で生産されたものと考えられる。

3023は染付の輪花鉢で、口径14.2cm、器高4.2cm、底径8.3cmである。呉須は暗青灰色、断面はややくすんだ灰白色を呈す。見込には五弁花を施し、高台内には文字を記す。18世紀中頃の肥前産のものと考えられる。3024は染付の酒杯である。ほぼ完形で、口径7.4cm、器高2.8cm、底径2.5cmを測る。呉須は鮮やかな発色をみせ、断面には光沢がある。畳付は釉ハギを行う。明治以降の瀬戸・美濃産のものと考えられる。3025は色絵の酒杯で、ほぼ完形であり、口径5.8cm、器高2.8cm、底径2.4cmを測る。内面の色絵の大半は剥落する。畳付は釉ハギを行う。3026は釉下彩の酒杯で、約1/2が残存す

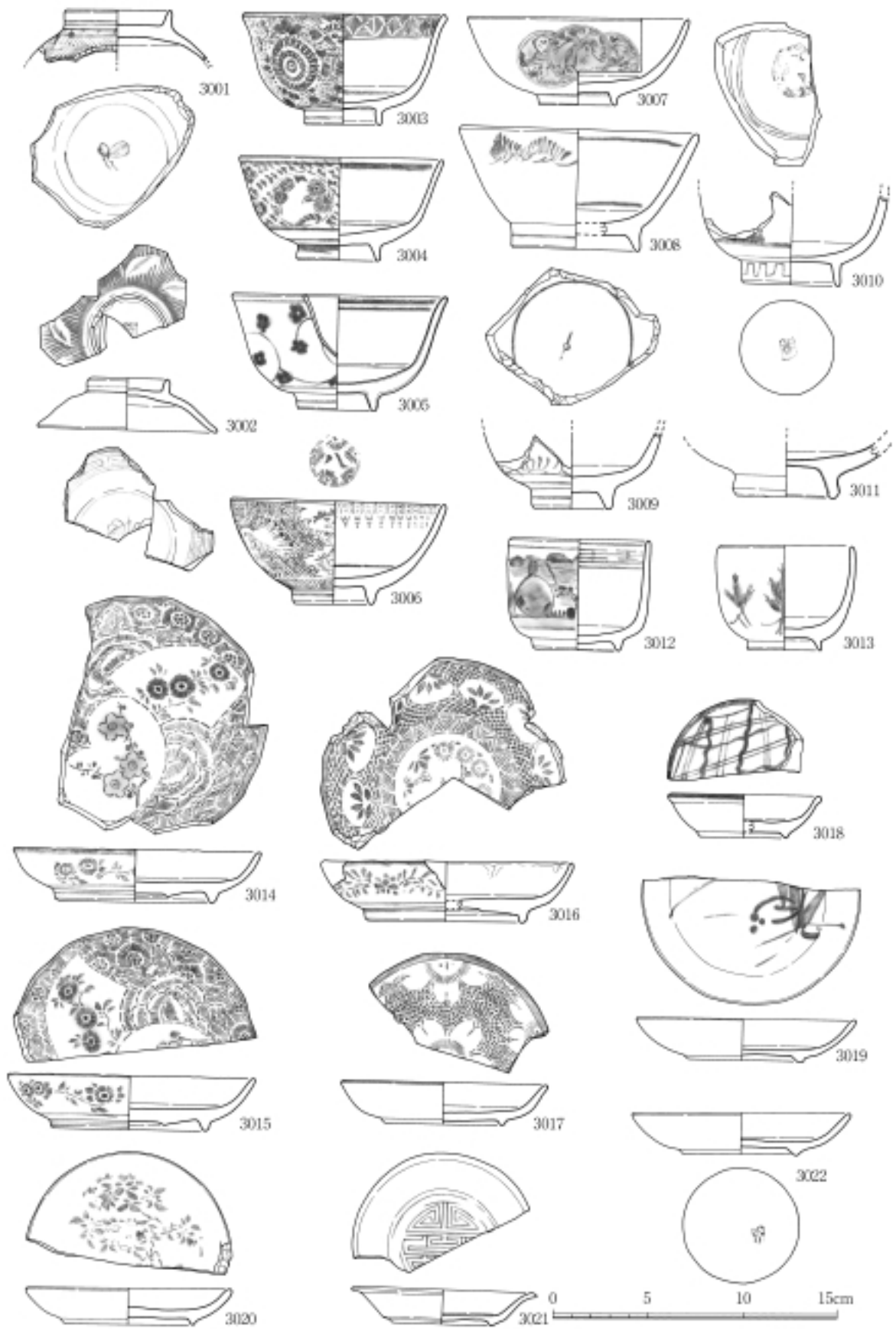


Fig.83 C区第I層出土遺物実測図(磁器)

3. C区

る。口径5.6cm, 器高2.9cm, 底径2.2cmを測り, 口縁部は灰赤色, 底部は濃緑色を呈す。豊付は釉ハギを行う。3027は染付で, 長頸の壺形の仏花器である。口径7.5cm, 器高17.1cm, 底径6.2cmを測り, 内面は露胎であり, ロクロ目が明瞭に残る。呉須はやや淡い発色を示し, 断面はくすんだ灰色を呈す。幕末から明治期の大衆的な製品である。

陶器 (Fig.84-3028~3030)

3028はほぼ完形の皿で, 口径8.3cm, 器高2.1cm, 底径3.3cmを測る。内面は透明釉を薄く施し, 貫入がみられる。見込の3カ所に重ね焼きの痕跡が残る。外面はほとんど露胎である。3029は完形の壺で, 口径7.9cm, 器高7.9cm, 胴径9.2cm, 底径4.2cmを測る。褐釉を薄く施す。底部は露胎であり, 高台内に「二十六才男」と墨書が残る。3030は小形の鉢形容器で, 約1/2が残存し, 口径4.0cm, 器高2.3cm, 底径3.4cmを測る。透明釉を薄く施し, 底部は露胎である。

土製品 (Fig.84-3031・3032)

3031は紡錘形の管状土錘で, ほぼ完形である。全長4.3cm, 全幅1.3cm, 孔径0.4cmを測る。3032は円筒形の管状土錘で, ほぼ完形である。全長3.7cm, 全幅1.0cm, 孔径0.5cmを測る。



Fig.84 C区第I層出土遺物実測図(磁器・陶器・土製品)

第II層出土遺物

弥生土器 (Fig.85-3033~3036)

3033・3034は甕の底部破片で, とともに平底の底部から, 胴部は外上方へほぼ真直ぐ上がる。底部付近にはタタキ目が残る, 胴部外面には緻密なハケ調整を施す。3033は底径4.8cmを測り, 内面には

不明瞭ながらハケ目が残る。3034は底径2.6cmを測り、内面にはナデ調整を施す。3035は鉢で、底部から体部にかけての破片である。底径は3.6cmを測る。摩耗が著しく調整は不明瞭ながら、外面にタタキ目とハケ目が残る。内面には指ナデを施す。3036も鉢の底部の破片である。底径2.1cmを測り、内面にはハケ調整を施す。外面は摩耗が著しく調整は不明である。

須恵器 (Fig.85-3037)

3037は短頸壺の口縁部で、約1/8が残存し、口径11.3cmを測る。内面から口縁端部にかけて回転ナデ調整を施す。

瓦器 (Fig.85-3038)

3038は椀の底部の約1/3が残存し、底径5.5cmを測る。内底面に平行線状の暗文が残る。

土師質土器 (Fig.85-3039)

3039は小皿の破片で、口径8.0cm、器高1.5cm、底径4.9cmを測る。内面に回転ナデ調整を施す。

備前焼 (Fig.85-3040)

3040は播鉢で約1/6が残存し、口径34.0cm、器高13.5cm、底径14.9cmを測る。体部は平らな底部から外上方に上がり、口縁部はヨコナデ調整の後に2条の沈線を施す。

青磁 (Fig.85-3041・3042)

3041は同安窯系の碗で、底部のみ完存し、底径4.8cmを測る。オリーブ灰色釉を薄く施す。外底面は露胎である。3042は龍泉窯系の碗で、口縁部の破片である。口径15.4cmを測り、内面には劃花文が残る。

磁器 (Fig.85-3043~3047)

3043は染付で、小物入れの蓋である。完形であり、笠部径6.1cm、かえり径5.0cm、器高1.9cmを測る。受部には溶着を防ぐための微砂が付着する。18世紀後半から19世紀初頭の肥前産のものと考えられる。3044は碗の蓋で、外面青磁、内面染付となっている。約1/2が残存し、つまみ径4.2cmを測る。天井部内面に五弁花を施す。18世紀後半の肥前産のものと考えられる。

3045・3046は染付の端反碗である。3045は口縁部の一部を欠損する。型紙摺りによるもので、口径9.8cm、器高5.7cm、底径3.7cmを測る。外面には花紋を施し、暈付には微砂が付着する。明治期の瀬戸・美濃産と考えられる。3046は約1/3が残存し、口径10.6cm、器高6.0cm、底径4.0cmを測る。呉須の発色はにぶく、断面はほとんど光沢がない。幕末期のものと考えられる。3047は染付の広東碗で、能茶山焼である。底部の約1/2が残存し、底径6.4cmを測る。見込には、筆書きによる五弁花、高台内には角内「茶」銘を施す。呉須は薄い青色に発色し、暈付は釉ハギを行う。

陶器 (Fig.85-3048~3050)

3048は碗で約2/3が残存する。大きく外反する口縁部で、口径18.5cm、器高4.9cm、底径5.0cmを測る。内面から外面の体部中位まで鉄釉を施し、底部は露胎である。見込には蛇の目釉ハギの後に白色土を塗布する。3049は皿の口縁部の破片で、口径27.0cm、器高4.5cm、底径10.4cmを測る。体部にはロクロ目が明瞭に残る。内面は透明釉を薄く施す。外面はほとんど露胎である。明治期のものと考えられる。

3050は壺であり、底部の約1/5が残存し、底径8.0cmを測る。外面は体部に鉄釉を施し、底部は露

3. C区

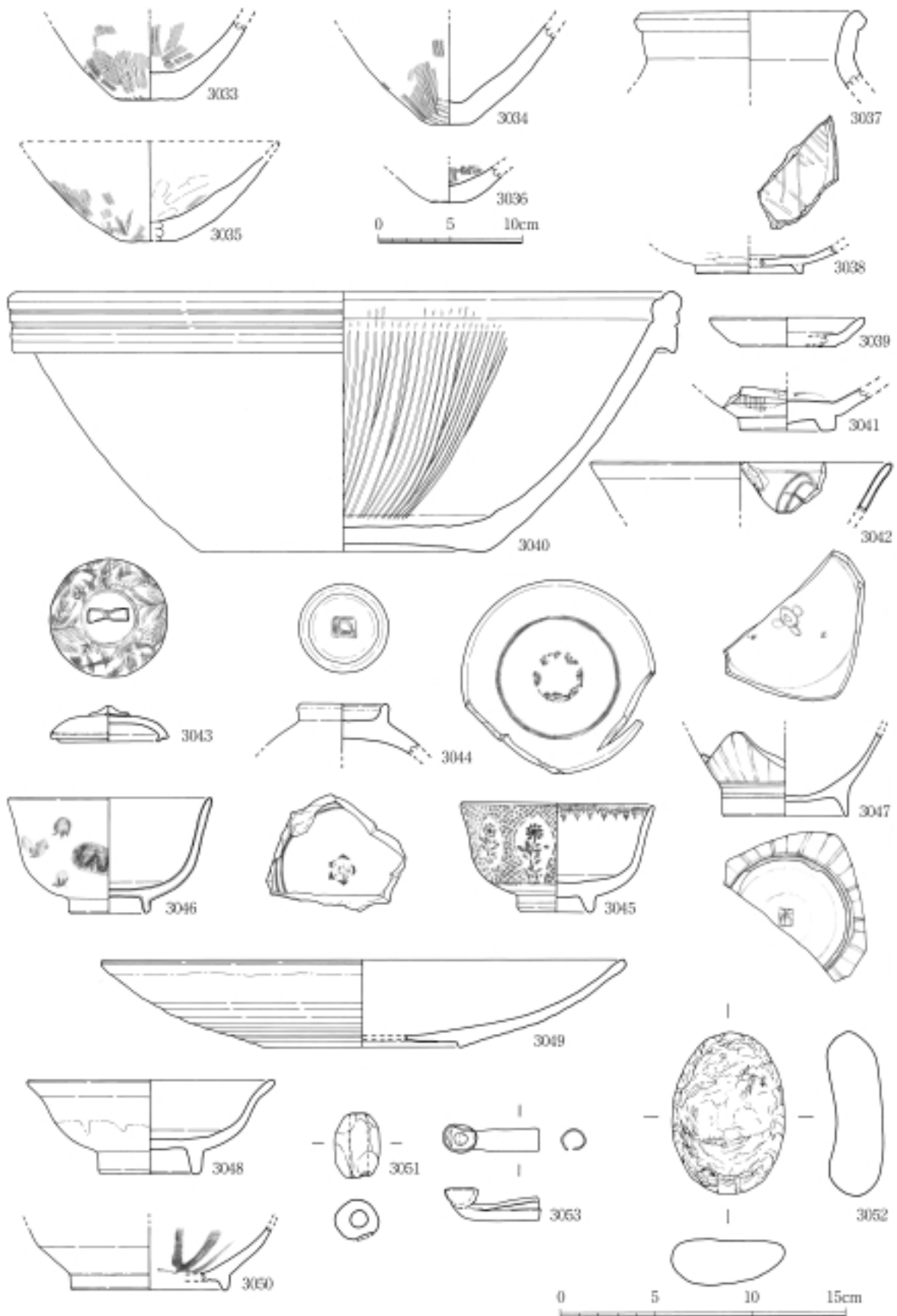


Fig.85 C区第II層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・瓦器ほか)

胎である。内面には若干釉が流れ込んでいる。高台は削り出し高台である。

土製品 (Fig.85-3051)

3051は紡錘形の管状土錘である。ほぼ完形で、全長3.3cm、全幅2.3cm、孔径0.9cmを測る。外面数カ所に指頭圧痕が残る。

石製品 (Fig.85-3052)

3052は砥石で一部が欠損する。全長8.4cm、全幅5.8cm、全厚2.4cmを測る。石材は砂岩である。

金属製品 (Fig.85-3053)

3053は煙管であり、雁首のみ残存する。全長5.0cmを測る。圧力を受けて羅字が割れており、火皿も一部潰れている。

第V層出土遺物

弥生土器 (Fig.86-3054~3059)

3054は壺の口縁部で約1/6が残存し、口径16.3cmを測る(B-2類)。摩耗が著しいが胴部外面にはタタキ目、内面にはハケ目が少し残る。3055・3056・3057は甕の底部である。3点とも小さな平底の底部で、外面にはタタキ目とハケ目が残る。内面には指ナデ調整を施す。3055は底部の約1/2が残存し、底径3.4cmを測る。3056も底部の約1/2が残存し、底径2.9cmを測る。3057は底部の3/4ほど残存し、底径2.7cmを測る。

3058は鉢で、平底の底部が完存し、底径2.4cmを測る。外面には不明瞭ながらタタキ目とハケ目が残る。内面は摩耗が著しく調整は不明である。3059も鉢で、ボタン状に突起する底部が完存する。底径3.7cmを測る。内外面とも摩耗が著しく若干の指頭圧痕のみ確認できる。

土師器 (Fig.86-3060)

3060は甕であり、口縁部の約1/5が残存し、口径23.8cmを測る。胴部は長胴であり、口縁部はくの字状に強く外傾する。胴部外面は目の粗いタテ方向のハケ調整、内面にはナデ調整を施す。口縁部は外面にナデ調整、内面にヨコ方向のハケ調整、端部にヨコナデ調整を施す。

須恵器 (Fig.86-3061)

3061は壺の底部の破片であり、底径10.7cmを測る。内外面とも回転ナデ調整を施す。

瓦器 (Fig.86-3062~3064)

3点とも小皿であり、口縁部にヨコナデ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。3062は約1/5が残存し、口径7.7cm、器高1.4cm、底径5.6cmを測る。3063も約1/5が残存し、口径8.0cm、底径5.8cmを測る。内面には暗文が残る。3064は口縁部の破片で、口径8.6cm、底径6.3cmを測る。内面には不明瞭ながら暗文が残る。

東播系須恵器 (Fig.86-3065~3068)

3065は椀の口縁部の破片で口径15.4cmを測る。外上方に真直ぐ上がる口縁部で、端部を厚く仕上げ。内外面に回転ナデ調整を施す。

3066~3068は片口鉢の口縁部の破片で、端部を上につまみ上げ拡張する。内外面にナデ調整を施す。3066は口径27.4cm、3067は口径23.8cmを測る。

3. C区

土師質土器 (Fig.87-3069~3106)

3069~3092は杯である。3069・3070は同様の作りで、口縁部は平らな底部から緩やかに外反する。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。3069は完形で、口径13.8cm、器高4.4cm、底径7.2cmを測る。調整は摩耗が著しく不明である。3070は約3/4が残存し、口径14.7cm、器高4.3cm、底径7.2cmを測る。摩耗が著しく調整は不明であるが、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。3071は口縁部の一部が欠損する。口径12.2cm、器高4.5cm、底径8.2cmを測り、口縁部は平らな底部から外上方に真直ぐ延びる。成形はロクロ水挽で、内底面にはロクロ目が残る。体部から口縁部にかけて、外面は未調整、内面は摩耗のため調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。3072は約3/4が残存し、口径11.2cm、器高2.7cm、底径6.0cmを測る。成形はロクロ水挽で、調整は器面が摩耗しており不明である。内底面にはロクロ目を確認でき、底部の切り離しは不明である。3073は約1/2が残存するが、口縁部は欠損する。底径6.4cmを測り、体部は平らな底部からほぼ真直ぐに外上方へ延びる。外面は未調整であり、内面は回転ナデ調整の後に内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。3074は約1/3が残存し、口径12.8cm、器高4.1cm、底径7.4cmを測る。口縁部は平らな底部から外上方に真直ぐ延びる。内面には回転ナデ調整を施すが、他の調整は摩耗のため不明である。3075は約1/4が残存し、口縁部は欠損する。底径6.2cmを測り、体部にや

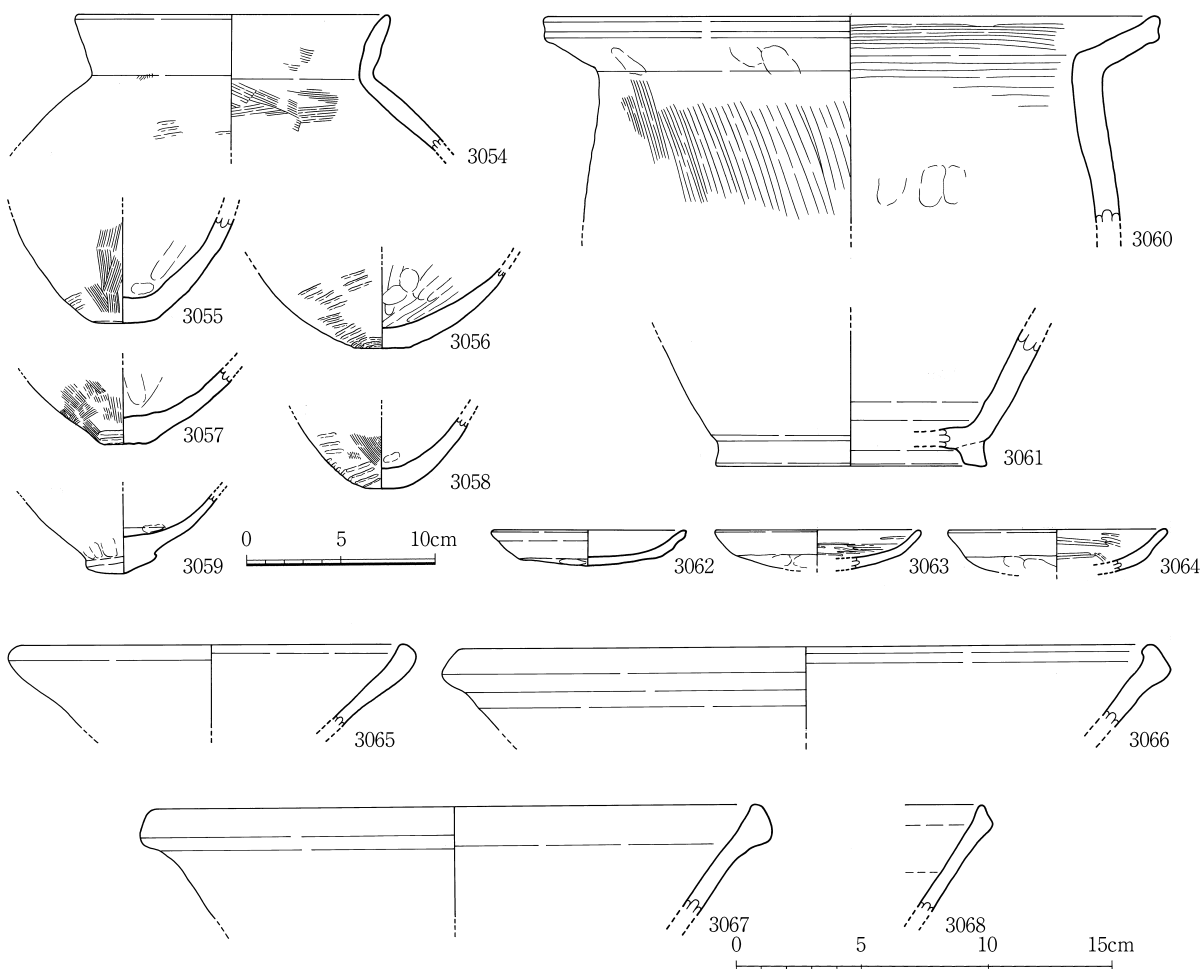


Fig.86 C区第V層出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器ほか)

や張りがある。調整は摩耗により不明である。3076・3077は、ほぼ真直ぐに延びる口縁部の破片である。3076は口径13.2cm、摩耗のため調整は不明である。3077は口径14.0cm、内面には回転ナデ調整を施し、外面は未調整である。3078・3079は内湾する口縁部の破片である。3078は口径16.2cmを測り、不明瞭ながら内外面に回転ナデ調整を施す。3079は口径16.0cmを測り、回転ナデ調整を施す。3080～3083は外反する口縁部の破片で、どれも摩耗のため調整は不明である。3080は口径16.2cm、3081は口径14.6cm、3082は口径12.8cm、3083は口径13.8cmを測る。3084は底部のみ完存し、底径6.8cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。3085も底部のみほぼ完存し、底径6.6cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形で、内面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。3086は底部の1/2が残存し、底径7.5cmを測る。成形はロクロ水挽で、調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。3087～3092は杯底部の破片で約1/2が残存するものである。3087は底径6.5cmを測り、調整及び切り離しは不明である。3088は底径6.6cmを測り、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。3089は底径5.8cmを測る。摩耗のため調整及び切り離しは不明である。3090は底径7.6cmを測り、内面の調整は不明で底部の切り離しは回転糸切りである。3091は底径7.8cmを測る。内面には回転ナデ調整を施し、外面は未調整である。3092は底径5.6cmを測るベタ高台風の底部である。外面は未調整であり、底部の切り離しは回転糸切りである。

3093は碗の底部で約1/3が残存し、底径7.0cmを測る。高さ約0.5cmの小さな高台が付く。摩耗が著しく調整は不明である。

3094～3106は小皿である。3094は約2/3が残存し、口径8.8cm、器高1.8cm、底径5.0cmを測る。摩耗が著しく、調整も切り離しも不明である。3095は約1/2が残存し、口径6.9cm、器高1.4cm、底径4.4cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りである。3096は約1/3が残存し、口径7.2cm、器高1.2cm、底径4.5cmを測る。外面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。3097も約1/3が残存する。口径8.0cm、器高1.3cm、底径5.4cmで、調整は摩耗のため不明である。3098～3106は小皿の破片で、1/4～1/8が残存し、口径は6.4cm～9.0cmを測る。底部の切り離しは3099・3102・3105・3106が回転糸切り、3101と3104が回転ヘラ切りで、他は不明である。

備前焼 (Fig.88-3107)

3107は播鉢の口縁部から底部までの破片であり、口径29.6cm、器高9.2cm、底径12.4cmを測る。体部は外上方に真直ぐ延び、口縁端部を下に拡張する。器面調整は回転ナデ調整であり、内面には7本単位の条線が残る。

瓦質土器 (Fig.88-3108・3109)

3108は羽釜の口縁部である。やや内湾する口縁部の上端から約1.2cm下に長さ約1.1cmの小さな鍔が付く。内面にはハケ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。3109は羽釜の脚基部の破片で、残存長7.2cmを測る。外面には指頭圧痕が残る。

白磁 (Fig.88-3110)

3110は碗の口縁部で、約1/8が残存し、口径15.8cmを測る。口縁部は内湾する体部からやや外反する。全体に透明釉を薄く施し、貫入がみられる。

3. C区

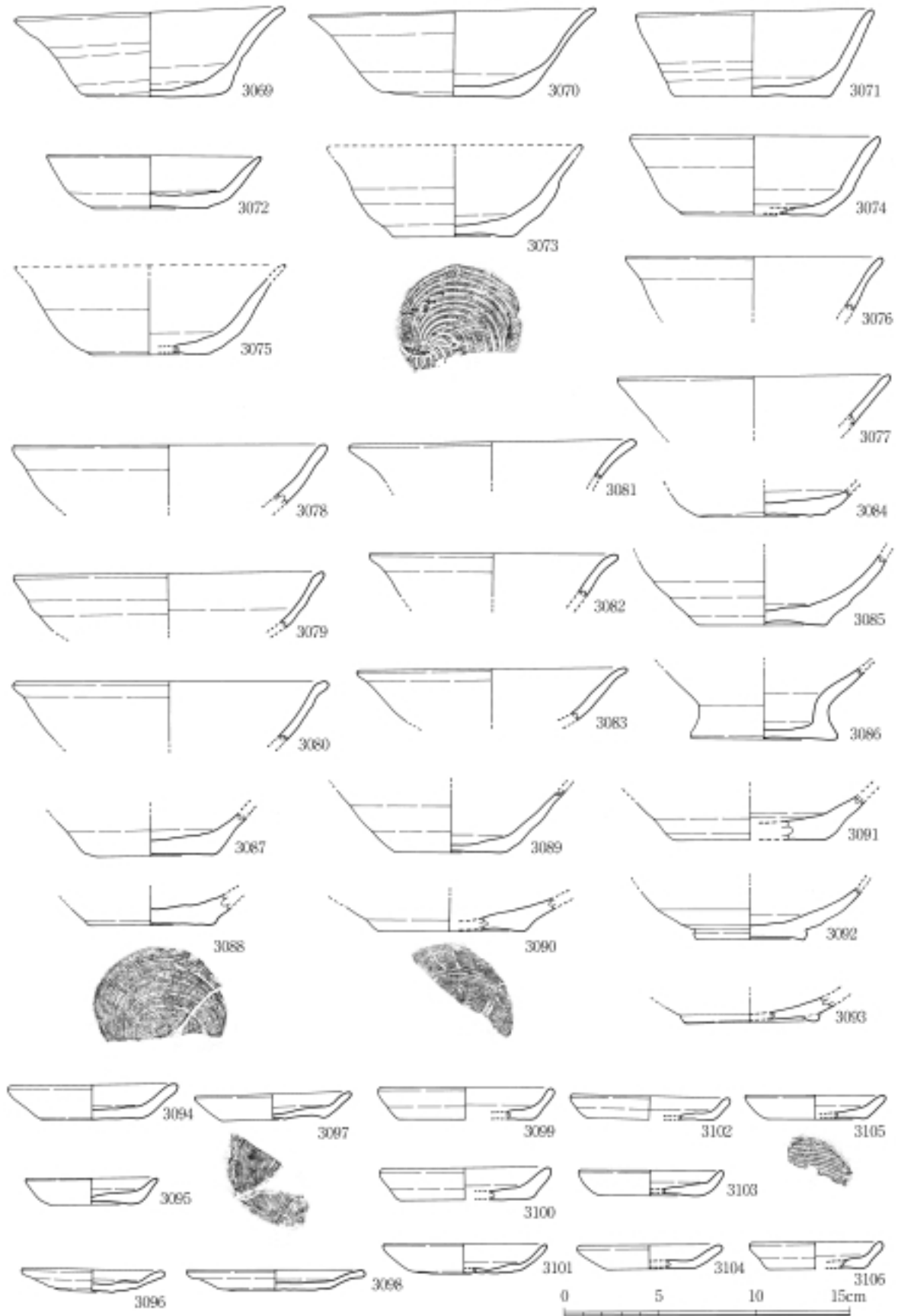


Fig.87 C区第V層出土遺物実測図(土師質土器)

土製品 (Fig.88-3111~3115)

3111は紡錘形の管状土錘で、一部分のみ欠損する。全長4.2cm、全幅1.1cm、孔径0.4cmを測り、外面に指頭圧痕が残る。3112~3115は円筒状の管状土錘である。どれもほぼ完形で外面には指頭圧痕が残る。3112は全長4.2cm、全幅1.1cm、孔径0.5cm、3113は全長3.9cm、全幅1.1cm、孔径0.5cm、3114は全長3.9cm、全幅1.0cm、孔径0.5cm、3115は全長3.4cm、全幅1.0cm、孔径0.4cmを測る。

石製品 (Fig.88-3116)

3116は叩石と考えられ、全長12.7cm、全幅11.1cm、全厚6.0cmを測る。中央部の1ヵ所に敲打痕が残る。石材は砂岩である。

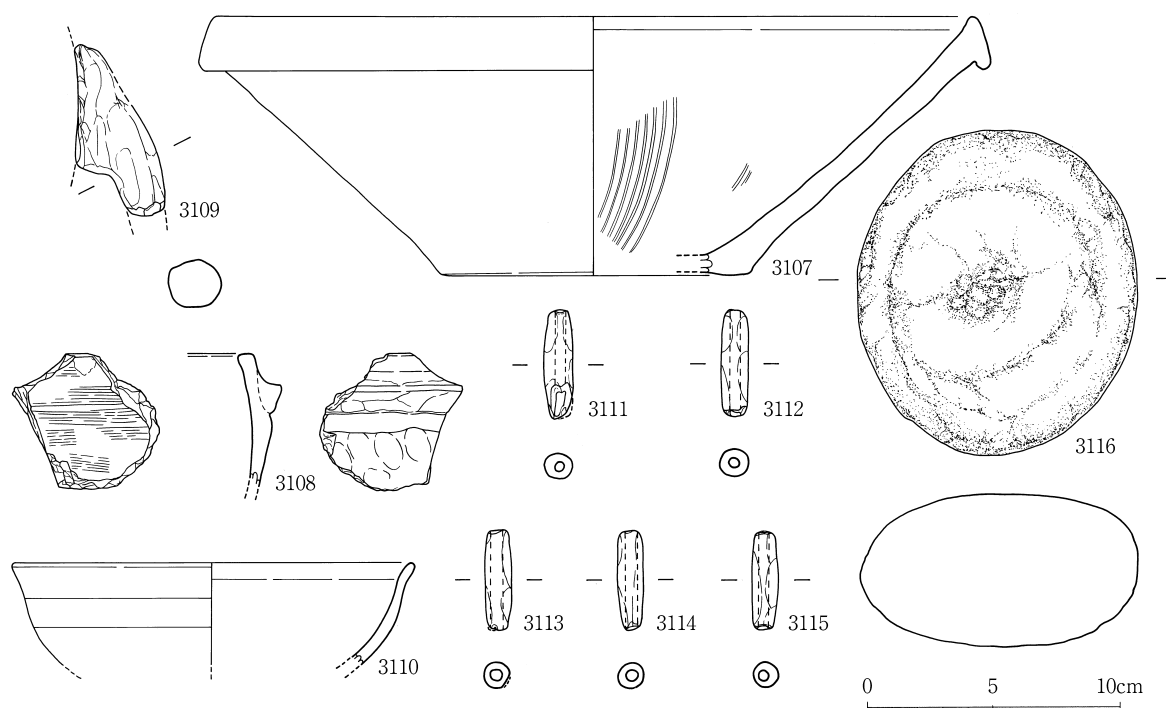


Fig.88 C区第V層出土遺物実測図(備前焼・瓦質土器・白磁ほか)

第XIII層出土遺物

弥生土器 (Fig.89~91-3117~3154)

3117は壺A類に属する口縁部で、約1/5が残存する。ラップ状に大きく開いた後口縁端部はやや下方に下がる。摩耗が著しく調整は不明である。3118は壺C類に属す。口縁部から胴部にかけて約1/3が残存する。口径19.0cm、胴径29.7cmを測る。口縁部は球形に近い胴部から上方へ真直ぐ延びる。摩耗が著しく調整は不明である。3119は底径5.0cmを測る。大きく開く胴部を有する。摩耗しており、内面の調整は不明である。3120も大きく開く胴部を有する壺の底部で、底径5.2cmを測る。3121は底径2.5cmを測る丸底に近い平底である。3122は底径3.4cmを測る。

3123~3144は甕で、倒卵形の胴部を有し、口縁部はくの字状に屈曲するものが多い。外面はタタキの後に下胴部を中心にハケ調整を施し、内面はハケ調整が主であり、その他に指ナデ調整を施すものもある。3123は完形で、A-1類の甕である。口径14.6cm、器高22.9cm、胴径18.9cm、底径2.2cmを

3. C区

測る。口縁部が大きく外傾する。3124～3128もA類に属するものである。3124もほぼ完形であるが、底部を欠損する。口径15.5cm, 胴径17.5cmを測り, 口縁端部はしっかりした面をなす。3125は約1/6が残存し, 口径12.5cm, 胴径17.7cmを測る。3126も口縁部から胴部にかけて残存し, 口径15.0cm, 胴径17.7cmを測る。外面には煤の付着がみられる。2点とも頸部の屈曲がやや緩やかである。3127・3128は口縁部破片である。3127は口径15.6cmを測り, 3128は口径13.1cmを測る。3129～3131はB類に属する。3129は完形であり, B-1類の甕である。口径14.4cm, 器高21.0cm, 胴径15.4cm, 底径2.0cmを測る。底部は小さな平底である。3130は口縁部から胴部へかけての破片であり, 口径16.6cm, 胴径15.9cmと口径が胴径を若干上回る。3131は口縁部の1/3が残存し, 口径18.2cmを測る。口縁部は外上方に真直ぐ延びる。外面はタタキの後にハケ調整を加え, 内面はハケ調整を施す。内外面の数カ所に指頭圧痕が残る。3132～3135は甕の口縁部である。3132は口縁部の約1/6が残存し, 口径20.2cmを測る。3133は口径15.6cmを測る。器壁が薄く, 頸部の屈曲は強い。3134は口径12.0cmを測るやや小型の甕で, 器面にはハケ目だけが残る。焼成は良好である。3135は口径16.5cmになると考えられる。3136は甕の底部から胴部にかけての約1/4が残存する。底部は丸底で, 胴径は16.0cmを測る。外面はタタキの後にハケ調整を加え, 内面はハケ調整のみである。3137～3144は甕の平底の底部である。3137は底径6.0cmを測る。摩耗しており調整は不明瞭である。3138は底径3.0cmを測る。3139は底径4.6cmを測る。外面にはハケ目のみ確認できる。3140は底径4.0cm, 3141は底径3.4cmを測る。3142は底径2.0cmを測り, ほぼ丸底に近い平底である。3143は底径2.8cmを測り, ボタン状に突起する底部である。3144は尖底の底部である。外面にはタタキ目が残るが, 不明瞭である。他の調整は摩耗が著しく不明である。

3145・3146は鉢で, ともに鉢A-IV-2類に属する深い鉢である。3145は完形であり, 口径16.9cm, 器高12.4cmを測る。底部は丸底で, 口縁部は内湾する体部からやや外傾する。外面にはタタキ, 内

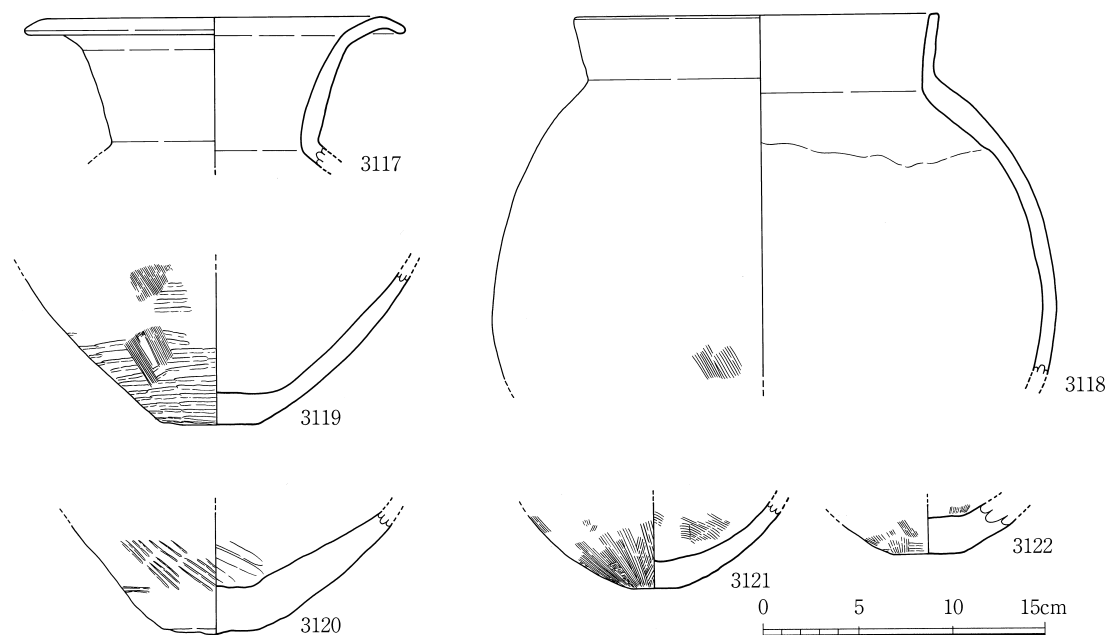


Fig.89 C区第XIII層出土遺物実測図(弥生土器1)

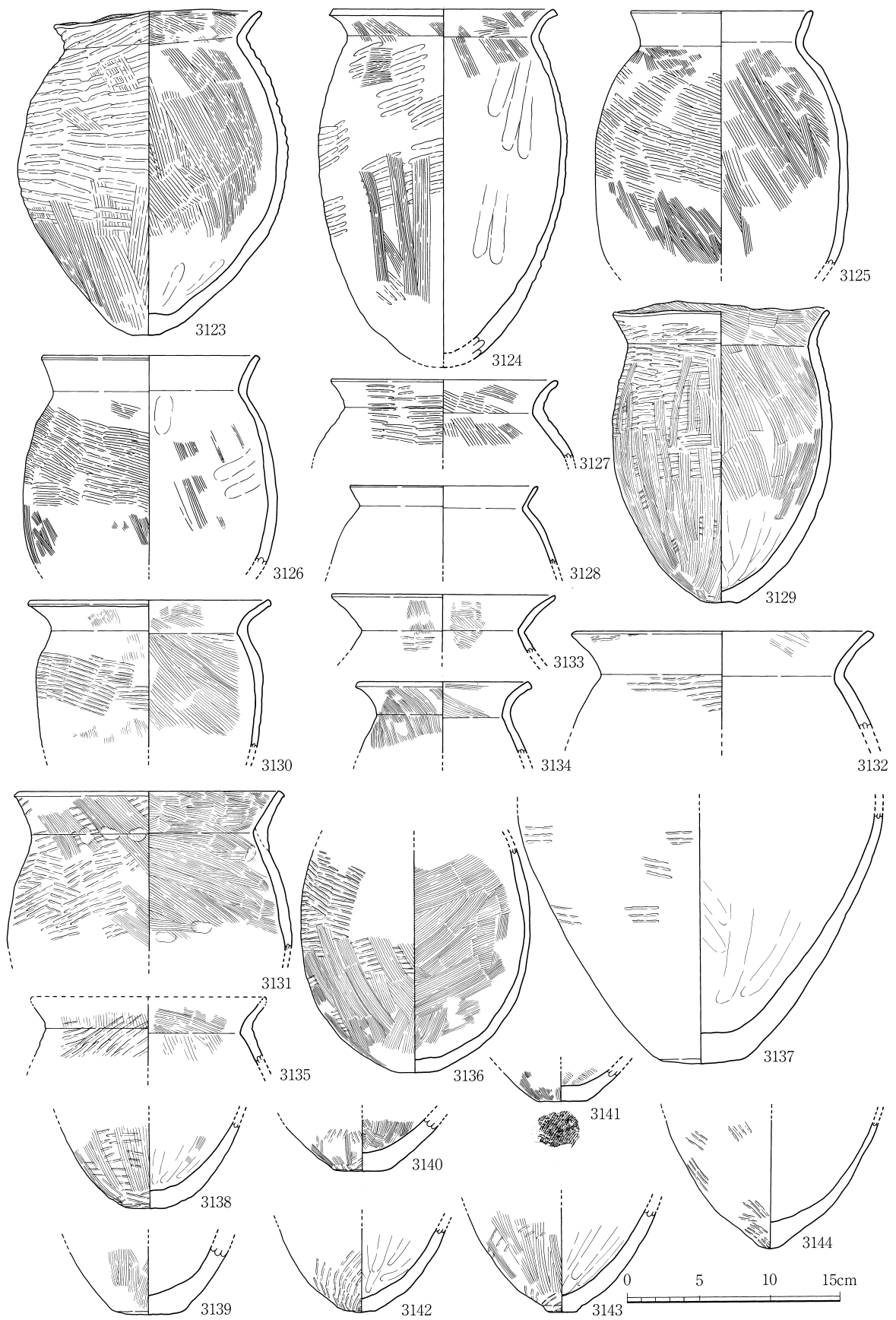


Fig.90 C区第Ⅷ層出土遺物実測図(弥生土器2)

3. C区

面には口縁部にヨコ方向のハケ調整, 体部にヘラ削りを施す。3146は約1/2が残存し, 口径19.2cm, 器高11.5cmを測る。底部は丸底で, 体部から口縁部へは内湾する。外面はタタキの後にハケ調整を加え, 内面は体部にハケ調整, 底部付近には指ナデ調整を施す。3147~3151は鉢の底部の破片である。3147・3148は丸底の底部のみが完存する。ともに外面にタタキ目が残るが, 摩耗しており不明瞭である。3149は平底の底部で, 底径2.9cmを測る。3150はややボタン状に近い平底の底部である。底部のみ完存し, 底径3.7cmを測る。3151は庄内式とみられるものである。底部はやや突起した平底で, 約1/2が残存し, 底径4.4cmを測る。

3152はミニチュア土器の鉢で, 約1/2が残存するが, 口縁端部は欠損する。口径は7.8cmを測るものとみられる。外面はナデ調整, 内面は指ナデ調整を施す。3153もミニチュア土器の鉢で, 底部の破片である。底径4.0cmを測り, 外面はタタキ, 内面はナデ調整を施す。

3154は高杯で, 脚台部から杯底部が残存する。全体的に摩耗が著しく外面の調整は不明で, 脚部内面にはヘラ削りを施す。

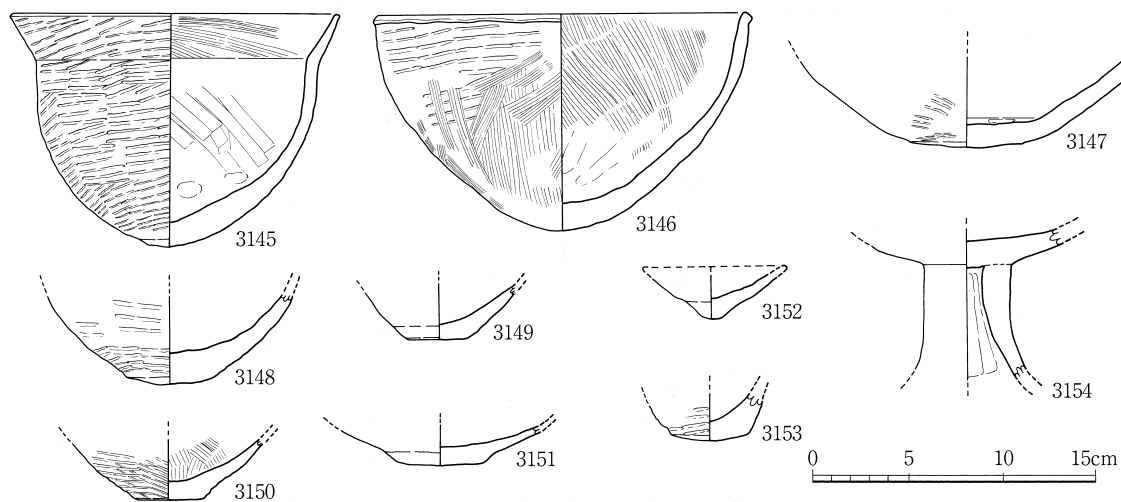


Fig.91 C区第XIII層出土遺物実測図(弥生土器3)

第XV層出土遺物

弥生土器 (Fig.92~94-3155~3223)

3155~3164は壺の口縁部である。3155はA類の壺で口縁部の約1/6が残存し, 口径21.4cmを測る。外面にハケ目が残る。3156・3157はB-1類である。3156は口縁部の約1/5が残存し, 口径17.0cmを測る。摩滅が著しく調整は不明である。3157は口縁部の約1/4が残存し, 口径15.4cmを測る。外面には胴部にタタキ目, 口縁部にハケ目が残る。3158・3159はB-2類の壺で, 口縁部から胴部にかけての破片である。口径13.4cmを測り, 外面にはハケ目, 内面には指頭圧痕が残る。3159は口縁部から胴部にかけての破片で, 口径12.8cmを測る。3160~3163はD類の壺で, 口縁部の1/4~1/8が残存する。口径は14.4~17.0cmを測り, 器面調整は3162の外面に緻密なハケ調整とヘラナデ調整, 内面に粗いハケ調整が確認できるが, 他の個体は摩耗しており不明である。3164もD類の壺の口縁部破片で, 外面に櫛描波状文が残る。3165は小形丸底壺で, 口縁部は外上方に上がり, 底部は丸底になるものと考えられる。3166・3167は壺の平底の底部である。3166は約1/2が残存し, 底径4.2cmを測る。

3167は底部のみ完存し、底径5.5cmを測る。ともに摩耗が著しく調整は不明である。

3168～3210は甕である。口縁部から底部まで残存するものは皆無であるが、形態や調整はこれまでの甕と同様で、口縁部はくの字状に外傾または外反し、外面にタタキ、ハケ調整を施し、内面はハケ調整を施すものが多い。3168～3174はA類の甕である。3168は約1/3が残存し、口径15.2cmを測る。胴部は球形に近く、外面にはタタキ目のみ確認できる。3169は約1/6が残存し、口径14.2cmを測る。摩耗が著しく、外面のタタキ目も不明瞭である。3170も約1/6が残存し、口径15.6cmを測る。調整は不明瞭である。3171も約1/6が残存し、口径13.6cm、胴径15.9cmを測る。口縁部は短く外傾する。内外面ともハケ調整を施す。3172は約1/8が残存し口径16.2cmを測る。口縁部は大きく開く。3173・3174はそれぞれ口径が14.0cmと17.2cmを測る。3174の外面には煤の付着がみられる。3175～3177はB類の甕であり、どれも口縁部の約1/5が残存する。3175は口径14.8cm、胴径15.7cmを測り、外面には部分的にタタキ目が残る。3176は口径12.7cm、胴径12.2cmを測り、胴部外面にはハケ目が残る。口縁部には内外面の広い部分に指頭圧痕が残る。3177は口径13.5cm、胴径12.6cmを測り、口径が胴径を若干上回る。外面の一部にタタキ目、内面の一部にハケ目が残る。3178～3182はC類の甕である。口径は順に24.3cm、26.6cm、27.8cm、27.6cm、21.4cmで、3178以外は外面にタタキ目が残る。3183～

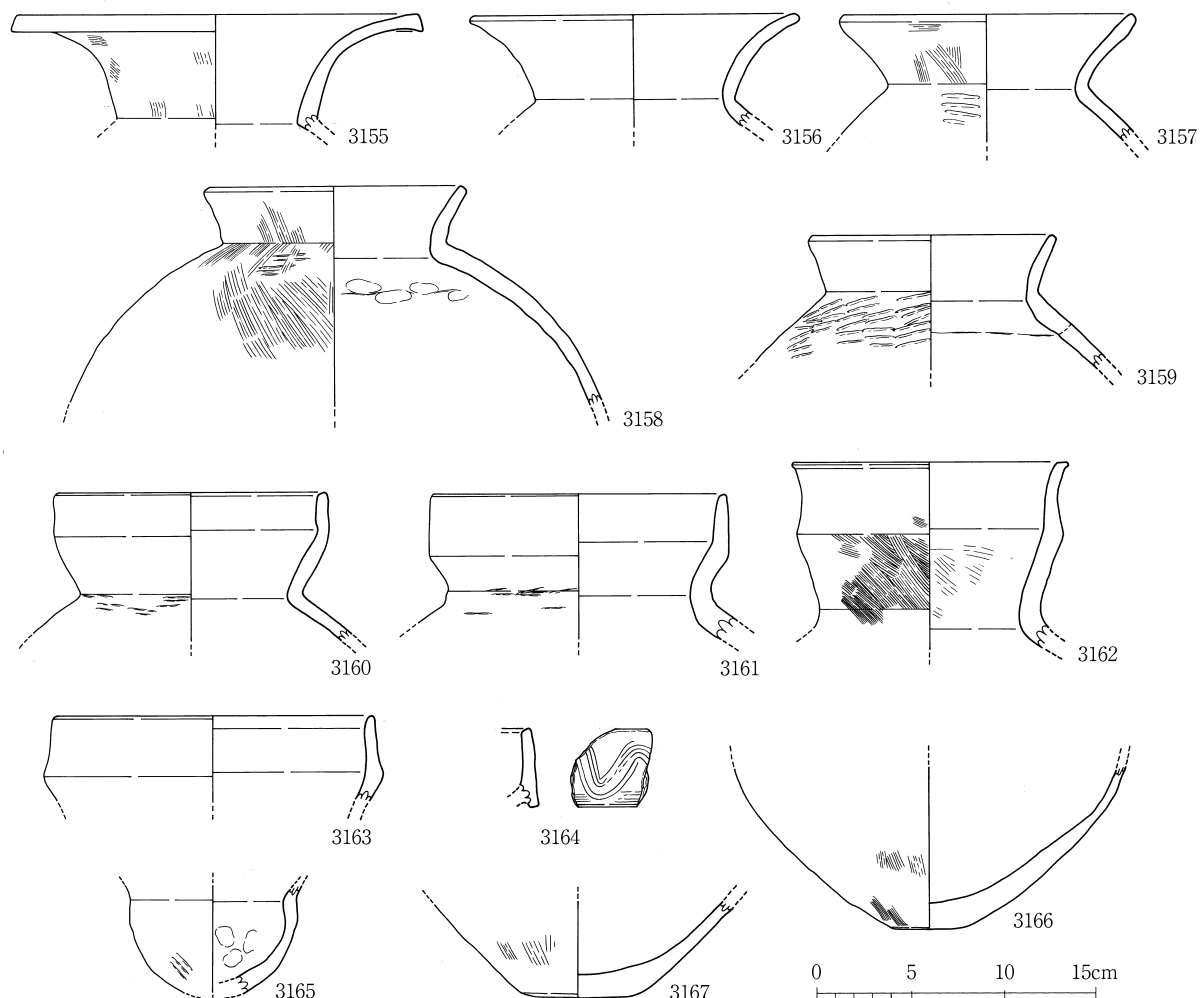


Fig.92 C区第XV層出土遺物実測図(弥生土器1)

3. C区

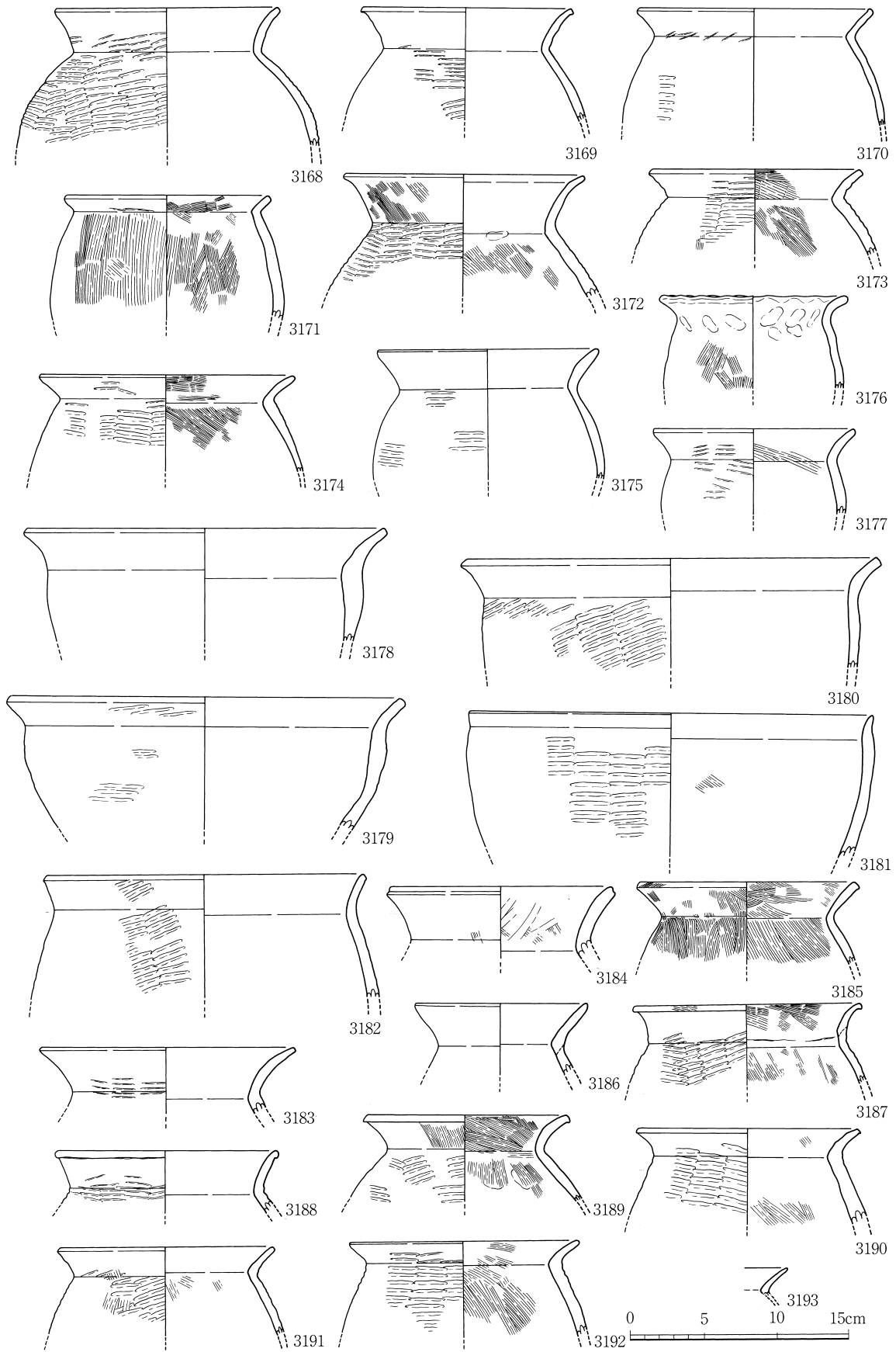


Fig.93 C区第XV層出土遺物実測図(弥生土器2)

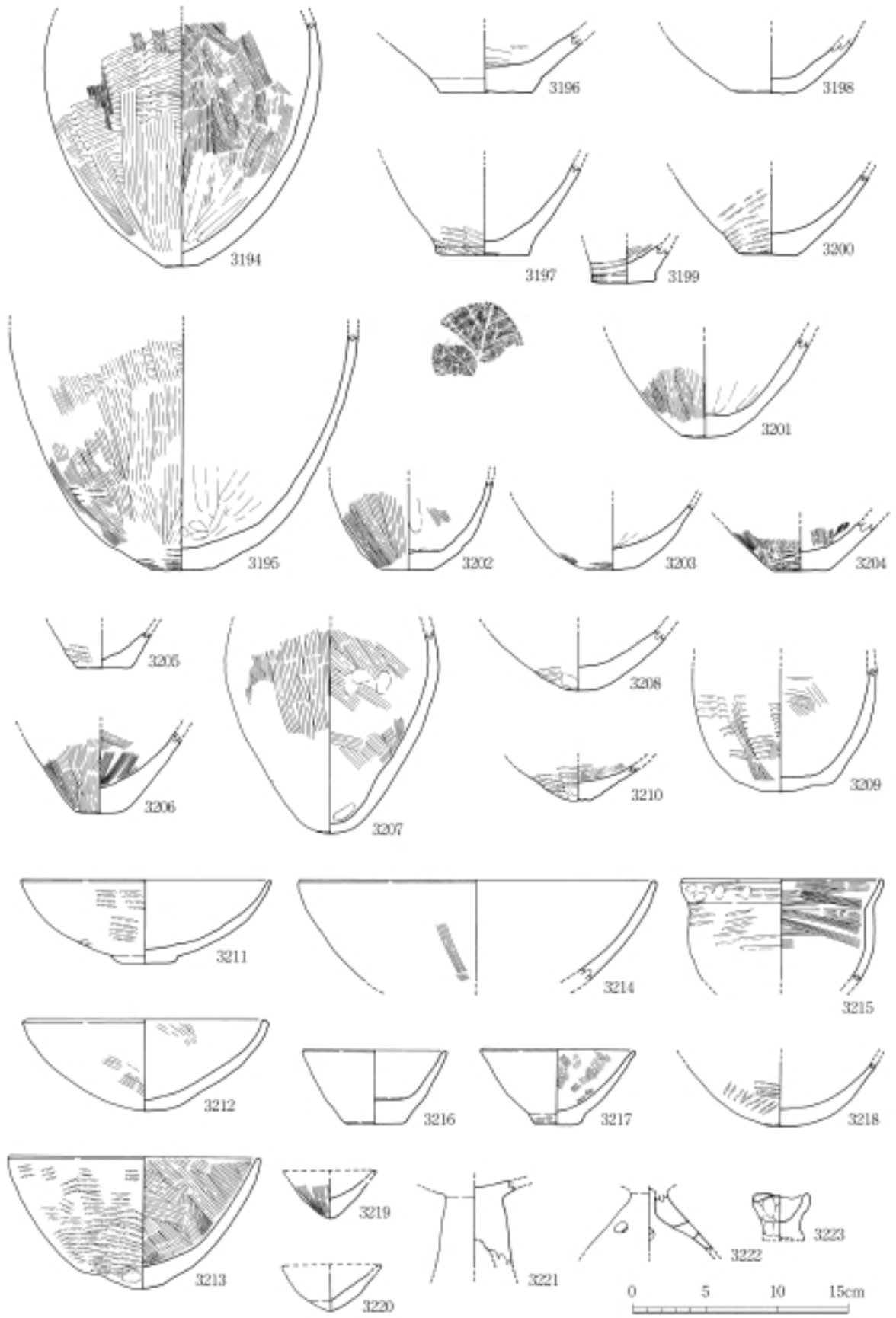


Fig.94 C区第XV層出土遺物実測図(弥生土器)

3. C区

3192はくの字状に外反または外傾する口縁部の破片で、1/4～1/8が残存する。口径は順に17.2cm, 14.8cm, 14.4cm, 11.6cm, 15.3cm, 15.0cm, 13.4cm, 14.8cm, 14.4cm, 15.4cmである。3193は庄内式と考えられる甕の口縁部破片である。器壁は薄く、調整は摩耗しており不明である。3194・3195は底部から胴部にかけての破片で、平底の底部を有する。3194は胴径19.2cm, 底径2.4cmを測り、内外面のハケ目は下胴部が粗く、胴部中位は緻密である。底部内面には指ナデを施す。3195は底径4.4cmを測る。内面はハケ調整がみられず、指ナデ調整のみである。3196～3206は底部の破片で平底のものである。底部のみ完存するものから約1/3が残存するものまでである。底径は順に6.4cm, 6.3cm, 4.8cm, 4.4cm, 4.3cm, 4.3cm, 4.0cm, 3.8cm, 3.8cm, 3.6cm, 3.4cmを測る。3207～3209は丸底の底部を有する甕である。3207は胴径14.8cmを測り、内外面にハケ目が残る。内面には指頭圧痕も残る。3208は外底面にタタキ目と指頭圧痕が残る。3210は尖底の底部を有するもので、外面にタタキ目、内面にハケ目が残る。

3211～3220は鉢である。3211・3212はA-II-2類の鉢である。3211は約1/5が残存し、口径17.4cm, 器高5.8cm, 底径4.5cmを測る。突出する底部を有する。3212はほぼ完形で、口径16.4cm, 器高6.4cm, 底径1.5cmを測る。丸底の底部を有し、ともに摩耗が著しく調整は不明瞭である。3213はA-III-2類で口径17.0cm, 器高9.1cmを測る。約1/2が残存し、底部はいびつな丸底である。外面にはタタキ目、内面にはハケ目が残る。3214は口径24.2cmを測るA類の鉢で、約1/6が残存する。摩耗が著しく調整は不明である。3215は口径13.6cmを測るB類の鉢で、口縁部は内湾する体部からやや外傾する。外面にタタキ目と指頭圧痕が残り、内面にはハケ目が残る。3216はC-II-1類で、約1/3が残存する。口径10.0cm, 器高5.2cm, 底径3.8cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。3217はC-III-2類で、突出する底部を有する。口径10.6cm, 器高5.2cm, 底径3.0cmを測り、内面にはハケ調整を施す。3218は丸底の底部の破片である。外面にはタタキ目が残る。

3219・3220はミニチュア土器の鉢である。ともに尖底であり、3219は外面にハケ調整が確認できる。

3221は高杯で、杯底部から脚台部の一部が残存する。摩耗が著しく調整は不明である。3222も高杯であり、脚台部の一部が残存する。摩耗が著しく調整は不明である。

3223は手づくね土器で、約1/2が残存する。指頭圧痕が多く残る。

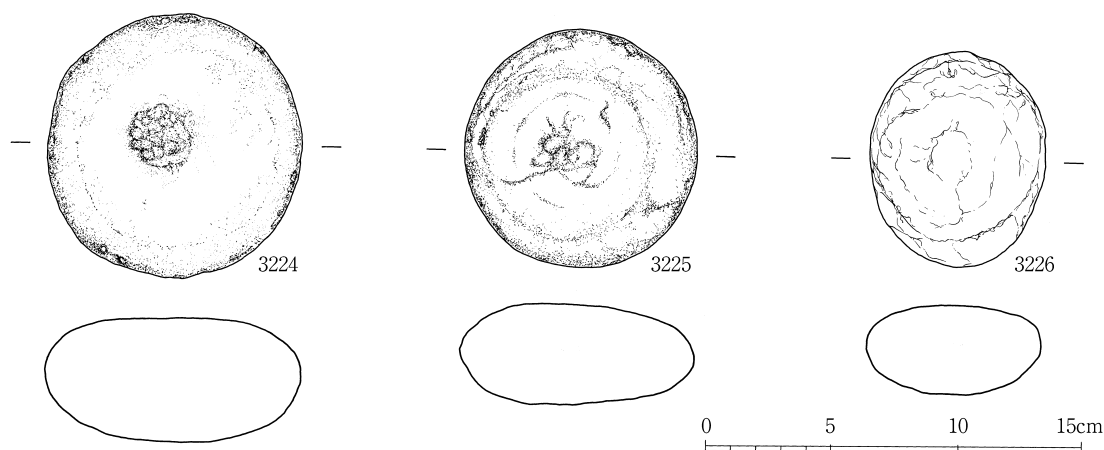


Fig.95 C区第XV層出土遺物実測図(石製品)

石製品 (Fig.95-3224~3226)

3224は叩石で、全長10.4cm、全幅10.1cm、全厚5.0cmを測る。片面に明瞭な敲打痕が残る。

3225・3226は磨石と考えられ、3225が全長9.4cm、全幅9.2cm、全厚4.0cm、3226が全長8.5cm、全幅6.9cm、全厚3.5cmを測る。3点とも石材は砂岩とみられる。

第VII層出土遺物

弥生土器 (Fig.96・97-3227~3278)

3227~3230は壺B-1類の口縁部破片である。3227は口径21.3cmを測り、内外面にハケ目が残る。3228は口縁端部が欠損する。頸部外面に緻密なハケ目が残る。3229も口縁端部を欠損しており、口径は約20cmである。内外面に一部分にヘラ磨きを施す。3230は口径19.0cmを測る。摩耗しており調整は不明である。3231はD類の壺で、口縁部の約1/3が残存し、口径15.4cmを測る。これも摩耗しており調整は不明である。3232は長頸壺の頸部である。器面に丁寧なヘラ磨きを施す。3233は頸部の破片と考えられる。外面に粘土紐と浮文を貼付し、刺突文を施す。3234も頸部の破片であり、粘土帯を貼付しており、十字に刻みを入れている。3235~3239は壺の底部破片で、体部は平底の底部から大きく開く。調整は外面にタタキまたはハケ調整、内面にはハケ調整またはナデ調整のものが多。底径は順に5.2cm、5.0cm、5.0cm、4.4cm、4.0cmを測る。

3240~3246は甕A類の口縁部破片である。3240は口縁部の約1/3が残存し、口径13.1cmを測る。内外面に緻密なハケ目が残る。外面の一部にはハケ調整の下のタタキ目も僅かに残る。3241は口縁部の約1/5が残存し、口径15.8cmを測る。外面にはタタキ目、内面にはハケ目が残る。3242は口縁部の破片で、口径21.6cmを測る。外面に緻密なハケ目とタタキ目、内面にはハケ目と指頭圧痕が残る。3243は口縁部から胴部にかけての破片であるが、口縁端部は欠損する。口径は約16.0cmとみられる。外面は一面にタタキを施し、煤の付着が認められる。内面はハケ調整ののち、指ナデ調整を施す。3244は約1/6が残存し、口径15.8cmを測る。外面にはタタキ目とハケ目が残るが、不明瞭である。内面の調整は摩耗のため不明である。3245・3246はともに約1/5が残存する。同様の形態であり、短い口縁部を有する。口径は10.8cmと10.2cmであり、外面にはタタキ目が残る。3247~3260はくの字状に屈曲する口縁部の破片である。器面調整は外面にタタキ、またはタタキの後にハケ調整、内面にハケ調整を施すものが多い。また、頸部に指頭圧痕を残すものもある。口径は順に23.1cm、22.1cm、18.0cm、17.6cm、17.6cm、16.6cm、16.5cm、16.0cm、15.0cm、15.0cm、14.4cm、14.0cm、13.4cm、12.6cmを測る。3261~3268は平底の底部破片で、外面の調整はタタキが主で、内面にはハケ調整か指ナデ調整を施す。底径は順に5.1cm、5.0cm、3.7cm、3.5cm、3.4cm、3.0cm、2.8cm、2.0cmを測る。3269は尖底の底部で、外面にはタタキを施す。

3270~3277は鉢である。3270は約1/6が残存し、口径12.4cmを測る。底部は欠損するが、器高は4.5~5.0cmであり、B-II類に属するものである。外面にはタタキ目とハケ目、内面にはハケ目が残る。3271は約1/2が残存し、底径3.8cmを測る。口縁部を欠損するものの口径は9cm前後であり、C-II-1類に属する。底部は平底で、口縁部は外上方へ上がる。内面にはナデ調整を施し、内底面には指頭圧痕が残る。3272は約1/4が残存し、口径10.6cm、器高6.7cm、底径3.0cmを測る。C-IV-1類の鉢で

3. C区

あり、底部は平底で、口縁部はやや内湾して上がる。器面は摩滅が著しく調整は不明である。3273・3274は平底の底部破片であり、底径は4.4cm, 2.7cmを測る。3273は外面にタタキとハケ調整、内面にハケ調整とナデ調整を施す。3274は外面に段を有する。3275は突出した底部であり、底径は4.5cmを測る。外面にナデ調整、内面にヘラナデ調整を施す。3276は丸底の底部の破片で、内面にはナデ調整を施す。

3277はミニチュア土器の鉢であり、底部が残存する。突出した底部で底径は3.0cmを測る。外面には指頭圧痕が残り、内面にはナデ調整を施す。

3278は高杯で、杯部の大半と脚台部を欠損し、口径9.8cm, 器高8.2cm, 底径10.2cmを測る。全体に

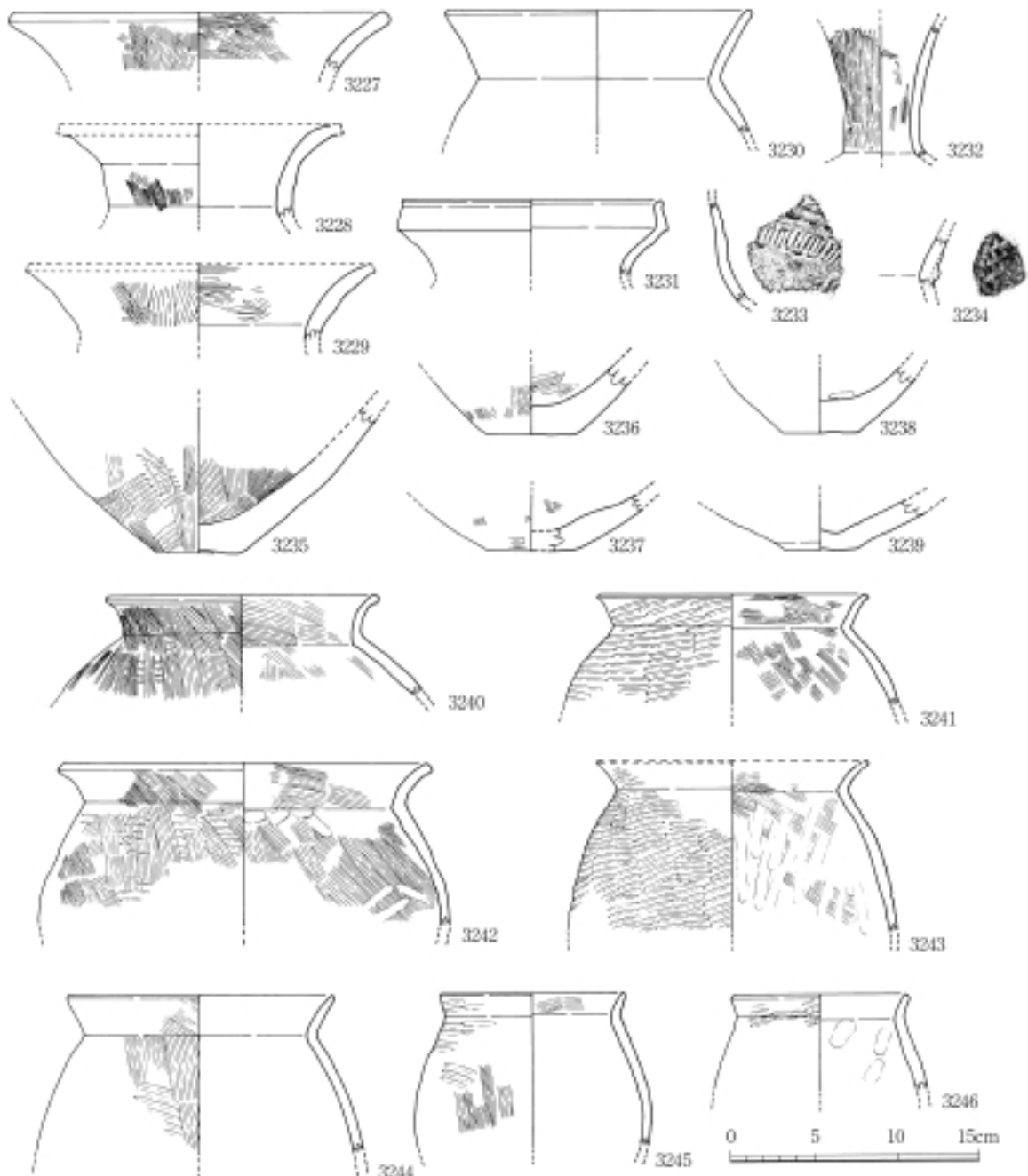


Fig.96 C区第×層出土遺物実測図(弥生土器1)

摩耗が著しい。杯部には口縁端部にヨコナデ調整を施し、杯底部から脚台部への接合部分には指頭
 圧痕がよく残る。裾部外面にはヘラナデ調整，脚部内面には指頭圧痕が残る。

第XX層出土遺物

弥生土器 (Fig.98-3279~3282)

3279は壺の口縁部で約1/6が残存し、口径36.8cmを測る。口縁部直下に一条の突帯が巡る。摩耗が

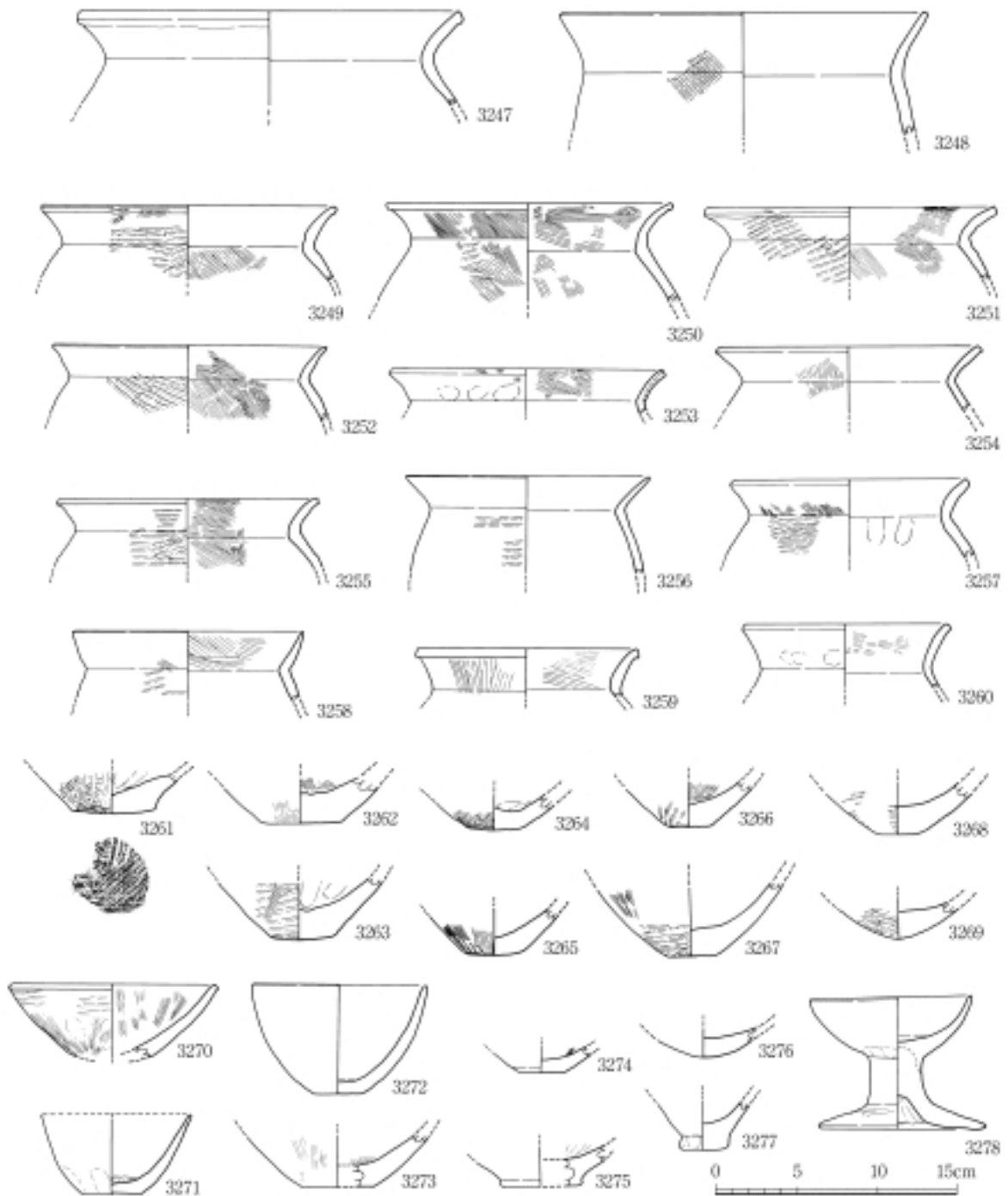


Fig.97 C区第X層出土遺物実測図(弥生土器2)

3. C区

著しく調整は不明である。3280も口縁部の破片で、口径32.2cmを測る。3279と同一個体の可能性も考えられる。3281は壺の頸部破片であり、不明瞭であるが、外面には3条の沈線の間に刺突文を2列に配す。内面は摩耗しており調整は不明である。

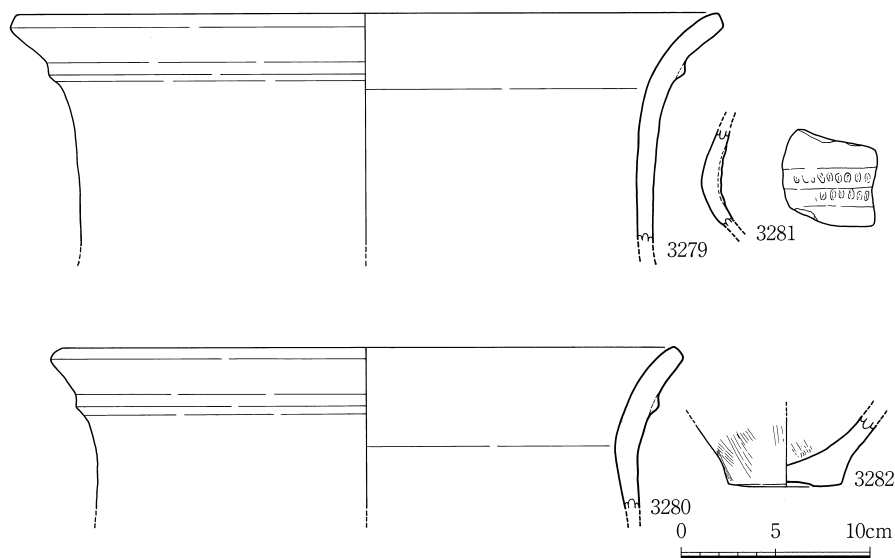


Fig.98 C区第y層出土遺物実測図(弥生土器)

3282は甕で底部のみほぼ完存する。底径6.0cmを測る平底の底部で、内外面にはハケ調整を施す。

石製品 (Fig.99-3283・3284)

3283は柱状両刃石斧であり、1/2～2/3が残存する。残存長11.1cm、全幅6.0cm、全厚2.3cmを測る。石材は緑色片岩である。

3284は叩石であり、完存する。全長13.8cm、全幅12.0cm、全厚5.5cmを測り、片面の中央部に明瞭な敲打痕が残る。石材は砂岩である。

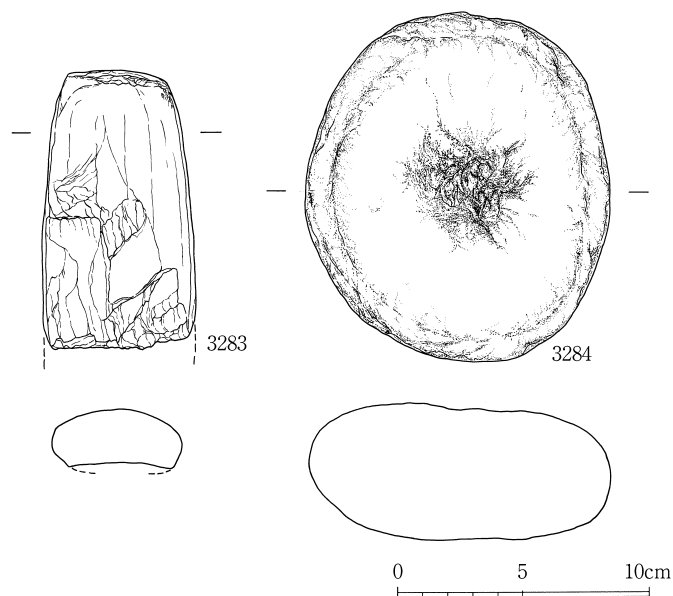


Fig.99 C区第y層出土遺物実測図(石製品)

(3) 遺構と遺物

弥生時代、中世、近世以降の3時期の遺構を確認している。中近世では溝跡や柵列、土坑など集落縁辺部とみられる遺構を検出した。また弥生時代では竪穴住居跡を1棟検出した。

① 弥生時代

竪穴住居跡1軒、土坑2基、溝跡2条、ピット1個、土器集中遺構7基を検出した。

i 竪穴住居跡

ST-301 (Fig.100)

調査区北西部で検出した竪穴住居跡である。平面形は隅丸方形であり、東西3.60m、南北4.55mを測り、長軸方向はN-13°-Eである。残存する壁高は28.7～65.9cmであり、検出面が傾斜しているため西壁が50～65cmで、南北壁と東壁は30cm前後であった。床面の標高は7.418～7.514mであっ

た。床面からは付随遺構として舟形の土坑2基と9個のピットを確認した。北西のSK-1は長径1.26 m, 短径0.76 mを測る。土坑内に浅い段を有し, 深さ72cmを測る比較的深い土坑で, 貯蔵穴として使用された可能性も考えられる。遺物としては弥生土器が2点出土した。中央の舟形の土坑(SK-2)は長径1.60 m, 短径0.56 m, 深さ11cmを測る。土坑内には焼土, 炭化物, 火を受けた石などを確認しており, 炉として使用していた可能性が高い。検出したピットはすべて円形のピットで規模は順にP-1が径22 cm, 深さ4 cm, P-2が径16 cm, 深さ3 cm, P-3が径32 cm, 深さ44 cm, P-4が径26 cm, 深さ4 cm, P-5が径26 cm, 深さ3 cm, P-6が径34 cm, 深さ43 cm, P-7が径18 cm, 深さ9 cm, P-8が径22 cm, 深さ6 cm, P-9が径26 cm, 深さ34 cmであり, このうち遺物が出土したのはP-3から弥生土器片15点, 石製品8点, P-4, P-5からはそれぞれ弥生土器細片数点ずつであった。P-1・2・4・5・7・8についてはその深さから柱穴とは考えにくく, P-3とP-6が支柱穴として使用されたものと考えられる。なお, P-9は壁面に斜めに掘り込まれたピットで, 同様のものが他になく用途については不明である。埋土は7層に分層でき, 埋土1はにぶい黄褐色シルトで, 弥生土器細片が約100点出土し, 2点(3285・3286)が図示できた。埋土2は灰黄褐色シルト質粘土で黄褐色の小礫を含み, 出土遺物には弥生土器細片約100点がみられ, 5点(3287~3291)が復元図示できた。埋土3は焼土と炭化物を多量に

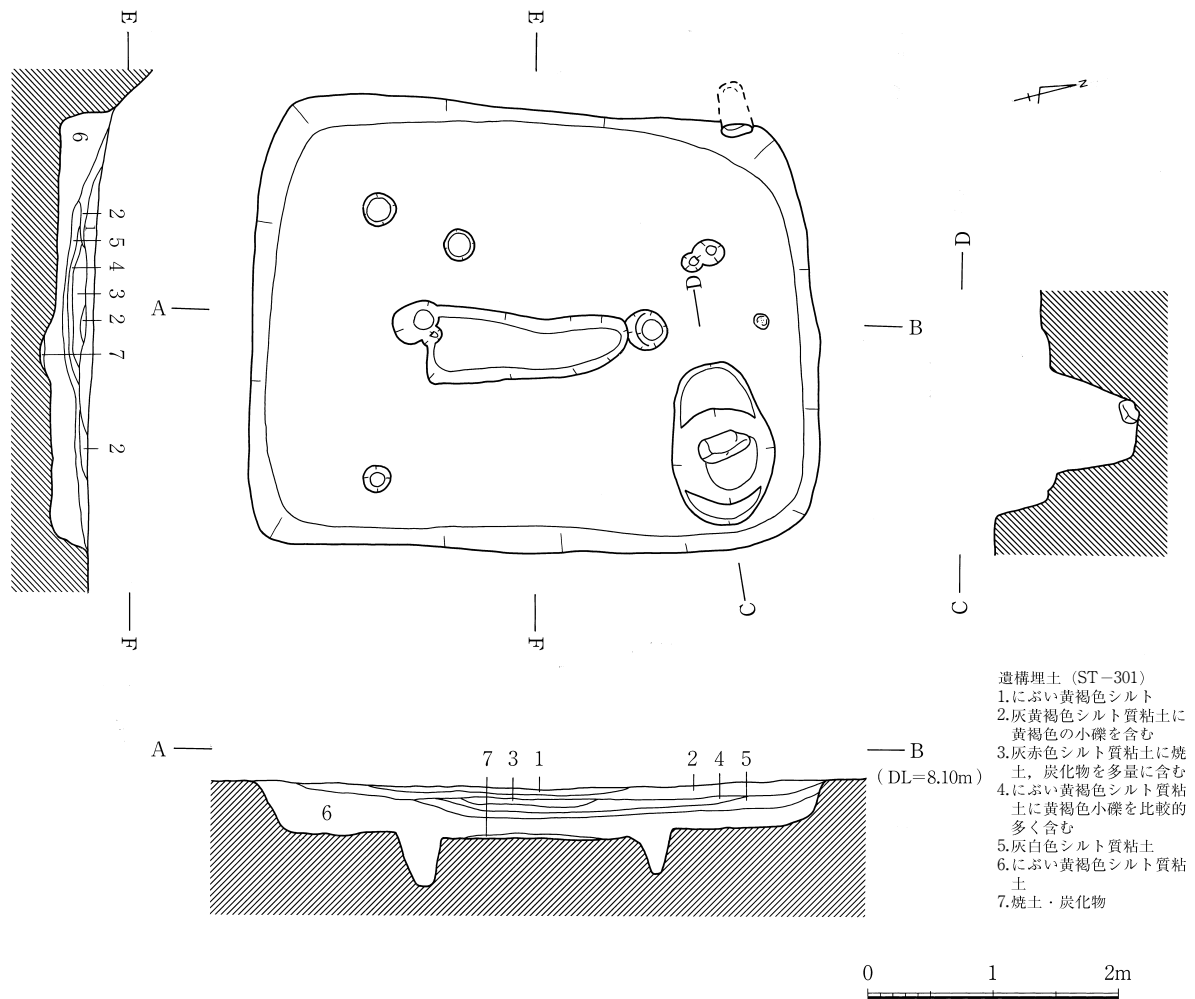


Fig.100 ST-301

3. C区

含む灰赤色シルト質粘土で、検出面から約10cm下の住居跡中央部に径約1.00mの円形状の範囲で堆積していた。出土遺物は皆無であった。埋土4はにぶい黄褐色シルト質粘土で黄褐色の小礫を比較的多く含み、出土遺物には弥生土器片約80点等がみられ、6点(3292~3297)と石製品1点(3298)が復元図示できた。埋土5は灰白色シルト質粘土で出土遺物は皆無であった。埋土6はにぶい黄褐色シルト質粘土で、出土遺物には弥生土器片約700点と石製品10点がみられ、弥生土器22点(3299~3320)、石製品7点(3321~3327)が復元図示できた。

なお、焼土の堆積状況から本遺構は2時期に渡って機能した可能性が考えられる。

出土遺物

弥生土器 (Fig.101-3285・3286) : 埋土1出土

3285は壺で、頸部の破片である。外面には粘土帯を貼付し、刺突文を施す。内面には、ハケ目と指頭圧痕が残る。

3286は甑の底部である。内外面にはハケ調整を施し、底部中央に孔を穿つ。

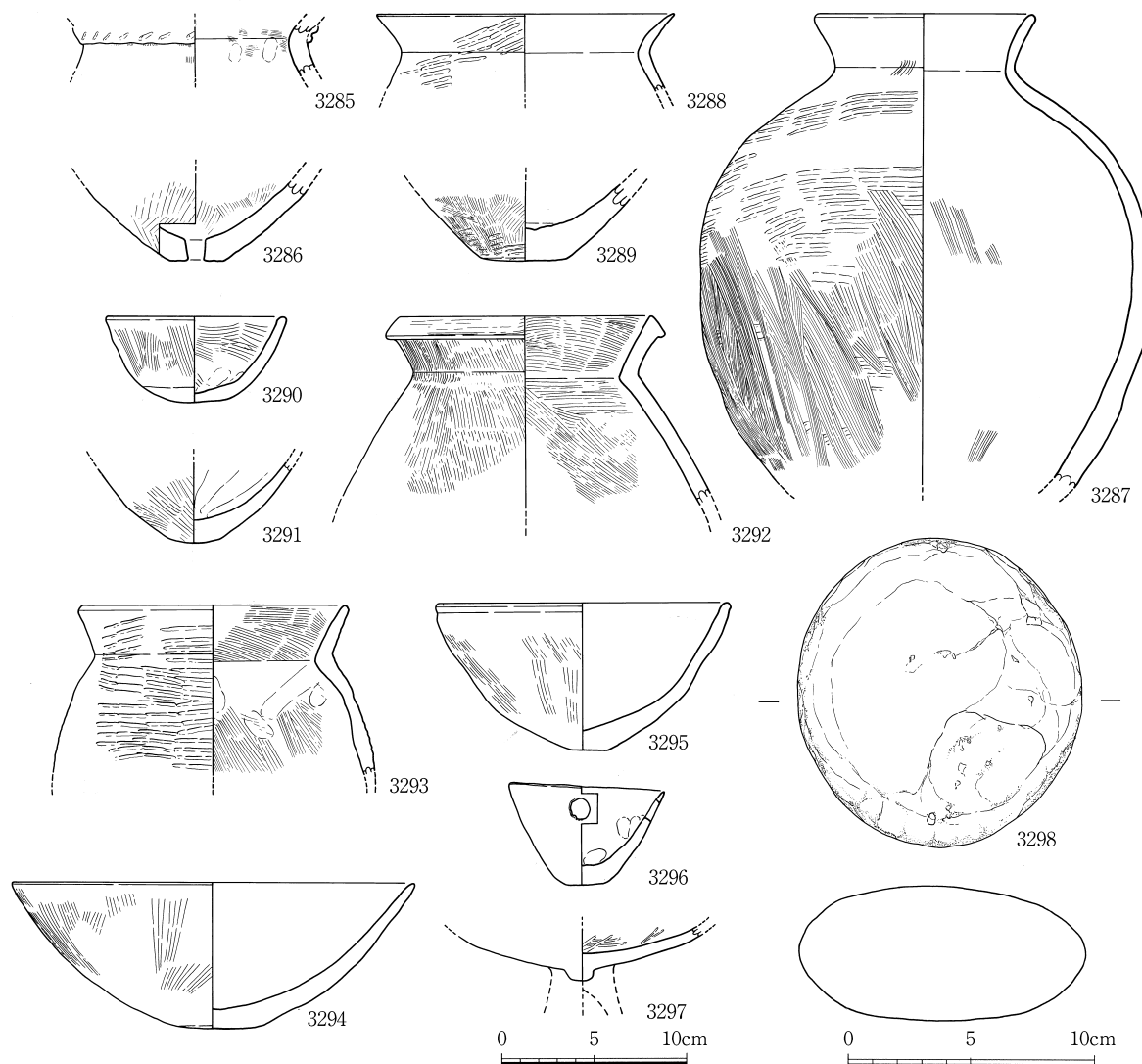


Fig.101 ST-301出土遺物実測図1

弥生土器 (Fig.101-3287~3291) : 埋土2出土

3287はC類の壺で約1/5が残存する。口径11.6cm, 胴径24.0cmを測り, 口縁部は球形に近い胴部から外上方に真直ぐ上がる。外面にはタタキの後に胴部中位以下にハケ調整を施し, 煤の付着もみられる。内面は摩耗が著しく, 一部にハケ目が確認できるのみである。3288はくの字状に外傾する口縁部で, 口径16.0cmを測る。焼成不良で, 摩耗が著しく調整は外面にタタキ目が確認できるのみである。3289は甕の底部破片で, 底径4.6cmを測る。平底であり, 外面にはタタキ目と緻密なハケ目が残る。

3290は鉢で完存し, C-Ⅲ-1類に該当する。口径9.4cm, 器高4.6cmを測る丸底の鉢で, 口縁部は内湾する体部から外上方に上がる。外面はタテ方向のハケ調整を施し, 口縁部付近に指頭圧痕が残る。内面にはヨコ方向のハケ調整を施し, 底部付近に指頭圧痕が残る。3291も鉢で, 平底の底部のみが完存する。底径は2.8cmを測り, 外面にはハケ調整, 内面には指ナデ調整を施す。

弥生土器 (Fig.101-3292~3297) : 埋土3出土

3292はB-2類の壺で, 口縁部の約1/3が残存し, 口径13.6cmを測る。口縁端部は面をなす。焼成は良好で, 内外面には丁寧なハケ調整を施す。3293はA類の甕で, 口縁部の約1/6が残存し, 口径14.2cmを測る。外面には煤が付着し, 太いタタキ目が一面に残る。内面はハケ目と指頭圧痕が残る。

3294~3296は鉢である。3294はほぼ完存し, 口径21.6cm, 器高7.8cm, 底径4.0cmを測る。外面にはハケ調整, 内面にはナデ調整を施す。摩耗が著しい。3295は約2/3が残存する。B-Ⅲ-1類であり体部から口縁部にかけて緩やかに内湾し, 口縁部直下に一条の沈線が巡る。外面にはタテ方向のハケ調整, 内面にはナデ調整を施す。3296はC-Ⅳ-1類で約3/4が残存する。手づくねにより成形されたものと考えられる。摩耗が著しく調整は不明であるが, 口縁部付近に焼成後の穿孔が残る。

3297は高杯の杯底部で, 内面にナデ調整とヘラ磨きを施す。

石製品 (Fig.101-3298)

3298は磨石で完存する。全長12.4cm, 全幅11.5cm, 全厚5.5cmを測り, 特に使用した形跡はみられない。石材は砂岩と考えられる。

弥生土器 (Fig.102-3299~3320) : 埋土6出土

3299・3300は壺である。3299はA類の壺で口縁部の約1/6が残存し, 口縁部にはヨコナデ調整を施し, 端部に凹面をなす。外面にはタテ方向のナデ調整, 内面にはナデ調整とヨコ方向のハケ調整を施す。3300はB-1類の壺で口縁部の約1/2が残存し, 口径16.4cmを測る。口縁端部は凹面をなし, 内外面にヘラ磨きを施す。

3301~3311は甕で, 3301~3303はA類である。3301はほぼ完形に近く, 底部は欠損する。口径14.0cm, 胴径18.3cmを測り, 内外面には丁寧なハケ調整を施す。外面には煤の付着がみられる。3302は口縁部から胴部にかけての破片で, 口縁部の約1/3が残存し, 口径14.2cm, 胴径16.0cmを測る。形態的には3301と同様であるが, 外面には一面にタタキを施す。内面は摩耗しており調整は不明である。3303は口縁部から胴部にかけての破片で, 口径11.9cmを測る。口縁部は内湾する胴部から外上方に短く上がる。内外面とも摩耗しており, 調整は不明である。3304はB-1類の甕で完形であり, 口径12.0cm, 器高15.3cm, 胴径13.0cm, 底径1.5cmを測る。底部は小さな平底で, 胴部上位には外面にヨコ方向のハケ調整, 内面にタテ方向のハケ調整を施す。外面中位以下は摩耗しており, 内面はナデ調

3. C区

整を施す。3305～3309はくの字状に外傾または外反する口縁部の破片で、内外面ともハケ調整を施すが、3305のみ外面にタタキを施す。口径は順に15.8cm, 16.8cm, 15.2cm, 14.0cm, 17.8cmを測る。3310・3311は平底の底部である。ともに摩耗しており、調整は不明瞭であるが内面には指ナデ調整を施す。3310は底径2.6cmを測る。3311は底径2.4cmを測り外面にタタキ目が残る。

3312～3320は鉢で、3312・3313はB類である。3312は口縁部の約1/8が残存する。やや外反する口縁部であり、端部は面をなす。口径15.6cmを測る。外面にはタタキを施し、指頭圧痕が残る。内面にはハケ調整とナデ調整を施す。3313は口縁部の約1/3が残存し、口径13.3cmを測る。口縁部は体部から内湾し、外面にはタタキ、内面にはハケ調整、一部ヘラ磨きとナデ調整を施す。3314はC-

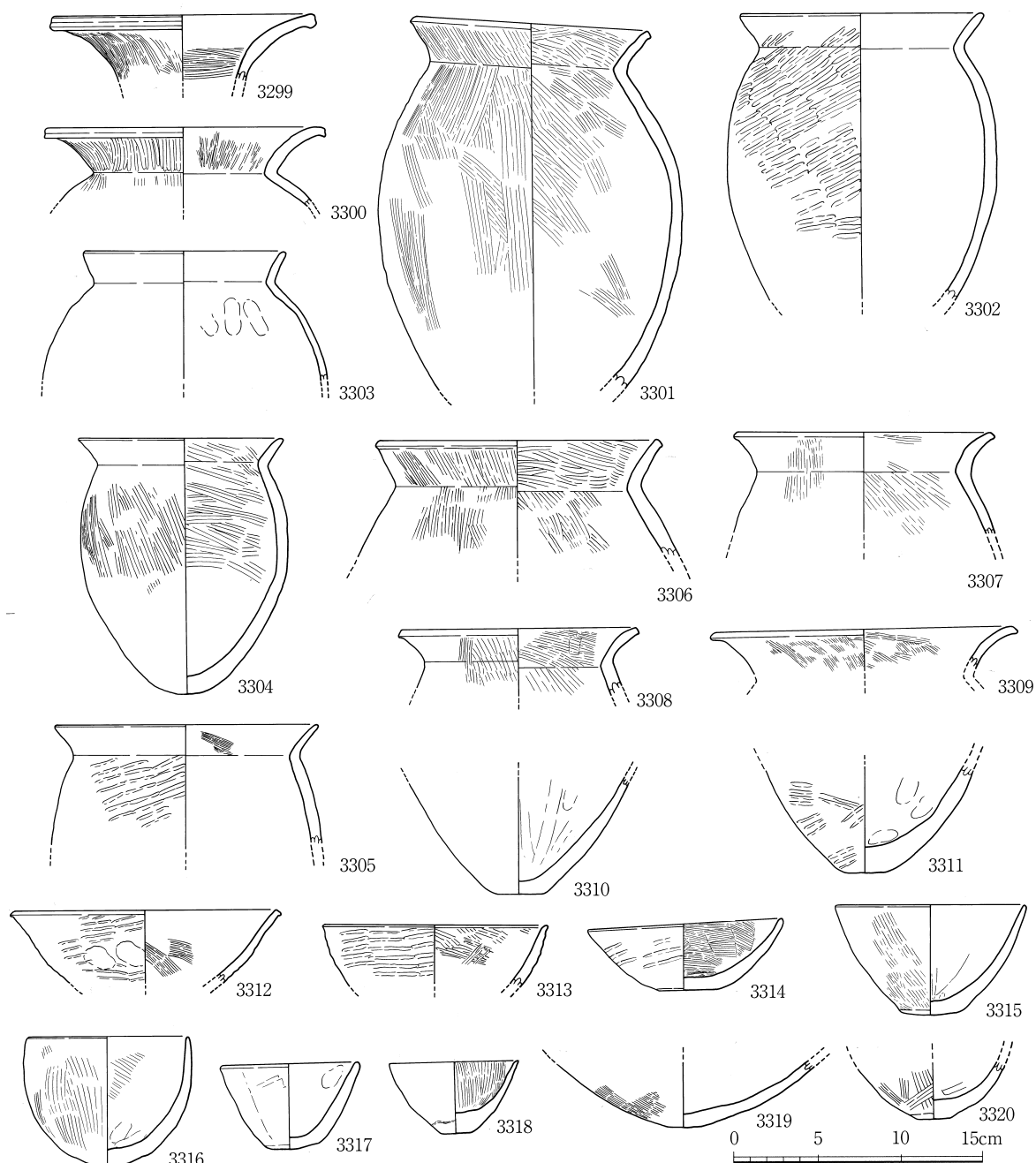


Fig.102 ST-301出土遺物実測図2

I-1類ではほぼ完形であり、口径11.4cm、器高4.0cm、底径3.5cmを測る。器高指数35のやや平たい鉢で、内面には緻密なハケ目、外面にはタタキ目が残るが摩耗しており不明瞭である。3315・3316はC-IV-1類で、3315は口縁部から底部にかけて約1/4が残存する。口径11.2cm、器高6.6cm、底径3.8cmを測る。外面にはハケ調整、内面にはヘラナデ調整を施す。3316も約1/4が残存し、口径9.6cm、器高7.7cm、底径1.8cmを測る。内外面にハケ調整を施し、内底面に指ナデ調整を施す。

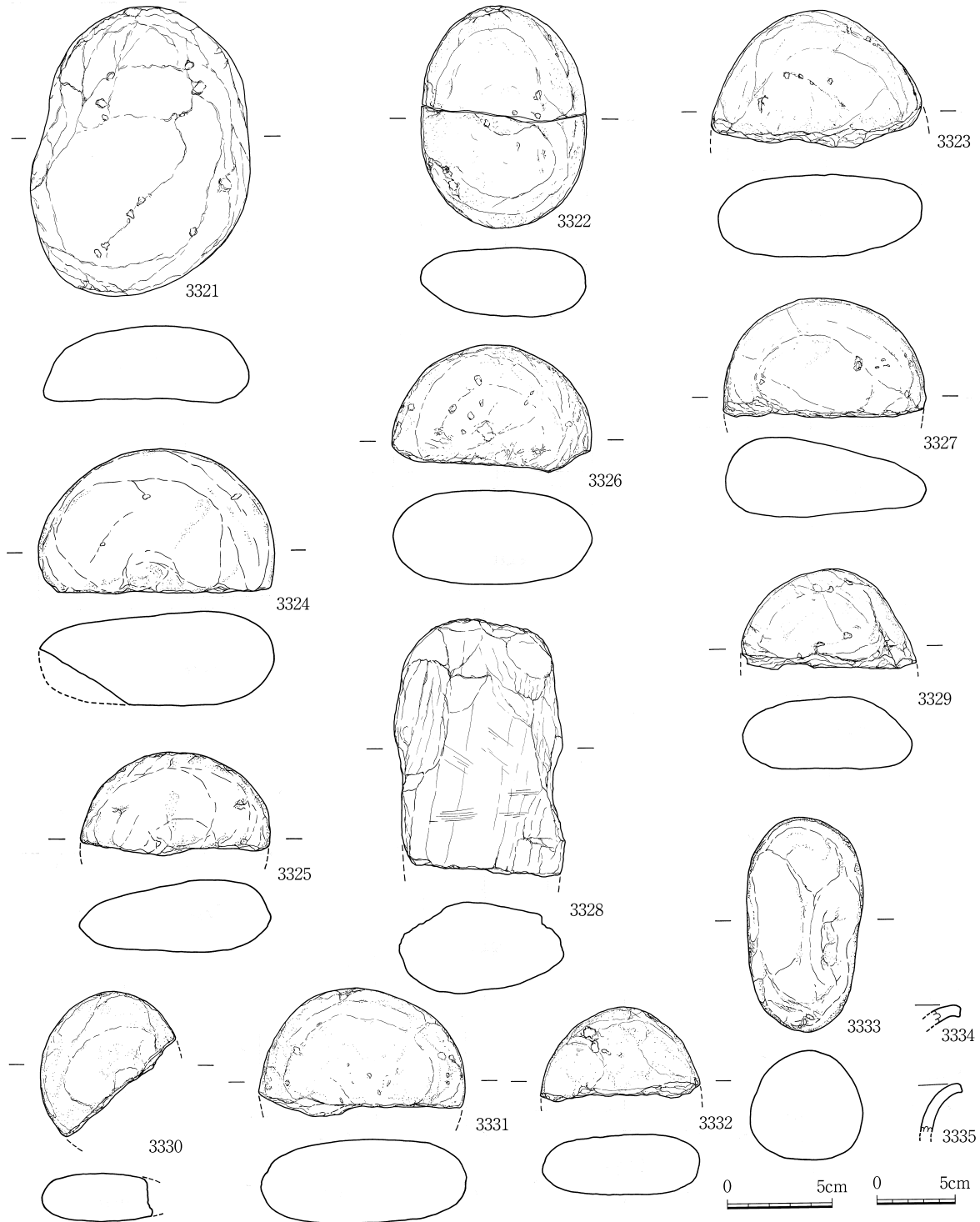


Fig.103 ST-301出土遺物実測図3

3. C区

3317はほぼ完存するミニチュア土器の鉢である。口径8.0cm, 器高5.1cm, 底径3.5cmを測る。内面には指頭圧痕が残る。手づくねで作った後に外面だけナデ調整を施したものと考えられる。3318もミニチュア土器の鉢であり, ほぼ完形である。口径7.6cm, 器高4.3cm, 底径1.8cmを測り, 内面には粗いハケ目が残る。外面は摩耗しており調整は不明である。3319・3320は底部の破片であり, ともに小さな平底である。底径は2.2cm, 1.8cmを測る。

石製品 (Fig.103-3321~3327)

3321~3327は磨石である。3321は完存し, 片面に窪みがあるが, 特に使用痕などは認められない。全長13.7cm, 全幅10.5cm, 全厚3.6cmを測る。3322~3327は半分に割られており, どれも使用痕などは認められない。3322は全長10.5cm, 全幅7.8cm, 全厚3.4cm, 3323は残存長6.5cm, 全幅9.9cm, 全厚3.9cm, 3324は残存長6.8cm, 全幅11.2cm, 全厚4.4cm, 3325は残存長4.9cm, 全幅9.0cm, 全厚3.4cm, 3326は残存長6.1cm, 全幅9.4cm, 全厚4.5cm, 3327は残存長5.7cm, 全幅9.6cm, 全厚3.8cmを測る。石材はすべて砂岩である。

石製品 (Fig.103-3328~3333) : P-3出土

3328は太型蛤刃石斧であり, 約1/2が残存する。残存部の片側が刃部であると考えられる。残存長12.2cm, 全幅8.2cm, 全厚4.3cmを測る。石材は緑色片岩である。

3329~3332は磨石である。どれも半分に割られている。使用痕などは特に認められない。3329は残存長4.8cm, 全幅8.3cm, 全厚3.5cm, 3330は残存長6.9cm, 全厚2.3cm, 3331は残存長6.1cm, 全幅9.8cm, 全厚4.0cm, 3332は残存長4.5cm, 全幅7.5cm, 全厚2.9cmを測る。石材は砂岩である。

3333は叩石である可能性が考えられるが, 特に使用した痕跡は認められない。全長10.1cm, 全幅5.5cm, 全厚5.2cmを測る。

弥生土器 (Fig.103-3334・3335) : SK-1出土

3334・3335は甕の口縁部の破片である。外反する口縁部であり, 端部に凹面をなす。3334は内面にハケ調整, 3335は外面にハケ調整を施す。

ii 土坑

SK-301 (Fig.104)

調査区西部で検出した楕円形の土坑である。長径2.46m, 短径1.23m, 深さ26cmを測る。長軸方向はN-62°-Eで, 断面形はU字形を呈す。埋土は暗褐色粘土質シルトで, 出土遺物には弥生土器4点がみられ, すべて復元図示(3336~3339)できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.107-3336~3339)

3336はB類の甕であり, 約1/6が残存し, 口径16.9cm, 胴径17.1cmを測る。口縁部は内湾する胴部から強く屈曲する。外面はタタキの後にハケ

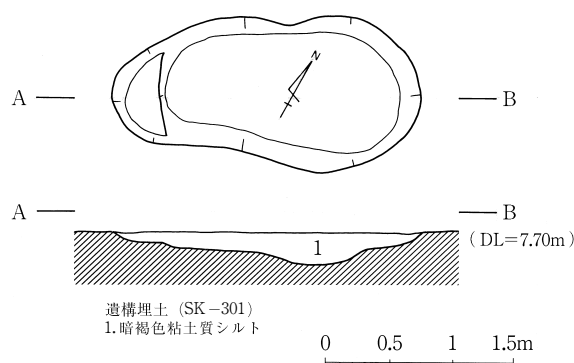


Fig.104 SK-301

調整を施し、内面にはハケ調整を施し一部指頭圧痕が残る。外面に煤の付着がみられる。3337も甕で口縁部の約1/6が残存し、口径16.0cm、胴径14.0cmを測り、口径が胴径をやや上回る。外面にはタタキ目とハケ目があり、内面には粗いハケ調整を施す。3338は甕の平底の底部で、底径2.3cmを測る。外面にタタキ目とハケ目があり、摩耗しており不明瞭である。

3339は鉢で、約1/3が残存する。底部は欠損するものの、器高は7cm強と考えられる。口径は18.2cm、器高指数は38前後で、A-II類に属する鉢である。内面には板ナデ調整を施す。外面のタタキ目は不明瞭である。

SK-302 (Fig.105)

調査区西部で検出した円形の土坑である。径1.26m、深さ15cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗褐色粘土質シルトで、出土遺物は図示した弥生土器1点(3340)のみであった。

出土遺物

弥生土器 (Fig.107-3340)

3340は長頸壺の頸部から口縁部の破片である。外面はハケ目があり、摩耗しており不明瞭である。内面には指頭圧痕が残る。

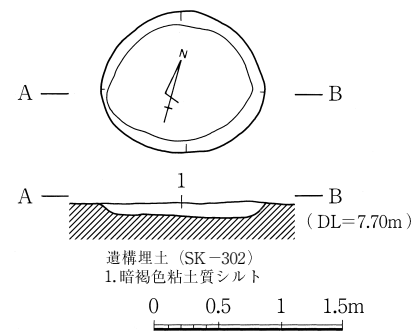


Fig.105 SK-302

iii 溝跡

SD-301 (Fig.106)

調査区東部で約20.50mに渡って検出した東西溝である。幅65cm、深さ4~17cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面は西へ傾斜する。東端、中央部、西端を中世溝に切られている。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片約100点がみられたが、復元図示できたものはなかった。

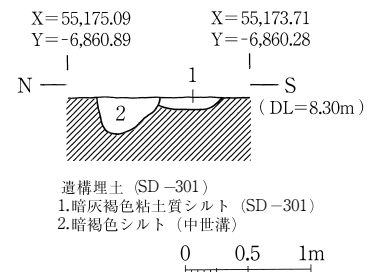


Fig.106 SD-301

SD-302

調査区中央部、SD-301の西に3.60mに渡って検出した東西溝であり、SD-301と同一の溝跡である可能性も考えられる。幅44cm、深さ4~5cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面はほぼ平坦である。中世の溝に2カ所で切られており、埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片6点がみられ、そのうち1点(3341)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.107-3341)

3341は鉢の平底の底部であり、底径2.2cmを測る。外面はタタキ、内面はナデ調整を施す。

iv ピット

P-301

調査区北部で検出した円形のピットである。同時期のピットに2カ所で切られており、径20cm、

3. C区

深さ6cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土であった。出土遺物には弥生土器片16点がみられ、そのうち1点(3342)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.107-3342)

3342は鉢で、口縁部から底部にかけての破片である。口径13.8cm, 器高2.1cm, 底径9.6cmを測り、成形は手づくねによるものと考えられ、外面には指頭圧痕が多く残る。

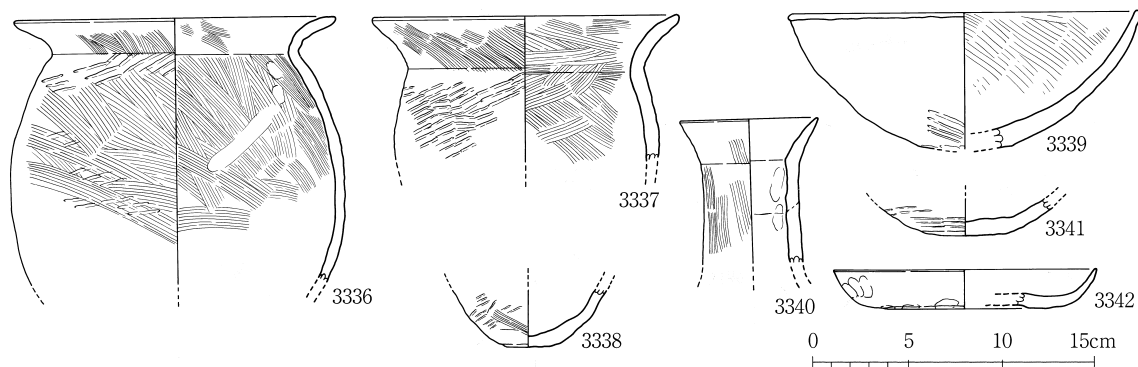


Fig.107 SK-301・302, SD-302, P-301出土遺物実測図

v 土器集中遺構

SC-301

調査区東部で検出した弥生土器集中地点であり、東西約2.0m, 南北約4.5mに渡って確認したが、明確な掘方はみられなかった。出土遺物には弥生土器片60点と石製品2点がみられ、弥生土器2点(3343・3344), 石製品1点(3345)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.108-3343・3344)

3343は壺の口縁部でB-1類に属するものである。口縁部の約1/3が残存し、口径21.0cmを測る。口縁端部は面をなし、外面にはハケ調整を施す。内面は摩耗しており調整は不明である。

3344は甕の胴部破片で、口縁部と底部を欠損する。倒卵形の胴部であり、外面にはタタキの後にハケ調整を施し、煤の付着がみられる。内面にはハケ調整を施す。

石製品 (Fig.108-3345)

3345は磨石であり、完存する。全長9.9cm, 全幅8.2cm, 全厚6.4cmを測る。特に使用痕跡はみられない。石材は砂岩である。

SC-302

調査区北部で検出した弥生土器集中地点であり、東西約5.5m, 南北約4.0mに渡って確認したが、明確な掘方はみられなかった。出土遺物には弥生土器片約300点がみられ、30点(3346~3375)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.109・110-3346~3375)

3346はB-1類の壺で、口縁部の約1/3が残存する。内面にはハケ目が残るが外面は摩耗が著しく

調整は不明である。3347はC類の壺で、口縁部の約1/4が残存する。内面には不明瞭ながらハケ目が残るが、外面は摩耗しており調整は不明である。3348は壺の底部である。平底であり、底径7.8cmを測る。内面にはハケ調整を施す。

3349・3350はA類の甕である。3349は約1/6が残存し、口径13.5cm、胴径16.9cmを測る。外面には全面にタタキ目が残る、煤の付着がみられる。内面にはハケ調整を施す。口縁

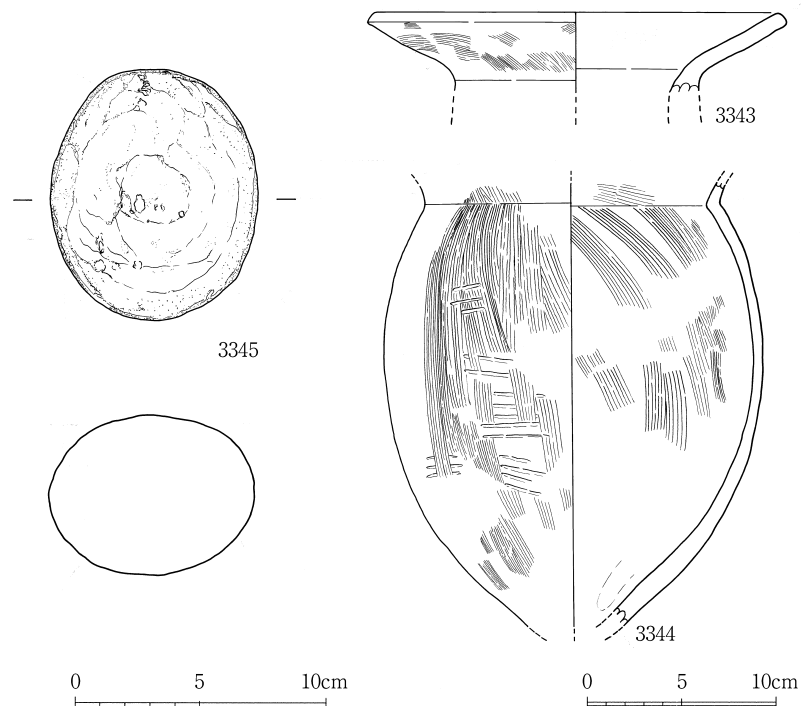


Fig.108 SC-301出土遺物実測図

部内面のハケ目は摩耗しており不明瞭である。3350は口縁部から胴部にかけての破片である。外面には緻密なハケ調整を施し、内面は摩耗しており調整は不明である。3351・3352はB類の甕である。3351は口縁部の約1/8が残存し、口径15.0cmを測る。胴径は16cm前後と考えられる。摩耗が著しく調整は不明瞭である。3352は口縁部から胴部にかけての破片である。口径12.8cm、胴径12.9cmを測り、口縁部は短く上がる。外面にはタタキ目とハケ目、内面にはハケ目が残る。3353・3354はC類の甕である。3353は口縁部の約1/6が残存し、口径23.4cmを測る。外傾する口縁部を有し、内面には胴部にやや粗いハケ目、口縁部に緻密なハケ目が残る。外面は摩耗しており調整は不明である。3354は口縁部から胴部にかけての破片である。外面にはタタキ目、内面にはハケ目が残るが、摩耗が著しく不明瞭である。3355は口径が胴径を大きく上回るものである。約1/8が残存し、口径16.2cm、胴径13.4cmを測る。調整痕は比較的明瞭に残っており、外面はタタキの後に胴部中位を中心にハケ調整、内面は上胴部を中心にハケ調整を施す。下胴部内面はやや摩耗し、底部は欠損する。3356～3360は甕の口縁部破片であり、くの字状に外反または外傾する。外面はタタキとハケ調整を施し、内面にはハケ調整のみ施すものが多い。3356と3360は内外面ともハケ調整のみである。口径は順に16.5cm、12.0cm、15.4cm、14.7cm、16.6cmを測る。3361～3369は甕の底部である。すべて平底ないし丸底に近い平底である。外面にはタタキとハケ調整、内面には指ナデ調整を施すものが多い。3362には緻密なハケ目が残る。3364には外面にタタキのみ残る。底径は順に2.0cm、1.8cm、3.3cm、2.5cm、2.8cm、3.6cm、3.1cm、3.2cm、2.0cmを測る。

3370・3371はA-II-2類の鉢である。3370は約3/4が残存するが口縁部はほとんど欠損する。口径19.0cmを測る尖底の鉢で、外面にはヘラ削りとナデ調整を施す。内面は摩耗しており調整は不明である。3371は約2/3が残存し、底部は欠損するが丸底であるものと考えられる。口径は18.2cmを測

3. C区

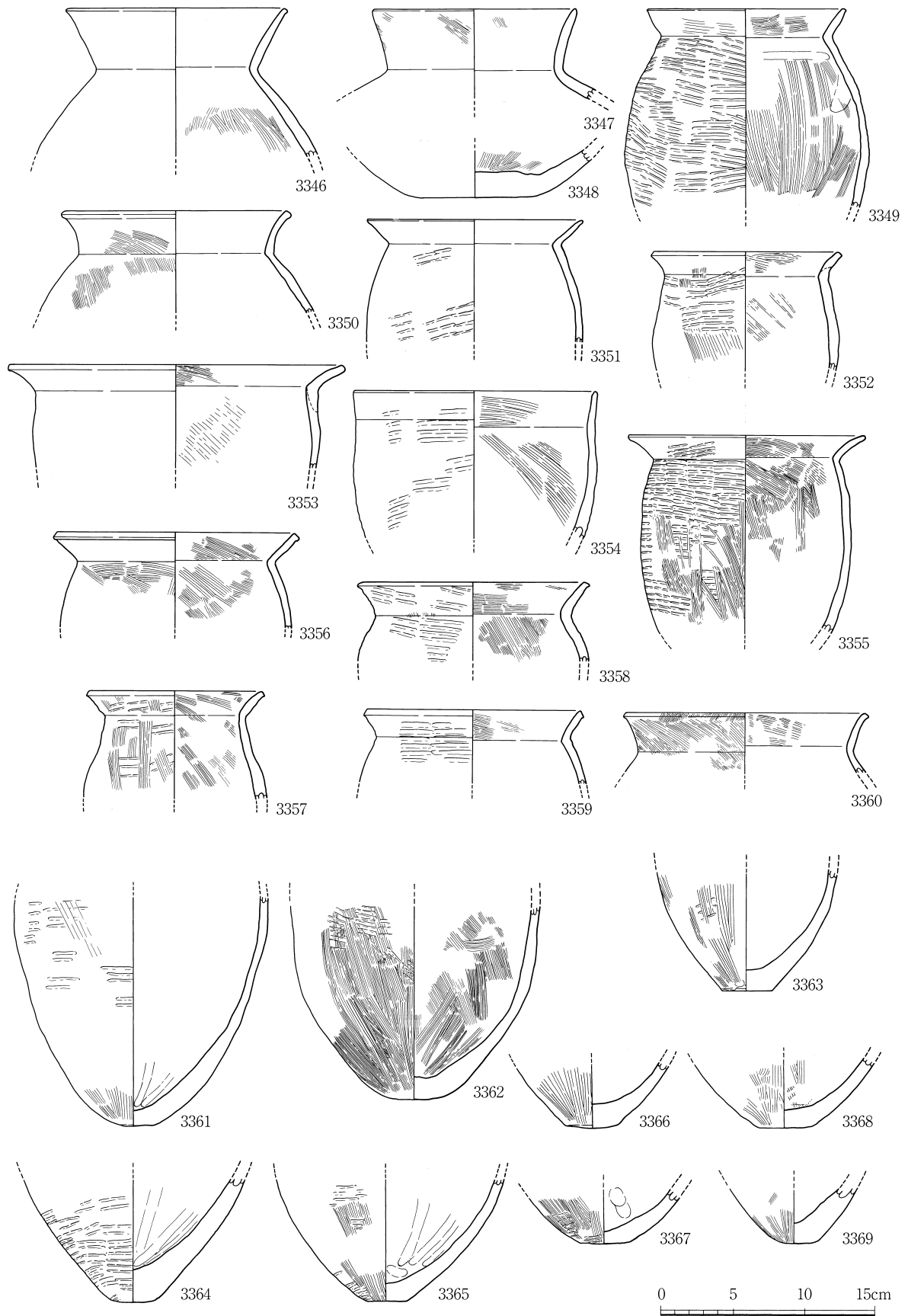


Fig.109 SC-302出土遺物実測図1

り、外面は底部を中心に放射状のヘラ磨きを施す。口縁部は内外面にナデ調整、体部内面にはハケ調整を施す。3372は約1/6が残存する。口径19.2cmを測るA類の鉢で、内外面とも粗いハケ目が部分的に残る。3373はC-IV-1類の鉢で、約1/3が残存する。口径11.0cm、器高6.7cm、底径3.4cmを測る。底部外面にはタタキ、体部外面にはナデ調整を施すが、口縁部から内面にかけては摩耗のため調整は不明である。3374・3375は底部の破片である。3374は平底で、底径4.4cmを測る。外面は底部近くにタタキ、体部にはナデ調整を施す。内面はハケ調整を施す。3375は尖底の底部である。外面にはヘラ削り、内面にはハケ調整を施す。

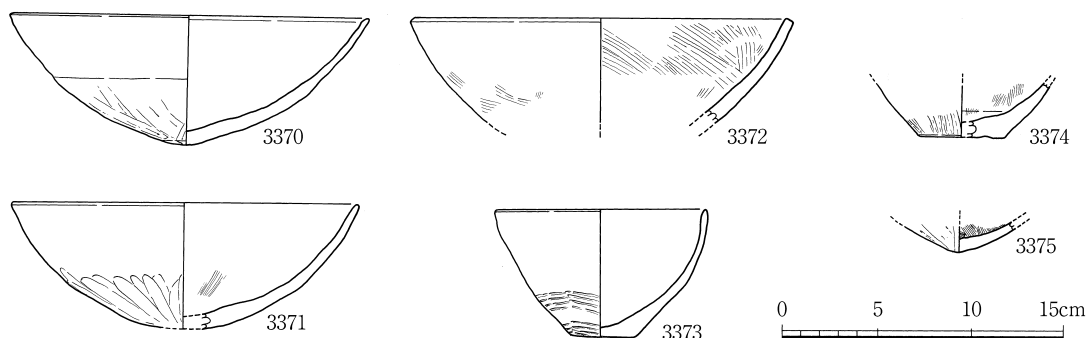


Fig.110 SC-302 出土遺物実測図2

SC-303

調査区北部で検出した弥生土器集中地点であり、東西約2.0m、南北約1.5mに渡って確認したが、明確な掘方はみられなかった。出土遺物には弥生土器片約700点がみられ、21点(3376~3396)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.111-3376~3396)

3376はA類の壺で、口縁部の約1/6が残存する。口径17.6cmを測り、口縁端部に面をなす。外面にはヨコ方向のハケ調整、内面はハケ調整の後に軽く指ナデ調整を施す。

3377~3379はA類の甕である。3377は口縁部の約1/8が残存し、口径17.4cmを測る。胴部は球形に近く、調整は不明瞭ではあるが、内外面にハケ目が残る。3378は口縁部から胴部にかけての破片であり、口径16.8cmを測る。外面にはタタキ目とハケ目、内面にはハケ目が残る。3379も口縁部から胴部にかけての破片であり、口径15.3cmを測る。口縁部は緩やかに屈曲する。内外面にはハケ目が残る。3380~3383は外反または外傾する口縁部である。外面にはタタキ、ハケ調整を施し、内面にはハケ調整を施すものが多い。どれも摩耗が著しく調整は不明瞭である。口径は順に15.6cm、13.4cm、13.4cm、12.2cmを測る。3384~3391は甕の底部である。外面はハケ調整のみのものとタタキ目の残るものに分れる。内面はハケ調整を施すものが主である。すべて平底の底部であり、底径は順に3.0cm、2.2cm、3.0cm、3.2cm、5.0cm、3.0cm、3.4cm、1.2cmを測る。

3392~3396は鉢である。3392は口縁部の約1/6が残存する。口径17.0cmを測り、鉢A類に属する。内面にはハケ目が残るが、外面は摩耗している。3393は口縁部の破片で、口径15.6cmを測り、鉢B類に属する。内面には粗いハケ目が残る。外面は摩耗する。3394は平底の底部の破片で、底径は1.4cm

3. C区

を測る。摩耗しており調整は不明である。3395はボタン状に突起する底部で、底径2.8cmを測る。外面にタタキ目、内面にハケ目が残る。3396は丸底の底部で外面にタタキ目が残る。

SC-304

調査区中央部で検出した弥生土器集中地点であり、東西約2.0m、南北約1.5mに渡って確認したが、明確な掘方はみられなかった。出土遺物には弥生土器片約50点がみられ、5点(3397~3401)が復

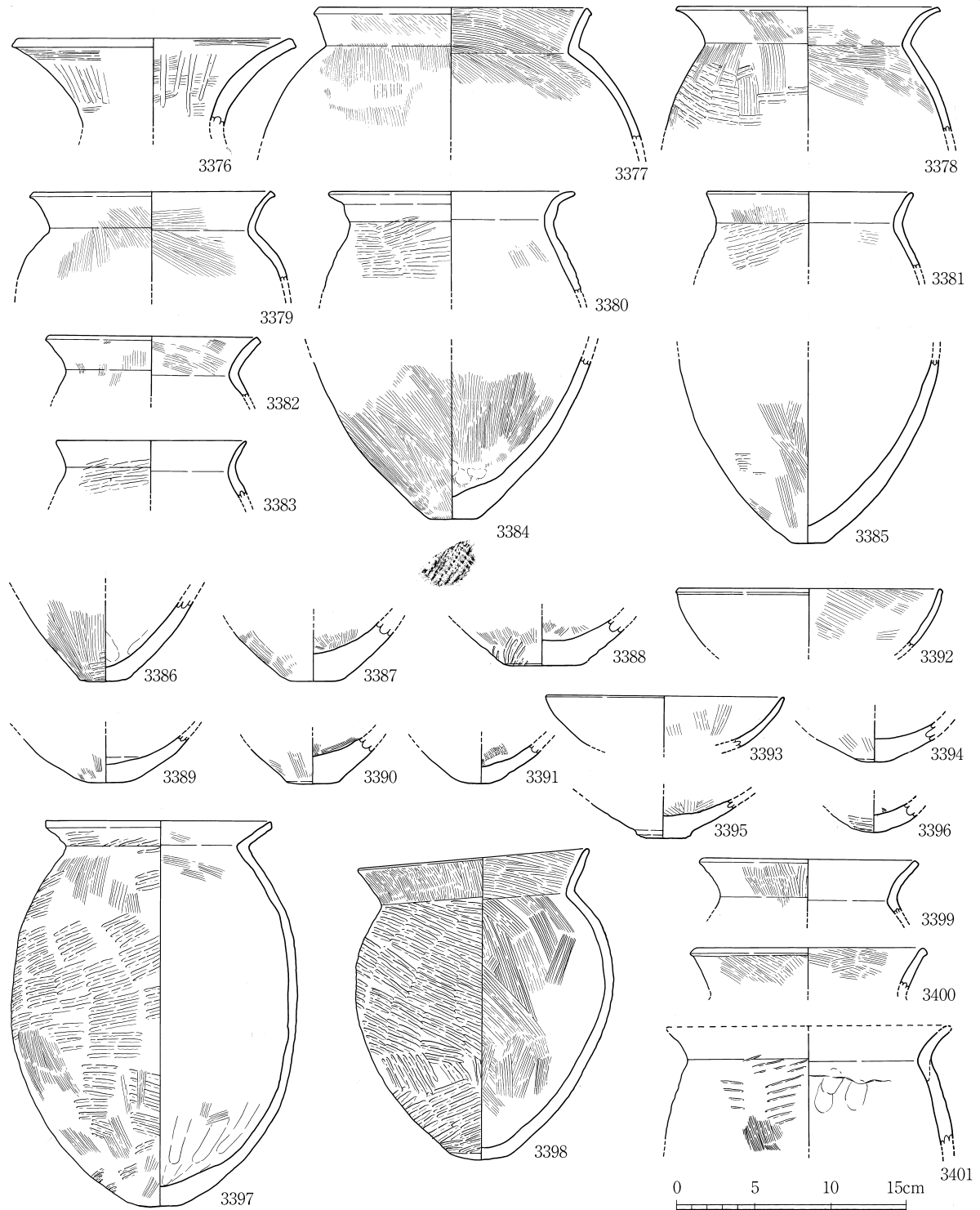


Fig.111 SC-303・304出土遺物実測図

元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.111-3397~3401)

5点とも甕である。3397はA-1類, 3398はA-2類の甕で, 3397はほぼ完形に近いが, 口縁部の一部を欠損する。口径14.5cm, 器高24.9cm, 胴径18.5cmを測り, ごく小さな平底の底部を有する。外面はタタキの後に上胴部と下胴部にハケ調整を施す。内面はハケ目が残るが不明瞭であり, 底部近くには指ナデ調整を施す。3398もほぼ完形であり, 丸底の底部を有す。口径14.7cm, 器高20.3cm, 胴径16.7cmを測り, 胴部外面全面にはタタキ, 口縁部から内面にはハケ調整を施す。ともに胴部外面には煤が付着する。3399~3401はくの字状に屈曲する口縁部の破片であり, 口径は13.7cm, 14.7cm, 18.0cmを測る。内外面にハケ調整を施す。

SC-305

調査区南部で検出した弥生土器集中地点であり, 東西約2.0m, 南北約1.5mに渡って確認したが, 明確な掘方はみられなかった。出土遺物には弥生土器片約120点がみられ, 8点(3402~3409)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.112-3402~3409)

3402はA-1類の甕である。ほぼ完形であるが, 口縁部は約1/2が欠損する。口径13.6cm, 器高25.5cm, 胴径18.2cm, 底径3.3cmを測る。外面はタタキの後にほぼ全面にハケ調整を施す。内面はハケ調整の後に指ナデ調整を施す。3403・3404はA類の甕である。3403は約1/2が残存するが底部は欠損する。口径14.6cm, 胴径18.6cmを測る。胴部外面には明瞭なタタキ目残り, 口縁部から内面にかけはては摩耗しており調整は不明瞭で, 頸部内面に指ナデ調整が確認できるのみである。3404は口縁部から胴部にかけての破片で, 口径10.5cmを測る。外面にはタタキ目と煤の付着がみられる。内面は部分的にハケ目が残るが不明瞭である。3405は胴部破片であり, 口縁部と底部は欠損し, 胴径24.3cmを測る。外面にはタタキ目, 内面にはハケ目が残る。3406・3407はB-1類の甕である。3406は約1/2が残存し, 口径13.1cm, 器高19.4cm, 胴径13.1cm, 底径2.3cmを測る。外面にはタタキを施し, 内面には底部近くに指ナデ調整を施す。3407も約1/2が残存し, 口径14.6cm, 器高16.5cm, 胴径14.4cm, 底径1.6cmを測る。外面は全面にタタキの後に部分的にハケ調整を施す。内面にはハケ目と指頭圧痕が残る。3408はB-2類で約2/3が残存するが, 口縁部は欠損する。胴径17.4cm, 底径2.8cmを測る。外面はタタキの後に下胴部にハケ調整を施す。内面はハケ調整の後に下胴部に指ナデ調整を施す。3点とも外面に煤の付着がみられる。

3409は鉢でA-III-2類に属する。完形であり, 口径20.8cm, 器高9.9cmを測る。丸底の底部を有し, 口縁部は内湾する胴部からほぼ真直ぐに外上方に上がる。外面は底部近くにタタキ, 口縁部外面, 体部内面にはハケ調整を施す。

SC-306 (Fig.113)

調査区西部の斜面裾で検出した弥生土器集中地点であり, 東西約2.0m, 南北約1.0mに渡って確認した。明確な掘方はみられなかったが, 集石を伴っており祭祀跡の可能性も考えられる。出土遺

3. C区

物には弥生土器片約1,000点がみられ、26点(3410~3435)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.114・115-3410~3435)

3410はB-2類の壺で、口縁部の約1/4が残存し、口径16.0cmを測る。胴部は球体に近いものと考えられる。全体的に摩耗しており、胴部外面にタタキ目が残るが、他の調整は不明である。

3411~3418は甕のくの字状に屈曲する口縁部で、A類に属するとみられるものである。外面は主にタタキ、内面はハケ調整の後に指ナデ調整を施すものが多い。3417・3418は口縁部の屈曲の度合いが比較的緩やかである。3412・3415は口縁端部に指頭圧痕が残る。口径は順に15.4cm, 16.4cm, 16.8cm, 14.9cm, 14.0cm, 13.0cm, 14.0cm, 15.8cmを測る。3419はC類に属する甕であり口径30.4cm、胴

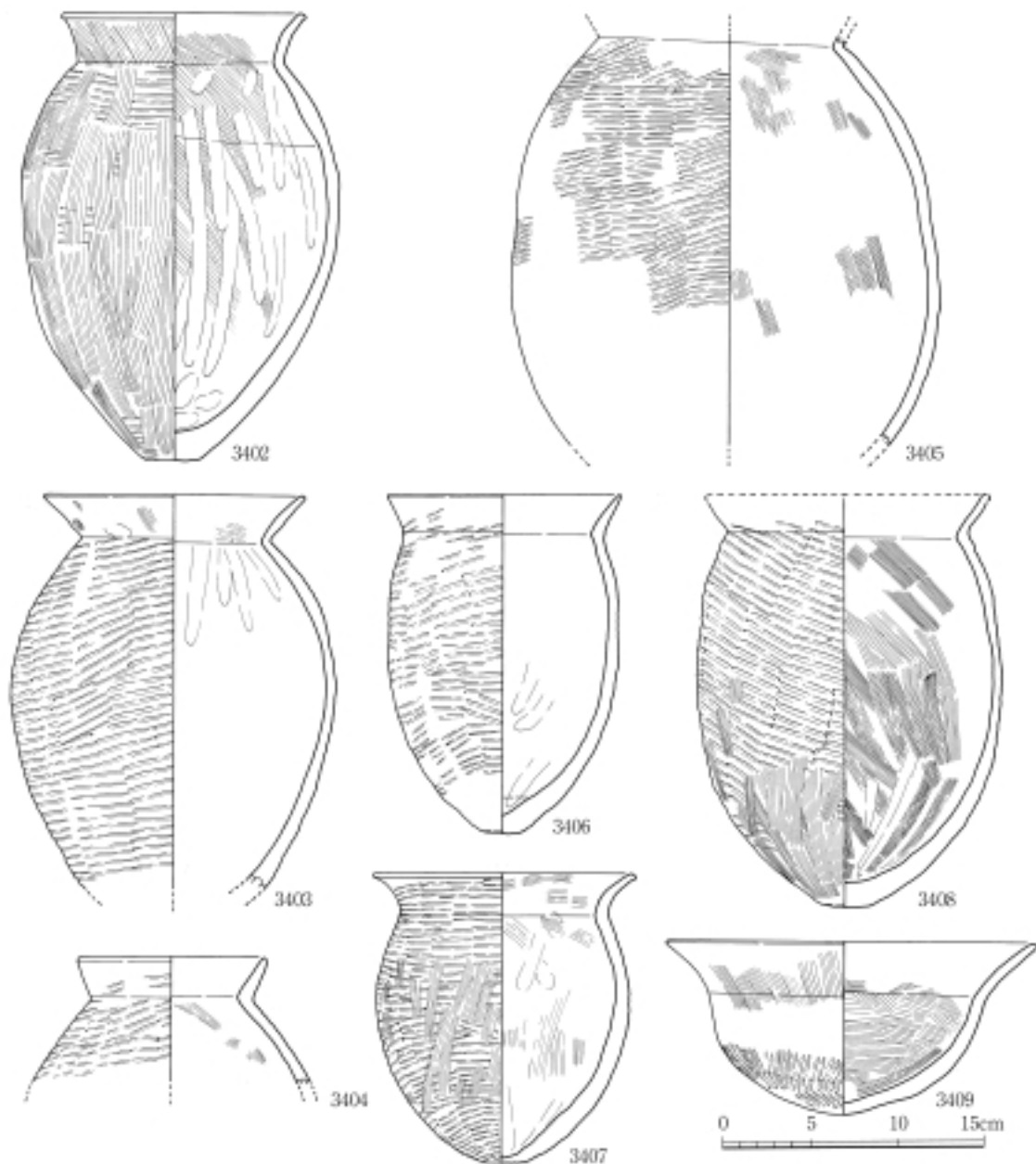


Fig.112 SC-305出土遺物実測図

径29.6cmを測る。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面に若干のタタキ目が残る。3420～3423は甕のくの字状に屈曲する口縁部で、外面にタタキ目を残すものとハケ目を残すものがあり、内面にはハケ目を残すものと調整は不明のものがある。口径は順に15.7cm, 14.1cm, 15.8cm, 13.6cmを測る。3424～3431は平底の底部である。3428～3431は小さな底部を有する。外面は主にタタキを施し、その上にハケ調整を加えるものもある。内面はハケ調整または指ナデ調整を施す。底径は順に3.8cm, 5.2cm, 3.2cm, 4.7cm, 2.8cm, 3.0cm, 1.4cm, 1.8cmを測る。3432は丸底の底部で、約1/2が残存する。外面にはタタキを施し、内面にはハケ調整の後にヘラナデ調整を施す。

3433・3434は鉢の丸底の底部である。ともに外面にはタタキ目、内面には若干のハケ目が残る。3435は上げ底風の底部で、底径は3.6cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。

SC-307

調査区西部の斜面裾で検出した弥生土器集中地点である。長さ約30m、幅約2mの帯状に検出した。出土遺物には弥生土器片約2,000点がみられたが、全般に遺存状況は悪く復元図示できたのは弥生土器13点(3436～3448)のみであった。

出土遺物

弥生土器 (Fig.116-3436～3448)

3436はB-1類の壺で、口縁部の約1/8が残存する。外上方に真直ぐ上がる口縁部で、端部に面をなす。内外面にハケ調整を施すが、内面は摩耗が著しい。3437はD類の壺である。頸部から口縁部の破片であるが口縁端部は欠損する。摩耗が著しく調整は不明である。

3438・3439はA類の甕で、3438は口縁部の約1/2が残存し、口径13.4cm、胴径19.6cmを測る。胴部は球形に近く、内外面にハケ調整を施す。3439は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁端部は面をなす。口径17.8cmを測り、胴部外面、口縁部内外面には緻密なハケ調整を施す。胴部内面はやや粗いハケ調整の後に指ナデ調整を施す。外面には煤の付着がみられる。3440・3441はくの字状に外

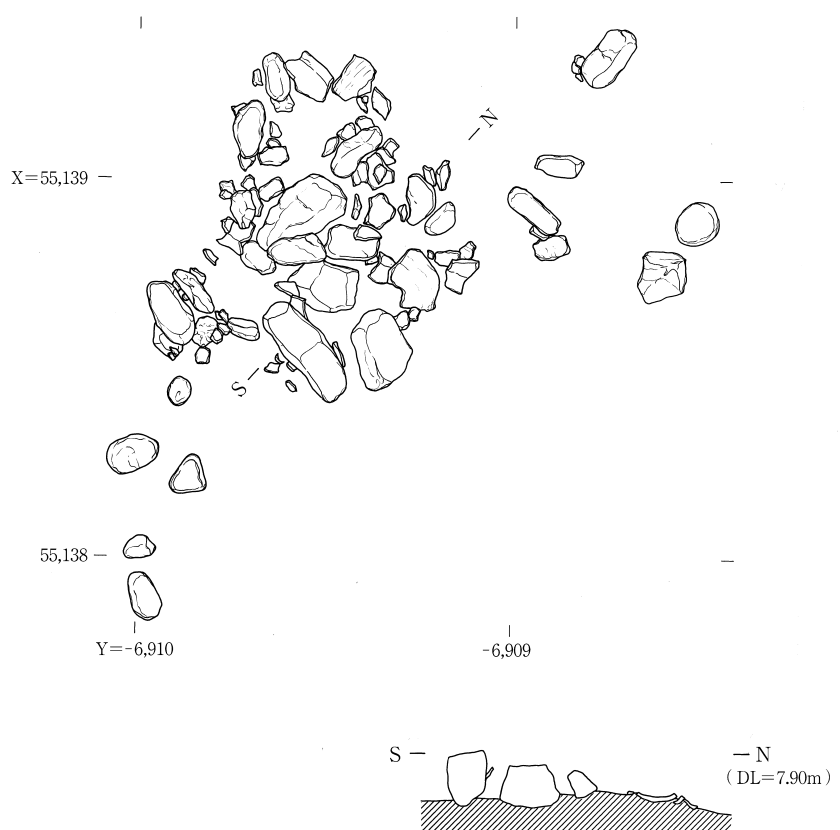


Fig.113 SC-306遺物出土状態

3. C区

傾する口縁部の破片で、口縁端部には面をなす。3440は口径14.0cmを測り、内外面にハケ調整を施す。3441は口径15.0cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。

3442～3444は底部から胴部にかけて残存するものである。内外面ともハケ調整を施し、内面の底部近くは指頭圧痕が残る。3442は約1/2が残存し、底径3.1cmを測る。3443は底径4.2cmを測る。3444は丸底の底部を有するものである。3445・3446は平底の底部で、外面にハケ調整、内面に指ナデ調整を施す。底径は順に4.2cm、4.0cmを測る。

3447・3448は高杯であり、杯底部から脚台部の破片であるが、ともに裾部は欠損する。3447は杯部には内外面にハケ調整、脚部外面にハケ調整、内面に板ナデ調整を施す。杯部と脚部の接合点に

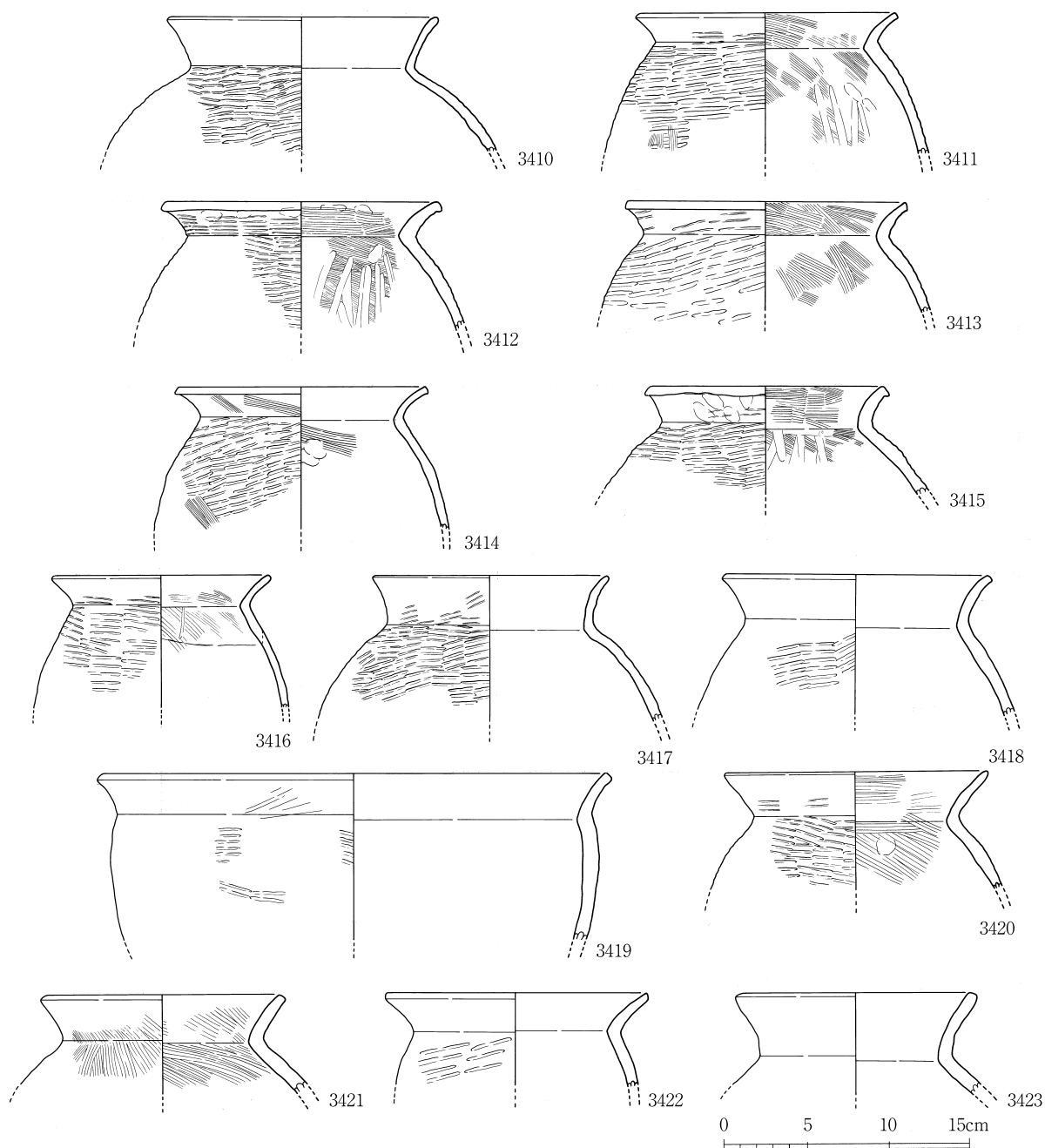


Fig.114 SC-306出土遺物実測図1

は指頭圧痕が残る。3448は脚部外面にハケ調整, 内面にはヘラ削りを施す。

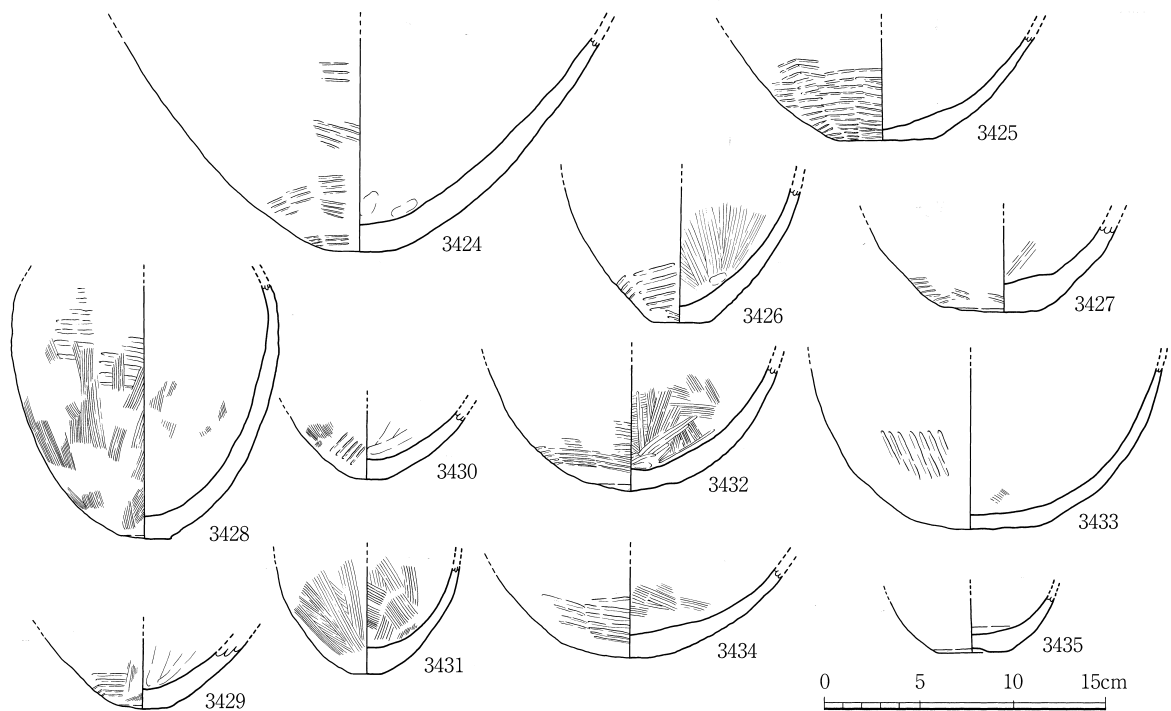


Fig.115 SC-306出土遺物実測図2

② 中世

掘立柱建物跡1棟, 柵列4列, 土坑10基, 溝跡11条, ビット4個を検出した。

i 掘立柱建物跡

SB-301 (Fig.117)

調査区南西部で検出した梁間1間(2.70 m), 桁行3間(6.25 m)の南北棟建物である。棟方向はN-3°-Eで, 柱間寸法は梁間(東西)が2.70 m, 桁行(南北)が1.85~2.35 mであった。柱穴は径25~30 cmを測る円形で, 南東隅の柱穴が確認できなかった。柱穴の埋土は褐色シルトで褐灰色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には土師質土器細片数点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

ii 柵列

SA-301 (Fig.118)

調査区南部で検出した東西の柵列(N-77°-E)である。4間分(9.50 m)を検出し, 柱間は2.20 m, 2.30 m, 2.80 mである。柱穴は径35~40 cmを測る円形で, 柱穴の埋土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

SA-302 (Fig.119)

調査区西部で検出した東西の柵列(N-80°-E)である。3間分(5.95 m)を検出し, 柱間は1.80 m, 1.95 m, 2.20 mであった。柱穴は径35~50 cmを測る円形で, 柱穴の埋土は褐色シルトで褐灰色シル

3. C区

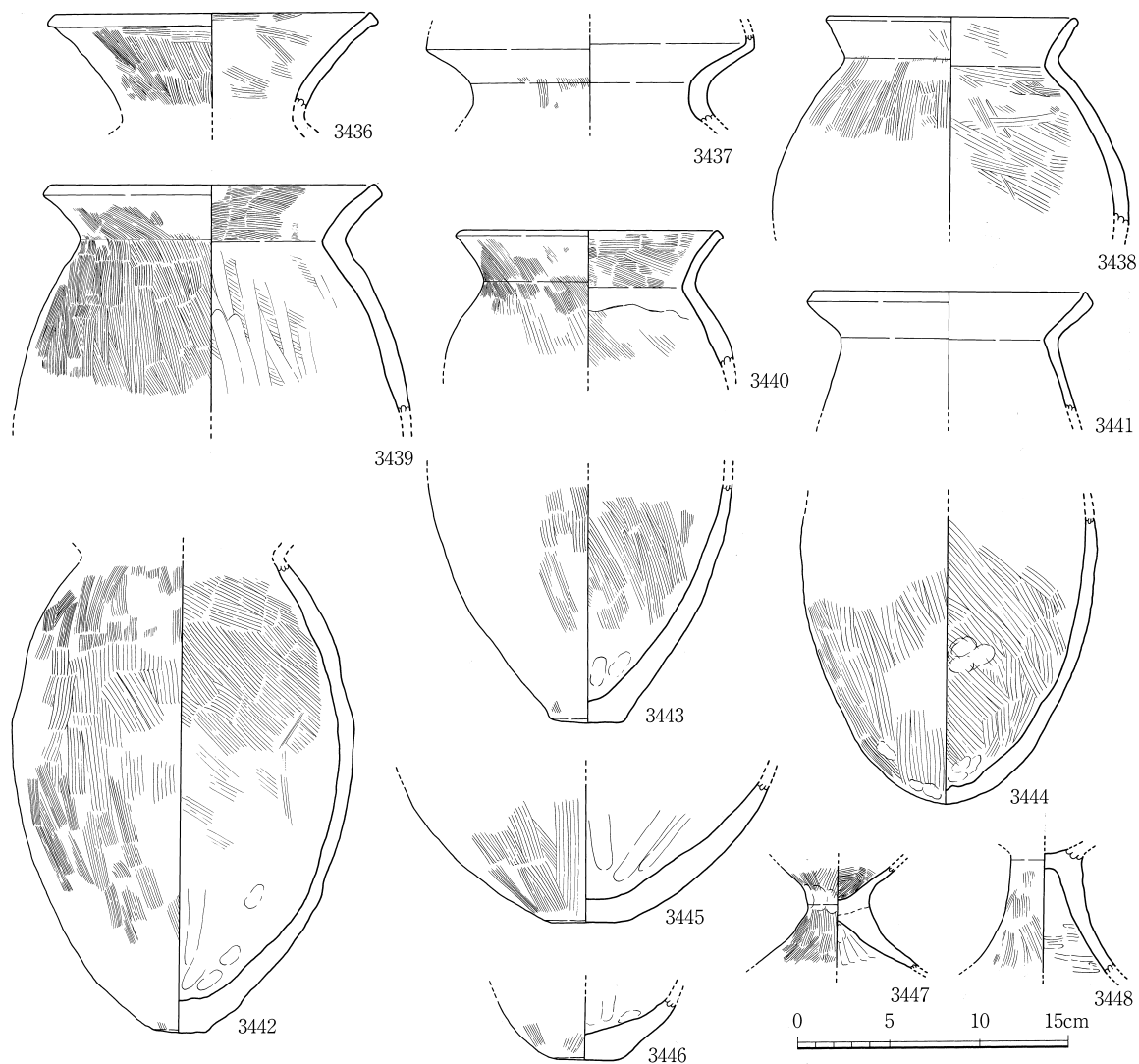


Fig.116 SC-307出土遺物実測図

ト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SA-303 (Fig.120)

調査区西部で検出した南北の柵列(N-9°-W)である。3間分(6.75m)を検出し、柱間は1.75m, 2.15m, 2.85mと様々であった。柱穴は径50~60cmを測る円形で、柱穴の埋土は褐色シルトで褐灰色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。

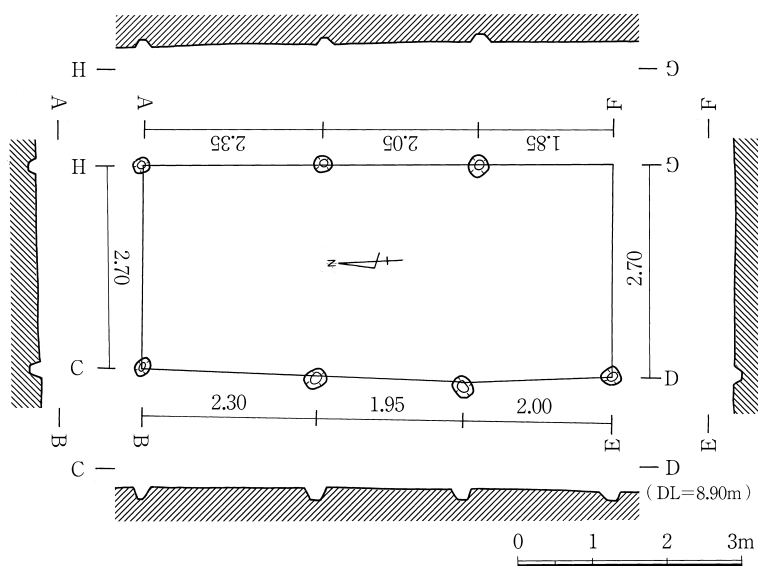


Fig.117 SB-301

SA-304 (Fig.121)

調査区西部で検出した南北の柵列(N-5°-W)である。3間分(6.90 m)を検出し、柱間は2.00 m, 2.30 m, 2.60 mと様々であった。柱穴は径

30~60 cmを測る円形で、柱穴の埋土は褐色シルトに褐灰色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物は皆無であった。

iii 土坑

SK-303 (Fig.122)

調査区中央部で検出した円形の土坑である。径2.13 m, 深さ48 cmを測る。断面形は逆台形を呈し、SD-306を切っている。埋土は暗褐色シルトでにぶい黄褐色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器, 土師質土器細片数点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-304 (Fig.123)

調査区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径1.43 m, 短径0.73 m, 深さ38 cmを測る。長軸方向はN-27°-Wで、断面形は逆台形を呈す。SD-306を切っ

ており、埋土は褐色シルトに褐灰色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片5点, 土師質土器片8点, 瓦器片1点, 陶器片1点がみられ、土師質土器1点(3449)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.132-3449)

3449は小皿で、完形である。口径10.2 cm, 器高2.6 cm, 底径5.0 cmを測る。口縁部は平らな底部から

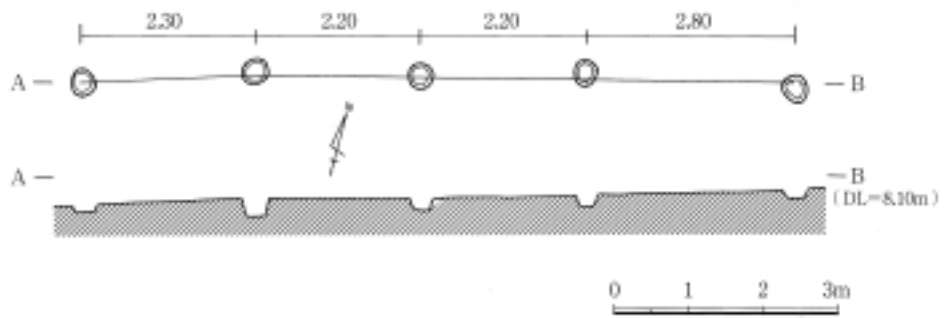


Fig.118 SA-301

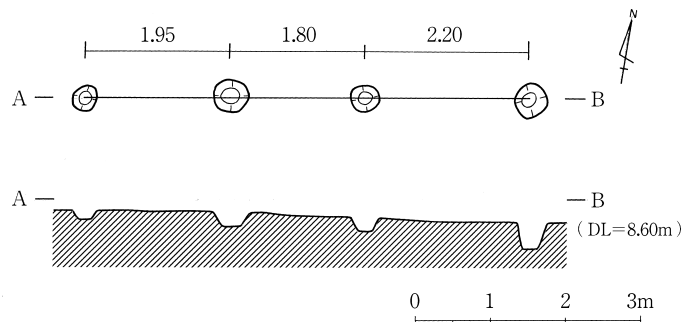


Fig.119 SA-302

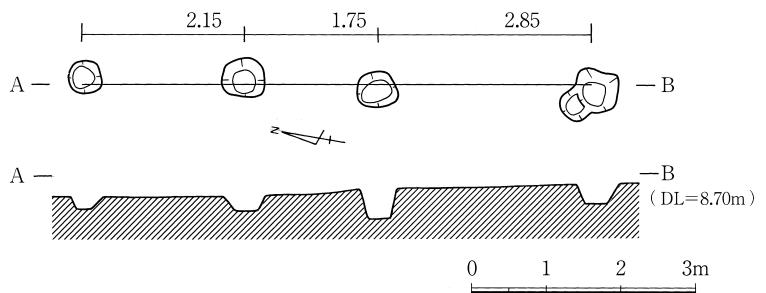


Fig.120 SA-303

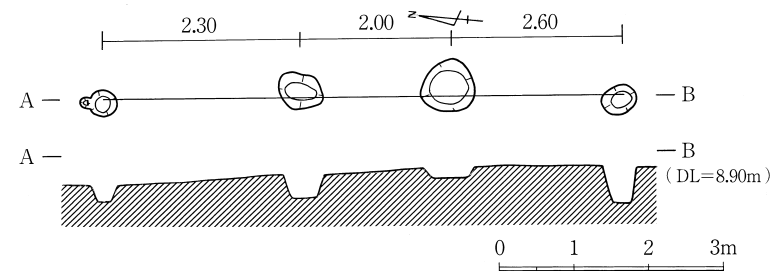


Fig.121 SA-304

3. C区

Tab.3 C区塀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方 向 (NはGN)	備 考
	柱穴数(個)	全長()	柱間距離()		
SA - 301	5	9.50	2.20, 2.30, 2.80	N - 77° - E	
SA - 302	4	5.95	1.80, 1.95, 2.20	N - 80° - E	
SA - 303	4	6.75	1.75, 2.15, 2.85	N - 9° - W	
SA - 304	4	6.90	2.00, 2.30, 2.60	N - 5° - W	

内湾して上がる。内外面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

SK-305 (Fig.124)

調査区北西部で検出した円形の土坑である。径3.16m、深さ62cmを測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗褐色粘土質シルトで褐灰色シルト質粘土のブロックを含むものであった。出土遺物には土師質土器片約100点、瓦器片約30点と弥生土器、須恵器、緑釉陶器、東播系須恵器、白磁等の細片がみられ、須恵器1点(3450)、瓦器1点(3451)、東播系須恵器3点(3452~3454)、土師質土器7点(3455~3461)が図示できた。

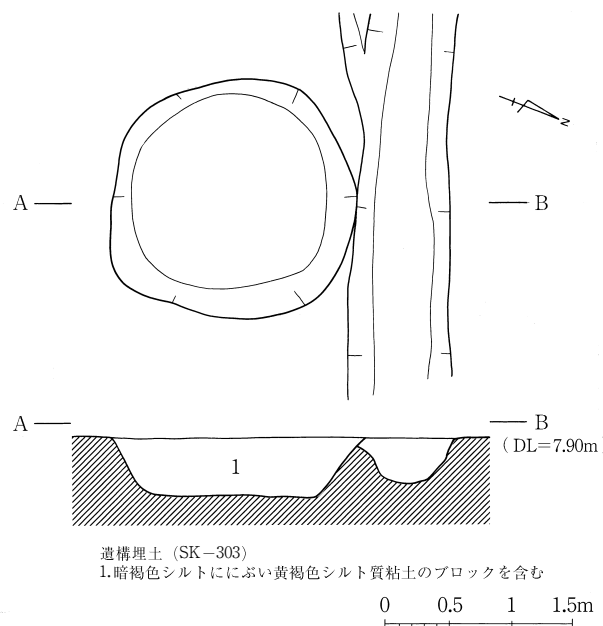


Fig.122 SK-303

出土遺物

須恵器 (Fig.132-3450)

3450は高杯の脚台部の破片である。内外面に回転ナデ調整を施す。

瓦器 (Fig.132-3451)

3451は椀の底部破片で、底径3.6cmを測る。逆三角形の低い高台を有す。内底面には暗文を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。高台内にはナデ調整を施す。

東播系須恵器 (Fig.132-3452~3454)

3452は椀の口縁部の破片で、やや内湾する。外面には凹線状の窪みが4条巡る。

3453・3454は小皿の底部破片で、3453は底径4.8cm、3454は底径4.8cmを測る。ともに底部の切り離しは回転糸切りである。

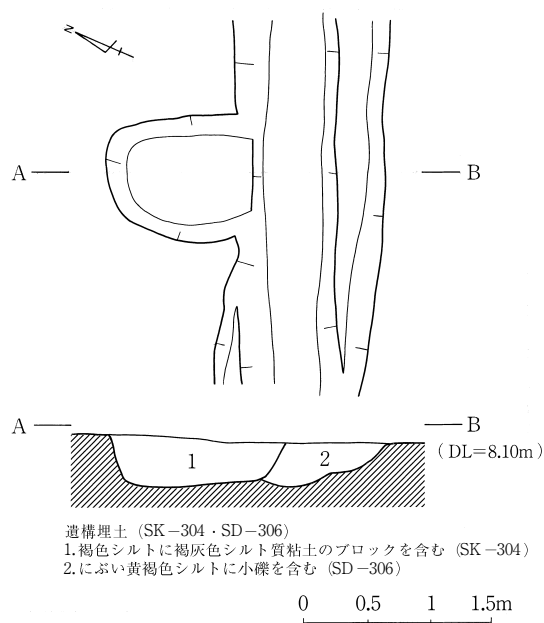


Fig.123 SK-304

土師質土器 (Fig.132-3455~3461)

3455~3458は杯底部でベタ高台のものである。3455は底部のみ完存し、底径6.7cmを測る。全体に摩耗しており調整は不明瞭であるが、体部外面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。3456は底部の約1/2が残存し、底径7.6cmを測る。内底面にはナデ調整を加える。3457は底部の約1/4が残存し、底径6.8cmを測る。全体に摩耗が著しく調整は不明である。3458も約1/4が残存し、底径5.9cmを測る。内外面には回転ナデ調整を施す。3459も杯の底部であり、底径4.8cmを測る。外面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。3460は底部の約1/3が残存するベタ高台風の底部で、底径6.8cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。

3461は椀の底部で、約1/2が残存する。逆台形状で約0.5cmの高台を有し、外面には回転ナデ調整、内底面にはナデ調整を加える。

SK-306 (Fig.125)

調査区北西部で検出した不整形を呈す土坑である。径約1.90m、深さ60cmを測り、断面形はU字形を呈す。近世のピットに切られており、埋土は暗褐色粘土であった。出土遺物は石臼1点(3462)であり、図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.132-3462)

3462は石臼の上臼部分で、約1/6が残存する。径は34.0cmであり、そのうち30cmほどを窪ませるものとみられる。斜行する4本単位の条線が2カ所に認められる。

SK-307 (Fig.126)

調査区北西部で検出した円形の土坑である。径1.23m、深さ50cmを測る。断面形は逆台形を呈す。SD-311の中央部を切っている。埋土は暗オリーブ色シルトで小礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片20点、土師器片2点、須恵器片1点、東播系須恵器片1点がみられ、東播系須恵器1点(3463)が図示できた。

出土遺物

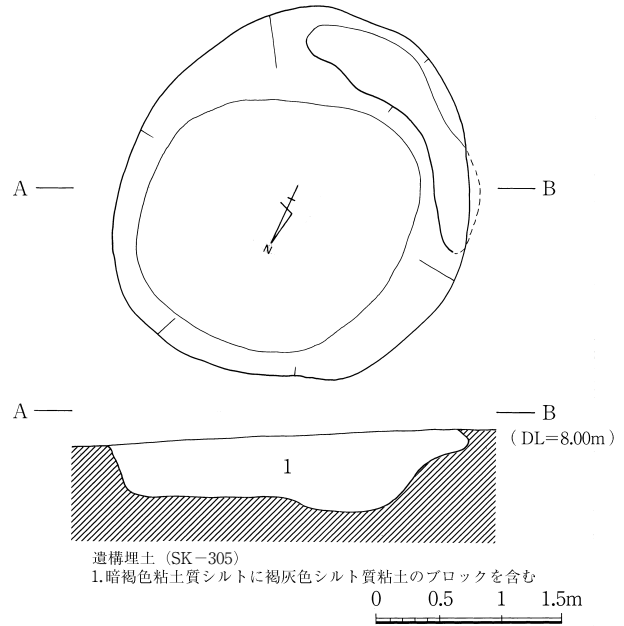


Fig.124 SK-305

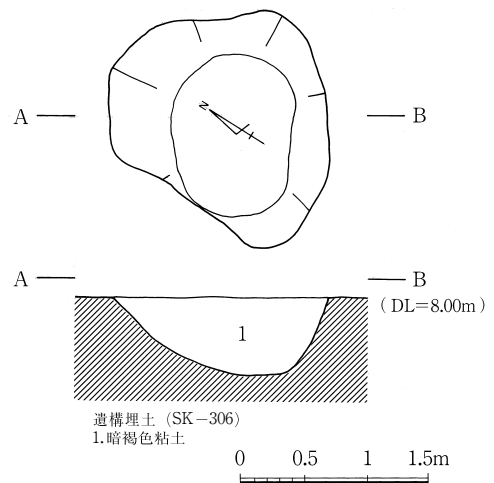


Fig.125 SK-306

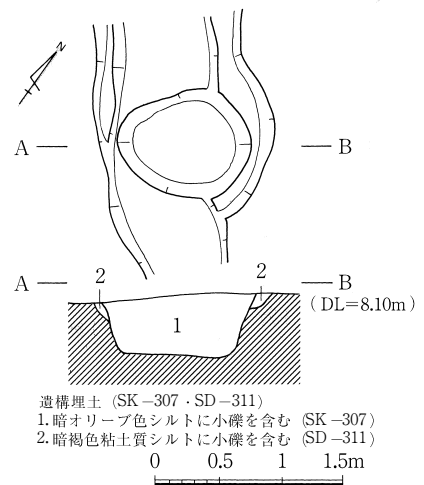


Fig.126 SK-307

3. C区

東播系須恵器 (Fig.132-3463)

3463は片口鉢であり、底部の約1/4が残存し、底径11.6cmを測る。体部は平らな底部から外上方に真直ぐ上がる。内外面にナデ調整を施す。

SK-308 (Fig.127)

調査区西部で検出した舟形の土坑である。第IV層中に検出したが、第IV層上面で検出した遺構と時期差はなかった。長径2.93m、短径0.56m、深さ17cmを測る。長軸方向はN-78°-Eで、断面形は舟底状を呈す。埋土は暗褐色粘土質シルトで多量の小礫が混入していた。出土遺物には弥生土器、土師器、土師質土器、瓦器がみられ、土師器1点(3464)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.132-3464)

3464は杯で、約1/4が残存し、口径13.3cm、器高3.5cm、底径6.6cmを測る。口縁部は平らな底部から内湾して上がる。内底面には暗文及びヘラ記号状の沈線を施し、外底面にはナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施す。

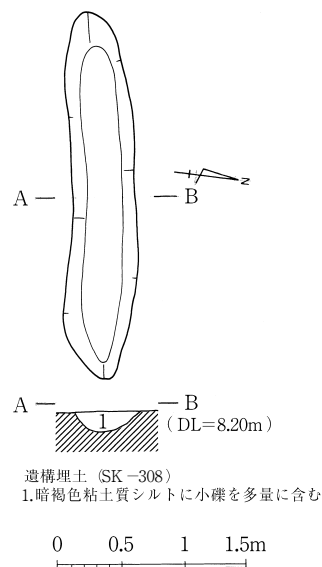


Fig.127 SK-308

SK-309 (Fig.128)

調査区西部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.92m、短辺1.80m、深さ18cmを測る。長軸方向はN-20°-Wで、断面形はU字形を呈す。南東部を近世のSK-319、北西部を攪乱によって切られており、SD-306を切っている。埋土は褐色シルトで灰褐色シルト質粘土のブロック、炭化物、小礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片50点、青磁片3点、白磁片2点がみられ、土師質土器1点(3465)と青磁1点(3466)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.132-3465)

3465は杯の底部破片で、約2/3が残存し、底径6.4cmを測る。体部外面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。内面は摩耗しており調整は不明である。

青磁 (Fig.132-3466)

3466は完形の碗である。口径14.0cm、器高6.3cm、底径4.3cmを測り、口縁部は内湾する体部から外上方にほぼ真直ぐ上がる。外面には鑄蓮弁文を施す。全体にオリブ灰色釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。

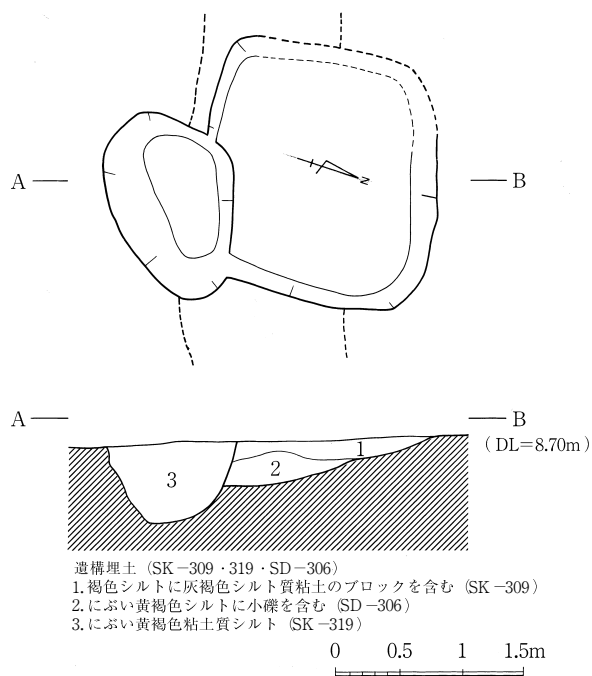


Fig.128 SK-309

SK-310 (Fig.129)

調査区西部で検出した円形の土坑である。径1.33m、深さ29cmを測る。断面形は逆台形、埋土は褐灰色シルトであった。出土遺物には瓦器片8点、土師質土器片1点がみられ、土師質土器1点(3467)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.132-3467)

3467は羽釜の口縁部破片である。口径19.6cm、器高20.6cmを測る。真直ぐ上がる口縁部で、端部にヨコナデ調整を施す。端部から約1.5cm下に約0.8cmの短い鑿が付く。

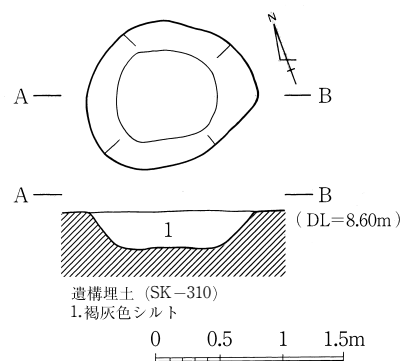


Fig.129 SK-310

SK-311 (Fig.130)

調査区南西部で検出した方形の土坑である。長辺1.74m、短辺0.80m、深さ19cmを測る。長軸方向はN-7°-Wで、断面形は逆台形を呈し、SD-313を切っている。第IV層中で検出したが、第IV層上面で検出した遺構と時期差はなかった。埋土は暗褐色粘土質シルトで多量の小礫が混入していた。出土遺物には土師質土器片20点、瓦器片20点、青磁片1点がみられ、土師質土器1点(3468)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.132-3468)

3468は小皿で約1/4が残存するが、口縁端部は欠損する。底径5.0cmを測り、底部の切り離しは回転糸切りである。

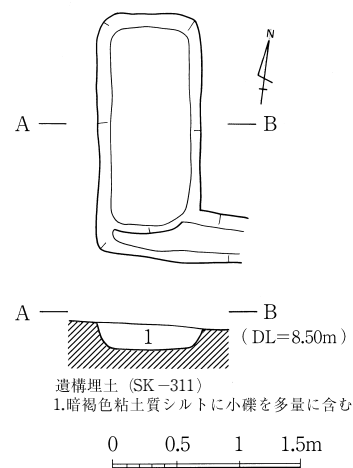


Fig.130 SK-311

SK-312 (Fig.131)

調査区西部で検出した楕円形の土坑である。長径3.38m、短径2.12m、深さ12cmを測る。長軸方向はN-16°-Wで、断面形は逆台形を呈す。中央部を攪乱によって切られている。埋土は褐灰色シルトであった。出土遺物には青磁片1点、陶器片1点がみられ、青磁1点(3469)が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.132-3469)

3469は碗の口縁部破片である。口径15.4cmを測り、約0.5mmの厚さに灰オリブ釉を施す。外面には鑄蓮弁文がみられる。

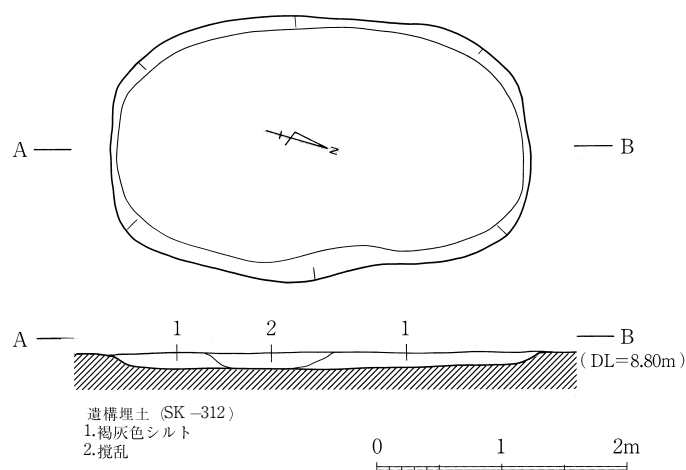


Fig.131 SK-312

3. C区

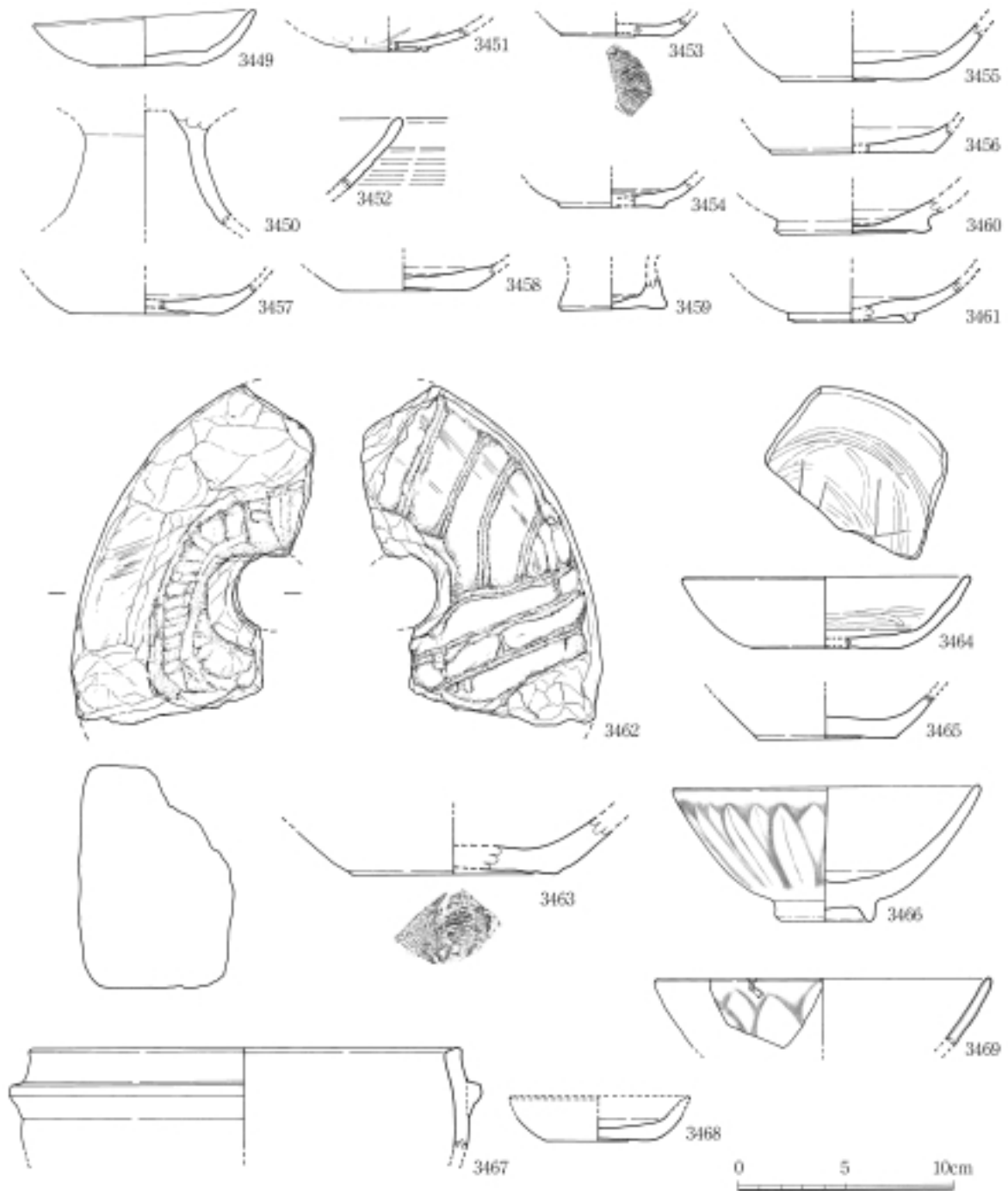


Fig.132 SK-304~312出土遺物実測図

iv 溝跡

SD-303 (Fig.133)

調査区北東部で11.40 mに渡って検出した南北溝である。幅47cm、深さ10~13cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面はやや南へ傾斜する。中央で中世の舟形土坑を切っており、中世の溝に切られている。埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片30点、土師器片1点が見られ、弥生土器1点(3470)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.135-3470)

3470は甕の底部破片であり、底径3.0cmを測る。体部は平底の底部から外上方に上がる。外面はタキの後にハケ調整を加える。内面は指ナデ調整とみられるが、摩耗しており不明瞭である。

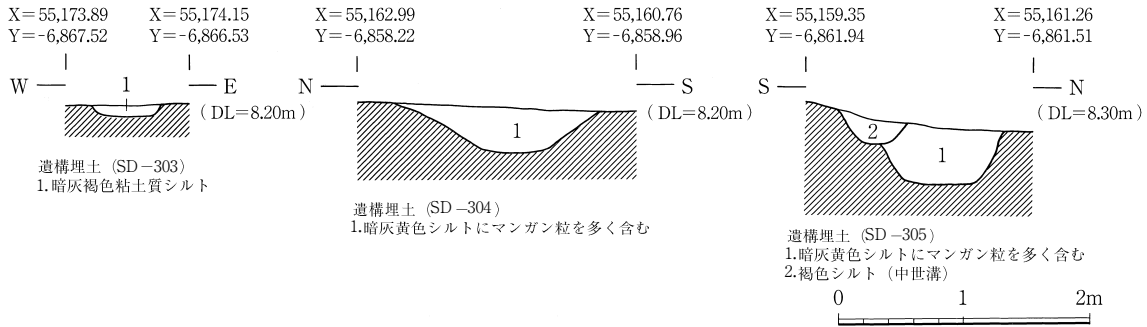


Fig.133 SD-303~305

SD-304 (Fig.133)

調査区南東部で9.58 mに渡って検出した東西溝である。幅1.74 m、深さ35~46cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、基底面は西へ傾斜する。東は調査区外に延び、西端は攪乱によって壊されている。埋土は暗灰黄色シルトでマンガン粒を多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-305 (Fig.133)

調査区南東部で17.50 mに渡って検出した東西溝である。幅1.62 m、深さ46~58cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、基底面はほぼ平坦である。東は調査区外に延び、北西はSD-309に続く可能性も考えられる。埋土は暗灰黄色シルトでマンガン粒を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片50点、須恵器片1点、土師質土器片37点、白磁片1点がみられたが復元図示できるものはなかった。

SD-306 (Fig.134)

調査区中央部で61.80 mに渡って検出した東西溝である。幅1.37 m、深さ31~56cmを測り、調査区をほぼ横断する。断面形は逆台形状を呈し、一部に段を有する。基底面はやや東へ傾斜する。SK-304・309・315・319に切られている。埋土は2層に分層でき、上層は褐色シルトで褐灰色シルト質粘土のブロックを含むもので、下層はにぶい黄褐色シルトで小礫を含んでいた。出土遺物のほとんどは埋土2から出土しており、弥生土器片160点、土師質土器片76点、瓦質土器片1点、青磁片4点、白磁片1点、土製品1点、石製品1点を数え、そのうち弥生土器(3471)、土師質土器(3472)、瓦質土器(3473)、青磁(3474)、土製品(3475)、石製品(3476)各々1点ずつ図示できた。

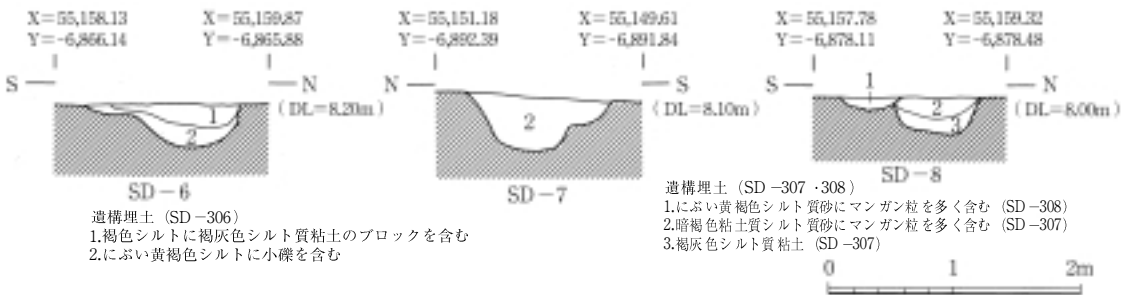


Fig.134 SD-306~308

3. C区

出土遺物

弥生土器 (Fig.135-3471)

3471は甕の底部破片であり、底径4.4cmを測る。胴部は平底の底部から内湾して上がる。外面にはタタキの後にハケ調整を加える。内面は摩耗が著しく調整は不明である。内外面には指頭圧痕が残る。

土師質土器 (Fig.135-3472)

3472は羽釜の口縁部破片である。内湾する口縁部で、端部から約1.0cm下に約0.7cmの短い鑿が付く。口縁部にはヨコナデ調整、外面の鑿から下と内面にはナデ調整を施す。外面は部分的に煤の付着がみられる。

瓦質土器 (Fig.135-3473)

3473は羽釜の口縁部破片で、口径20.0cmを測る。内湾する口縁部で、端部から約2.0cm下に約1.0cmの短い鑿が付く。口縁部にはヨコナデ調整、内面にはナデ調整を施す。

青磁 (Fig.135-3474)

3474は同安窯系とみられる皿で、約1/3が残存する。口径11.0cm、器高2.0cm、底径5.4cmを測る。口縁部はほぼ平らな底部から外上方に上がる。全面に0.5~1.0mmの厚さで灰オリーブ釉を施す。

土製品 (Fig.135-3475)

3475は円筒形の管状土錘で、約2/3が残存する。残存長3.4cm、全幅1.2cm、全厚1.2cm、孔径0.5cmを測る。外面には指頭圧痕が残る。

石製品 (Fig.135-3476)

3476は砂岩の砥石で、一部欠損する。残存長は16.4cmを測り、3面を使用する。

SD-307 (Fig.134)

調査区中央部で19.40mに渡って検出した東西溝である。幅1.16m、深さ21~31cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、基底面はほぼ平坦である。SD-305・309を切り、SD-308に切られている。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐色粘土質シルトでマンガン粒を多く含むもの、下層が褐灰色シルト質粘土であった。遺物は第I層から土師質土器、瓦器、青磁等が出土し、第II層からは弥生土器、土師質土器などが出土した。第I層出土の土師質土器3点(3479~3481)、瓦器2点(3477・3478)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.135-3477・3478)

3477は椀で、口縁部の約1/5が残存する。口径15.4cmを測る内湾する口縁部である。外面は口縁部にヨコナデ調整を施し、体部には指頭圧痕が残る。内面には暗文が残るが不明瞭である。

3478は小皿で、約1/2が残存し、口径8.6cm、器高1.9cm、底径4.7cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整を施し、底部付近には指頭圧痕が残る。内底面には暗文が残るが不明瞭である。

土師質土器 (Fig.135-3479~3481)

3479~3481は小皿である。3479は完形で、口径7.7cm、器高1.6cm、底径5.8cmを測る。3480は約1/4が残存し、口径7.3cm、器高1.6cm、底径5.9cmを測る。ともに摩耗が著しく調整は不明である。3481は約1/5が残存し、口径8.8cm、器高1.7cm、底径5.7cmを測る。内底面はやや中窪みとなっている。

SD-308 (Fig.134)

調査区中央部で39.60 mに渡って検出した東西溝である。幅40 cm, 深さ6~14 cmを測る。断面形は逆台形状を呈し, 基底面は東へ傾斜する。SD-307を切り, 西端部はSK-318に切られている。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂でマンガン粒を多量に含むものであった。出土遺物には弥生土器片5点, 瓦質土器片1点がみられ, 瓦質土器1点(3482)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.135-3482)

3482は羽釜の口縁部破片で, 口径21.8 cmを測る。内湾する口縁部で, 端部から約2.0 cm下に約2.3 cm

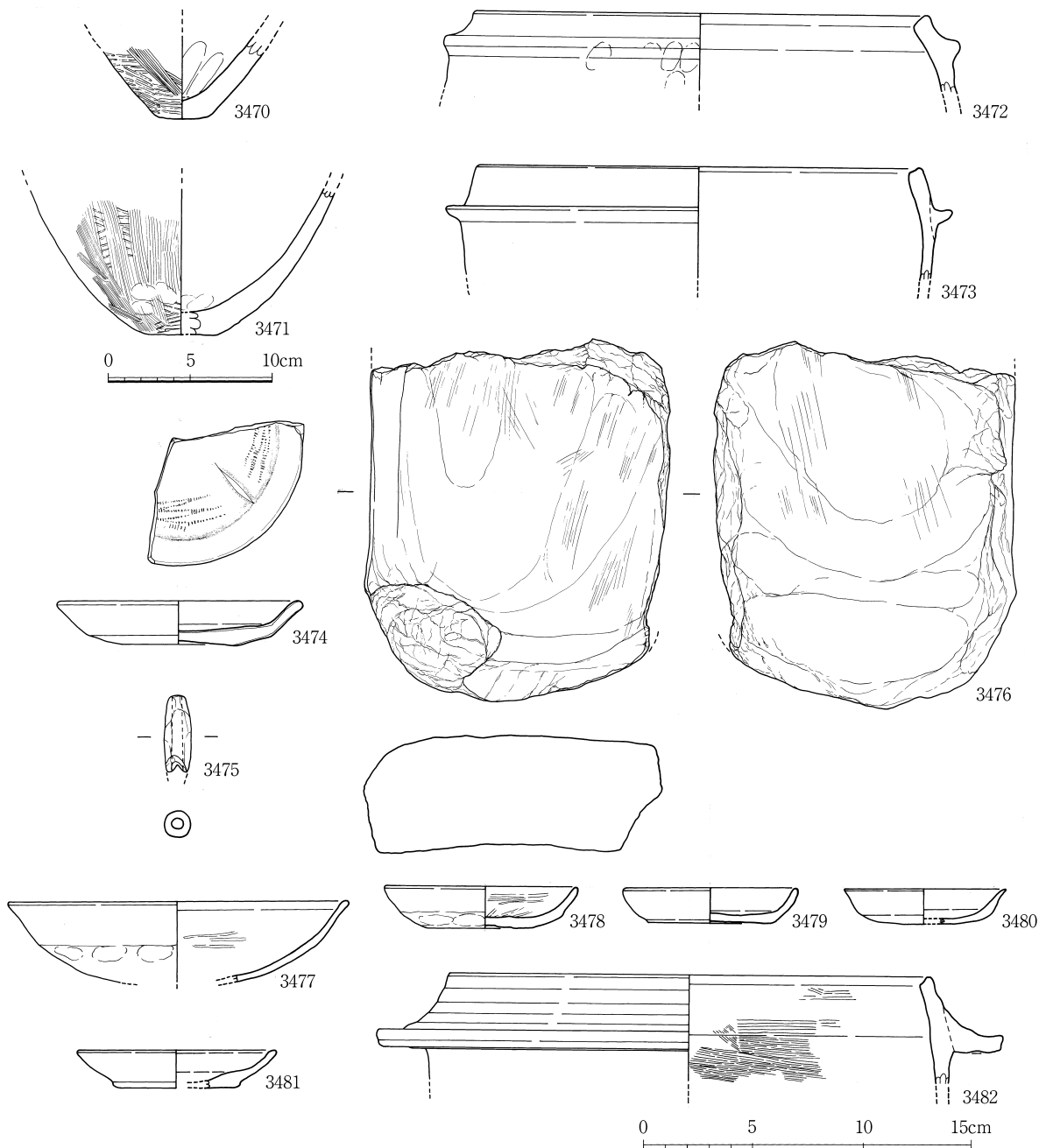


Fig.135 SD-303・306~308出土遺物実測図

3. C区

の罫が付く。口縁部と罫の周辺はヨコナデ調整、内面にはハケ調整を施す。

SD-309 (Fig.137)

調査区北部で20.20mに渡って検出した南北溝である。幅3.08m、深さ20~44cmを測る。断面形は逆台形を呈し、東西に段を有す。基底面は南に傾斜する。SD-301を切っており、中世の溝とSD-307に切られている。北は調査区外に延び、南東部はSD-305に続く可能性も考えられる。埋土は2層に分層でき、上層が暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒と黄色シルト質粘土を含むもの、下層が暗灰黄色粘土質シルトであった。遺物は上層から弥生土器片180点、土師器片30点、他に土師質土器、東播系須恵器、瓦器等が十数点出土し、弥生土器4点(3483~3486)、土師質土器2点(3491・3492)、東播系須恵器3点(3488~3490)、瓦器1点(3487)、青磁1点(3493)が図示できた。下層から弥生土器片20点、瓦器片10点、土製品1点が出土し、瓦器7点(3494~3500)、土製品1点(3501)が復元図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.136-3483~3486) : 埋土1出土

3483はB-1類の壺で、口縁部破片であるが、口縁端部は欠損する。大きく開く口縁部で、摩耗が著しく調整は不明である。

3484は甕の口縁部破片で、口径14.6cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。3485は甕の底部破片で、底径4.0cmを測る。胴部は平底の底部から内湾して上がる。外面にはタタキ目が残るが、内面の調整は不明である。3486も甕の底部破片で、底径2.8cmを測る。平底の底部で、内外面にはハケ調整を施す。

瓦器 (Fig.136-3487) : 埋土1出土

3487は椀で、口縁部の約1/6が残存する。口径15.4cmを測り、器高は3.5cm前後と考えられる。口縁部には弱いヨコナデ調整を施し、体部には指頭圧痕が残る。内面には圏線状の暗文を施す。

東播系須恵器 (Fig.136-3488~3490) : 埋土1出土

3488・3489は片口鉢の口縁部の破片である。口縁部は外上方に真直ぐ上がり端部が面をなす。外面には回転ナデ調整とナデ調整を、内面にはナデ調整を施す。口径は24.0cm、26.8cmを測る。3490は片口鉢の底部から体部の破片で、底径13.0cmを測る。体部は外上方に真直ぐ上がり、外面には回転ヘラ削り調整、内面には回転ナデ調整を施し、底部には内外面にナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.136-3491・3492) : 埋土1出土

3491は杯で、底部は完存し、底径7.0cmを測る。体部は内外面とも回転ナデ調整を施し、内底面にはロクロ目が残る。底部の切り離しは回転糸切りである。

3492は小皿で、約1/4が残存する。口径7.7cm、器高1.6cm、底径4.8cmを測り、内外面にナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

青磁 (Fig.136-3493) : 埋土1出土

3493は碗の底部のみが完存する。底径4.9cmを測る平らな底部に逆台形を呈す高台が付く。内底面には1.0~1.5mmの厚さで灰オリーブ釉を施す。外面は露胎である。

瓦器 (Fig.136-3494~3500) : 埋土2出土

3494～3498は椀の口縁部破片である。口縁部にはヨコナデ調整を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。3494～3497の内面の暗文は不明瞭である。3498は圏線状の暗文が明瞭に残る。口径は順に15.8cm, 15.1cm, 14.7cm, 14.0cm, 15.4cmを測り、いずれも器高は不明である。3499・3500は底部破片である。3499は底部のみ完存し、底径4.6cmを測る。外底面には断面逆三角形の小さな高台が付く。内底面には平行線状の暗文を施す。3500は約1/2が残存し、底径4.6cmを測る。外底面には断面逆台形の高台が付く。内底面には連結輪状の暗文が残る。

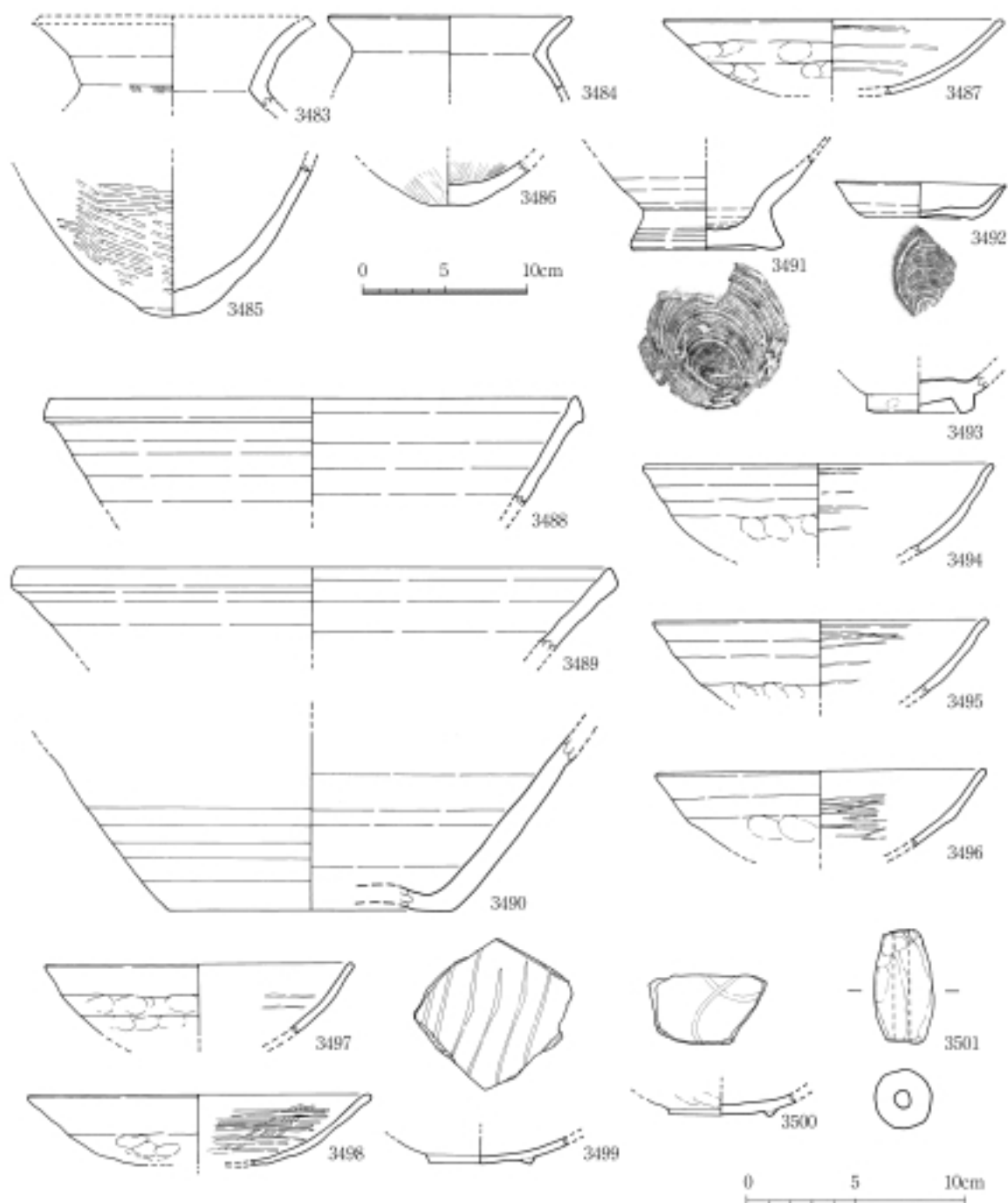


Fig.136 SD-309出土遺物実測図

3. C区

土製品 (Fig.136-3501) : 埋土2出土

3501は紡錘形の管状土錘で、ほぼ完形である。全長5.1cm, 全幅2.7cm, 全厚2.7cm, 孔径0.7cmを測る。表面は全体的に摩耗している。

SD-310

調査区北部で3.80 mに渡って検出した南北溝である。幅76cm, 深さ3~4cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器細片と瓦質土器片1点がみられ、瓦質土器1点(3502)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.138-3502)

3502は羽釜の口縁部破片で、口径20.0cmを測る。口縁部は内湾し端部から約1.5cm下に約0.6cmの短い鍰が付く。口縁端部と鍰の間はハケ調整, 他は内外面ともナデ調整を施す。鍰の下に1条の沈線が巡る。

SD-311 (Fig.137)

調査区西北部で8.20 mに渡って検出した南北溝である。幅99cm, 深さ27~45cmを測る。断面形は逆台形を呈し東西に段を有する。基底面はやや南へ傾斜する。北は調査区外に延び、中央部をSK-307に切られている。埋土は暗褐色粘土質シルトで小礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片110点, 土師器片7点, 石製品1点がみられ、弥生土器1点(3503)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.138-3503)

3503は甕の底部で、底径4.2cmを測る。平底の底部で、外面にはタタキ目が残る。

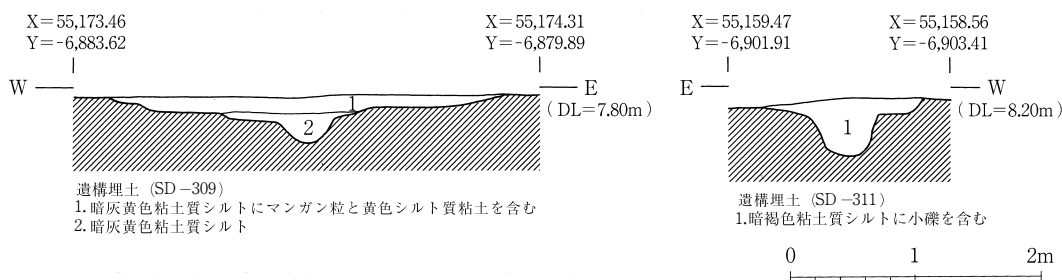


Fig.137 SD-309・311

SD-312

調査区西部で3.98 mに渡って検出した東西溝である。幅28cm, 深さ14cmを測る。断面形はU字形を呈し、基底面は東へ傾斜する。中世の土坑を切っており、埋土は暗褐色粘土質シルトで小礫と灰黄褐色シルト質粘土のブロックを含んでいた。遺物は土師質土器片20点, 須恵器片2点, 瓦器片2点, 瓦質土器片1点であり、土師質土器1点が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.138-3504)

3504は杯の口縁部から底部にかけての破片である。口径13.4cm, 器高4.1cm, 底径7.0cmを測る。器面は摩耗しており調整は不明である。

SD-313

調査区南西部で4.08 mに渡って検出した東西溝である。幅31cm, 深さ12~16 cmを測る。断面形は逆台形を呈し, 基底面はほぼ平坦で, SK-311に切られている。第IV層中で検出した。埋土は暗褐色粘土質シルトで小礫と灰黄褐色土のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片30点, 瓦器片10点がみられ, 土師質土器1点(3505)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.138-3505)

3505は小皿で, 約1/5が残存する。摩耗しており調整は不明である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

v ピット

P-302

調査区北東部で検出した円形のピットである。径33cm, 深さ33cmを測り, 埋土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片4点, 青磁片2点, 白磁片1点, 石製品1点がみられ, 石製品1点(3506)が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.138-3506)

3506は叩石で, 完存する。全長18.3cm, 全幅14.5cm, 全厚6.9cmを測り, 一面に使用痕が認められる。石材は砂岩である。

P-303

調査区北東部で検出した円形のピットで, SD-301を切る。径22cm, 深さ25cmを測り, 埋土は暗灰褐色粘土質シルトであった。出土遺物は図示した瓦器1点(3507)のみであった。

出土遺物

瓦器 (Fig.138-3507)

3507は椀で, 口縁部の約1/6が残存する。口縁部にヨコナデ調整を施し, 体部外面には指頭圧痕が残る。内面には暗文が残るが不明瞭である。

P-304

調査区中央部で検出した楕円形のピットで, SD-308に切られる。長径69cm, 短径38cm, 深さ25cmを測り, 埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物は図示した土師器2点(3508・3509)のみであった。

出土遺物

土師器 (Fig.138-3508・3509)

3508は甕の口縁部破片で口径24.2cmを測る。胴部は長胴とみられ, 口縁部はくの字状に外傾する。口縁部にはナデ調整, 口縁端部にはヨコナデ調整を施す。胴部外面と内面にはハケ調整を施す。

3509は皿で, 約1/2が残存する。口縁部は平らな底部から外上方に真直ぐ上がる。摩耗が著しく調整は不明である。

3. C区

P-305

調査区西部で検出した円形のピットである。径30cm、深さ15cmを測り、埋土は褐色シルトで褐灰色シルト質粘土のブロックと小礫を含んでいた。出土遺物は図示した弥生土器1点(3510)であった。

出土遺物

弥生土器 (Fig.138-3510)

3510は甕で、口縁部の約1/8が残存し、口径16.6cmを測る。外面はタタキ、内面にはハケ調整と指ナデ調整を施す。

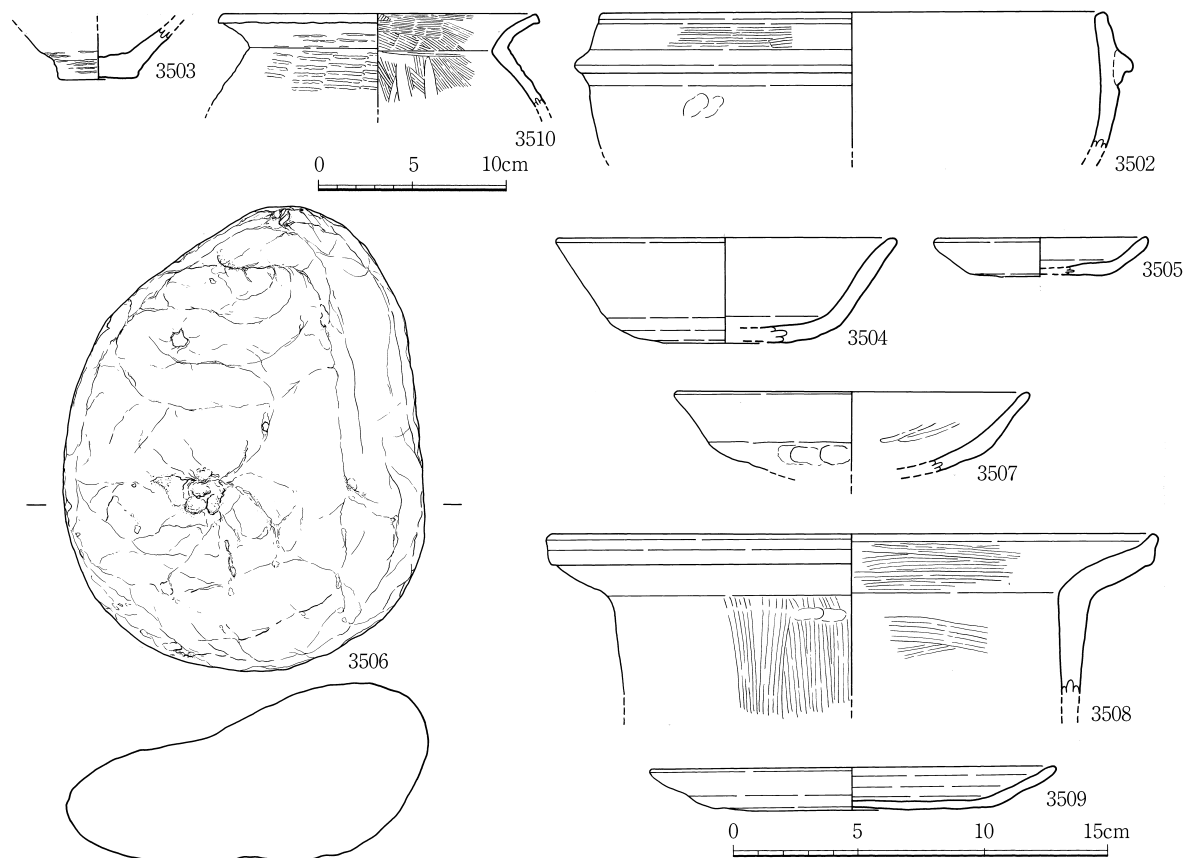


Fig.138 SD-310~313, P-302~305出土遺物実測図

③ 近世以降

近世以降の遺構は土坑7基、溝跡8条、ピット2個、水溜り状遺構2基、性格不明遺構1基を検出した。

i 土坑

SK-313 (Fig.139)

調査区東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.53m、短径0.69m、深さ11cmを測る。長軸方向はN-83°-Wで、断面形はU字形を呈す。中世の溝を切っている。埋土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片4点、備前焼片1点、磁器片3点、陶器片1点がみられ、備前焼1点(3511)が図示できた。

出土遺物

備前焼 (Fig.142-3511)

3511は播鉢の口縁部の破片である。口縁部は外上方に真直ぐ上がり端部を拡張する。

SK-314 (Fig.140)

調査区南東部で検出した円形の土坑である。径1.26 m、深さ12 cmを測り、断面形は逆台形で中央に段を有す。埋土はオリブ黒色シルトで炭化物を含んでいた。出土遺物には弥生土器片2点、磁器片2点がみられ、磁器2点(3512・3513)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.142-3512・3513)

3512は染付の皿で、約4/5が残存し、口径9.2 cm、器高2.6 cm、底径4.5 cmを測る。呉須はにぶい発色を示し、全面に施した透明釉には貫入がみられる。見込には蛇の目釉ハギ、畳付は釉ハギを行う。幕末頃の瀬戸・美濃産のものと考えられる。

3513は青磁の輪花鉢で、口縁部の一部は欠損する。口径15.2 cm、器高6.1 cm、底径7.8 cmを測り、釉は約1 mm厚に施す。高台内は蛇の目状の釉ハギを行う。

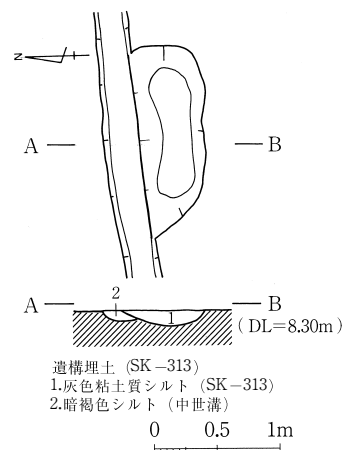


Fig.139 SK-313

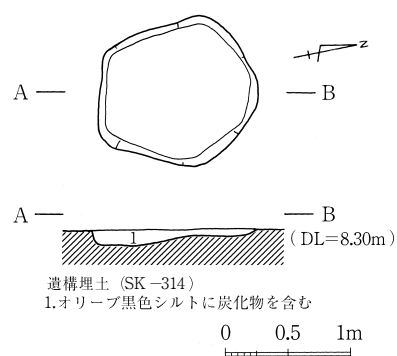


Fig.140 SK-314

SK-315

調査区中央部で検出した不整楕円形の土坑である。長径3.62 m、短径3.12 m、深さ42 cmを測る。長軸方向はN-76°-Eで、断面形は逆台形を呈す。埋土は暗緑灰色砂質シルトで暗緑灰色の礫と砂が混入していた。出土遺物には弥生土器片3点、須恵器片1点、磁器片5点、陶器片7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-316 (Fig.141)

調査区北西部で検出した楕円形の土坑である。長径1.69 m、短径0.91 m、深さ18 cmを測る。長軸方向はN-73°-Eで、断面形は逆台形を呈す。埋土は黄褐色シルト質粘土で少量のマンガン粒と小礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片6点、土師器片2点、備前焼片1点、磁器片1点、陶器片2点がみられ、陶器2点(3514・3515)が図示できた。

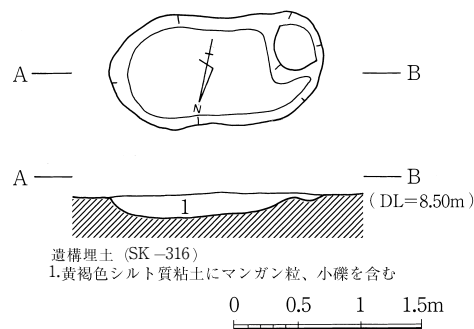


Fig.141 SK-316

出土遺物

陶器 (Fig.142-3514・3515)

3514・3515は広東碗で、3514は底部が完存し、底径5.8 cmを測る。外面の文様は褐釉によるものと考えられる。全面に灰白色の釉を薄く施し、細かな貫入がみられる。畳付は釉ハギを行う。焼成がやや不良で、所々に一次焼成時のしみが残り、見込には足付きハマ痕が5箇所残る。19世紀前半の関西系のものと考えられる。3515は底部で、1/2が残存する。底径は5.8 cmを測り、外面にはロクロ

3. C区

成形の痕跡が顕著に残る。畳付を除き全面に浅黄色の釉を薄く施す。19世紀前半の関西系のもと考えられる。

SK-317 (Fig.143)

調査区北西部で検出した隅丸方形

の土坑である。長辺1.95 m, 短辺1.46 m, 深さ36 cmを測る。長軸方向はN-70°-Eで、断面形は箱形を呈す。埋土は黄褐色シルト質粘土で少量のマンガング粒, 小礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片40点, 須恵器片1点, 土師質土器1点, 陶磁器類80点がみられ, 土師質土器1点 (3516) と陶磁器類39点 (3517~3555) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.144-3516)

3516は素焼きの皿で、口径10.7 cm, 器高2.4 cm, 底径5.2 cmを測る。底部は凹状をなす。

磁器 (Fig.144-3517~3555)

3517は染付の蓋で、肥前産のものと考えられる。約3/4が残存し、つまみはほとんど欠損する。口径15.0 cm, かえり径12.9 cmを測り、内面にはロクロ目を顕著に残し透明釉を施す。外面は淡い青色の呉須で唐草文を描き、やや青味がかかった透明釉を薄く施す。かえりは無釉で熔着を防ぐための微砂が残る。3518も染付の蓋であり、約1/2が残存する。口径9.2 cm, 器高2.6 cmを測り、内面にはロクロ目が細かく残る。呉須はやや薄い青色で、光沢のある透明釉を薄く施す。内面の文様は銅版転写によるものである。断面は光沢があり、瀬戸・美濃系の量産品で大正期のものと考えられる。3519も染付の蓋で約1/4が残存する。口径9.4 cm, つまみ径3.6 cm, 器高3.5 cmを測る。天井部にはやや厚みがあり、外面は灰オリーブの青磁釉を施す。内面は染付で、呉須は暗オリーブ色を呈し、その上に透明釉を約0.5 mmの厚さに施す。内外面とも貫入がみられる。18世紀末から19世紀初頭の波佐見産のものと考えられる。

3520は染付の丸碗で完存し、口径10.9 cm, 器高6.1 cm, 底径4.1 cmを測る。呉須はやや薄い発色で、外面には「福」「寿」の文字と、鶴亀の文様が施される。全体に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。銅版転写であり、大正期のものと考えられる。3521も染付の丸碗で、約1/2が残存し、口径10.8 cm, 器高5.3 cm, 底径4.1 cmを測る。外面の文様は松竹梅と鶴で、銅版転写によるものである。呉須はやや薄く発色し、部分的に発色の悪い箇所がある。全体に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。大正期のものと考えられる。3522・3523はともに染付の端反碗で、型紙摺りによるものであり、明

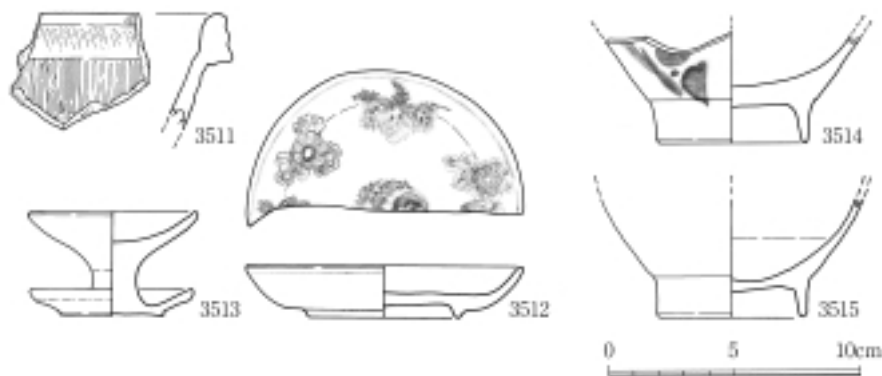


Fig.142 SK-313・314・316出土遺物実測図

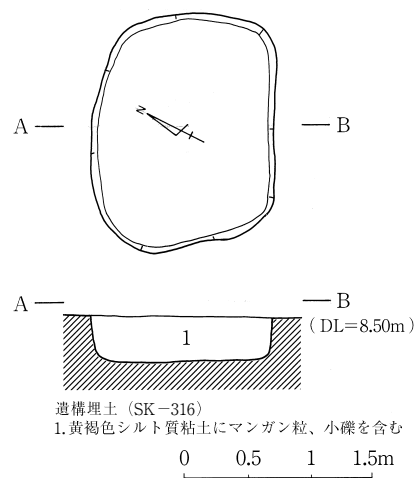


Fig.143 SK-317

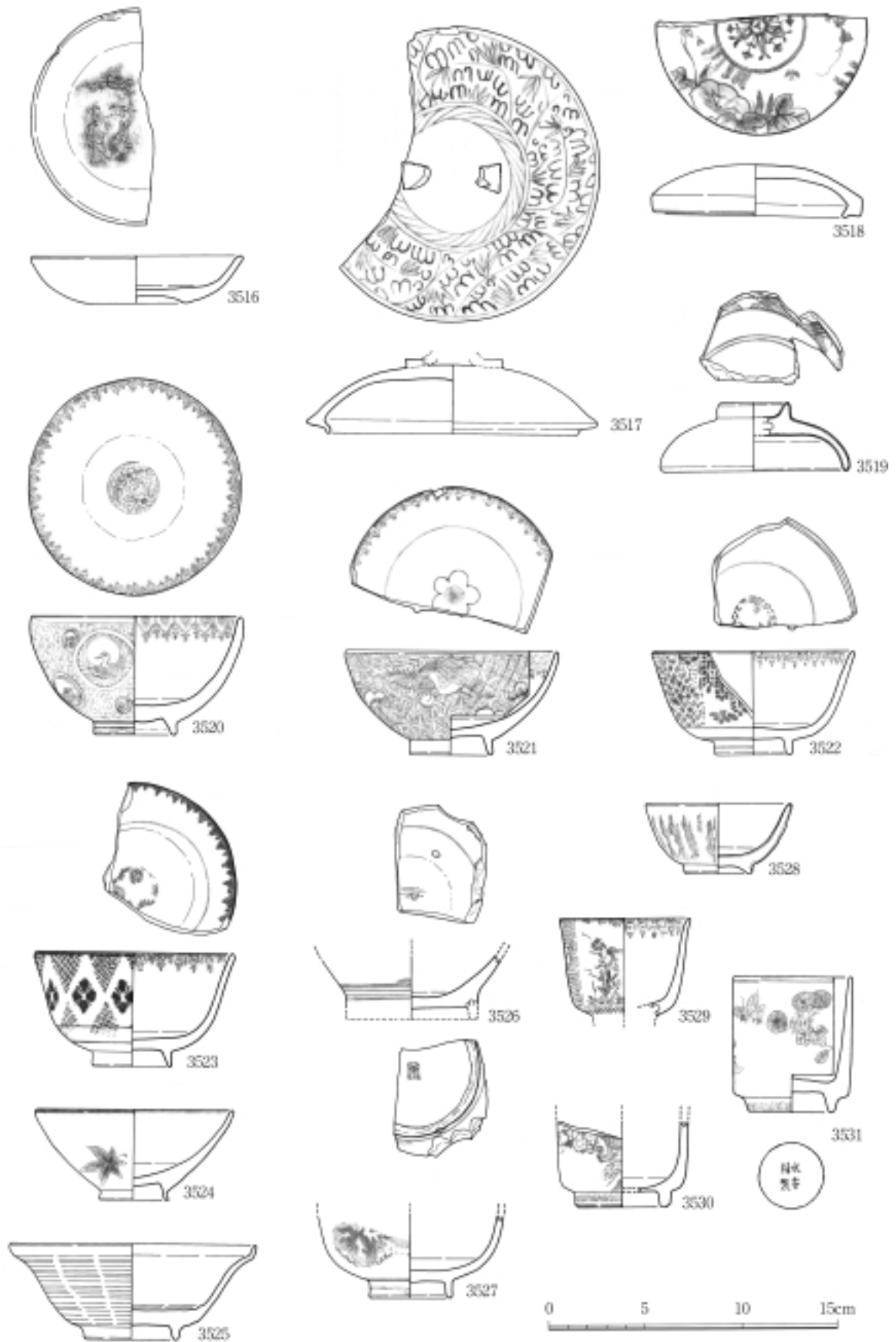


Fig.144 SK-317出土遺物実測図1

3. C区

治期のものと考えられる。3522は約1/3が残存し、口径10.3cm、器高5.3cm、底径3.8cmを測る。外面の文様は草花文であり、コバルトの発色が悪く作りが雑である。3523も約1/3が残存し、口径10.1cm、器高5.8cm、底径4.0cmを測る。体部には回転ナデ調整の痕跡が残る。呉須は鮮やかに発色し、全面に透明釉を薄く施す。畳付は釉ハギを行う。3524は釉下彩の平形の碗であり、約1/2が残存する。口径10.2cm、器高4.6cm、底径3.6cmを測る。外面の紅葉の文様は銅版転写によるものであり、口縁部にはスプレーを使用したものとみられ淡青色を呈す。畳付は釉ハギを行い熔着を防ぐための砂が残る。大正期のものと考えられる。3525は白磁の碗で、約1/2が残存し、口径12.7cm、器高4.9cm、底径4.7cmを測る。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。大正期以降の瀬戸・美濃産と考えられる。3526は染付の広東碗で、能茶山焼である。底部の約1/3が残存するが、高台は欠損する。底径は約7.0cmと考えられる。透明釉を全体に薄く施し、呉須は淡い青色を呈す。見込に足付きハマ痕が1ヶ所残る。高台内に角内「茶」銘が残る。3527は染付の腰張形の碗であり、底部は完存する。底径は4.2cmを測り、畳付も含み全面に薄く釉を施す。畳付には若干の砂が付着する。呉須は淡青色を呈す。3528は青磁の小碗であり、約1/2が残存する。口径7.4cm、器高3.6cm、底径3.4cmを測り、淡い明緑色の釉を約0.5mmの厚さに施す。高台内、畳付は釉ハギを行う。大正期の瀬戸・美濃産のものと考えられる。3529～3531は半筒形の小碗である。3529は染付で約1/5が残存し、口径6.7cmを測る。型紙摺りであり、一部にずれの生じている箇所がある。呉須は鮮やかに発色し、透明釉を全面に施す。明治期のものと考えられる。3530は釉下彩で約1/2が残存し、底径4.7cmを測る。染付は銅版転写によるもので、梅の花のみ灰オリーブ色を呈す。全体には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。大正期のものと考えられる。3531は染付で3/4ほど残存し、口径6.0cm、器高6.9cm、底径4.4cmを測る。呉須は淡い青色で、外面の文様は銅版転写によるもので一部にずれが生じている。全面に透明釉を薄く施し、畳付のみ釉ハギを行う。大正期のものと考えられる。

3532～3539は染付の皿で、3532は約3/4が残存し、口径12.7cm、器高3.2cm、底径7.3cmを測る。高台は蛇の目凹形高台であり、見込に足付きハマ痕が5ヶ所残る。呉須は鮮やかな青色で、内外面の文様は型紙摺りによるものである。高台の一部を除き全面に光沢のある透明釉を薄く施す。明治期のものと考えられる。3533は約2/3が残存し、口径10.9cm、器高1.8cm、底径6.4cmを測る。コバルトはやや薄めの青色を呈し、全面に光沢のある透明釉を薄く施す。畳付は釉ハギを行う。口縁部には雷文帯が巡り、見込の文様には「福寿」という文字や中国語とみられる漢字が並ぶ。中国製の可能性も考えられる。3534・3535は銅版転写によるもので、大正期のものと考えられる。3534は約1/2が残存し、口径11.0cm、器高2.0cm、底径6.1cmを測る。畳付には釉ハギを施し、熔着を防ぐための砂の痕跡が残る。焼成がやや不良であるためか部分的に釉の透明感がなく、呉須の発色が悪い。3535は約2/3が残存し、口径10.6cm、器高2.3cm、底径5.7cmを測る。呉須はやや薄めの青色を呈し、全面に光沢のある透明釉を薄く施す。畳付は釉ハギを行う。3536・3537は型紙摺りで明治期のものと考えられる。ともに約1/2が残存し、3536は口径10.8cm、器高1.5cm、底径6.4cmを測る。呉須は鮮やかな青色で、全面に光沢のある透明釉を薄く施す。外面には呉須が染み状に付着する。3537は口径10.2cm、器高1.4cm、底径6.6cmを測る。呉須は鮮やかな青色を呈し、透明釉を薄く全面に施す。3538は口径10.8cm、器高1.8cm、底径6.4cmで、全面に薄く透明釉を施す。畳付は釉ハギを行う。呉須は淡

い青色で、口縁部には褐釉を巡らす。3539は約1/6が残存する。口径11.2cm、器高2.0cm、底径7.1cmを測る。口縁部には雷文帯が巡り、見込には十字架の文様が描かれる。畳付は釉ハギを行う。釉にムラがあり、呉須の発色が悪い。3540は釉下彩の皿で、約1/6が残存し、口径10.8cm、器高1.9cm、底径7.0cmを測る。すずめの文様は鮮やかな緑色を呈し、畳付は釉ハギ、高台内は光沢のある透明釉を施す。外面は薄い緑色の釉、内面は光沢のある緑色の釉を施す。大正期以降のものと考えられる。3541も釉下彩の皿で、約1/4が残存する。口径10.4cm、器高2.0cm、底径6.4cmを測る。全面に光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面の緑色の文様は銅版転写によるものであり、大正期のものと考えられる。口縁部には褐釉が巡る。3542は色絵の皿であり、約1/6が残存する。口径

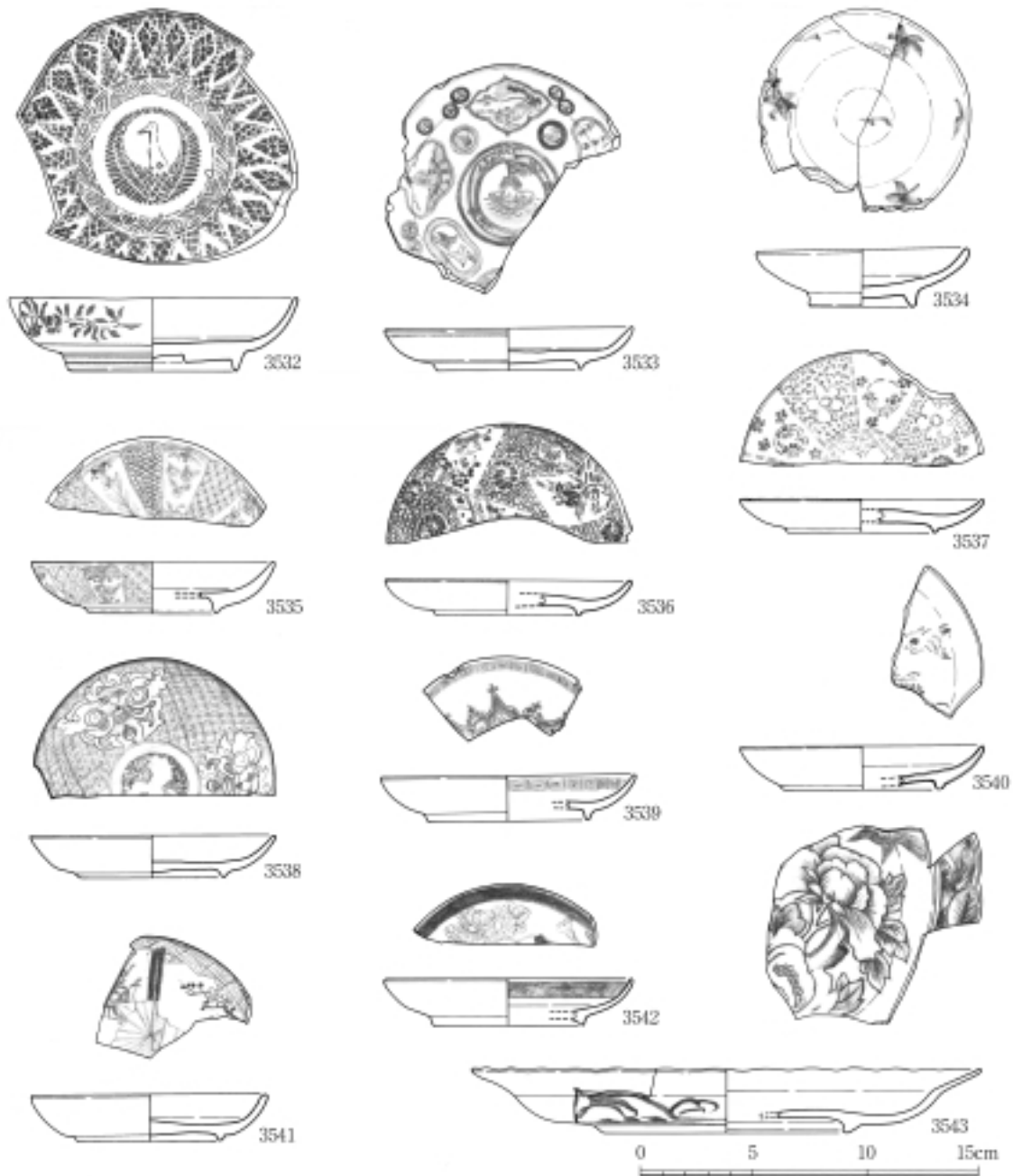


Fig.145 SK-317出土遺物実測図2

3. C区

10.8cm, 器高2.0cm, 底径6.7cmを測る。全面に透明釉を薄く施したのち, 内面は朱色で花文が描かれている。畳付は釉ハギを行う。断面には光沢があり, 19世紀後半の瀬戸・美濃系の量産品と考えられる。3543は染付の輪花大皿で約1/8が残存する。口径46.0cm, 器高5.7cm, 底径21.8cmを測り, 全体に透明釉を薄く施す。畳付は釉ハギを行う。見込の文様は花文で, 呉須は明るく発色する。断面には透明感がなく, 明治前半の肥前産と考えられる。3544は染付の隅切角皿で約1/2が残存する。口径29.2cm, 器高5.1cm, 底径15.5cmを測り全体に透明釉を薄く施す。畳付は釉ハギを行う。見込の文様は花文と笹で, 呉須は明るく発色する。高台内に「玩」の字を記す。明治前半の肥前産と考えられる。

3545は染付の鉢で, 約1/3が残存する。口径16.6cm, 器高6.6cm, 底径7.8cmを測り, 口縁部は若干外反し, 端部は面をなす。呉須は鮮やかな発色をみせ, 高台の一部を除き全体に透明釉を薄く施す。高台は蛇の目凹形高台である。明治期のものと考えられる。3546は白磁の輪花鉢で, 約4/5が残存し, 口径18.6cm, 器高6.6cm, 底径11.6cmを測る。全体に透明釉を薄く施す。見込に一次焼成時の染みが残る。高台は蛇の目凹形高台であり, 19世紀前半の肥前産のものと考えられる。3547は染付の菊花形鉢で, 口縁部の約1/4が残存し, 口径は15.8cmを測る。呉須は比較的鮮やかに発色し, 釉は全体に薄く施す。19世紀中葉の肥前産と考えられる。3548は染付の鉢で, 口縁部から底部までの破片である。口径12.8cm, 器高3.7cm, 底径6.8cmを測り, 底部を除いて透明釉を約0.5mmの厚さで施す。呉須は比較的明るく発色する。18世紀代の肥前産と考えられる。3549は小鉢で約1/2が残存する。口径8.6cm, 器高3.9cm, 底径5.2cmを測る。体部外面には黒色釉, 内面及び外底面には透明釉を施す。底部と口縁部の一部を釉ハギする。大正期の瀬戸・美濃産と考えられる。3550は小型の鉢であり完存する。練り歯磨きを入れる容器として使用されたもので, 口縁部は楕円形を呈し, 長径5.9cm, 短径4.4cmを測り, 底部は長径3.4cm, 短径2.6cmで器高2.3cmを測る。口縁端部と底部の一部を除いて全面に薄く釉を施す。蓋が付くものと考えられ, 蓋も合わせるとラグビーボールのような形状を呈するものと考えられる。外底面に「鹿印練歯磨 製造発売元 東京馬喰町二丁目 花王石鹸本舗 長瀬富郎」と記す。

3551は染付の段重であり, 約1/2が残存する。口径12.3cm, 器高4.0cm, 底径11.5cmを測る。外面には鳳凰と唐草文が描かれ, 呉須は鮮やかな青色を呈す。透明釉を薄く全面に施し, 口縁部内面, 口縁端部及び畳付は釉ハギを行う。3552も染付の段重で, 約1/3が残存する。口径9.5cm, 器高2.9cm, 底径8.4cmを測り, 全体に透明釉を薄く施す。口縁部と底部の一部には釉ハギを施す。外面の草花文は銅版転写によるものである。大正期のものと考えられる。3553は白磁の酒杯で, 口縁部の約1/3が欠損する。口径6.7cm, 器高2.7cm, 底径2.5cmを測り, 全体に透明釉を薄く施す。畳付は釉ハギを施す。明治以降の瀬戸・美濃産と考えられる。3554は染付の蕎麦猪口で, 底部の約1/3が残存し, 底径5.4cmを測る。呉須は淡い青色で, 外面に龍の文様を施す。高台は蛇の目凹形高台である。19世紀前半のものと考えられる。3554は染付の小瓶で底部は完存し, 底径3.1cmを測る。外面の文様は銅版転写によるもので, 大正期のものと考えられる。外面は透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。

陶器 (Fig.147-3557~3569)

3557は壺の蓋であり, 約1/2が残存する。笠部径12.0cm, かえり径9.1cm, 器高4.8cmを測る。外面のみ透明釉を薄く施す。内面は露胎であり, ロクロ成形痕が残る。3557は落とし蓋でほぼ完存する。

口径7.2cm, 底径2.2cm, 摘み径1.3cm, 器高1.7cmを測る。外面は銅緑釉を全面に施す。内面は露胎であり, ロクロ成形痕が残る。天井部に墨書が残るが, 判読困難である。

3558は土瓶で口縁部から体部にかけて約1/6が残存する。口径7.9cm, 胴径11.6cmを測り, 内面はロクロ成形痕が残る。外面は化粧土を施した上に鉄釉, 銅緑釉を用いて文様を描き, 残存部全面に透明釉を薄く施す。胴部下半は露胎であると考えられる。3559は土瓶であり, 底部から体部にかけて

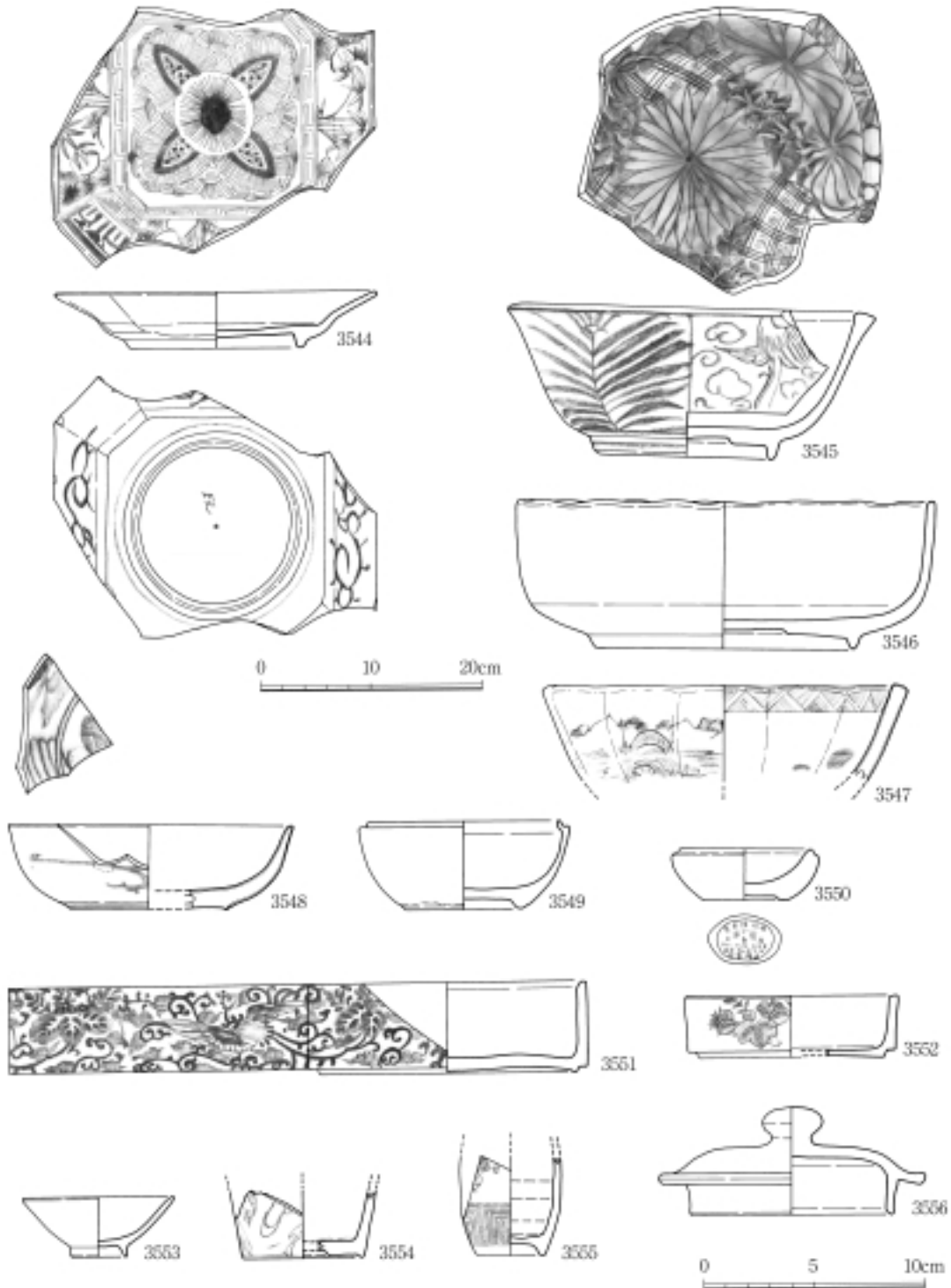


Fig.146 SK-317出土遺物実測図3

3. C区

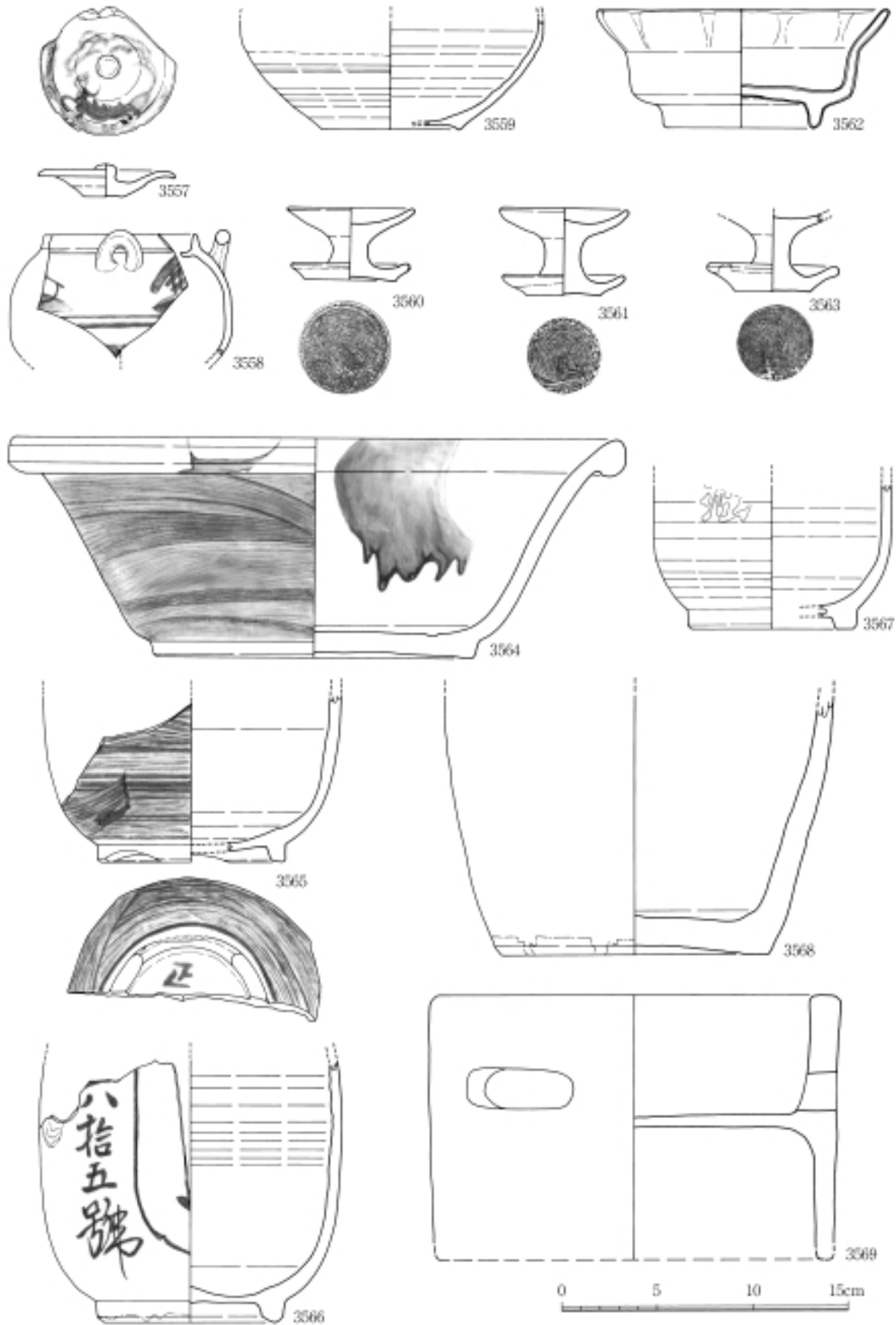


Fig.147 SK-317出土遺物実測図4

て約1/6が残存する。底径は7.2cmを測る。外面にはロク口調整痕が顕著に残り、底部から体部下半にかけて化粧土を施すが無釉である。体部中央には光沢のある青色の釉を薄く施す。

3560～3563は台付灯明皿で、口径6.4～6.8cm、台部径6.4～6.9cm、底径3.9～4.8cm、器高3.7～4.5cmを測る。どれも底部を除き、全面に鉄釉を施す。底部外面は露胎であり、回転糸切り痕が確認できる。3560・3561はほぼ完形である。3562は受皿の大半が欠損する。3563は上部の皿の大半が欠損する。

3564は鉢で約3/4が残存する。口径31.2cm、底径16.4cm、器高11.4cmを測る。大きく開く口縁部はやや外反し、端部を肥厚する。底部外面を除いて、鉄釉を薄く施す。底部外面に墨書が薄く残るが、判読困難である。3565は鉢で底部の約1/2が残存する。底径は9.5cmを測り、外面は高台を除いて薄く鉄釉を施す。底部には「正」と記す。高台の一部を切っており植木鉢である可能性も考えられる。

3566は陶胎染付の徳利で約1/8が残存し、底径は9.0cmを測る。内面にはロク口成形痕が残る、透明釉を薄く施す。外面は化粧土を施し、呉須で六拾五号と記した上に透明釉を薄く施す。外面には貫入がみられる。高台は削り出し高台で未調整で、畳付及び高台内は無釉である。3567は徳利であり、底部の約1/6が残存する。底径は8.4cmを測り、内外面にはロク口成形痕が顕著に残る。畳付、高台内を除いて薄く鉄釉を施す。高台は削り出し高台で未調整である。

3568は広口の甕で底部が完存し、底径は14.0cmを測る。外底面を除き、全面に鉄釉を施す。底部外面には回転糸切り痕と砂目が5ヶ所に残る。内底面には足付きハマ痕が5ヶ所残る。19世紀後半の関西系のものと考えられる。

3569は涼炉と考えられる。約3/4が残存し、口径20.6cm、胴径21.2cmを測る。素焼きであり、3ヶ所に窓と考えられる孔を穿つ。

SK-318 (Fig.148)

調査区西部で検出した円形の土坑である。径1.53m、深さ43cmを測る。断面形は逆台形を呈す。SD-308の西端を切っている。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐色砂質シルトで灰色シルト質粘土のブロックを含むもので、下層がにぶい赤褐色粘土であった。上層から陶磁器片3点が出土しており、そのうち2点(3570・3571)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.150・151-3570・3571)

3570は広東碗で、約2/3が残存し、口径11.8cm、器高5.9cm、底径6.6cmを測る。見込には五弁花、外面には梅と竹の文様を施す。呉須は淡い発色を呈す。いわゆる半磁器であり、19世紀前半の瀬戸・美濃産と考えられる。3571は碗で、底部の約1/2が残存し、底径5.6cmを測る。内底面と体部外面には透明釉を薄く施す。高台内は露胎である。

SK-319 (Fig.149)

調査区西部で検出した楕円形の土坑である。長径1.56m、短径1.09m、深さ64cmを測る。長軸方向はN-61°-Eで、断面形はU字形を呈す。SK-309とSD-306を切っている。埋土はにぶい黄褐色

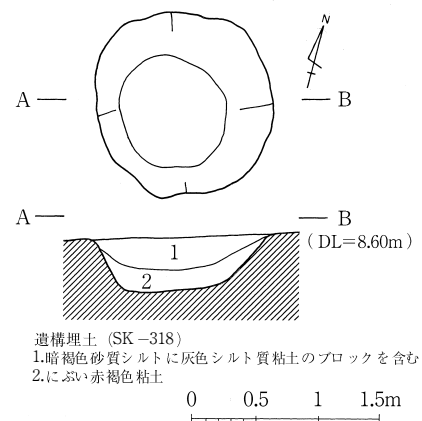


Fig.148 SK-318

3. C区

粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器1点、磁器片1点がみられ、土師質土器(3572)と磁器(3573)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.151-3572)

3572は鍋の口縁部であり、口径23.3cm、胴径25.0cmを測る。内湾する口縁部で、回転ナデ調整を施す。外面にはタタキ目と煤の付着がみられる。

磁器 (Fig.151-3573)

3573は碗で、底部の約1/4が残存し、底径4.0cmを測る。畳付には微砂が付着する。呉須は淡い発色を呈す。17世紀前半の肥前産のものと考えられる。

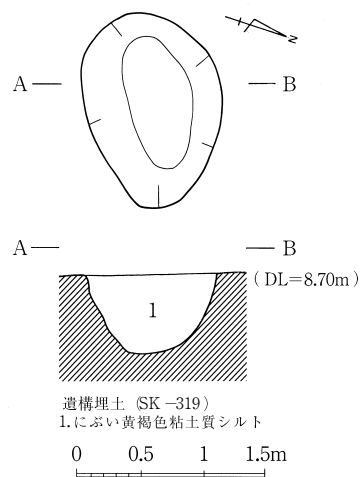


Fig.149 SK-319

ii 溝跡

SD-314

調査区北東部で12.90 mに渡って検出した南北溝で暗渠と考えられる。幅30~46cm、深さ36~43cmを測る。断面形は箱形を呈し、基底面は北へ傾斜する。北は調査区外に延び、中世溝とSD-315を切っている。埋

土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片60点、陶器片2点、鉄製品1点がみられ、弥生土器(3574)、陶器(3575)、鉄製品(3576)各々1点が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.153-3574)

3574は壺の口縁部破片である。大きく開く口縁部で、端部は面をなす。外面にはナデ調整、内面はハケ調整の後にナデ調整を加える

陶器 (Fig.153-3575)

3575は土瓶の底部破片であり、底径5.0cmを測る。体部下端に円錐状の脚が残る。

鉄製品 (Fig.153-3576)

3576は刀子であり、鋒だけが残存し刀身長は不明である。残存長は4.4cm、全幅1.1cm、全厚0.3cmを測る。銹化が著しい。

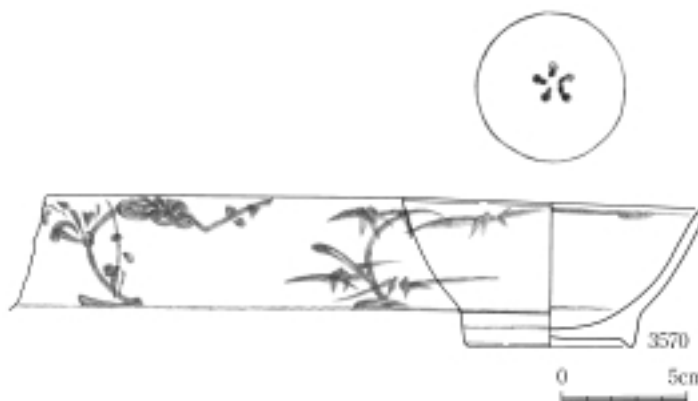


Fig.150 SK-318出土遺物実測図

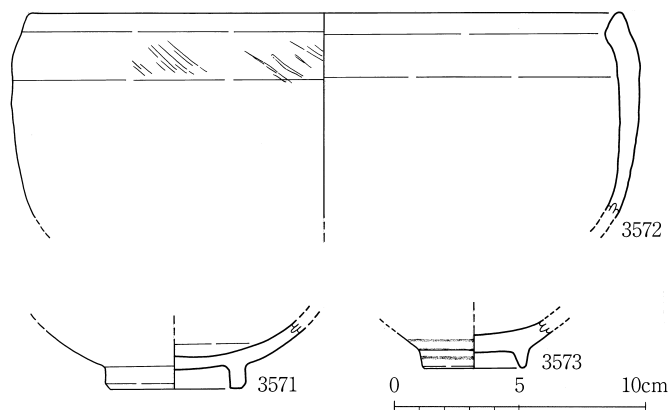


Fig.151 SK-318・319出土遺物実測図

Tab.4 C区土坑計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺()	短辺()	深さ()			
SK - 301	楕 円 形	2.46	1.23	0.26	N - 62° - E	弥生時代	
SK - 302	円 形	1.26	-	0.15	-	弥生時代	
SK - 303	円 形	2.13	-	0.48	-	中 世	
SK - 304	楕 円 形	1.43	0.73	0.38	N - 27° - W	中 世	
SK - 305	円 形	3.16	-	0.62	-	中 世	
SK - 306	不 整 円 形	1.90	-	0.60	-	中 世	
SK - 307	円 形	1.23	-	0.50	-	中 世	
SK - 308	舟 形	2.93	0.56	0.17	N - 78° - E	中 世	
SK - 309	隅 丸 方 形	1.92	1.80	0.18	N - 20° - W	中 世	
SK - 310	円 形	1.33	-	0.29	-	中 世	
SK - 311	方 形	1.74	0.80	0.19	N - 7° - W	中 世	
SK - 312	楕 円 形	3.38	2.12	0.12	N - 16° - W	中 世	
SK - 313	楕 円 形	1.53	0.69	0.11	N - 83° - W	近世以降	
SK - 314	円 形	1.26	-	0.12	-	近世以降	
SK - 315	不 整 楕 円 形	3.62	3.12	0.42	N - 76° - E	近世以降	
SK - 316	楕 円 形	1.69	0.91	0.18	N - 73° - E	近世以降	
SK - 317	隅 丸 方 形	1.95	1.46	0.36	N - 70° - E	近世以降	
SK - 318	円 形	1.53	-	0.43	-	近世以降	
SK - 319	楕 円 形	1.56	1.09	0.64	N - 61° - E	近世以降	

SD-315 (Fig.152)

調査区北東部で7.40 mに渡って検出した東西溝である。幅76cm、深さ5~19cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面は東へ傾斜する。SD-314に切られている。埋土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片19点、土師器片11点、瓦器片2点、陶器片4点、磁器片1点がみられ、瓦器2点(3577・3578)が図示できた。

出土遺物

瓦器 (Fig.153-3577・3578)

3577は約1/3が残存し、口径15.4cm、器高4.6cm、底径4.6cmを測る。口縁部のヨコナデ調整は強く、体部には指頭圧痕、内底面には暗文が残るが不明瞭である。底部には断面逆台形状の高さ0.5cmの高台が付く。炭素がほとんど吸着せず、外面はにぶい黄色、内面は灰色を呈す。3578は口縁部の約1/6が残存し、口径14.0cmを測る。口縁部にヨコナデ調整を施し、体部外面には指頭圧痕が残る。

SD-316 (Fig.152)

調査区南東部で11.30 mに渡って検出した東西溝である。幅1.10 m、深さ20~29cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面は西へ傾斜する。東は調査区外に延びる。埋土は暗褐色シルトで暗灰黄色シルト質粘土のブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片20点、陶器片53点、磁器片38点が

3. C区

みられ、陶器3点(3579～3581)、磁器2点(3582・3583)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.153-3579～3581)

3579・3580は染付の端反碗で、ともに型紙摺りによるもので明治期のものと考えられる。3579は約1/2が残存し、口径10.4cm、器高5.9cm、底径4.2cmを測る。釉が部分的に白濁しており、呉須の発色はよくない。3580も約1/2が残存し、口径10.5cm、器高5.8cm、底径4.3cmを測る。釉は全体に薄く、部分的にムラが残る。焼成不良の粗悪品である。

3581は白磁の輪花皿で、ほぼ完存し、口径10.3cm、器高2.8cm、底径4.4cmを測る。見込は蛇の目に釉ハギする。

陶器 (Fig.153-3582・3583)

3582・3583は陶器の落とし蓋である。ともに完形であり、3582は口径7.3cm、器高1.2cm、底径3.5cmを測る。外面には浅黄色釉を薄く施し、内面は露胎である。3583は口径7.6cm、器高1.7cm、底径3.2cmを測る。外面は陶胎染付で、内面は露胎である。

SD-317

調査区南部で11.80mに渡って検出した南北溝で暗渠と考えられる。幅42cm、深さ3～9cmを測る。断面形は箱形を呈し、基底面は南へ傾斜する。南は調査区外に延び、中央を近代以降の土坑に切られている。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで小礫を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片2点、陶磁器類4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-318

調査区南部で6.50mに渡って検出した南北溝で、SD-317と並走しており、暗渠の可能性も考えられる。幅35cm、深さ10～14cmを測る。断面形は箱形を呈し、基底面は北へ傾斜する。SP-301の東端を若干切っている。埋土はオリーブ黒色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、瓦器片1点、磁器片2点、陶器片4点がみられ、磁器1点(3584)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.153-3584)

3584は染付の広東碗で、底部のみ完存し、底径5.8cmを測る。呉須は淡く発色し、見込には五弁花を施したものとみられるが、不明瞭である。全体に貫入がみられる。19世紀前半代のものと考えられる。

SD-319

調査区北部で9.00mに渡って検出した南北溝で暗渠と考えられる。幅33cm、深さ15～17cmを測る。断面形は箱形を呈し、基底面は南へ傾斜する。中世の溝を切っている。埋土は灰色粘土質シルトで暗褐色粘土を含むものであった。出土遺物には弥生土器片25点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-320 (Fig.152)

調査区中央部で8.00mに渡って検出した東西溝である。東側と西側で検出した溝状遺構と一連のものである可能性も考えられる。幅87cm、深さ7～18cmを測る。断面形は逆台形を呈し、基底面は東

へ傾斜している。SP-301に切られている。埋土はオリブ黒色シルトで炭化物を含んでいた。出土遺物には陶器片100点がみられ、陶器1点(3585)が図示できた。

出土遺物

陶器 (Fig.153-3585)

3585は碗で、ほぼ完形であり、口径12.7cm、器高5.2cm、底径5.4cmを測る。全体に透明釉を薄く施す。見込には蛇の目状の釉ハギの後に白色土を塗布する。底部は露胎である。18~19世紀の瀬戸・美濃産のものと考えられる。

SD-321 (Fig.152)

調査区西部で12.20mに渡って検出した東西溝である。幅71cm、深さ24~31cmを測る。断面形は逆台形を呈し南に段を有す。基底面はやや東へ傾斜する。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで小礫が含まれていた。出土遺物には土師質土器片30点、瓦器片2点と瓦質土器、東播系須恵器、青磁、陶磁器、石製品などがみられ、東播系須恵器2点(3586・3587)、土師質土器1点(3588)、瓦質土器1点(3589)、青磁1点(3590)、陶器1点(3591)、石製品1点(3592)が図示できた。

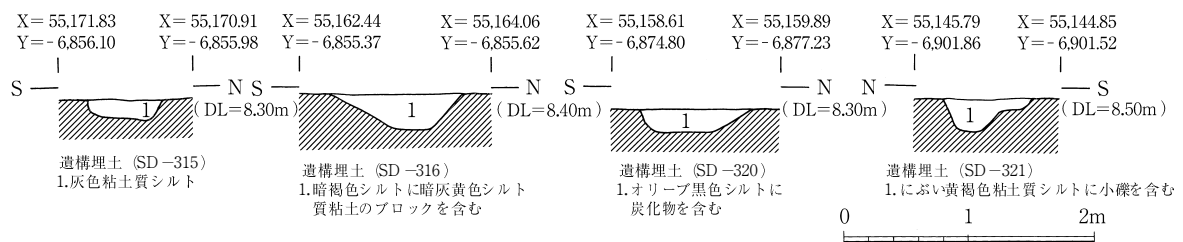


Fig.152 SD-315・316・320・321

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.153-3586・3587)

3586・3587は片口鉢の口縁部破片である。外上方に真直ぐ上がる口縁部で、口縁端部を上下に拡張する。3586は口径22.6cmを測り、内外面の調整は摩耗により不明である。3587は口径21.6cmを測り、内外面とも回転ナデ調整を施す。

土師質土器 (Fig.153-3588)

3588は杯で、底部の約1/6が残存し、底径8.4cmを測る。摩耗が著しく調整は不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。

瓦質土器 (Fig.153-3589)

3589は脚基部の破片で、残存長5.9cm、全幅2.5cm、全厚2.3cmを測る。

青磁 (Fig.153-3590)

3590は龍泉窯系の碗の口縁部破片であり、口径15.8cmを測る。外上方にほぼ真直ぐ上がる口縁部であり、灰オリブ釉を約0.5mmの厚さに施す。

陶器 (Fig.153-3591)

3591は小壺であり、約2/3が残存するが、底部は欠損する。口径3.4cm、胴径6.1cmを測る。外面に

3. C区

は鉄釉を施す。

石製品 (Fig.153-3592)

3592は砥石であり、5面を使用する。全長10.6cm、全幅8.5cm、全厚6.1cmを測る。

iii ピット

P-306

調査区西部で検出した楕円形のピットでSK-306を切る。長径55cm、短径31cm、深さ9cmを測り、埋土は暗緑灰色粘土に黄褐色砂を含んでいた。出土遺物には須恵器1点と陶磁器類がみられ、須恵器1点(3593)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.153-3593)

3593は蓋の天井部の破片である。外面は回転ヘラ削り調整、内面には回転ナデ調整を施す。

P-307

調査区西部で検出した楕円形のピットである。長径52cm、短径39cm、深さ43cmを測り、埋土は褐色シルトで褐灰色シルト質粘土のブロックを含んでいた。出土遺物は図示した陶器1点(3594)のみであった。

出土遺物

陶器 (Fig.153-3594)

3594は小杯で、口縁部の約1/3が残存し、口径8.2cmを測る。全体に白い化粧土を施す。

iv 水溜り状遺構

SP-301

調査区南部の水溜り状遺構で、東西12.80m、南北11.40mに渡って検出した。SD-318・320を切り、深さは10~15cmを測る。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片85点、土師器片30点、磁器片73点、陶器片98点がみられ、陶器4点(3595~3598)が復元図示できた。

出土遺物

陶器 (Fig.153-3595~3598)

3595・3596は碗で1/2~1/3が残存する。ともに底部は露胎である。見込には蛇の目状に釉ハギをした後に白色土を塗布する。3595は口径12.2cm、器高5.0cm、底径4.5cmを測り、口縁部から体部にかけて鉄釉を施す。3596は口径12.5cm、器高4.8cm、底径4.9cmを測り、内外面に透明釉を薄く施す。

3597は素焼きの鉢で、ほぼ完形であり、口径8.5cm、器高4.2cm、底径4.6cmを測る。

3598は火入れで、ほぼ完形であるが、底部は欠損する。口径7.6cm、器高4.6cm、底径4.4cmを測る。外面には透明釉を薄く施す。底部は露胎である。

SP-302

調査区南部の水溜り状遺構で、東西13.20m、南北6.80mに渡って検出した。SP-301を切ってお

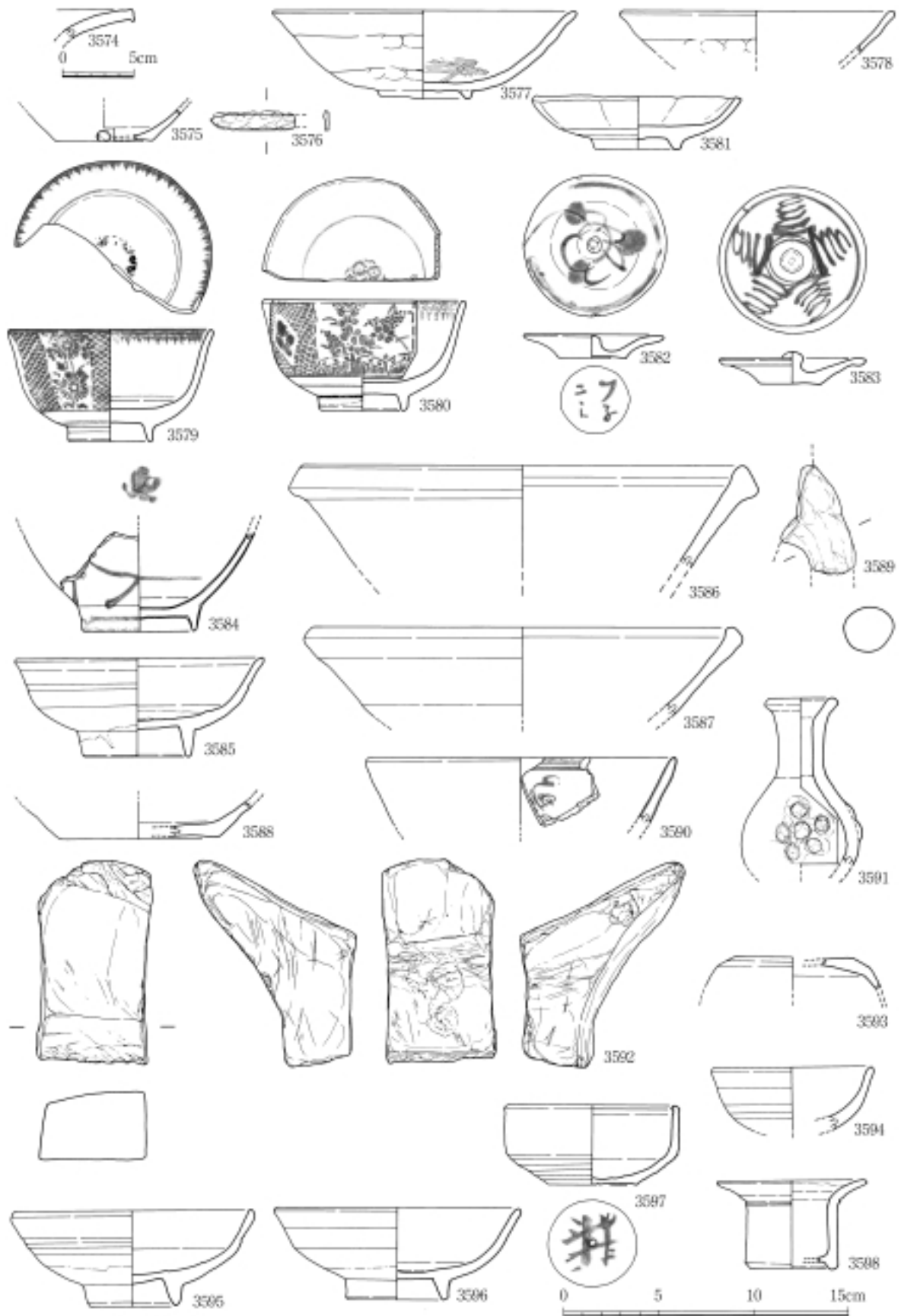


Fig.153 C区近世以降溝跡，ピット，水溜り状遺構出土遺物実測図

4. D区

り、深さは6~18cmを測る。埋土はオリブ黒色シルトで、出土遺物には弥生土器片50点、陶器片93点、磁器片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

v 性格不明遺構

SX-301

調査区南東部で検出した不整形の性格不明遺構で、近世以降のピットに数箇所を切られる。東西6.60 m、南北4.35 m、深さ8~20cmを測り、長軸方向はN-66°-Wである。埋土は暗灰黄色粘土質シルトでマンガン粒を多量に含んでいた。出土遺物には弥生土器片49点、陶磁器類5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

4. D区

D区は三島神社の北西部に当たり、残丘(低位段丘の残丘)から延びる尾根を削平した平地部分で、調査前は宅地となっており、調査面積は72m²で全域で客土の堆積が認められた。調査はL字状のトレンチを設定して行った。D区では、削平のため他の調査区で確認された弥生時代や中世の遺物包含層は認められず、近代の遺構が検出されたのみであった。

(1) 層序

第I層 明黄褐色砂質礫層

第I層は基盤の岩盤で、全域に堆積していた厚さ約0.60~1.00 mの客土の下で認められた。遺物包含層は認められなかったが、客土直下の第I層上面で遺構検出を行い、近代の遺構を確認した。

(2) 遺構と遺物

① 近代

SK-401 (Fig.156)

調査区の北側で確認した楕円形の土坑で、第I層の岩盤を掘り込んで作られていた。長径1.71 m、短径1.21 m、深さ2.94 mを測り、断面は袋状で、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。SK-401の上には約2~15 cmの厚さに石灰が堆積しており、それを除去すると土坑の輪郭が現れ、約30~50 cm大の石が9個配列されていた。土坑内には検出面から1.80 mの所に厚さ25~30 cm、底から約30 cmの所に厚さ10 cmの石灰が堆積していた。その間層(約40~50 cm)

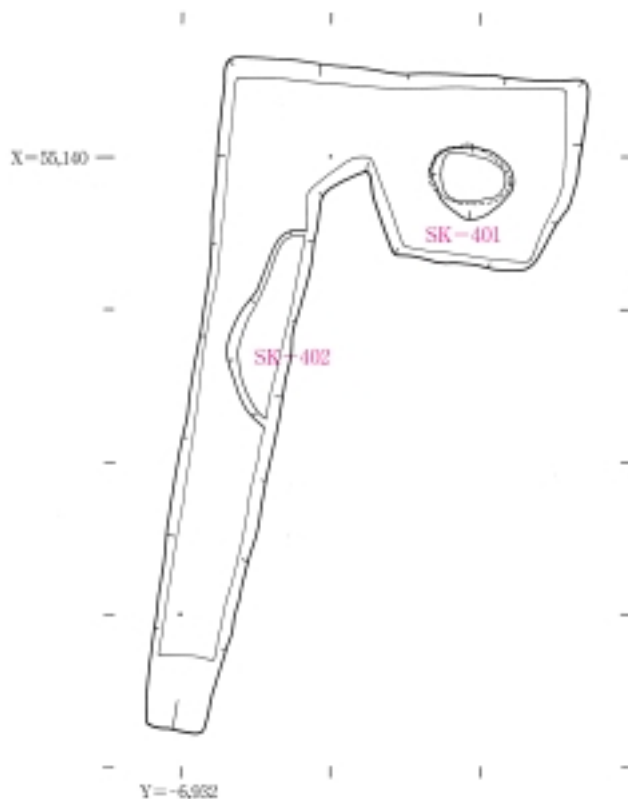


Fig.154 D区遺構平面図(S=1/200)

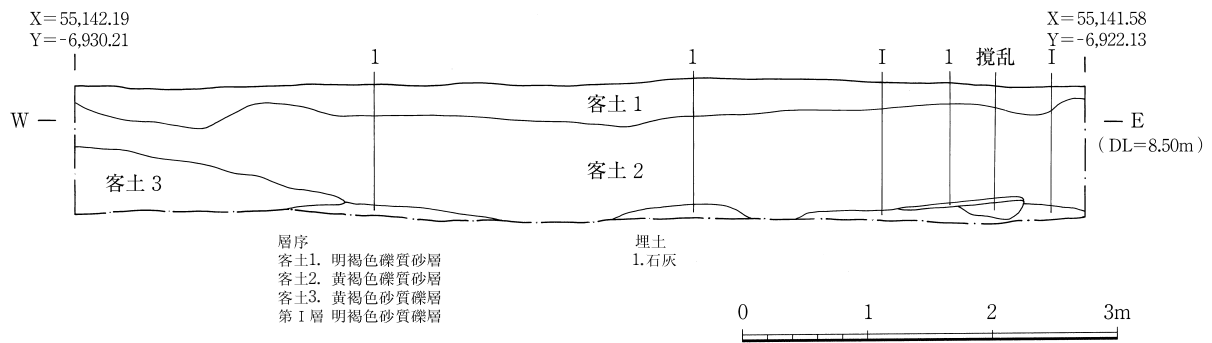


Fig.155 D区セクション図

には特に遺物が多く含まれ、石、炭化した木、近代の陶磁器類や金属製品(煙管・ヤカン・ポンプ・万年筆・自転車の部品)、ガラス製品(薬瓶・注射器・コップ・花瓶・ビー玉)、プラスチック製品(櫛・自転車の部品)など生活用品が多量に出土した。基底面には多量の炭化物が堆積しており、遺物も被熱しているものがみられたことから土坑内で火を焚いたものとみられる。また、石灰を3層も用いていることは非常に特殊な状況といえる。出土遺物が生活用品全般で、薬瓶等も比較的多く含まれていることから疫病でなくなった人の遺品を土坑内で燃やし、石灰で密封したものと考えられる。出土遺物から昭和初め頃に埋納されたものとみられる。出土遺物のうち陶器14点(4001~4014)、磁器14点(4015~4028)、石製品4点(4029~4032)、金属製品2点(4033・4034)、ガラス製品7点(4035~4041)が図示できた。

出土遺物

陶器 (Fig.157-4001~4014)

4001は壺の蓋で、口径7.6cm、器高3.7cmを測る。

明るい紺色の釉を薄く施すが、かえりと内面は無釉である。18世紀の肥前系である。

4002~4004は碗である。4002は底径8.0cmを測る。大型の丸碗で、器壁が厚い。高台は若干ハの字状に開く。断面は浅黄色で、焼きが甘く、胎土中には巣が入っている。外面は体部にやや緑色を帯びた透明釉を薄く施し、高台は無釉である。内面は黄色味を帯びた透明釉を薄く施すがほとんど透明感がなく、貫入が入る。18~19世紀の瀬戸・美濃系である。4003は丸碗で、底径4.8cmを測る。高台は細く高いもので、高台内の抉りは深い。体部上半にはロクロ目が残る。釉は茶色味を帯びたオリブ色のものを薄く施す。釉には貫入が入る。畳付は釉ハギを行っており、一部砂粒が付着する。19世紀の関西系である。4004は丸碗で、底径4.4cmを測る。高台は逆台形を呈し、直立する。器壁は

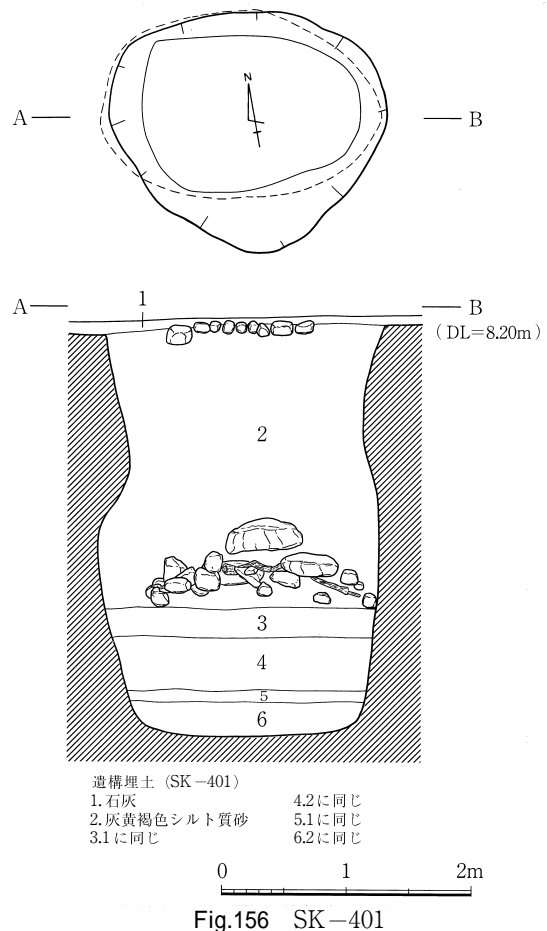


Fig.156 SK-401

4. D区

非常に薄く、やや腰が張る形態である。見込には灰色と明緑色の釉下彩、高台の外面には明緑色の釉下彩がみられる。釉は光沢のある透明釉を薄く施すが、畳付と高台内は無釉である。また、見込にはハマ痕が残存部で2カ所みられ、おそらく全部で4カ所あったものとみられる。19世紀の関西系である。

4005は皿で、底径7.7cmを測る。大型のもので、高台も太く高いものである。釉は光沢のある灰色味を帯びた茶色を呈し、貫入が入る。外面は高台付近まで薄く施す。内面は化粧土を塗った後施釉し、見込は釉ハギを行う。高台付近は露呈で、ロクロ目が残る。在地または関西系とみられる。

4006～4011は鉢である。4006は口径32.2cmを測る。口縁部は大きな玉縁がつく。外面は玉縁の下から褐色の化粧土に光沢のある暗褐色の鉄釉を銹塗する。釉が溜まった所はオリーブ色を呈す。玉縁から内面には光沢のある黄味を帯びた乳白色の釉を薄く施す。明治から大正期のものである。4007は底径15.6cmを測る。外面は体部に茶色の化粧土にやや光沢のある茶色の鉄釉を銹塗する。底部は無釉である。釉が厚いところは白色を呈す。内面は黄味を帯びた乳白色の釉を薄く施す。見込には残存部で4カ所のハマ痕があり、全部で8カ所あったものとみられる。明治から大正期のものである4008は口縁部が受け口状を呈するもので、口径16.8cmを測る。釉は黄味を帯びた透明釉を薄く施すが、一部無釉の部分がある。また、釉が厚いところは水色を呈す。4009は口径21.4cmを測る。口縁部が逆L字状を呈するもので、水平に伸びて端部は細く仕上げる。内外面とも釉は灰色味を帯びた茶色の釉を薄く施し、口縁部の上面は釉ハギを行う。蓋が付くものとみられる。4010は底径10.4cmを測る。太く短い高台が付くもので、体部は大きく内湾する。外面は回転ナデ調整で、無釉である。内面は鉄釉を薄く施し、ロクロ目が観察できる。明治から大正期のものである。4011は口縁部の破片で、玉縁を有する。内外面とも回転ナデ調整で、外面にはロクロ目の凹凸が文様のようにになる。内外面とも炭素が吸着する。

4012・4013は播鉢である。4012は口径28.2cmを測る。体部外面にはヘラ削り調整を施す。口縁部外面の凹線は2条である。条線は10本単位である。18～19世紀の堺・明石系ものとみられる。4013は底径12.7cmを測る。底部には凹凸があり、砂粒が付着する。見込には7条単位の櫛による文様が見られ、その周囲には輪状に焼台の痕が残る。18～19世紀の堺・明石系ものとみられる。

4014は徳利である。底径7.6cm、残存高19.9cmを測り、口縁部は欠損する。底部には太く低い高台が付く、体部は下膨れの形態を呈す。釉は光沢のある黄茶色のものを外面は畳付近まで、内面は肩部まで薄く施す。また、釉の上にはイッチンで、正面に「高岡町 亀〇店 〇〇道」、背面に「〇四号」と描かれている。通い徳利で、明治中期から大正期のものである。

磁器 (Fig.158-4015～4028)

4015は蓋で、口径9.6cmを測る。内面の口縁部には四方禪文がみられる。内面は焼きが甘く透明感のない白味がかかった透明釉を薄く施し、外面は青磁釉を薄く施す染付け青磁である。18世紀後半の肥前系である。

4016～4019は碗である。4016は広東形の碗で、底径6.5cmを測る。見込には花文、外面には圏線とV字状の染付けがみられる。釉は光沢のある透明のものを薄く施す。釉には貫入が入る。19世紀の瀬戸・美濃系とみられる。4017は底径4.6cmを測る。高台はハの字状に開き、体部はやや腰の張る丸

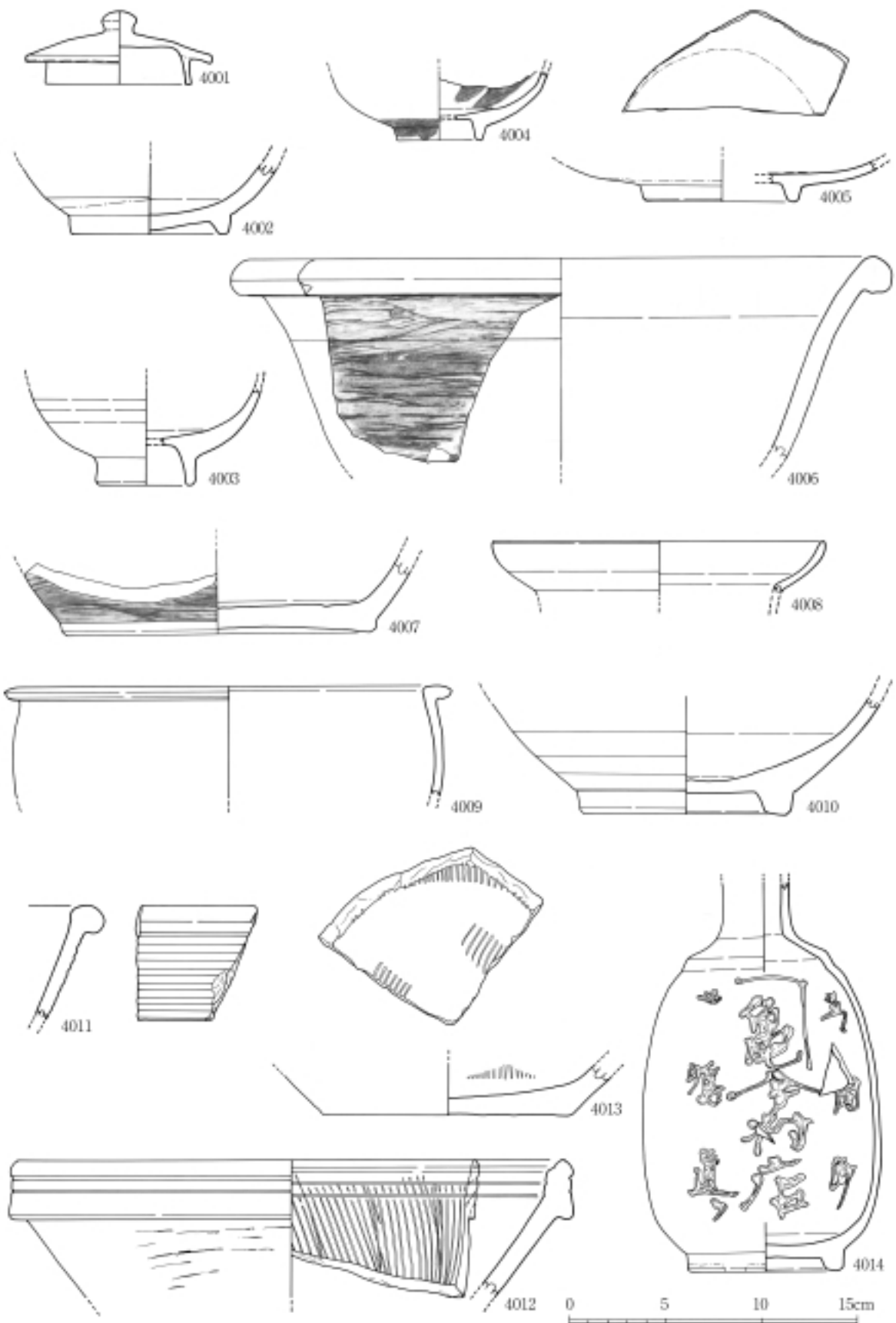


Fig.157 SK-401出土遺物実測図1

4. D区

碗である。見込には花卉の文様がコバルトで描かれている。釉は光沢のある透明のものを薄く施釉し、畳付は釉ハギを行う。19世紀以降の瀬戸・美濃系である。4018は小型の丸碗で完存する。口径5.1cm, 底径4.0cm, 器高5.1cmを測る。外面にはうすい紫色とオリーブ色の釉下彩で花文と蝶が描かれる。釉はやや光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。明治期以降のものである。4019は茶碗で、口径11.8cm, 底径4.0cm, 器高5.2cmを測る。外面には正円子と酸化クロムの釉下彩によって松竹梅文が銅版転写される。釉は光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。釉にはムラがみられる。大正期のものである。

4020～4025は皿である。4020は内湾して立ち上がり、端部を丸く納める。内面には雲文の染付が

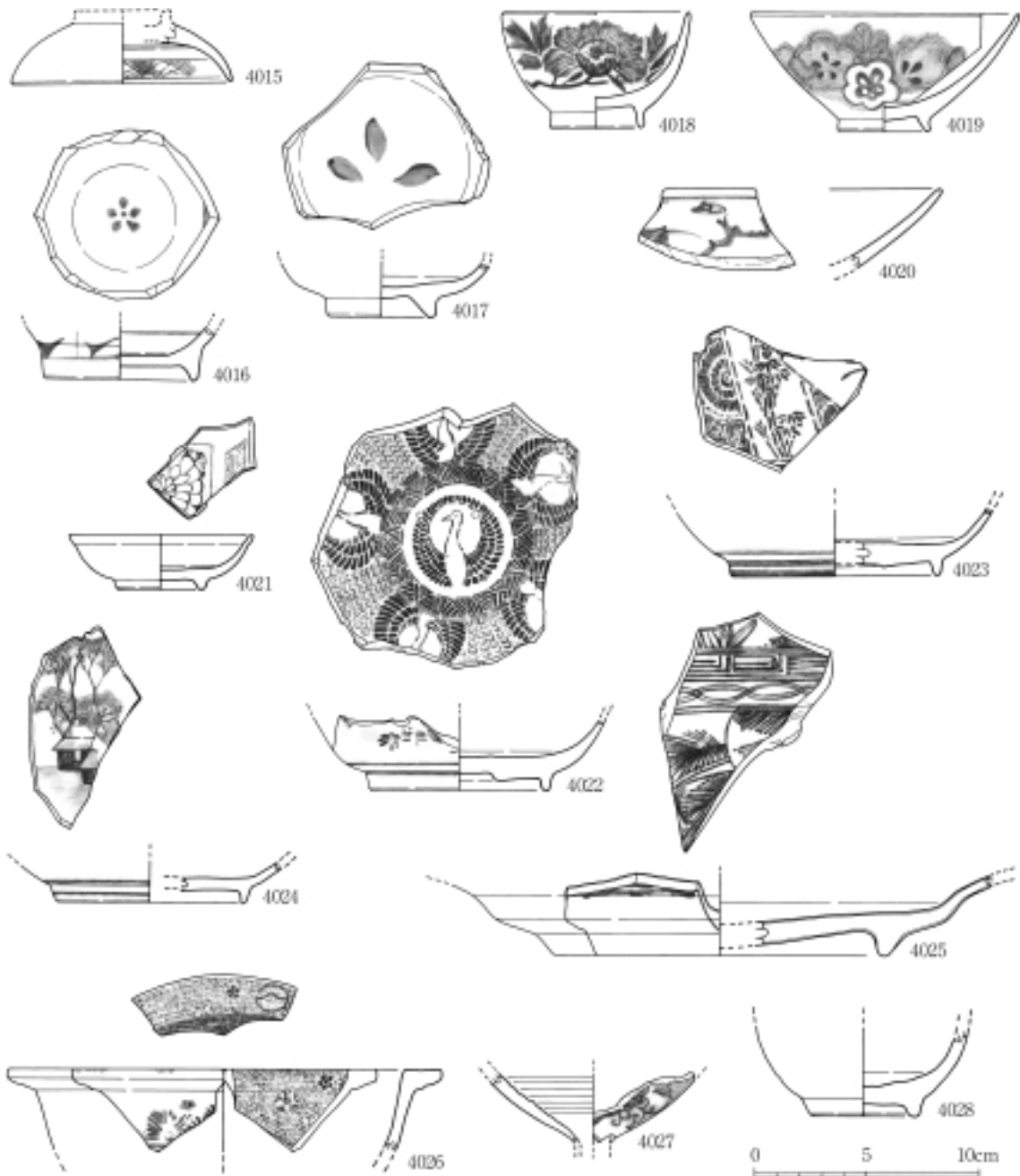


Fig.158 SK-401 出土遺物実測図2

みられる。釉は透明の釉を薄く施す。17世紀後半の肥前系である。4021は型成形の角皿で、一辺8.2cm、底径3.8cm、器高2.4cmを測る。内面には体部に波文、見込に菊花文がみられ、文様は凸である。釉は光沢のある白味を帯びた透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。幕末から明治期の瀬戸・美濃系である。4022は蛇の目凹形高台の皿で、底径7.8cmを測る。内外面にはコバルトによる型紙刷りが行われ、見込には鶴文がみられる。釉はやや光沢のある透明釉を薄く施し、高台内の凹部は釉ハギを行う。見込にはハマ痕が5カ所みられる。明治期のものである。4023は蛇の目凹形高台の皿で、底径9.2cmを測る。見込にはコバルトによる型紙刷りが行われ、竹文がみられる。釉は光沢のある透明釉を薄く施し、畳付から高台内の凹部は釉ハギを行う。明治期のものである。4024は蛇の目凹形高台の皿で、底径8.1cmを測る。見込にはコバルトと酸化クロムで山水文が印刷される。釉は光沢のあるやや青味を帯びた透明釉を薄く施し、畳付から高台内の凹部は釉ハギを行う。明治期以降のものである。4025は多角形の大皿である。高台は円形を呈し、底径14.8cmを測る。見込には雷文帯と松等、外面に圏線等、高台内にも1条の圏線がコバルトによって染付けされる。釉は光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。明治期の肥前系である。

4026は鉢で、口径19.0cmを測る。内外面はコバルトによって梅文などが型紙刷りされる。口縁部の平坦面には赤色の上絵付けがみられる。釉は光沢のある透明釉を施釉する。明治期のものである。

4027は壺である。外面には唐草文の染付がみられ、透明釉を薄く施す。内面は無釉で、ロクロ目が顕著に残る。18世紀後半の肥前系で、油壺とみられる。

4028は徳利で、底径4.6cmを測る。外面は透明感のないやや青味を帯びた透明釉を薄く施釉し、畳付は釉ハギを行う。また、釉には黒色の極細い砂粒を多く含む。内面は無釉で、ロクロ目が残る。19世紀の肥前系である。

石製品 (Fig.159~161-4029~4032)

4029は叩石で、完存しており、全長14.8cm、全幅11.4cm、全高6.1cmを測る。敲打痕は一面のみみられる。石材は細粒の花崗岩で、裏面には煤が付着する。

4030・4031は五輪塔である。4030は空風輪である。空輪幅12.8cm、高さ7.4cm、風輪幅12.4cm、高さ6.8cmを測る。空輪は直線的に立ち上がる。磨滅しており、一部は被熱する。石材は砂岩である。4031は火輪で幅17.8cm、高さ10.1cmを測る。上部には風輪を据えるための窪みが設けられる。磨滅しており、一部は被熱する。石材は砂岩である。

4032は石臼の下臼部分で、径約34cmを測る。斜行する2~3本単位の条線が4カ所残存する。摺目は摩耗する。裏面は中央部を薄く加工する。一部被熱する。

金属製品 (Fig.162-4033・4034)

2点とも煙管である。4033は雁首部分で火皿が欠損する。残存

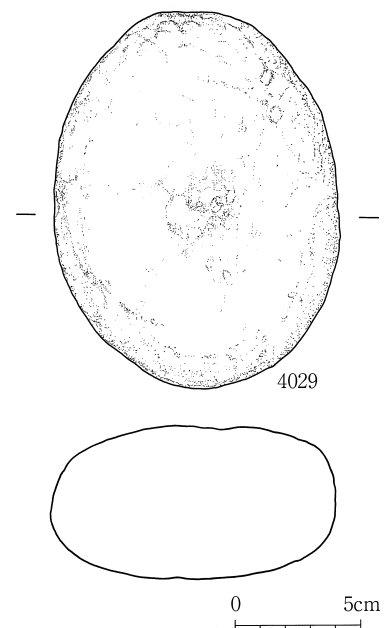


Fig.159 SK-401出土遺物実測図3

4. D区

長は5.4cmを測る。羅字接続部は変形しているが、径8~12mmとみられる。材質は銅とみられる。4044は雁首か吸口かは不明である。残存部の長さは6.5cm, 径1.1cmを測る。材質は銅とみられる。

ガラス製品 (Fig.163-4035~4041)

すべて瓶で、完形のものである。4035は口縁部が円形、体部が楕円形を呈するものである。口径1.8cm, 底部長径4.4cm, 底部短径3.0cm, 器高10.7cmを測る。底部には「S」に似たマークが見られる。透明で側面には型痕が残る。薬瓶か化粧瓶として使用されたとみられる。4036は薬瓶で、口径1.6cm, 底径3.8cm, 器高8.7cmを測る。側面には凹の目盛と「60」の文字が裏向きに施される。

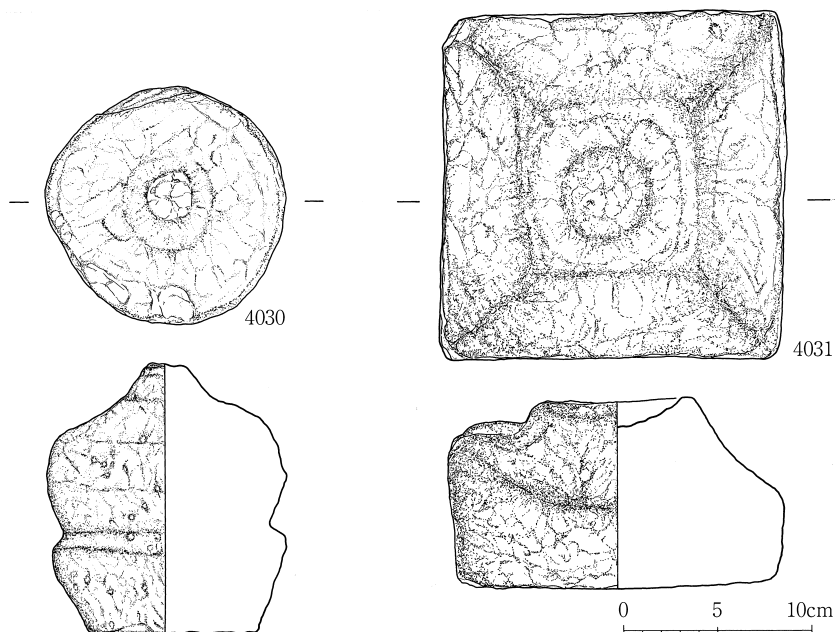


Fig.160 SK-401出土遺物実測図4

また、その横には楕円形の痕がみられ、一部は凸で一部は凹んでいる。透明で、小さい気泡が多く入る。側面には型痕が残る。4037は体部は方形、口縁部は円形を呈す。口径2.2cm, 底部一辺3.8cm, 器高8.6cmを測る。肩部には波状の段を有する。底部にはトンボと桃のマークがみられる。透明で、薬瓶として使用されていたものとみられる。4038は4037と同じ形態で、口径2.2cm, 底径一辺3.8cm, 器高8.7cmを測る。底部にはトンボと桃のマークがみられるが、4037に比べて崩れている。透明で、薬瓶として使用されていたものとみられる。4039は口径2.2cm, 底径

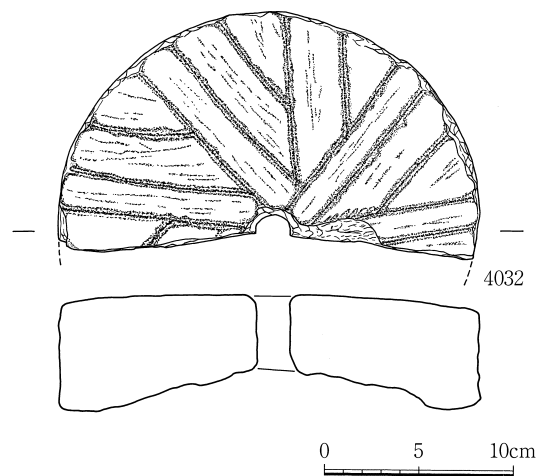


Fig.161 SK-401出土遺物実測図5

2.5cm, 器高6.5cmを測る。体部は方形、口縁部は円形を呈す。体部には「商標登録」と「君の代」の文字がみられる。透明で、小さい気泡が多く入る。薬瓶として使用されていたものとみられる。4040は口径3.5cm, 底径4.1cm, 器高4.2cmを測る。底部には4037・4038と同様のトンボと桃のマークが見られるが、崩れている。透明であるが、口縁部の内面は摩耗しており白色を呈す。4041は口径3.5cm, 底径4.5cm, 器高4.5cmを測る。ネ

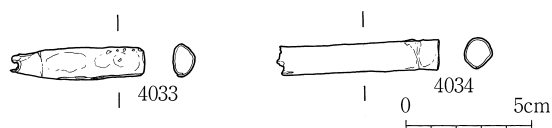


Fig.162 SK-401出土遺物実測図6

ジ式の蓋が付いていたとみられる。底部にはボタンのようなマークが見られる。側面には型痕が見られるが、体部と口縁部の型痕は90度ずれる。透明で、少し気泡が入る。薬瓶として使用されていたものとみられる。

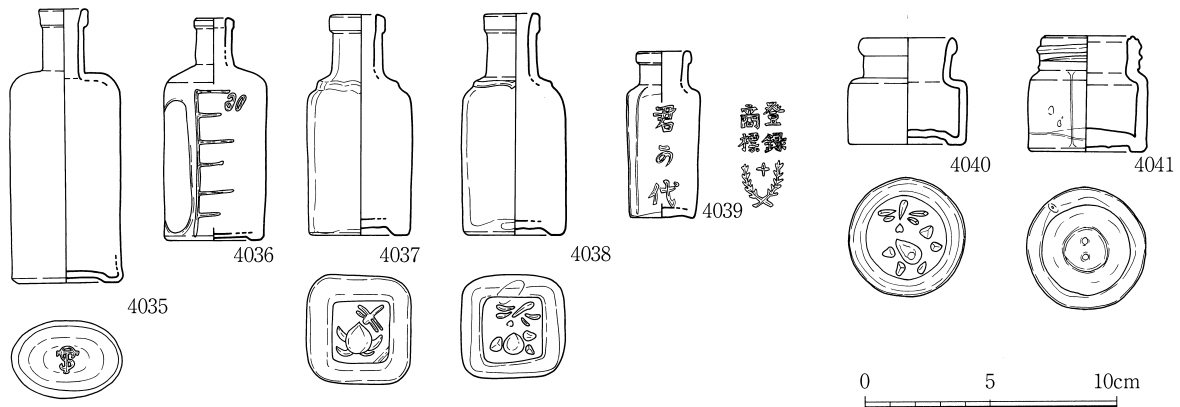


Fig.163 SK-401出土遺物実測図7

SK-402

調査区の西側で検出した土坑で、一部のみ検出した。不整楕円形を呈し、検出部分は長径5.09m、短径1.30m、深さ5~33cmを測る。浅く、断面は皿状で、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物は皆無であった。

Tab.5 D区土坑計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺()	短辺()	深さ()			
SK - 401	楕 円 形	1.71	1.21	2.94	N - 80° - W	近代	
SK - 402	不整楕円形	(5.09)	(1.30)	0.05~0.33	-	近代	

5. E区

E区は97年度に北部、98年度に東部と西部の3回に分けて調査を行い、調査面積は延べ4,585㎡であった。東部は三島神社の鎮座する残丘の裾部に当たり、緩斜面になっていた。調査前は宅地であったため若干の削平、攪乱を受けているものの、弥生時代後期、古代、中世、近世の遺物包含層、遺構が確認され、残存状態は良好であった。それに対し、北部と西部は近世の遺物包含層は認められず、古代の遺物包含層も一部で残存していたのみで、検出された遺構も少なかった。中世の遺物包含層は一部削平を受けているもののほぼ全域で認められ、遺構も多く、この調査区の主となる時期である。

(1) 層序

- 第Ⅰ層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層
- 第Ⅱ層 明オリーブ灰色(5GY7/1)砂質シルト層
- 第Ⅲ層 灰色(7.5GY7/1)砂質礫層
- 第Ⅳ層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質礫層

5. E区

- 第V層 灰色(5Y6/1)シルト質砂層
- 第VI層 灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト層
- 第VII層 灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層
- 第VIII層 明黄褐色(2.5Y7/6)粘土質シルト層
- 第IX層 黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト層
- 第X層 浅黄色(2.5Y7/4)粘土質シルト層
- 第XI層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂層
- 第XII層 褐灰色(10YR4/1)シルト質砂層
- 第XIII層 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト層
- 第XIV層 黄褐色(2.5Y5/3)粘土質シルト層
- 第XV層 灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粘土層
- 第Z層 浅黄色(2.5Y7/4)シルト質粘土層
- 第x層 灰黄褐色(10Y5/2)シルト質粘土層
- 第{層 浅黄色(2.5Y7/4)シルト質粘土層
- 第|層 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粘土層
- 第y層 にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト質粘土層
- 第}層 にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質粘土層

調査区東部は約50～60cmの客土の堆積が認められた。層位中遺構が検出されたのは、第VI層、第VII層、第VIII層、第X層、第XII層上面であった。

第I層は調査区西部の表土層で、厚さ20～30cmを測る。

第II層は調査区の全面で認められた層である。一部客土直下で見られ、一定削平されているとみられる。下部にマンガンが堆積しており、旧耕作土と考えられる。

第III層、第IV層は調査区東部のごく一部で見られた層である。第III層は5mm大の橙色の礫を非常に多く含む。

第V層は近世の遺物包含層で、調査区東部でのみ認められた。厚さ10～15cmを測る。5mm大の橙色の礫を多く含む。

第VI層は中世の遺物包含層で、調査区全域で認められた。厚さ15～20cmを測る。5mm大の橙色の礫を多く含む。

第VII層は古代の遺物包含層で、調査区東部で認められた。厚さ5～20cmを測る。調査区西部は削平されたとみられる。

第VIII層は調査区南部のごく一部で認められた層である。

第IX層は弥生時代後期の遺物包含層で調査区東部で認められた。厚さ10～20cmを測る。土壌化しており、黒褐色を呈す。

第X層は調査区のほぼ全域で見られた層であるが、東部の斜面部では見られなかった。厚さ20～42cmを測る。弥生時代後期後半の遺物を含む。調査区南西部に設定した下層確認トレンチでは、第X層中で焼土を確認したが、明確な遺構は確認されなかった。

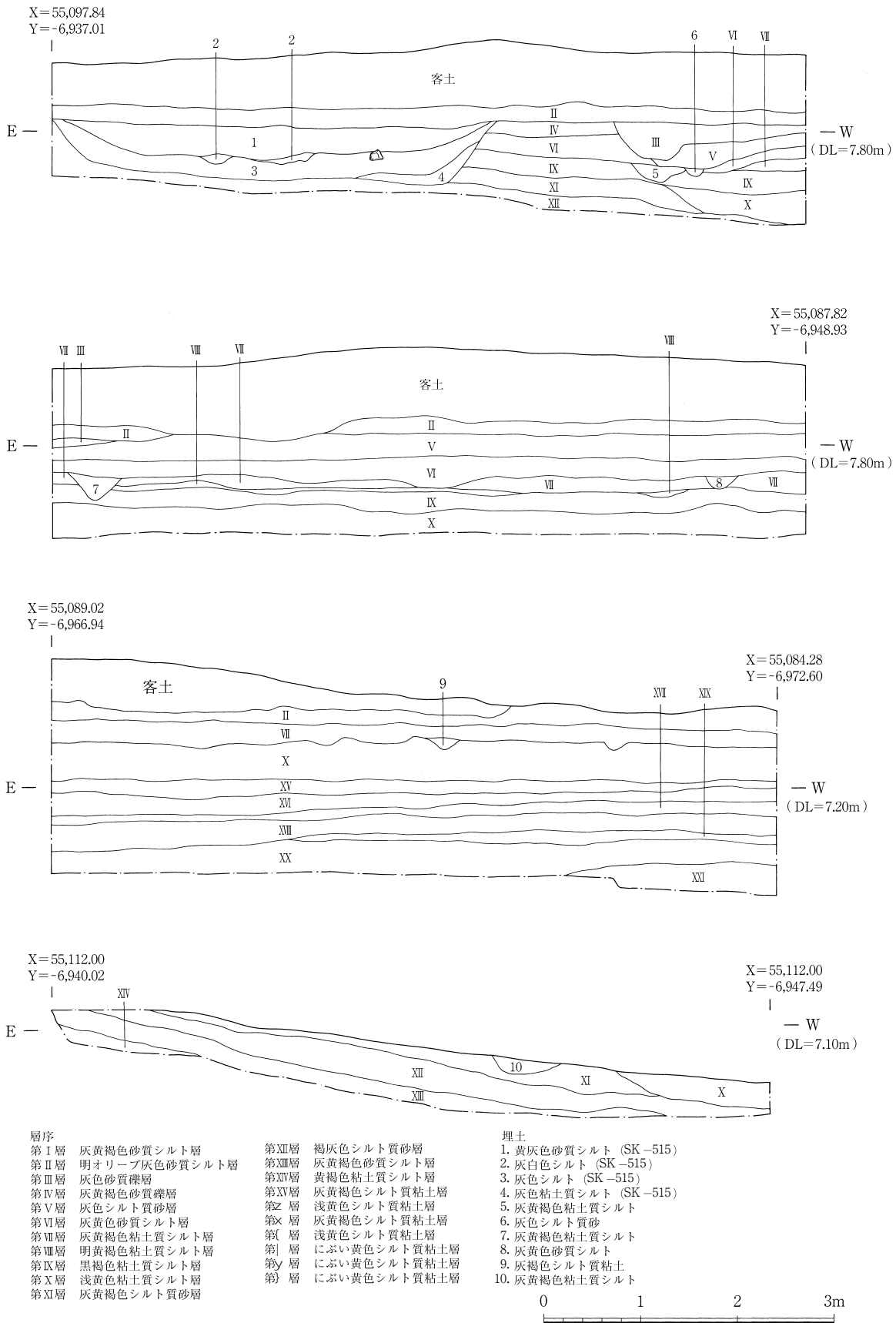


Fig.164 E区セクション図

5. E区

第XI層は調査区東部の斜面部でのみ見られた層で、厚さ8～25cmを測る。1cm大の黄色の礫を多く含む。第X層に近くなるに従って礫が少なく粘性も弱くなるため、第X層との境は明瞭ではない。弥生時代後期の遺物を含む。

第XII層は調査区東部の斜面部で確認された層であるが、西へ続くものとみられる。厚さ14～26cmを測る。1cm大の黄色の礫を多く含む。第XI層より若干粘性が強い。

第XIII層は調査区東部の斜面部のトレンチで確認された層である。厚さ約10cmを測る。1cm大の黄色の礫を多く含む。第XI層より粘性が強い。

第XIV層は調査区東部の斜面部に設定したトレンチで確認された層である。1cm大の黄色の礫を少し含む。

第XV層～第J層は調査区南西部に設定した下層確認トレンチでのみ確認した層である。

第XV層は厚さ10～18cmを測る。マンガンを若干含んでいた。

第Z層は厚さ10～20cmを測る。

第X層は土壌化した層で、厚さ10～20cmを測る。弥生土器と炭化物を含んでいたが、細片のため詳しい時期は不明である。第I層上面で遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。

第I層は厚さ約20cmを測る。

第J層は土壌化した層で、厚さ約10cmを測る。弥生土器と炭化物を少量含んでいたが、細片のため詳しい時期は不明である。

第Y層は土壌化した層で、厚さ約10～20cmを測る。土器と炭化物を含んでおり、僅かに焼土も認められたが、明確な遺構は確認できなかった。

第J層は下層確認トレンチの西側で確認された層である。遺物は皆無であった。

(2) 堆積層出土遺物

第I層出土遺物

古銭 (Fig.165-5001)

5001は古銭で径2.1cmを測る。表面は錆化しているため文様は不明である。裏面には「・日本国・昭和二十四年」と鋳だされており、中央には鳩がみえる。表面には金色のメッキがみられ、中央に国会議事堂が僅かに残存する。側面には細かいキザミ目が入る。昭和24年に鋳造された五円玉である。

第III層出土遺物

磁器 (Fig.165-5002・5003)

5002・5003は染付の碗である。5002は底径6.5cmを測る。内外面に光沢のある透明釉を約0.8mmの厚さに施釉し、暈付は釉ハギを行う。外面にはコバルトによる菊花文の染付が施される。5003は口径10.5cmを測る。全面に光沢のある透明釉を薄く施釉する。外面には炭色の草花文の染付が施される。5002・5003とも大正から昭和期の瀬戸・美濃系である。

第Ⅳ層出土遺物

土師質土器 (Fig.165-5004)

5004は杯で、口径11.7cm、底径7.2cm、器高3.7cmを測る。器面は著しく摩耗しているが、体部は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りとみられる。

第Ⅴ層出土遺物

備前焼 (Fig.165-5005)

5005は播鉢とみられるが、残存部に摺目はみられない。口径28.6cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で、ロクロ目が顕著に残る。口縁部には重ね焼痕がみられ、口縁部は灰白色、体部はにぶい橙色を呈す。口縁部外面に2条の凹線が巡る。口縁下顎部が張出し、内面に丸味をもった突起が付く。17世紀前半のものとみられる。

青磁 (Fig.165-5006)

5006は同安窯系の碗で底径5.4cmを測る。高台は細く直立する。釉は黄味を帯びた緑色釉を高台の一部まで薄く施す。見込には櫛描文が施される。

磁器 (Fig.165-5007~5010)

5007は小振りの丸碗とみられ、底径3.2cmを測る。釉はやや緑味を帯びた透明釉で気泡が入る。外面は畳付までと高台内に薄く施釉しており、畳付は釉ハギを行う。畳付には僅かに砂が付着する。外面はくすんだ青色の草文の染付が施される。17世紀前半の肥前系とみられる。5008も小振りの丸碗とみられ、底径3.2cmを測る。釉はやや緑味を帯びた透明釉で、焼成が甘く透明感がない。畳付は釉ハギを行うが、一部釉が残る。17世紀中葉の肥前系とみられる。

5009は皿で、底径4.6cmを測る。高台が小さく、畳付には砂粒が付着する。全面に透明釉を薄く施

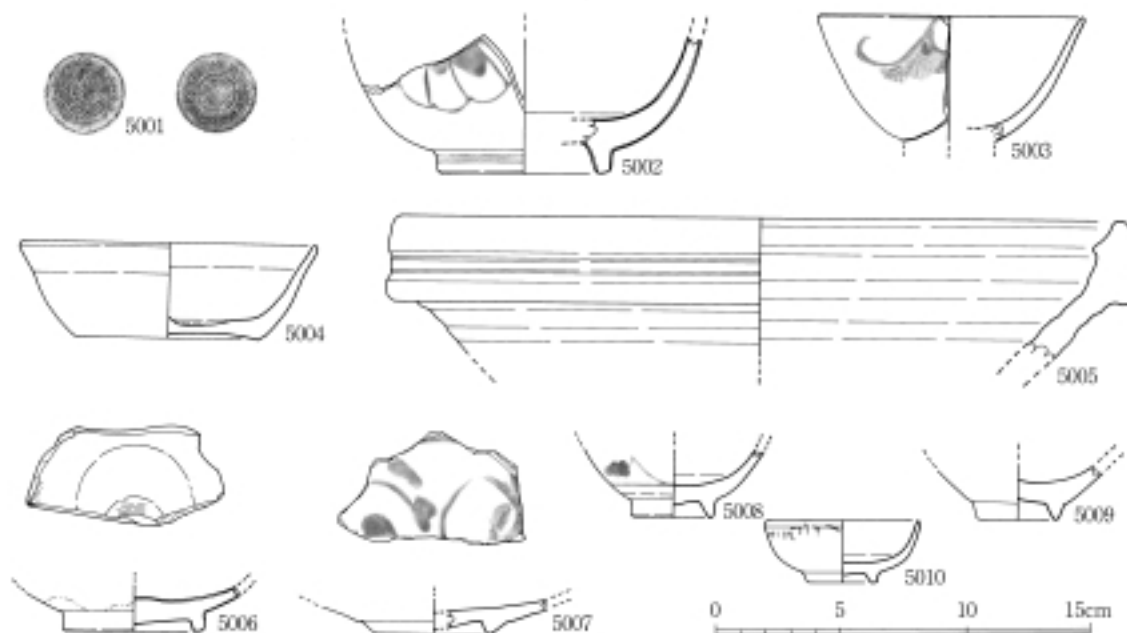


Fig.165 E区第Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ層出土遺物実測図(土師質土器・備前焼・青磁ほか)

5. E区

すが、釉は焼成が甘く透明感が少なく白味を帯びる。内面は灰色味を帯びた唐草文の染付がみられる。1630～1640年頃の有田のものである。

5010は紅皿である。口径6.0cm, 底径2.8cm, 器高2.4cmを測る。断面は荒く、巣が入り、鉄粉も含まれる。釉は畳付を除く全面に透明釉が薄く施されており、貫入が見られる。畳付は釉ハギを行う。外面口縁部近くには緑味を帯びた青色の笹文の染付が見られる。18世紀後半から19世紀である。

第VI層出土遺物

弥生土器 (Fig.166-5011~5026)

5011・5012は壺である。5011は複合口縁壺で、口径12.2cmを測る。著しく摩耗しているため調整は不明である。5012は底部の破片で、底径5.0cmを測る。摩耗しているため調整の不明瞭な部分があるが、内外面とも強いナデ調整を行う。

5013～5019は甕である。5013は口縁部がくの字状に外反するもので、口径16.4cmを測る。著しく摩耗するため調整は不明瞭であるが、外面には僅かにハケ調整が残る。5014は平底の底部の破片で、底径5.0cmを測る。内面は摩耗するため調整は不明瞭であるが、外面は底部近くまでタタキが施される。底部外面には葉の圧痕が見られる。5015～5019は丸味のある平底である。5014は底部から内湾気味に立ち上がるもので、体部外面にタタキ、底部はタタキの後に板ナデ調整、内面は細いハケ調整を行う。5016は体部外面はタタキの後にハケ調整を行うが、その他は摩耗しているため調整は不明である。5017は摩耗するが、体部外面にタタキ、底部にナデ調整を施す。5018・5019は小型のもので、体部外面にハケ調整、底部にナデ調整を施し、内面はナデ調整と指頭圧痕が残る。

5020～5026は鉢である。5020は大型の鉢で、口径21.0cm, 器高8.7cmを測る。丸い底をもち体部は椀状に内湾する。外面にはタタキが施される。5021は小型の鉢で、ほぼ完存する。口径11.5cm, 器高5.7cmを測る。椀状をなし、外面体部下半と内面をハケ調整、外面の口縁部付近はナデ調整を行う。5022は椀状を呈す大型の鉢で、底径5.5cmを測る。底部は平底で、体部との境に沈線状の段を持つ。底部外面には葉の圧痕が見られる。調整は外面がタタキの後にハケ・ナデ調整、内面は体部上半にハケ調整、下半はナデ調整を行う。5023は平底を呈し、底径5.6cmを測る。器壁が非常に厚い。調整は体部外面がタタキの後にナデ調整を施し、底部はナデ調整、内面もナデ調整を施す。5024は平底を呈し、体部との境に緩い綾を有するものである。体部外面はタタキ、底部はナデ調整、内面はハケ・ナデ調整を行う。5025はやや尖り気味の底部に、直線的に延びる体部を持つものである。摩耗するため調整は不明である。5026は小型の椀状の鉢である。外面はタタキの後にハケ調整を施し、内面はハケ調整とナデ調整を施す。

須恵器 (Fig.166-5027)

5027は壺で、底径3.4cmを測る。体部外面は回転ヘラ削り調整、底部は回転ヘラ切り、内面は回転ナデ調整である。

東播系須恵器 (Fig.166-5028・5029)

2点とも片口鉢である。5028は口径20.3cmを測る小型のものである。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は上下に僅かに拡張する。調整は摩耗するため不明瞭であるが、回転ナデ調整とみら

れる。焼成が甘く、浅橙色を呈す。5029は底径8.8cmを測る。内面は摩耗するため調整は不明瞭であるが、体部外面は回転ナデ調整、底部はナデ調整を行う。

土師質土器 (Fig.166-5030~5034)

5030~5033は杯である。5030は底径6.3cmを測る。口縁部を欠くが、器高は低いとみられる。底部はベタ高台である。摩耗するため調整は不明である。5031は底径7.3cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、成形はロクロ水挽で、内底面にはロクロ目が顕著に残る。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。5032は5031と似た形態を呈す。体部は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。5033は底径4.9cmを測る。内面は回転ナデ調整、外面は回転ナデ調整で部分的にナ

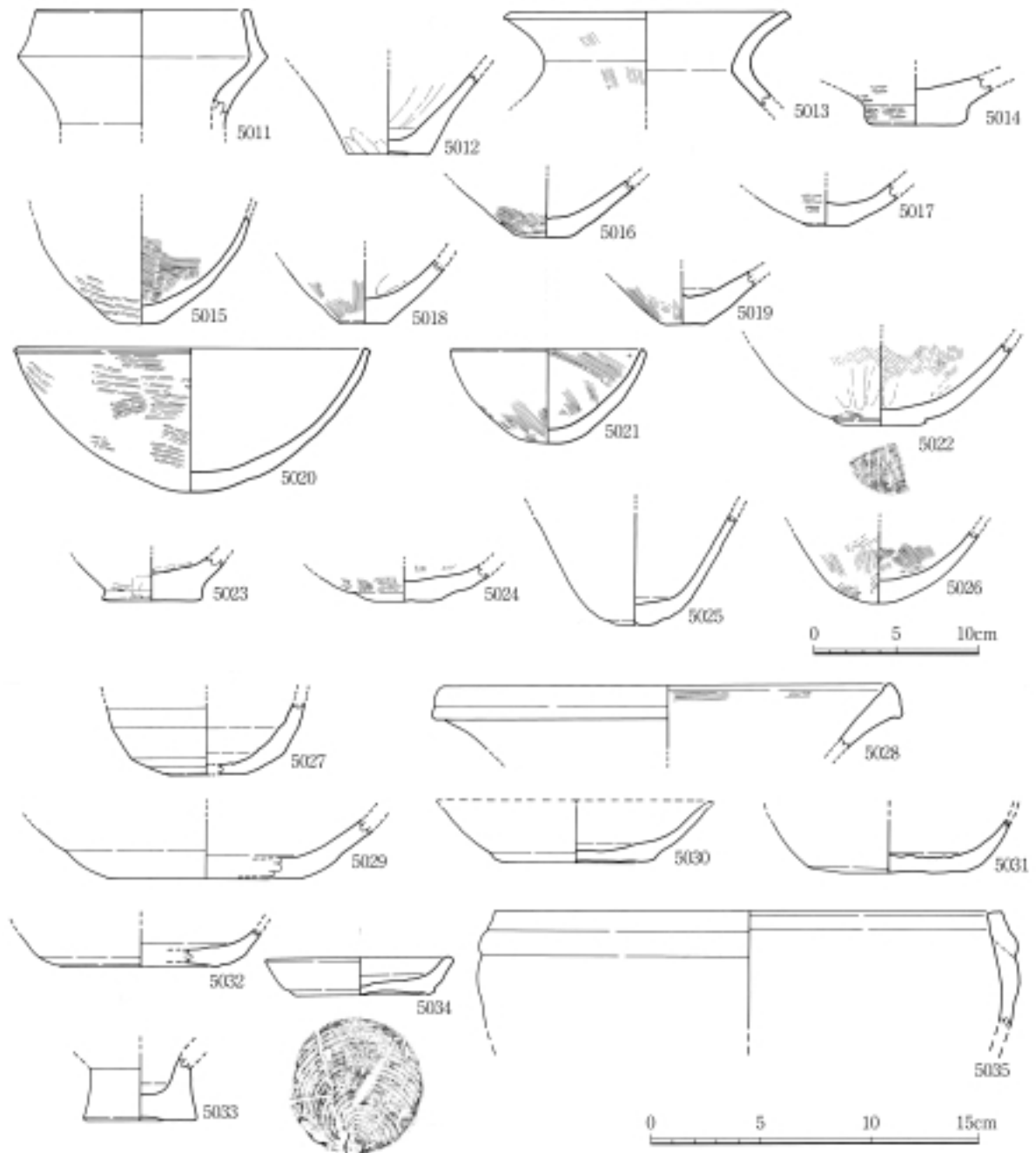


Fig.166 E区第VI層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・東播系須恵器ほか)

5. E区

デ調整を行う。底部の切り離しはヘラ切りである。

5034は小皿で、ほぼ完形である。口径8.3cm, 底径6.2cm, 器高1.7cmを測る。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切り、板状圧痕が付く。

瓦質土器 (Fig.166-5035)

5035は釜で、口径23.0cmを測る。口縁は内湾し、鏝は低い突帯状のものが付く。焼きが甘く灰白色を呈す。

白磁 (Fig.167-5036~5039)

5036~5038は碗である。5036は口径16.6cmを測る。口縁部は強く外反する。釉は灰色を帯びた透明釉を薄く施す。5037は口径14.4cmを測る。口縁端部は僅かに外反する。体部内面には浅い1条の沈線がみられる。釉は若干灰色味を帯びた透明釉を薄く施す。5038は底径6.0cmを測る。高台は低く直立したものである。釉は灰色味を帯びた白色釉を高台付近まで約1mmの厚さに施釉している。見込にはヘラと櫛による文様がみられる。

5039は壺で、やや屈曲した肩部を持つ。耳は1カ所のみ残存する。内面にはロクロ目が顕著に残る。釉は内外面とも緑色を帯びた透明釉を薄く施す。

青磁 (Fig.167-5040~5044)

すべて龍泉窯系の碗である。5040は口径16.1cm, 底径6.0cm, 器高6.3cmを測る。釉は灰色が強い緑

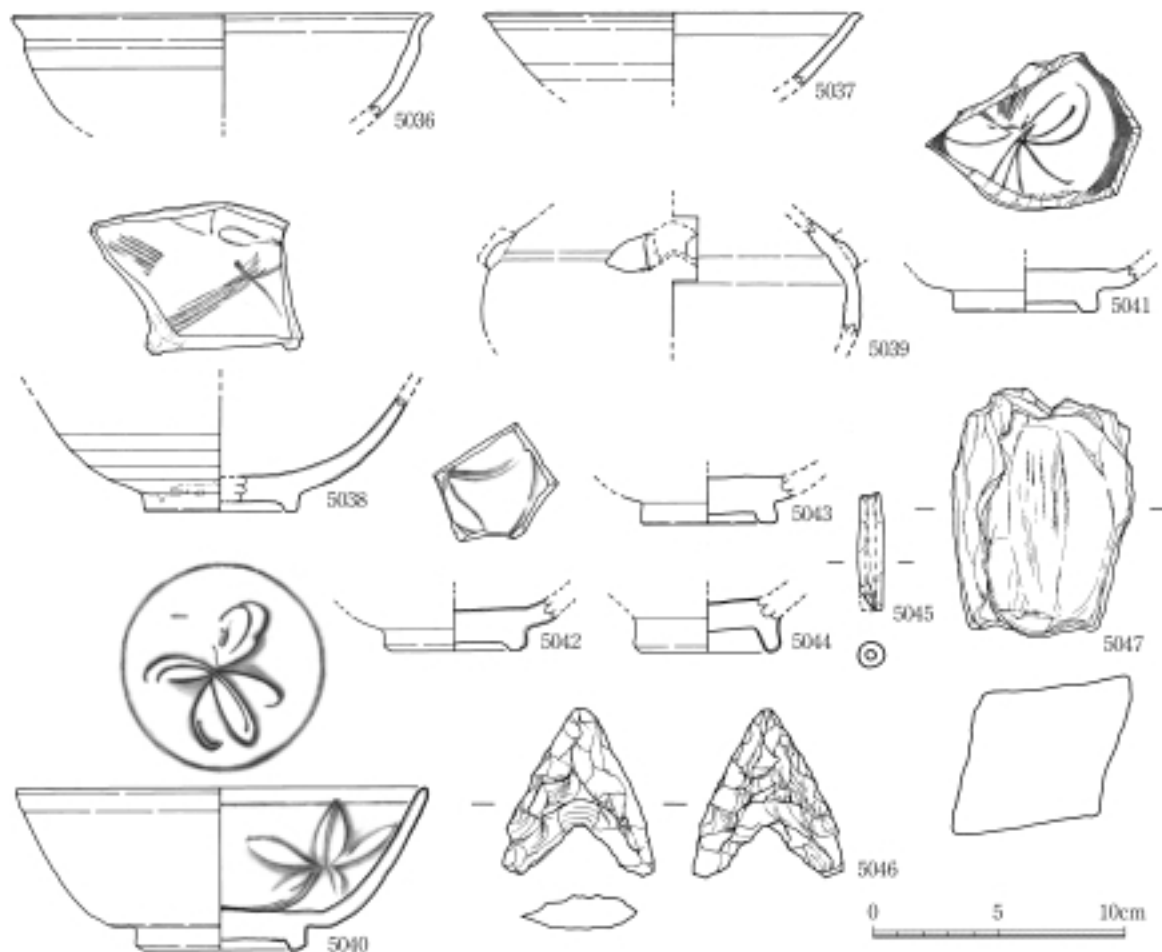


Fig.167 E区第VI層出土遺物実測図(白磁・青磁・土製品ほか) 石鏝は原寸

色釉を施すが、釉には透明感が少ない。外面は高台内まで一部施釉する。内面には劃花文が施される。5041は底径5.5cmを測る。釉は青味を帯びた緑色釉を薄く施釉する。畳付は釉ハギするが、一部畳付、高台内まで施釉する。見込には蓮華文が施される。5042は底径5.0cmを測る。高台は太くハの字状に開く。釉はオリーブ色の釉を接地面まで約1mmの厚さに施す。見込には草文とみられる文様を有する。5043は底径5.2cmを測る。釉は黄味を帯びた緑色釉を高台の外面まで薄く施す。5044は底径5.2cmを測る。釉は薄い緑色釉を高台の内側まで施す。

土製品 (Fig.167-5045)

5045は土錘で一部欠損する。全長4.6cm, 全幅1.0cm, 口径0.4cmを測る。全面ナデ調整である。

石製品 (Fig.167-5046・5047)

5046は石鏃で、完形である。二等辺三角形を呈し、抉りは深い。石材はチャートで、赤褐色を呈す。

5047は砥石で、大半を欠損する。残存部で1面使用する。石材は砂岩である。

第Ⅶ層出土遺物

弥生土器 (Fig.168-5048~5055)

5048は壺で底径2.8cmを測る。器壁の厚い底部からやや内湾気味に立ち上がる。体部外面は細かいハケ調整、内面はハケ調整とナデ調整を施す。底部外面は摩耗するが、ナデ調整とみられる。

5049~5052は甕である。5049は口径15.6cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し、口径より胴径の方が大きい。外面は口縁部までタタキが施され、その後荒い縦方向のハケ調整、内面は口縁部が荒いハケ調整、体部が細かいハケ調整を行う。5050は頸部がくの字状に屈曲するもので、器壁が薄い。口径は16.9cmを測る。調整は5049と同様であるが、部分的に指頭圧痕が見える。5051は小型の甕の頸部である。摩耗しているため調整は不明瞭であるが、体部外面に僅かにタテ方向のハケ調整が残存する。5052は小型の甕の底部で、底径2.8cmを測る。外面は細かいハケ調整で、底部はその後ナデ調整、内面はナデ調整を施す。

5053~5055は鉢である。5053は口径10.6cm, 底径3.7cm, 器高8.4cmを測る。底部は平底であるが、口縁に対してかなり歪む。外面は全面ナデ調整、内面はハケ調整である。5054・5055は椀状の鉢である。5054は口径11.3cm, 器高5.3cmを測る。外面にはタタキを施した後に底部のみナデ調整を加える。内面は口縁部に部分的にハケ目がみられ、体部と底部はナデ調整を施す。外面には一部黒斑が見られる。5055は口径10.8cm, 器高6.2cmを測る。口径に対して器高が高く、やや深いものである。摩耗し剥離しているため外面の調整は不明瞭であるが、僅かにタタキ目が残る。口縁部はヨコナデ調整、体部内面はハケ調整、底部内面はハケ調整を施す。

須恵器 (Fig.168-5056・5057)

5056は杯身である。口径10.7cm, 器高3.4cmを測る。立ち上がりは低く内傾し、端部を丸く仕上げる。底部外面には回転ヘラ削り調整、口縁部から内面にかけて回転ナデ調整を施す。5057は壺で、底径12.4cmを測る。高台は直立したものが付く。調整は回転ナデ調整で、底部外面は回転ヘラ切りである。

鉄製品 (Fig.168-5058)

5058は短刀で、残存長13.0cm, 全幅2.7cmを測る。錆化が進んでおり、3個体に割れている。木質部

5. E区

が付着しており、鞘に入っていたとみられる。

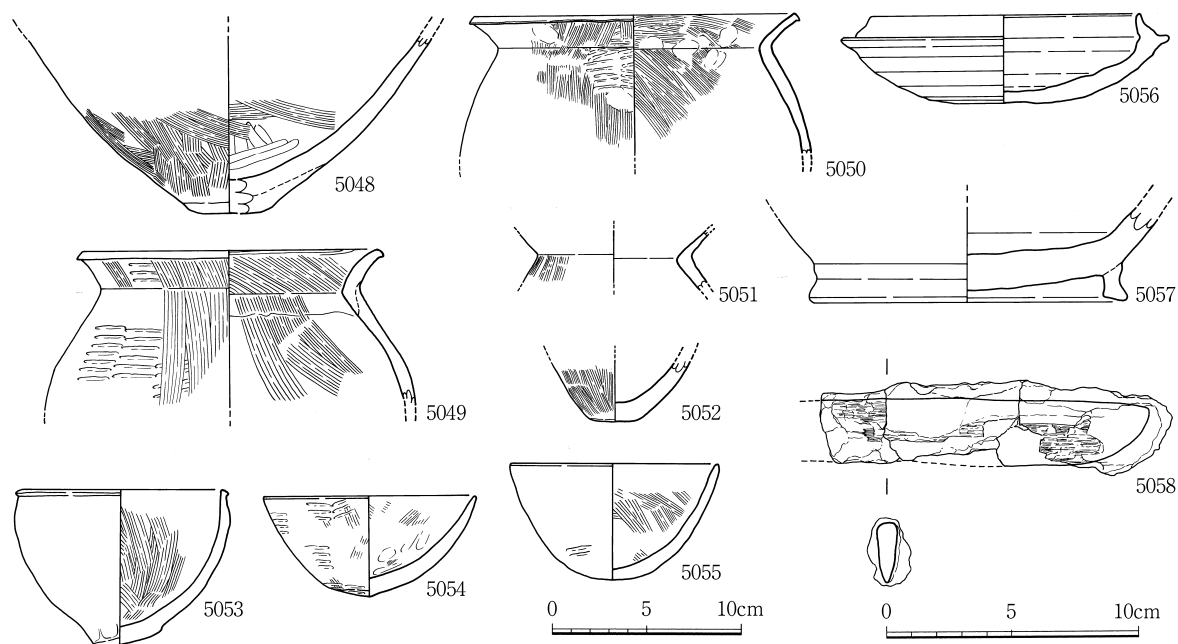


Fig.168 E区第Ⅶ層出土遺物実測図(弥生土器・須恵器・鉄製品)

第Ⅸ層出土遺物

弥生土器 (Fig.169-5059~5069)

5059~5062は壺である。5059は口径14.6cmを測る。口縁部は直線的に伸び、胴部は球形に近い形態である。器面は著しく摩耗しており、調整は不明瞭な部分が多いが、外面にはタタキ目、内面にはナデ調整の痕が僅かに残る。5060は最大径が胴部の中位より下にある。器面は非常に荒れており、外面はタタキ目、内面にはハケ目が僅かに残るのみである。5061は口径9.2cmを測る。胴部は肩が張らず、緩やかに口縁部に至る。口縁部は内湾気味にほぼ垂直に立ち上がり、端部は内傾する。調整は外面がヨコ方向のタタキ、内面がハケ調整とナデ調整を施す。口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。5062は口径15.9cmを測る。口縁は長く、ラップ状に外反し、端部は若干肥厚する。調整は外面にハケ調整がみられる。

5063~5068は甕である。5063は口径15.9cmを測る。頸部は若干直立し、短い口縁部に至る。外面は口縁部までタタキ目が見られ、その後にハケ調整を行うが、内面は著しく摩耗するため調整は不明である。胴部外面の下半に煤が付着する。5064~5066はくの字状に屈曲する頸部を有する。5064は口径17.7cmを測る。摩耗するため調整は不明瞭であるが、外面には僅かにタタキ目が残る。5065は口径15.4cm, 5066は16.0cmを測る。調整は口縁部の内面に僅かにハケ調整が残るのみである。5067は底径3.3cmを測る。外面はハケ調整、底部はタタキ、内面はハケ調整を行う。5068は小型の甕で、底径2.1cmを測る。外面は底部まで荒いタタキ目、内面はナデ調整の痕と指頭圧痕が見られる。

5069は鉢で、口径11.7cm, 底径1.9cm, 器高9.8cmを測る。摩耗しているが、外面は底部までタタキ、内面はナデ調整を施す。

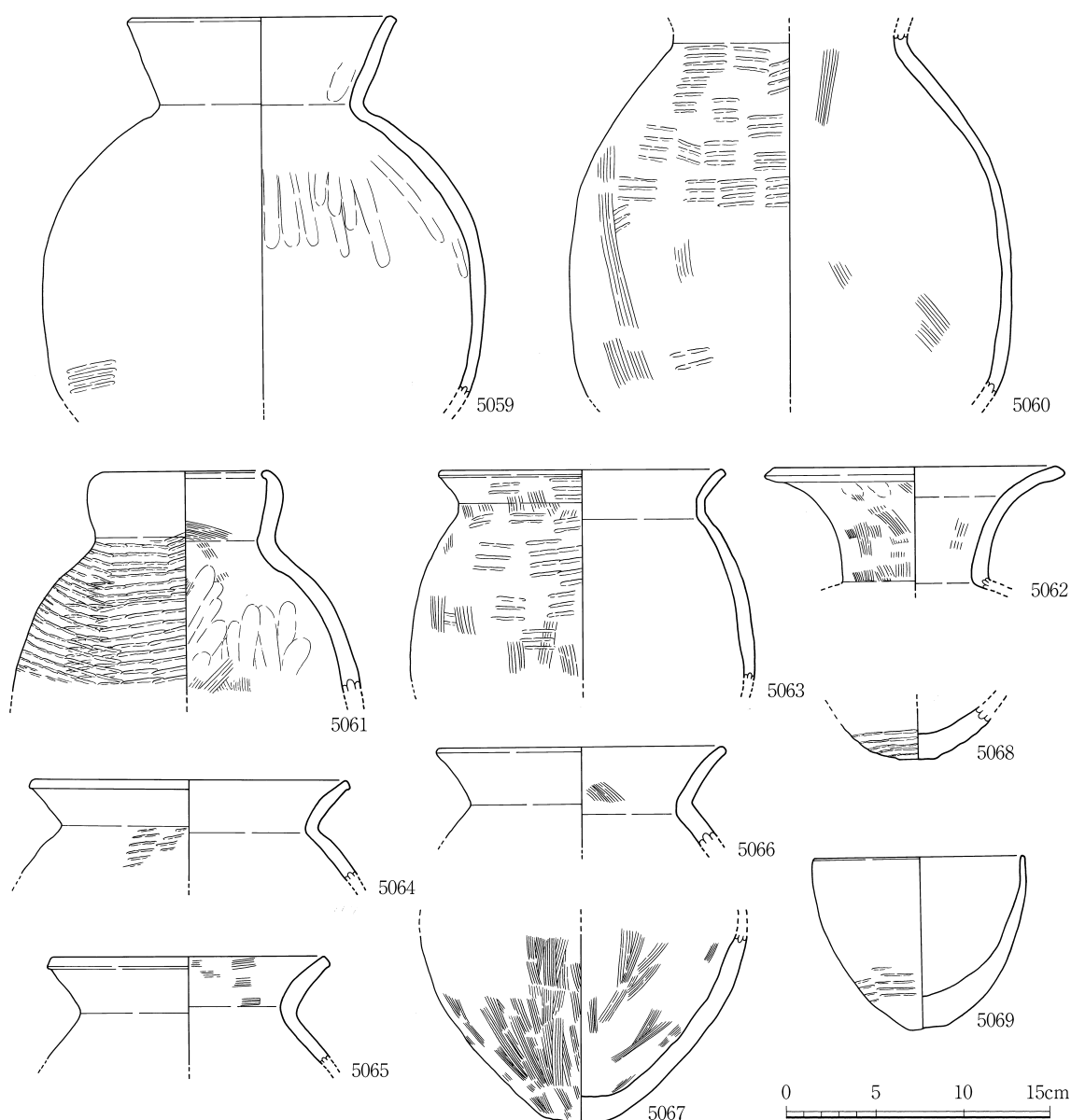


Fig.169 E区第IX層出土遺物実測図(弥生土器)

第X層出土遺物

弥生土器 (Fig.170-5070~5077)

5070は壺である。口縁部は短く外反し、端部を若干拡張し、浅い凹線が巡る。外面は頸部にハケ調整、口縁部にヨコナデ調整を行うが、内面は摩耗するため調整は不明である。

5071~5074は甕である。5071は口径17.0cm、胴径18.1cm、底径2.8cm、器高25.1cmを測る。外面は口縁部にヨコナデ調整、体部はタタキ後にハケ調整、底部はナデ調整を行う。内面は口縁部と体部にハケ調整、底部にナデ調整を行う。外面の口縁部と胴部は煤が付着する。5072は口径16.7cmを測る。口縁部は直線的で大きく外傾する。調整は体部外面をタタキ後にハケ調整、その他はナデ調整である。5073は口径24.4cmを測る。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に延びる。外面の口縁部と体部はタタキの後にハケ調整、内面は摩耗するため調整は不明である。口縁部から頸部にかけて部

5. E区

分的に煤が付着する。5074は底部で、丸底に近い。調整は体部外面が細かいハケ調整、底部はタタキ目が残る。内面は体部がハケ調整、底部がナデ調整である。

5075・5076は鉢である。5075は大型のもので、器壁が厚い。口径は32.3cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は短く直線的に延びる。口縁部外面はタタキの後に非常に細かいハケ調整、体部は連続した荒いタタキ、内面は非常に細かいハケ調整を行う。5076は口径17.5cm、器高6.3cmを測る。椀状で丸底を呈す。調整は体部内外面が幅約6mmの荒い磨き調整で、口縁部はヨコナデ調整、底部内面はナデ調整である。

5077は器台で、口径8.6cm、底径5.0cm、器高6.8cmを測る。杯部は皿状で、脚部はハの字状に開く。調整は内外面ともナデ・指頭圧調整である。

石製品 (Fig.170-5078)

5078は砥石で、完存している。1面を使用している。石材は砂岩である。

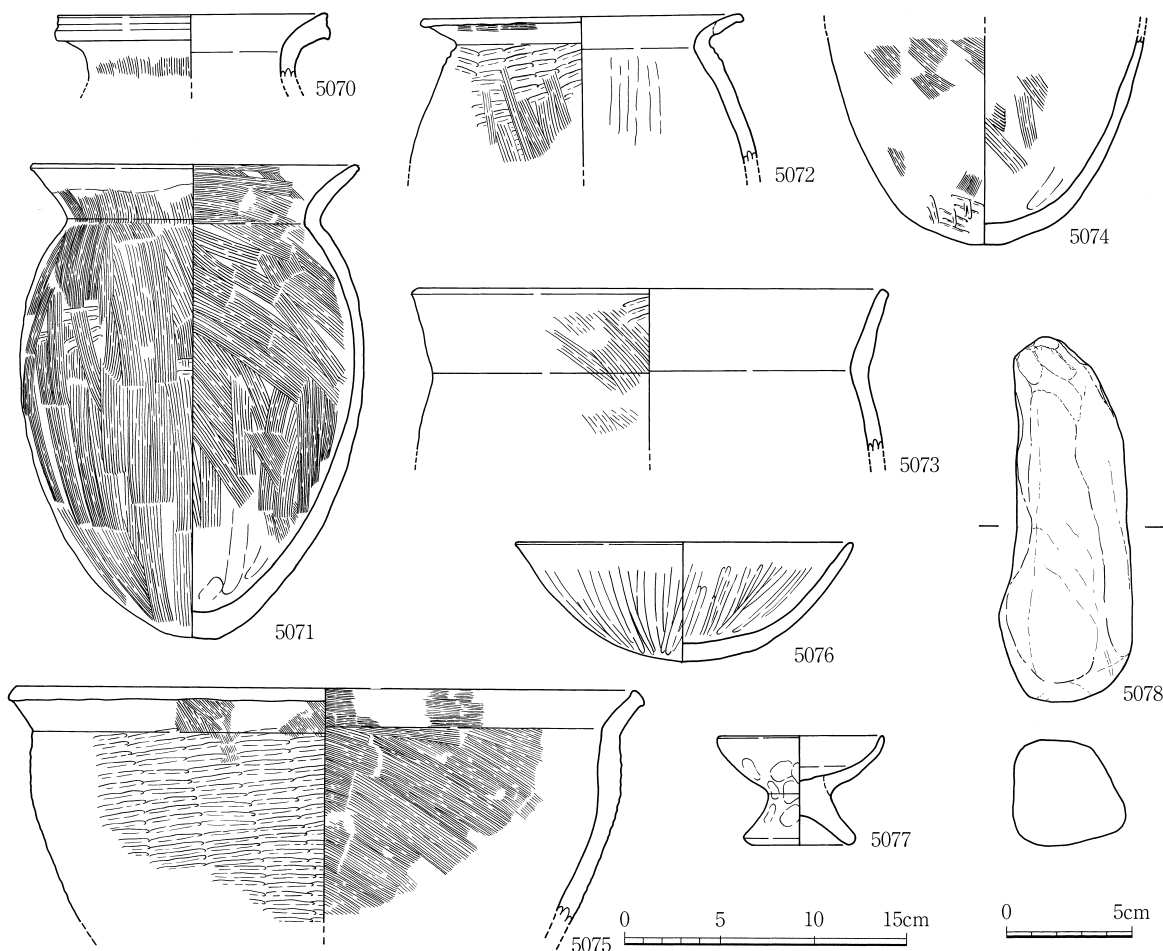


Fig.170 E区第X層出土遺物実測図(弥生土器・石製品)

第XI層出土遺物

弥生土器 (Fig.171-5079~5083)

5079・5080は壺である。5079は口径12.9cmを測る。口縁部は長くやや内湾気味に延びる。調整は摩耗するため不明である。5080は底径6.4cmを測る。外面は荒いハケ調整、底部は摩耗するがナデ調整

とみられる。内面はナデ調整と指頭圧痕が部分的に残る。

5081・5082は甕である。5081は口径15.9cmを測る。器面は摩耗するが、外面はタタキ、内面はハケ調整とナデ調整が施される。

5082は底径3.9cmを測る。胎土は比較的精良である。調整は外面がタタキの後にハケ調整、内面はナデ調整を施す。

5083は鉢で、底径2.8cmを測る。小型であるが、底部の器壁は厚い。調整は体部外面がタタキの後に細いハケ調整、底部はナデ調整、内面はナデ・指頭圧調整を行う。

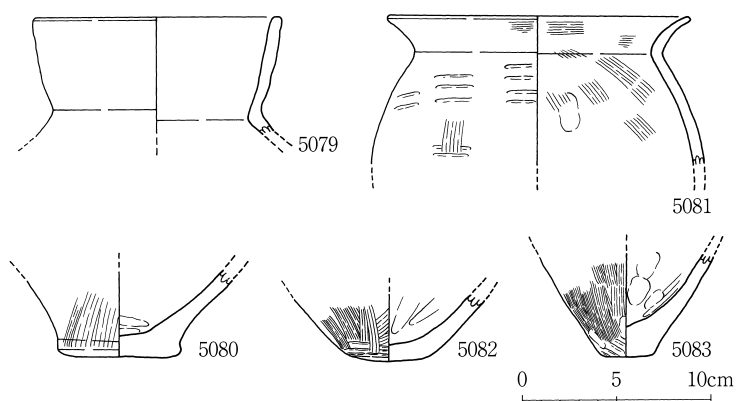


Fig.171 E区第XI層出土遺物実測図(弥生土器)

(3) 遺構と遺物

① 弥生時代1

弥生時代1と弥生時代2で出土した遺物には時期差がみられないが、第X層上面以下で検出した遺構を弥生時代1、第X層上面で検出した遺構を弥生時代2とした。第X層以下はトレンチ(TR-1・TR-2)を設定し、部分的に調査を行った。

i 祭祀遺構

SF-501 (Fig.173)

TR-1内で確認された遺構で、第XII層上面で検出した。この遺構は10~20cm大の石が径約3mの

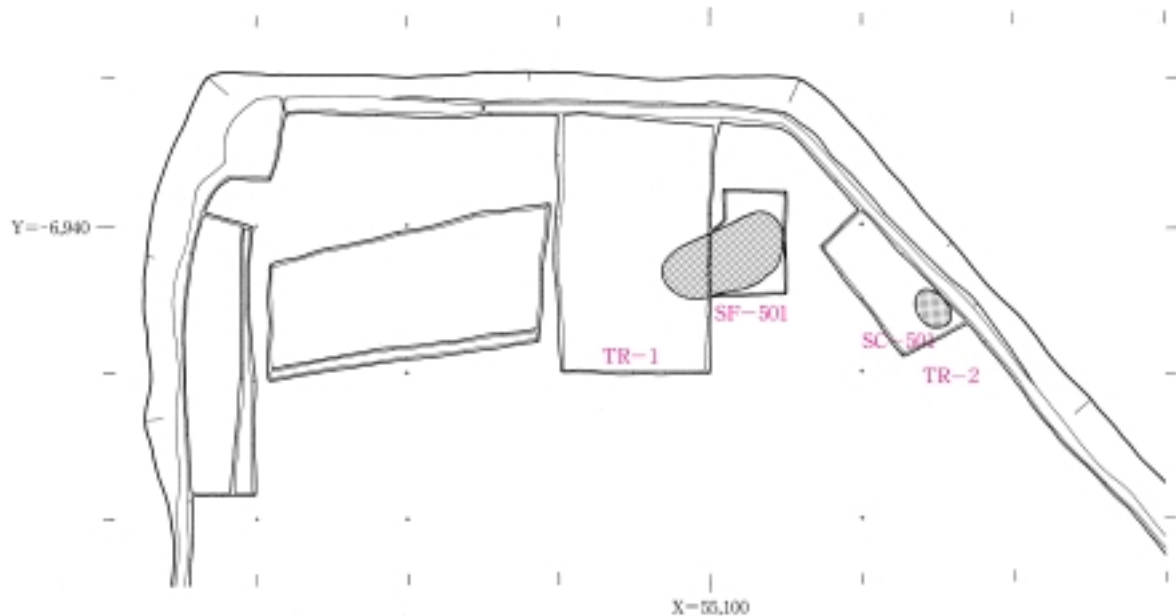


Fig.172 E区弥生時代1遺構平面図(S=1/200)

5. E区

範囲に集中していたもので弥生土器などもまとめて出土した。石は河原石がほとんどであるが、中には叩石や砥石など自然石ではないものも含まれており、また、一部配列されたように同じ大きさの石が並んでいるところもあることから祭祀遺構とみられる。遺構が検出されたところは、三島神社のある残丘の裾部にあたり、緩斜面となっている。この残丘が祭祀の対象になった可能性も考えられる。出土遺物には弥生土器片など約870点がみられ、弥生土器4点(5084~5087)、石製品4点(5088~5091)が図示できた。



Fig.173 SF-501 遺物出土状態

出土遺物

弥生土器 (Fig.174-5084~5087)

5084・5085は壺である。5084は底径9.7cmを測る。器壁は厚く、体部は底部から直線的に延びる。摩耗しているため調整は不明瞭であるが、外面はタタキ、内面は底部にハケ調整、体部にナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。5085は底径6.0cmを測る。体部はやや開き気味に立ち上がる。外面は細いタタキの後に細いハケ調整、底部はナデ調整、内面はナデ調整を施し、部分的に指頭圧痕が残る。

5086・5087は甕である。5086は小型の甕で底径6.1cmを測る。底部は平底で、内湾して立ち上がる。調整は内外面ともナデ調整で、底部外面と胴部の境には指頭圧痕が残る。胎土は砂粒をほとんど含まず、比較的精良である。5087は尖底のものである。外面はタタキの後にハケ調整、底部はナデ調整、内面はナデ調整を施す。

石製品 (Fig.174-5088~5091)

5088は砥石である。石材は砂岩で、1面使用している。被熱しており浅橙色を呈す。

5089~5091は叩石である。5089は花崗岩で、1面に弱い敲打痕がみられる。5090は花崗岩で、1面に敲打痕がみられる。一部被熱する。5091は一部欠損する。石材は花崗岩で、1面に敲打痕がみられる。

ii 土器集中遺構

SC-501

第X層中で確認された遺構で、明確な掘方はないが、径約1mの範囲に弥生土器が集中していた。出土遺物には弥生土器片約40点がみられ、弥生土器2点(5092・5093)が図示できた。

出土遺物

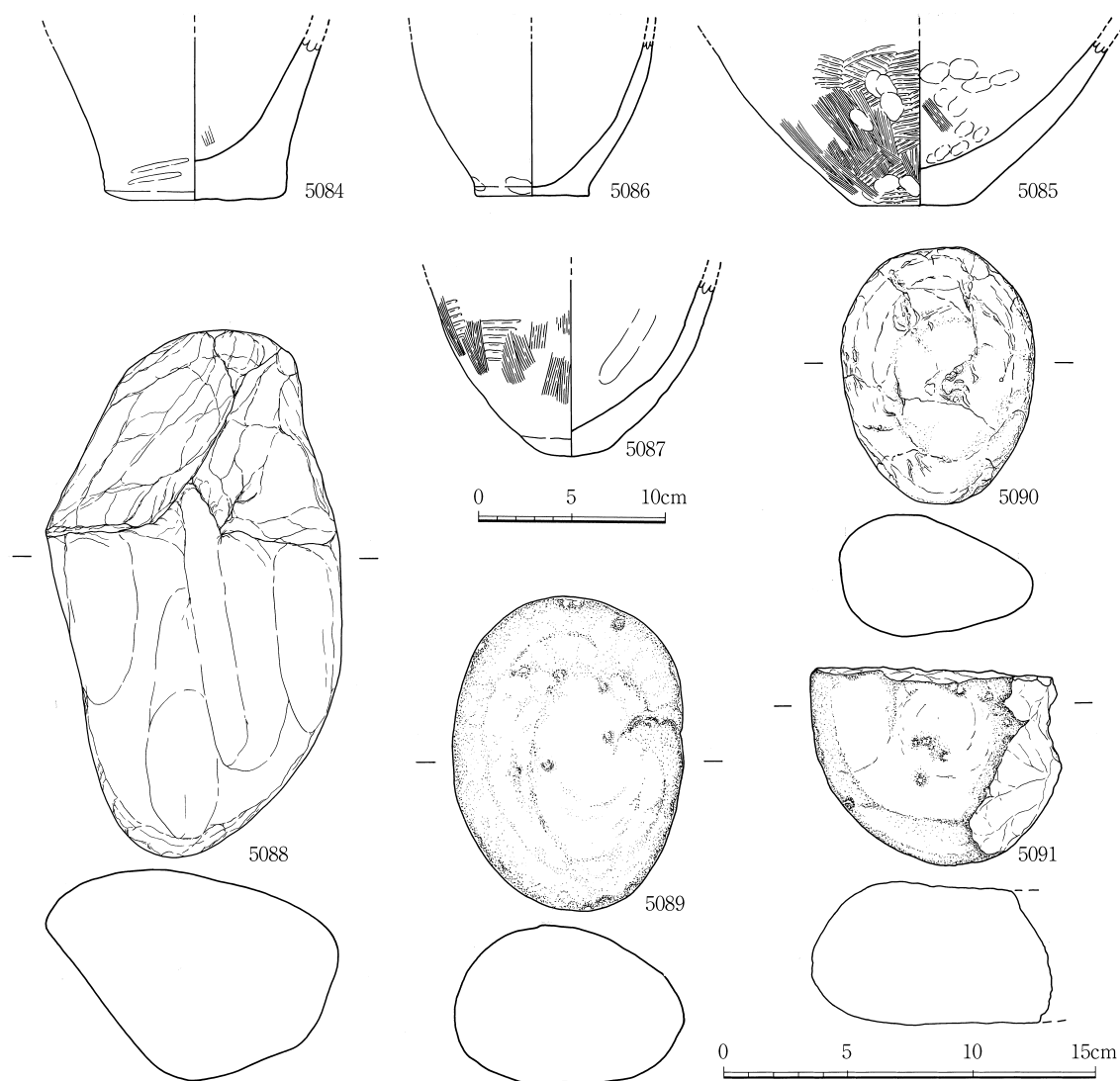


Fig.174 SF-501 出土遺物実測図

弥生土器 (Fig.175-5092・5093)

5092・5093は甕である。5092は口径14.5cm, 底径3.0cm, 器高26.3cmを測る。底部は小さな平底である。体部外面はタタキの後にハケ調整, 口縁部はタタキの後にナデ調整, 底部は器面が摩耗するがナデ調整とみられる。内面はハケ調整で, 口縁部の上方はヨコ方向のハケ調整を施す。口縁端部は水平ではなく若干湾曲する。5093は口径13.8cmを測る。底部を欠損するが, 尖底になるものとみられる。外面はタタキの後に丁寧なハケ調整, 内面は口縁部から体部上半がハケ調整, 下半にナデ調整を施す。

② 弥生時代2

i 竪穴状遺構

ST-501

調査区の南西部で検出した一辺4.15m, 深さ約14cmを測る方形の竪穴状遺構である。弥生時代の遺物包含層は削平されており, また, 攪乱を受けていたこともあり, 遺構の残存状態は良好とは言

5. E区

えない。床面でピットを確認したが、いずれも浅く明確なものではない。出土遺物には弥生土器片約15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

ii 土坑

SK-501

調査区東部の斜面部で検出した円形の土坑で、径1.05 m、深さ12 cmを測る。断面形は舟底状を呈し、埋土は黒色シルトであった。出土遺物には弥生土器片約50点がみられ、弥生土器1点(5094)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.178-5094)

小型の甕で、底径3.5 cmを測る。底部は平底でやや突起する。外面は細いタタキ、内面はハケ調整を施す。

SK-502 (Fig.176)

調査区東部の斜面部で検出した不整楕円形の土坑で、一部近世の遺構に切られる。残存する部分で、長径1.39 m、短径1.03 m、深さ13 cmを測る。埋土は2層に分れ、上層が黒褐色シルト、下層が灰黄褐色シルトに黒褐色シルトを僅かに含むものであった。出土遺物には弥生土器片約25点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-503

調査区の南東部で検出した溝状の土坑で、全長3.02 m、幅0.46 m、深さ8 cmを測る。長軸方向はN-86°-Eを示す。断面形は舟底状を呈し、埋土は黒色シルトで灰黄褐色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片約20点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-504

調査区の南東部で検出した溝状の土坑で、全長2.84 m、幅0.32 m、深さ10 cmを測る。長軸方向はN-84°-Eで、SK-503とはほぼ同じ方向を示す。断面形は舟底状を呈し、埋土は黒色シルトで灰黄褐色シルトのブロックを僅かに含むものであった。出土遺物は弥生土器片1点のみで、図示できなかった。

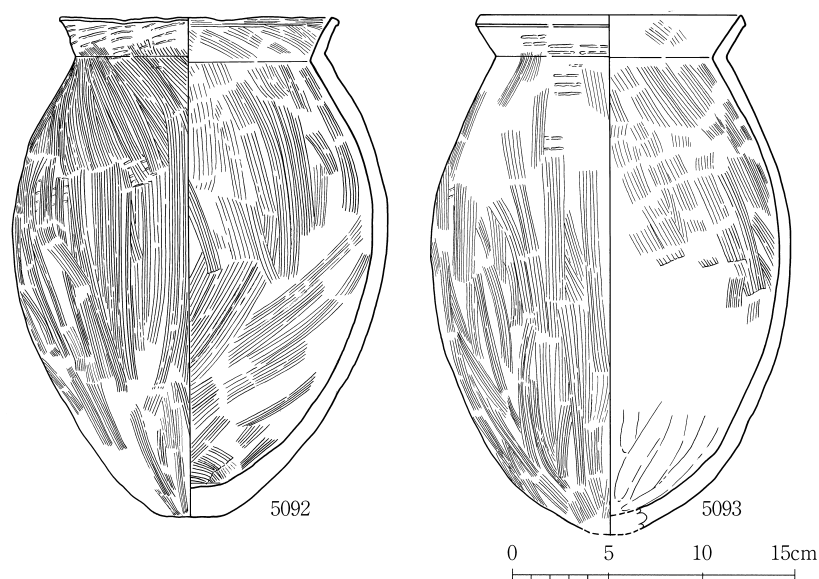


Fig.175 SK-501出土遺物実測図

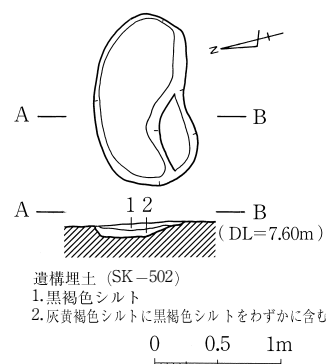


Fig.176 SK-502

SK-505

調査区の南東部で検出した隅丸方形を呈す土坑で、一部SK-504に切られていた。長辺1.37m、短辺1.15m、深さ7cmを測る。長軸方向は北を向き、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒褐色シルトで灰黄褐色シルトのブロックを含むものであった。出土遺物は弥生土器片1点のみで、図示できなかった。

SK-506

調査区の北部で検出した楕円形の土坑で、長径1.15m、短径0.69m、深さ7cmを測る。長軸方向はN-47°-Eで、断面形は皿状を呈す。埋土は黒褐色粘土質シルトで灰黄褐色シルトのブロックを含むものであった。出土遺物は弥生土器片3点で、弥生土器(5095)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.178-5095)

5095は小型の甕の底部で、尖底である。外面はタタキを行うが、内面は摩耗するため調整は不明である。

SK-507 (Fig.177)

SK-506の南側で検出した不整楕円形の土坑で、長径1.22m、短径0.97m、深さ12cmを測る。長軸方向はN-11°-Eで、断面は舟底状を呈す。埋土は黒褐色粘土質シルトに灰黄褐色シルトのブロックを含む。出土遺物には刀子があるが、図示できなかった。

SK-508 (Fig.177)

SK-507の南側で検出した不整楕円形の土坑で、長径1.29m、短径1.00m、深さ14cmを測る。長軸方向はN-14°-Wで、断面形は皿状を呈す。埋土は黒褐色粘土質シルトに灰黄褐色シルトのブロックを含む。出土遺物は皆無であった。

SK-509 (Fig.177)

調査区の北部で検出した不整楕円形の土坑で、長径1.25m、短径0.95m、深さ12cmを測る。長軸方向はN-4°-Eで、断面形は舟底状を呈す。掘方は明瞭ではないが、弥生土器がまとも出土した。埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片約90点がみられ、弥生土器5点(5096~5100)が図示できた。

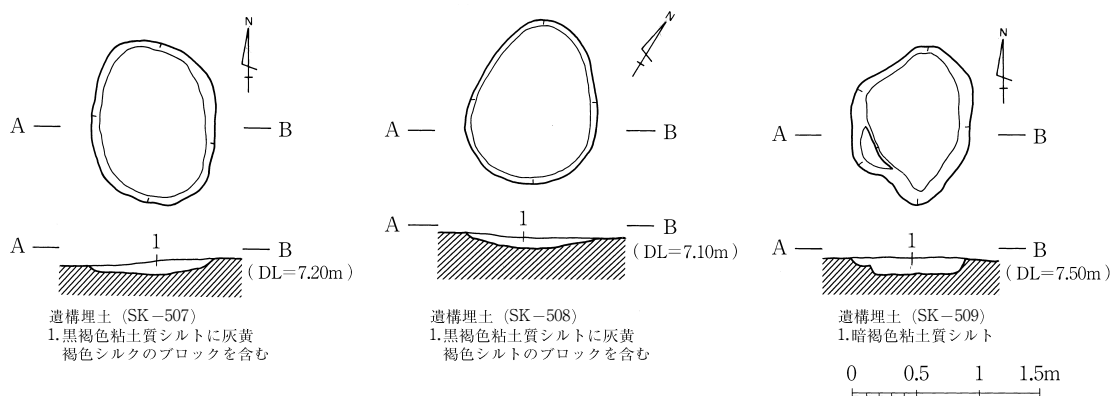


Fig.177 SK-507~509

5. E区

出土遺物

弥生土器 (Fig.178-5096~5101)

5096~5100は甕である。5096は口径18.7cm, 底径4.4cm, 器高34.4cmを測る。底部は平底で, 若干突起する。口縁部は底部に対して著しく傾く。外面はタタキ後にハケ調整, 口縁部はタタキの後にナデ調整を施す。底部は僅かに残存するのみで調整は不明である。内面は胴部がナデ調整, その他はハケ調整を施す。5097は口径16.2cmを測る。底部は欠損する。外面はタタキの後に荒いハケ調整, 口縁部はヨコナデ調整を施す。内面は口縁部から頸部に荒いハケ調整, その他はナデ調整である。5098は口径15.0cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し, 端部を丸く仕上げる。外面は口縁部までタタキを施し, 内面は摩耗するため不明である。外面の口縁部と体部の一部に煤が付着する。5099は口

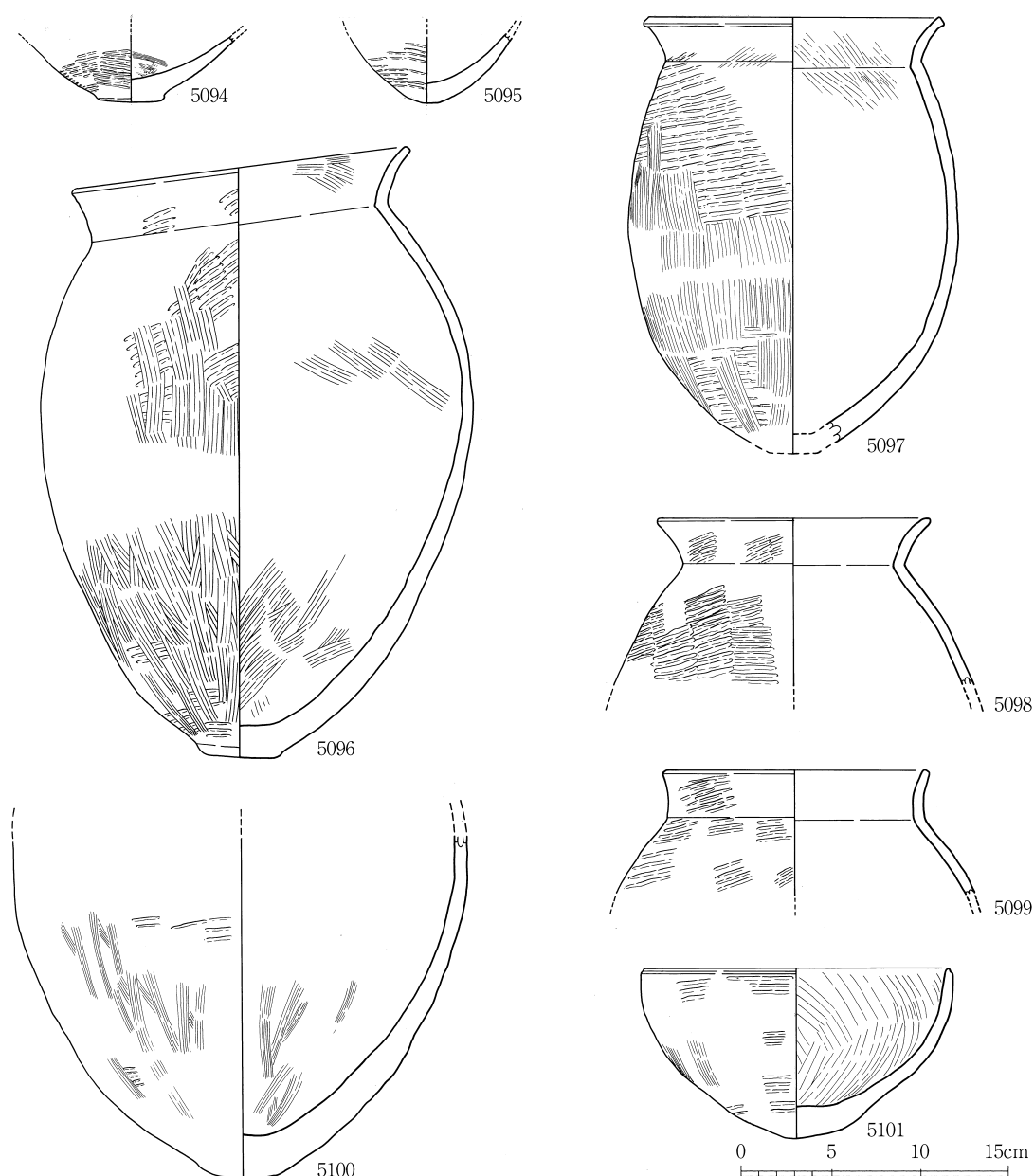


Fig.178 SK-501・506・509出土遺物実測図

径14.4 cmを測る。口縁部は短く、ほぼ直立する。外面は口縁部までタタキを施す。内面は著しく摩耗するため調整は不明である。5100は尖底の底部を有する。外面はタタキの後にハケ調整、底部はタタキの後にナデ調整、内面は胴部がナデ調整、底部がハケ調整をそれぞれ施す。

5101は鉢である。口径は17.0 cm, 器高9.5 cmを測る。底部は尖底で、やや器壁が厚い。口縁端部はヨコナデ調整、体部はタタキの後に部分的にハケ調整、内面は底部から放射線状に上下2段に荒いハケ調整を施す。

iii 溝跡

SD-501

調査区の南部で検出したL字状の溝で、南は調査区外に続く。検出長7.30 m, 幅30 cm, 深さ10 cmを測る。長軸方向は東西がN-85°-E, 南北がN-15°-Wを示す。基底面はコーナー部分が最も低い。断面形は舟底状を呈し、埋土は黒色シルトで黄色粘土質シルトのブロックを含むものであった。出土遺物には弥生土器片9点, 須恵器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-502 (Fig.179)

調査区の北西部で検出した溝跡である。検出長10.40 m, 幅43 cm, 深さ21 cmを測る。長軸はN-77°-Eを示し、基底面は西から東へ傾斜する。断面形は舟底状を呈し、埋土は暗褐色粘土質シルトであった。出土遺物は弥生土器片約25点があるが、図示できるものはなかった。

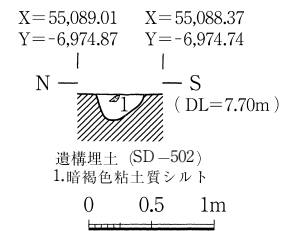


Fig.179 SD-502

iv 性格不明遺構

SX-501

調査区中央部で検出した隅丸方形の遺構で、長辺3.40 m, 短辺2.70 m, 深さは2~15 cmを測り、基底面は凹凸がある。客土直下で検出されたため、削平を受けているとみられる。出土遺物には弥生土器片約50点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

v 土器集中遺構

SC-502 (Fig.180)

調査区東部で検出された遺構で、長径1.80 m, 短径0.90 mの範囲に土器が集中していた。明確な掘方はなく、遺物包含層がレンズ状に落ち込んだ部分に遺物が堆積する状態であった。出土遺物には弥生土器片約700点がみられ、弥生土器16点 (5102~5117) が図示できた。

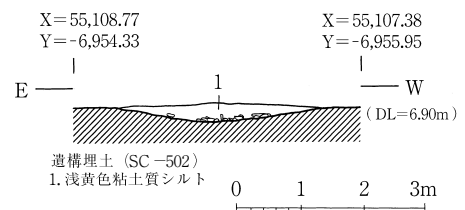


Fig.180 SC-502

出土遺物

弥生土器 (Fig.181-5102~5117)

5102~5104は壺である。5102は口縁部が長く、大きく外反するもので、口径19.8 cmを測る。器面が荒れているため調整の不明瞭な部分が多いが、外面の頸部にハケ調整、口縁端部はヨコナデ調整

5. E区

を施す。5103は口径12.7cmを測る。口縁部は短く直線的に伸び、肩は張らない。調整は外面の肩部にタタキ、内面に強いナデ調整を施すが、著しく摩耗しているため調整の不明瞭な部分が多い。5104は口縁部が短く外反するもので、口径15.0cmを測る。調整は内外面とも荒いハケ調整である。

5105～5113は甕である。頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は直線的または外反気味に短く延びるものである。5105は口径16.8cmを測る。口縁部は直線的に伸び、胴部が張り球形に近い形態である。外面はタタキの後に部分的にハケ調整、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ調整を施す。外面の体

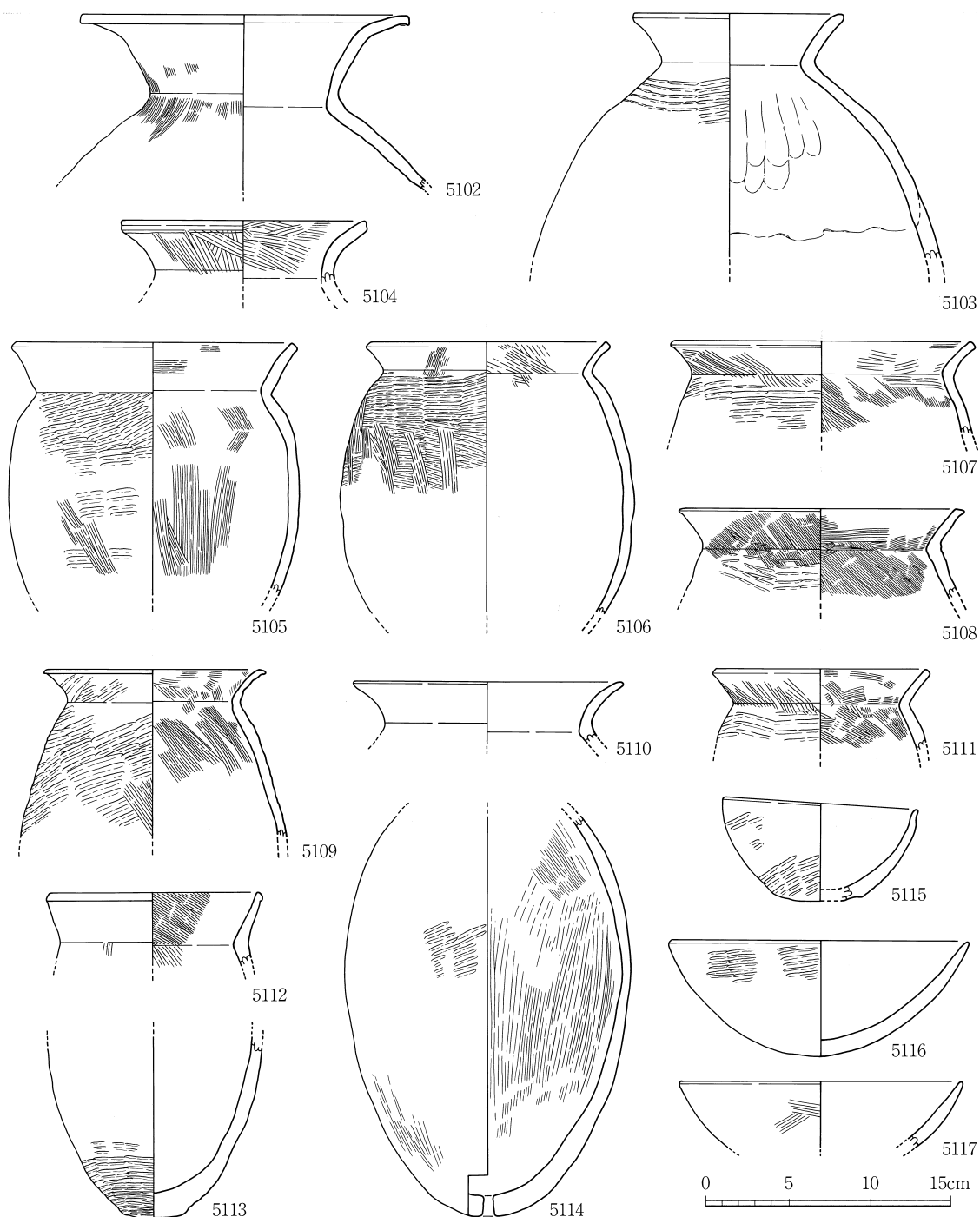


Fig.181 SC-502出土遺物実測図

部には煤が付着する。5106は口径14.2cmを測る。外面は細いタタキの後にハケ調整, 口縁端部はヨコナデ調整, 内面は口縁部, 頸部にハケ調整, その他は丁寧なナデ調整を施す。5107は口径18.0cmを測る。体部外面はタタキ, その他はハケ調整を施す。内面の調整は口縁部が荒いハケ調整, 体部が細いハケ調整を施す。5108は口径16.1cmを測る。外面のタタキは頸部まで施し, その後口縁部, 頸部には細いハケ調整を加える。内面は細いハケ調整がみられる。5109は口径13.0cmを測る。口縁部は短くやや外反するもので, 肩はあまり張らない。外面は口縁部まで斜め方向の連続したタタキを施し, その後一部にハケ調整を加える。内面はハケ調整を施す。5110は外反する口縁部を有するもので, 口径16.1cmを測る。摩耗するため調整は不明瞭である。5111は口径12.6cmを測る小型のものである。外面はタタキの後に口縁部から頸部にかけてハケ調整を施す。内面は細いハケ調整がみられる。5112は口径12.6cmを測る小型のものである。口縁部は長く, 直線的である。外面は摩耗するため僅かにハケ調整が残るのみであるが, 内面は密に細いハケ調整を施す。5113は平底風の底部で, 底径3.8cmを測る。外面は底部まで細いタタキ, 内面はナデ調整を施す。

5114は甔である。小さな丸底で, 胴部は倒卵形を呈す。器面は著しく摩耗するが, 外面はタタキ, ハケ調整が僅かに残存し, 底部はタタキの後に径8mmの孔を穿つ。内面は荒いハケ調整である。

5115~5117は鉢である。5115は小型の鉢で, 口径11.7cmを測る。底部は体部と綾を持ち, やや突起した平底である。外面はタタキ, 口縁部はその後にヨコナデ調整を施す。底部にはハケ目が残る。内面はナデ調整を施す。5116は椀状の鉢で, 口径17.8cm, 器高7.1cmを測る。摩耗するため調整は不明瞭であるが, 外面にタタキ目が僅かに残る。5117は口径17.0cmを測る。外面は荒いハケ調整, 内面はナデ調整を施す。

SC-503

調査区中央部で検出された遺構で, 長径1.00m, 短径0.80mの範囲に土器が集中していたが, SC-502同様明確な掘方はなかった。出土遺物には弥生土器片約50点がみられ, 弥生土器4点(5118~5121)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.182-5118~5121)

5118~5120は甕である。5118は口径14.7cmを測る。口縁部は若干外反しており, 胴部が張る。底部は欠損するが, 尖底とみられる。体部外面はタタキの後にハケ調整, 口縁部はハケ調整, 内面は体部上半と口縁部にハケ調整を施した後に体部下半のみにナデ調整を加える。口縁部と胴部には煤が付着する。5119は口径15.1cm, 器高15.7cmを測る。口径と胴径がほぼ同じで, 底部は尖底である。体部外面はタタキの後にハケ調整, 口縁部の内外面はハケ調整, 体部もハケ調整, 底部はナデ調整をそれぞれ施す。5120は小型の甕で, 口径12.4cmを測る。底部は欠損するが, 球形に近い形態とみられる。体部外面は連続したタタキの後にハケ調整, 口縁部は垂直方向にハケ調整を施す。内面は部分的にハケ調整の後にナデ調整を加える。

5121は椀状の鉢で, 口径18.4cm, 器高6.9cmを測る。器壁がやや厚い。外面は幅の狭いタタキを密に行い, 底部はその後にナデ調整を加える。内面は全面にハケ調整を施す。

5. E区

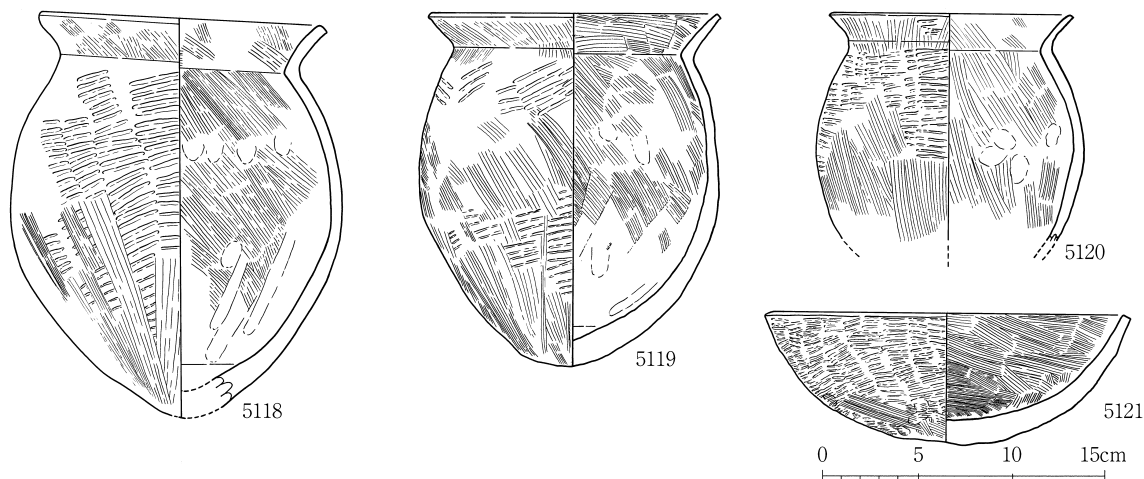


Fig.182 SC-503出土遺物実測図

③ 古代

i 溝跡

SD-503 (Fig.183)

調査区東部で検出した南北溝で、検出長31.36 m、幅2.80~3.84 m、深さ24~52 cmを測る。両端は調査区外へ延びる。規模が比較的大きなことから何らかの区画をなす溝である可能性が高い。主軸はN-19°-Wを示し、基底面は南(6.862 m)から北(6.763 m)へ緩やかに傾斜する。断面形は舟底状を呈し、埋土は上層からにぶい黄褐色シルト、明黄褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトの3層に分層される。出土遺物には弥生土器片約270点、土師器1点、須恵器8点がみられ、土師器1点(5122)、須恵器2点(5123・5124)が図示できた。

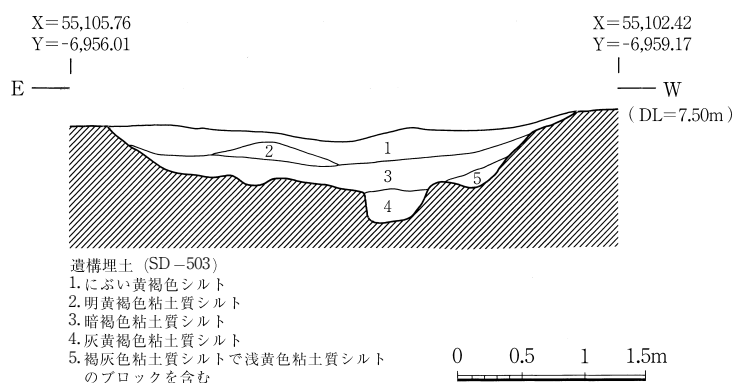


Fig.183 SD-503

断面形は舟底状を呈し、埋土は上層からにぶい黄褐色シルト、明黄褐色粘土質シルト、暗褐色粘土質シルトの3層に分層される。出土遺物には弥生土器片約270点、土師器1点、須恵器8点がみられ、土師器1点(5122)、須恵器2点(5123・5124)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.186-5122)

5122は頸部がくの字状に屈曲する甕で、口径25.1 cmを測る。胴部外面は細かいハケ調整を施した上に丁寧なナデ調整を加える。

須恵器 (Fig.186-5123・5124)

5123は杯で、底径8.3 cmを測る。低いハの字状に開く高台が付く。調整は回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切りの後にナデ調整を加える。

5124は甕で、口径11.0 cmを測る。口縁部の内外面は回転ナデ調整、体部外面は平行タタキ目、内面は同心円文のタタキ目が残る。

SD-504

SD-503の東側で検出した湾曲する溝で、北端はSD-503に切られる。検出長は14.00mで、幅34~58cm、深さ1~14cmを測る。基底面はほぼ平らで、南(7.133m)から北(7.038m)に傾斜する。断面形は逆台形で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物は皆無である。

SD-505

SD-503の東側で検出した溝で、南端はSD-503に切られる。検出長は10.00m、幅20~40cm、深さ4~13cmを測る。主軸はN-12°-Wを示す。基底面はほぼ平らで、標高7.100m前後である。埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片5点、須恵器1点がみられ、弥生土器1点(5125)、須恵器1点(5126)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.186-5125)

5125は甕で、口径13.2cmを測る。頸部は緩やかに屈曲する。摩耗するため調整は不明瞭であるが、体部内面はナデ調整を施す。

須恵器 (Fig.186-5126)

5126は杯で、口径17.4cm、底径13.2cm、器高5.5cmを測る。底部は丸味があり、体部が外上方へほぼ真直ぐ上がり、口縁部で僅かに外反する。高台は断面逆台形状を呈し、ハの字状に開く。調整は体部が回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加える。焼成が悪く、褐色を呈す。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

SD-506

SD-503の西側で検出した溝で、削平を受けているとみられる。6.80mを検出し、幅35~74cm、深さ4~12cmを測る。主軸はN-66°-Eを示す。基底面は西(7.345m)から東(7.139m)へ傾斜する。断面形は舟底状をなし、埋土は茶褐色粘土質シルトであった。出土遺物には須恵器が2点みられたが、復元図示できなかった。

SD-507 (Fig.184)

SD-503の西側で検出した溝で、東端はSD-503に切られる。検出長13.36m、幅44~74cm、深さ27~42cmを測る。主軸はN-56°-Eを示す。基底面はほぼ平らで、標高7.100m前後である。断面形は逆三角形で、埋土は2層に分層され、上層が灰黄褐色シルトにマンガン粒を少し含むもの、下層が灰黄褐色粘土質シルトに黄澄シルトのブロックとマンガンを若干含むものであった。出土遺物は弥生土器片12点があるが、図示できなかった。

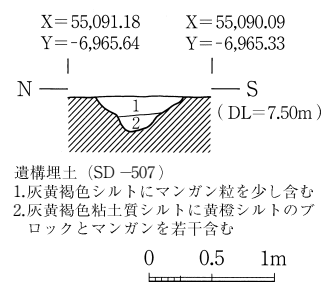


Fig.184 SD-507

ii ピット

P-501

調査区東部で検出した円形のピットで、畝状遺構を切る。径28cm、深さ58cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトで橙色の小礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片7点、須恵器1点がみられ、

5. E区

須恵器1点(5127)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.186-5127)

5127は甕で、口径20.7cmを測る。口縁部は外傾し、端部を上下に拡張する。調整は、口縁部が回転ナデ調整、体部外面は平行タタキの後に回転カキ目調整を加え、体部内面は同心円文のタタキ目が残る。

P-502

調査区の南西部で検出した円形のピットで、径41cm、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトであった。出土遺物には図示した須恵器1点(5128)があった。

出土遺物

須恵器 (Fig.186-5128)

5128は杯で、口径13.7cm、底径8.4cm、器高2.6cmを測る。立ち上がりは非常に低く、端部を丸く仕上げる。器面は著しく摩耗しており、調整は不明である。

iii 畝状遺構

SU-501 (Fig.185)

調査区東部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を9条確認した。主軸方向はN-84°-Eで、最大長14.80m、幅40~76cm、深さ1~20cmを測る。西端はSD-503に切られる。畝間は2.80m間隔で平行に伸びており、畝幅は2.00m前後である。埋土は東側に残丘があるためか、東部、中部、西部で異なっており、東部は黒褐色シルトに橙色の小礫を多く含むもの、中部はにぶい黄褐色シルトに橙色の小礫を含むもの、西部は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には弥生土器片約30点、須恵器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SU-502 (Fig.185)

調査区東部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を8条確認した。主軸方向はN-88°-Eで、最大長15.80m、幅25cm、深さ1~12cmを測る。西端はSD-503に切られる。畝間は2.10m間隔で平行に伸びており、畝幅は1.60m前後である。埋土はSU-501と同じであった。出土遺物には弥生土器片約30点、須恵器1点がみられ、北から6条目の畝間から出土した須恵器1点(5129)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.186-5129)

5129は長頸壺で、口径8.4cmを測る。頸部は肩部から屈曲し、上方に緩やかに外反して上がり、口縁部で外反度を増す。調整は口頸部が回転ナデ調整で、部分的に自然釉がかかる。

SU-503 (Fig.185)

調査区東部の斜面部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を10条確認した。主軸方向はN-88°-Eで、最大長6.30m、幅24~60cm、深さ2~13cmを測る。畝間は0.90~1.05m間隔で平行に延びており、畝幅は45~70cmで、SU-501・502よりも短かく、幅も狭い。埋土は東部が黒褐色シルトに橙色の小礫を多く含むもの、西部がにぶい黄褐色シルトで橙色の小礫を含むものであった。出土遺物には弥生土器片約70点、須恵器1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

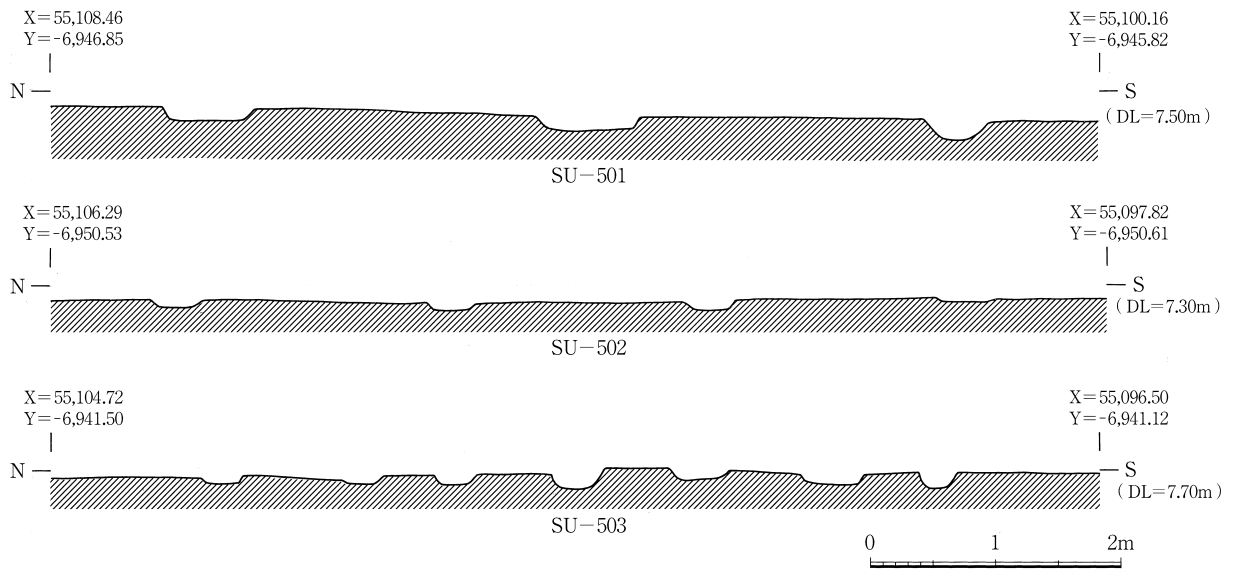


Fig.185 SU-501~503

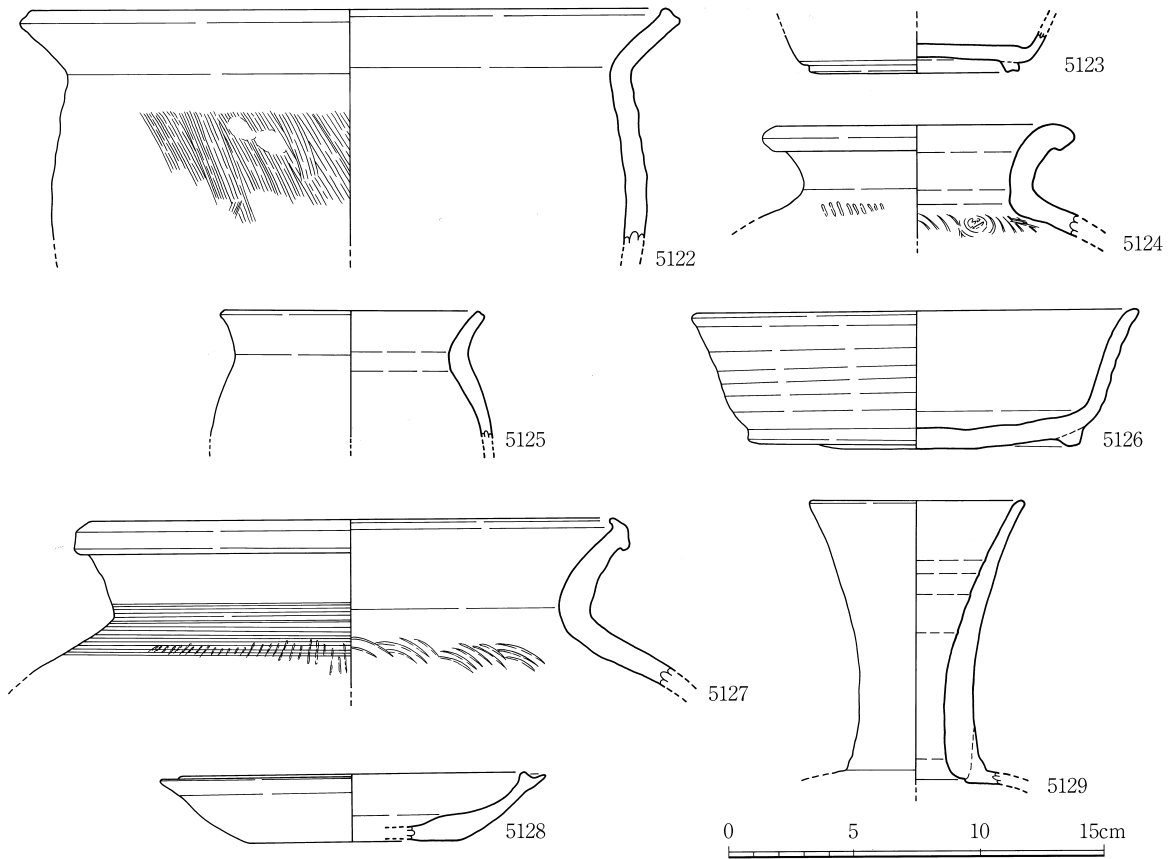


Fig.186 E区古代遺構出土遺物実測図

④ 中世

i 掘立柱建物跡

SB-501 (Fig.187)

調査区の東側で検出した梁間1間(3.80m)、桁行2間(4.10m)の南北棟建物跡で、北西隅の柱穴は確認できなかった。棟方向はN-12°-Wを示す。柱間寸法は梁間(東西)が3.80m、桁行(南北)が2.05

5. E区

mである。柱穴は径40cm前後の円形または楕円形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂または灰茶色粘土質シルトでいずれも5mm大の礫を多く含んでいた。また、切り合いからみて、畝状遺構よりは後出するものと考えられる。出土遺物には弥生土器片4点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片6点、白磁片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SB-502 (Fig.188)

調査区の北西部で検出した梁間1間(1.75 m)、桁行2間(6.00 m)の東西棟建物跡である。棟方向はN-79°-Wを示す。柱間寸法は梁間(南北)が1.75 m、桁行(東西)が2.75 mと3.25 mである。

柱穴は径24~90cmの円形を呈し、埋土は灰褐色シルト質粘土でマンガンと礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片9点、瓦器片2点、土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB-503 (Fig.189)

調査区の南西部で検出した梁間1間(2.00 m)以上、桁行1間(4.00 m)以上の南北棟建物跡で、南側は調査区外へ続く

ものとみられる。棟方向はN-4°-Wを示す。柱穴は径60~80cmの円形のものとし、長辺80~110cm、短辺60~80cmを測る方形のもので、他の掘立柱建物跡に比べて比較的大きい。埋土は黄灰色粘土質シルトでマンガンと3mm大の礫を含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

ii 塀・柵列跡

SA-501 (Fig.190)

調査区中央部で検出した南北柵列(N-8°-W)である。6間分(4.10 m)を検出し、柱間寸法は0.40~

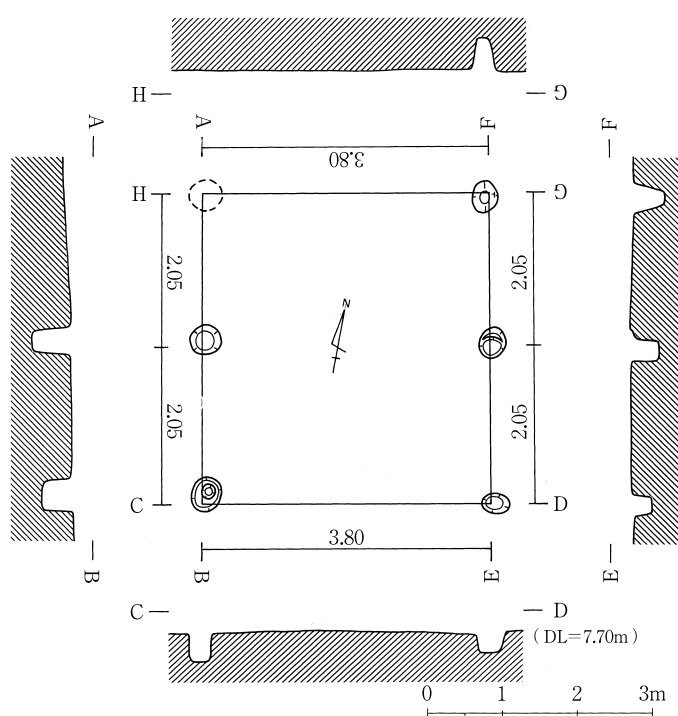


Fig.187 SB-501

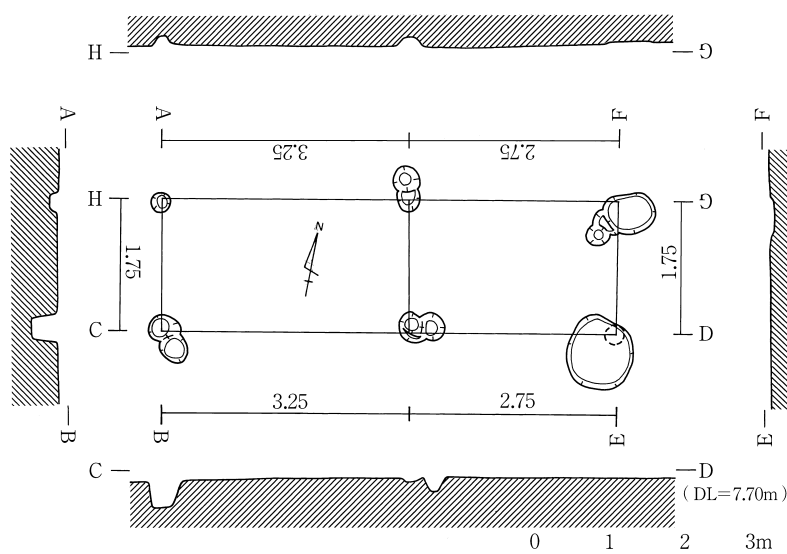


Fig.188 SB-502

0.95 mと様々である。柱穴は径13~30cmの円形または楕円形を呈し、埋土は黄灰色粘土質シルトでマンガンと3mm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SA-502 (Fig.191)

調査区の南部で検出した東西柵列(N-60°-E)である。3間分(3.30 m)を検出し、柱間寸法は1.10 mを測る。柱穴は径24~32cmの円形または楕円形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで黄色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物は土師質土器片1点のみで復元図示できなかった。

SA-503 (Fig.192)

SB-503の北側で検出した東西塀(N-87°-E)で、SB-503と垂直方向に位置する。4間分(8.20 m)を検出し、更に東側へ続く可能性がある。柱間寸法は1.90~2.20 mを測る。柱穴は方形で長辺66~84cm, 短辺43~64cmを測り、柱径は約25cmとみられる。柱穴の規模や柱間寸法はSB-503とほぼ同じであることから掘立柱建物であった可能性もあるが、建物を復元するには至らなかった。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで黄色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点, 青磁片2点がみられるが、復元図示できるものはなかった。

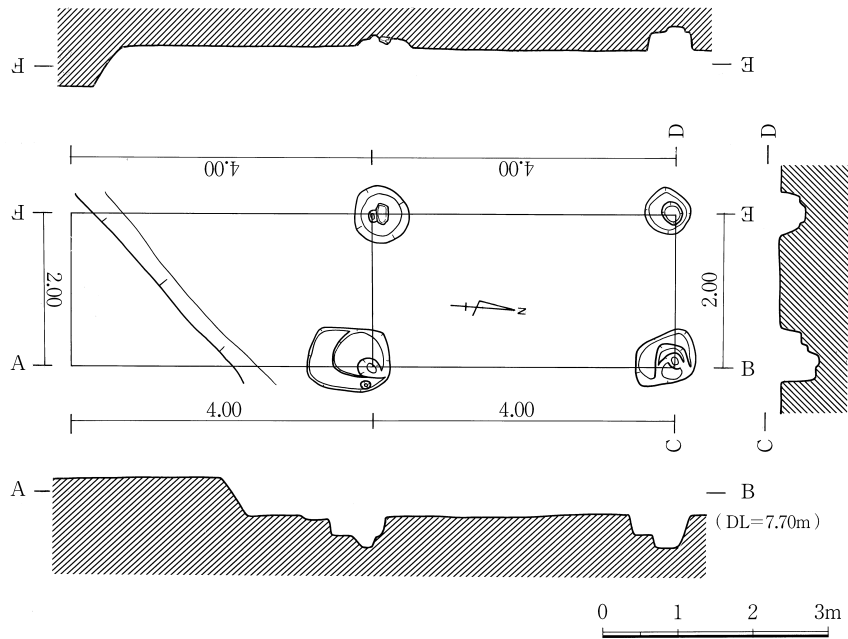


Fig.189 SB-503

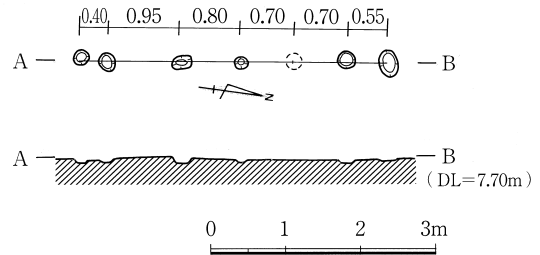


Fig.190 SA-501

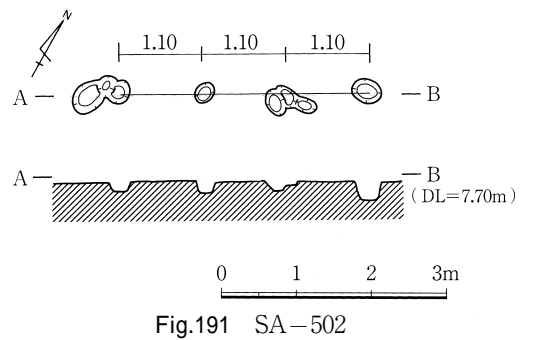


Fig.191 SA-502

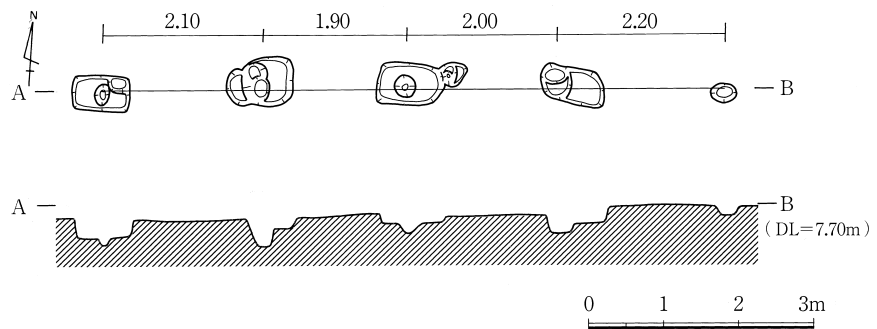


Fig.192 SA-503

5. E区

iii 土坑

SK-510

調査区の南部で検出した舟形の土坑で、一部調査区外に続き、北側はSD-521に切られる。検出長2.73 m、検出幅42 cm、深さ12 cmを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトであった。出土遺物は図示した土師質土器1点(5130)のみであった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.198-5130)

5130は杯で、口径13.8 cm、底径7.0 cm、器高4.0 cmを測る。器壁が若干薄いものである。成形はロク口水挽である。内面は磨耗しており調整は不明瞭で、体部外面は回転ナデ調整、底部の切り離しは回転糸切りである。

iv 溝跡

SD-508 (Fig.193)

調査区東部の斜面の裾部で検出した南北溝で、両端は調査区外へ続く。検出長20.24 m、幅0.89~1.19 m、深さ15~36 cmを測る。溝は地形に沿っており、主軸方向が北部でN-14°-W、南部でN-4°-Wを示す。断面形は舟底状を呈し、基底面の高さは7.350 m前後ではほぼ平らである。埋土は3層に分れ、上層から灰黄色砂質シルト、にぶい黄褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルト(北部で灰黄色砂質シルト)であり、いずれも5 mm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片140点、須恵器片9点、瓦器片1点、土師質土器片140点、瓦質土器片1点、青磁片1点がみられ、土師質土器1点(5131)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.198-5131)

5131は羽釜で、口径22.0 cmを測る。口縁部は内湾し、端部を丸く仕上げる。鏝は小さな三角形のものが付く。調整は鏝より下にタタキ目がみられ、その他はナデ調整である。

SD-509 (Fig.193)

SD-508の西側で平行して走る南北溝で、両端は調査区外へ続く。検出長21.04 m、幅40~63 cm、深さ12~46 cmを測る。SD-508同様地形に沿っており、北部がN-2°-W、南部がN-13°-Wを示す。断面形はU字形ないし舟底状を呈し、基底面は北(7.353 m)から南(7.199 m)へ傾斜する。埋土は3層に分れ、上層から灰黄褐色シルト質砂、にぶい黄褐色シルト、灰黄褐色粘土質シルトで、いずれも5 mm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片3点、瓦器片4点、土師質土器片60点、瓦質土器片1点がみられ、土師質土器1点(5132)が図示できた。

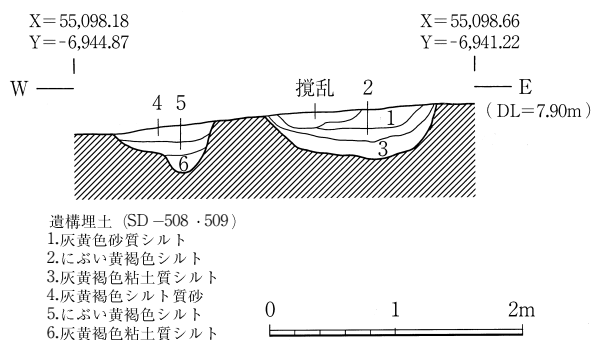


Fig.193 SD-508・509

出土遺物

土師質土器 (Fig.198-5132)

5132は杯で、底径7.1cmを測る。体部はやや開き、内湾して立ち上がる。摩耗するため調整は不明瞭である。底部の切り離しは回転糸切りとみられる。

SD-510

SD-509の西側で検出した溝で、北は調査区外へ続き、南端はSD-509に切られる。検出長18.64m、幅18~56cm、深さ9~34cmを測る。SD-508・509に並走し、北部がN-13°-W、南部がN-4°-Wを示す。断面形は舟底状を呈し、基底面は7.400m前後でほぼ平らである。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで黄色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片3点、東播系須恵器片1点、土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-511

調査区東部で検出した南北溝で、北端はSU-505、南端はSD-522に切られる。検出長4.26m、幅約14cm、深さ3~6cmを測る。主軸はN-10°-Wを示す。断面形は舟底状を呈し、基底面は3.380m前後でほぼ平らである。埋土は灰茶色粘土質シルトで5mm大の礫を多く含んでいた。出土遺物は図示した青磁1点(5133)のみであった。

出土遺物

青磁 (Fig.198-5133)

5133は龍泉窯系の碗である。器面には青味を帯びた緑色釉を約0.2mmの厚さに施釉する。外面には鎬蓮弁文がみられる。

SD-512 (Fig.194)

調査区南東部で検出した東西溝で、SD-513に切られる。検出長は12.64m、幅0.80~1.76m、深さ16~29cmを測る。主軸はN-79°-Wを示す。埋土は2層に分れ、上層が灰白色シルトにマンガン粒を多く含むもの、下層が褐灰色シルトに黄橙色シルト質粘土のブロックを若干含むものであった。断面形は舟底状を呈し、底は溝状に一段下がる部分がある。基底面はほぼ平らで7.150m前後を測る。出土遺物には弥生土器片7点、須恵器片4点、東播系須恵器片13点、土師質土器片155点、青磁片1点があるが、図示できるものはなかった。

SD-513 (Fig.194)

SD-512の南側で検出した東西溝で、SD-512を切る。検出長11.04m、幅33~55cm、深さ4~13cmを測る。主軸はN-77°-Wを示し、SD-512にほぼ平行する。断面は舟底状で、基底面は7.300m前後でほぼ平らである。埋土は、西側が灰白色シルトにマンガン粒を比較的多く含むもの、東側が2層に分層され、上層が灰白色シルトにマンガン粒を多く含むもの、下層が褐灰色シルトに黄橙色シルト質粘土のブロックを若干含むものであった。出土遺物には弥生土器片3点、須恵器片2点、瓦器片2点、土師質土器片約40点、刀子1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-514 (Fig.194)

調査区中央部で検出したL字状の溝で、区画溝とみられる。検出長は21.84m、幅11~54cm、深さ3~15cmを測る。主軸は東西がやや湾曲しておりN-59~76°-E、南北はN-12°-Wを示す。断面は

5. E区

逆台形で、基底面はほぼ平らで標高7.300 m前後を測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで黄色粘土質シルトのブロックを含む。出土遺物には弥生土器片16点、須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片7点、青磁片1点があるが、図示できるものはなかった。

SD-515 (Fig.194)

調査区中央部で検出したL字状の溝で、SD-514と同様に区画溝とみられる。検出長35.36 m、幅24~65 cm、深さ2~19 cmを測る。

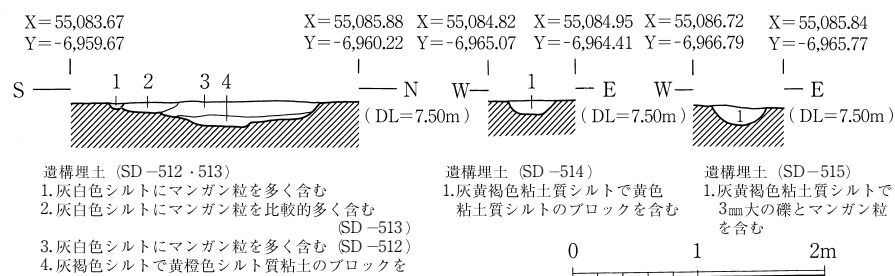


Fig.194 SD-512~515

主軸は東西がN-

68°-E, 南北はN-21°-Wを示す。断面形は舟底状を呈し、基底面はほぼ平らで7.250 m前後を測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで3mm大の礫とマンガンを含んでいた。出土遺物には弥生土器片100点、須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片9点がみられ、弥生土器1点(5134)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.198-5134)

5134は甕で、口径は14.4cmを測る。調整は、口縁部がナデ調整の後に細かいハケ調整、体部外面がタタキ、体部内面が細かいハケ調整を施す。

SD-516

調査区北部で検出した北側が屈曲する溝で、検出長9.68 m、幅28~99 cm、深さ6~11 cmを測る。断面形は舟底状を呈し、基底面は南(7.390 m)から北(7.321 m)へ若干傾斜する。埋土は褐色シルト質粘土でマンガンと礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片100点、須恵器片2点、土師質土器片9点、白磁片1点がみられ、須恵器1点(5135)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.198-5135)

5135は杯蓋で口縁部を欠損する。丸い天井部には回転ヘラ削りが施される。天井部内面は摩耗するが回転ナデ調整とみられる。焼成は悪く、内外面とも灰黄色を呈す。

SD-517

調査区の北西部で検出した溝で、SB-502の南側に位置する。検出長5.92 m、幅60~91 cm、深さ4~12 cmを測る。主軸はN-77°-Eを示し、SB-502とほぼ平行する。断面形は舟底状を呈し、基底面はほぼ平らで標高7.500 m前後である。埋土は灰褐色シルト質粘土でマンガンと礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片90点、須恵器片3点、土師質土器片11点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-518 (Fig.195)

調査区西部で検出した東西溝で、同じ方向に走る近代の暗渠に一部切られる。検出長28.16 m、幅1.04~1.14 m、深さ11~46 cmを測る。主軸はN-81°-Eを示す。断面形は舟底状ないし逆台形を呈

し、基底面は東(7.103m)から西(6.835m)へ傾斜する。埋土は黄灰色粘土質シルトでマンガンを多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片5点、須恵器片1点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片35点、瓦質土器片1点、青磁片1点がみられ、瓦質土器1点(5136)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.198-5136)

5136は釜の脚部で、基部と先端部は欠損する。ナデ調整で指頭圧痕が残る。

SD-519 (Fig.195)

SD-518の南側を走る溝で、近代の暗渠とSD-518に切られる。検出長21.92m、幅0.64~1.14m、深さ41~64cmを測る。主軸はN-82°-Eを示し、SD-518とはほぼ平行する。断面は逆台形を呈し、基底面は東(7.143m)から西(6.678m)へ傾斜する。埋土は4層に分層され、上から灰黄色粘土質シルト、灰白色シルト、灰白色粘土質シルトにマンガンを多く含むもの、灰色シルト質粘土にマンガンを少し含むものであった。出土遺物には弥生土器片10点、須恵器片8点、土師質土器片43点、瓦質土器片1点、白磁片2点がみられ、瓦質土器1点(5137)と白磁1点(5138)が図示できた。

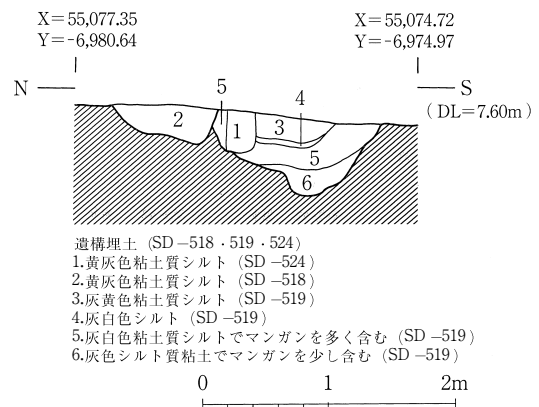


Fig.195 SD-518・519

出土遺物

瓦質土器 (Fig.198-5137)

5137は鍋で、口縁部から胴部の一部が残存する。口縁部は丸味のある胴部から僅かに屈曲し短く外傾する。器面は著しく摩耗しており、調整は部分的に指押えの痕が残存するのみである。口唇部から胴部外面にかけて煤が付着する。

白磁 (Fig.198-5138)

5138は碗で、底径7.6cmを測る。高台は削り出し高台で、断面逆台形を呈する。釉は内面のみ灰色味を帯びた透明釉を薄く施し、外面は無釉である。

SD-520 (Fig.196)

調査区西部で検出した東西溝で、SD-519の南側を並走する。検出長23.44m、幅39~64cm、深さ7~38cmを測る。断面形は舟底状を呈し、基底面は東(7.246m)から西(6.944m)へ傾斜する。埋土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片2点、須恵器片5点、土師質土器片33点、瓦質土器片1点、土錘1点がみられ、瓦質土器1点(5139)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.198-5139)

5139は鉢で、口径22.9cmを測る。口縁部は体部から外上方にほぼ真直ぐ上がり、端部は内傾する平面をなす。調整は回転ナデ調整で、外面と内面の口縁部は炭素が吸着する。

SD-521 (Fig.196)

調査区西部、SD-520の南側で検出した東西溝で、東側は削平を受けているとみられる。検出長

5. E区

30.24 m, 幅0.64~1.14 m, 深さ16~62cmを測る。主軸はN-82°-Eを示し, SD-519と平行する。断面形はU字形ないし舟底状を呈し, 基底面は東(7.307 m)から西(6.537 m)へ傾斜する。埋土は黄灰色粘土質シルトでマンガンと3mm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片3点, 土師質土器片25点, 白磁片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SD-522 (Fig.196)

調査区西部, SD-521の南側で検出した溝で, 著しく攪乱を受けていた。検出長19.76 m, 幅0.90~1.50 m, 深さ10~19 cmを測る。主軸は

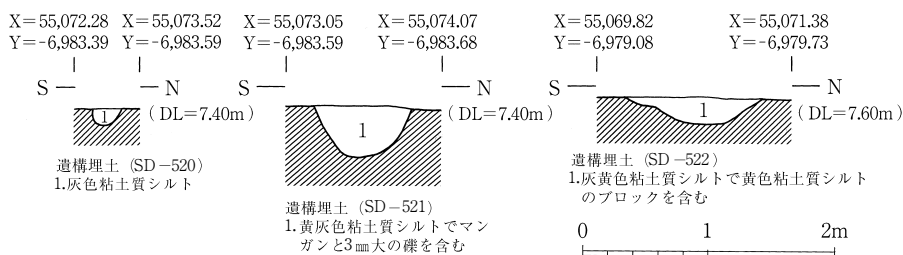


Fig.196 SD-520~522

N-81°-Eを示し, SD-521とほぼ平行する。断面形は舟底状ないし逆台形を呈し, 基底面は東側(7.329 m)から西側(7.261 m)へ緩やかに傾斜する。埋土は灰黄色粘土質シルトで, 黄色粘土質シルトのブロックを含む。出土遺物は弥生土器片23点があるが, 埋土より中世の遺構であるとみられる。弥生土器2点(5140・5141)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.198-5140・5141)

2点とも鉢である。5140はほぼ完形で, 口径15.0cm, 器高6.5cmを測る。丸底で, 口縁端部は僅かに外反する。外面の調整は底部から口縁部に全面ハケ調整, 内面は上下2段に斜め方向のハケ調整を施す。5141は平底に近い底部を有し, 底径3.9cmを測る。外面はナデ調整, 内面はナデ調整で指頭圧痕と部分的に荒いハケ目が残る。

v ピット

P-503

調査区東部の斜面部で検出した楕円形のピットである。長径32cm, 短径28cm, 深さ11cmを測り, 埋土は黒褐色シルト質砂で橙色の小礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片8点, 土師質土器片2点がみられ, 土師質土器1点(5142)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.198-5142)

5142は完形の小皿で, 口径8.0cm, 底径4.4cm, 器高1.7cmを測り, 底部はベタ高台風となり, 口縁部は直線的に延びる。器面は摩耗しており, 調整は不明であるが, 底部の切り離しは形態からみて回転ヘラ切りと考えられる。

P-504

調査区の北西部で検出した円形のピットである。径24cm, 深さ25cmを測り, 埋土は灰褐色シルト質粘土でマンガンと礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片9点, 土師質土器片1点がみられ, 弥

生土器1点(5143)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.198-5143)

5143は鉢で、底径3.4cmを測る平底のものである。底部外面はナデ調整、体部外面は板ナデ調整を施す。内面は磨滅するため調整は不明である。

P-505

調査区の北西部で検出した円形のピットである。径29cm、深さ19cmを測り、埋土はP-504と同じであった。出土遺物には土師質土器片3点がみられ、土師質土器1点(5144)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.198-5144)

5144は小皿で、口径6.2cm、底径4.2cm、器高1.4cmを測る。磨滅するため調整は不明である。ただし、底部の切り離しは形態からみて回転糸切りと考えられる。

P-506

調査区の北西部で検出した楕円形のピットである。長径25cm、短径21cm、深さ12cmを測り、埋土はP-504と同じであった。出土遺物には弥生土器片2点がみられ、弥生土器1点(5145)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.198-5145)

5145は甕で、底径7.4cmを測る。内外面ともナデ調整で、内面には指頭圧痕が残る。

P-507

調査区の北西部で検出した円形のピットである。径27cm、深さ11cmを測り、埋土はP-504と同じであった。出土遺物には弥生土器片9点、瓦器片1点がみられ、弥生土器1点(5146)が図示できた。

出土遺物

弥生土器 (Fig.198-5146)

5146はミニチュア土器の高杯である。中実の脚部が残存し、底径3.8cmを測る。調整はナデ調整である。

P-508

調査区の南西部で検出した円形のピットである。径22cm、深さ26cmを測り、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで黄色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点がみられ、土師質土器1点(5147)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.198-5147)

5147は杯で、底径7.1cmを測る。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。全面著しく摩耗しており調整は不明であるが、底部の切り離しは形態からみて回転糸切りとみられる。

5. E区

vi 畝状遺構

SU-504

調査区東部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を9条確認した。主軸方向はN-10°-Wで、最大長18.24m、幅13~55cm、深さ1~15cmを測る。畝間は1.70~2.10m間隔でほぼ平行に伸びており、畝幅は1.50~1.80mとみられる。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで5mm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片20点、瓦器片3点、土師質土器片50点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SU-505 (Fig.197)

調査区東部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を4条確認した。主軸方向はN-19°-Wで、最大長18.32m、幅13~42cm、深さ3~8cmを測る。畝間は2.65~3.20m間隔でほぼ平行に伸びており、畝幅は2.25~2.70mとみられる。埋土は灰黄褐色粘土質シルトで5mm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片4点、須恵器片4点、瓦器片3点、土師質土器片36点、白磁1点がみられ、東から3条

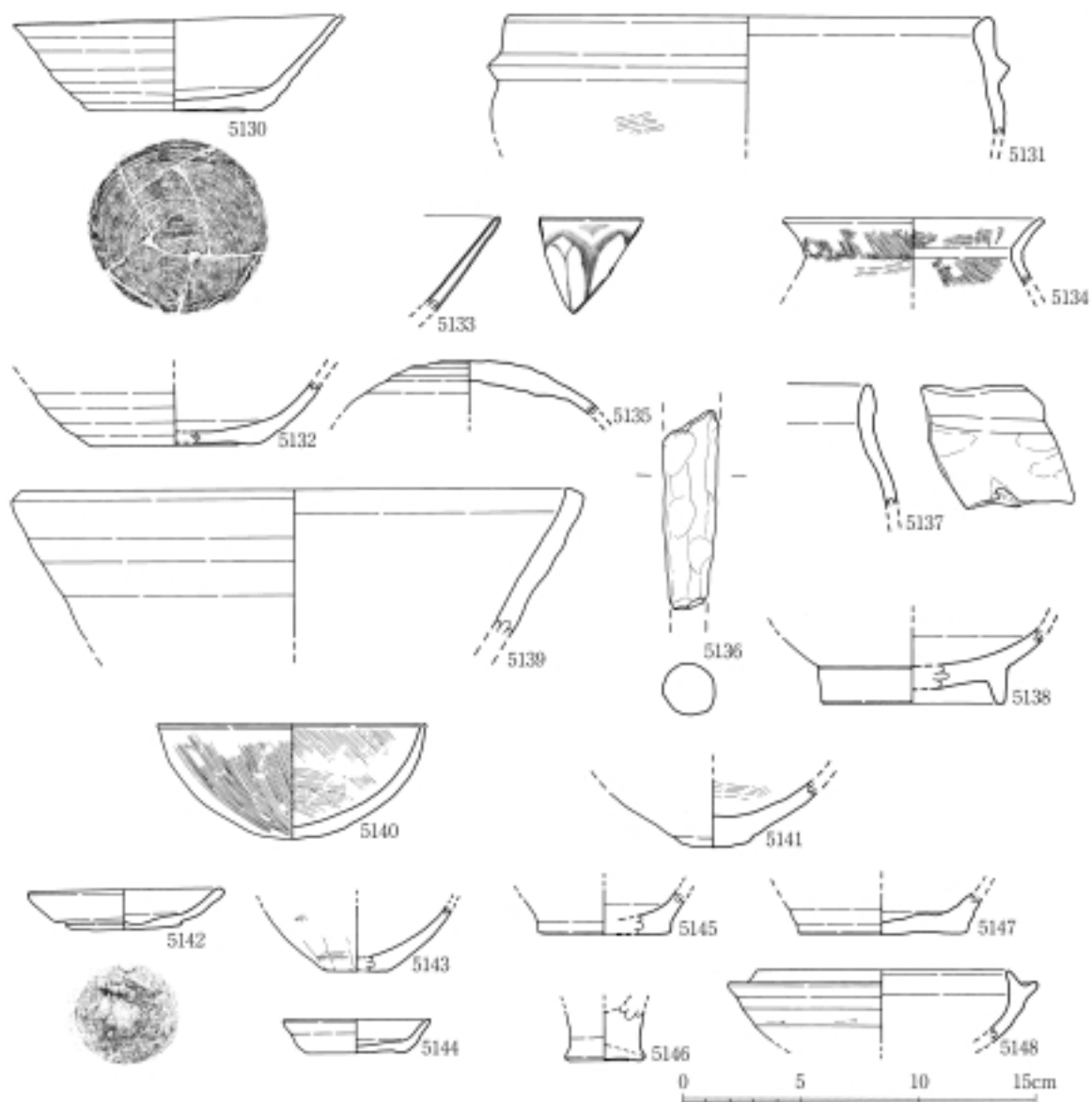


Fig.197 E区中世遺構出土遺物実測図

目の畝間から出土した須恵器1点(5148)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.198-5148)

5148は杯身で、口径10.6cm、受け部径31.0cmを測る。立ち上がりは短く内傾し、端部は丸い。調整は回転ナデ調整である。

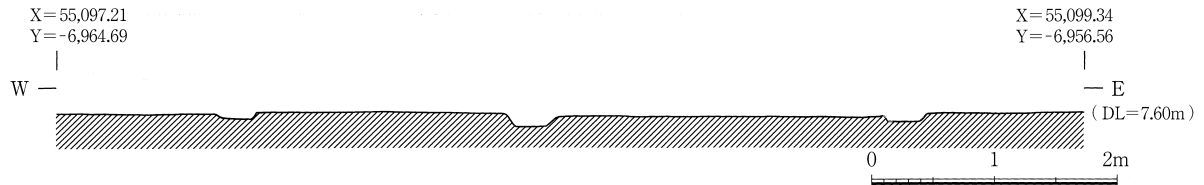


Fig.198 SU-505

⑤ 近世以降

i 塀・柵列跡

SA-504 (Fig.199)

調査区東部で検出した東西の柵列で、主軸はN-53°-Eを示す。4間(3.90m)になるとみられるが、東から2間目の柱穴は確認できなかった。検出した部分の柱間寸法は0.85mと1.10mである。柱穴は円形ないし楕円形で、径22~35cm、深さ6~18cmを測る。埋土は灰色砂質シルトで礫を少し含んでいた。出土遺物は皆無であったが、切り合いから畝状遺構よりは新しいものとみられる。

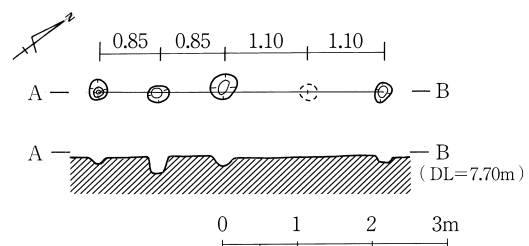


Fig.199 SA-504

SA-505 (Fig.200)

調査区東部で検出した東西の柵列で、主軸はN-53°-Eを示し、SA-504と平行する。6間分(8.65m)を検出したが、東から2間目の柱穴は確

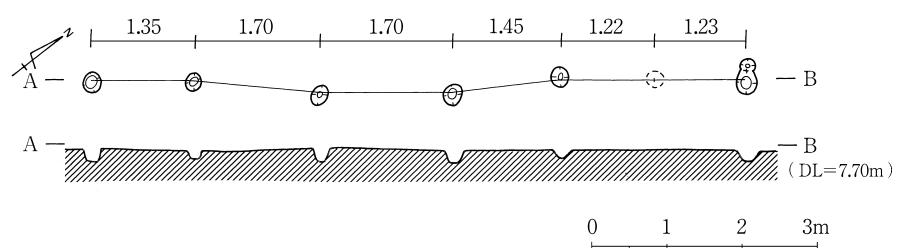


Fig.200 SA-505

認できなかった。柱間寸法は1.22~1.70mである。柱穴は円形で、径20~29cm、深さ3~17cmを測る。埋土はSA-503と同じであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片2点がみられたが、遺構の切り合いから畝状遺構より新しいものとみられる。

ii 土坑

SK-511

調査区の東端で検出した楕円形を呈すとみられる土坑で、東側は調査区外へ続く。検出した部分

5. E区

Tab.6 E区塀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方 向 (NはGN)	備 考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA - 501	(6)	4.10	0.40~0.95	N - 8° - W	
SA - 502	4	3.30	1.10	N - 60° - E	
SA - 503	(5)	8.20	1.90~2.20	N - 87° - E	
SA - 504	4	3.90	1.10	N - 53° - E	
SA - 505	6	8.65	1.22~1.70	N - 53° - E	

は長径3.98 m, 短径1.24 m, 深さ80cmを測る。断面形は舟底状を呈し, 長軸方向は北を向く。埋土は3層に分層され, 上から黄橙色砂質礫, にぶい黄橙色シルト, マンガン粒を若干含む明緑灰色砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片1点, 土師質土器片8点, 磁器片25点, 陶器片3点, 瓦2点, 鉄製品30点がみられ, 磁器1点(5149)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.202-5149)

5149は猪口で, 完形である。口径7.7 cm, 底径2.8 cm, 器高2.9 cmを測る。内面には梅花文が2つみられ, 花の芯はうすい黄色, 花びらはコバルト色を呈す。口縁部の一部にはくすんだ青色のスプレーで彩色する。釉は光沢のある透明釉を全面に薄く施釉し, 畳付は釉ハギを行う。大正期以降のものとみられる。

SK-512 (Fig.201)

調査区の東部で検出した楕円形の土坑である。長径2.60 m, 短径2.03 m, 深さ73.8 cmを測る。断面形は逆台形を呈し, 長軸方向は北を向く。埋土は2層に分層され, 上から黄橙色砂質礫, 黄褐色礫質砂であった。出土遺物には弥生土器片3点, 磁器片1点がみられ, 磁器1点(5150)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.202-5150)

5150はやや小型の丸碗である。口径10.4 cm, 底径4.3 cm, 器高5.3 cmを測る。見込には花文, 体部内外面に網目文, 高台の外面に3条の界線の染付が施される。高台内には方形枠に崩れた「福」の銘がみられる。釉は全面にやや緑味を帯びた透明釉を薄く施し, 畳付は釉ハギを行う。釉には若干気泡が入る。18世紀前半の肥前系とみられる。

SK-513

調査区の東部, SK-512の南側で検出した楕円形の土坑である。長径1.63 m, 短径1.30 m, 深さ68 cmを測る。断面形は逆台形を呈し, 長軸方向は北を向く。埋土はSK-512と同じであった。出土遺物には弥生土器片15点, 磁器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

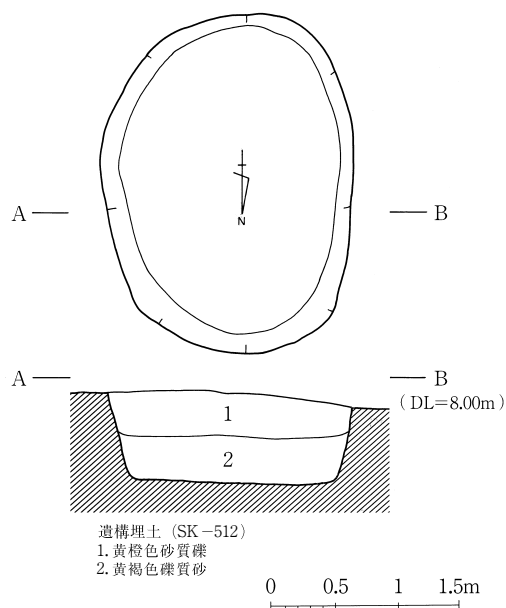


Fig.201 SK-512

SK-514

調査区の東端で検出した楕円形の土坑で、東側は調査区外へ続く。検出した部分で、長径1.90m、短径1.28m、深さ22~40cmを測る。断面形は舟底状を呈し、長軸方向は北を向く。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、磁器片1点、陶器片12点、瓦1点、鉄製品10点、ガラス製品1点がみられ、磁器1点(5151)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.202-5151)

5151は皿で、口径11.1cm、底径6.0cm、器高2.4cmを測る。断面には若干光沢がある。内面は花文などのコバルトの印刷を施す。釉は光沢のある透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。明治期以降のものともみられる。

SK-515

調査区の南東隅で検出した楕円形の土坑で、南側は調査区外へ続く。検出した部分で、長径4.00m、短径1.84m、深さ73cmを測る。断面形は舟底状を呈し、長軸方向は北を向く。埋土は4層に分層され、上から礫を含む黄灰色砂質シルト、灰白色シルト、礫を含む灰色シルト、灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片15点、土師質土器片20点、瓦器片2点、青磁片2点、陶磁器片約160点、瓦3点、石臼1点、鉄製品10点、ガラス製品1点がみられた。出土遺物が比較的多いことから廃棄土坑ではないかとみられる。これらの内磁器2点(5152・5153)、石製品1点(5154)、ガラス製品1点(5155)が図示できた。

出土遺物

磁器 (Fig.202-5152・5153)

5152は丸碗で、底径3.6cmを測る。見込と外面にはコバルトによる型紙摺の菊文などがみられる。釉は白っぽい透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。明治期のものともみられる。

5153は皿で、口径11.3cm、底径2.6cm、器高6.0cmを測る。内面にはコバルトで傘と筐の文様が銅版転写される。口縁部は茶色の染付がみられる。畳付は釉ハギを行い、その後橙色のものが付着する。大正期のものである。

石製品 (Fig.202-5154)

5154は石臼の下臼で、下面を一部欠損する。径約30cmになるものともみられる。摺目は摩耗し、側面と下面は被熱する。

ガラス製品 (Fig.202-5155)

5155はインク瓶である。完形で、口径1.6cm、底径4.0cm、器高5.5cmを測る。濃い緑色を呈し、気泡が入る。肩部には「HOSONUMA'S S.S.S. WRITING INK」の文字が陽鋳される。口縁部から底部にかけて型痕が3~4カ所みられる。

SK-516 (Fig.203)

調査区の南西部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.45m、短辺1.32m、深さ30cmを測る。断面形は逆台形を呈し、長軸方向はN-20°-Wを示す。埋土は黄灰色粘土質シルトでマンガン、3mm大の礫、炭化物を含んでいた。遺物には炭化した木片と被熱した石と伴出した弥生土器片1点、土

5. E区

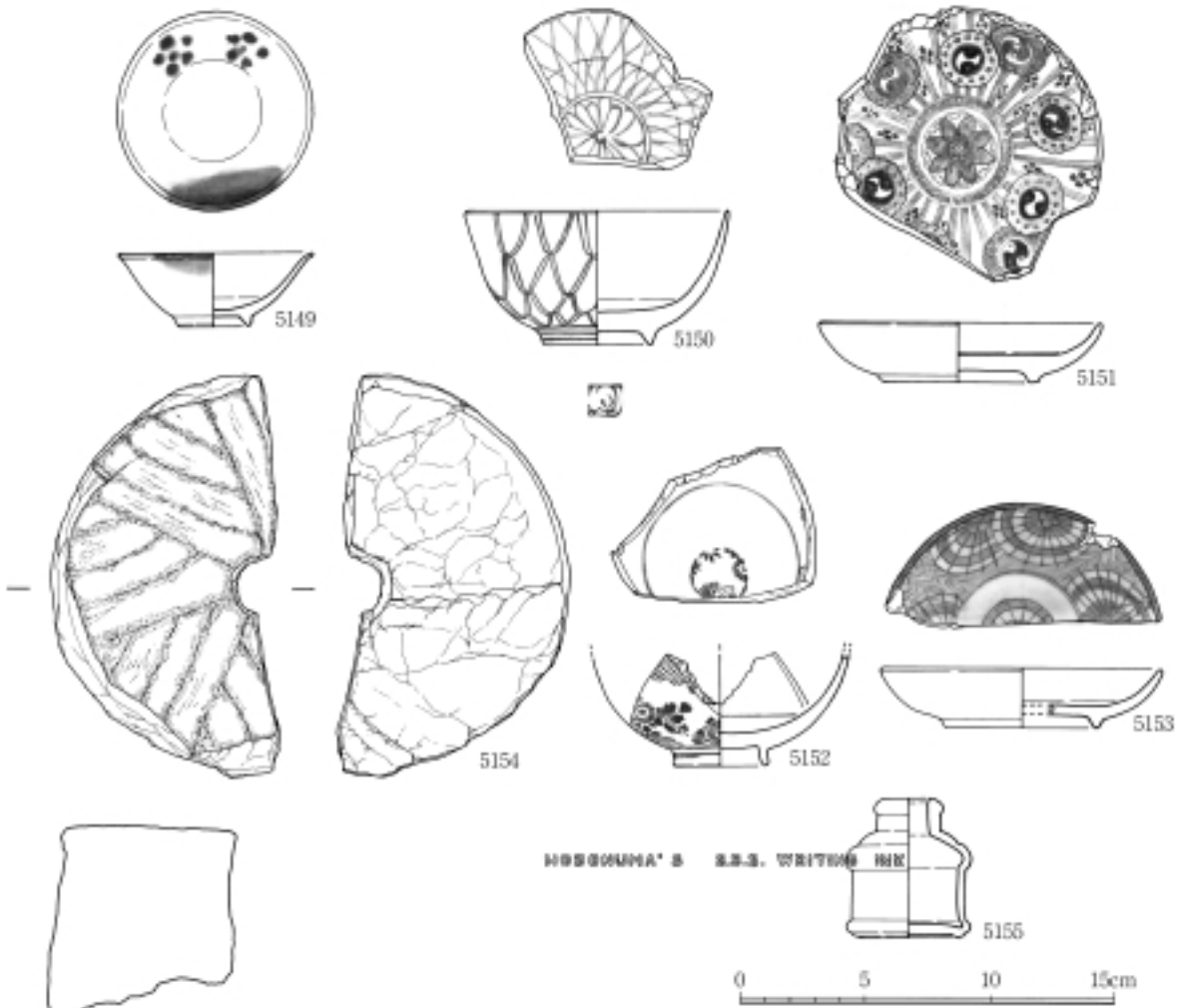


Fig.202 SK-511・512・514・515出土遺物実測図

師質土器片100点, 青磁片1点, 備前焼1点, 石製品3点があり, 備前焼1点(5156), 石製品3点(5157~5159)が図示できた。

出土遺物

備前焼 (Fig.204-5156)

5156は搦鉢で, 口縁部には注口が残存する。口径37.0 cm, 底径17.6 cm, 器高13.7 cmを測る。口縁部外面には2条の凹線を施す。底部は比較的薄く, 最も薄い所は厚さ6 mmを測る。内面は底部まで9条単位の条線が全面にみられる。18世紀前半のものともみられる。

石製品 (Fig.204-5157~5159)

5157は縄文時代の磨製石斧で, 基部を欠損する。全長10.6 cm, 全幅6.9 cm, 全厚1.5 cmを測る。石材は蛇紋岩である。

5158は叩石で, 完存する。全長15.8 cm, 全幅11.4 cm,

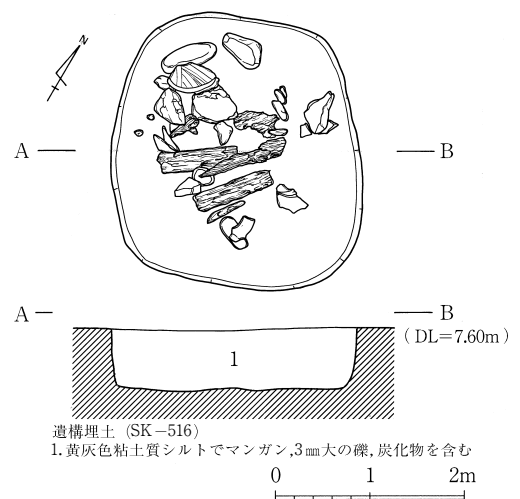


Fig.203 SK-516

全厚5.8cmを測る。一面を使用しており、使用面は一部被熱する。石材は花崗岩である。

5159は石臼の下臼である。径は約34cmとみられる。摺目は磨耗する。石材は砂岩である。

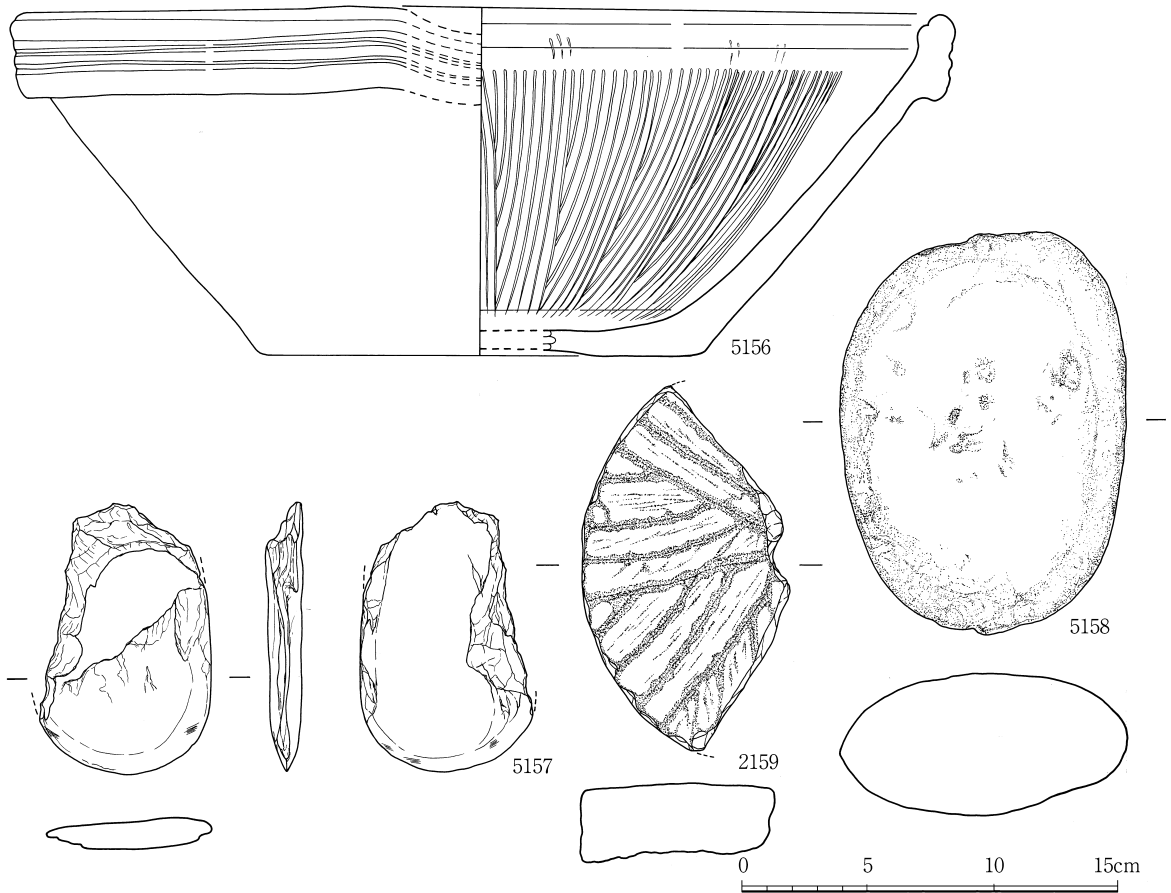


Fig.204 SK-516出土遺物実測図 (5159は縮尺1/4)

iii 溝跡

SD-523

調査区の東側で検出した溝で、東側は調査区外へ続く。検出長4.92 m, 幅20~34cm, 深さ7cmを測る。主軸はN-90°-Eを示す。断面形はV字形を呈し、基底面はほぼ平らで7.850 m前後であった。埋土は褐灰色砂質シルトで礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片3点, 磁器片1点, 鉄製品1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-524 (Fig.205)

調査区の北西部で検出したL字状の暗渠で、両端は調査区外へ続いている。東西に延びる部分は中世の溝と重なっていた。検出長33.0 m, 幅30cm, 深さ33~43cmを測る。断面形は箱形で、底には径8cmの竹が使用されていた。基底面は北(7.221 m)から西(6.825 m)へ傾斜する。埋土は黄灰色粘土質シルトであった。出土遺物には弥生土器片26点, 土師質土器片1点, 磁器1点がみられ, 磁器1点(5160)が図示できた。

出土遺物

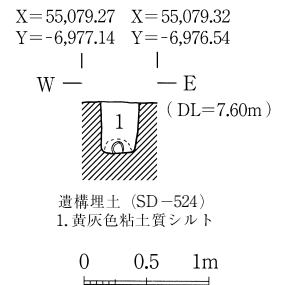


Fig.205 SD-524

5. E区

Tab.7 E区土坑計測表

遺構番号	平面形態	規 模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺()	短辺()	深さ()			
SK - 501	円 形	1.05	-	0.12	-	弥 生	
SK - 502	不整楕円形	(1.39)	1.03	0.13	-	弥 生	
SK - 503	溝 状	3.02	0.46	0.08	N - 86° - E	弥 生	
SK - 504	溝 状	2.84	0.32	0.10	N - 84° - E	弥 生	
SK - 505	隅丸方形	1.37	1.15	0.07	N	弥 生	
SK - 506	楕 円 形	1.15	0.69	0.07	N - 47° - E	弥 生	
SK - 507	不整楕円形	1.22	0.97	0.12	N - 11° - E	弥 生	
SK - 508	不整楕円形	1.29	1.00	0.14	N - 14° - W	弥 生	
SK - 509	不整楕円形	1.25	0.95	0.12	N - 4° - E	弥 生	
SK - 510	舟 形	(2.73)	(0.42)	0.12	N - 77° - E	中 世	
SK - 511	楕 円 形	(3.98)	(1.24)	0.80	N	近世以降	
SK - 512	楕 円 形	2.60	2.03	0.74	N	近世以降	
SK - 513	楕 円 形	1.63	1.30	0.68	N	近世以降	
SK - 514	楕 円 形	1.90	1.28	0.22~0.40	N	近世以降	
SK - 515	楕 円 形	(4.00)	(1.84)	0.73	N	近世以降	
SK - 516	隅丸方形	1.45	1.32	0.30	N - 20° - W	近世以降	

磁器 (Fig.206-5160)

5160は扁平皿である。口縁は円形ではなく、一部直線的で、波状となる。見込には「玉峯」の文字と直線による文様があるが、色絵が剥げたものとみられる。釉は非常に光沢のあるうすい青色のものを薄く施し、畳付は釉ハギを行う。

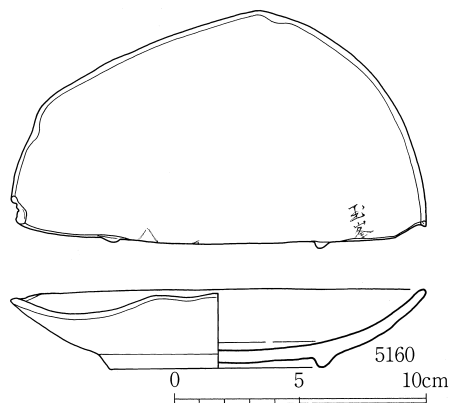


Fig.206 SD-524出土遺物実測図

ivピット

P-509

調査区の南西部で検出した円形のピットで、土坑の底面で確認した。同じ土坑内で検出したピットはSA-503の東端のピットに当たる。径22cm、深さ26cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトでマンガンと3mm大の礫を含んでいた。出土遺物には図示した備前焼1点(5161)があった。

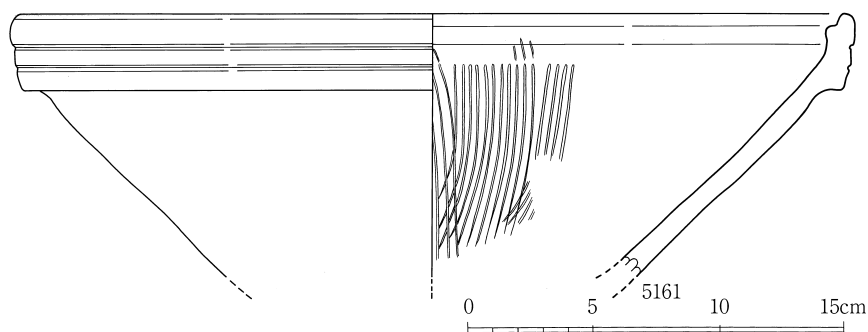


Fig.207 P-509出土遺物実測図

出土遺物

陶器 (Fig.207-5161)

5161は播鉢で、口径32.6cmを測る。調整は回転ナデ調整で、非常に器壁が薄い。口縁部外面には浅い凹線が2条施される。条線は11条単位で、条線を付けた後に口縁部内面をヨコナデ調整する。18世紀以降のものとみられる。

v 畝状遺構

近世の畝状遺構は、古代、中世に比べ畝間と畝幅が狭く、畝間の間隔は一定しない。畝間の主軸方向は若干ずれるもののすべて南北方向に走る。遺物が少ないこともあり明確な時期は掴めないが、時期差はほとんどないものとみられる。

SU-506 (Fig.208)

調査区東部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を11条確認した。主軸方向はN-13°-Wで、検出長17.20m、幅14~40cm、深さ1~7cmを測る。畝間は0.64~1.35m間隔でばらつきがある。畝幅は0.50~1.35mとみられる。埋土は灰白色砂質シルトで橙色の小礫を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片36点、瓦器片2点、瓦質土器片1点、青磁片2点、磁器片1点、陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。また、時期は切り合いからSU-507よりは下らないとみられる。

SU-507 (Fig.208)

調査区の北側で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を6条確認した。主軸方向はN-8°-Wで、検出長7.60m、幅16~35cm、深さ2~3cmを測る。畝間は1.04~1.68m間隔で、畝幅は1.00~1.50m前後である。埋土はSU-506と同じであった。出土遺物には土師質土器片6点、瓦器片1点、磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SU-508

調査区の北側で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を6条確認した。主軸方向はN-13°-Wで、検出長7.12m、幅12~30cm、深さ1~4cmを測る。畝間は0.95~1.20m間隔で、畝幅は0.65~1.10m前後である。埋土はSU-506と同じであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

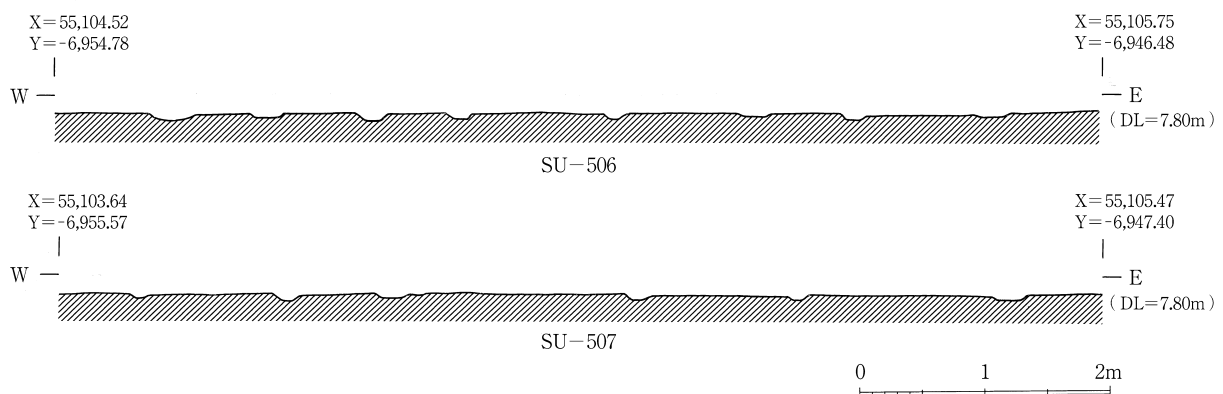


Fig.208 SU-506・507

6. F区

SU-509

調査区の南側で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を6条確認した。主軸方向はN-11°-Wで、6条確認した。検出長8.24m、幅13~30cm、深さ1~4cmを測る。畝間は0.80~1.05m間隔で、畝幅は0.50~1.05m前後である。埋土はSU-506と同じである。出土遺物は弥生土器片3点、土師質土器片12点がみられるが、復元図示できるものはなかった。また、時期は切り合いからSU-506より下らないものとみられる。

Tab.8 E区畝状遺構計測表

遺構番号	規 模				主軸方向 (NはGN)	時代	備考
	畝数(本)	検出長(m)	畝間幅(°)	畝間隔(m)			
SU-501	9	14.80	40~76	2.00	N - 84° - E	古代	
SU-502	8	15.80	24~60	1.60	N - 88° - E	古代	
SU-503	10	6.30	24~60	0.45~0.70	N - 88° - E	古代	
SU-504	9	18.24	13~55	1.50~1.80	N - 10° - W	中世	
SU-505	4	18.32	13~42	2.25~2.70	N - 19° - W	中世	
SU-506	11	17.20	14~40	0.35~1.35	N - 13° - W	近世	
SU-507	6	7.60	16~35	1.04~1.68	N - 8° - W	近世	
SU-508	6	7.12	12~30	0.45~1.20	N - 13° - W	近世	
SU-509	6	8.24	13~30	0.80~1.05	N - 11° - W	近世	

6. F区

F区は調査前宅地であり、客土の堆積が厚く、中世の遺物包含層が客土直下で認められる部分や削平を受けている部分があった。調査面積が102m²と狭かったため検出された遺構は少なかったが、中世と近世の遺構を確認した。また、下層確認のトレンチからは弥生時代前期と後期の遺物も確認されている。

(1) 層序

- 第I層 青灰色(5B5/1)粘土層
- 第II層 褐色(7.5YR4/6)粘土質シルト層
- 第III層 灰褐色(7.5YR6/2)粘土質シルト層
- 第IV層 灰色(5Y6/1)粘土質シルト層
- 第V層 黄褐色(2.5YR5/3)シルト層
- 第VI層 にぶい黄橙色(10YR6/3)粘土質シルト層
- 第VII層 灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト層
- 第VIII層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト層
- 第IX層 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土質シルト層
- 第X層 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト層
- 第XI層 にぶい黄褐色(10YR7/4)シルト質粘土層
- 第XII層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質砂層

- 第XIII層 にぶい黄橙色 (10YR6/3) シルト質砂層
- 第XIV層 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 粘土層
- 第XV層 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘土層
- 第Z層 にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粘土層

調査区全域で厚さ約70cmの客土の堆積が認められた。第IX層以下はトレンチを設定して調査を行った。遺構検出は第V層, 第VIII層, 第IX層上面で行い, 遺構が確認されたのは第V層上面のみであった。

第I層は旧表土層で厚さ約5~20cmを測り, 客土直下のため粘土化している。

第II層は第I層に伴う床土で, 厚さ約5~10cmを測り, 部分的に認められた。

第III層は調査区南側のごく一部で認められた層で, 厚さ約5cmを測る。

第IV層は中世の遺物包含層で, 調査区のほぼ全域で認められたが, 削平を受けている部分もあった。厚さ約10~20cmを測り, 僅かに炭化物を含んでいた。

第V層は調査区の全面で認められた層で, 厚さ10~30cmを測る。マンガン粒を多く含んでいた。

第VI層は厚さ約70~80cmを測る自然堆積層である。

第VII層は第VI層中で認められた層で, 土壌化している。弥生時代後期の遺物を含んでいた。

第VIII層は土壌化しており, 弥生時代前期の遺物を含んでいた。厚さは約30cmを測る。

第IX層は自然堆積層で, 厚さ約30cmを測る。

第X層は自然堆積層で土壌化していたが, 遺物は含まなかった。厚さは約10cmを測る。

第XI層は自然堆積層で, 厚さ約40cmを測る。

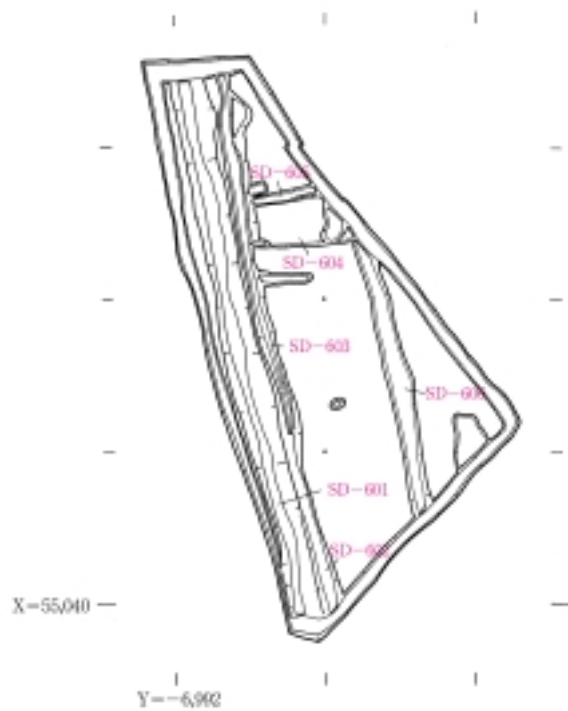


Fig.209 F区遺構平面図 (S=1/200)

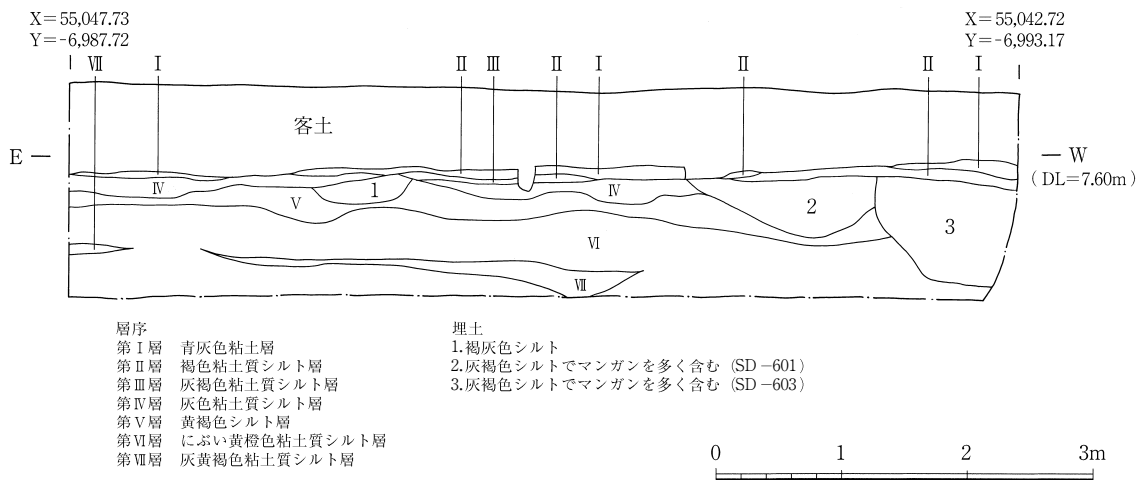


Fig.210 F区セクション図

6. F区

第Ⅻ層は自然堆積層で土壌化していたが、遺物は含まなかった。厚さは約10cmを測る。

第Ⅻ層はマンガン粒を多く含む自然堆積層で、厚さ約50cmを測る。

第Ⅻ層は自然堆積層で、厚さ約40cmを測る。

第Ⅻ層は土壌化した層で、多量の炭化物を含んでおり、1点であるが縄文時代晩期とみられる遺物が出土している。厚さは約20cmを測る。

第Ⅻ層は自然堆積層で確認した部分で厚さ約40cmを測る。部分的にマンガン粒を含んでいた。

(2) 堆積層出土遺物

第Ⅱ層出土遺物

磁器 (Fig.212-6001)

6001は皿で、底径4.6cmを測る。見込には草花文の染付が施される。釉は透明感の少ないやや青味がかかったものを高台内まで薄く施す。見込は釉ハギし、砂目がみられる。高台の付近には非常に厚く釉が溜る部分がある。17世紀前半の肥前系である。

第Ⅳ層出土遺物

土師質土器 (Fig.212-6002)

6002は杯で、底径8.1cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りで、その他は回転ナデ調整である。

青磁 (Fig.212-6003・6004)

6003は龍泉窯系の碗で、底径4.4cmを測る。高台は太く直立するもので、底部の器壁は厚い。釉は高台の外側まで、やや黄色を帯びた緑色釉を約0.5mmの厚さに施す。

6004は龍泉窯系の皿で、底径5.2cmを測る。見込には櫛描文が施される。底部の切り離しは回転糸切りである。釉は黄色味を帯びた緑色釉を薄く施し、底部外面は釉を搔きとる。

第Ⅷ層出土遺物

弥生土器 (Fig.212-6005・6006)

6005は壺で、口径19.8cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は外傾する。頸部には1条のヘラ描き沈線が残る。調整は内外面ともヨコ方向の細いヘラ磨きを施す。

6006は甕の破片で、刻目突帯が付く。

(3) 遺構と遺物

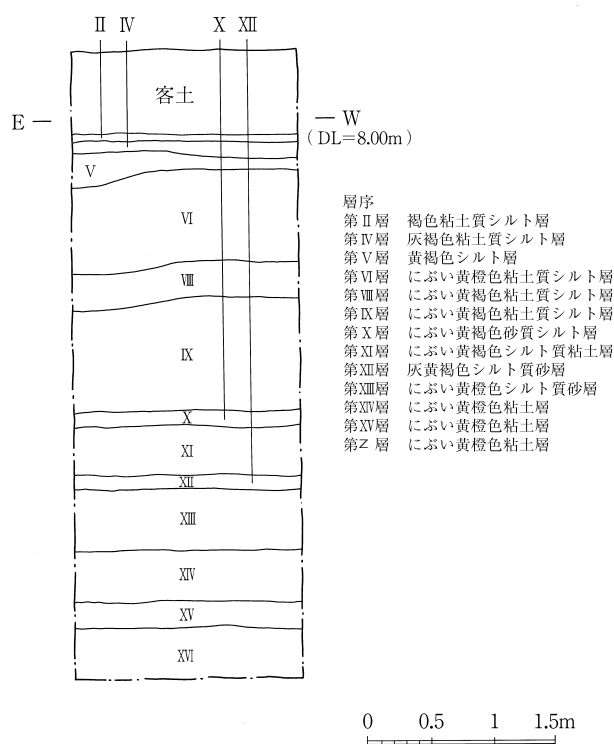


Fig.211 F区柱状図

① 中世

i 溝跡

SD-601 (Fig.213)

調査区西端で検出した南北溝である。西側の肩は調査区外に続くため確認できなかった。検出長14.44 m, 幅0.73~1.08 m, 深さ35~66 cmを測る。主軸はN-12°-Wを示す。断面形は舟底状ないし逆台形を呈し, 基底面は南(6.521 m)から北(6.385 m)へ傾斜する。埋土は灰褐色シルトでマンガンをよく含んでいた。出土遺物には弥生土器片4点, 土師質土器片20点がみられ, 土師質土器2点(6008・6009)が図示できた。

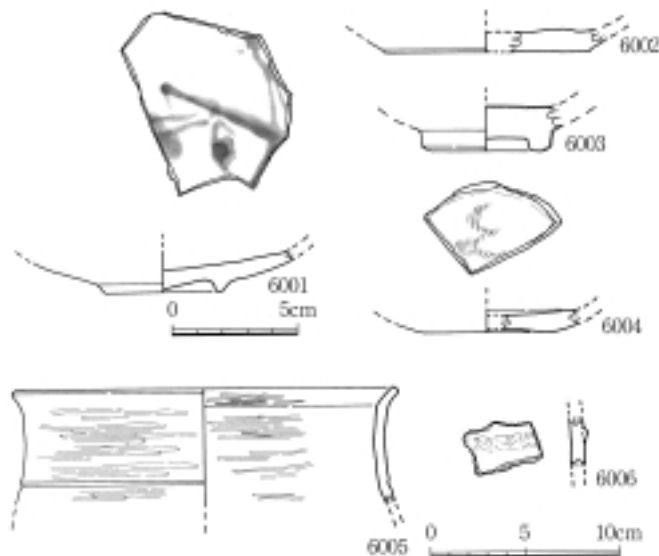


Fig.212 F区第Ⅱ・Ⅳ・Ⅷ層出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器 (Fig.214-6007-6008)

2点とも杯である。6007は口径11.7 cm, 底径6.9 cm, 器高3.9 cmを測る。体部は直線的に延びる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は著しく摩耗するため, 調整は不明である。6008は口径11.5 cm, 底径6.0 cm, 器高4.1 cmを測る。体部は若干内湾して立ち上がる。成形は粘土紐巻き上げロクロ成形である。器面は著しく摩耗するため, 調整は不明である。

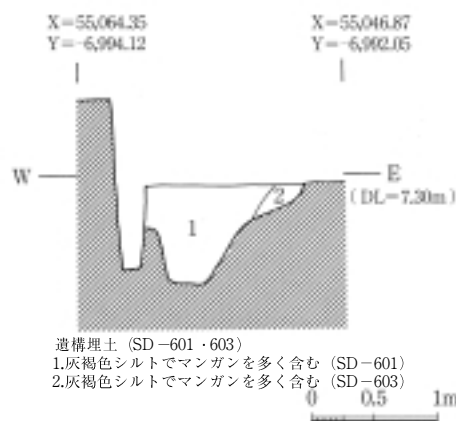


Fig.213 SD-601・603

SD-602

調査区南部で検出した南北溝で, SD-601に切られている。検出長9.60 m, 幅16~50 cm, 深さ3~23 cmを測る。若干湾曲しており, 主軸方向はN-8~16°-Wを示す。断面形は舟底状で, 基底面はほぼ平らで標高7.050 m前後である。埋土は灰褐色シルトでマンガンをよく含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-603 (Fig.213)

調査区中央部北寄りで検出した南北溝で, SD-601に切られる。残存する部分で, 長さ6.80 m, 幅40~64 cm, 深さ2~7 cmを測る。主軸はN-15°-Wを示す。断面形は舟底状で, 基底面は北(7.040 m)から南(6.940 m)へ傾斜する。埋土は灰褐色シルトでマンガンをよく含んでいた。出土遺物には弥生土器片3点, 瓦器片1点, 土師質土器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

② 近世

i 溝跡

SD-604

6. F区

調査区西側で検出した東西溝で、SD-601を切っていた。検出長4.32 m、幅約1.30 m、深さ2~13 cmを測る。主軸はN-78°-Wを示す。基底面は平らで7.300 m前後を測る。埋土は灰褐色シルトでマンガンを多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片1点、須恵器片1点、土師質土器片2点、陶器2点がみられ、陶器1点(6009)が図示できた。

出土遺物

陶器 (Fig.214-6009)

6009は碗で、底径3.6 cmを測る。高台は低く細いもので、若干ハの字状に開く。釉は光沢のある透明釉を高台の境付近まで薄く施す。釉には細い貫入が入る。

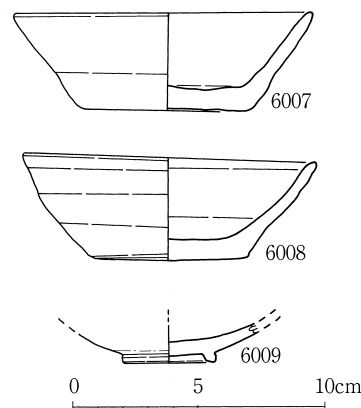


Fig.214 F区遺構出土遺物実測図

SD-605

調査区西側で検出した東西溝で、SD-601を切っていた。SD-604にほぼ平行するが、SD-604に切られる。検出長3.56 m、幅13~30 cm、深さ1~5 cmを測る。主軸はN-78°-Eを示す。基底面は平らで標高7.300 m前後を測る。埋土は灰褐色シルトでマンガンを多く含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD-606

調査区西側で検出した南北溝で、SD-604に切られていた。検出長5.40 m、幅40~67 cm、深さ2~10 cmを測る。主軸はN-13°-Wを示す。断面形は舟底状を呈し、基底面は北(7.309 m)から南(7.217 m)に傾斜する。埋土は灰褐色シルトで、マンガンを多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片1点、土師質土器片1点、陶器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

Tab.9 掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (㎡)	棟方向 (NはGN)	備考
	梁×桁	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁(m)	桁(m)			
SB-201	1×2	1.80 × 2.70	1.80	1.30~1.40	4.86	N - 7° - E	
SB-202	(2×2)	(2.95) × (3.85)	1.40~1.55	1.90~1.95	(11.36)	N - 80° - W	
SB-203	(1×1)	(1.60) × (2.40)	1.60	2.40	(3.84)	N - 84° - W	
SB-204	3×3	5.60 ~ 5.70 × 5.65 ~ 6.10	1.60~2.20	1.85~2.10	33.19	N - 85° - E	
SB-205	2×3	4.50 × 6.00 ~ 6.05	2.00~2.50	1.70~2.25	27.11	N - 4° - E	間仕切柱
SB-206	2×2	3.90 ~ 4.10 × 4.45 ~ 4.50	1.85, 2.05	2.10~2.35	17.90	N - 84° - W	総柱
SB-207	2×6	5.00 ~ 5.20 × 12.50 ~ 12.75	2.50, 2.60	1.50~2.60	64.64	N - 88° - W	
SB-208	2×4	3.50 ~ 3.80 × 8.00	1.70~1.90	1.70~2.15	28.40	N - 6° - E	
SB-301	1×3	2.70 × 6.25	2.70	1.85~2.35	16.88	N - 3° - E	
SB-501	1×2	3.80 × 4.10	3.80	2.05	15.58	N - 12° - W	
SB-502	1×2	1.75 × 6.00	1.75	2.75・3.25	10.50	N - 79° - E	
SB-503	(1×1)	2.00 × (4.00)	2.00	4.00	(8.00)	N - 4° - W	

第Ⅳ章 考 察

1. 弥生時代

本遺跡における出土遺物の中では弥生後期の土器が過半を占める。後期の遺物包含層及び遺構から出土した中で、実測可能な遺物は497点を数える。器種構成は壺、甕、鉢が主体であり、数点の高杯、支脚等がある。以下、第Ⅲ章に記した土器分類に沿って検討を進めたい。

壺は73点出土しており、組成比率からいうと14.7%である。口縁部の形態から、4類に分類した。分類可能な46点の中で、口縁部が強く外反するB類がほぼ5割を占め、二重口縁壺(D類)が約2割を占める。最も多い形態は広口の口縁部を有し、胴部が球形に近く底部は小さな平底のものである。胴部外面にはタタキの後にハケ調整を加え、内面には指ナデ調整とハケ調整を施す。但し壺に関しては、出土数が少ない上に、口縁部から底部まで残存する良好な資料がほとんどなく、このような分類も形態的な特徴を十分反映しているとは言い難いということを付け加えておく。

甕は312点を数え、組成比率62.8%と多数を占める。大きく3類に分類でき、最大径を胴部に有するA類が72.8%と最多であり、口径と胴径がほぼ同じ値を示すB類は19.3%、深鉢形の甕であるC類は7.9%と少ない。ほとんどの個体が倒卵形の胴部を有し、くの字状に外反または外傾する口縁部を持つ。外面には明瞭なタタキ目を残すものが多数を占める。内面は指ナデ調整とハケ調整を組み合わせるものが多い。底部は、平底が8割強を占め、丸底が約1割、他が尖底やボタン状に突起する底部である。

鉢は97点と甕に次ぐ出土数を数え、組成比率は19.5%である。口径で3類、器高指数で4類に分け、それらを組み合わせて大きく12類に分類した。口径16cm以上で器高指数33以上45未満のA-Ⅱ類と、口径12cm以上16cm未満で器高指数45以上55未満のB-Ⅲ類がそれぞれ10点づつ、口径12cm未満で器高指数55以上のC-Ⅳ類が8点と多い。口径だけで比較するとA類(口径16cm以上)が31点と最多で、B類(口径12cm以上16cm未満)19点、C類(口径12cm未満)16点の順である。器面調整は外面にタタキ、内面にハケ調整を施すものが多い。また、底部は、平底が約5割、丸底が3割、他が尖底やボタン状に突起する底部である。

その他に高杯8点(組成比率1.6%)、甌、支脚がそれぞれ2点、器台、蓋、手づくね土器が1点づつ出土している。全体的にみると外面には、明瞭なタタキ目を残すものが圧倒的に多く、甕や壺でタタキ目をハケで消そうとする意図もみられるが、そのような個体でもほとんど上胴部などにはタタキ目が残る。底部は平底が優位を占めるが、ほとんどが極めて小さな平底で、丸底や尖底も散見できる。これらの後期土器は概ね後期後半から終末期にかけてのものと考えられ、検出した遺構もすべてこの時期で捉えられる。

遺構は竪穴状遺構3基、竪穴住居跡1棟、土坑12基、溝跡4条、ピット2個、祭祀関連遺構1基、性格不明遺構1基、土器集中遺構11ヶ所を数え、他の時期の遺構に比較すると遺構数は少ない。これはB区やC区北東側、E区などで遺構検出面が比較的浅いことに起因するもので、中近世の段階に多くの弥生時代の遺構が削平されたものと考えられる。地形は微高地状のB区西側から、C区中央で一端下がった後、C区西側へ向って徐々に上がる。E区では東の残丘に近い部分が高く、西に向って

1. 弥生時代

傾斜する。主たる遺構をみてみると、B区で検出したST-201・202は遺物が多量に出土しているものの、柱穴も検出できず、住居跡である可能性は低い。E区のST-501についても明確な柱穴が確認されておらず、これも住居跡である可能性は低いものと考えられる。C区のST-301は斜面部で検出した住居跡で、土佐市では初めて発見された竪穴住居跡である。平面形は隅丸方形を呈し、床面中央の土坑は埋土中に焼土や火を受けた石が混入しており、炉として使用されたものと考えられる。この土坑を挟むように掘られた2つのピットが支柱穴であり、貯蔵穴と考えられる土坑も設けられている。床面より15~25cmほど上に浅い焼土を有する面があることから少なくとも2時期に渡って使用されたものとみられる。しかし、焼土の面では明確に付随すると考えられる遺構が確認できず、住居がある程度埋まった段階で火を使用したものと推測され、祭祀的な行為が行われた可能性も考えられる。ST-301に類似する形態の竪穴住居跡として二ノ部遺跡のST-202が挙げられる¹⁾。貯蔵穴はないものの、舟形を呈する中央土坑と2つの支柱穴が確認されており、住居跡中央部床面から10~20cm上に焼土の堆積が認められる。ST-202を含む二ノ部遺跡の竪穴住居跡は弥生後期後半から終末期にかけての時期のものと考えられている。

E区で検出したSF-501は約870点の弥生土器と共に、径3.0mの範囲内に川原石、叩石、砥石等が集中する遺構で、一部の石は配石されたように並んでいた。三島神社が鎮座する残丘の西裾部に当たり、祭祀に関連するものではないかと考えられる。C区のSC-306でも、径2.0mの範囲内に川原石を主体とする集石を確認している。SC-306については人為的に石を配した痕跡は認められないものの北西部の微高地から続く斜面の裾で、弥生土器が約1,000点も出土しており、SF-501と同様に祭祀的な意味合いを持つ遺構である可能性が高い。また、SC-306以外にも弥生土器が集中して出土する遺構が約10ヵ所ある。中でも北西の微高地からの斜面裾部に当たるSC-307からは2,000点を越える遺物が出土している。しかし、遺存状態が不良で実測可能な遺物は13点と少なく、これらの遺物は斜面上から投棄されたものとみられる。

今回の調査で検出できたこれらの遺構は後期後半から終末期の集落に関するものと考えられる。土佐市バイパス関連の発掘調査が進む中で、現在の土佐市中心部は低地と微高地が入り組む複雑な地形であることが分かってきた。古墳時代頃までの当地付近は仁淀川の氾濫の影響を受ける低湿地であり、点在する微高地に人々の生活拠点があったと推定されている²⁾。本遺跡周辺部においても、C区北西などの微高地上に集落本体が存在し、その周りでは祭祀などを行ったものとするのが妥当であろう。北西の微高地の斜面裾部からSC-306・307にかけて多量に出土した遺物は、集落で使用したものが投棄され、斜面下に土器溜りとして残存したものと考えられる。今後、本調査区北西部の発掘調査が行われれば、集落の全容を明らかにすることも可能であろう。なお、前期及び中期的な様相を呈する遺物もC区y層、F区Ⅷ層などで出土しているが数点であり、今回の調査結果から前期、中期について述べることは困難である。

土佐市域においては、近年土佐市バイパス、四国横断自動車道等の工事に伴い、調査件数も増え弥生時代の遺跡も徐々に増加しつつある。今回の発掘調査は、土佐市における弥生遺跡の調査では初の本格的なものであり、周辺の弥生時代を解明する上での貴重な資料が蓄積できたと考える。

(伊藤)

2. 古代

明確な古代の遺構が確認されたのは堆積層の残存状態が良好であったE区の東部のみである。E区では畝状遺構の他に検出長31.36 m、幅2.80~3.84 mを測る溝跡3条を検出している。SD-503は両端が調査区外へ続いたため、更に長くなるものとみられる。規模が大きなことから何らかの区画をなす溝跡とみられるが、E区西部は古代の遺物包含層が削平されており建物跡等の遺構は確認できなかった。また、古代の遺物は少ないが、遺物包含層の時期からみると7世紀の後半から9世紀には周辺部に集落が存在したものとみられる。

確認された遺構をみてみると、まず、畝跡と考えられる畝状遺構が作られ、その後、畝状遺構はSD-503に切れ、SD-503は8世紀後半から9世紀には埋没したとみられる。畝状遺構との時期差については遺物が少なく判然としないが、畝状遺構の主軸がN-84~88°-Wであるのに対し、SD-503はN-19°-Wであることから一時的に断絶があった可能性も考えられる。SD-503が何らかの区画溝であった可能性を考えると周辺で土地の改変が行われたことも考えられよう。

一方、この時期隣接する光永・岡ノ下遺跡や林口遺跡では緑釉陶器、暗文の入った土師器皿や朱塗りの土師器杯などの官衙関連の遺物が出土し、さらに南方には古代の須恵器窯である犬ノ場窯跡が確認されている。しかし、これまでの発掘調査では、光永・岡ノ下遺跡や林口遺跡からは官衙に関連する建物跡などは確認されておらず、その中心部は立地に適した三島神社の鎮座する残丘の南側付近ではないかとみられている^③。このことからすると今回天神遺跡で検出したSD-503もその規模からみて官衙に関連する溝跡であった可能性も考えられるが、その性格については周辺部特に三島神社の鎮座する残丘の南側の調査を待たなければならない。(田中)

3. 中世

今回の調査の主体となる時期で、ほぼ全域で遺物包含層並びに遺構が確認された。これら遺構は、三島神社の鎮座する残丘(低位段丘の残丘)の裾部(C・E・F区)とそれから北へ延びる微高地(B区)上に立地している。北に延びる微高地(B区)は丁度光永・岡ノ下遺跡の西側に展開する後背湿地を境としている。光永・岡ノ下遺跡^④は仁淀川の自然堤防上^⑤に立地し、西側と東側が後背湿地となっている。B区東側と光永・岡ノ下遺跡の西側の後背湿地部分からは建物跡など集落を構成する遺構は確認されなかったが、企画性が看守される溝跡が検出されており、考古学的には水田耕作が行われていたのではないかと推察される。しかし、土壌分析^⑥の結果からそれを科学的に立証する積極的な結果は得られておらず、今後の課題となっている。

今回天神遺跡A区で確認した光永・岡ノ下遺跡から続く後背湿地の立ち上がりは、光永・岡ノ下遺跡のそれに比べ傾斜度がきつく、光永・岡ノ下遺跡でみられたような後背湿地と区画する溝跡が確認されなかったことからその立ち上がり自体が集落との境をなしたものと考えられる。そして、微高地上を居住域、下の後背湿地を生産域として区分していたものと考えられる。

残丘西側に当たるE区では畝跡と考えられる畝状遺構を検出した。畝状遺構については後述するが、中世の畝状遺構は溝によって区画され、溝の北側に展開している。一方、溝の南側では掘立柱

4. 近世以降

建物跡等集落を構成する遺構が確認されていることから屋敷とそれに伴う畠とも考えることができ、集落内での一定の企画性が看守される。

今回確認されたこれら集落の時期は12世紀後半から14世紀のもので、その中心は13世紀代と考えられる。光永・岡ノ下遺跡や林口遺跡とほぼ同時期であり、その時期がこの付近の最も盛行を迎えた時期といえるのではなかろうか。林口遺跡以外は15世紀以降の遺構は確認されておらず、集落が移動したものと考えられる⁷⁾。(田中)

4. 近世以降

本遺跡における近世以降の遺構・遺物はB区からF区の間分布している。近世以降と大きく括ったが、出土する遺物の大半は近代(明治・大正期)のもので、後は近世後半のものが散見される程度である。出土遺物の中では磁器が目立ち、中でも銅版転写によるものと型紙摺りによるものが多くみられる。これらの技法は主に近世末期から近代にかけて用いられたもので、型紙摺りは絵柄を切り抜いた型の上から絵の具を塗り付け絵を表す技法であり、主として染付に使われた。銅版転写は蜜蝋に松脂・アスファルト等を加え、銅版の上に引いて彫刻し、塩化鉄の水溶液で腐食させる。この版面に顔料を塗布して払拭し、窪んだ部分に残った顔料を紙に写して、これを器に転写する技法である⁸⁾。型紙摺りはすでに17～18世紀に用いられた例もあるが、この技法を用いたものが大量に生産されるのは明治期に入ってからである。そして大正期に入ると銅版転写に取って代られる。

近世以降の遺物包含層はC区の第Ⅰ層と第Ⅱ層、E区の第Ⅴ層である。C区の第Ⅰ層、第Ⅱ層は近代の包含層で、明治期の瀬戸・美濃産の磁器を中心に出土しており、その中に肥前産のものが数点含まれる。肥前産の磁器は第Ⅰ層から3001・3012・3013・3018・3023の5点、第Ⅱ層から3043・3044の2点があり、どれも18世紀後半から19世紀代のものと考えられる。能茶山焼のものも第Ⅰ層から2点(3002・3010)、第Ⅱ層から1点(3047)が出土している。また、3022は第二次世界大戦中、岐阜で生産された白磁の皿である。「岐331」と記されており、戦時に全国の窯元に番号が付けられ、国家による統制を受けた証拠であり、SK-210出土の薬筒と共に貴重な戦時遺産の一つと言える。E区の第Ⅴ層は近世の遺物包含層であり、出土遺物は少ないが、備前焼や同安青磁とともに、肥前系の磁器が数点出土している。

検出できた遺構は柵列2列、土坑19基、溝跡16条、ピット4個、畝状遺構4条、水溜り状遺構2基、性格不明遺構1基で、これらの遺構の中で注目されるものは遺物がまとまって出土しているB区のSK-210、C区のSK-317、D区のSK-401である。これらはどれも廃棄土坑と考えられる。SK-210から出土した遺物は、ほとんどが陶磁器類とガラス類であった。出土遺物には磁器の占める割合が高く、明治期から大正期にかけての瀬戸・美濃産のものが多量に出土している。遺構の埋没時期については、薬筒が出土していることから戦時中以降と考えられる。出土した陶器には2358・2359の片口、2360の徳利、2363の湯たんぽなどとSK-317の3566の徳利にいくつかの共通する技法が見られ、同じ窯で生産された可能性が高い。この中の数点は陶胎染付で、呉須で商店名や高岡町という地名が記されており、明治末以降に在地の窯で生産された陶器と考えられる。SK-317も出土遺物のうち磁器の占める割合が高く、明治・大正期の遺物が中心である。瀬戸・美濃産のものは

ほとんど大正期のものであり、近世と考えられる遺物は3519の蓋、3546～3548の鉢、3554の蕎麦猪口の5点であり、うち3554以外の4点は肥前産である可能性が高い。また3564・3565の鉢、3567の徳利、及びSK-401の4006・4007の鉢、SK-210の2361、SK-401の4014の徳利などは鉄釉を薄く施し、底部は露胎で、高台の付くものは削り出しの後は未調整である等の共通する特徴を有し、これらも明治期から大正期の在地の窯で生産された一群ではないかと考えられる。SK-401からの出土遺物は近世末の肥前産のものを数点含むが、他はほとんどが近代の遺物である。医療器具等も出土しており、埋土中の3層に敷かれた石灰から医療に関わった遺物ないしは患者の遺品等を土中に密封し、消毒または浄めを行った可能性が考えられる。

土佐市域は近世中期より後免、山田、野市、赤岡、中村と並ぶ六大在郷町のひとつとして発展した町並みであり、盛んな商業活動は近代高岡町へと受け継がれてゆく⁹⁾。SK-201・317・401の土坑に廃棄された遺物を始め、本遺跡から出土する近世以降の遺物をみると近世末から明治・大正期にかけての土佐市域の商業活動の繁栄を示唆するものが少なからず含まれてる。また、当時の人々の生活や風俗が垣間見られる遺物も多く出土しており興味深いものがある。(伊藤)

5. 畝状遺構について

E区で畝間の痕跡とみられる平行する小溝群を検出した。これらは所謂畝の痕跡である畝状遺構と考えられるもので、三島神社の鎮座する残丘の西側裾斜面部に位置し、古代、中世、近世の3時期のものが同じ場所で確認された。

古代の畝状遺構は西部が削平を受けているものの少なくとも3時期に分けられ、すべて東西方向を指向する。SU-501とSU-502とは、主軸方向が若干異なり、切り合い関係からSU-501が古く、主軸方向がN-84°-EからN-88°-Eに変化したものとみられる。SU-503は、主軸方向がN-88°-Eを示すことからSU-502とはほぼ同時期に前後して造られたものとみることができる。ただ、SU-503は緩い斜面に位置すること、長さが短く畝幅が狭いことなどSU-501・502とはやや異なる点がみられることから別の作物を栽培していた可能性も考えられる。古代の遺物包含層である第Ⅶ層の花粉分析の結果ではソバ属の花粉が検出されており、ソバ栽培の可能性が示唆されている。また、珪藻分析の結果では陸生珪藻が90%以上を占めており、比較的乾いた環境であったものとみられる。時期については遺物が少ないため明確ではないが、SU-501・502がSD-503に切られることと遺物包含層の時期からみて8世紀には機能していたものとみられる。

中世の畝状遺構は北側が削平されているものの少なくとも2時期に分けられる。古代とは異なり南北方向を指向するSU-504とSU-505を検出した。中世の畝状遺構は古代よりも畝間の幅が広く、畝幅にばらつきがみられる。花粉分析ではイネ属、オオムギ族の割合が高く、穀類を栽培していた可能性が考えられている。ただし、稲藁や麦藁は保温・保湿のために敷藁として利用されたとも考えられるので断定はできないが、古代とは異なる作物を栽培していたのではなかろうか。また、古代には東側の緩斜面も畝地として利用して特に明確な区画を持たなかったのに対し中世には斜面部に幅約1.00mのSD-508、西側と南側はL字状の溝SD-515を配して区画されている。北側を区画する溝は削平されているものとみられるが、少なくとも東西27m、南北30mの区画された範囲で畑

5. 畝状遺構

作が行われていたことが看守される。時期的には、畝間から瓦器等が出土しており、E区の西側で検出した掘立柱建物等と同時期と捉えられることから13世紀頃の屋敷に付随する畝とみることができよう。また、遺物包含層からは白磁が比較的多く出土していることや東の区画溝であるSD-508から播磨型の土師質土器の釜が出土していることから12世紀後半から14世紀頃まで長期間にわたって存続していた可能性も考えられる。

近世ではSU-506~509の4時期の畝状遺構を確認した。これらの畝状遺構は、中世の畝状遺構が立地していた斜面部ではなく、ほぼ平らになった部分から西側で検出され、畝間はすべて南北方向を指向する。主軸方向はN-8~13°-Wを示し、中世のそれに比べずれが少なく、一定継続して営まれた可能性がある。中世の畝状遺構に比べると畝幅、畝間幅ともに狭くなっている。花粉分析では中世と同じく敷藁の可能性もあるもののイネ属とムギ類を栽培していたものとみられる。また、近世ではゴマ属の花粉も検出しており、ゴマ栽培の可能性もある。時期は遺物が少なく、遺構も削平されており、明確にすることは難しいが、遺物包含層から17世紀中葉から19世紀の遺物が出土していることからその時期のものではなかろうか。

畝状遺構は高知県では小籠遺跡など6ヵ所で確認されているのみで、天崎遺跡⁹⁰が中世のものである以外はすべて近世以降であり、古代の畝状遺構が確認されたのは本遺跡が初めてである^{91,92}。しかも古代、中世、近世の3時期のものがほぼ同じ場所で検出されたことは、この土地が畝地に適したと言えそうである。 (田中)

6. まとめ

平成7年度に実施した土佐市バイパス建設に伴う試掘調査で確認された天神遺跡は、平成8年度に第Ⅰ調査地区⁹³、平成9年度に第Ⅱ調査地区の北半分、平成10年度に第Ⅱ調査地区の南半分の調査を行い、工事によって影響を受ける部分の発掘調査が完了した。3年間に互って実施した調査では数多くの遺構・遺物が発見された。中でも土佐市初の堅穴住居跡、県内では珍しい完形の龍泉窯系青磁碗、古代、中世、近世にわたる畝跡そして多量の近代陶磁器等々は貴重な資料であると共に土佐市の歴史解明には欠くことのできないものである。以下、平成8年度の調査成果も踏まえ天神遺跡の消長を概観しまとめとしたい。

天神遺跡は、光永・岡ノ下遺跡や野田遺跡のように自然堤防上で営まれた遺跡ではなく、三島神社が鎮座する残丘(低位段丘の残丘)の裾部及びそこから広がる微高地上に展開する遺跡⁹⁴であり、生活に適した微高地が低湿地や後背湿地に隣接し、起伏に富んだ地形となっている。

このような遺跡立地にある天神遺跡で確認された最も古い時代は縄文時代まで遡る。ただし、遺物が単発的に出土しているのみで、人の痕跡を確認するには至っていない。北約3kmにある居徳遺跡や火渡川を挟んだ林口遺跡からは縄文時代後期の遺構・遺物が多数確認されており、それとの関連が考慮される。弥生時代に入り、林口遺跡第Ⅱ調査地区⁹⁵から前期前半の土器がまとまって出土し、居徳遺跡群からは同期の水田跡⁹⁶が確認され、周辺部分では少なからず人の痕跡を垣間見ることができるが、本遺跡では当時の土器が僅かに出土する程度であり、集落を形成するような遺構は確認されていない。明確に人の痕跡を留めるようになるのは県内一円に集落が形成されるよう

になる後期後半になってからである。今回の調査地区では集落本体は確認されていないが、周囲で行われていたであろう祭祀跡を多数確認した。さらに、竪穴住居跡¹⁰⁾も発見され、比較的大きな集落が周辺部に存在したことはほぼ間違いないであろう。B区の微高地は一定北に広がるものとみられるが集落本体を形成するにはやや狭く、残丘の北西には低湿地が広がり、残丘の東側は光永・岡ノ下遺跡に繋がる後背湿地となっていることから前述の残丘南側が有力視される。このことは弥生時代に限らず古代以降についても言えることである。

古墳時代になると一転して人の痕跡が途絶えてしまい、7世紀代の須恵器が数点確認される程度で、集落は別の場所に移動したのであろう。古墳が確認されている東部遺跡集中域の西側や南部遺跡集中域¹¹⁾が有力視される。

古代になり再び生活痕跡を留めるようになる。残丘西側で確認された溝跡は比較的大きなものであり何らかの区画に関係するものとみられ、南の延長線上¹²⁾にはその性格を決定する遺構が存在するものと考えられる。光永・岡ノ下遺跡からは緑釉陶器や搬入された暗文の土師器などが出土し、周辺部には犬ノ場窯跡が存在し、さらに古代の柱穴とは断定できなかったが方形の掘方を持つ柱穴が検出されていることから推察すると遺跡南側には官衙に関連する遺構が存在する可能性が考えられる。また、同じ残丘西側斜面部では畑作が行われていたとみられ、畝間の痕跡が検出された。

続く平安時代末から鎌倉時代が、一連の発掘調査の結果から見る限り本遺跡の盛行期となっている。東隣の光永・岡ノ下遺跡や西隣の林口遺跡も12世紀後半頃から盛んに集落が構成され、貿易陶磁を始め、瓦器や東播系須恵器等の搬入品が数多く出土し、活発な商品流通があったことを証明している。このような中で、瓦器の在地生産の可能性を暗示する資料も出土し、この付近が当時の土佐市の中心地域であったことを示している。また、埋没した古代の畝のほぼ同じ上に畝が作られている。この時期は屋敷の区画された一角で畑作が行われていたようである。このような屋敷も室町時代に入ると徐々にその姿を消して行き、火渡川対岸の林口遺跡に小規模な屋敷が残るだけとなる。江戸時代に入り周辺部で活発な商業活動が行われる中で、建物跡は確認されていないがそれに付随する遺構が比較的多く検出され、多量の遺物が出土している。また、埋没した中世の屋敷や畝のほぼ同じ上で再び畑作が行われるようになる。近代になり残丘西側は耕作地に姿を変えるが、残丘北側は引き続き生活の痕跡を留め今日に至る。 (廣田)

註

- (1)『二ノ部遺跡・城跡』 1995.3 佐川町教育委員会
- (2)『光永・岡ノ下遺跡』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書I— 2000.11 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (3)(2)に同じ
- (4)(2)に同じ
- (5)現在確認できる西端の自然堤防で、これより東側には2筋の自然堤防がみられ、野田遺跡等が立地している。

現在この自然堤防を肉眼で確認することはできないが、丁度、江戸時代に野中兼山が作ったとされる用水

6. まとめ

路が南北に走っており、それが自然堤防の頂部であったことが分かる。

- (6) 第V章で今回の分析結果を掲載している。なお、光永・岡ノ下遺跡の自然科学分析結果については平成8年度に林口遺跡第I調査区と一緒にしている関係上『天神遺跡I・林口遺跡I』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書II—の中で報告している。
- (7) 『天神遺跡I・林口遺跡I』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書II—の中でも『長宗我部地検帳』を踏まえ遺跡の消長について触れている。
- (8) やきもの辞典 平凡社 1996年
- (9) 『土佐市史』土佐市 1978年
- (10) 『天崎遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999.3
- (11) 『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度大会資料集 第1集
- (12) 『天神遺跡I・林口遺跡I』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書II—で報告している天神遺跡第I調査地区からも近世の畝状遺構が確認されている。
- (13) 『天神遺跡I・林口遺跡I』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書II—2001.2 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (14) このことから考えれば、残丘の南側が最も遺跡の立地に適した部分とみることができ、集落の中心部はこの部分に所在するであろう。現在、散布地となっている天神三島遺跡がこれに当たる。実際、各調査区から検出された遺構は集落の中心部とは言い難いものである。
- (15) 平成11年度の調査の際、遺物包含層からではあるが比較的まとまった量の弥生時代前期の土器が出土している。平成13年度に報告する予定である。
- (16) 断面観察ではあるが、水田跡と見られる土層を確認している。
- (17) この竪穴住居跡は、構造や堆積状態からみて一般の住居ではなく、周辺で盛んに行われた祭祀に関連したものであった可能性が考えられる。
- (18) 廣田佳久「3. 遺跡の地理的・歴史的環境」『光永・岡ノ下遺跡』—土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書I— 2000.11 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (19) 北の延長線には残丘裾部に沿って低湿地へ向うものとみられ、排水に関係した溝跡であった可能性がある。

第 V 章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

天神遺跡は仁淀川と波介川の合流部にあたる沖積段丘上に立地する弥生時代、古代、中世及び近世の複合遺跡である。今回の天神遺跡第Ⅱ調査地区の調査では、弥生時代の住居跡、古代の堀立柱建物跡と溝跡、中世の屋敷跡などが検出されている。

今回は、本遺跡において人間の活動がみられた各時期の古環境に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析調査を実施する。調査内容は、まず、調査区内の堆積物の成因に関する情報を得ることを目的として珪藻分析を実施する。同時に堆積物中の花粉化石と植物珪酸体の層位的産状を調べ、これらの結果を総合的に捉えることで本遺跡における古植生や土地利用状況に関する検討を行う。また、弥生時代の住居跡北西隅の床面直上から甕が検出されたが、この甕の内容物に関する情報を得るために土壌理化学分析と珪藻分析も行う。この際、本遺跡第Ⅰ調査地区と近隣の林口遺跡、光永・岡ノ下遺跡の調査成果も含めて検討する。

1. 試料

試料は、平成9年度調査と平成10年度調査の2回にわたり採取された。平成9年度の調査では、A区がⅨ層～Ⅺ層から3点、B区がⅫ層・ⅩⅣ層・SX-201覆土から計10点、C区が弥生時代の住居跡(ST-301)出土甕内充填土壌(以下、甕内土壌とする)の1点、E区がSD-503の覆土から4点、合計18点の試料が採取された(Tab.10)。

平成10年度調査では、A区が中世の層準から9点、B区が中世の層準から8点と弥生時代のSC-1・3から各1点、C区が弥生時代～近世ないし近代の層準から14点、E区が古代・中世・近世の遺構から56点、弥生時代～中世の層準から6点、合計94点である(Tab.11～13)。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で約7 g 秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の視野を走査し珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986,1988,1991a,b),K.Krammer (1992),Reichardt,E.(1995),Lange-Bertalot,H. and D.Metzeltin (1996),Lange-Bertalot,H. et al.(1996),Metzeltin,D. and A.Witkowski (1996)などを用いる。

同定結果は、海水生種、海水-汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。堆

2. 分析方法

Tab. 10 平成9年度調査分析試料の一覧

調査地区	試料名		土質	時代観	分析項目			
					D	P	PO	土理
A区	IX層		にぶい黄褐色粘土質シルト		○	○	○	○
	X層		灰黄褐色粘土質シルト	中世遺物包含層	○	○	○	○
	XI層		暗灰黄色粘土質シルト		○	○	○	○
B区	SX-201	埋土1	① 灰褐色シルト質粘土		○	○	○	○
			② 灰褐色シルト質粘土		○	○	○	○
			③ 灰褐色シルト質粘土		○	○	○	○
		埋土2	① 暗灰褐色シルト質粘土		○	○	○	○
			② 暗灰褐色シルト質粘土		○	○	○	○
			③ 暗灰褐色シルト質粘土		○	○	○	○
	XII層	① 暗灰黄色粘土質シルト			○	○	○	○
		② 暗灰黄色粘土質シルト			○	○	○	○
		③ 暗灰黄色粘土質シルト			○	○	○	○
	XIV層		暗灰黄色シルト質粘土	弥生時代遺物包含層	○	○	○	○
C区	ST-301		黄褐色シルト質粘土	弥生時代の甕内土壌	○			○
E区	SD-503	埋土1	灰色シルト質粘土		○	○	○	○
		埋土2	灰色シルト質粘土		○	○	○	○
		埋土3	暗灰色シルト質粘土		○	○	○	○
		埋土4	暗灰褐色シルト質粘土		○	○	○	○

注. D:珪藻分析 P:花粉分析 PO:植物珪酸体分析 土理:土壤理化学分析

積環境の解析にあたっては、淡水生種については安藤(1990)、汚濁耐性についてはAsai,K. and Watanabe,T.(1995)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として示す。なお、表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz,1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、そ

の間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向が

Tab. 11 平成10年度調査分析試料一覧1

調査地区	地点・試料名	採取層位	時代観	分析項目		
				D	P	PO
A区	南壁セクション ①	IX層		○	○	○
		X層	中世	○	○	○
		XI層		○	○	○
	南壁セクション ②	IX層		○	○	○
		X層	中世	○	○	○
		XI層		○	○	○
	南壁セクション ③	IX層		○	○	○
		X層	中世	○	○	○
		XIV層		○	○	○
B区	南壁セクション ①	III層		○	○	
		IV層	中世	○	○	
		VI層		○	○	
		XI層		○	○	○
		XII層	中世	○	○	○
	南壁セクション ②	II層		○	○	
		IV層	中世	○	○	
		VII層		○	○	
	SC-201		弥生	○	○	
C区	南壁セクション ①	II層	近世 or 近代	○	○	
		V層	中世	○	○	
		XIII層	弥生	○	○	
		XVII層	弥生	○	○	
	南壁セクション ②	V層	中世	○	○	
		VI層	古代~中世	○	○	
		VIII層	古代	○	○	
	北壁セクション	XII層		○	○	
		XV層	弥生	○	○	
	トレンチ3南壁セクション	XIV層	弥生	○	○	
		XV層	弥生	○	○	
		XVI層		○	○	
		XX層	弥生	○	○	
XXI層			○	○		

2. 分析方法

ら稲作や古植生について検討するために、植物珪酸体の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(4) 土壤理化学分析

今回の土壤理化学分析では、甕の内容物として淡水・海水・アルコールなどの液体、穀物などの固体、動植物遺体などを仮定し、塩類濃度の指標としてpH(H₂O)・電気伝導度(EC)・交換性塩基・硫化第二鉄態硫黄(パイライト)を、また有機化合物の指標として全炭素・全窒素・可給態窒素・全リン酸・可給態リン酸を選択した。

Tab. 12 平成10年度調査分析試料の一覧2

調査地区	地 点	試料名	採取層位	時代観	分析項目		
					D	P	PO
E区	VI層	1	堆積層	近世	○	○	○
	SU-507	2	埋土	近世	○	○	○
	VI層	3	堆積層	近世	○	○	○
	SU-506	4	埋土	近世	○	○	○
	VI層	5	堆積層	近世	○	○	○
	SU-506	6	埋土	近世	○	○	○
	VI層	7	堆積層	近世	○	○	○
	SU-508	8	埋土	近世	○	○	○
	VI層	9	堆積層	近世	○	○	○
	SU-506	10	埋土	近世	○	○	○
	VI層	11	堆積層	近世	○	○	○
	SU-508	12	埋土	近世	○	○	○
	VI層	13	堆積層	近世	○	○	○
	SU-506	14	埋土	近世	○	○	○
	VI層	15	堆積層	近世	○	○	○
	溝埋土①	16	埋土	近世	○	○	○
	VI層	17	堆積層	近世	○	○	○
	SU-507	18	埋土	近世	○	○	○
	VI層	19	堆積層	近世	○	○	○
	SU-506	20	埋土	近世	○	○	○
	VI層	21	堆積層	近世	○	○	○
	SU-508	22	埋土	近世	○	○	○
	VI層	23	堆積層	近世	○	○	○
	SU-508	24	埋土	近世	○	○	○
	VI層	25	堆積層	近世	○	○	○
	溝埋土②	26	埋土	近世	○	○	○
	VI層	27	堆積層	近世	○	○	○
	SU-508	28	埋土	近世	○	○	○

pH(H₂O)はガラス電極法, 電気電導度(EC)は白金電極法, 全炭素・全窒素はC Nコーダー法(以上, 土壤標準分析・測定法委員会, 1986), 全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色

Tab.13 平成10年度調査分析試料の一覧3

調査地区	地 点	試料名	採取層位	時代観	分析項目		
					D	P	PO
E区	SD-508	29	埋土1	中世	○	○	○
		30	埋土2	中世	○	○	○
		31	埋土3	中世	○	○	○
		32	埋土4	中世	○	○	○
	SD-509	33	埋土5	中世	○	○	○
		34	埋土6	中世	○	○	○
	SU-505	35	埋土	中世	○	○	○
	溝埋土③	36	埋土	中世	○	○	○
	SU-505	37	埋土	中世	○	○	○
	SU-505	38	埋土	中世	○	○	○
	SU-504	39	埋土	中世	○	○	○
	SU-504	40	埋土	中世	○	○	○
	溝埋土④	41	埋土	中世	○	○	○
	溝埋土⑤	42	埋土	中世	○	○	○
	溝埋土⑥	43	埋土	中世	○	○	○
	SU-501①	44	埋土1	古代	○	○	○
		45	埋土2	古代	○	○	○
		46	埋土3	古代	○	○	○
	SU-502①	47	埋土1	古代	○	○	○
		48	埋土2	古代	○	○	○
	SU-502②	49	埋土3	古代	○	○	○
		50	埋土1	古代	○	○	○
		51	埋土2	古代	○	○	○
	SU-501②	52	埋土3	古代	○	○	○
		53	埋土1	古代	○	○	○
		54	埋土2	古代	○	○	○
SU-501②	55	埋土3	古代	○	○	○	
	SD-504	56	埋土	古代	○	○	○
南壁セクション	—	VI層	中世	○	○		
	—	VII層	古代	○	○		
	—	X層	弥生	○	○		
	—	XIII層	弥生	○	○		
	—	XVI層	弥生	○	○		
	—	XX層	弥生	○	○		

2. 分析方法

法、可給態リン酸はトルオーグ法、交換性塩基はショーレンベルガー法(以上、土壤養分測定法委員会、1981)、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出-水蒸気蒸留法(小川ほか、1989)、硫化第二鉄態硫黄(パイライト)は日本第四紀学会編(1993)を参考に塩酸洗浄-CHNS/Oアナライザー法でそれぞれ行った。以下に各項目の分析操作工程を示す。

<分析試料の調製>

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

<pH (H₂O) >

風乾細土10.00 gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H₂O)を測定する。

<電気伝導度 (EC) >

風乾細土10.00 gをはかりとり、50mlの蒸留水を加えて1時間振とうする。振とう後、すみやかにECメーター(白金電極法)で電気伝導度を測定する。

<全リン酸>

風乾細土1.00 gをケルダール分解フラスコにはかり、はじめに硝酸5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液(バナドモリブデン酸・硝酸液)を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全リン酸含量(P₂O₅mg/g)を求める。

<可給態リン酸>

風乾細土1.00 gを300ml三角フラスコに秤りとり、0.002 N 硫酸溶液 (pH3) 200mlを加え、室温で1時間振とうした後、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態リン酸量 (P₂O₅mg/100 g) を求める。

<全炭素・全窒素>

粉碎土100~1000mgを正確にはかり、助燃剤(酸化コバルト)5gと混合し、サンプルボードに充填した後、CNコーダー(柳本製作所製)に挿入する。試料をキャリアガス(He)気流中で950℃に加熱燃焼し、発生した燃焼ガスを純化させ、CO₂及びN₂の組成にする。TCD検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの全炭素量(T-C%)および全窒素量(T-N%)を求める。

<可給態窒素>

風乾細土10.00 gを100ml三角フラスコにはかり、pH7.0リン酸緩衝液50mlを加え、室温で1時間振とうした後、ろ過する。ろ液一定量を硫酸分解法により分解した後、水蒸気蒸留法によってアンモニア態窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの可給態窒素量(NH₄-Nmg/100g)を求める。

＜交換性塩基＞

風乾細土試料5.00 gを浸透カラムに秤りとり。これをCEC測定用の土壌浸出装置に装着し、1 N酢酸アンモニウム溶液 (pH7.0) 100 mlを加え、4～20時間で置換洗浄し、交換性塩基を浸出させる。交換浸出液全量を200 mlメスフラスコに入れ、水で定容とする。定容液の一定量を採取し、適宜希釈し、干渉抑制剤を添加した後、原子吸光光度計によりカルシウム、マグネシウム、ナトリウム、カリウムを定量する。これら定量値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの交換性塩基含量 (me/100 g) を求める (me : mg当量)。

＜硫化第二鉄態硫黄＞

粉碎土約5.00 gに1 N塩酸を50 ml加え、80℃で45分間加熱した後、濾過・洗浄を行う。濾過残渣を105℃で4時間乾燥させ、メノウ乳鉢で微粉碎した後、CHNS/Oアナライザーにより測定する。この測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの硫化第二鉄態硫黄 (パイライト) 含有量 (FeS₂-S%) を求める。

3. 結果

(1) 珪藻分析

＜平成9年度調査＞

結果をTab.14～16に示す。全般的に珪藻化石の産出が少ない。また、産出する珪藻化石は壊れたり溶解していたものが多い。各地区毎に珪藻化石の産状を述べる。

A区は、IX層～XI層とも珪藻化石が極めて少なく、水生珪藻が1～2個体産出したに過ぎない。

B区は、各試料とも珪藻化石がほとんど検出されない。特にXIV層は無化石である。なお、わずかに産出する珪藻化石は、*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* など陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気のある好気的環境で付着生育する陸生珪藻によって占められる。

C区は、珪藻化石が検出される。*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Pinnularia schoenfelderi*, *P. subcapitata* などの陸生珪藻が優占する。この内、*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* は陸生珪藻の中でも分布が陸上の好気的環境にほぼ限られるA群、*Pinnularia schoenfelderi*, *P. subcapitata* は陸上にも水中にも生育が確認されているB群とされるものである (伊藤・堀内, 1991)。

E区では、各試料とも珪藻化石の産出が1～5個体と非常に少ない。そのため、産出傾向も水生珪藻が多いのか、陸生珪藻が多いのか判断が付かない。

＜平成10年度調査＞

結果をTab.17～36, Fig.215に示す。94試料中、B区南壁セクション①のXII層、C区南壁セクション①のII層、②のV・VI・VIII層、E区の試料番号26・29・31・34の合計9試料から珪藻化石が産出する。これら9試料における完形殻の出現率は40%前後と低い。残り86試料では、珪藻化石の検出個体数が少ない。なお、E区試料番号1・28・35・43・50～55では検出個体数が少ないが、湿地や沼沢地などに一般的な*Eunotia praeurupta*, *Pinnularia* 属, *Cymbella silesiaca*, 富栄養水域に一般的な*Nitzschia palea*, *Navicula confervacea*, *Craticula* 属, それに陸生珪藻の*Hantzschia*

Tab.14 平成9年度調査珪藻分析結果(1)

種類	種類	生態性		環境指標種	A区			B区					C区		E区		
		塩分	pH		IX層	X層	SX-201埋土			埋土2		XVII層	XVIII層	ST-301	SD-503		
							①	②	③	①	②				①	②	③
<i>Gomphonema pseudoaugur</i> Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	3	-
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	1
<i>Achnanthes subhudsonis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	1	2	-	2	-	-	7	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	1	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	1	1	1	1	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	1
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema clevei</i> var. <i>inaequilongum</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	O,U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-

Tab.15 平成9年度調査珪藻分析結果(2)

種類	生態性		環境指標種	A区		B区						C区		E区					
	塩分	pH		IX層	X層	XI層	SX-201埋土1		SX-201埋土2		XII層	XIII層	ST-301	1	2	3	4		
							①	②	③	①								②	③
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	18	23	12	5	3	10	-	5	12	-	24	1	-	1
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	2	1	-	-	1	-	-	-	1	-	2	-	-	-
<i>Navicula decussis</i> Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	1	29	6	8	1	3	-	7	2	-	10	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Neidium affine</i> var. <i>longiceps</i> (Greg.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	2	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia perminuta</i> (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	1	-	1	1	-	3	3	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia cf. gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	-	2	-	1	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia major</i> Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-

Tab.16 平成9年度調査珪藻分析結果(3)

種 類	生態性		環境 指標種	A区			B区						C区		E区					
	塩分	pH		IX層	X層	XI層	SX-201埋土1			SX-201埋土2			XII層		ST-301	SD-503				
							①	②	③	①	②	③	①	②		③	1	2	3	4
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	-	-	2	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia schoenfelderii</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	2	-	-	1	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia schroederii</i> (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	2	-	1	1	-	1	-	1	-	10	-	-	-	-	
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	7	1	2	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	1	-	12	4	4	-	4	1	2	2	-	-	-	-	-	
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	2	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	7	3	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>hattorii</i> Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
海水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
海水-汽水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
汽水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
淡水-汽水生種合計				0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
淡水生種合計				2	1	1	36	105	39	32	39	33	2	29	41	0	101	1	4	5
珪藻化石総数				2	1	1	37	107	39	32	40	33	2	29	41	0	101	1	4	5

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性
 Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種
 Ogh-ind:塩分不定性種
 Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
 Ogh-unk:貧塩不明種
 pH:水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi:真中性種
 al-il:好中性種
 ind:pH不定性種
 ac-il:好酸性種
 ac-bi:真酸性種
 unk:pH不明種
 C.R.:流水に対する適応性
 l-br:真正水性種
 l-ph:好水性種
 ind:流水不定性種
 r-ph:好流水性種
 unk:流水不明種

環境指標種

K:中～下流性河川指標種 O:沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種 (以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995)
 R:陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分陸生珪藻, 伊藤・堀内, 1991)

amphioxys, *Navicula mutica* などが共通して産出する傾向がある。以下、珪藻化石が検出される試料について産状を示す。

B区南壁セクション①のⅫ層は、淡水生種の生態的特徴として、貧塩不定性種(少量の塩分には耐えられる種)、真+好酸性種(酸性水域に生育する種)、真+好アルカリ性種(アルカリ性水域に生育する種)、流水不定性種(流水にも止水にも生育する種)が優占あるいは多産する。主な産出種は、流水不定性で沼よりも浅く水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂している沼沢やさらに水深の浅い湿地などに生育しその環境を指標する沼沢湿地指標種群(安藤, 1990)の *Eunotia pectinalis* var. *undulata*, *Pinnularia gibba*, *P. viridis*, 流水不定性で付着性の *Cymbella silesiaca*, *Eunotia monodon* var. *bidens*, *Gomphonema parvulum*, *Pinnularia mesolepta*, 好気的環境に耐性のある陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea* などが5~10%産出する。なお、*Navicula confervacea* は、有機汚濁の進んだ富栄養水域に一般的な好汚濁性種(Asai, K. & Watanabe, T., 1995)でもある。

C区南壁セクション②のⅡ層は、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好流水生種(流水域に生育する種)が優占ないし多産する。主な産出種は、好流水性で付着性の *Navicula elginensis* var. *neglecta*, 流水不定性で中栄養~富栄養の水域に多い *Navicula trivialis* が約15%, 陸生珪藻B群の *Navicula confervacea* が10%と多産し、流水不定性で沼沢湿地指標種群の一種の *Navicula elginensis*, 好汚濁性種の *Sellaphora pupula*などを伴う。

C区南壁セクション②のⅤ・Ⅵ・Ⅷ層では各試料とも組成が類似しており、陸生珪藻が優占する。主な産出種は、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* が20%前後と優占し、B群の *Navicula paramutica*, *Pinnularia subcapitata* が多産する。

E区の珪藻化石群集は、試料番号26・29・31・34で異なる。試料番号26では、貧塩不定性種、真+好アルカリ性種、真+好流水生種が優占あるいは多産する。主な産出種は、好流水性で付着性の *Navicula elginensis* var. *neglecta*, 流水不定性で付着性の *Cymbella silesiaca*, 陸生珪藻B群の *Navicula confervacea* が約15%と多産する。これに対して、試料番号29・31および34は沼沢湿地指標種群で陸生珪藻B群でもある *Eunotia praerupta* が60%前後と優占し、その変種の *Eunotia praerupta* var. *bidens* を伴う。

(2) 花粉分析

<平成9年度調査>

結果をTab.37に示す。いずれの試料もシダ類胞子が多く、花粉化石がほとんど検出されない。また、僅かに検出される花粉化石も保存状態が悪く、外膜が薄くなって壊れている。このような産状において検出される種類は、木本花粉がツガ属・マツ属(複維管束亜属)・コウヤマキ属・クマシデ属・アサダ属・ハンノキ属・エノキ属・ムクノキ属・シラキ属、草本花粉がイネ科・ソバ属・ヨモギ属・タンポポ亜科、シダ類胞子である。

<平成10年度調査>

結果をTab.38~43に示す。花粉化石は、天神遺跡C区南壁セクション①のⅡ層を除き、ほとんど

Tab.17 平成10年度調査地点の珪藻分析結果(1)

種 類	生 態 性		環 境 指 標 種	A区						B区								
				南壁セグジョン①		南壁セグジョン②		南壁セグジョン③		南壁セグジョン①			南壁セグジョン②					
				IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI	III	IV	V	VI	XI	XII
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.)W.Smith	Euh-Meh		E2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>salinarum</i> Grunow	Meh			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>victoriae</i>	Meh			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scapelliformis</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	T	-	-	1	-	-	-	-	1	1	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	T	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk		-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Kraske	Ogh-ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-il	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis angustivalva</i> Petit	Ogh-unk	unk	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis lauta</i> Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>minuta</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	T	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-

Tab.22 平成10年度調査地点の珪藻分析結果(6)

種 類	生 態 性		環境 指標種	C区													E区											
	塩分	pH		流水	南壁セグジョン①			南壁セグジョン②			北壁セグジョン			トレンチ3南壁セグジョン			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
					II	V	XIII	XIII	V	VI	VIII	XII	XIV	XV	XVI	XVII												
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.)W.Smith	Euh-Meh			E2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>salinarum</i> Grunow	Meh				2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>victoriae</i> (Grun.)Cholnoky	Meh				2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scapelliformis</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Achnanthes crenulata</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis angustivalva</i> Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Caloneis lauta</i> Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> var. <i>minuta</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-

Tab.25 平成10年度調査地点の珪藻分析結果(9)

種 類	生 態 性		環境 指標種	C 区												E 区											
				南壁セクション①						南壁セクション②						北壁セクション						トレンチ3南壁セクション					
				II	V	XIII	XVII	V	VI	VIII	XII	XV	XVI	XVII	XVIII	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Neidium gracile</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Neidium hercynicum</i> A.Mayer	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Neidium productum</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1			
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Nitzschia hantzschiana</i> Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Nitzschia perminuta</i> (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	9	6	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Nitzschia romana</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Orthoseira roeseana</i> (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia acrophaeria</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1			
<i>Pinnularia appendiculata</i> (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia brebissonii</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>elliptica</i> (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1			
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia pisciculus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			

Tab.28 平成10年度調査地点の珪藻分析結果(12)

種 類	生 態 性		環境 指標種	E区																										
	塩分	pH		流水	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38
<i>Cymbella mesiana</i> Cholnoky	Ogh-ind	al-bi	l-bi	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella minuta</i> Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	3	-	-	3	-	-	1	-	4	1	13	-	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia monodon</i> var. <i>bidens</i> (Greg.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praeurupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	2	-	1	1	-	2	-	-	1	-	2	1	-	1	56	12	64	1	6	50	1	2	1	2	2	1	-
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>inflata</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia subarcuatoidea</i> Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria pinnata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> var. <i>lagenula</i> (Kuetzing) Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

Tab.33 平成10年度調査地点の珪藻分析結果(17)

種 類	生 態 性			環境 指標種	E区																									
	塩分	pH	流水		39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	VI	VII	X	XI	XII	XIII	XIV	XV
					Ogh-ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind	ind
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	2	1	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis parma</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Epithemia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia bilunaris</i> (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia monodon</i> var. <i>bidens</i> (Greg.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praeurupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	1	-	2	-	-	1	1	-	1	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia praeurupta</i> var. <i>inflata</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia subarcuatoides</i> Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria pinnata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema augur</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> var. <i>lagenula</i> (Kuetzing)Frenquelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma scalproides</i> (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma spencerii</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	1	1	1	8	-	2	3	1	1	-	2	3	2	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-

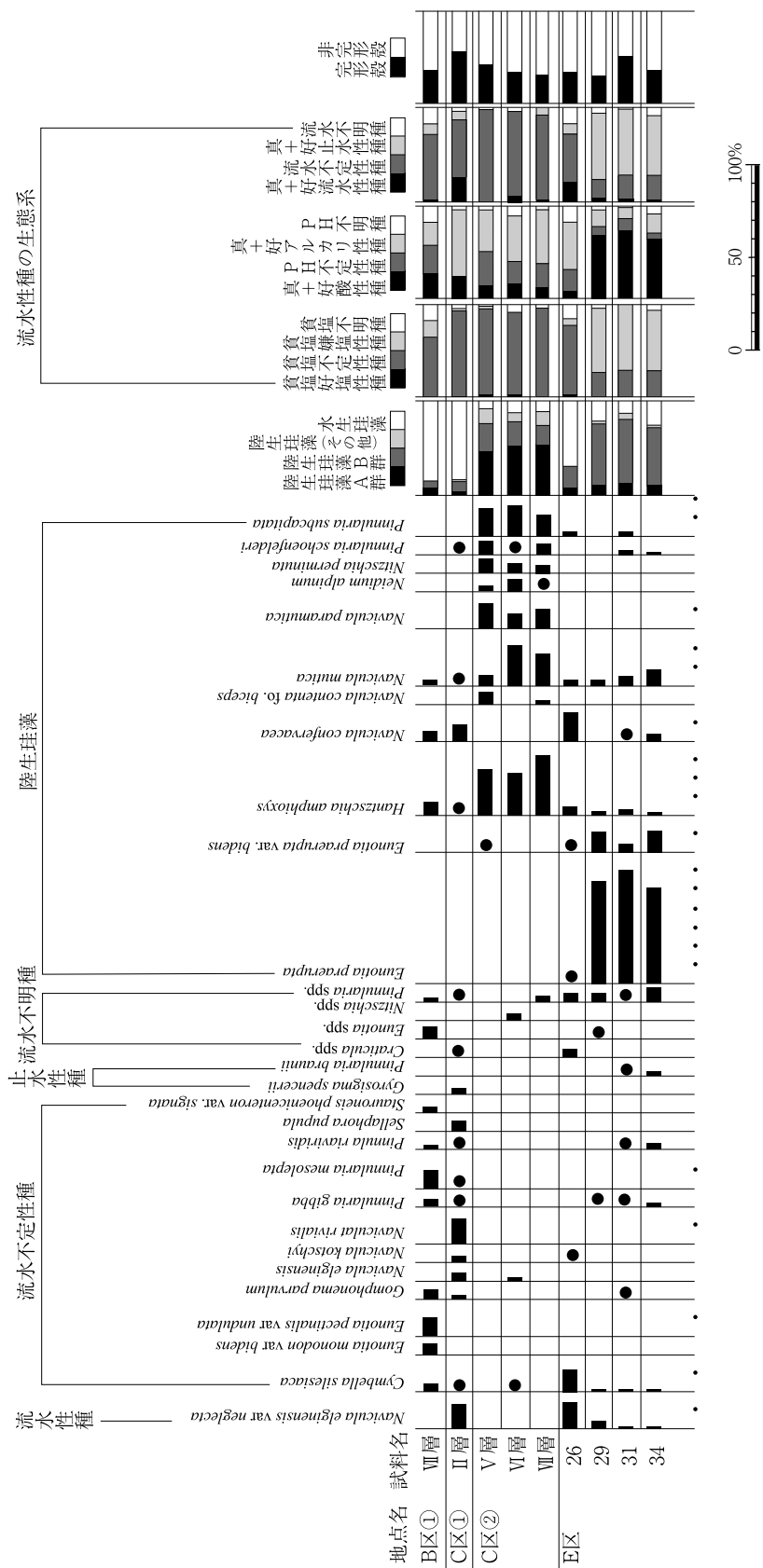


Fig.215 天神遺跡における主要珪藻化石群集の層位分布

海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満を示す。

Tab.37 平成9年度調査花粉分析結果

種類	B区											E区					
	A区			SX-201埋土1			SX-201埋土2			XII層		XIV層		SD-503埋土			
	IX層	X層	XI層	①	②	③	①	②	③	①	②	③	1	2	3	4	
木本花粉																	
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複雑管束亜属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(不明)	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コウヤマキ属	-	-	-	-	1	-	1	1	-	2	-	1	-	-	-	-	-
クマシダ属-アサダ属	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シラキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																	
イネ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6	-	5	-	-	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ重科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明花粉	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類孢子																	
シダ類孢子	47	44	47	62	86	141	153	133	84	86	100	57	19	84	48	41	86
合計																	
木本花粉	0	0	1	0	3	2	1	6	0	3	1	1	0	1	0	0	0
草本花粉	0	0	0	0	1	0	0	0	1	7	0	6	0	0	0	0	0
不明花粉	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子	47	44	47	62	86	141	153	133	84	86	100	57	19	84	48	41	86
総計(不明を除く)	47	44	48	62	90	143	154	139	85	96	101	64	19	85	48	41	86

3. 結 果

検出されない。僅かに検出される花粉化石も保存状態が悪く、外膜が溶けて薄く、壊れている。天神遺跡C区南壁セクション①のⅡ層では、比較的良好に花粉化石が検出される。木本花粉ではマツ属が多産し、次いでマキ属・スギ属が検出される。草本花粉は木本花粉よりも多産する。中でもイネ科の多産が顕著である。この他にカヤツリグサ科・ミズアオイ属・アカザ科・ナデシコ科・アブラナ科などが検出される。また、僅かであるがソバ属・ゴマ属が検出される。

(3) 植物珪酸体分析

<平成9年度調査>

結果をTab.44に示す。植物珪酸体は各試料から検出されるが、その個数は少なく、保存状態の悪い試料が多い。以下に、各地点の産状を述べる。

A区では、Ⅸ層・Ⅹ層・Ⅺ層のいずれの土層からも、イネ属、タケ亜科、ウシクサ族などがわずかに認められるに過ぎない。

B区ⅩⅣ層では、イネ属・タケ亜科・ウシクサ族が認められ、その中ではタケ亜科の産出が目立つ。Ⅴ層とSX-1埋土2の植物珪酸体の産状は各試料とも類似し、イネ属・タケ亜科・ウシクサ族が認められ、その中ではタケ亜科とウシクサ族の産出が目立つ。SX-1埋土1では、検出個数がやや多く、イネ属・タケ亜科・ウシクサ族の産出が目立ち、イネ属の穎珪酸体や短細胞列も見られる。

E区SD-503埋土4ではイネ属やタケ亜科などが認められ、その中ではタケ亜科の産出が目立つ。また、SD-3埋土1~3でも、タケ亜科の産出が目立つ。

<平成10年度調査>

結果をTab.45~47, Fig.216~218に示す。以下に、各地区での産状を述べる。

A区南壁セクション①~③で採取された試料では、植物珪酸体の保存状態が悪い。また、検出個数が概して少なく、特に機動細胞珪酸体の検出個数が少ない。植物珪酸体群集は、各地点ともほぼ共通しており、タケ亜科とウシクサ族ススキ属が比較的多く検出され、この他にイネ属やイチゴツナギ亜科などを伴う。なお、南壁セクション②のⅨ層では、オオムギ族がわずかに認められる。オオムギ族は、コムギやオオムギなど栽培されるムギ類を含む分類群であるが、検出された植物珪酸体の形態からは栽培種か否かの判別はつかない。

B区南壁セクション①のⅨ層とⅪ層では、A区と同様に保存状態が悪く、検出個数も少ない。各層からは、イネ属、タケ亜科の産出が目立ち、この他にイネ属、ウシクサ族ススキ属、オオムギ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。

E区で近世・中世・古代の各時期の遺構から採取された試料では、植物珪酸体が検出される。古代の畝状遺構では保存状態が悪いものの、他の試料では保存状態が比較的良好である。近世の畝状遺構から採取された24点(試料番号1~24)では、いずれも栽培植物のイネ属やオオムギ族が検出され、特にイネ属の産出が目立つ。また、稲籾殻に形成されるイネ属穎珪酸体や葉部に形成されるイネ属短細胞列がわずかに検出される。この他、タケ亜科が多産し、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。中世の溝である試料番号29~34では、イネ属、タケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出され、中でもタケ亜科の産出が目立つ。なお、試料番号29~32でみる

Tab.38 平成10年度調査地点の花粉分析結果(1)

種類	A区										B区							C区									
	南壁セクション①		南壁セクション②		南壁セクション③		南壁セクション①		南壁セクション②		南壁セクション③		SC-201		南壁セクション①		南壁セクション②		南壁セクション③		北壁セクション		トレンチ3南壁セクション				
	IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI	IX	X	XI
木本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシラ属-アサダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

Tab.40 平成10年度調査地点の花粉分析結果(3)

種類	E区																																					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32						
木本花粉																																						
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
ツガ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
マツ属	1	-	-	1	1	1	1	1	1	-	1	1	1	1	1	1	5	2	1	1	1	1	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-			
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
クマシテ属-アサダ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-	2
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

Tab.41 平成10年度調査地点の花粉分析結果(4)

種 類	E区																																
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クロモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	-	-	-	-	-	2	-	1	2	-	2	-	-	2	2	-	-	-	1	3	-	1	-	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節ーウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	4	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	1	-	4	-	-	-	-	-
キンボウゲ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キンボウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミソハギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キツネノマゴ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コキヅル属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類孢子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズワラビ属	1	5	3	3	7	5	2	-	1	6	1	5	8	13	2	2	2	2	2	8	2	1	4	1	2	1	5	1	2	-	-	-	-
サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	78	148	122	83	49	112	131	82	73	39	136	79	77	125	110	170	78	86	155	98	160	63	87	64	88	83	68	170	111	123	128	23	
合 計	0	2	0	1	1	0	1	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	6	3	1	2	0	2	1	0	1	1	7	1	3	0	3
木本花粉	0	0	0	0	0	3	1	1	2	0	3	1	0	3	3	1	0	2	4	3	0	2	4	1	1	2	0	9	0	0	0	0	
草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
不明花粉	79	153	125	86	56	117	133	82	75	45	137	84	85	138	112	172	80	88	163	100	161	68	88	66	89	88	69	172	111	123	128	23	
シダ類孢子	79	155	125	87	57	120	135	83	78	45	141	86	85	142	116	174	81	96	170	104	163	70	94	68	90	91	70	188	112	126	128	26	
総計(不明を除く)																																	

Tab.44 平成9年度調査植物珪酸体分析結果

種 類 試料名	A区			B区										E区			
	IX層	X層	XI層	SX-201埋土1			SX-201埋土2			XII層			XIV層	SD-503埋土			
				①	②	③	①	②	③	①	②	③		1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	2	1	-	6	17	9	2	-	1	-	1	1	1	1	-	-	-
タケ亜科	3	17	3	14	82	53	3	6	9	7	13	14	52	22	8	7	24
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2	-	-
ウシクサ族コブナグサ属	1	4	2	3	6	7	-	-	1	1	3	-	-	-	-	1	-
ウシクサ族ススキ属	5	1	3	6	9	9	2	-	-	2	3	-	6	3	-	-	1
イチゴツナギ亜科	5	4	3	8	32	24	3	1	5	5	3	8	3	5	1	2	3
不明キビ型	17	10	6	19	47	36	9	3	5	9	3	11	8	9	3	3	5
不明ヒゲシバ型	9	2	1	9	9	9	-	-	-	4	3	7	3	2	-	1	1
不明ダンチク型	13	10	4	12	40	25	3	2	1	12	3	5	5	3	2	-	5
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	-	-	2	1	14	10	1	2	1	-	3	1	1	2	2	1	1
タケ亜科	6	7	7	4	26	30	3	8	3	9	3	6	119	14	6	17	20
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	2	-	-	-	-
ウシクサ族	7	7	5	10	37	19	11	11	2	26	3	8	1	1	-	2	-
不明	-	-	2	1	17	5	-	-	3	5	3	2	3	2	-	-	-
合 計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体	55	49	22	77	242	172	22	12	23	41	44	46	78	45	16	14	39
イネ科葉身機動細胞珪酸体	13	14	16	16	94	64	15	21	9	40	42	17	126	19	8	20	21
総 計	68	63	38	93	336	236	37	33	32	81	86	63	204	64	24	34	60
組織片																	
イネ属穎珪酸体	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

と、上位に向かいイネ属の割合が高くなる。中世の畝状遺構である試料番号35~43では、溝試料と同様な種類が検出される。このうち、試料番号38・43ではタケ亜科が多産するが、その他ではタケ亜科と共にイネ属の産出も目立つ。古代の畝状遺構である試料番号44~55と溝跡である試料番号56では、タケ亜科が優占し、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科を僅かに伴う程度である。また、イネ属も検出されないか、もしくはわずかに認められるに過ぎない。オオムギ族も試料番号44・45でわずかに認められるだけである。

(4) 土壤理化学分析

結果をTab.48とFig.219に示す。甕内土壤およびB区XIV層は、ともに土性は重埴土(HC)であり、極めて粘質な土壤である。土色が2.5Y(色相)であることから、やや還元作用の影響を受けていることが考えられる。また、色彩・明度が甕内土壤が5/3、B区XIV層が4/2であり、有機物含有量が低く、全炭素・全窒素量はいずれも低い値となっている。全リン酸量はやや高い値を示し、甕内土壤が3.05P₂O₅mg/g、B区XIV層が2.21P₂O₅mg/gである。可給態リン酸については両試料ともにやや高い値であるが、おそらく還元作用によるリン酸の可給化が促進されたものと推察されることから、両者を比較する事は難しい。また、両試料とも全窒素量が低いことから可給態窒素量も低い値である。

Tab.45 平成10年度調査植物珪酸体分析結果(1)

種類	A区										B区		E区																		
	南壁セリオン①					南壁セリオン②					南壁セリオン③		南壁セリオン④		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11						
	I層	X層	XI層	IX層	X層	XI層	IX層	X層	XI層	IX層	X層	XI層	IX層	XI層																	
															試料名																
イネ科葉部短細胞珪酸体																															
イネ族イネ属																															
6	5	3	8	4	2	2	-	4	2	4	2	4	7	24	27	20	43	55	57	54	51	50	65								
タケ亜科																															
18	26	23	14	17	14	6	16	26	2	32	2	32	40	42	62	32	50	64	75	58	41	43	54								
ヨシ属																															
-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	1	-	2	-	1	-								
ウシクサ族コブナグサ属																															
1	4	3	1	2	7	-	4	5	-	4	3	2	3	2	3	6	3	3	3	5	4	6	4								
ウシクサ族ススキ属																															
7	22	22	6	12	13	4	17	26	-	10	5	6	11	6	11	6	8	15	8	7	8	13	8								
イチゴツナギ亜科オオムギ族																															
-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	2	2	5	5	4	4	4	4	8	4	3	2	4	-								
イチゴツナギ亜科																															
10	9	7	11	8	10	3	10	9	1	7	11	28	45	22	19	29	36	41	32	38	27	25									
不明キビ型																															
13	52	49	9	24	32	5	39	67	1	23	14	20	19	10	14	26	33	22	16	28	25										
不明ヒゲシハ型																															
16	33	38	5	15	36	4	18	53	2	24	13	12	17	7	13	19	17	19	33	25	23										
不明ダンチク型																															
24	48	41	13	15	30	2	23	49	2	31	14	13	29	11	14	19	30	27	20	17											
イネ科葉身機動細胞珪酸体																															
イネ族イネ属																															
8	2	1	5	5	3	2	2	5	-	9	6	23	40	47	58	47	29	35	32	40	25										
タケ亜科																															
4	6	9	2	4	6	5	4	17	1	17	18	33	30	45	57	32	48	33	34	38	58										
ヨシ属																															
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-									
ウシクサ族																															
4	21	12	4	14	14	-	6	21	2	18	3	13	8	2	16	15	12	15	15	16	11										
不明																															
7	8	4	4	11	7	3	6	14	-	8	13	21	25	21	21	14	19	30	32	18	13										
合計																															
イネ科葉部短細胞珪酸体																															
95	199	186	70	97	147	26	127	239	10	137	111	153	219	118	168	239	252	241	214	228	223										
イネ科葉身機動細胞珪酸体																															
23	37	26	15	34	30	10	18	57	3	52	41	94	104	115	155	108	108	113	113	112	107										
総計																															
118	236	212	85	131	177	36	145	296	13	189	152	247	323	233	323	347	360	354	327	340	330										
組織片																															
イネ属珪酸体																															
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	2	2	8	5	4	3	2	6	2									
イネ属短細胞列																															
1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	3	3	2	6	5	3	3	2	6	2									

Tab.47 平成10年度調査植物珪酸体分析結果(3)

種 類	E区																		
	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
イネ科薬部短細胞珪酸体																			
イネ族イネ属	7	41	35	37	20	5	8	8	-	3	2	3	-	5	-	1	1	-	-
タケ亜科	142	59	36	33	51	89	131	113	81	128	112	120	141	138	139	155	153	149	171
ヨシ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	2
ウシクサ族コブナグサ属	3	3	2	2	-	2	4	3	6	2	1	5	-	4	2	-	-	-	2
ウシクサ族ススキ属	4	8	11	-	7	10	4	2	23	10	5	13	6	4	3	3	2	5	-
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	4	-	1	5	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	15	21	26	17	11	12	7	12	5	11	11	6	8	10	4	7	6	12	3
不明キビ型	26	31	47	37	43	38	17	22	61	12	27	46	16	21	28	12	11	22	16
不明ヒゲシハ型	17	28	34	50	41	37	33	29	23	27	36	33	20	29	21	17	22	22	10
不明ダンチク型	21	21	29	23	34	33	19	19	16	17	18	16	15	20	18	15	16	9	11
イネ科薬身機動細胞珪酸体																			
イネ族イネ属	2	15	15	30	11	6	3	5	-	1	2	2	-	2	-	-	-	-	-
タケ亜科	77	80	55	33	34	35	63	90	76	48	67	69	79	81	95	84	92	95	89
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族	7	18	15	13	44	22	25	17	6	19	12	12	13	7	6	9	8	7	7
不明	16	30	30	31	45	38	46	26	26	42	35	19	21	11	5	15	8	8	9
合 計	235	216	220	201	212	226	224	210	215	210	212	242	206	231	215	211	213	219	215
イネ科薬部短細胞珪酸体	102	143	115	107	134	101	137	138	108	110	116	102	113	101	106	108	108	110	105
イネ科薬身機動細胞珪酸体	337	359	335	308	346	327	361	348	323	320	328	344	319	332	321	319	321	329	320
組 織 片																			
イネ属類珪酸体	-	3	3	3	3	3	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	-	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

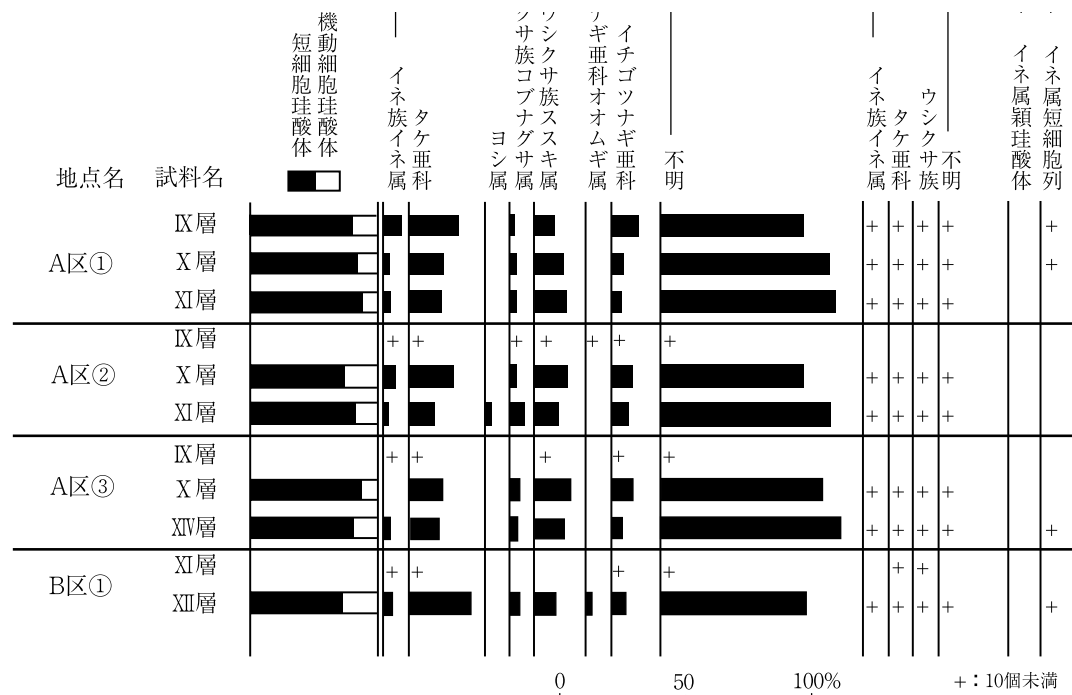
可給態窒素は土壤中の微生物などによって容易に分解され、変動が大きいことから有意差があるとは判断しがたい。

塩類濃度の指標であるpH (H₂O) は甕内土壌が6.1で、対照試料であるB区XIV層の7.0と比較して酸性側へ大きく片寄っている。海水が一般的にpHが7.8~8.3とアルカリ性であることから、仮に甕内に海水が残留したと推定すると試料のpH (H₂O) がアルカリ側になることが考えられる。交換性塩基量(Ca, Mg, Na, K) が対照試料と比較して低い値であり、かつ電気伝導度(EC)も同様な傾向にある。電気伝導度は土壌溶液中に陰イオン(硝酸イオン, 硫酸イオンなど), 陽イオン(カルシウムイオン, マグネシウムイオンなど)の含有量の多いことを意味する(三好ほか, 1983)。硫化第二鉄態硫黄(パイライト)量は甕内土壌で若干高い傾向にあるが, 含有量自体が低く有意差として捉えることができない。

4. 考察

(1) 遺跡周辺の堆積環境

縄文時代~弥生時代の相当する層準では、堆積物中から珪藻化石がほとんど検出されない。同じ

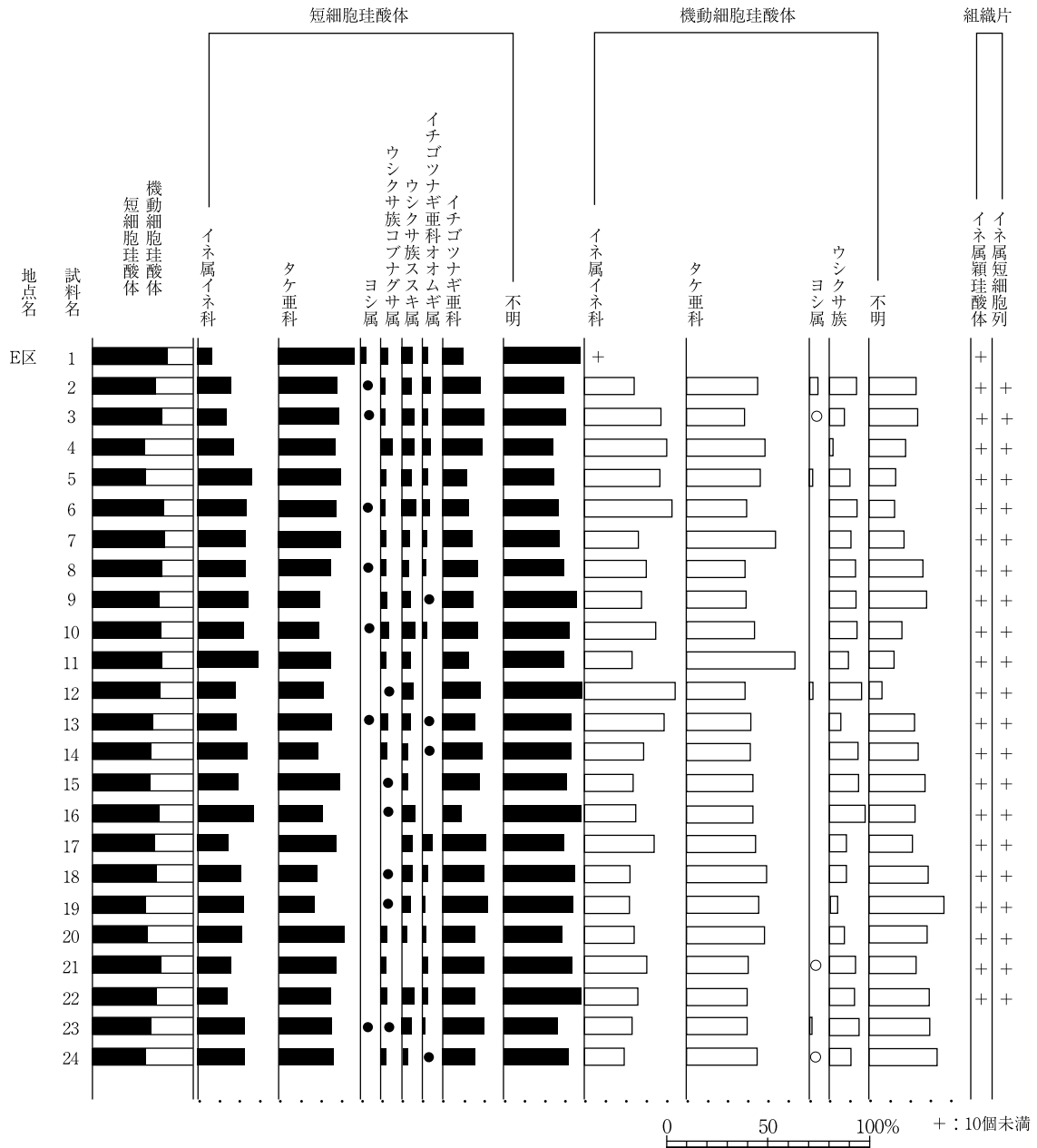


出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、+はイネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体とも90個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+の記号で示す。

Fig.216 天神遺跡における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状(1)

4. 考 察

珪酸質である植物珪酸体も保存が悪い。近藤(1988)は植物珪酸体の生産量と土壤中の残存量に着目し、土壤中での植物珪酸体量が生産量に比べて大幅に少ないことから、植物に再び吸収されたり粘土の形成への関与などで比較的早い段階で消失する可能性を指摘している。また、これらの風化は、表面積や元素の組成等によって植物種により速度が異なると指摘している。今回の植物珪酸体組成をみると、タケ亜科が多産する。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科植物と比較して風化に強く、また生産量が多い点がこれまでの研究から指摘されている(近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986)。このことから土壤中での風化が進行していた可能性がある。一方、遺跡の立地が河口付近の沖積地である



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体・イネ科葉身機動細胞珪酸体とも90個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+の記号で示す。

Fig.217 天神遺跡における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状(2)

ことから、堆積速度が速く、これらが土壤中に取り込まれなかった可能性もある。以上のことから、今回化石が少なかった原因は、堆積速度の関係で土壤中の珪藻化石や植物珪酸体の量が元々少なく、その後の風化によりその数がさらに減少した可能性がある。

古代及び古代～中世の層準では、C区南壁セクションⅣ・Ⅷ層で珪藻化石が検出された。その組成は、陸生珪藻が90%以上と優占した。この比率は、土壤が水成堆積したのではなく、陸上の好気的環境で堆積したことを示している(伊藤・堀内, 1991)。今回、珪藻化石が検出される地点が少ないため空間的に古環境を考えることは難しいが、古代のある時期になると場所により比較的乾いた環境が存在していたと考えられる。おそらく、この頃から、周辺は氾濫の影響が少なくなり、やが

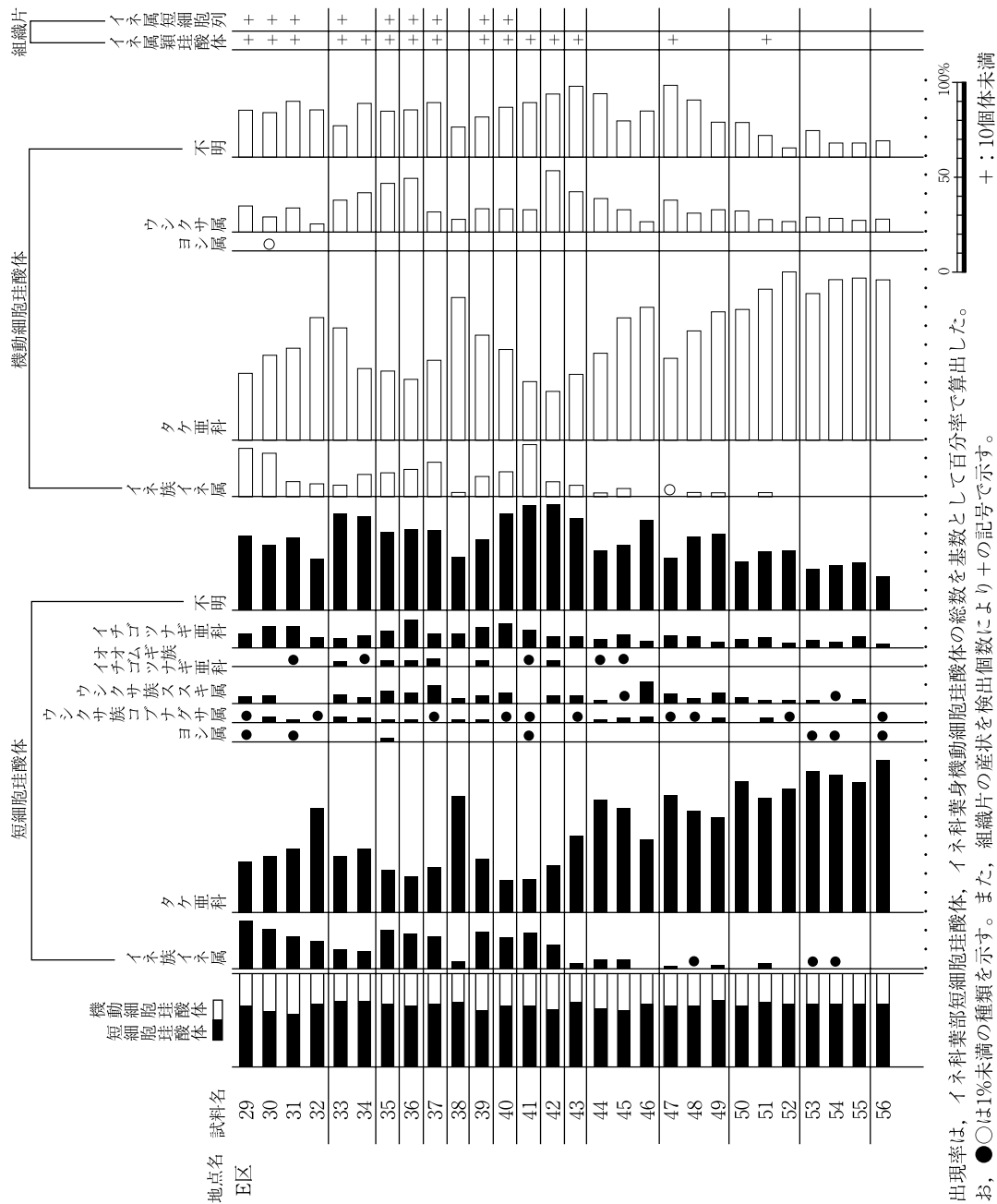


Fig.218 天神遺跡における植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状(3)

4. 考 察

Tab.48 土壤理化学分析結果

調査区	試料名	土性	土色	pH (H ₂ O)	EC (ms/s)	リン酸		炭素 全量 (%)	窒素		交換性塩基 (me/100g)				FeS ₂ (%)
						全量 (mg/g)	可給態 (mg/100g)		全量 (mg/g)	可給態 (mg/100g)	Ca	Mg	Na	K	
B区	XIV層	重埴土	2.5Y4/2 暗灰黄色	7.0	3.49	2.21	21.6	0.81	0.05	1.57	14.6	3.9	0.1	0.2	0.101
C区	ST-301 甕内土壤	重埴土	2.5Y5/3 黄褐色	6.1	2.59	3.05	19.1	0.51	0.06	2.23	11.3	3.4	0.2	0.6	0.129

註1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

註2) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

重埴土（HC：粘土45～100%，シルト0～55%，砂0～55%）

て地表面が乾燥化して生活の場として利用されたとみられる。畝状遺構が検出される背景として、このような環境変化が関与している可能性がある。

中世の遺物包含層では、B区南壁セクション①のXII層で珪藻化石が検出された。これら2試料では珪藻化石群集が異なる。すなわち、B区南壁セクション①のXII層では、沼沢湿地指標種群（安藤，1990）等をはじめとする水生珪藻が検出された。これに対して、C区南壁セクション②のV層では、陸生珪藻が90%以上と優占した。したがって、B区は沼沢地～湿地のように湿潤な環境であったが、C区は地下水位が低く乾燥しやすい状態であったと考えられる。

近世以降の層準では、C区南壁セクション①のII層から珪藻化石が検出された。ここでは、好流水性種、沼沢湿地指標種群を含む流水不定性種、陸域にも水域にも普通に認められる陸生珪藻B群が多産した。また、花粉化石でもミズアオイ属が特徴的に検出されていた。よって、周辺には、多少流れ込みの影響を受ける沼沢地～湿地のような湿潤な場所も存在しており、そこにミズアオイ属が生育していたと推定される。また、周辺はイネ科を中心として、カヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科などの草本類が生育する開けた草地のような状態が広がっていたと思われる。

(2) 周辺植生

今回の調査で花粉化石は、C区II層を除きほとんど検出されなかった。わずかに検出された花粉化石が周辺に生育していた母植物に由来すると考えられる。一方、植物珪酸体の産状をみると、植物珪酸体も保存状態が悪いが、タケ亜科の産出が目立った。この他、ウシクサ族ススキ属・イチゴツナギ亜科などが検出される。そのため、微高地上にはタケ亜科やウシクサ族などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。

なお、周辺で行われた花粉分析結果から、本地域の植生は約6000年前以降にシイ・カシ類からなる暖温帯林が覆うようになり、約4000～1500年前になると温帯性針葉樹が分布拡大し、その後、マツ属が人間の植生干渉に起因して増加することが明らかにされている（例えば、中村・山中，1982）。花粉化石が広範囲の植生を反映することから、本遺跡の周辺も類似した変化をした可能性が高い。近世ないし近代とされる層準でのマツ属・スギ属の多産も、人為的な影響を多分に受けた結果、二次林や植林が増加したことを反映していると思われる。

(3) 遺構の検討

本遺跡では、弥生時代以前の溝から近世の畝状遺構まで各時代を通じて多くの遺構が検出されている。ここでは、時代毎に遺構について検討する。

<古代>

E区で検出されたSD-503では、珪藻化石の検出個数が少ない。僅かに検出された珪藻化石も保存状態が極めて悪い。また、花粉化石・植物珪酸体ともに検出個数が少ない。したがって、これらの遺構がどのような環境で埋積が進行したか検討することができない。ただし、僅かであるがイネ属機動細胞珪酸体が検出されることから、当時、集水域内部で稲作が行われており、生産域の土壌が流れ込んでいた可能性もある。また同区で東西方向に走るSU-501・502と南北方向に走るSD-504が検出された。これらの遺構埋積物からも珪藻化石がほとんど検出されなかったため、堆積環境については不明である。一方、植物珪酸体では、SD-504を除く遺構でイネ属が検出されたことから、これらの遺構が埋積する過程でイネ属が存在したことがうかがえる。これまで本平野内で調査された結果によると、高知平野での稲作は約3,000年前から始まり、弥生時代前期以降に本格化したと考えられている(例えば、山中ほか, 1992)。また、先述したとおり弥生時代以前の溝埋積物からイネ属が検出されている。これより、古代の遺構面でイネ属が検出された点は矛盾しない。ただし、これらの遺構で検出されたイネ属は、出現率も極めて低率であり、さらに検出されない層位も存在したことから、他から二次的に運搬・堆積したものと思われる。したがって、本遺構が稲作に関連した遺構である可能性は低いと言えるだろう。むしろ、イネ属以外の作物が栽培されていた可能性がある。なお、E区Ⅶ層およびB区SX-201でソバ属花粉が検出された。本遺構との関係が不明であるものの、堆積域内ではソバ栽培などの畑作も行われていたと思われる。

<中世>

B区で検出された中世以前のSX-201では、陸生珪藻が多く含まれる。したがって、これらの埋積物が水の営力によって水成堆積したことよりも、風などにより風成堆積したか、あるいは周囲の乾いた場所から土壌が流入して堆積したことが推定される。とくに遺構埋積物については、もともと遺構内に水が存在しなかったか、あるいは離水後に埋積した結果を反映している可能性もある。

E区では、古代遺構面の畝状遺構よりも西側に、南北方向あるいは東西方向の畝状遺構または溝跡(試料番号35~43)が検出された。これらの遺構では、珪藻化石がほとんど検出されないため、埋積過程を検討することができない。しかし、各遺構ともイネ属珪酸体が検出される。SD-38・43を除いて、古代遺構面の畝状遺構よりもイネ属の産出が目立った。そのため、これらの遺構ではイネ属が作物の一つとして栽培された可能性がある。また、オオムギ族の割合も高く、検出された植物珪酸体が栽培種に由来するものであれば、ムギ栽培の可能性も考えられる。ただし、稲藁や麦藁は現在の畑で保温・保湿のための敷き藁に利用されることがあり、本遺構でも同様な用途に利用された可能性も否定できない。また、イネ属があまり産出しない遺構も見られ、他の作物が栽培されていた可能性も考えられる。少なくとも本層準における植物珪酸体の出現傾向がSU-501・502とSD-504と異なることから、農耕の形態等が古代の頃と異なっていたと考えられる。今後、さらに資料を蓄積し、当該期の農耕について検討したい。

4. 考 察

一方、畝状遺構よりも規模が大きいSD-508・509では、陸生珪藻B群であり沼沢湿地指標種群の一種(安藤, 1990)である*Eunotia praerupta* が共通して多産した。本種はその他の陸生珪藻を高率に伴わなかったことから、ここでは水生珪藻として水域に生育した種と判断される。したがって、両遺構内は流水の影響をあまり受けていなかったものの、弱酸性を呈した湿潤な状態であったと考えられる。また、上位ほどイネ属の割合が高くなる傾向が認められたことから、遺構内部には稲作地から土壌が流入していたと思われる。上記の畝状遺構と異なり、水田耕作のために掘られた用水路のような用途であった可能性もある。

<近世>

E区で検出された近世の畝状遺構は南北方向に構築され、中世遺構構築面の畝状遺構よりも東側に位置する。畝および畝間から採取された試料から検出された珪藻化石は、試料番号26に代表されるように流水域を示唆する好流水性種、沼沢地～湿地などに生育する水生珪藻、乾いた環境を指標する陸生珪藻など複数の環境に適応する種類が混在した。これより、畝あるいは畝間を構成する土壌は、基本的に水の影響や好気的環境を繰り返すような不安定な環境下で堆積した土壌と推定される。また、各試料からは栽培植物のイネ属やオオムギ族が検出され、特にイネ属の産出が目立った。以上のことから、本遺構でもイネ属やムギ類が作物のひとつとして栽培された、あるいは保温・保湿のための敷き藁に利用されたなどが考えられる。また、C区II層でゴマ属の花粉化石も検出されたことから、堆積域内ではゴマ類も畑作植物として栽培されていたと考えられる。

(4) 弥生時代住居跡(ST-301) 出土甕の内容物

塩類濃度の指標であるpH(H₂O)が対照試料よりも酸性側へ大きく片寄り、また交換性塩基量、電気伝導度も対照試料より低い値である。さらに、硫化第二鉄態硫黄(パイライト)量も全体的に低い。このことから、高塩類の液体や固体が内容物として存在する可能性は低いことが指

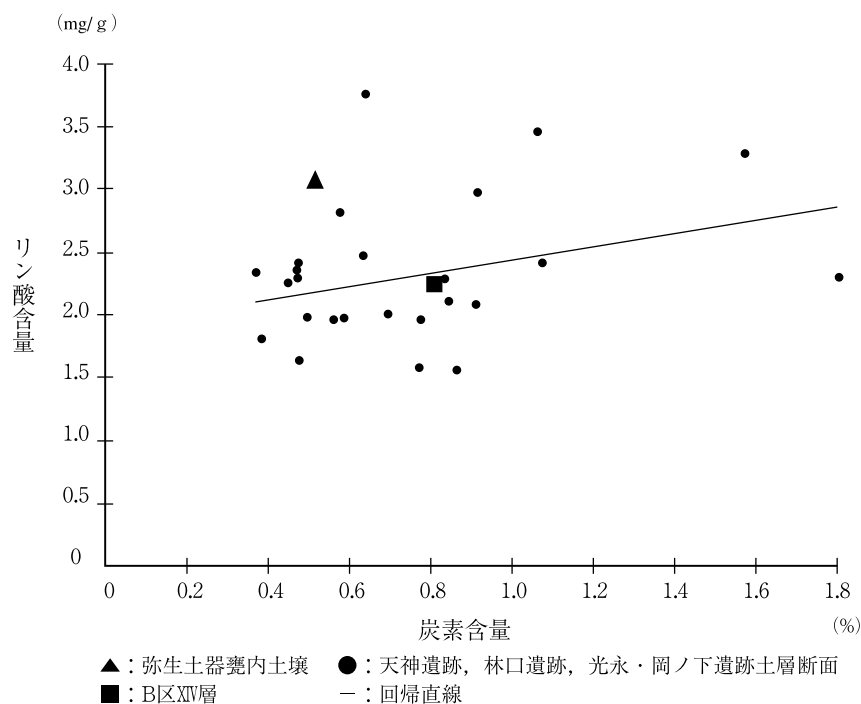


Fig.219 リン酸と全炭素の相関

摘される。一方、検出される珪藻化石をみると陸生珪藻が大半を占めており、海水生種や汽水生種など海水の影響を示唆する種群は検出されない。以上のことから、甕内に海水の痕跡は認められず、その可能性が低いものと推察される。

有機化合物については両試料で全体的に全炭素・全窒素ともに低く、また対照試料と比べて甕内土壤の方が低い値となっている。可給態窒素は全体的に低い値を示す。可給態リン酸については両試料ともにやや高い値である。リン酸含量は、対照試料であるB区XIV層が $2.21\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、甕内土壤が $3.05\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ である。ところで、リン酸が土壤中に普通に含まれる量(天然賦存量)は、約 $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度とされている(Bowen,1983; Bolt and Bruggenwert,1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。また、光永・岡ノ下遺跡で実施したリン分析結果からは、遺跡周辺に分布する土壤のリン酸の天然賦存量が平均 $2.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 前後とみることができ、 $3.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 以上であればほぼ確実にリン酸の富化が考えられる。これらの結果と比較すると、対照試料は前回の結果と同様なリン酸含量である。一方、甕内土壤は若干高いものの、周辺の堆積層でリン酸含量が $3.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を越える層位も認められることから著しいリン酸が富化されていると言えず、一概に甕内に遺体が存在していたとは断定できない。ここで甕内土壤とB区XIV層と近隣遺跡で実施したリン酸と炭素含量の相関を求めると、B区XIV層が回帰直線上であるのに対して、甕内土壤は回帰直線よりも上位にあたる(Fig.219)。この結果から甕内土壤において全炭素と相反したリン酸の富化が指摘される。

以上のように、当初設定した仮説に基づいて検討した場合、消去法的に考えれば、内容物が取り除かれた後に甕内に土壤が充填され、それが試料として用いられた可能性もある。土器そのものに成分が浸透している可能性も考えられるため、可能であれば土器胎土についても分析対象とし、同様の分析調査を実施した後に今回の分析結果との比較検討が課題とされる。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991)中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」,p.28-36.
- 安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理, 42, p.73-88.
- Asai,K. and Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
- Bowen,H.J.M.(1983)「環境無機化学-元素の循環と生化学-」.浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen,H.J.M.(1979)Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.(1980)「土壤の化学」.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY].
- 土壤標準分析・測定法委員会編(1986)「土壤標準分析・測定法」.354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編(1981)「土壤養分分析法」.440p., 養賢堂.
- 伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.Diatom,6,p.23-45.
- 川崎 弘・吉田 滂・井上恒久(1991)九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.

4. 考 察

- 近藤鍊三(1982) Plant opal分析による 黒色腐植層の成因究明に関する研究.昭和56年度科学研究費(一般研究C) 研究成果報告書, 32p.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353, BERLIN-STUTTGART.
- Lange-Bertalot, H. and D. Metzeltin (1996) Oligotrophie-Indikatoren. 800 Taxa repräsentativ für drei diverse Seen-Typen. Iconographia Diatomologica, 2, Koeltz. -Koenigstein.
- Lange-Bertalot, H., K. Kulbs, T. Lauser, M. Noerpel-Schempp and M. Willmann (1996) Dokumentation und Revision der von G. Krasske beschriebenen Taxa. Iconographia Diatomologica, 3, Koeltz. -Koenigstein.
- Metzeltin, D. and A. Witkowski (1996) Diatomeen der Baren-Insel. Suesswasser- und marine Arten. Iconographia Diatomologica, 4, Koeltz. -Koenigstein.
- 三好 洋・嶋田永生・石川昌男・伊達 昇(1983)「土壤肥料用語事典」. 259p., 農文協.
- 中村 純(1980) 花粉分析による稲作史の研究.「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究-総括報告書-」, p.185-204, 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班.
- 中村 純・山中三男(1992) 花粉分析学的研究からみた四国地方の洪積世後期以降の植生変遷.「日本植生誌 四国」, 宮脇 昭編, p.76-83, 至文堂.
- 日本第四紀学会編(1993) イオウ分析法. 第四紀試料分析法, p.119-124, 東京大学出版.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967) 新版標準土色帖.
- 小川吉雄・加藤弘道・石川 実(1989) リン酸緩衝液抽出による可給態窒素の簡易測定法. 土肥誌, 60, p.160-163.
- ペドロジスト懇談会編(1984)「土壤調査ハンドブック」. 156p., 博友社.
- Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1843). Iconographia Diatomologica, 1, Koeltz. -Koenigstein.
- 杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 徳永重元・山内輝子(1971) 花粉・孢子.「化石の研究法」, 化石研究会編, p.50-73, 共立出版株式会社.

図 版



A区調査前全景1(東より)



A区調査前全景2(東より)

PL.2



A区北部遺構検出状態1(南より)



A区北部遺構完掘状態(西より)



A区北部遺構検出状態2(南より)



A区北部遺構完掘状態(南より)

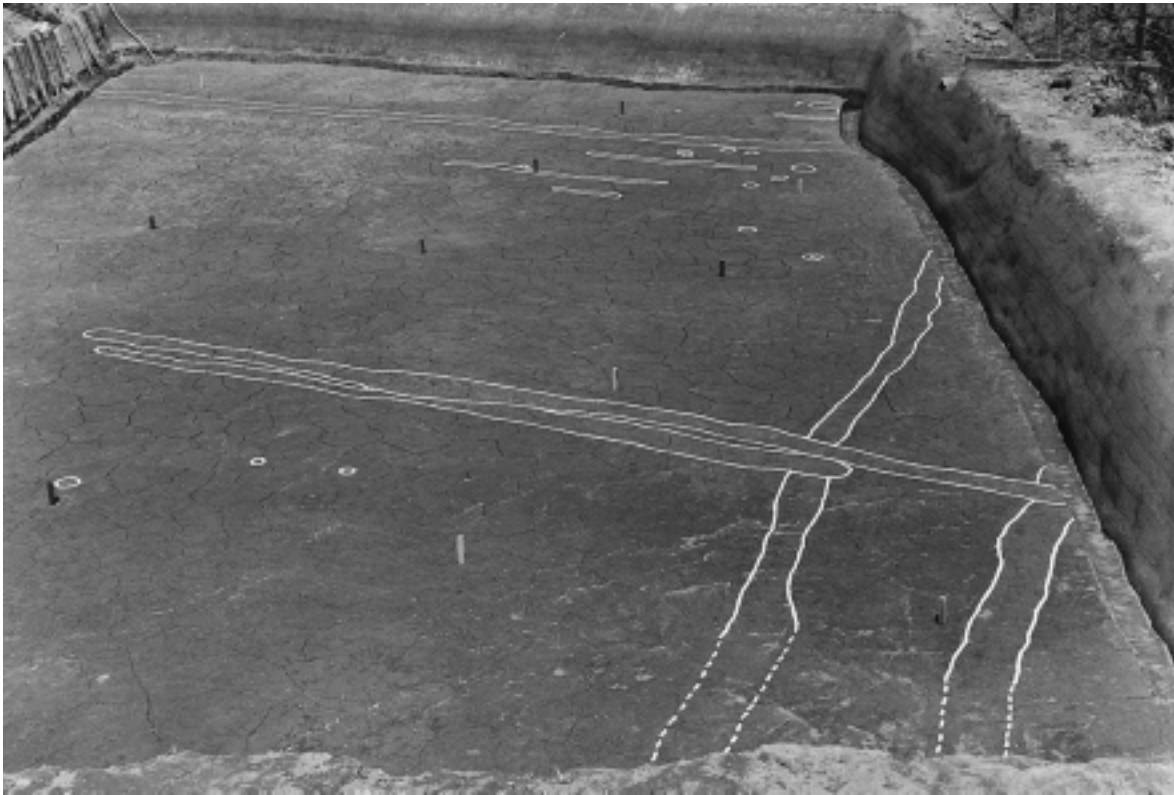
PL.4



A区南部遺構検出状態(東より)



A区南部遺構完掘状態(東より)



A区南部遺構検出状態(西より)



A区南部遺構完掘状態(西より)

PL.6



A区北壁セクション(南より)



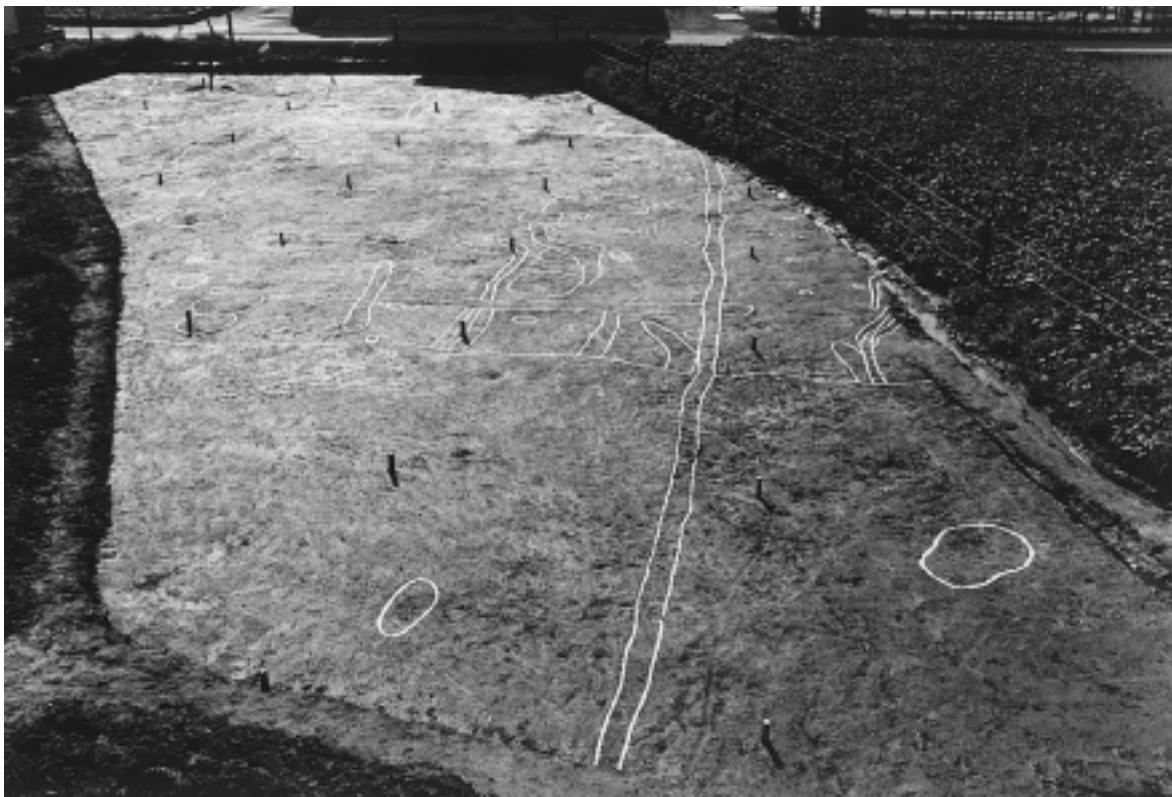
A区南壁セクション(北より)



B区調査前全景1(西より)



B区調査前全景2(西より)



B区北部遺構検出状態(東より)



B区北部遺構検出状態(西より)



B区北部遺構完掘状態(東より)



B区北部遺構完掘状態(西より)



B区南部遺構検出状態(西より)



B区南部遺構検出状態(東より)

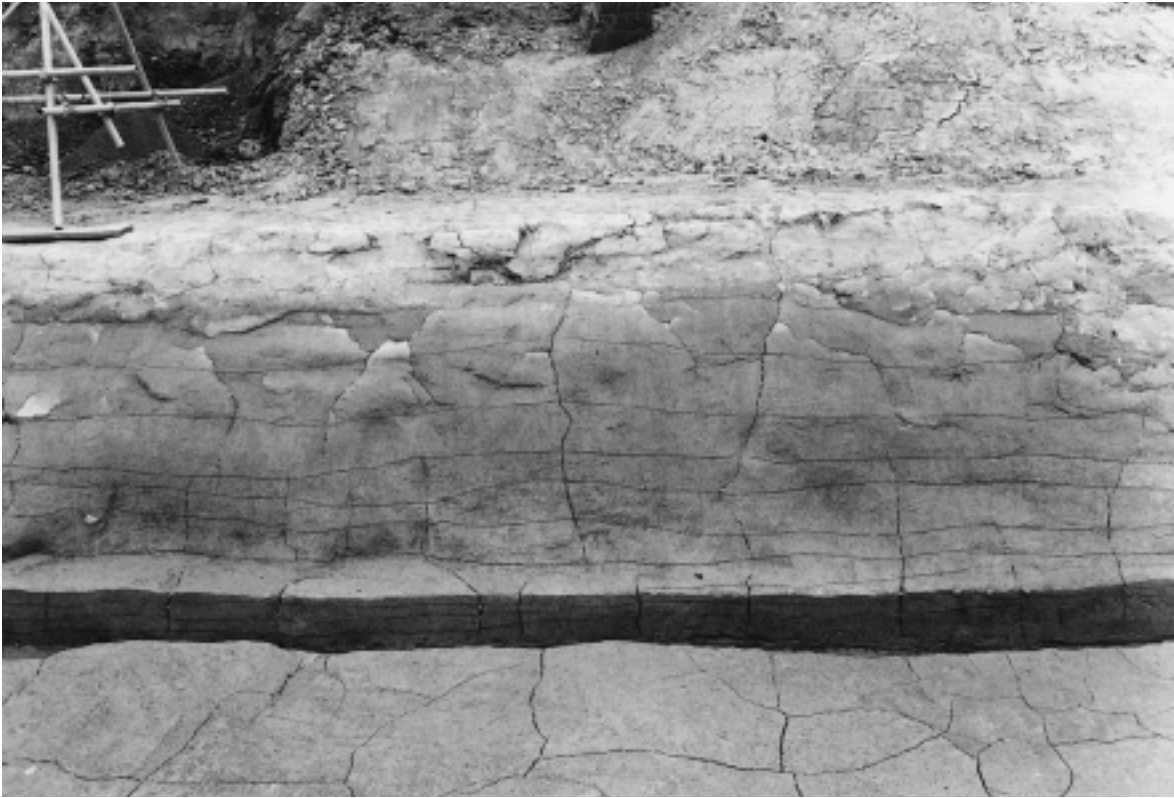


B区南部遺構完掘状態(北上空より)



B区南部遺構完掘状態(西上空より)

PL.12



B区東壁セクション1(西より)



B区東壁セクション2(西より)



B区南壁セクション1(北より)



B区南壁セクション2(北より)



B区北壁セクション(南より)



B区東部落ち込み(北より)



ST-201遺物出土状態(西より)



ST-202遺物出土状態(南より)

PL.16



SB-201・202, SA-202(北より)



SB-203・204, SA-203(北より)

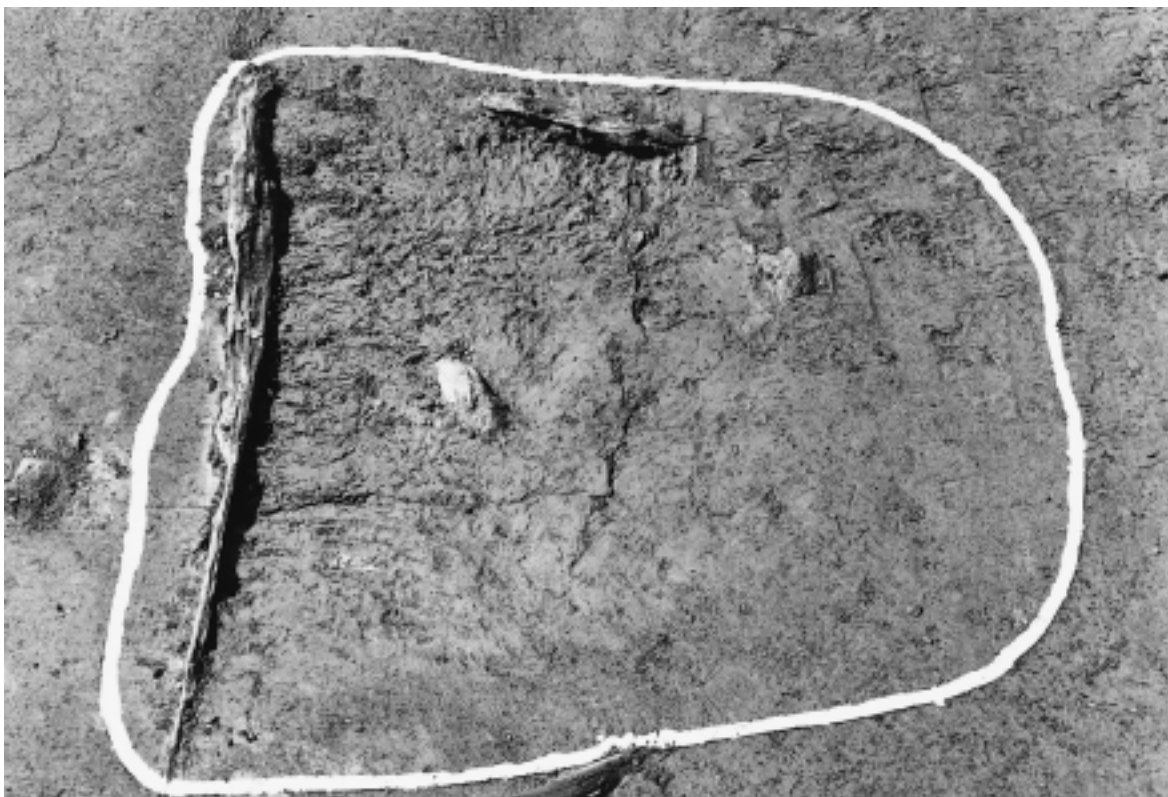


SB-205・206(北より)



SB-208, SA-205・206・207(南上空より)

PL.18



SE-201検出状態(北より)



SE-201(西上空より)



SE-201 (南西より)

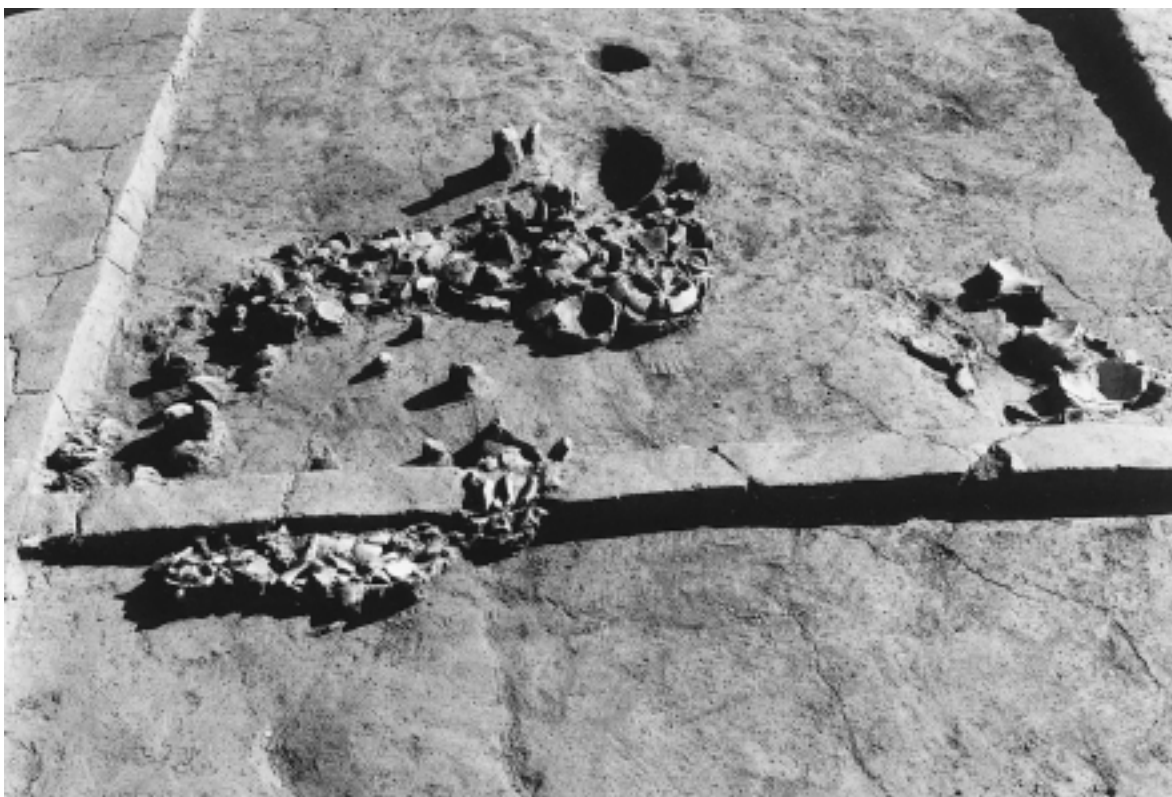


SE-201 (東より)

PL.20



SC-201遺物出土状態(南より)



SC-201遺物出土状態(北より)



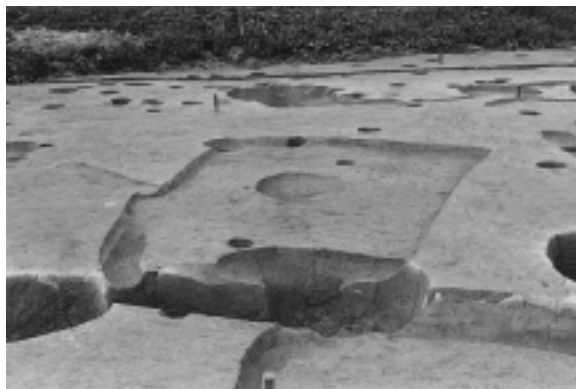
SC-201遺物出土状態(東より)



SC-201遺物出土状態(西より)



ST-201 (南より)



ST-201完掘状態(南より)



ST-202検出状態(南より)



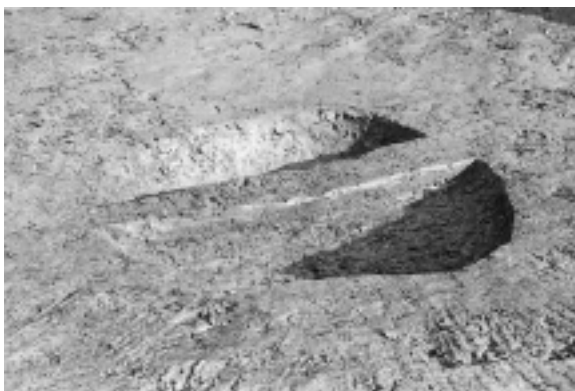
ST-202 (南より)



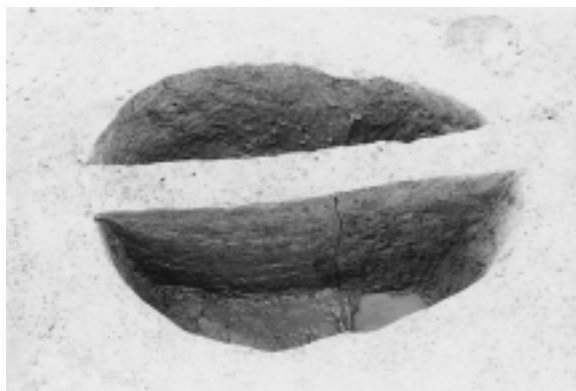
ST-202遺物出土状態(南より)



SK-201遺物出土状態(北より)



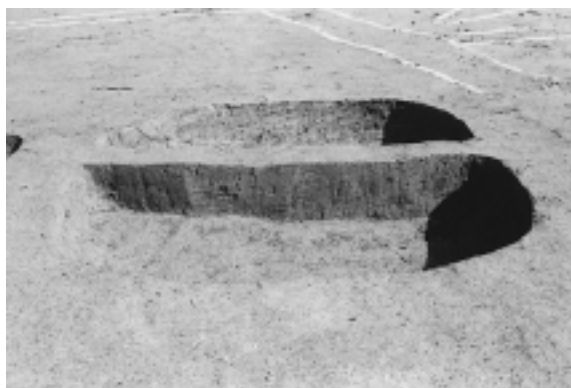
P-201 (西より)



SB-207柱穴(東より)



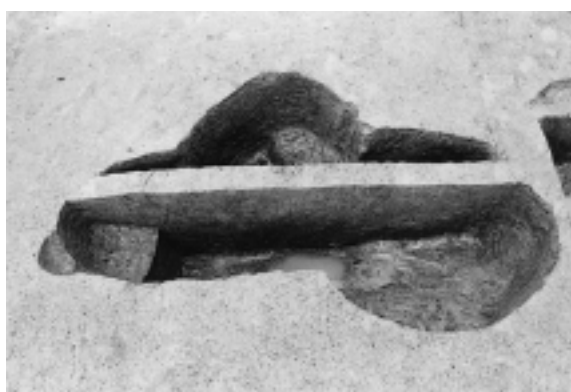
SA-204柱穴礎盤出土状態(北より)



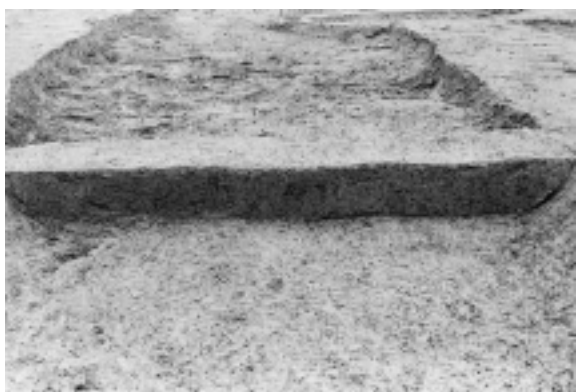
SK-202(南より)



SK-203(北より)



SK-205・208(南より)



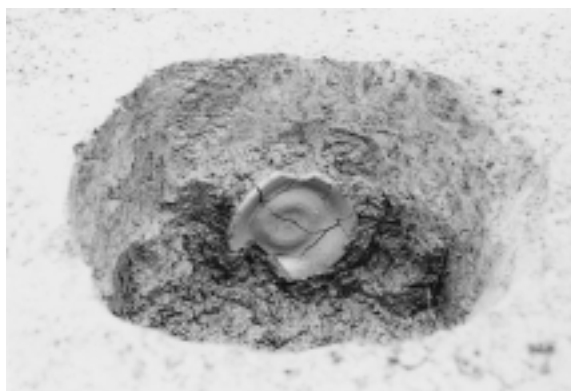
SD-201(北より)



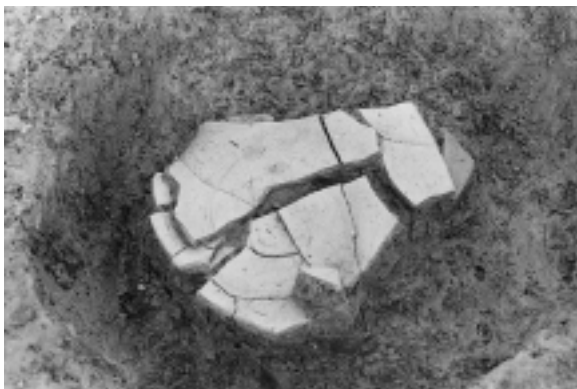
SD-201遺物出土状態(東より)



SD-203(北より)



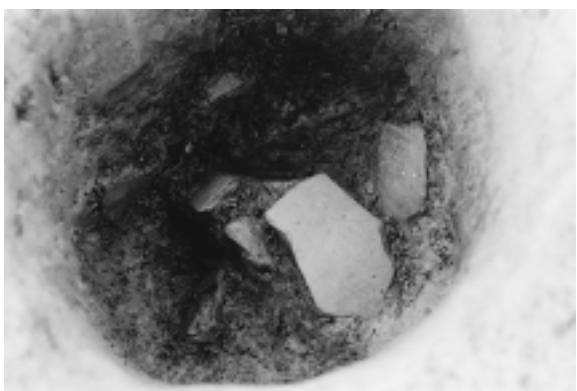
P-210遺物出土状態(西より)



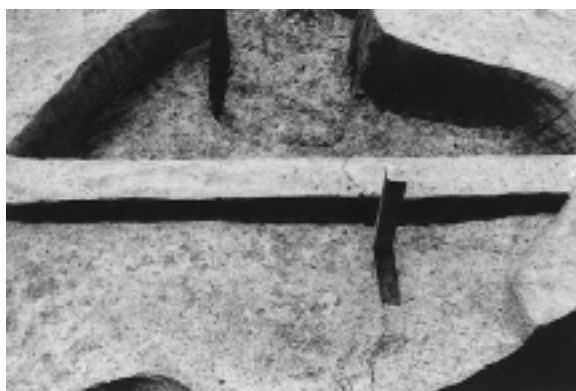
P-220遺物出土状態(西より)



P-222(南より)



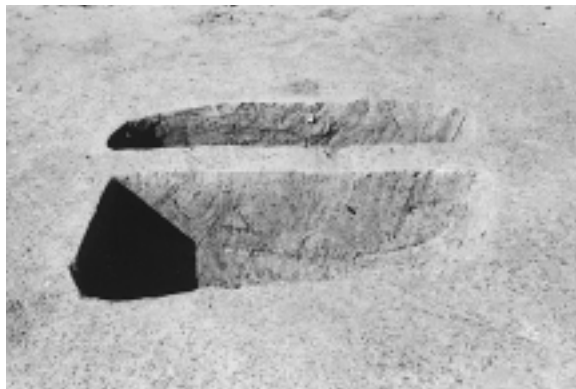
P-223遺物出土状態(西より)



SK-204(北より)



SK-206(南より)



SK-208(南より)



SK-210(南より)



SD-210(東より)



C区調査前全景(東より)



C区調査前全景(西より)



C区北東部遺構検出状態(南より)



C区北東部遺構検出状態(南西より)



C区北東部遺構完掘状態1(北より)



C区北東部遺構完掘状態2(北より)



C区北東部遺構完掘状態(東より)



C区北東部遺構完掘状態(南より)



C区北西部中世遺構完掘状態(西より)



C区北西部弥生時代遺構完掘状態(東より)



C区南東部近世遺構検出状態(東より)



C区南東部近世遺構完掘状態(東より)



C区南東部中世遺構検出状態(東より)



C区南東部中世遺構検出状態(西より)



C区南東部中世遺構完掘状態(南上空より)



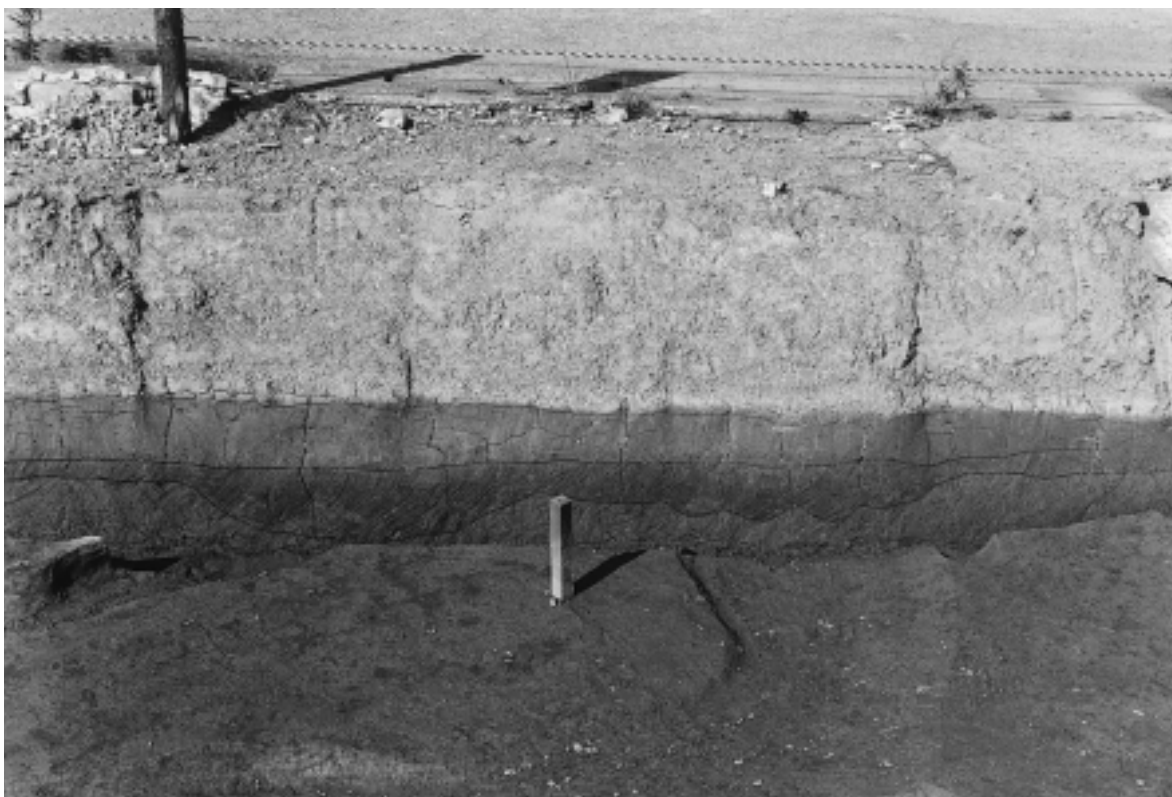
C区南東部中世遺構完掘状態(東上空より)



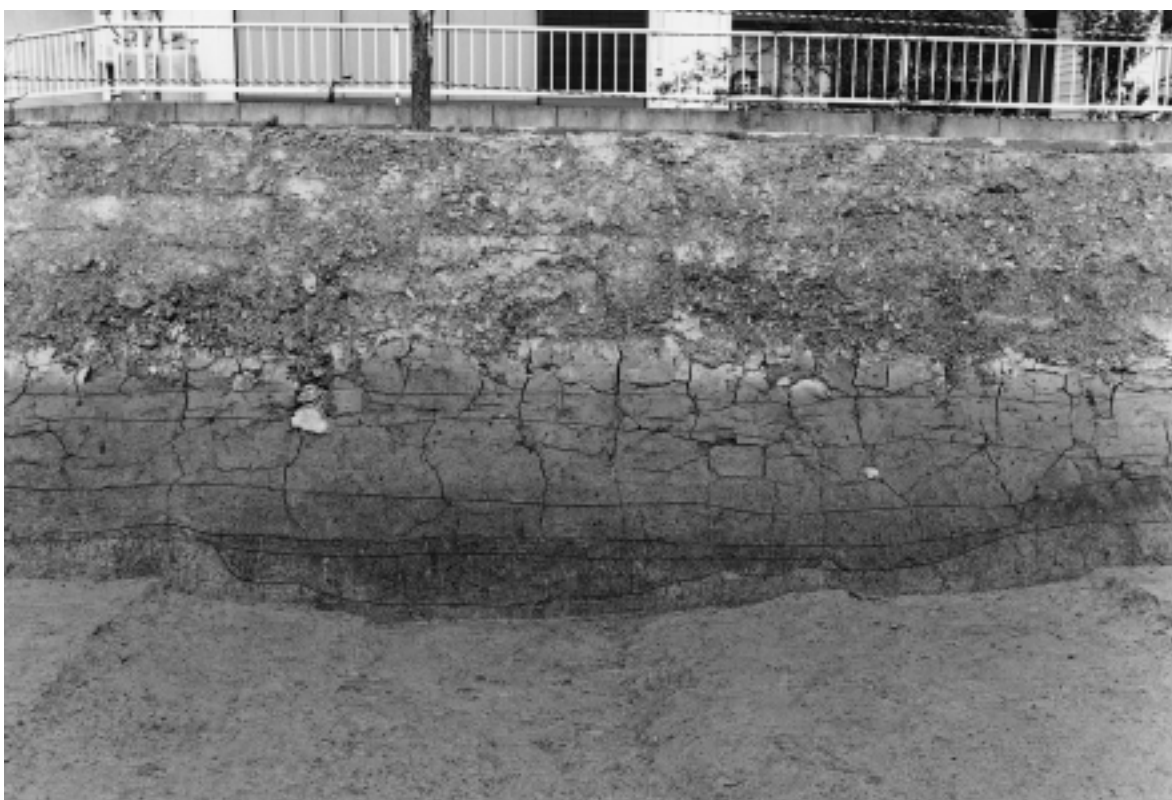
C区南西部中世遺構検出状態(西より)



C区南西部中世遺構完掘状態(西上空より)



C区北東部北壁セクション1(南より)



C区北東部北壁セクション2(南より)



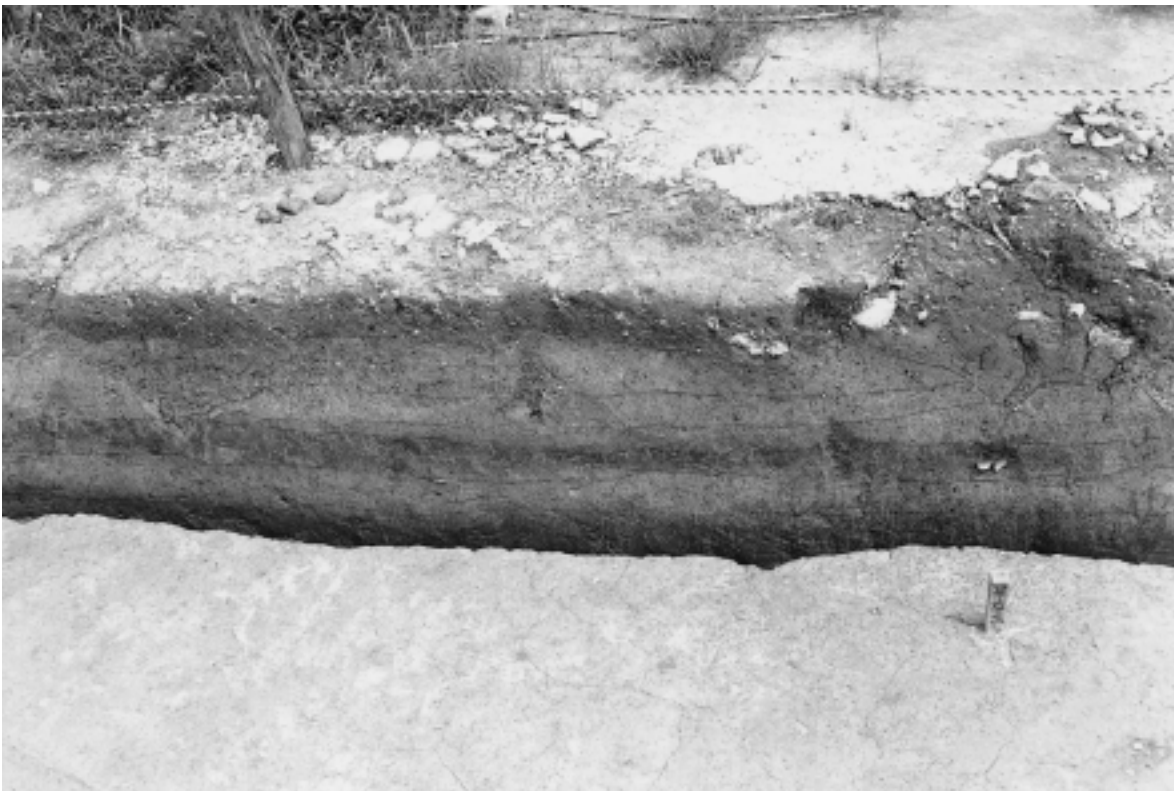
C区北西部北壁セクション(東より)



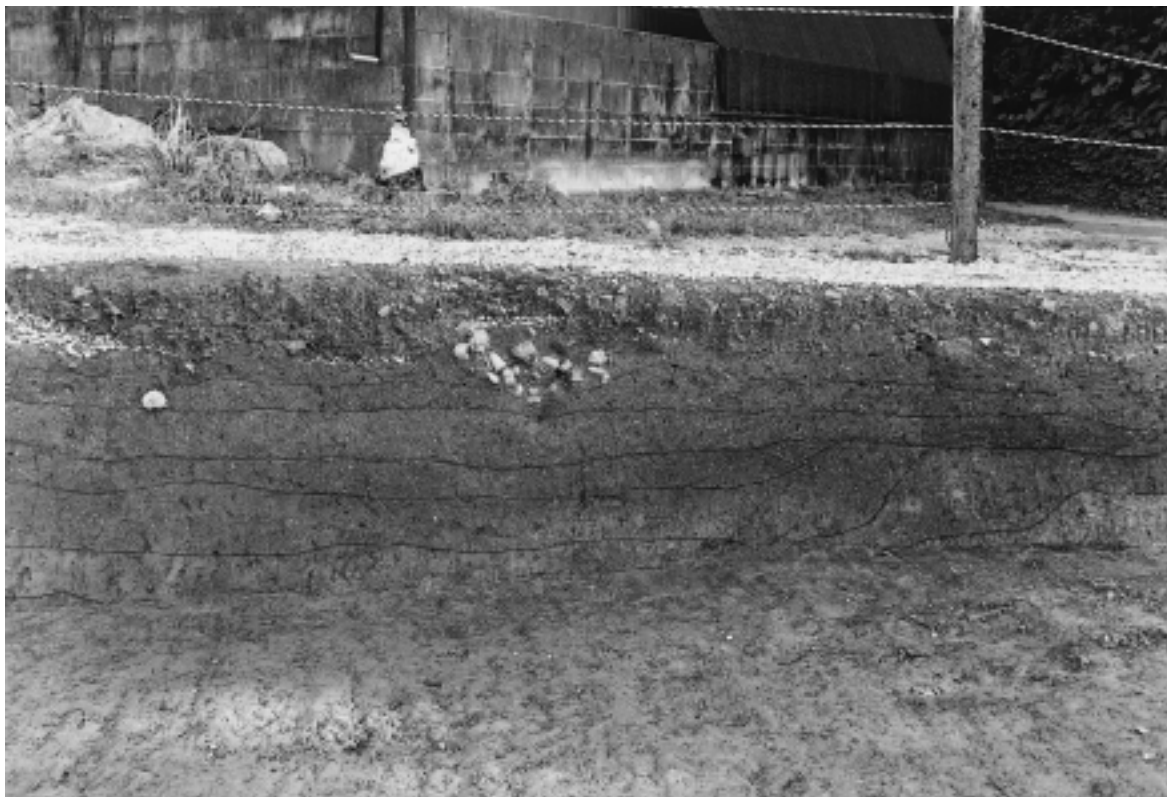
C区北西部北壁セクション(南より)



C区南東部南壁セクション1(北より)



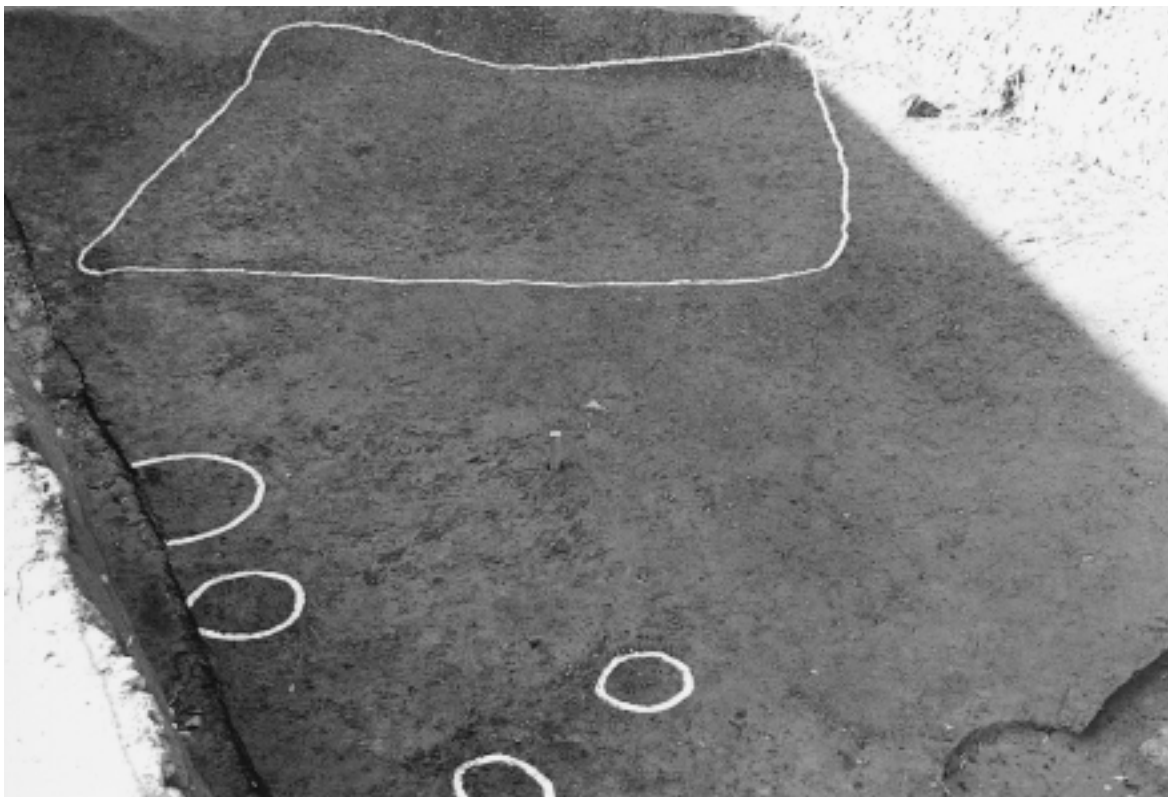
C区南東部南壁セクション2(北より)



C区南西部南壁セクション1(北より)



C区南西部南壁セクション2(北より)



ST-301検出状態(東より)



ST-301(東より)



ST-301(南より)



ST-301床面遺物出土状態(東より)



SA-302 (西より)



SA-303・304 (南より)



C区第Ⅲ層遺物出土状態1(北より)



C区第Ⅲ層遺物出土状態2(北より)



SC-302遺物出土状態1(東より)



SC-302遺物出土状態2(東より)



SC-302遺物出土状態(北より)



SC-304遺物出土状態(北東より)

PL.44



SC-306 (南より)



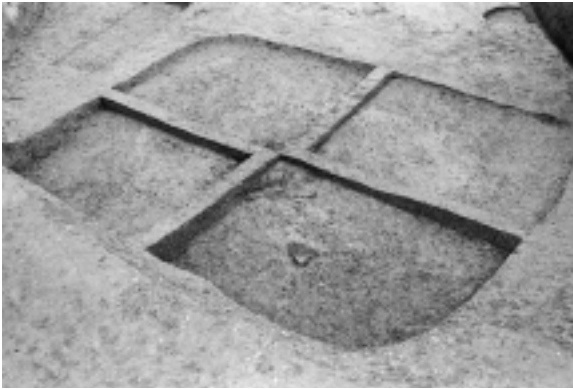
SC-307検出状態 (西より)



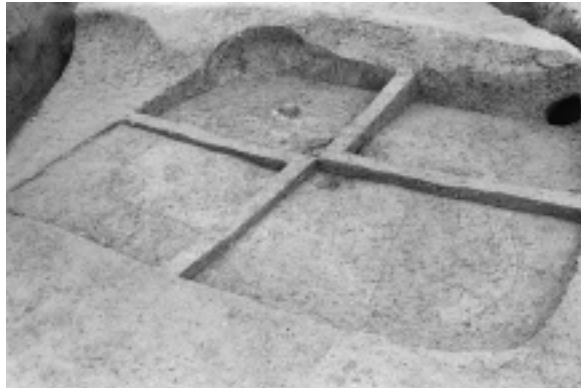
SK-304遺物出土状態(西より)



TR-1完掘状態(東より)



ST-301焼土検出状態(西より)



ST-301焼土検出状態(東より)



ST-301(東より)



ST-301(北より)



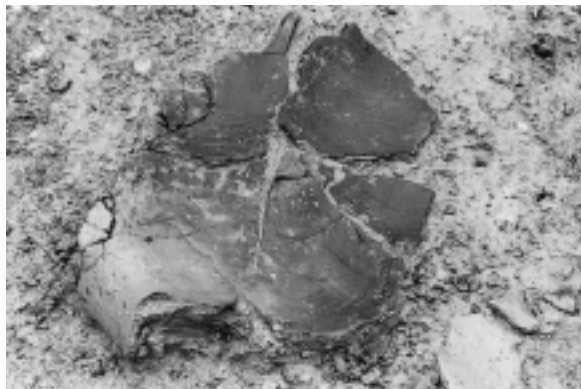
ST-301内P-9(東より)



ST-301内SK-1(北より)



ST-301床面叩石出土状態(北より)



ST-301遺物出土状態(南より)



SK-301(南より)



SK-302検出状態(西より)



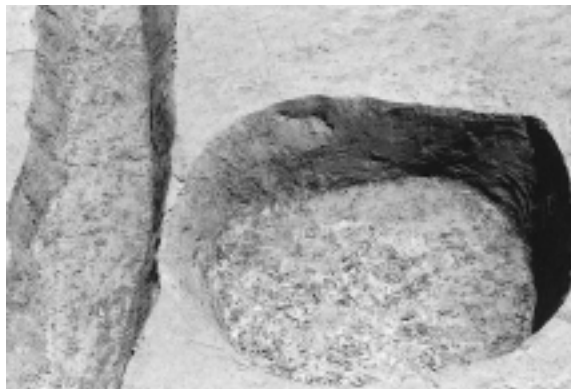
SC-307南部(南より)



SC-307北部(南より)



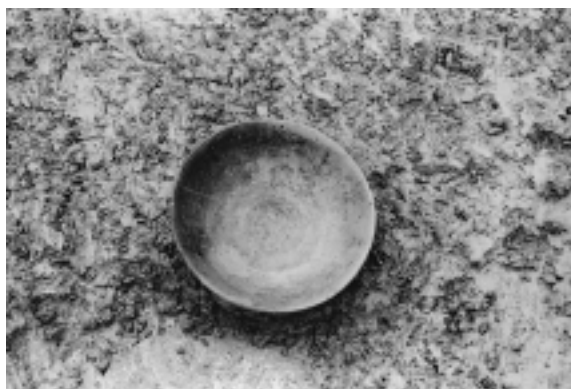
SK-303, SD-306(西より)



SK-303, SD-306完掘状態(西より)



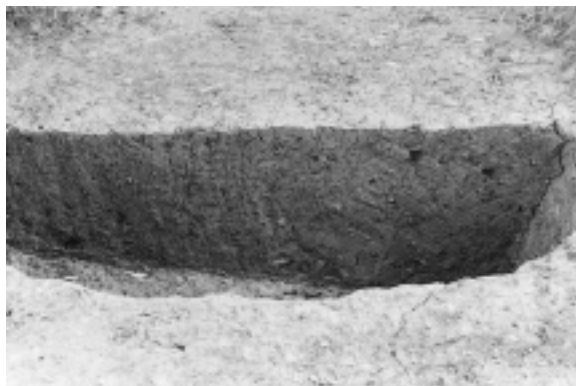
SK-304(西より)



SK-304遺物出土状態(西より)



SK-305・306(南より)



SK-307半裁状態(北より)



SK-307, SD-311(南より)



SK-308(東より)



SK-309遺物出土状態(南より)



SK-309遺物出土状態(南東より)



SD-305(南より)



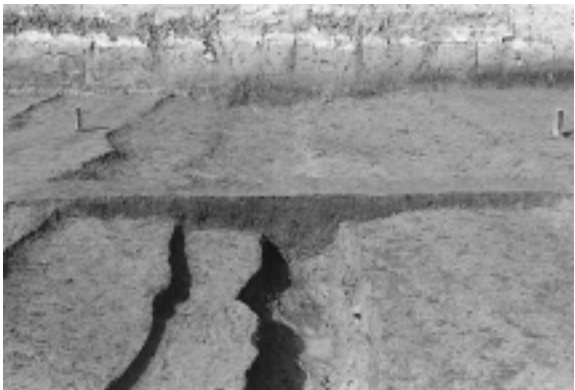
SD-306(東より)



SD-307 (東より)



SD-307 遺物出土状態 (西より)



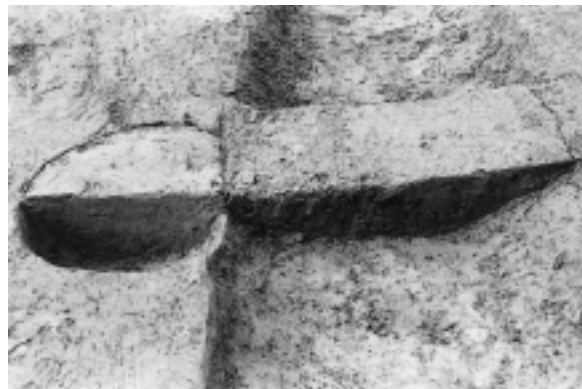
SD-309 (南より)



SD-309 遺物出土状態 (北より)



SD-313 (西より)



SD-318 (南より)



SD-320 (東より)



C区北東部暗渠 (南より)



D区調査前全景(南より)



D区遺構完掘状態(北より)



E区調査前全景(西より)



E区調査前全景(南西より)



E区北東部古代・中世遺構検出状態(西より)



E区北部古代・中世遺構検出状態(西より)



E区北部古代・中世遺構完掘状態(西より)



E区北部古代・中世遺構完掘状態(東より)



E区東部近世遺構検出状態(東より)



E区東部近世遺構検出状態(西より)



E区東部近世遺構完掘状態(東より)



E区東部近世遺構完掘状態(北より)



E区東部中世遺構検出状態(西より)



E区東部中世遺構検出状態(東より)



E区東部中世遺構完掘状態(西より)



E区東部中世遺構完掘状態(東より)



E区西部遺構完掘状態(東より)



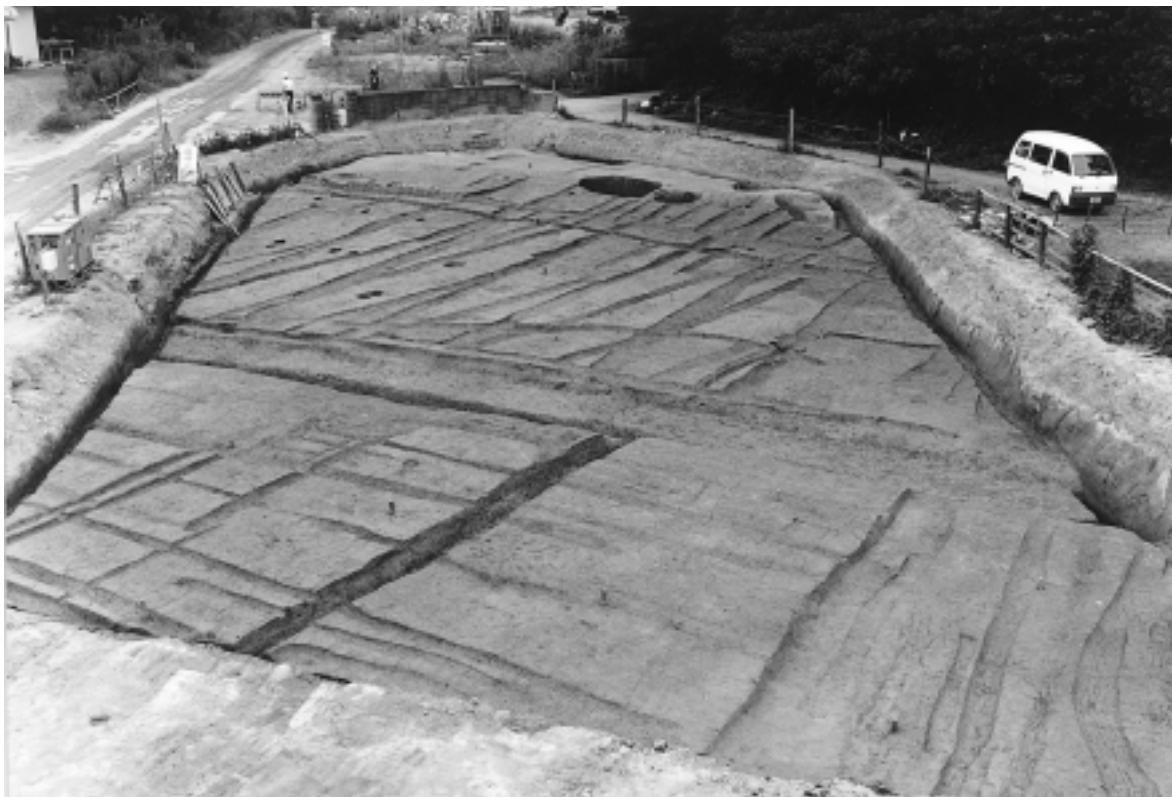
E区西部遺構完掘状態(東上空より)



E区東部古代遺構検出状態(西より)



E区東部古代遺構検出状態(東より)



E区東部古代遺構完掘状態(西より)



E区東部古代遺構完掘状態(南上空より)



E区北部弥生時代遺構検出状態(西より)



E区北部弥生時代遺構完掘状態(東より)



E区東部弥生時代遺構検出状態(西より)



E区東部弥生時代遺構完掘状態(西より)



E区南壁セクション東部(北より)



E区南壁セクション中央(北より)



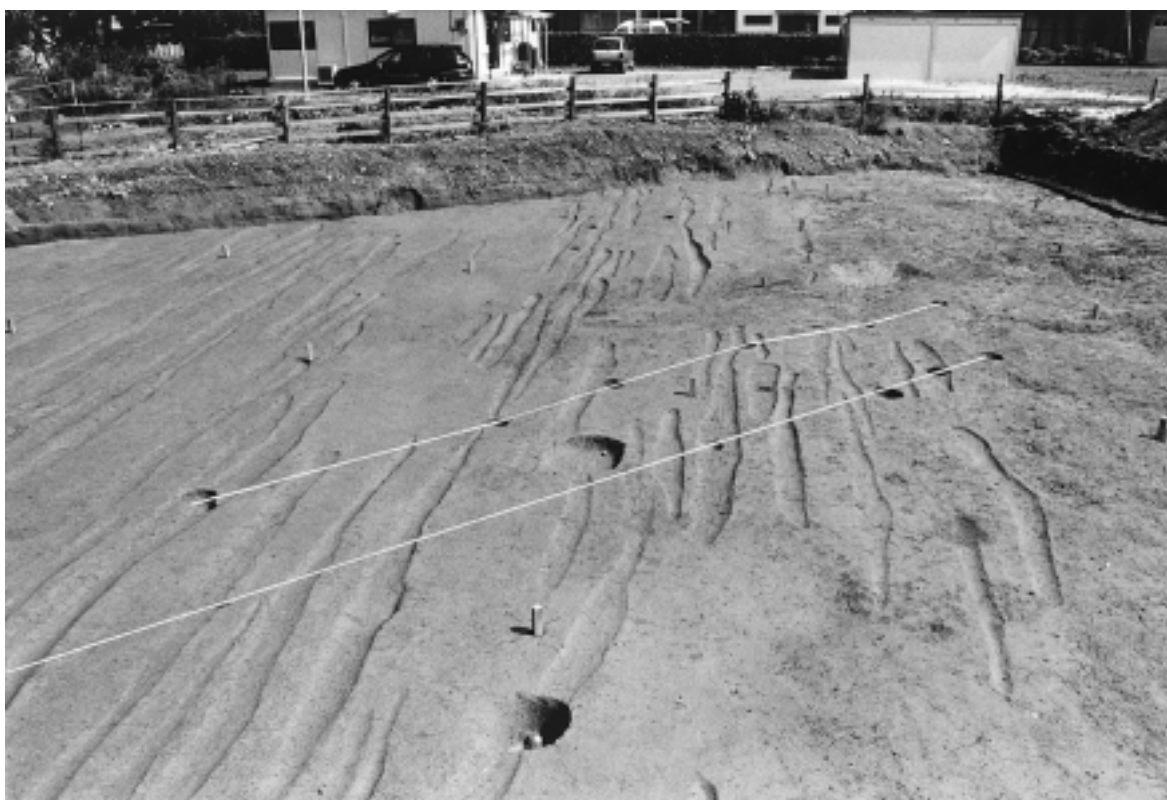
E区下層確認トレンチ(東より)



E区下層確認トレンチセクション(北より)



SD-508・509, SB-501(北より)



SA-504・505(北より)

PL.66



SD-518・519 (南東より)



SF-501 (北東より)



F区中世遺構検出状態(北より)



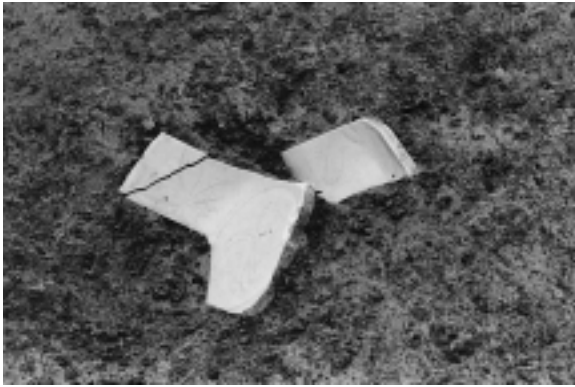
F区中世遺構完掘状態(北より)



F区弥生時代遺構完掘状態(北より)



F区南壁セクション(北より)



E区第Ⅵ層青磁(5040)出土状態



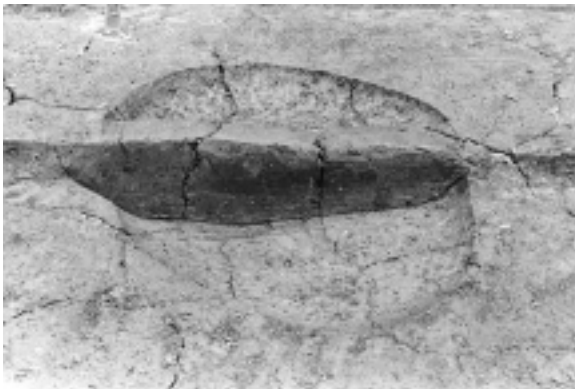
E区第Ⅶ層須恵器(5557)出土状態



SC-501遺物出土状態(西より)



ST-501(西より)



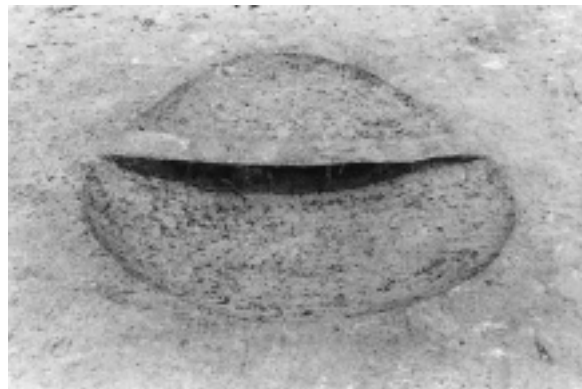
SK-501(西より)



SK-502(西より)



SK-507(南より)



SK-508(南より)



SD-502 (西より)



SD-503 (北より)



SD-505須恵器(5126)出土状態



SD-507 (西より)



SU-501 (西より)



SU-502 (西より)



SU-503 (東より)



SD-508・509 (南より)



SD-514 (南より)



SD-515 (南より)



SD-518・519 (西より)



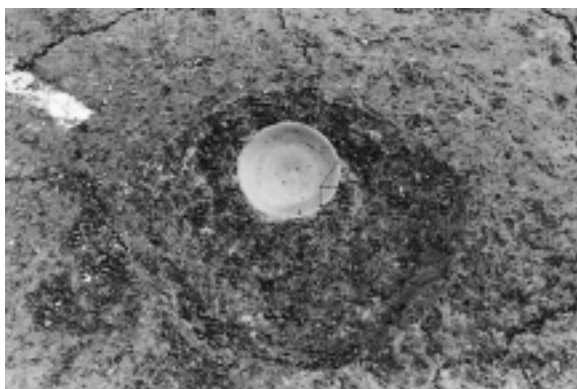
SD-520 (東より)



SD-521 (東より)



SD-522 (東より)



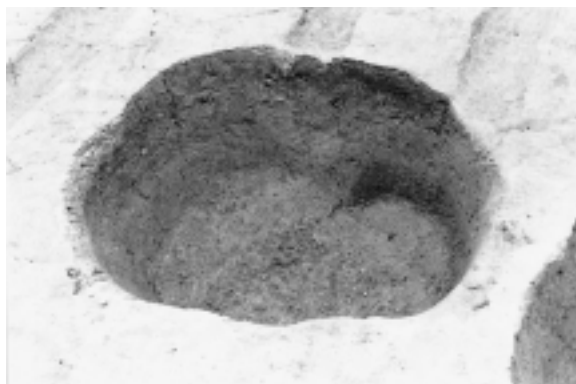
P-503土師質土器(5142) 出土状態



SK-512 (東より)



SK-513(北より)



SK-513(東より)



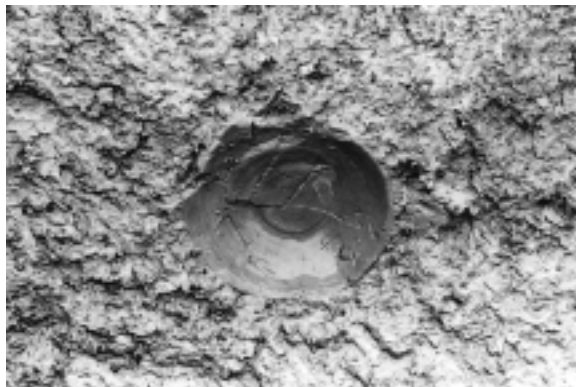
SK-515(北より)



SK-516(南東より)



SD-601土師質土器(6007)出土状態



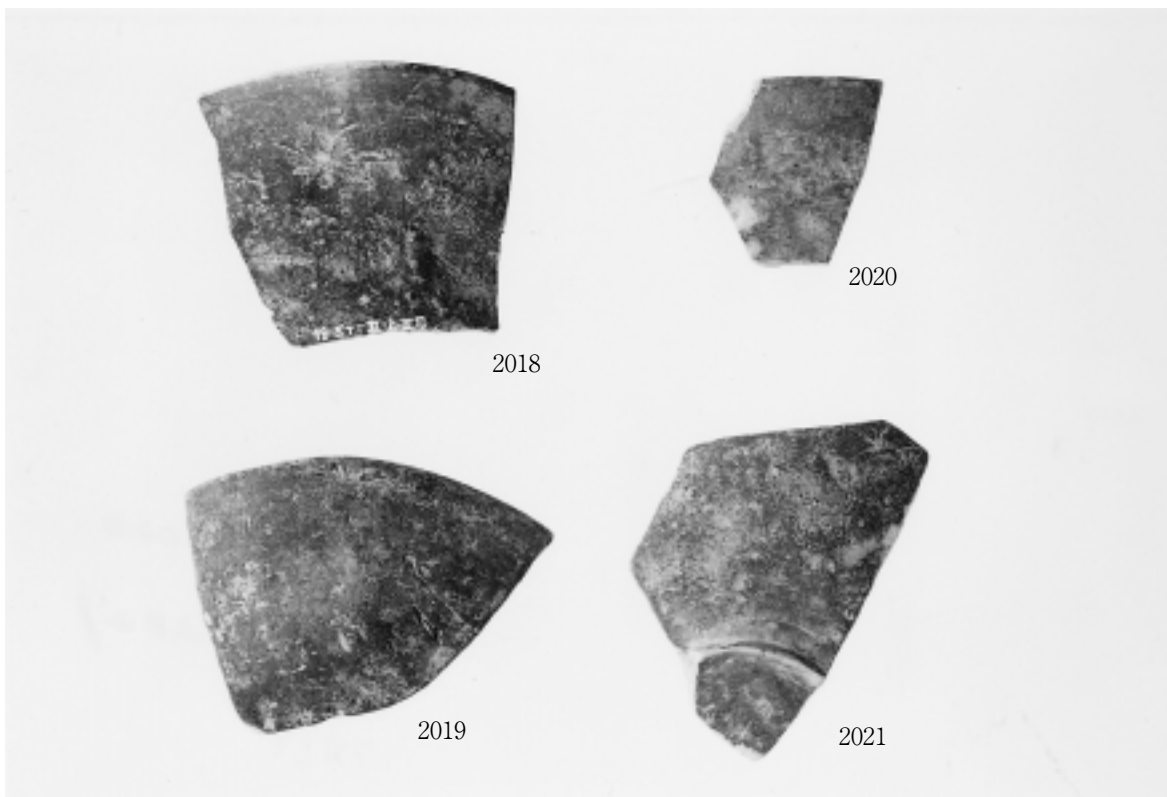
SD-601土師質土器(6008)出土状態



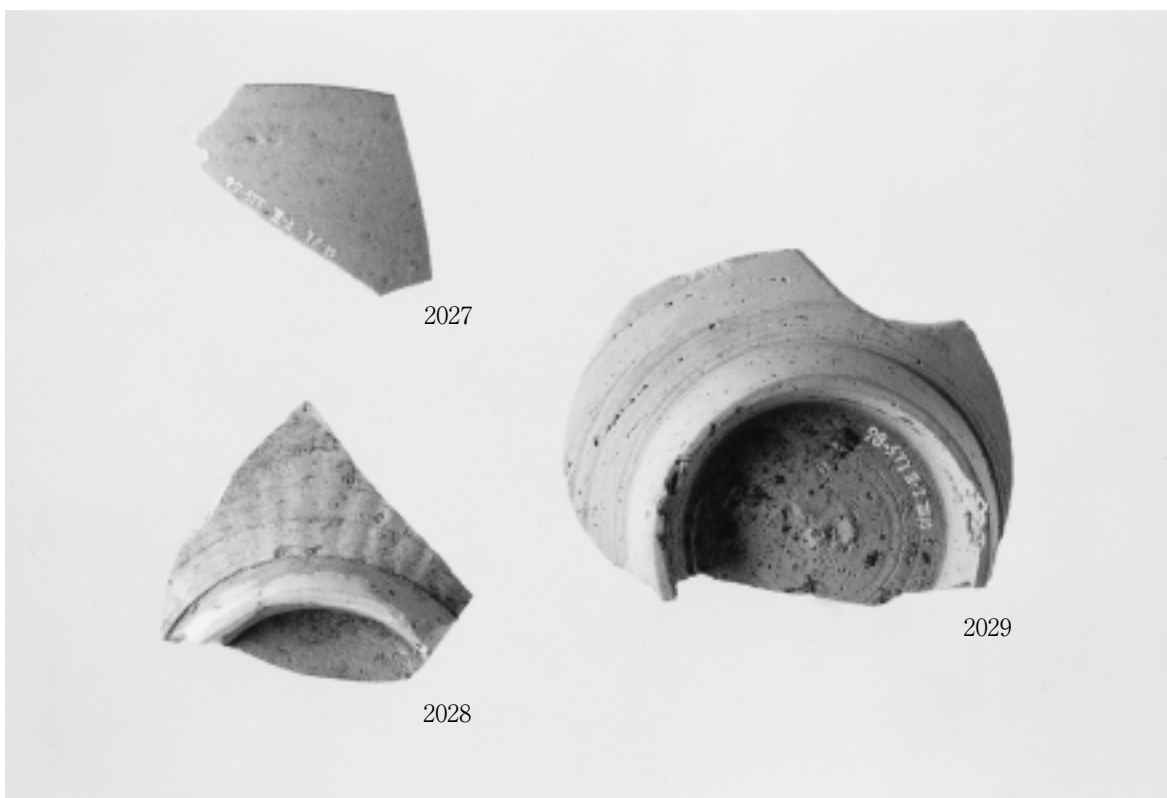
SD-601・603(南より)



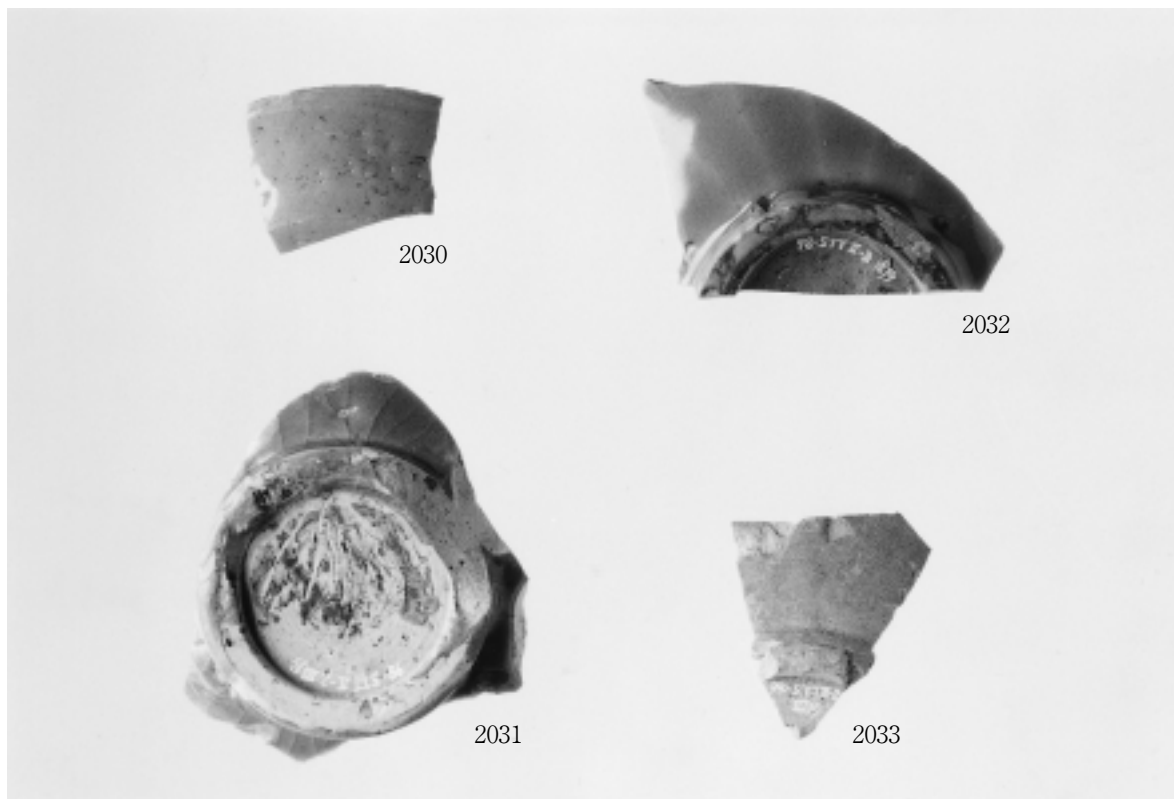
SD-602(南より)



瓦器(碗)



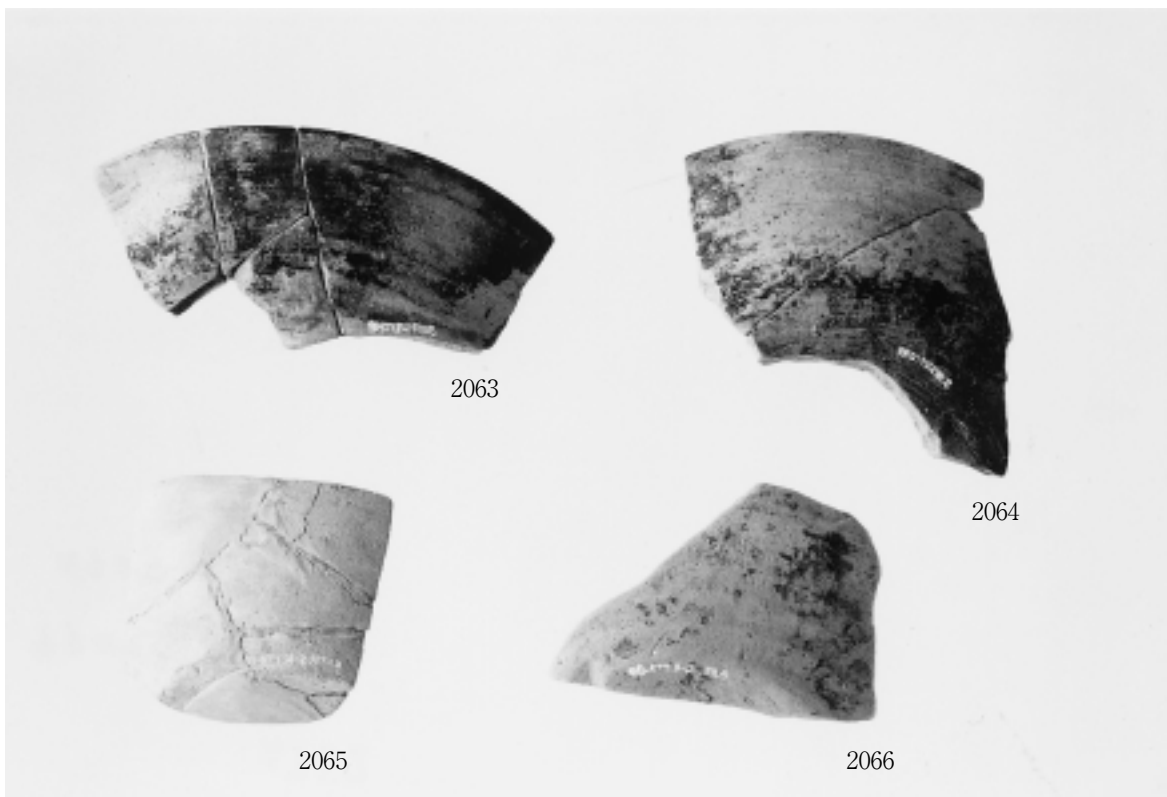
白磁(碗)



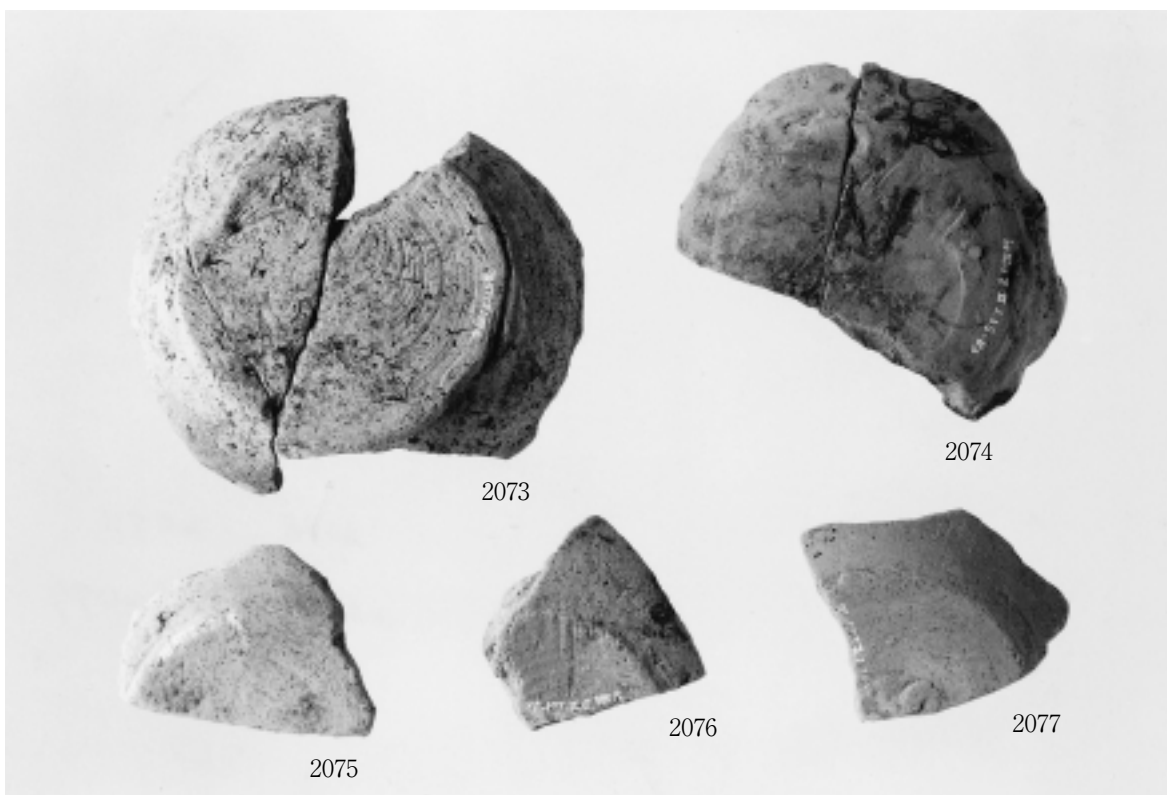
青磁(碗・皿)



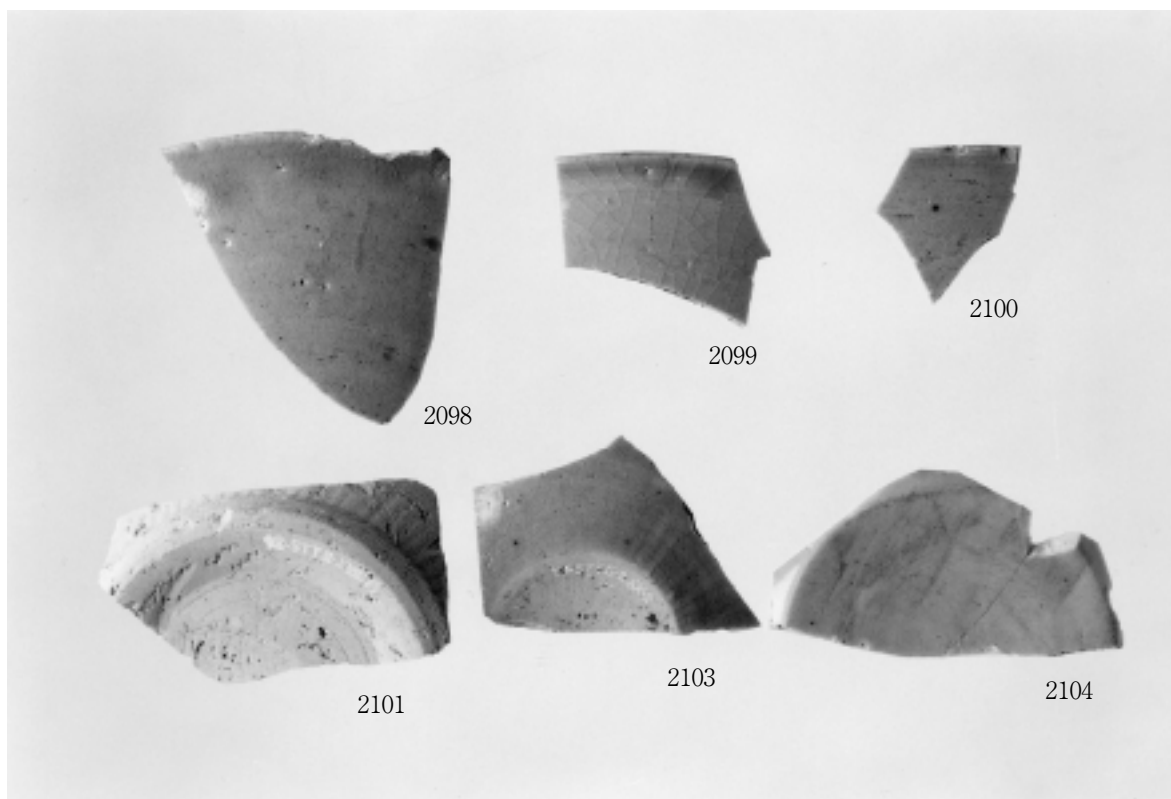
東播系須恵器(片口鉢)



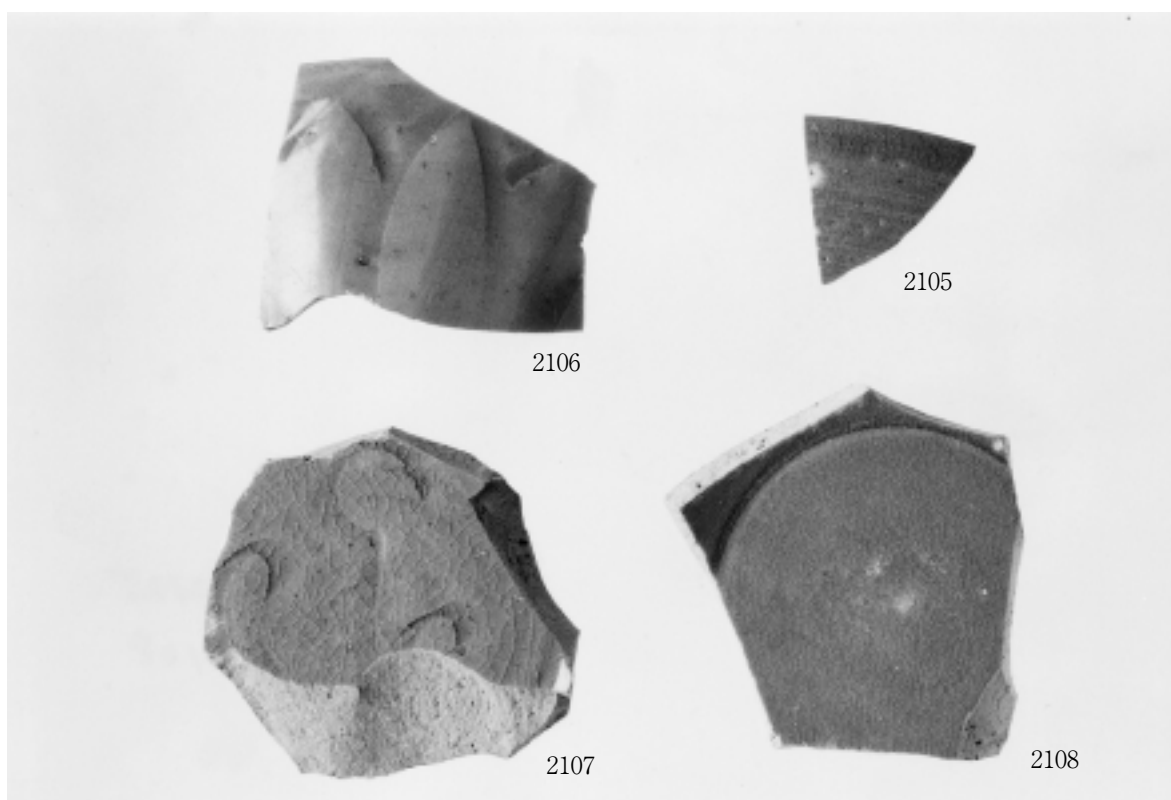
土師質土器(杯)



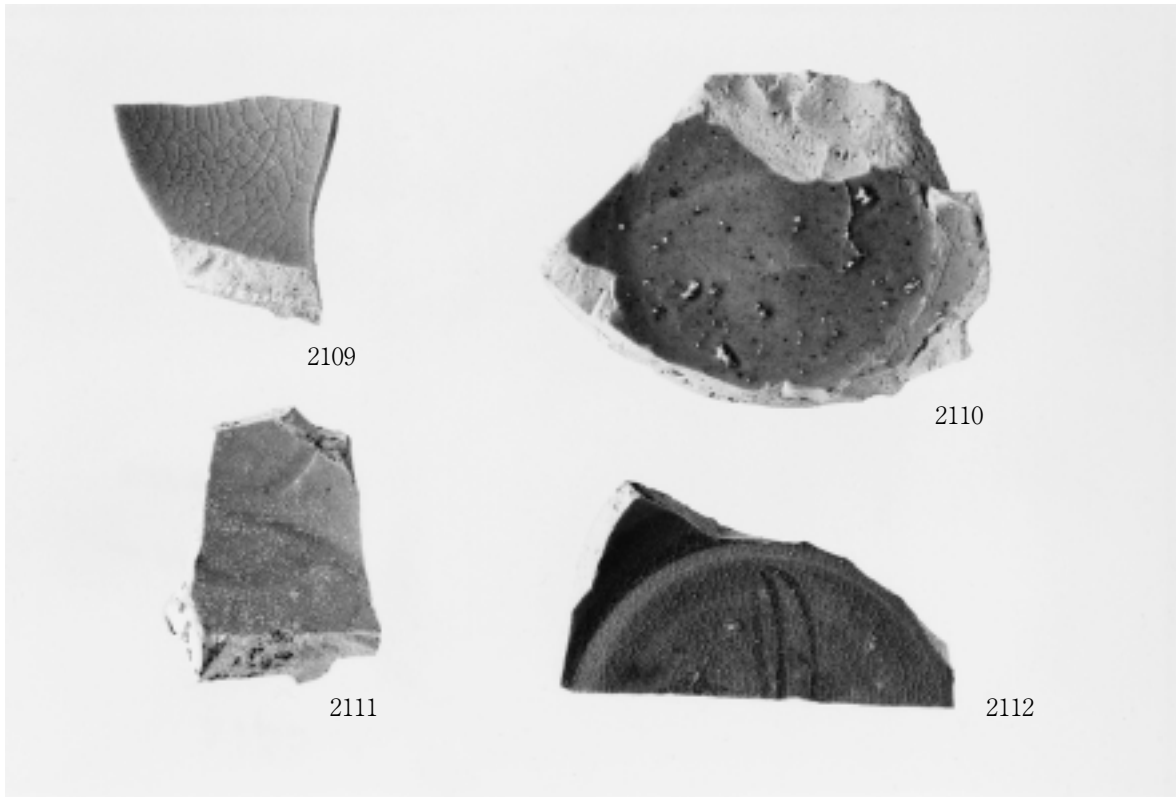
土師質土器(杯)



白磁(碗·皿)



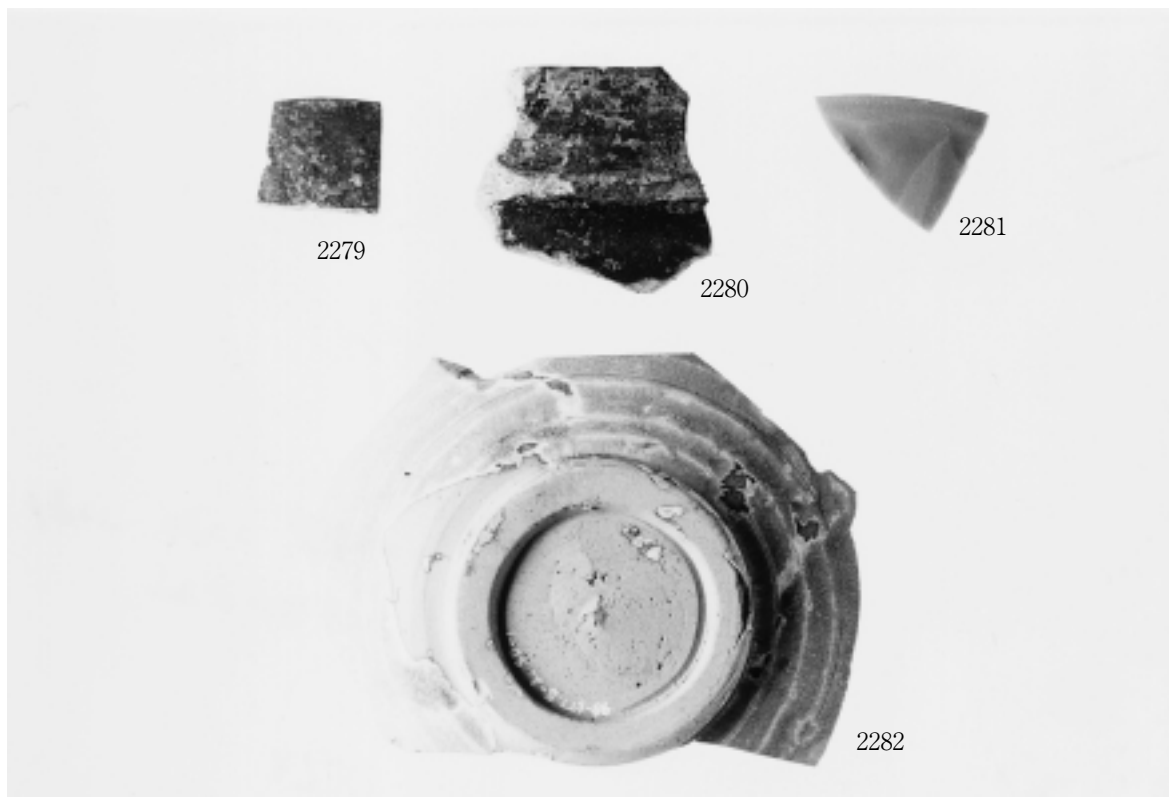
青磁(碗)



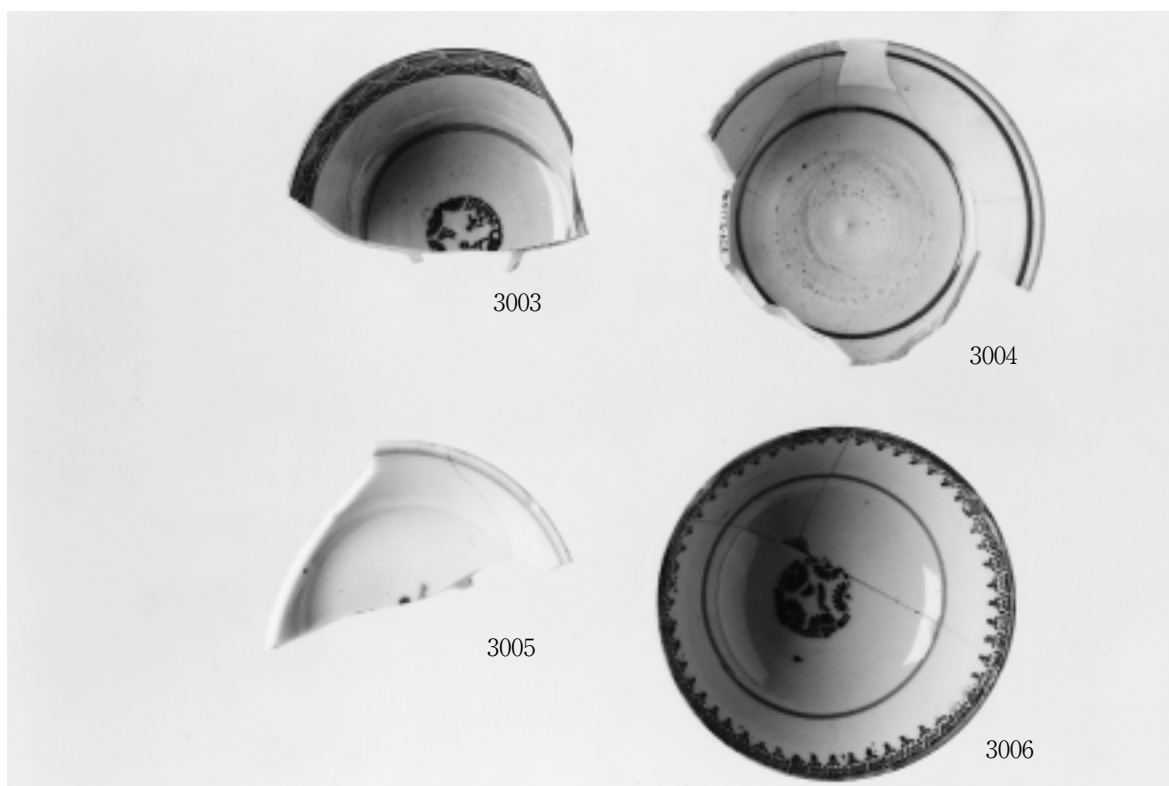
青磁(碗)



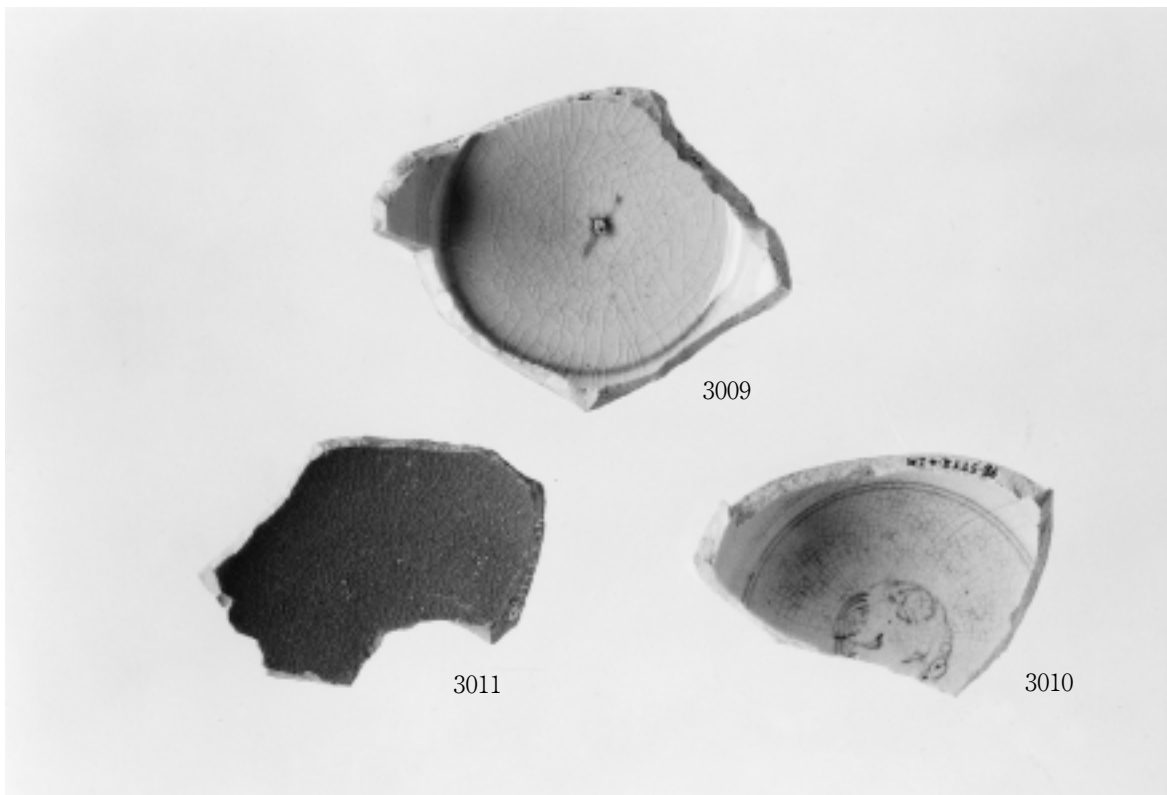
瓦器(椀), 土師質土器(杯), 土製品(土錘)



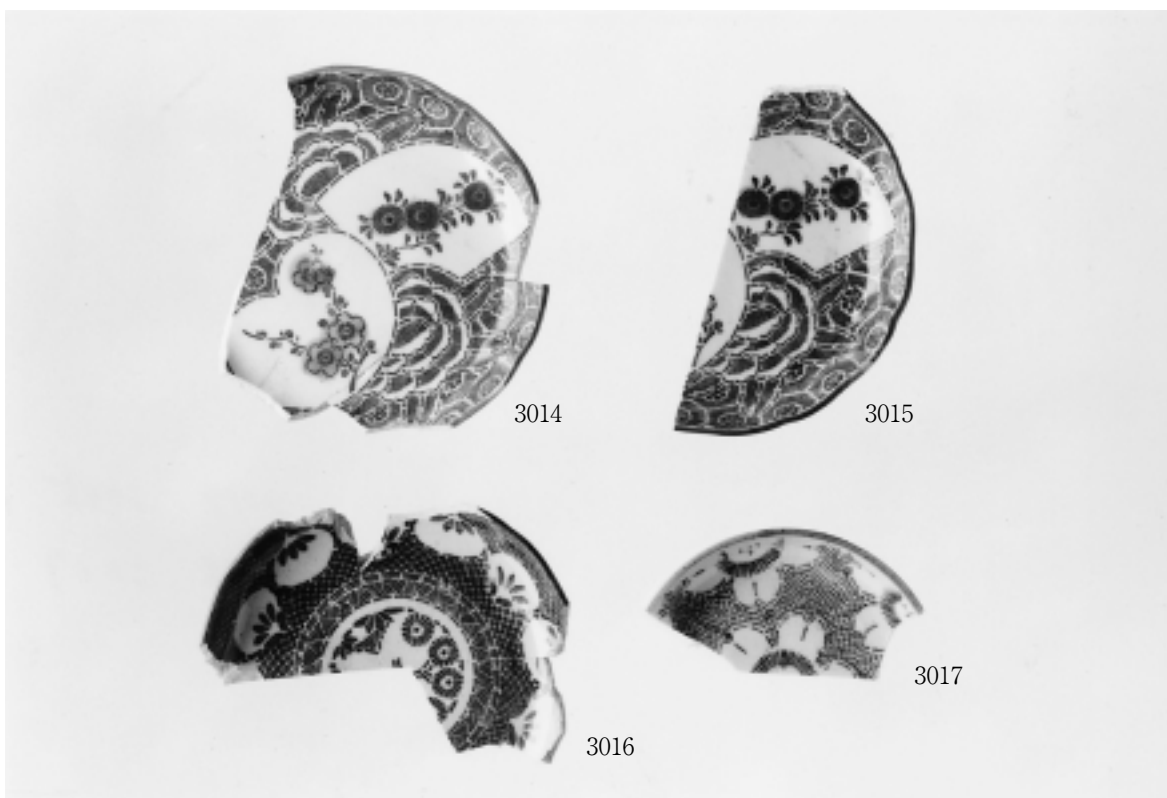
瓦器(碗), 瓦質土器(羽釜), 青磁(碗), 陶器(碗)



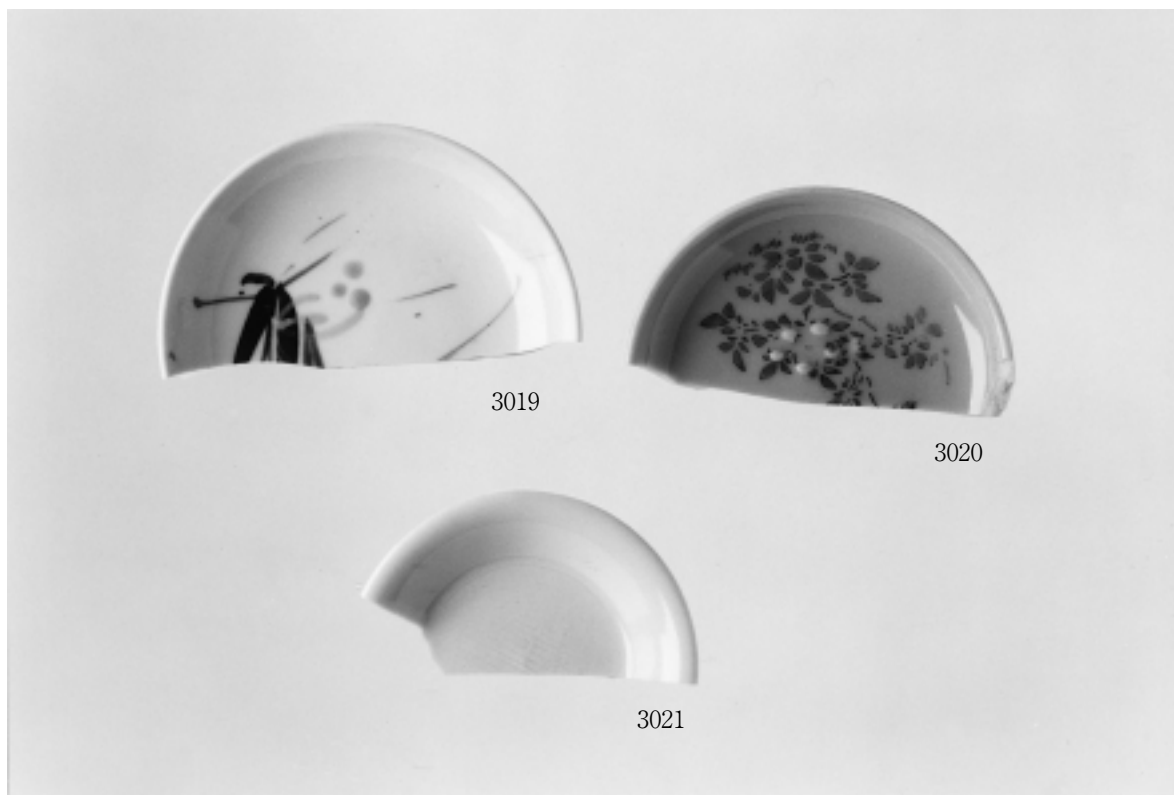
磁器(碗)



磁器(碗)



磁器(皿)



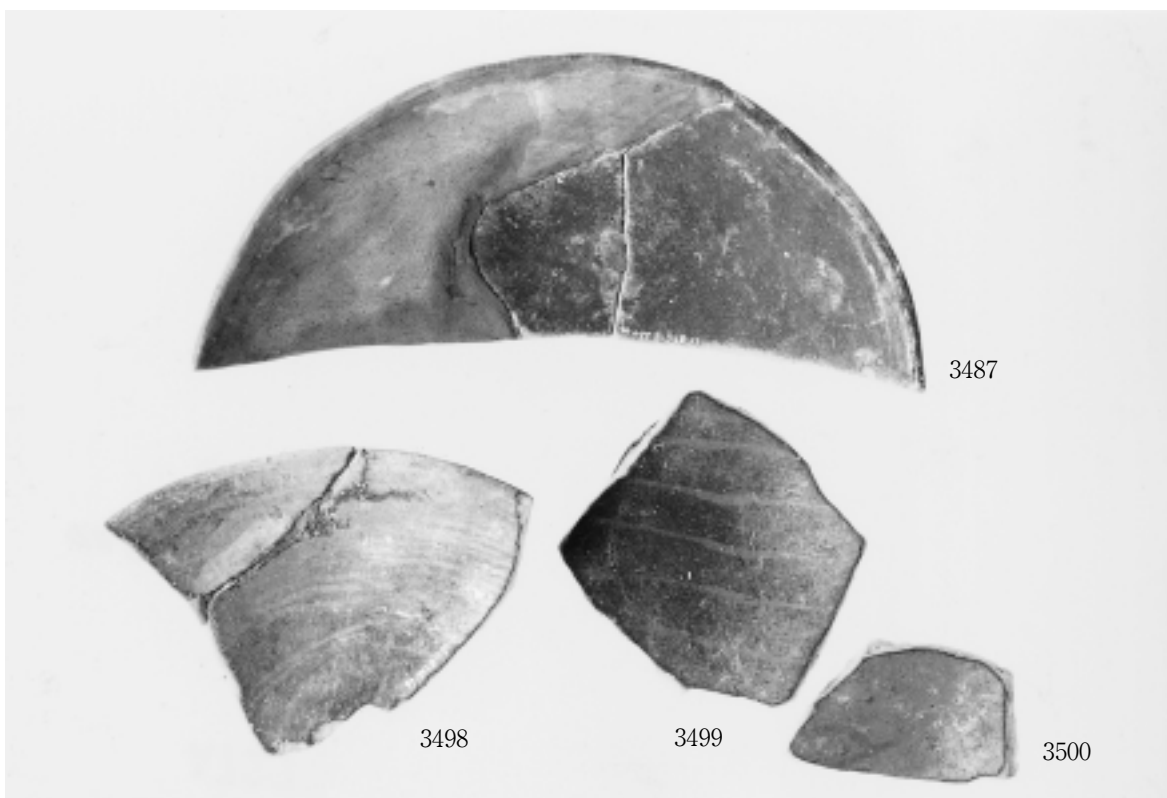
磁器(皿)



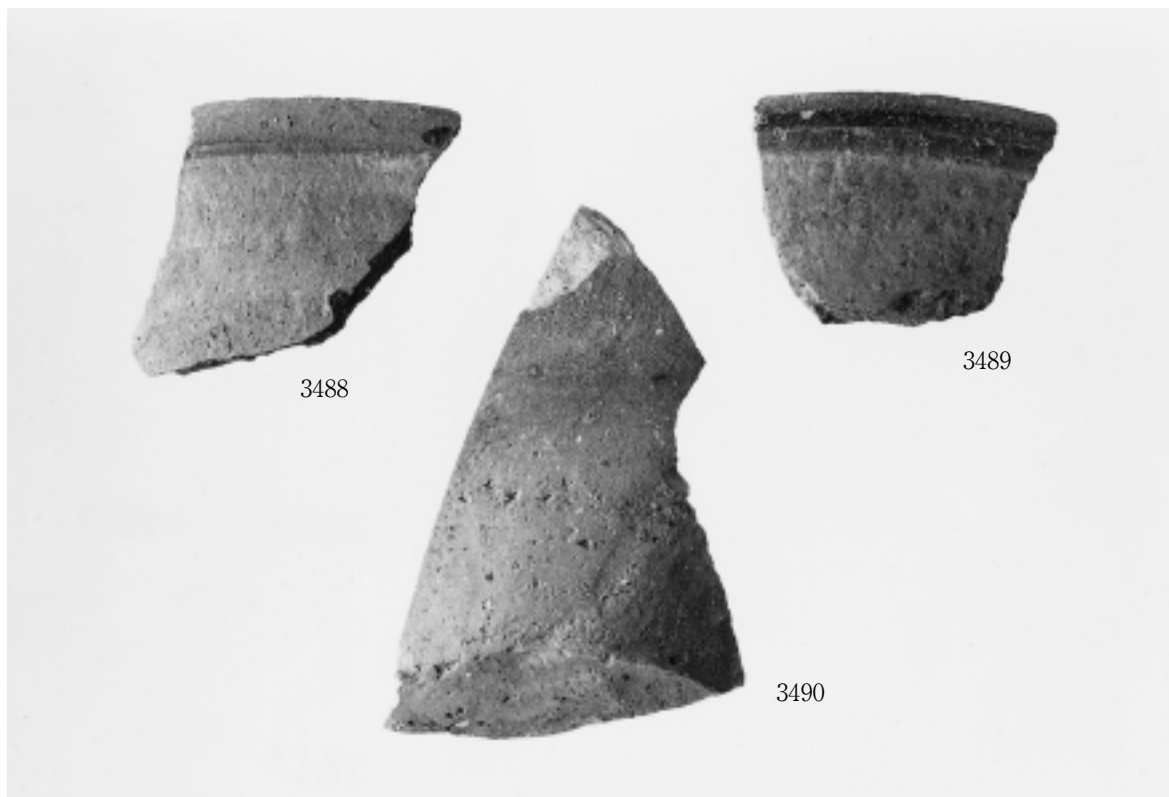
弥生土器(壺)



青磁(碗)



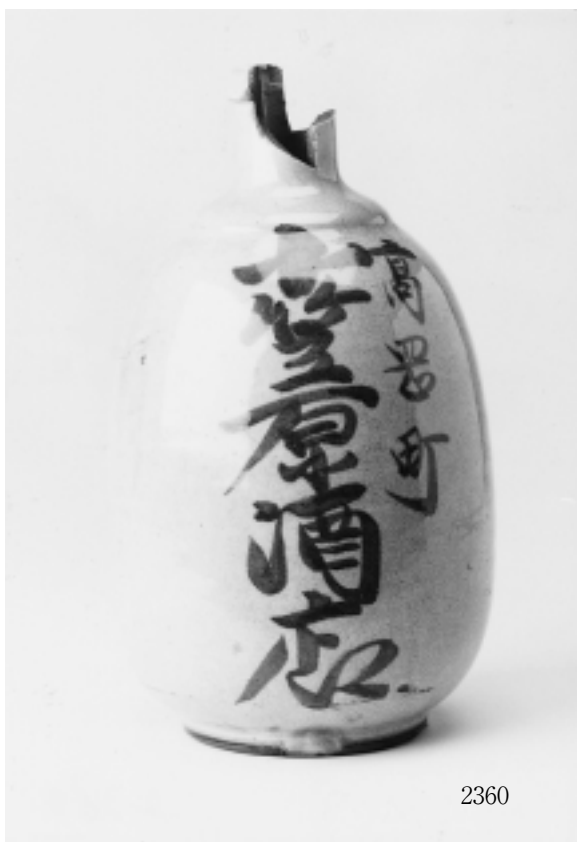
瓦器(碗)



東播系須恵器(片口鉢)



ガラス製品(瓶)



磁器(爛德利・小瓶), 陶器(德利)



備前焼(播鉢), 磁器(仏花器), 陶器(徳利)

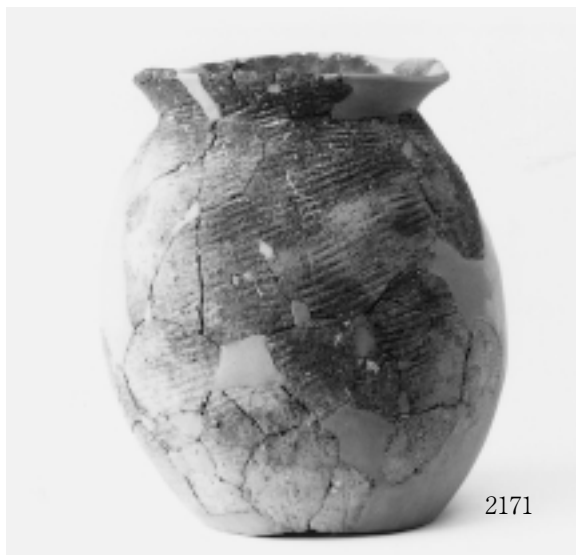


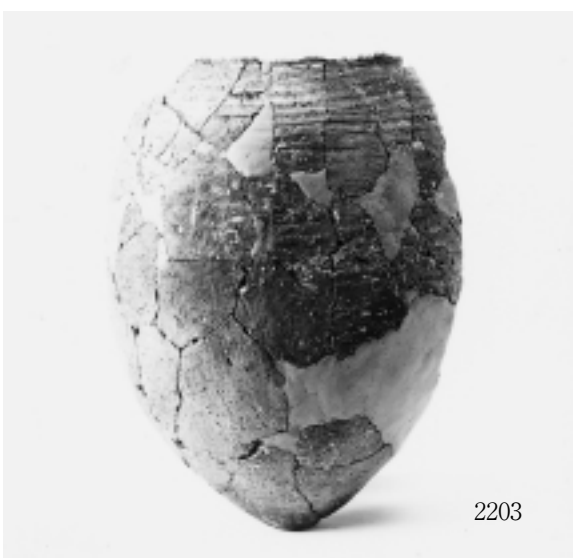
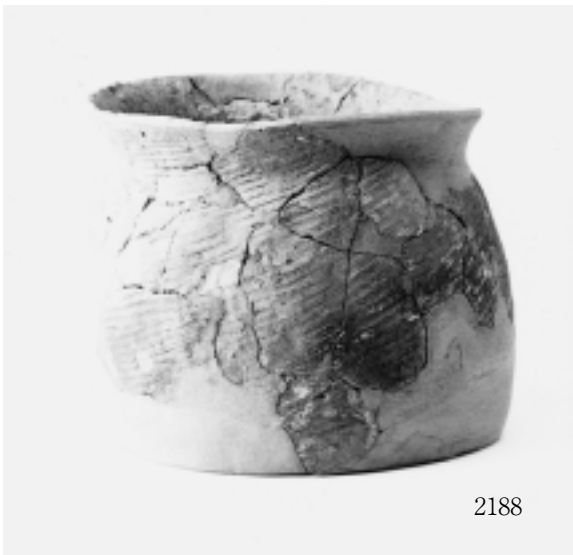
陶器(德利), 石製品(石斧)



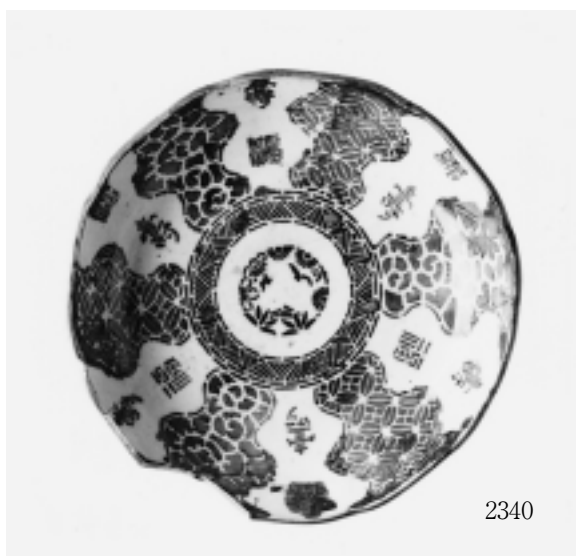
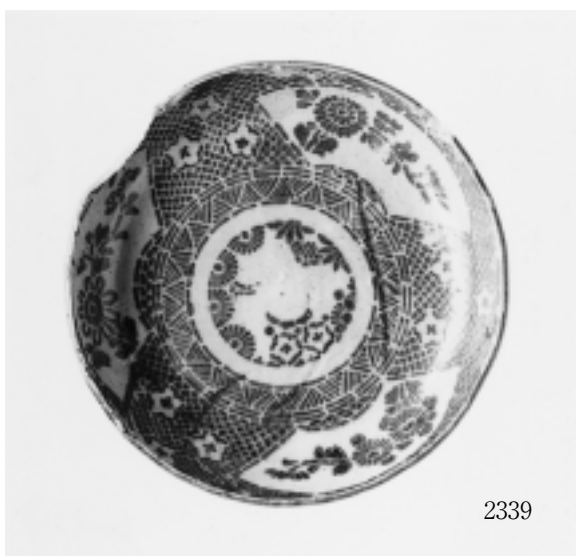


弥生土器(壺・甕)





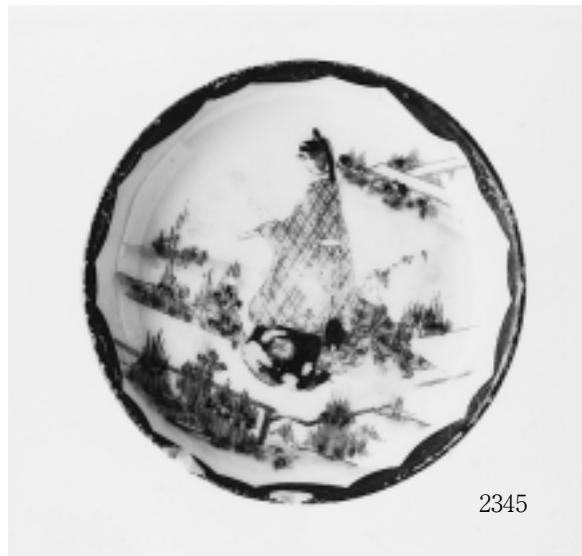
弥生土器(甕・支脚)



弥生土器(支脚), 磁器(小碗・皿)



2344



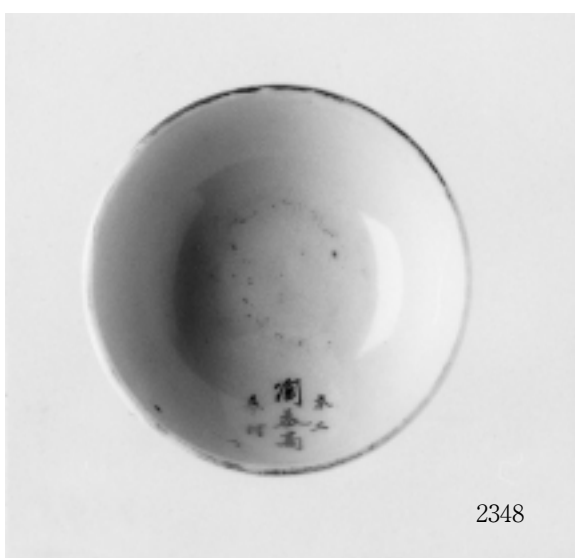
2345



2346



2357

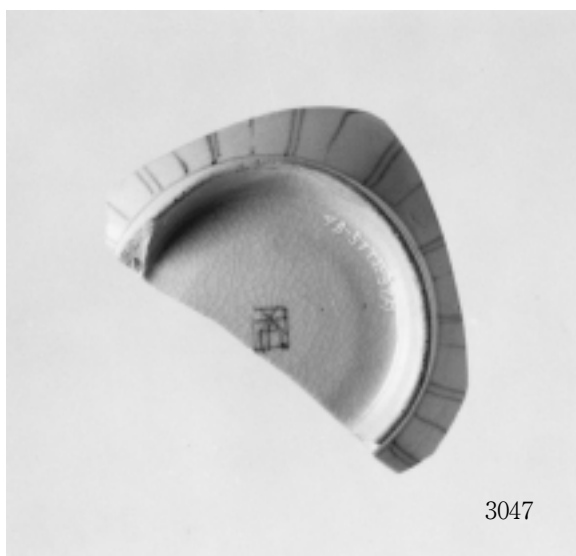


2348



2348

磁器(皿・酒杯), 陶器(鉢形容器)



弥生土器(甕), 磁器(蓋・碗・皿), 陶器(小壺)



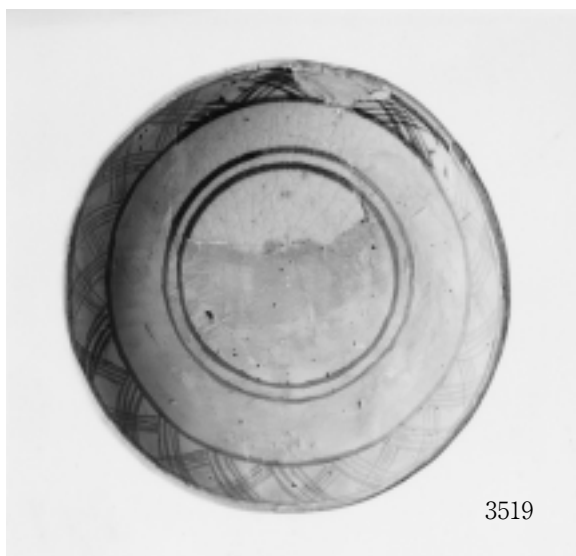
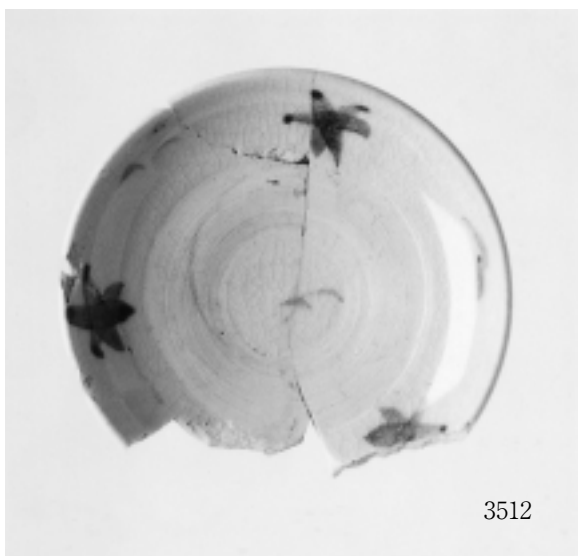
弥生土器(甕・鉢)



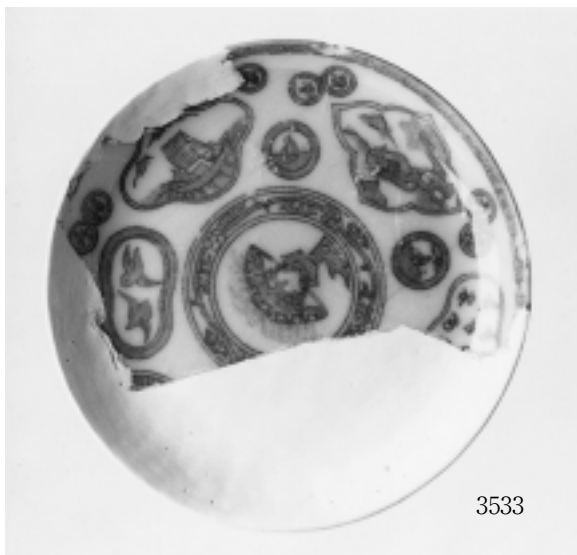
弥生土器(壺・甕・高杯)



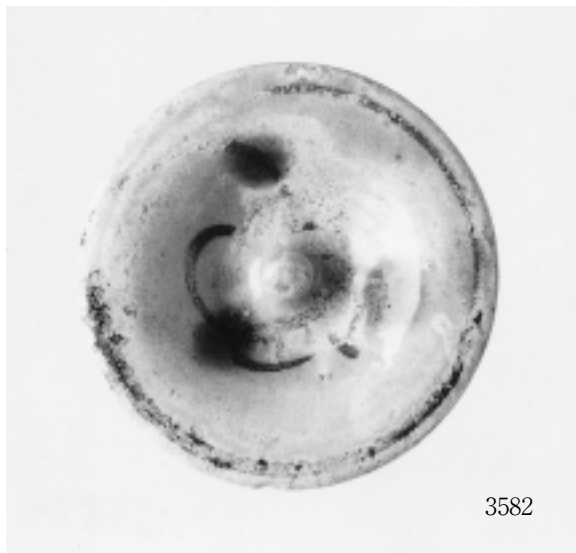
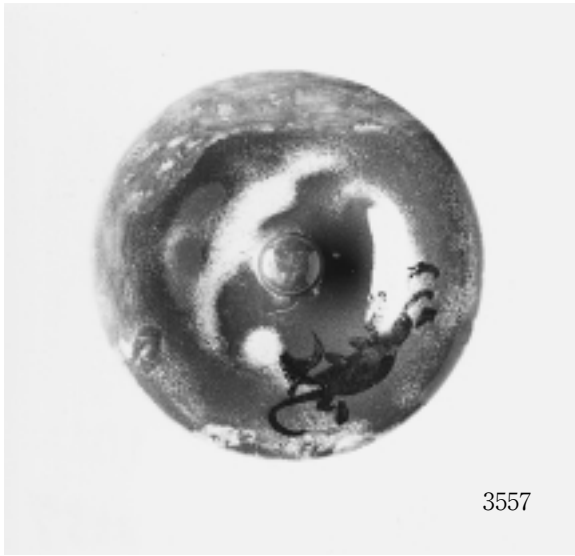
弥生土器(甕)



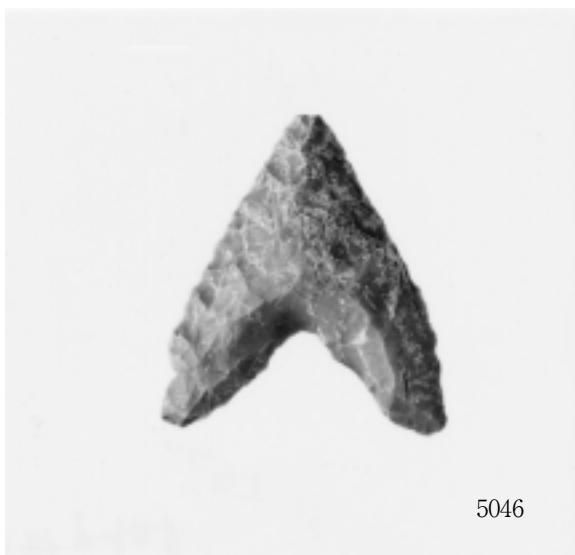
弥生土器(甕・高杯), 磁器(蓋・小碗・皿)



磁器(皿・隅切角皿)



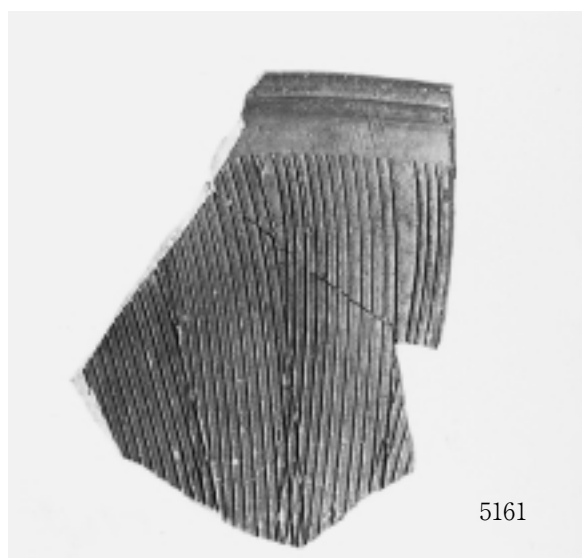
陶器(蓋・台付灯明皿・德利)



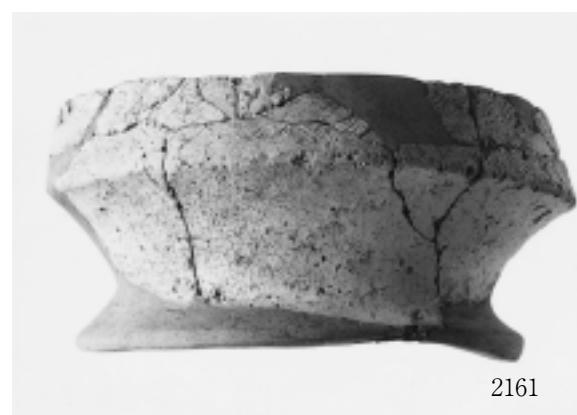
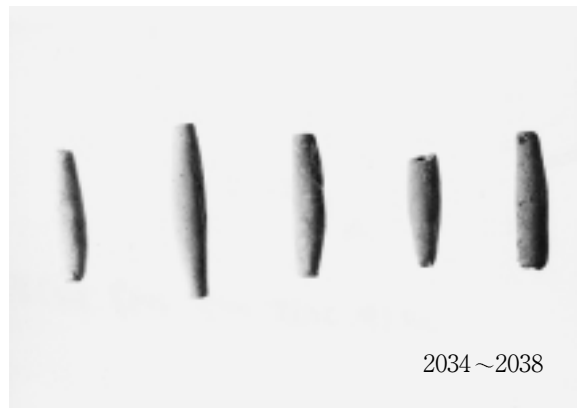
弥生土器(壺), 陶器(蓋・小壺), 石製品(石鏃・空風輪)



弥生土器(甕)



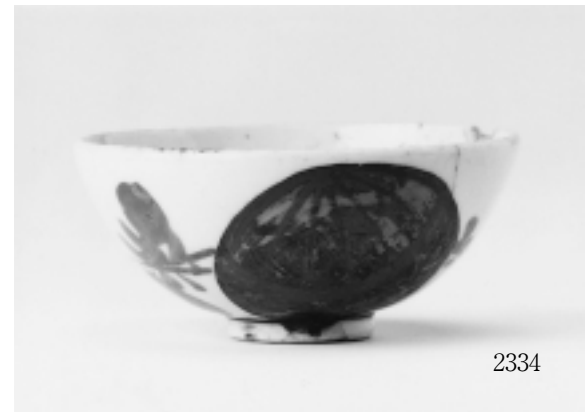
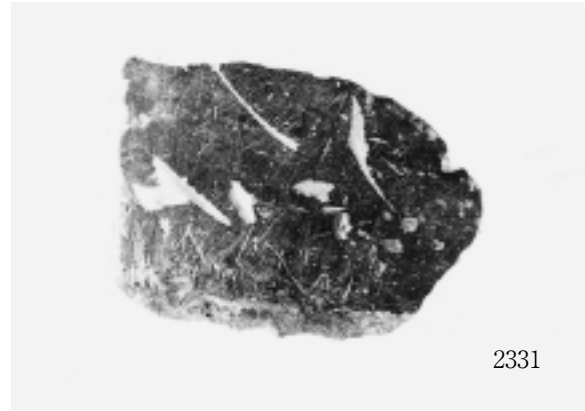
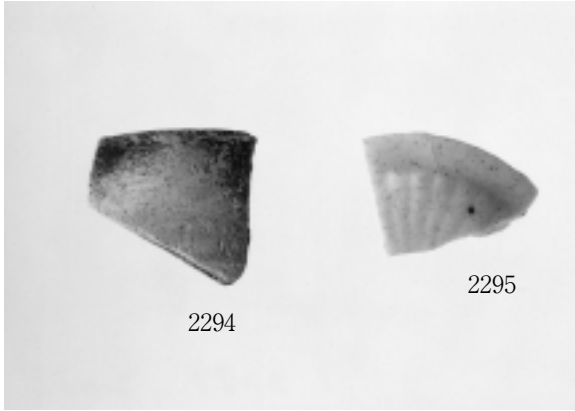
弥生土器(甕・甑), 須恵器(壺), 備前焼(播鉢)



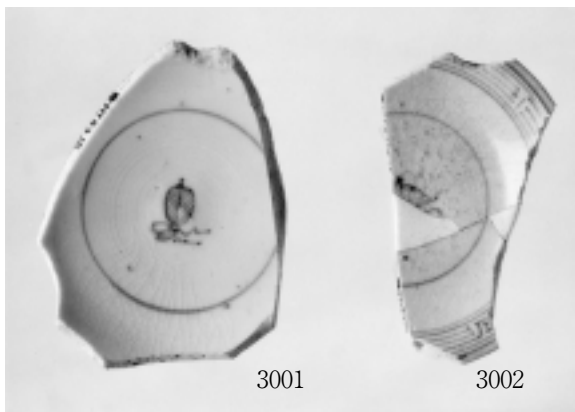
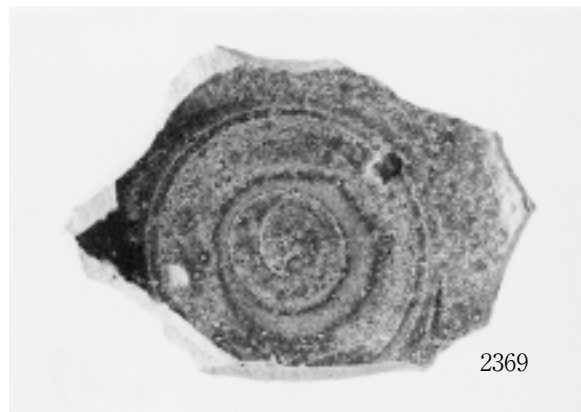
弥生土器(壺・甕・鉢), 土製品(土錘)



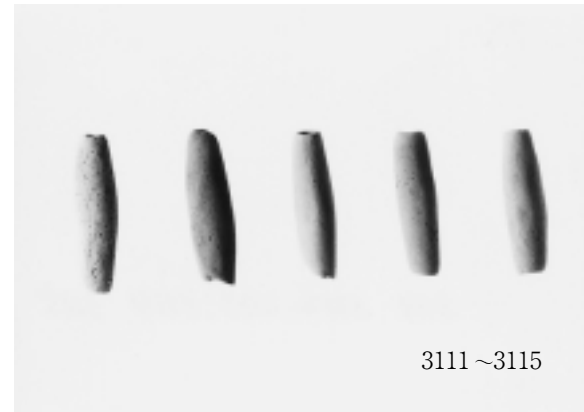
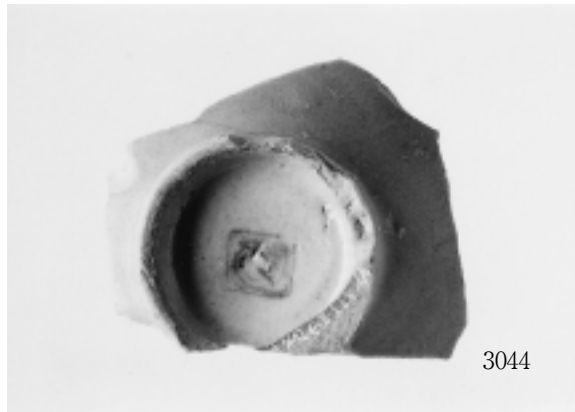
弥生土器(鉢)



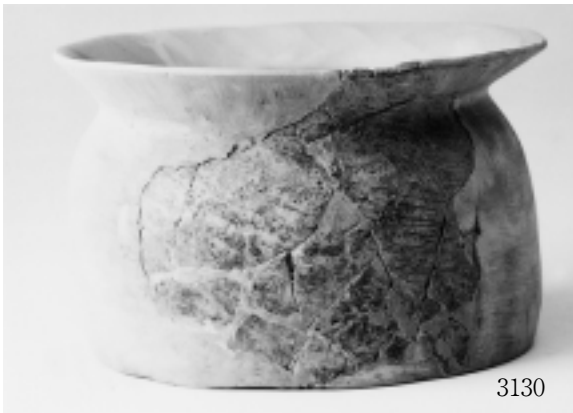
土師質土器(杯), 青白磁(蓋), 磁器(碗·水滴), 陶器(碗), 石製品(石鍋)



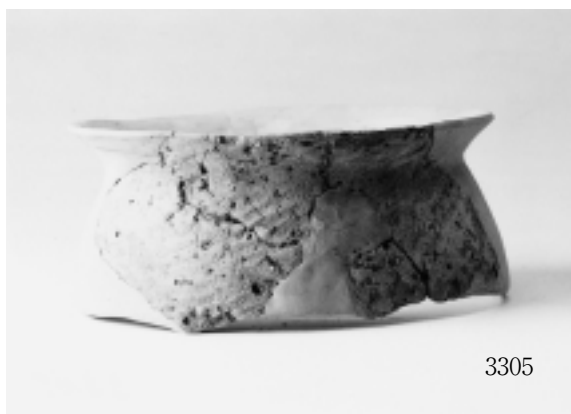
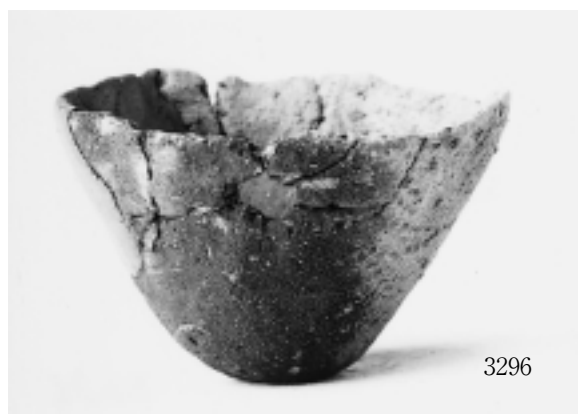
磁器(蓋・碗), 陶器(碗・台付灯明皿・片口・湯たんぽ)



弥生土器(壺), 磁器(蓋・碗・小碗・鉢), 陶器(碗), 土製品(土錘)



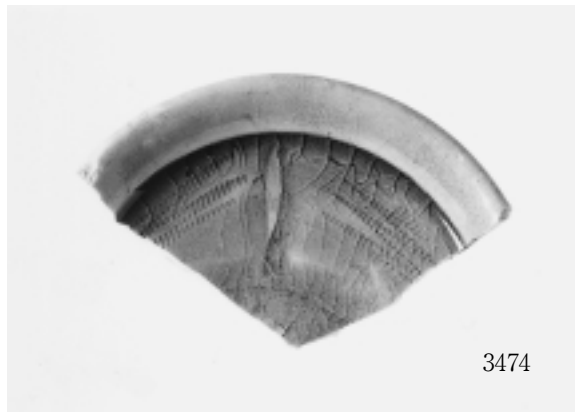
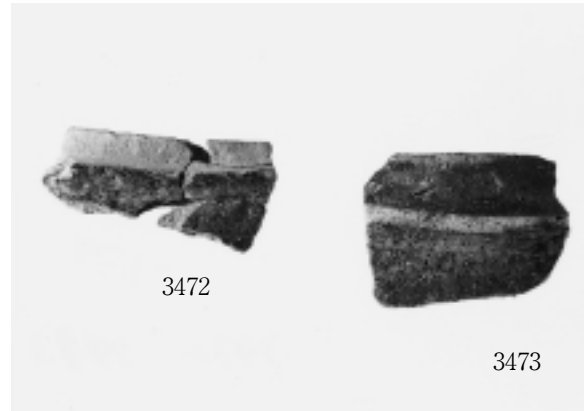
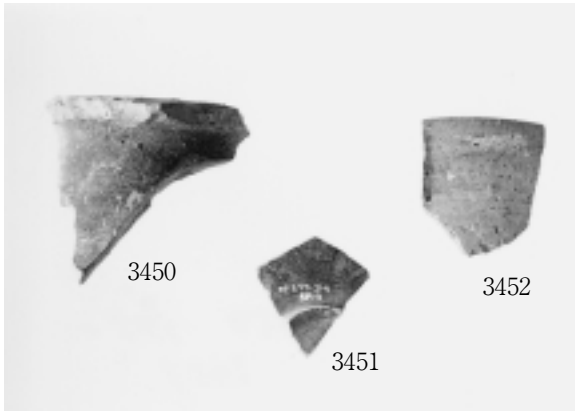
弥生土器(壺・甕・鉢・手づくね土器)



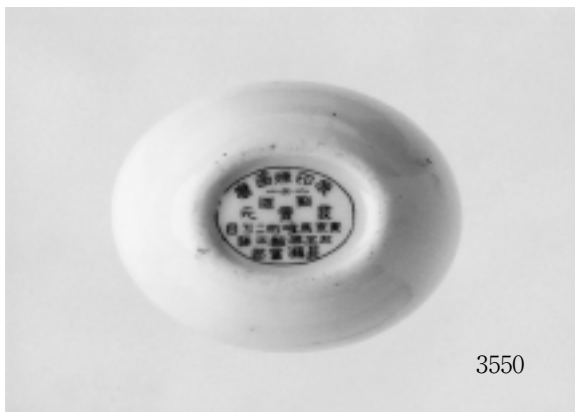
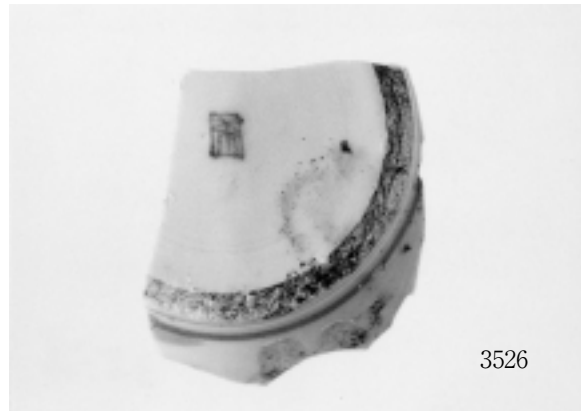
弥生土器(壺・甕・鉢・ミニチュア土器)



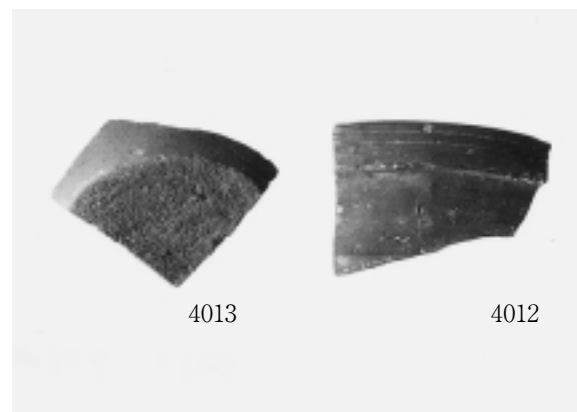
弥生土器(甕・鉢)



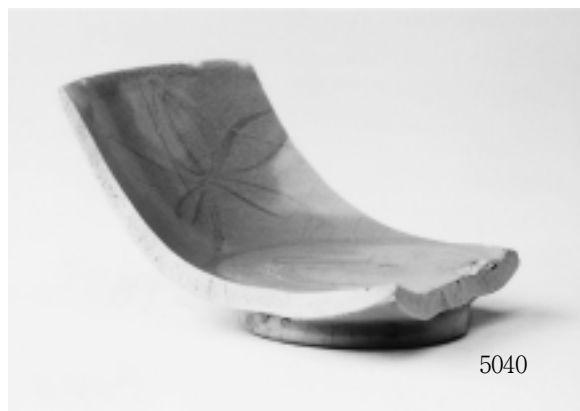
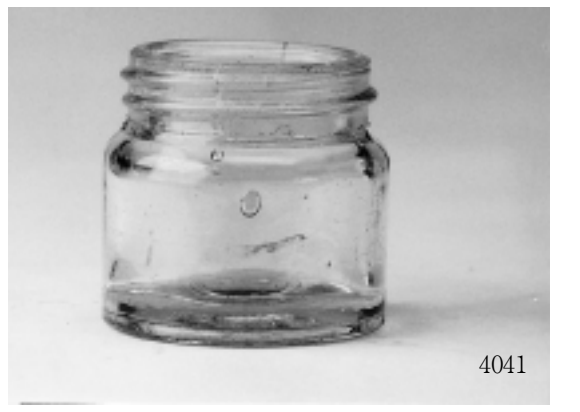
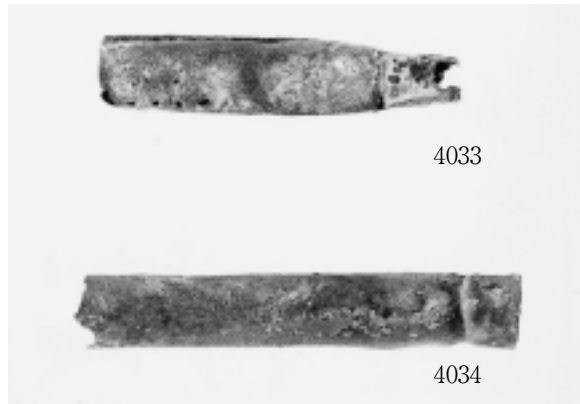
須恵器(高杯), 瓦器(椀), 東播系須恵器(椀), 土師質土器(羽釜), 瓦質土器(羽釜), 青磁(皿), 磁器(碗・鉢)



磁器(碗・小碗・鉢・菌磨容器), 陶器(鉢・涼炉)



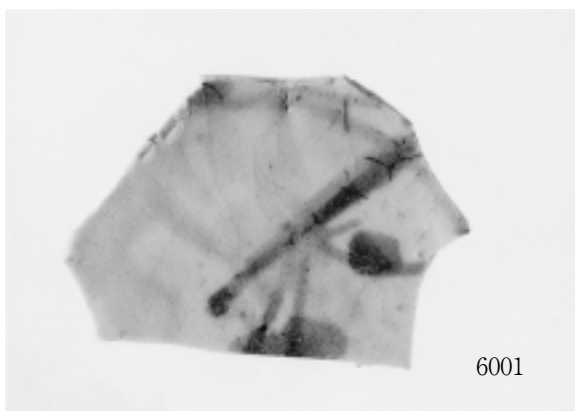
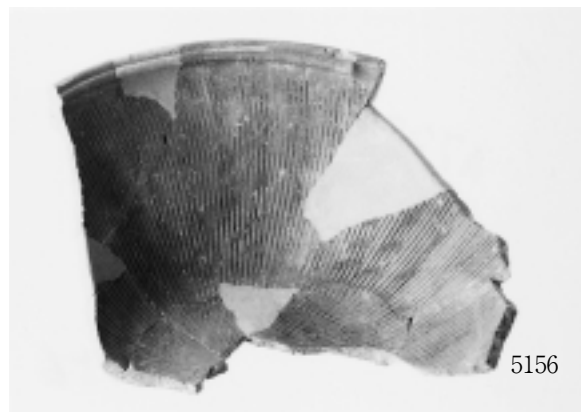
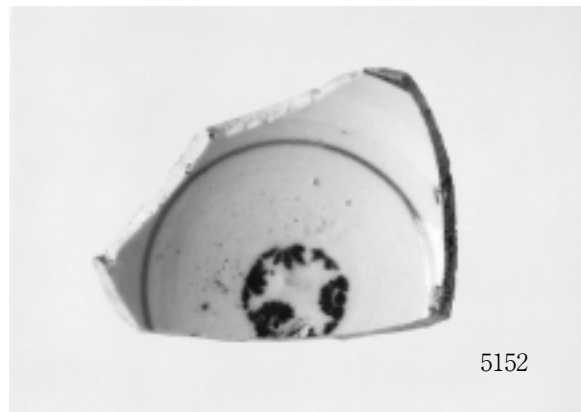
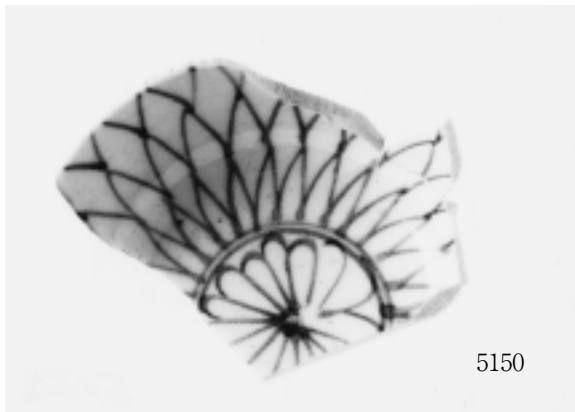
磁器(碗), 陶器(碗・播鉢・火入れ), 石製品(砥石)



弥生土器(鉢), 青磁(碗), 石製品(火輪), 金属製品(煙管), ガラス製品(瓶)



弥生土器(壺・甕・鉢・ミニチュア土器)



弥生土器(壺・鉢), 備前焼(播鉢), 磁器(碗・皿), ガラス製品(瓶)



弥生土器(鉢), 土師器(杯), 土師質土器(杯), 磁器(皿・酒杯), 陶器(蓋)



弥生土器(鉢・ミニチュア土器), 土師質土器(杯), 陶器(皿), 金属製品(煙管)



弥生土器(壺・鉢), 土師器(皿), 土師質土器(小皿)

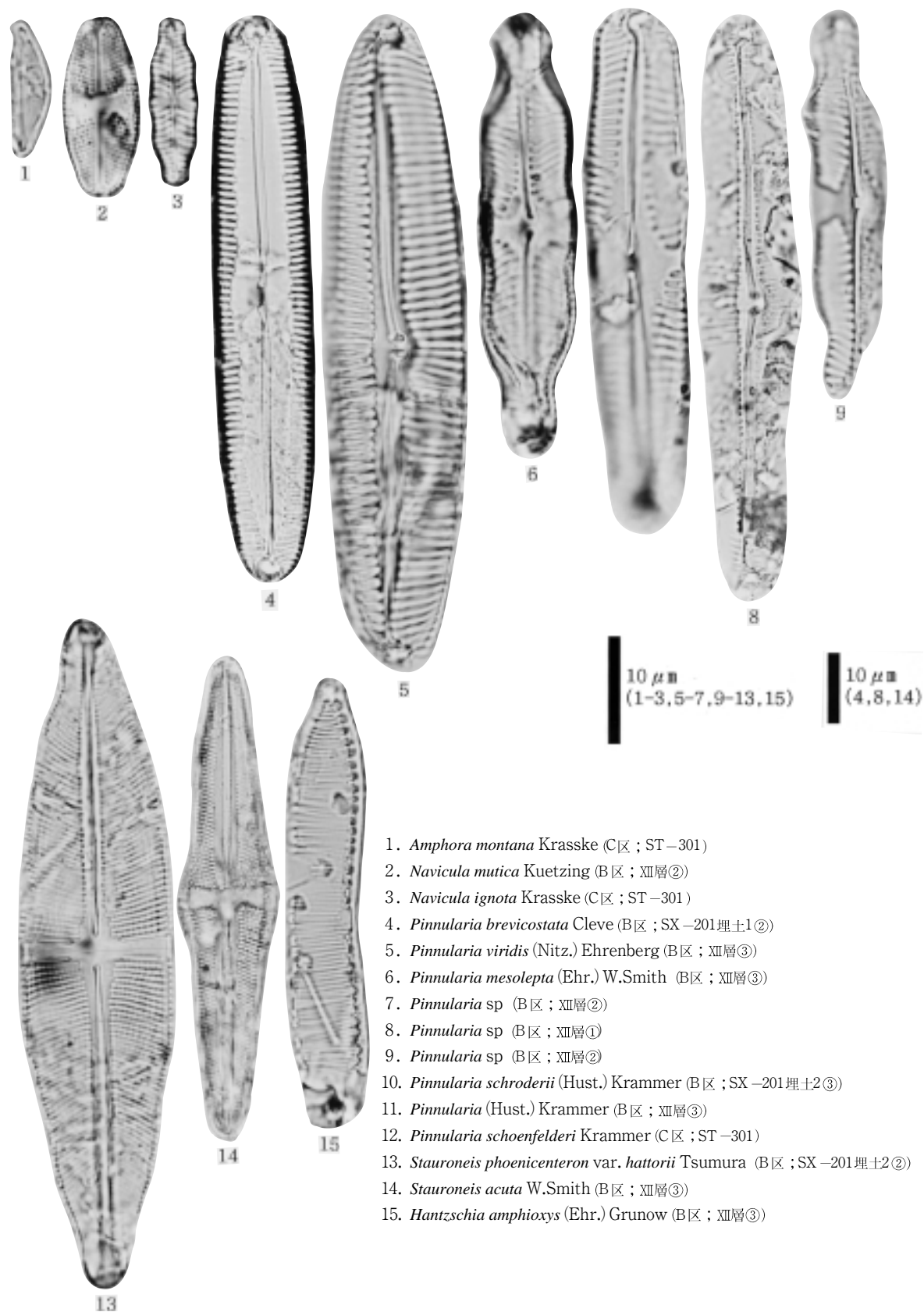


磁器(蓋・隅切角皿・輪花鉢・鉢・段重・酒杯), 陶器(蓋)

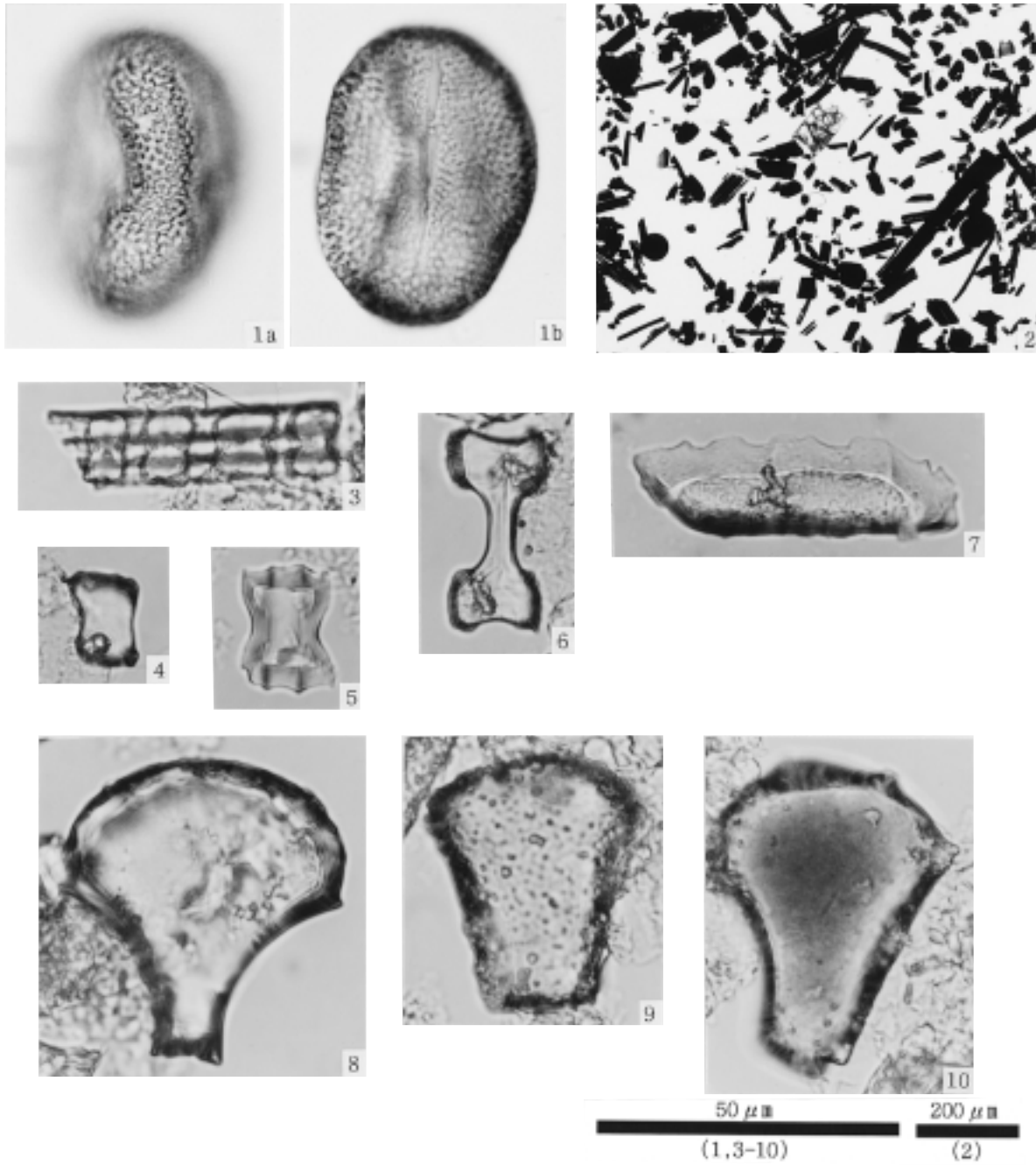


弥生土器(鉢), 須恵器(壺・杯), 土師質土器(杯・小皿), 磁器(皿・猪口), 鉄製品(短刀)

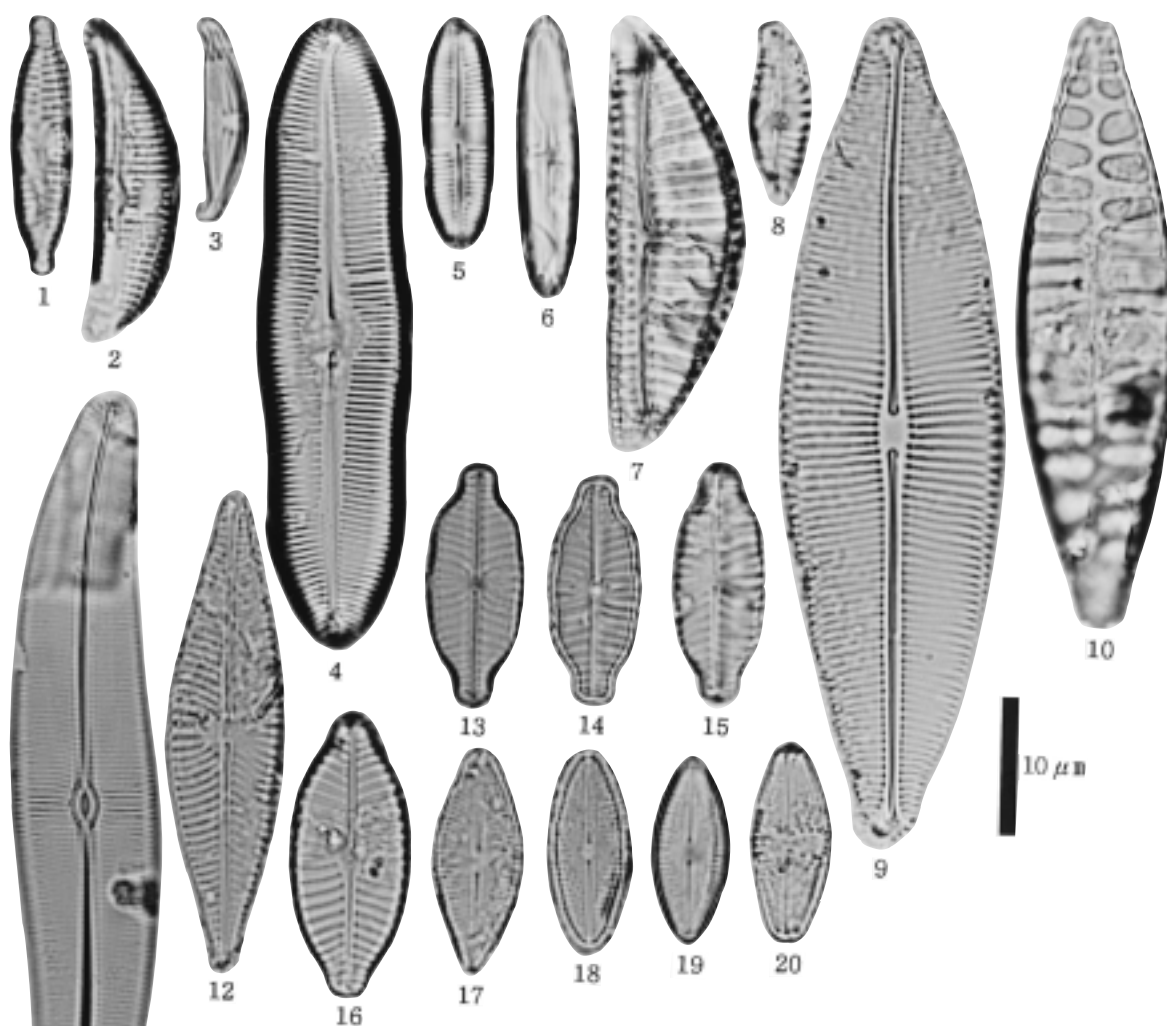
自然科学分析



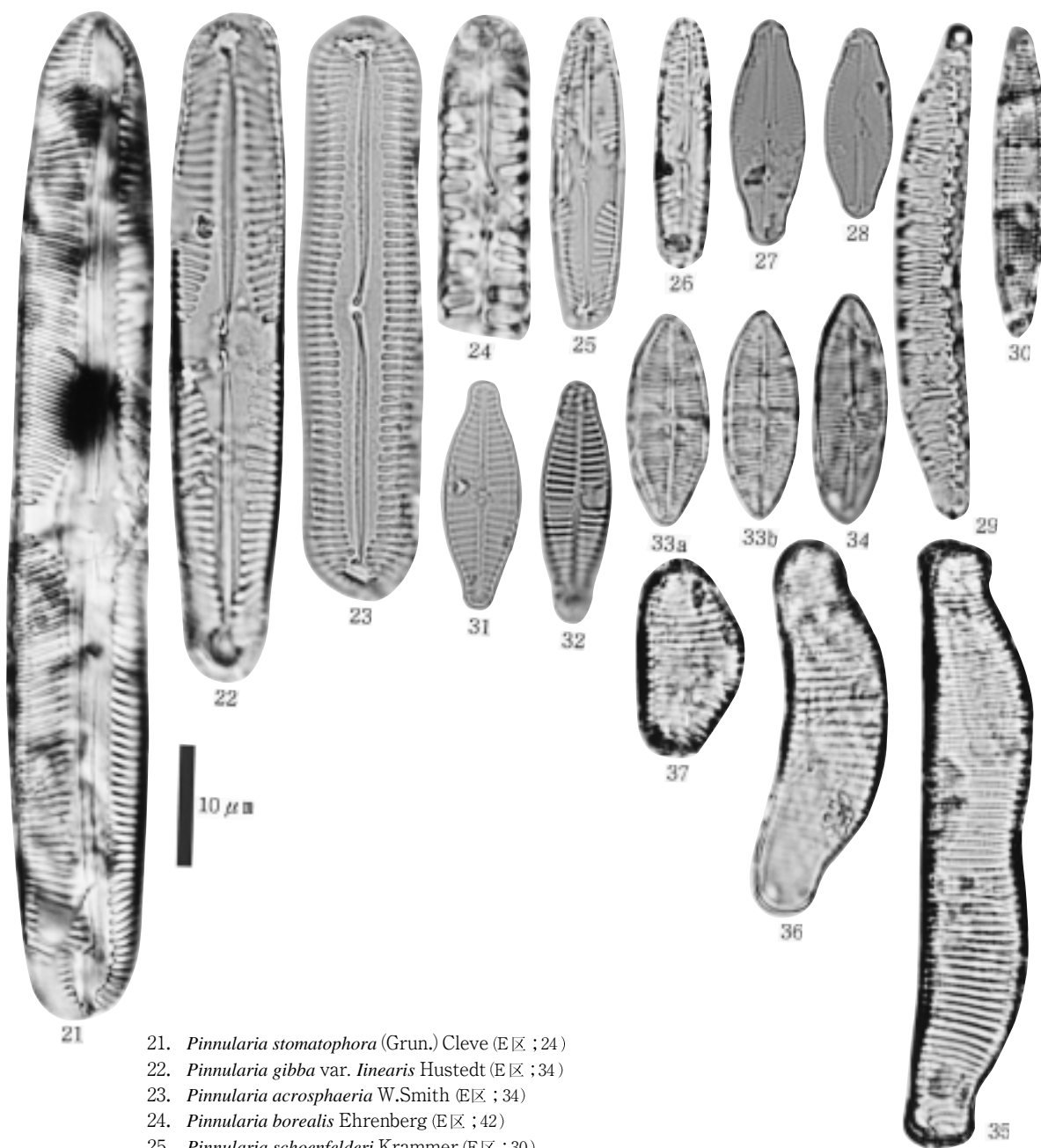
1. *Amphora montana* Krasske (C区; ST-301)
2. *Navicula mutica* Kuetzing (B区; Ⅻ層②)
3. *Navicula ignota* Krasske (C区; ST-301)
4. *Pinnularia brevicostata* Cleve (B区; SX-201埋土1②)
5. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (B区; Ⅻ層③)
6. *Pinnularia mesolepta* (Ehr.) W.Smith (B区; Ⅻ層③)
7. *Pinnularia* sp (B区; Ⅻ層②)
8. *Pinnularia* sp (B区; Ⅻ層①)
9. *Pinnularia* sp (B区; Ⅻ層②)
10. *Pinnularia schroderii* (Hust.) Krammer (B区; SX-201埋土2③)
11. *Pinnularia* (Hust.) Krammer (B区; Ⅻ層③)
12. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (C区; ST-301)
13. *Stauroneis phoenicenteron* var. *hattorii* Tsumura (B区; SX-201埋土2②)
14. *Stauroneis acuta* W.Smith (B区; Ⅻ層③)
15. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (B区; Ⅻ層③)



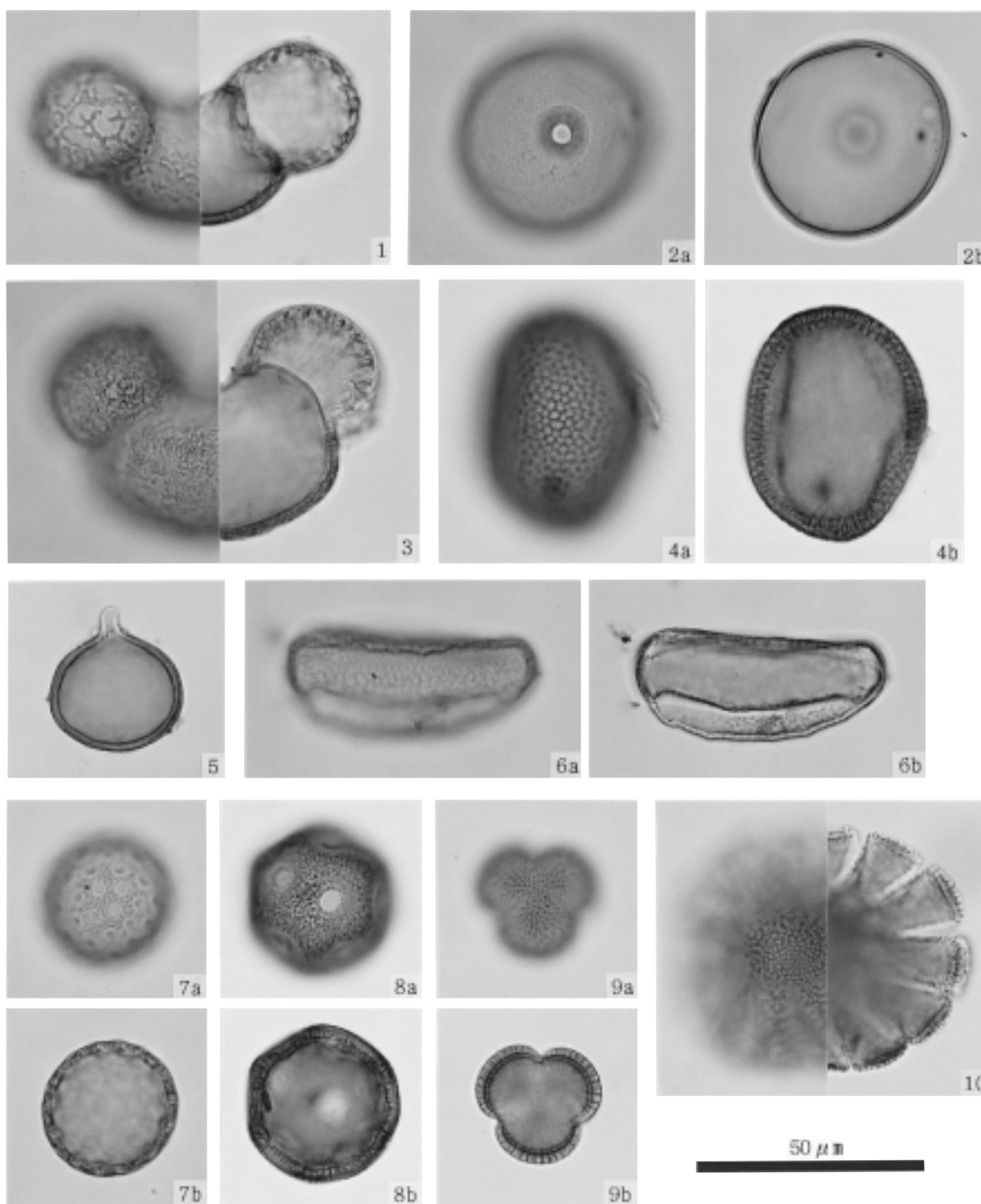
- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1. ソバ属(B区; SX-201埋土1) | 6. ススキ属短細胞珪酸体(B区; SX-201埋土1②) |
| 2. 状況写真(B区; XII層) | 7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(B区; SX-201埋土1③) |
| 3. イネ属短細胞列(B区; XII層②) | 8. イネ属機動細胞珪酸体(B区; XII層②) |
| 4. タケ亜科短細胞珪酸体(B区; XIV層) | 9. タケ亜科機動細胞珪酸体(B区; XII層②) |
| 5. コブナグサ属短細胞珪酸体(B区; SX-201埋土1②) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(B区; XII層②) |



1. *Frigilaria vaucheriae* (Kuetz.) Petersen (E区 ; 26)
2. *Amphora affinis* Kuetzing (E区 ; 26)
3. *Amphora montana* Krasske (E区 ; 18)
4. *Cymbella silesiaca* Bleisch (C区① ; II層)
5. *Caloneis bacillum* (Grun.) Cleve (E区 ; 48)
6. *Neidium alpium* Hustedt (E区 ; 18)
7. *Cymbella silesiaca* Bleisch (E区 ; 24)
8. *Cymbella sinuata* Gregory (E区 ; 37)
9. *Craticula cuspidata* (Kuetz.) D.G.Mann (E区 ; 42)
10. *Craticula* sp. (E区 ; 26)
11. *Gyrosigma scalproides* (Rabh.) Cleve (C区 ; 南壁セクション①II層)
12. *Navicula trivialis* Lange-Bertalot (C区 ; 南壁セクション①II層)
13. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (C区 ; 南壁セクション①II層)
14. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (C区 ; 南壁セクション①II層)
15. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (E区 ; 21)
16. *Navicula elginensis* var. *cuneata* H.Kobayasi (C区 ; 南壁セクション①II層)
17. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (C区 ; 南壁セクション①II層)
18. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (C区 ; 南壁セクション①II層)
19. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (E区 ; 23)
20. *Navicula mutica* Kuetzing (E区 ; 21)



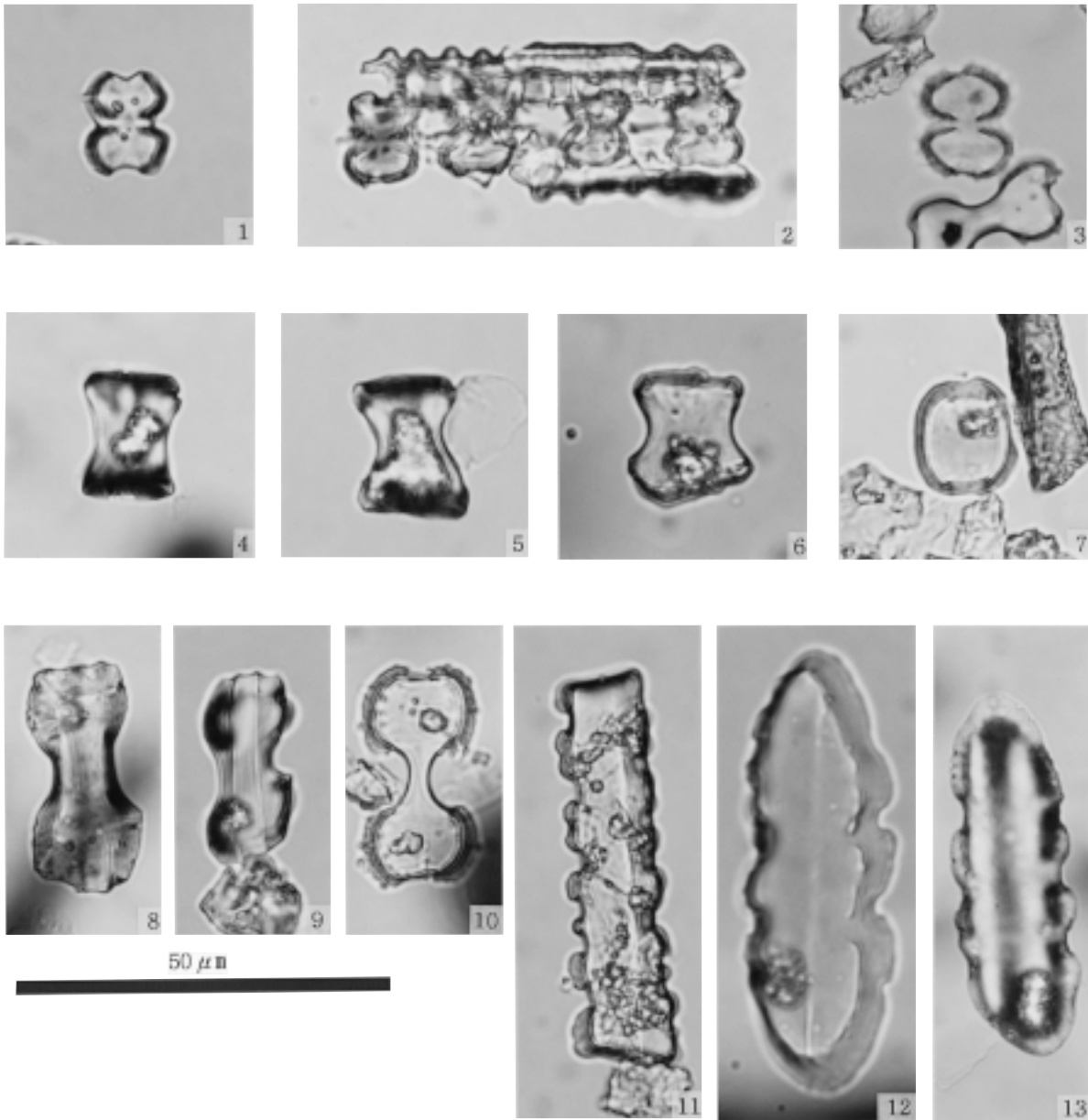
21. *Pinnularia stomatophora* (Grun.) Cleve (E区 ; 24)
22. *Pinnularia gibba* var. *linearis* Hustedt (E区 ; 34)
23. *Pinnularia acrosphaeria* W.Smith (E区 ; 34)
24. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (E区 ; 42)
25. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (E区 ; 30)
26. *Pinnularia schoenfelderi* Krammer (E区 ; 48)
27. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (C区 ; 南壁セクション①II層)
28. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (C区 ; 南壁セクション①II層)
29. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (E区 ; 20)
30. *Nitzschia amphibia* Grunow (C区 ; 南壁セクション①II層)
31. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (C区 ; 南壁セクション①II層)
32. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (C区 ; 南壁セクション①II層)
33. *Achnanthes hungarica* Grunow (E区 ; 18)
34. *Achnanthes hungarica* Grunow (C区 ; 南壁セクション①II層)
35. *Eunotia praeruta* var. *bidens* Grunow (E区 ; 31)
36. *Eunotia praeruta* Ehrenberg (E区 ; 25)
37. *Eunotia praeruta* var. *inflata* Grunow (E区 ; 31)



1. マキ属(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
2. イネ科(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
3. マツ属(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
4. ソバ属(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
5. スギ属(C区;南壁セクション①Ⅱ層)

6. ミズアオイ属(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
7. アカザ科(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
8. ナデシコ科(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
9. アブラナ科(C区;南壁セクション①Ⅱ層)
10. ゴマ属(C区;南壁セクション①Ⅱ層)

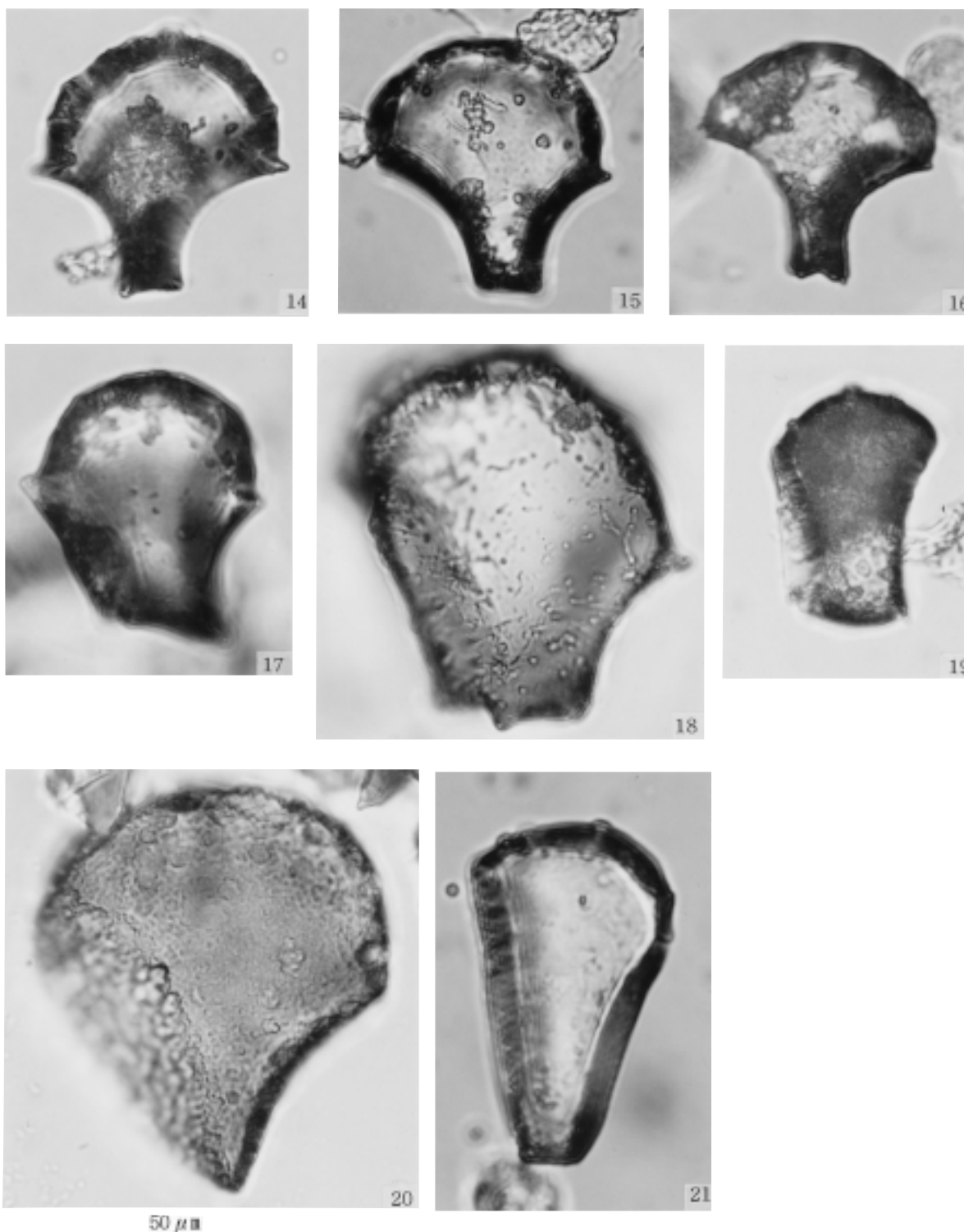
花粉化石



1. イネ属短細胞珪酸体(A区;②IX層)
2. イネ属短細胞列(B区;①XII層)
3. イネ属短細胞珪酸体(E区;29)
4. タケ亜科短細胞珪酸体(E区;47)
5. タケ亜科短細胞珪酸体(A区;③XIV層)
6. タケ亜科短細胞珪酸体(A区;①X層)
7. ヨシ属短細胞珪酸体(E区;8)

8. コブナグサ属短細胞珪酸体(A区;②XI層)
9. コブナグサ属短細胞珪酸体(A区;①X層)
10. ススキ属短細胞珪酸体(A区;①X層)
11. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(A区;①X層)
12. オオムギ族短細胞珪酸体(B区;①XII層)
13. オオムギ族短細胞珪酸体(E区;47)

植物珪酸体1



- 14. イネ属機動細胞珪酸体(B区;①XII層)
- 15. イネ属機動細胞珪酸体(A区;①X層)
- 16. イネ属機動細胞珪酸体(E区;17)
- 17. イネ属機動細胞珪酸体(E区;29)

- 18. タケ亜科機動細胞珪酸体(E区;47)
- 19. タケ亜科機動細胞珪酸体(A区;③XIV層)
- 20. ヨシ属機動細胞珪酸体(E区;23)
- 21. ウシクサ族機動細胞珪酸体(A区;②XI層)

植物珪酸体2

報告書抄録

ふりがな	てんじんいせきに							
書名	天神遺跡Ⅱ							
副書名	土佐市バイパス発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第60集							
編著者名	廣田佳久・伊藤 強・田中涼子							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2001年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		コード	コード	° ' "	° ' "			
てんじんいせき 天神遺跡	こうちけん 高知県 とさし 土佐市 なかおかちょう 高岡町	39205	050082	33°29'49"	133°25'33"	19970903) 19971127 19980511) 19981113	12,233 ㎡	土佐市バイパス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
天神遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴式住居跡 1軒 竪穴状遺構 3基 土坑 11基 溝跡 4条 祭祀関連遺構 5基	弥生土器 ミニチュア土器 手づくね土器 石製品	土佐市で初めての竪穴式住居跡を確認した他に弥生時代後期後半の祭祀関連遺構(土器集中を含む)を検出し、多数の遺物が出土する。 中世では掘立柱建物跡、井戸跡、畠跡などを伴う屋敷跡を確認する。また、県内では数少ない完形の龍泉窯系青磁碗が出土する。 古代、中世、近世の3時期の畝状遺構を検出する。 近世後半から近代の廃棄土坑を検出し、幕末、明治・大正時代の陶磁器が多数出土する。			
		古代	溝跡 5条 畝状遺構 3群	土師器, 須恵器				
	祭祀跡 畠跡	中世	掘立柱建物跡 12棟 塀・柵列 14列 土坑 15基 溝跡 39条 井戸跡 1基 畝状遺構 2群	瓦器 東播系須恵器 土師質土器 瓦質土器 備前焼 白磁, 青磁				
		近世以降	塀・柵列 2列 土坑 20基 溝跡 16条 畝状遺構 4群	陶器 磁器 ガラス製品				

本書作成データ

本書の作成に当たっては、以下のシステムとフォントを使用した。

まず、システムは基礎作業にPowerBookG3/400とiBookSE、編集作業にG3/466のアクセラレータカードを装着したPowerMacintosh9515/132及びPowerBookG3/400を使用し、原稿執筆とデータ処理にはJedit (PPC) 1.08 bとExcel98を用いた。編集はすべてQuarkXpress3.31Jを使用した。なお、表組はExcel98で作成したものをタブ変換しIllustrator8.0にFlexTableを介して取り込み編集しEPSに保存した。また、表によってはQuarkXpress3.31JのエクステンションTable Works Plus2.3Jに取り込み編集したものもある。

第V章自然科学分析に掲載している表は納品されたExcelのデータをすべてIllustrator8.0で編集し直し、同じく挿図も再度Illustrator8.0で再トレースし、EPSデータとした。

フォントはすべてCIDフォントで、細明朝、中ゴシック、太ミン、太ゴ、見出ミン、RmAlpha、外字はエヌフォア外字を使用した。なお、字詰めはDr.カーニングを併用した。

なお、入稿までの編集・校正作業はCOLOR LASER SHOT LBP-2260PSで印刷したもので行った。

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第60集

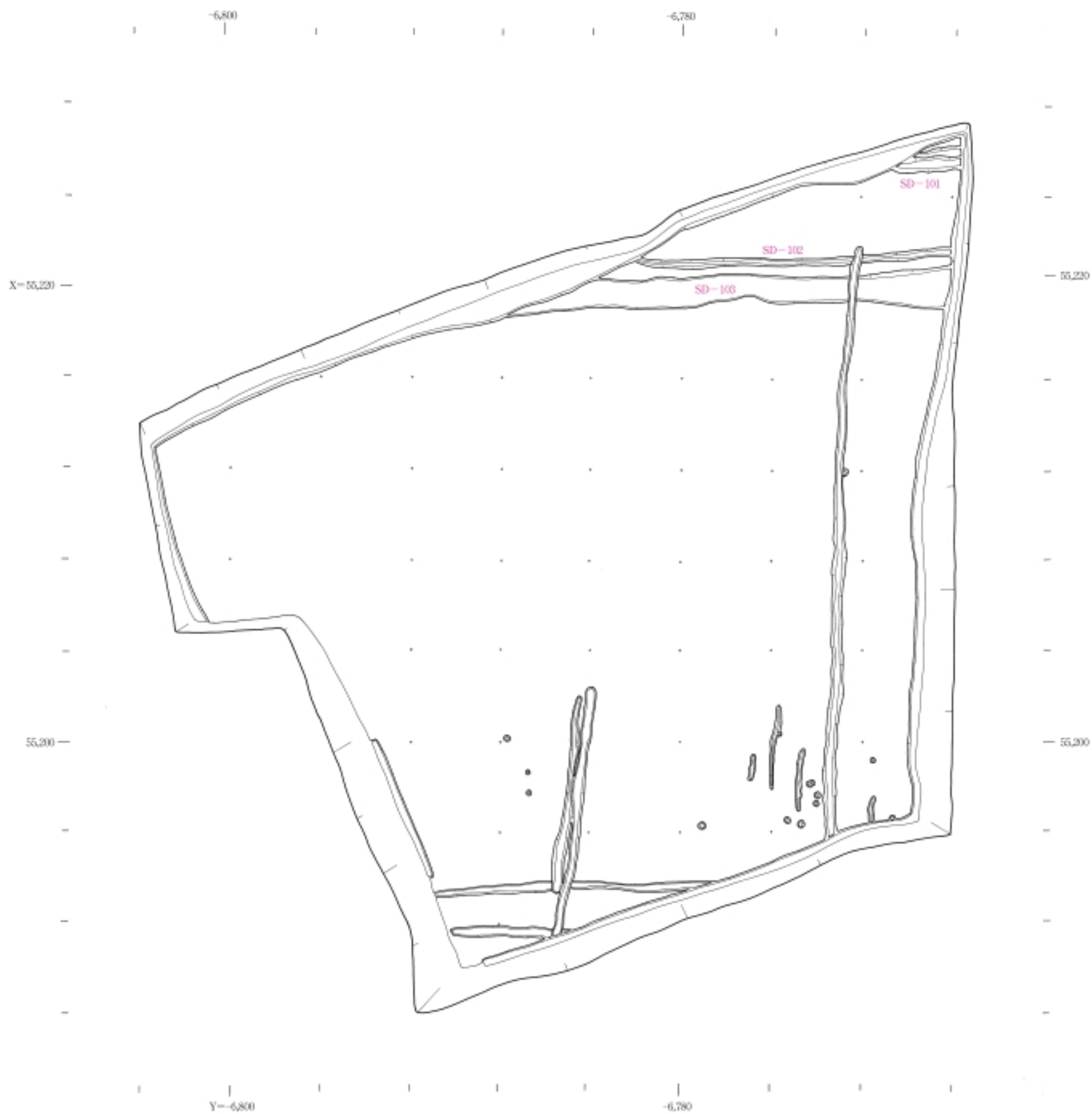
天神遺跡Ⅱ

土佐市バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

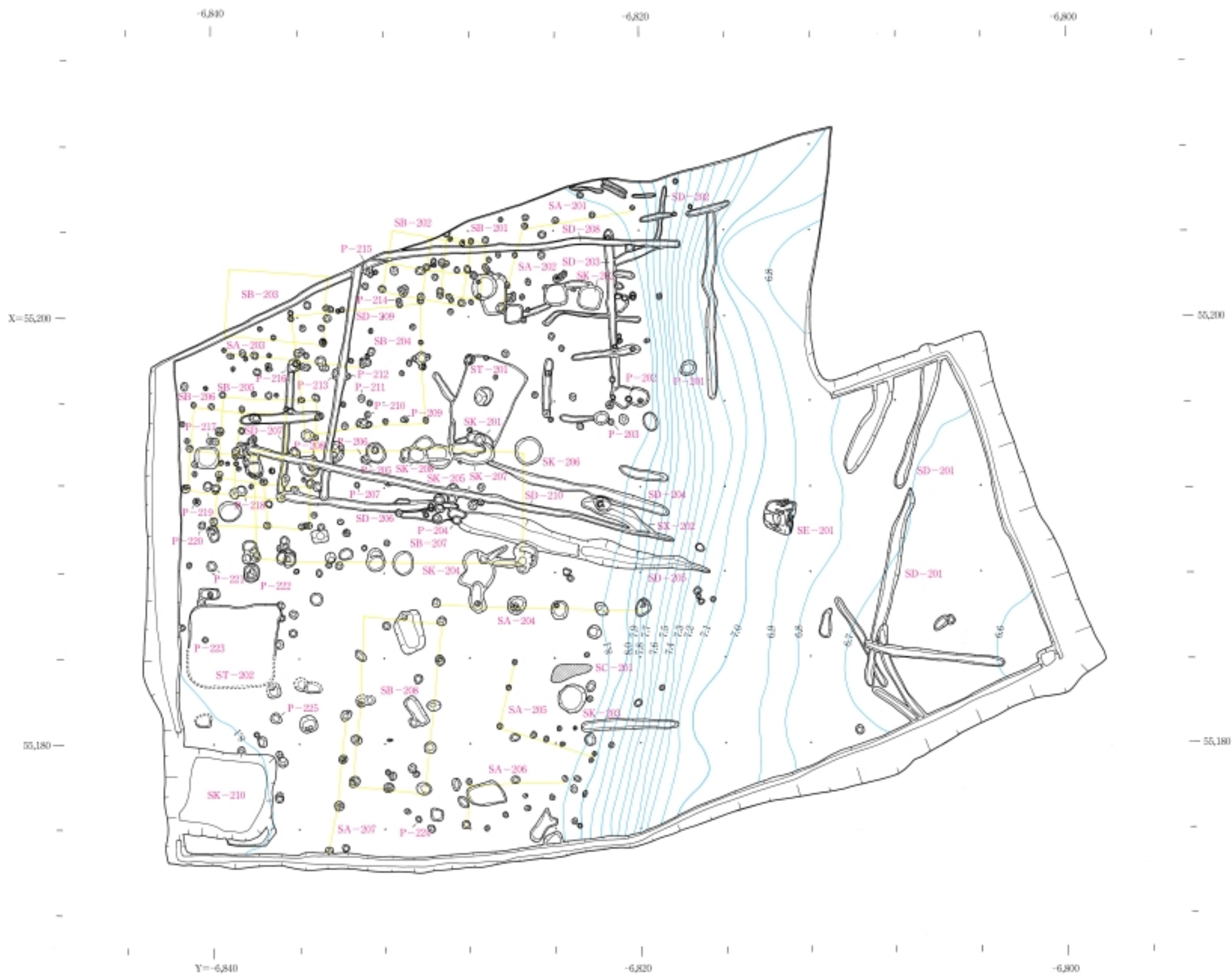
2001年3月26日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
Tel. 088-864-0671

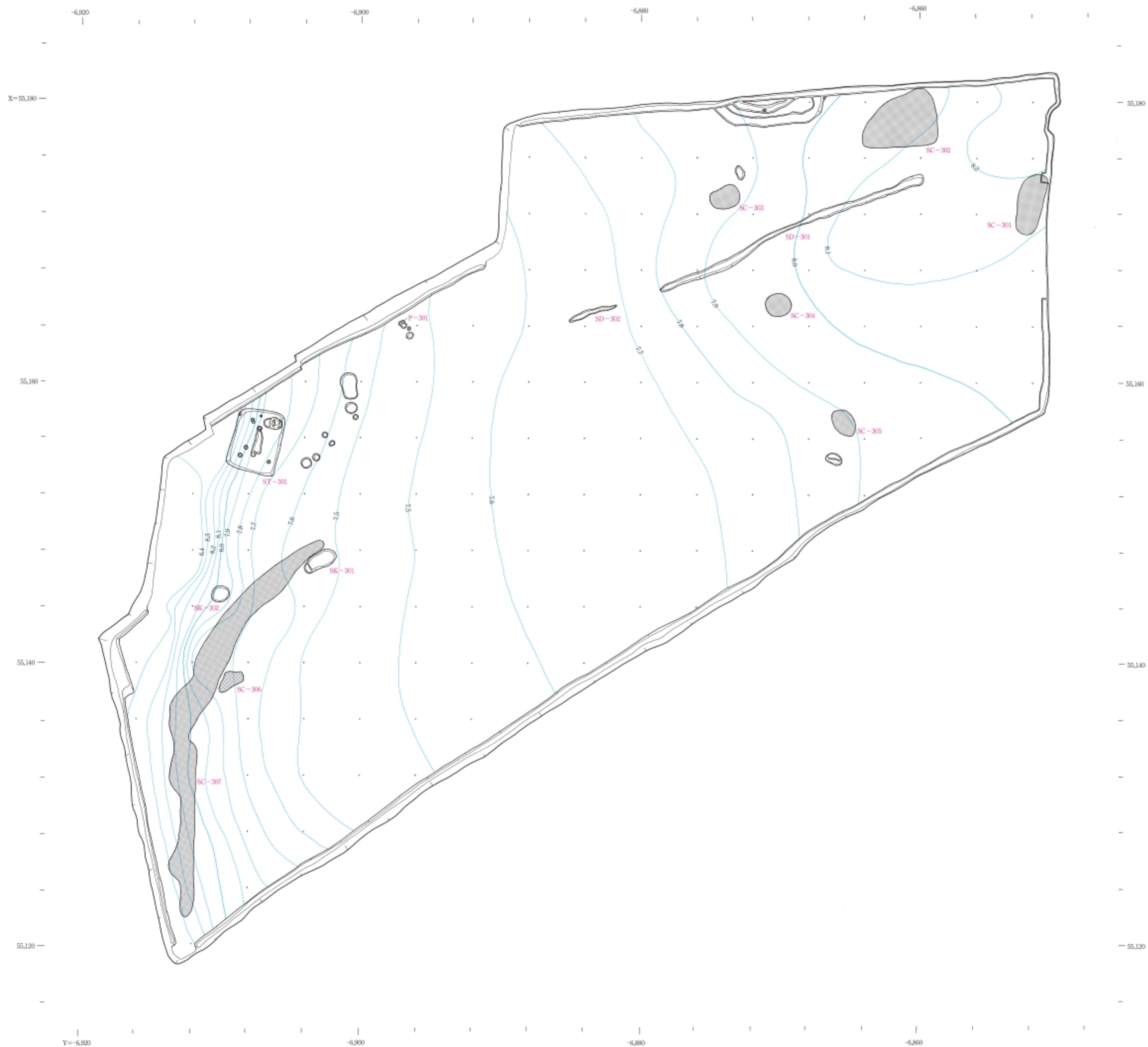
印刷 株式会社 飛鳥



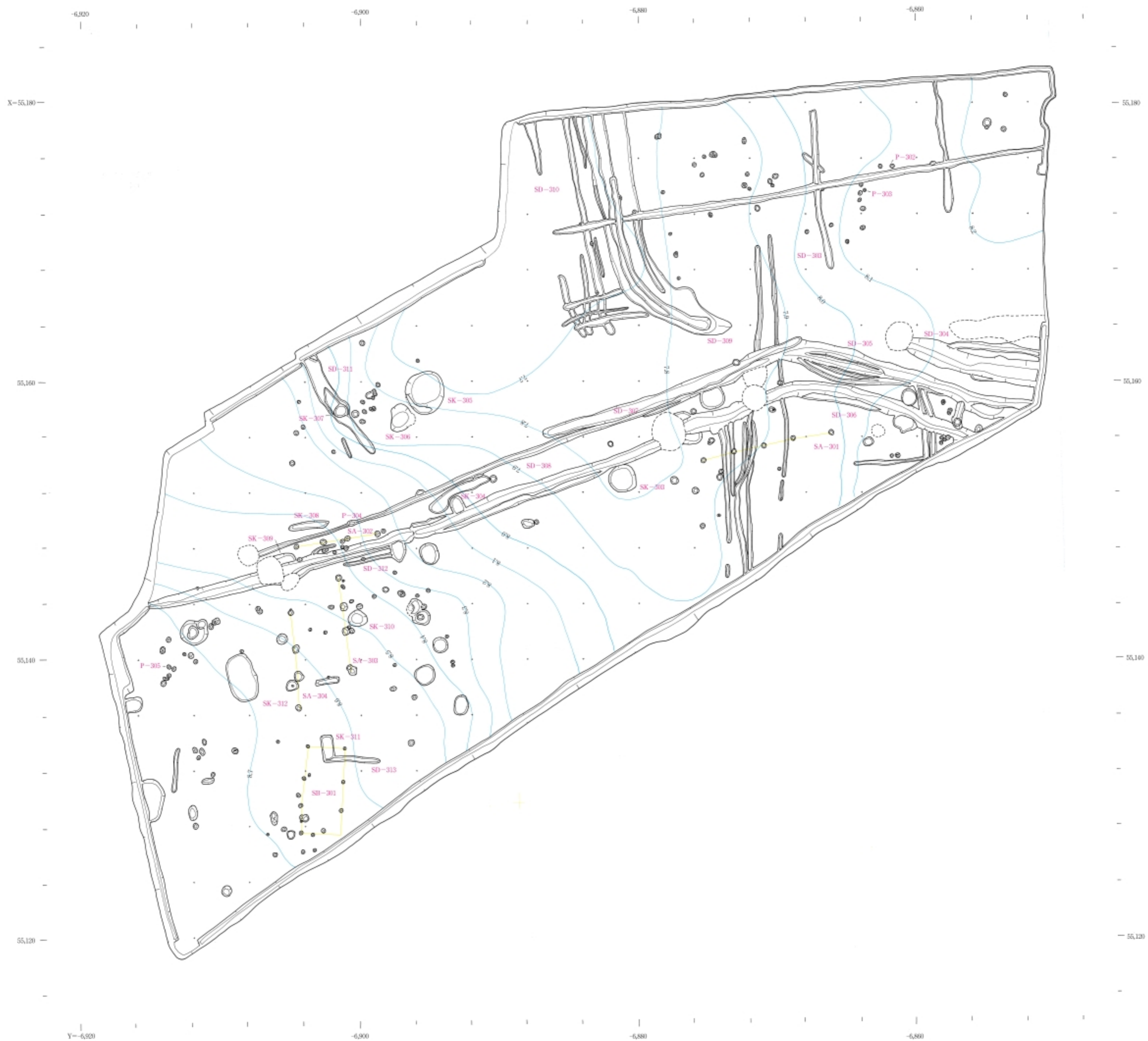
付图1 A区遗構平面图 (S=1/200)



付图2 B区遗构平面图 (S=1/200)



付圖3 C区新石器時代遺構平面圖 (S=1/200)



附圖4 C区中世遺構平面圖 (S-1/200)



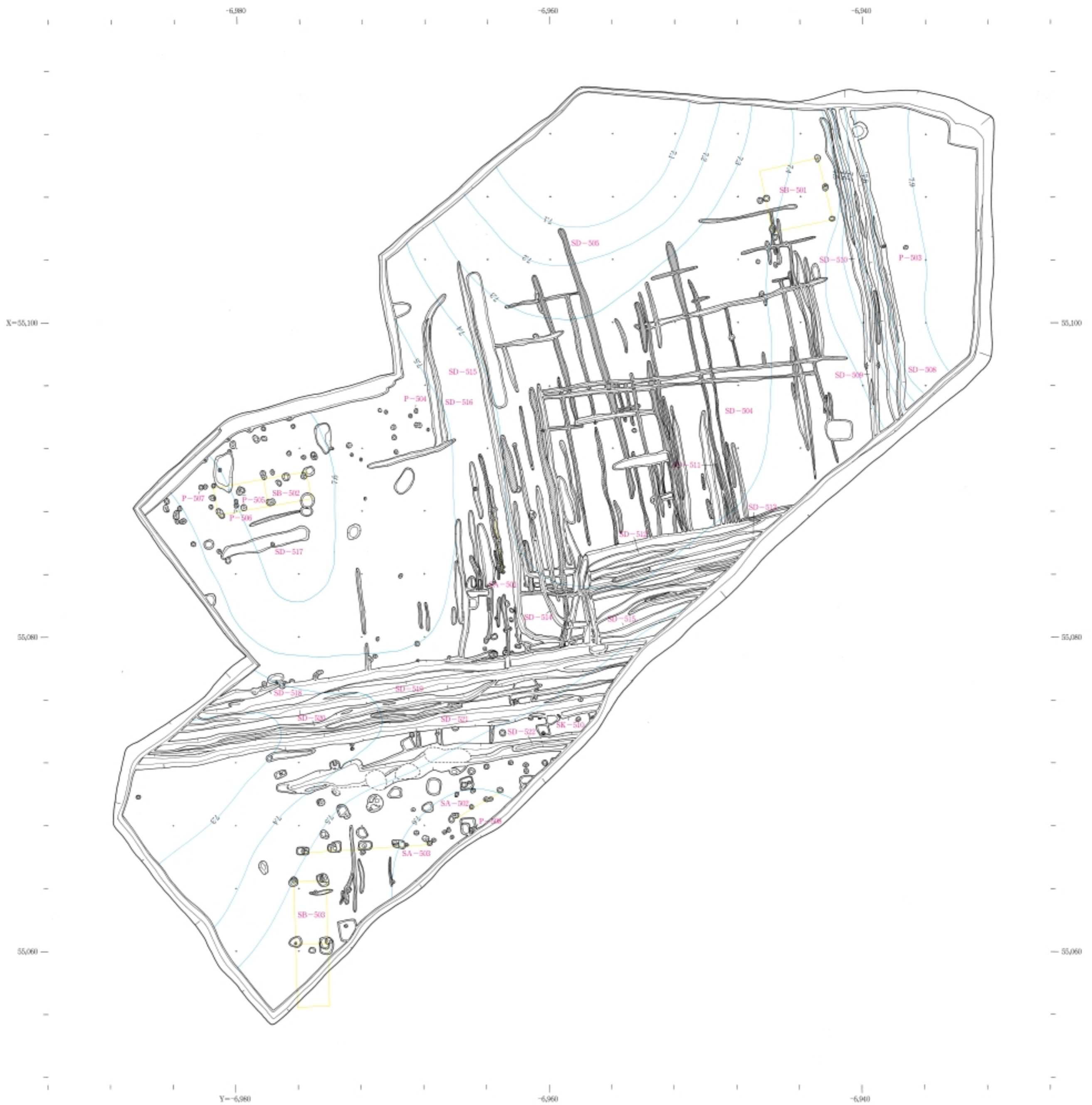
付图5 C区近世以降遺構平面図 (S=1/200)



付図6 E区弥生時代2遺構平面図 (S-1/200)



附圖7 E區古代遺構平面圖 (S=1/200)



付圖8 3区中世遺構平面圖 (S=1/200)



付图9 E区近代以降遺構平面図 (S=1/200)